

MULAストーリー

LCRCL (エルマル)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この話は、YouTubeの「Mulaのものおきば」さんのストーリーの二次創作です。

犯罪ワールド脱出の数ヶ月後からのストーリーです。

3部以降はほぼオリジナルです。

あらすじ

この世界は、不思議である。

人が生き返ったり、時が止まったり、巻き戻ったり。

そんな世界で極めて不思議なことが起きた時、世界は救われるのか、滅ぶのか。

これは、そんな不思議な物語である。

奇妙ではない。不思議なのだ。

2021/06/18 1部 日常は非日常 完

2021/11/23 2部 オーバーパワー 完

2022/03/03 3部 コンプリート・ファイア 完

2022/07/03 4部 転生幻影 完

現在 5部 ブルームミング・ワールド

未定 6部 Mula forever

2022? 完結予定

現在クロスしてる作品(ネタバレ注意)

Mulaのものおきば

↓スーパーマリオ、星のカービィ

UNDERTALE

↓Glitchtale、Undersverseなど

マイクラフト

↓Hypixel Skyblock

DELTARUNE

東方project

↓原作、旧作など

目次

第1部 日常は非日常 最終章 アル
カ、生き返る！

アルカ、生き返る！ | 1

集まる仲間達 | 5

シャインのかけらって買えるんだね

9

りんごりんごりんご！ | 13

思わぬハプニング | 18

集めるコンテスト | 22

アルカ、復活！ | 27

寿司屋の復活祭 | 32

第2部 オーバーパワー 第1章 アル

カの学校生活

編入生、アルカ | 39

カンニング？なにそれおいしいの？

45

不良をボコボコ！ | 50

第2章 脱獄者の逆襲!?

突然の事件 | 54

ジーノの秘密基地 | 59

偵察に行こう① | 63

偵察に行こう② | 68

普通？の朝 | 72

ドンパチ① | 77

ドンパチ② | 82

キャラ壊れてきてない？	87
作戦会議	91
作戦会議②	94
突入準備	97
組織潰し①	101
組織潰し②	106
最後つごつご♪	110
第3章 洗脳メガネ、再び	
洗脳メガネが盗まれた!?	114
早速遭遇	118
事情聴取	121
とる人質をまちがえた	125
3度目のエンカウト	129

透明人間!?	133
偽物!?	137
くっしやああああい！	141
ただいま調査中	145
メガネ工場	149
大☆爆☆発	153
追い詰めた！	157
フルボッコ♪	162
最終回の前の回の次の回	168
第4章 世界がバグった！	
平和の崩壊	172
付近を調査	177
黒い生命体	181

ちよつと技披露	185
敵が増えてきた…	189
実況者、マリオ。	193
アルカの役職	198
久々のカメーン国	202
黒い巨人	207
一方、ノリオたちは…	212
ファイトロボットファイト	216
ルイージのドンパチ①	220
ルイージのドンパチ②	224
ヒミツはバレバレだよーん	228
大軍襲撃!?	232
マリオの天才的?な作戦	236

ウルトラソード!	240
ミニ祝勝会	245
親玉、登場。	249
◇再び	254
最終決戦①	258
最終決戦②	262
最終決戦③	266
最終決戦④	271
最終決戦⑤	276
最終決戦⑥	282
世界一の配管工の最期	287
第5章 アルミの特訓!	
アルミ、特訓を始める。	293

ただ走れと? | 299

飯食いたクシードライバー(仮)

303 | 307

おいおいマジかよ… | 317

スーパールミ | 312

平和な朝 | 317

クッキーサンドイツチを食べた後のア

ルミがスーパードライバーになると、こうなる。

321 | 326

ある意味衝撃の事実 | 330

お盆といえば…? | 335

お盆パーティー | 377

アルカとアルミはそろって可愛い。

340 | マリオは案外教えるのが上手い

344 | ノリオの家族 | 348

また来年 | 352

そしてアルミは強くなり、プロローグ

は終わる | 356

キヤラクター紹介 | 360

第6章 ただいま命がけて逃走中

突然すぎるニュース | 365

逃走中、スタート | 370

幽霊の後輩 | 373

あれ?弱すぎね? | 377

幽霊の特権	383	大救出！（100話突破！）	440
速すぎる展開…まさか!?	388	…ポチツとな♪	445
ステージ1…だと!?	393	赤いブロックと…??	449
二番煎じってなーに？	397	2度目の正直	453
ピーチ城崩壊!?	400	大阪弁で話すイカ	457
遊びま死よう♪	404	巨大イカ対2代目バズーカ使い	461
残酷な死闘	409	共通点	465
アルミの本性	413	ザ・マウンテン	469
本当の姉妹にしか見えない	417	未来から来た誰かさん	473
本格調査開始!	421	鴨フラージュ	477
何故ルメが居ないのかって？	425	四角だらけの国	482
ただ今潜入中	429	例のアイツ	486
アマルガム…グレイ	434		

アオイとケーティ	幽霊退治!	カオスな戦い	首謀者の手がかり	v s 大博士	大博士	え、食べたことないの!?	きさらぎ駅の秘密	魔術師スカーフ	不思議な少女	意外と弱い?	ピエロの襲撃	一方、その頃…
541	537	533	529	525	521	516	512	508	502	498	494	490

遭遇	風幽の訪問	第7章 パンドラのはこ。	ゲームクリア	ネクロン戦②	ネクロン戦①	やられる…とでも!?	セイダンの本気	き…巨人!?	蹴散らすぜえええ!	強敵の集団	全員転送!?	そのころ、地下では…
595	591		586	581	577	573	569	564	559	555	550	546

ポリスメン！	644	最終章 5747081…?	624	ぼい	619	615	二度目の遭遇	610	誰なのか？	605	??	600
Vスキングテレサ	639	凄腕特別捜査官	629	正体		“旧式”？“新式”？なにそれ？			??		?????	
過去に似た空間	634					当たれといつて当たりに行くヤツはほ						

最終血戦②	700	カオスなバトルV	2	鼓膜崩壊	671	3度目のイカ	662	昔の敵は今のモブ	658	ぶっ潰す！（文字通り）	649
最終血戦①	696	ネクロン再び	680	カメラン？カーメン？	675	ラジコン野郎	667	T・S・D・G	654		
攻略完了！	690	カメーン？カーメン？	675								

最終血戦③

704

最終血戦④

708

最終血戦⑤

713

そして、世界は再び救われる。

718

718

第3部 コンプリート・ファイア 第1

章 地下の王国

イビト村の少年

724

伝説

728

遺跡

732

おい ニンゲンども

737

737

ニヤツハツハツ!

742

スノーフル①

747

スノーフル②

752

スノーフル③

757

スノーフル④

761

スノーフル⑤

765

スノーフル⑥

769

スノーフル⑦

773

スノーフル⑧

777

スノーフル⑨

781

スノーフル⑩

785

ウォーターフェル①

789

ウォーターフェル②

793

ウォーターフェル③

797

ウオーターフェル④	802
ホットランド①	806
ホットランド②	810
ホットランド③	815
ホットランド④	820
ホットランド⑤	824
ホットランド⑥	829
ホットランド⑦	833
最後の回廊と衝撃の事実	839
v s ……キャラ!?	843
ケツイ。	848
その後。	852
第2章 パンドラの箱!	

え、お母さん!?	856
風幽、驚く	860
アルカの狂気	864
v s ダークアルカ	869
アオイに子供!?	873
第3章 ラグトレイン	
故郷へ帰ろう	877
仮面の少女	882
そして、帰る。(200話突破!)	887
第4章 にゃんこ世界大戦	
宣戦布告	891
各国の代表	895

開幕	899
Welcome hell	903
オリジナル・タイム・トリオ	907
建物 が現れた!	911
勝利を手に入れる!	917
月斗の正体	922
前世代組の活躍	927
巨大兵器①	931
ザクロのターン!	936
戦時の飯、クツキー	941
ソジック組の活躍	946
久々の登場	951
巨大兵器②	956

掘る掘る	960
目覚める裁判官	964
神力の使い方	969
本拠地、突入!	973
本拠地潰し①	977
本拠地潰し②	982
本拠地潰し③	986
本拠地潰し④	991
最終兵器、ウ"イ"エ"	997
以外な弱点	1002
第2形態	1007
こちらも第2形態	1012
パンドラの裁判	1017

第5章 アルミ、暗殺!?

誰よ、こんな夜遅くに…

マイペースなアルミ

十六夜家への訪問

犯人の正体

白夜の日記

白夜を探せ!

事件解決

第6章 真のPルート

相談

襲撃、開始

v s アオイ

v s アルミ

1071106510601055 1050104510401036103110271021

狂気と本体の分裂

赤い護衛

覚醒アンダイン①

覚醒アンダイン②

狂気は倒したが…

v s 怪物クーム①

v s 怪物クーム②

キョウフの終わり

第7章 日常。

そうだ、旅に出よう

風人と狼男と狂気コンビと…発電所長

氷と付喪神と魔術師と角々

11231118 1113 11091104109910941090108510811076

	と入手	1128
	モンスター軍団とソジック最強トリオ	
	地獄の女神さんと時の一家	1133
1138	魔術師軍団とポポポと画家と…?	
	合体スーパー化	1144
	最終章 フィナーレ。	
1149	アルミ「で、いきなり始まるか?」	
	v s 過去一パワーが高いアルミ	
1154	集まった仲間達	1158
	平行四辺形と五角形	1163

	風人の狂気	1167
	じーさんかっけー	1172
	死の四角	1177
	ファイナルバトル!	1182
	コンプリート・ファイア エピローグ	1192
	第4部 転生幻影 第1章 アルカ、転	
	生!	
	知らない空間ね	1197
	火桜	1202
	例の帽子	1207
	特訓しよう	1212
	弄りもほどほどに	1217

ツツコミと絵描きと黒風幽と姫とヒメ

風人の再会

アルミ「多すぎイ…」

第2章 幻影の書

盗まれた本

次女はワイザー

ヒントは…

三女は魂集族のリーダー

追え、追え、オエーツ!

第3章 ザ・ネロイズム

逆さ…?

魔界ってほんまかい?

嫌がる少女

毒の悪魔と善魔

兄妹の再会

仲間

時系列の説明

第4章 ラ・アンヘル

嫌な偶然

蹴散らしていこー

焦る地獄の女神さん

必死になって生、生、生、生

つらいでしょ

決☆壊☆だ

クズの最期

1222

1227

1232

1237

1241

1245

1250

1255

1261

1266

1271

1276

1282

1289

1293

1297

1302

1307

1312

1317

1322

1327

第5章 リゲイン・コンプリーション

欠片探し、スタート！

とんでもない所

時空の狭間

頼み

ミツケ！

似たもの同士、気が合う

ふっかーっ！

天助と優香①

天助と優香②

天助と優香③ (300話突破！)

1374

天助と優香④

1381

1370 1365 1360 1355 1350 1347 1343 1338 1332

天助と優香⑤

天助と優香⑥

第6章 入箱日花、桜木咲子に会う。

異世界へ行こう

自己紹介

異世界バトル！日花 vs 咲子①

1411

天使化とスーパー化！日花 vs 咲子②

赤い台風と夕焼けの輝き！日花 vs 咲子③

竜とグリッチ：！日花 vs 咲子④

1426

子③

1421 1416 1405 1400 1391 1386

オメガ・タイムラインでまた会おう

1432

第7章 パンドラの箱…

手紙と発生

ロリコンからの連絡

炎と氷の対決…?

赤い森へ行く

タイムマシンの会社

何かでつかい機械

破壊だツ!

最終章 時は巻き戻る…

時の一族の壊滅

56年前!?

14801472

1467146214581453144714421437

遭遇

探索

手がかり

逃亡

バック・トゥー・ザ・フューチャー

1505

バトル・オブ・タイム①

バトル・オブ・タイム②

4部の少し細かい解説

第5部 ブルーミング・ワールド 第1

章 アルミの幻想入り

引越

家

15321527

152215151510

1499149414901485

準備、そして厄災	1590
ウヨキイワイカの内容と予感	1586
大厄災、ウヨキイワイカ	1580
第2章 ” パンドラの箱”	1575
人形使いと妖精	1570
にわとり食ったか？	1566
ノアとぢごく	1561
太陽の畑とゆうかりん	1556
博麗の巫女（赤ちゃん）	1552
提案と団子屋	1547
バ鳥のインタビュー	1542
半分の行方	1537
バ鳥	

戦闘中の雑談	1655
神、仙人、妖怪	1650
M A G R O	1643
立ち向かう	1638
休息と風神	1633
抹殺の憎悪	1628
イワ死	1623
えてくるんだ	1618
イワシがたちから	は
クラゲの終了と花	1611
巨大クラゲ	1606
余裕、なのか？	1601
クラゲ	1596

アンテ組の活躍①

部下の実力

巨大マグロ

幻想郷での幕間

黒い生命体：に似たヤツ

アンテ組の活躍②

パンドラ家について

超危険：には見えない

穴だけではない

囲まれても問題ない

アンテ組の活躍③

17151710170517001696169016851681167616711666

アンテ組の活躍④

アンテ組の活躍⑤

アンテ組の活躍⑥

アンテ組の活躍⑦

アンテ組の活躍⑧

1番弟子の死とグリッチ化

AYF、討伐完了

閑話：火桜神モード

分散して効率化？

大きくなるタイプの敵

ヤツメを、ぶつ倒す！①

ヤツメを、ぶつ倒す！②

ヤツメを、ぶつ倒す！③

1781177617721767176217581753174717411735173117261720

突然の異空間

炎月

10倍という大差

ウミガメ

分散した戦い①

分散した戦い②

分散した戦い③

分散した戦い④

分散した戦い⑤

分散した戦い⑥

決着

おわりっりっり。

第3章 坂田日花、月に行く。

183418281824182018161812180718031798179417901786

何故か増えていくパンドラの図書館の

書物

やっぱり不思議な人

強者の眼、神眼

便利すぎるタクシー

戦艦は真つ二つ

閑話：紅魔館

月の都

月の都在住の炎月

イザナミが遺したものと謎の暗号

1876

上限解放(400話突破アツ！)

1880

18701866186218571852184718431839

ゆつたりな勝負①

—————

1886

ゆつたりな勝負②

—————

1891

オール・ヨア・フォルトは月の地下に住

む

—————

1896

そして、グリッチは現れた

—————

1902

閑話：博麗神

—————

1908

再戦！平次 vs A Y F ①

—————

1914

凸撃！平次 vs A Y F ②

—————

1919

さて、帰ろうか

—————

1924

原作開始前の時系列

—————

1930

第4章 ジ・インフェルナ

アルミ、旅に出る。

—————

1934

封印を解かれし魔王

—————

1938

手遅れ

—————

一方、現時点の最強は

—————

1944

第1部 日常は非日常 最終章 アルカ、生き返る！

side マリオ・マリオ

マリオ「うーん…」

ルイージ「どうしたの？」

マリオ「ちよつとデイジーに俺の未来を占ってもらおうかな」

ルイージ「いきなりどうした？ 兄さん」

マリオ「最近、いい加減仕事しようかと思つてさ」

ルイージ「ハア!? 兄さん変なものでも食つた？ はやく病院にみてもらおうよ」

食つてねーわ!

マリオ「アホか! もう俺たち26だろ? ちよつと心配になつてきたんだよ」

ルイージ「なるほど、そういうことね。じゃ、仕事行つてくるね」

マリオ「オマエ、仕事つてどこに？」

ルイージ「前言ったでしょ? 発電所だよ」

あ、確かにそうだった。

ルイージ「そんじや、いってきー」

マリオ「おう、いってらー」

ガチャっ。

マリオ「さてと、オレも準備してから行くか」

今日は2019年10月19日。少し肌寒い。

―数分後―

トントントーン!

誰かがノックしてきた。

アルカ「おっはようさーん♪」

きたか、可愛い背後霊。

マリオ「おう、アルカか。おはよー」

アルカ「あれ?どっか行くの?」

マリオ「ああ、ちよつとデイジーに俺の未来を占ってもらおうと思って」

アルカ「ヘエ〜:あ、私もマリオさんについていい?」

マリオ「別にいいけど、オマエそんなにヒマか?」

アルカ「ヒマとは何よ!」

いやいや、いつもそうだろ。

アルカ「私はただ、マリオさんと一緒に……あ、何でもない。はやくいこー！」
？なんか言おうとしなかったか？ま、いいや。

マリオ「さて、行こうぜ」

その後、俺は自分の未来を知り、人生最大の決断をした。

運命の歯車は、動き出した。

sideアルカ・パンドラ

マリオさんは、デイジーさんに占ってもらった後、無言で歩き出した。

アルカ「どうしたの？マリオさん、様子がおかしいよ？」

すると、マリオさんは

マリオ「しばらく一人にしてくれないか？」

アルカ「う……うん……」

マリオ「そんじや」

ほんとに、どうしたんだろう……

デイジー「次の方、どうぞ」

あ、私の番だ。

アルカ「久しぶり、デイジーさん」

デイジー「あら、アルカじゃない！何を占って欲しいの？」

アルカ「……………」

私の墓にはこうかいてある。

アルカ・パンドラ 愛する娘、ここに眠る

2000〜2016

……私は、生き返りたい。

アルカ「私って、生き返ることはできるの?」

デイジーさんは、

2929

0831

2929

0831……としばらく行った後、後ろにあった本棚から一冊の本を取り、こういった。

デイジー「できるわよ」

アルカ「え、ほんと!??どうやって!??」

デイジー「それは次回言うわ」

アルカ「メタァ!」

集まる仲間達

side アルカ・パンドラ

驚いた。まさか本当に生き返ることができるとは…

でも、前回のセリフはメタいよ？

アルカ「どうやって私は生き返るの？」

デイジー「カンタンよ。アンタの命のろうそくに火をつけてもらうのよ」

アルカ「え？でも確か死んでから1時間以内じゃないといけないんだったよね？」

デイジー「あれはキングテレサのウソよ」

へ？うそーん。↑ダジャレかよ！

アルカ「なら今すぐあの世の広場に…」

デイジー「でも、1つデメリットがあるの。生き返る時、ステータスが死ぬ前に戻ってしまうのよ。」

え、なにそれ困る。

アルカ「そこを何とか……………」「できるわよ♪」え!?!?」

できるんかい☆

アルカ「ど、どうやって？なんか変なものとか作ったりしないよね？」

デイジー「まさにその通り！」

マジか…何作るんだろ。

デイジーさんは持っていた本のページを見せる。

デイジー「これよ」

ん？どれどれ…

「ステータス引き継ぎドリンク

効果 幽霊のときにこれを飲んで1時間以内に生き返れば、幽霊だった時のステータス（力や性格など）が引き継がれる。（透明人間、透過能力以外）

量 500ml

材料

シャインのかけら100g

アイスフラワー100個

スーパーキノコ1個

アイスピーリング5個

作り方

アイスピーリングは、アイスフラワー、みじん切りにしたスーパーキノコといっしょ

にミキサーにかける。

その間にシャインのかけらは細かく砕いておく。

ミキサーの中の液体を容器に移した後、砕いた粉を入れ、一緒に混ぜる。

液体がトロトロになったら完成。苦いリンゴの味がする。」

なるほど。思ったよりはかんたんそうね。

デイジー「どう？ やってみる？」

アルカ「やらないわけがないわね」

デイジー「なら、私も協力するわ！」

アルカ「え？ でも仕事が……」

デイジー「大丈夫。今日は土曜日よ。平日じゃないからここに来てるのは逆におか

しいのよ？」

(ルイージは週6で仕事しています。)

アルカ「でも、2人だけじゃ足りないわね……あ、そうだ！

カービィ君とジーノ君を呼ぼう！」

デイジー「だれ、それ。友達？」

アルカ「うん、そうよ♪」

デイジー「それは頼もしいわね」

アルカ「ちよつと電話するね」

そういつて、私はスマホを出して、

カービイ君に電話した。(宇宙電話です。)

A few minutes later:

カービイ「ハロー！ジーノも連れてきたよー！」

ジーノ「？この人は？」

デイジー「この人たちがジーノとカービイ？よろしくね」

カービイ「ハッピーうれピーヨロピクね☆」

→ジョジョネタ

アルカ「それで、話があるんだけど…」

シャインのかけらって買えるんだね

side アルカ・パンドラ

カービー「話って？」

アルカ「私はね……」

―数分後―

……ということなの。」

ジーノ「なるほど、もちろん僕たちも手伝うよ！」

デイジー「じゃあ早速始めましょ！」

アルカ「まずはシャインのかけらね……」

カービー「シャイン？じゃあドルピック島？」

ジーノ「場所がわかるならはやくいこー♪」

デイジー「でも、どうやって？飛行機にでも乗るの？」

フフフ…確かデイジーさんとジーノ君は知らないわね…

アルカ「飛行機？何それおいしいの？カービー君のワープスターでいけるわよ♪」

カービー「OK！じゃあ早速呼ぶね！」

あ、くるよくるよ☆

カービィ「ワープスター様、今日もイケメン！」

デイジーとジーノ「……………は？」

アルカ「いや、ワープスターはおだてればくるのよwww」

デイジー「はあ…」

ティウルルルル…☆

ジーノ「あ、ほんとに来了。」

カービィ「のつてのつて」

デイジー「これって、速いの？」

アルカ「時速111kmよ☆」

ジーノ「フア!?」

カービィ「はやくのつて♪」

デイジー「…ま、いいわ。もっと速いバスに乗ってるし…」

カービィ「それでは、出発！」

ビュウウウウン！

うわー風強ー(棒)

ジーノ「はーやーいーよー」

デイジー「……………」

アルカ「あれ？デイジーさん？」

カービー「気絶しちゃってるよ…」

アルカ「私がつかんであげないと…」

そんなこんなで、私たちはドルピック島についた。

もう10月なのにあったかいね〜ココ。

…あ、それよりも

アルカ「デイジーさん！起きて！ついたよ！」

デイジー「うーん…ハッ！ここは？」

ジーノ「ドルピック島についたよ〜」

カービー「シャインのかけらはどうやって手に入れるの？」

デイジー「お土産屋に売ってあるわよ」

アルカ「よし！じゃあ早速行こう！」

ついた

ジーノ「ええと…あつた！これだよ」

アルカ「一応300g買っておきましょう」

店員「30万円になりませ〜す」

デイジー「30万円!?」

アルカ「なら、私が払うわ」ドサツ

カービィ「どうやってそんな金を…」

アルカ「暇な時、賞金が出る犯罪者を捕まえてるの♪だから私は軽く5000万円は持つてるわね」

ジーノ「すごい…」

店員「お買い上げありがとうございます」

かけらを袋に入れて、私たちは店を出た。

カービィ「あ、聞き忘れてたけど、◇って賞金どれぐらい?」

アルカ「1450万円だったわね」

デイジー「アンタ、そうとう強いのね」

アルカ「いや、こう見えてもわたしのパワーは200よ♪」

(パワーのことは後書きで説明します)

カービィ「さて、次はウイスピーリングかな」

りんごりんごりんご！

side アルカ・パンドラ

ジーノ「次はウイスイスピーリングだよね。どうやって手に入れるの？」

カービィ「プププラントにレッツツゴー♪」

デイジー「え？でも宇宙って空気がないんじゃない？」

アルカ「うるさいですよー♪」

この世界ではそんなのカンケーないわよ

ー移動シーンはカットー

ふうーついたー。空気が美味しいー

(地球と違って機械があまりないし自然が豊かだから。)

アルカ「さて、森へ行こう〜！」

カービィ「行こう行こう〜☆」

ジーノ「ヤケにテンション高いね」

デイジー「自然が豊かだからじゃない？」

アルカ「チツチツチ♪違うんだなーそれが」

デイジー「じゃあなんで？」

カービー「ウイスピーリングってね、絶品なんだよ〜！」

アルカ「しかも栄養満点なんだよ〜！」

カービーとアルカ「だからリングをたくさんとってたべたいんだよ〜♪」

デイジー「そんなに美味しいの？」

カービー「おいしーいんだよ☆」

ジーノ「じゃあ早く行こう行こう〜！」

お、ジーノ君も乗ったねー

アルカ「今回はジーノ君がめっちゃくちゃ活躍するよ〜♪」

カービー「え、なんで？」

アンタも知らないんだ…

アルカ「リングって、木の上にあるでしょ？」

デイジー「あ、そういうことね」

ジーノ「え、どういうこと？」

デイジー「アンタが弓矢でリングの枝を切って、落ちたのを集める感じじゃない？」

カービー「いい考えだね〜…不採用」

なぜマリオさんの名言を…

アルカ「じゃあ私がカゴを持ってリングをキャッチするなら？」
カービィ「採用！」

アルカ「それじゃ、カゴ買ってくるねー」

ー準備完了！ー

デイジー「うわーでつかいわねー！」

アルカ「でも大丈夫！私が運ぶから！」

ジーノ「よし！うつよー！」

そう言つて、ジーノ君は矢を放った。

ピユウウン！ バキツ、パキパキ、メキツ！

一気にリングが10個ぐらい落ちてきた！

カービィ「すごい腕前だね…」

アルカ「私のスピードは時速169kmよ！全部キャッチ！

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

サツ！サツ！サツ！

デイジー「アルカもめっちゃはやいわね…」

数分後…

ドサツ！

アルカ「ふう〜大量にゲット!」

デイジー「でも、これどうやって持ち帰るの?」

アルカ「フフフ…実はね…」

スウウウウツ…

アルカ「このカゴ、ノリオさんのバズーカみたいに入れてみると小さくなるのよ〜!」

ジーノ「うわースゴイネー☆」

??「すごいすごい!」

カービィ「あ、いたんだ。いつからいたの?アド」

アルカ「私についてきたの」

デイジー「このこは?」

アド「私はアド!18歳の画家で、アルちゃんの友達よ!」(年齢は作りました)

デイジー「私はデイジー。よろしくね」

アド「デイさんね!よろしく!」

ジーノ「ぼくたちについてくる?」

アド「うん!ちようどキノコ王国に用があったから、途中までついていくね!」

カービィ「でも、ちよつとまって。ワープスターは4人乗りだよ?」

アド「大丈夫！私もカゴに入るから！」

あ、それ私のセリフよ！

デイジー「いや、私が入るわ。ワープスターに乗っていると気絶しそうになるし…」

アド「じゃあデイさんが入って！」

カービー「それじゃ、次はキノコ王国へしゅっぱーっ！」

思わぬハプニング

side アルカ・パンドラ

ーキノコ王国ー

アルカ「一旦カゴは私の家に置いていかない？」

ジーノ「それがいいね」

カービィ「あと、そろそろ昼飯食べようよ」

アド「リングをちよつと食べれば？」

カービィ「そうするよ…ムシヤムシヤ…」

デイジー「食べ過ぎないでね」

アルカ「さて、本題に入るわよ。スーパーキノコってどこで手に入るの？」

デイジー「巨大キノコ山脈で取れるわよ」

アルカ「え?!? 私の実家があるところじゃん！」

カービィ「ああ、前言ってたね。パクパク…」

アド「いい絵が描けそうね☆」

ジーノ「キノコ狩りー！」

カービィ「ふう〜美味しかった〜！じゃあこのカゴをアルカの家に置いていこー！」
ー巨大キノコ山脈ー

デイジー「ここがその山脈よ」

アド「じゃあ、私はこの辺で絵を描きながら待つとくわ」

ジーノ「キノコ狩り、キノコ狩りー！」

そしてアドを置いていって、私たちは山脈の森に入ってしまった。

カービィ「うわー、けっこうキノコが多いねー、……………ん？」

アルカ「カービィ君、どうしたの？」

カービィ「この青いキノコ、スーパーキノコに似てない？」

カービィ君は青い点々がついたキノコに指した。

ジーノ「たしかに、似てるね。なんだろ…」

デイジー「ま、ま、まさか、これは……………」

アルカ「デイジーさん？」

デイジー「これは、ウルトラキノコ！スーパーキノコのレア版で、滅多に取れない！」

ジーノ「しかも、よく見たらスーパークキノコもある!!」

デイジー「これみて！」

デイジーさんは、ずっと持つてきていた本の別のページをみせてきた。どれどれ…

「時間停止ドリンク」

効果 素質がない人は、1週間腹痛になり、素質がある人は1時間まで時が止められるようになる。だれが止まった時間の中で動けるか指定することもできる。止めている間は体力が普段の10倍削られる。しかし、止めている間はダメージは蓄積せず、人を殴るなど悪いことをすると自動的に解除され、一時的に能力が使えなくなる。能力を解除した後、使った時間だけ同じ量のクールダウンがある。

量 500ml (飲むのは一口だけで良い。)

材料

シャインのかけら 100g

ウイスピーリング 5個

ウルトラキノコ 1個

ファイアフラワー 100個

時の粉 60g

作り方

ステータス引き継ぎドリンクとほぼ同じ。

最後に時の粉を入れて混ぜる。」

アルカ「時間停止か…デージーさん、時の粉ってどこで取れるの?」

デイジー「タイムマシンに入ってるらしいわよ」

アルカ「あ、なら作れるわね」

カービー「え、タイムマシン持つてんの？」

アルカ「詳しくは原作の「タイム恋愛」をみてね！」

(実際はちゃんと説明してます)

ふふっ、ちゃっかり宣伝♪

ジーノ「じゃあついでにそれも作ろうよ！」

デイジー「それがいいわね。さて、あとはアイスフラワー1000個ね！」

集めるコンテスト

side アルカ・パンドラ

アド「え!? もう見つけたの? さすがカーくん!」

カービィ「エヘヘ」

デイジー「最後はアイスフラワー100個ね!」

アルカ「じゃあブルームプラネット国にレッツゴー!」

ブルームプラネット国の滝の前

ジーノ「この滝、きれいだね」

アルカ「マリオさんがここにいたら、もっとすごいものを見せれるわよ☆」

アド「あ、早速1個発見!」

あと99個

アルカ「あ、ちよつと提案があるんだけど、1人20個集めるのはどう? そして、最後だった人はみんなの夕食おごる、つてことで!」

カービィ「いい考えだね…ニヤリ」

（▽）ニタア…アンタも同じ考えね。

デイジー「でも私が不利じゃない？足遅いし…」

アルカ「なら、デイジーさんは10個、私は29個、後の3人は20個集めるのは？」
アド「それなら問題ないね！」

ジーノ「早く始めようよ！」

アルカ「みんな準備OK？」

全員「OK！」

アルカ「位置について…よい…ドン！」

アド「アイスフラワー発見器！」

なるほど、アドはそっちを使うのね。

カービィ「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおお！たーーーーーきーーーーのーーーーーぼーーーーりいーーーー！」

デイジー「すごい…滝登りしてる…」

ジーノ「ボクもはやく集めないと！」

ふふっ、やっぱりみんなは思いつかなかったわね。

アルカ「全力DASH！」

ダダダ…

私が向かった先は…

花屋よ！集めるといっても、買っちゃダメというルールはないわよ♪（性悪）

ーということ、29個ゲット！

あとはみんな待つだけ♪

数時間後

デイジー「私も終わったー！」

アルカ「あれ？カービィ君は…まさか…」

アド「滝から降りれないんじゃないや…」

ジーノ「急いで助けよう！」

救助した

カービィ「いや〜助かったよ」

アルカ「まだ助かってないわよ♪」

ふふふ…

デイジー「だって、アンタが」

ジーノ「最下位だからね」

アド「ちゃんとおごつてね〜」

カービィ「いーいーいーやーいーいーだーいーいーいー！」

ーアルカ宅ー

アルカ「さて、ドリンク作っていくわよー！」

デイジー「ついでに時間停止ドリンクもね！」

アド「でもなんで私たちだけ？」

アルカ「あの2人料理下手なのよ」

アド「あ、なるほど…」

数分後…

デイジー「あとはこれを水筒に入れて…OK！」

アルカ「両方完了！」

アド「2人ともくできたよー♪」

ジーノ「マリオとルイージも呼んできたよ！」

マリオ「…アルカ…おまえ…」

アルカ「マリオさん、私、生き返るわ！」

マリオ「ああ、それがいいぜ！」

ルイージ「兄さん、妙にカッコいいな…」

カービィ「ルイージ、なんかいった？」

ルイージ「いや、何もいってません」

アルカ「準備もできたし、いこうか！」

もうすぐ、
私は生まれ変わる…

アルカ、復活！

sideアルカ・パンドラ

マリオ「最後はおまえのお父さんを待つだけだ」

アルカ「そろそろかな…」

カステン「ただいま〜！」

あ、きたきた！

アルカ「おかえり、パパ！なんでマリオさんたちもいるかわかる？」

カステン「うーん…さっぱりわからん」

アルカ「私ね、生き返るの！」

すると、お父さんは驚いて、

カステン「嘘だろ!?!」

まあ、最初は驚くわね。

アルカ「ほんとよ。いつしよにきて！」

カステン「きてって、どこに？」

アルカ「私が生き返る場所よ！」

カステン「本当に、本当に生き返るのか!？」

アルカ「本当に、本当よ! いっしょにきて、パパ!

カステン「う…アルカ…もちろんだ! 娘が生き返るところを見ないわけがない!

アルカ「そうと決まったら、行こう! あの世の広場へ!

―あの世の広場―

幽霊「なーにーしーにーきーたー」

アルカ「私のろうそくと…」

マリオ「俺のろうそくを持ってきてくれ」

え、マリオさん!!?

マリオ「それでいいんだろ? アルカ」

アルカ「…うん!」

やっぱりマリオさん、カッコいい!

幽霊「もってーきーたーぞー」

デイジー「アルカ、ドリンクを!」

アルカ「うん! ゴクゴク…OK!」

なんか苦いリンゴの味がする。

マリオ「アルカ…火だぞ」

アルカ「マリオ達に言つて。もう、私はさん付けしないことにしたわ」
マリオ「お礼はいらねーよ、アルカ。当然のことをしたまでだ」
マリオ…

アルカ「マリオ、私、アンタのことが…

大好き」

そういつて私は、マリオのほつぺたにチュウした。

マリオ「い…ま…お…れ…チュウ…さ…れ…

??????????

プシューウウ〜」

マリオとアルカ以外全員「や…やりやがった！」

アルカ「ウフフ♪マリオ、照れてるんだからあ♪」

カステン「…よし！今夜は宴だ！金はおれが出す！」

アルカ「パパ…！私、回らない寿司食べたい！」

ルイージ「おお！いいね、それ！」

カービィ「ふう…命拾いした…」

デイジー「そうと決まったら…」

ジーノ「早速行こう！」

全員「お寿司！お寿司！」

…なんか…私、だれか忘れてるような…

一方、その頃…

キノピオ「ハクシヨン…！俺だけ何かに呼ばれてない感覚が…」

ま、いいか♪

寿司屋の復活祭

side アルカ・パンドラ

私たちは今、回らない寿司屋にいる。

理由？前回読んでね☆↑メタい！

マリオ「アルカはまず何から食べるんだ？」

アルカ「生き返って最初の寿司は…大トロで！」

ルイージ「いいね〜じやあぼくも！」

カービィ「ぼくはいくら食べたーい！」

こんな感じで、それぞれ寿司を食べ始めた。

アルカ「パクツ…おいしー！ー！」

何これ、めつちや美味しいんだけど！生きるってやっぱりいいわね♪

デイジー「せっかくだし、なんかゲームでもやらない？」

ジーノ「連想ゲームなんてどう？」

カービィ「いいね〜それ ニヤリ」

アルカ「間違えた人は、わさびの塊を食べることにしない？」

マリオ「いいなくその考え。乗った！」

カステン「俺は見るだけにする」

ルイージ「じゃあまずはよくからね。えーと…バナナといえば黄色！」

デイジー「黄色といえばレモン！」

アルカ「レモンといえば酸っぱい！」

ジーノ「酸っぱいといえばお酢！」

…ギリギリセーフね。

カービィ「お酢といえばマヨネーズ！」

アド「マヨネーズといえば調味料！」

マリオ「調味料といえば塩！」

ルイージ「塩といえば塩素！」

デイジー「塩素といえば毒！」

アルカ「毒といえば蛇！」

ジーノ「蛇といえば危険！」

カービィ「危険といえばアルカ！」

アルカ「あ？今なんつったゴラア（#・皿・）」

（ちよつとキャラ壊れた）

アド「あーあ、まだいい終わってなかったのに」

デイジー「素質がない人はそうなるのよ」

マリオ「それを早く言え…」

マリオ・マリオ：それから1週間腹痛に苦しむ

ルイージ「うわあ…飲む気無くなっちゃったよ」

アルカ「…私が飲むわ」

デイジー「え!?!でも生き返って早々に腹痛って嫌にならないの!?!」

アルカ「大丈夫!私にその覚悟はある!」

アルカ「飲むよ!ゴクリ…」

………あれ?なんともない

?じゃあ…」

え、まさか私、時間停止能力を手に入れたの!?

全員「えええええええええ!!」

アルカ「た、た、試してみるわよ……… 時間停止!」

←ブウウウウン…

私以外のものは全て色を失って止まった。

アルカ「すごい…これが…時間停止…」
私は、あたりを見回す。

時計は止まってるとし、寿司屋のテレビも止まってるとし、みんなの動きも止まってるとし、あ、いいこと思いついた！みんなの後ろに回り込んで…

アルカ「どうやって解除するのかしら？…こうかな？

再生！」

→ブウウウン…

周りのものは色を取り戻して、動き出した。

全員「…あれ？アルカ？」

チヨンチヨン♪

全員「クルツ…!!？アルカ、いつのまに!?!まさか…」

アルカ「私、時を止めれるようになった、テヘツ☆」

全員「…マジか…」

その後、私たちは寿司屋が閉店するまで騒いで、その後も私の家で楽しく過ごした。
アルカ…時間停止能力を手に入れる。

パワー 200↓2000

次回 第2部 オーバーパワー 第1章 アルカの学校生活

じけーれつは続く…

第2部 オーバーパワー 第1章 アルカの学校生活 編入生、アルカ

sideアルカ・パンドラ

アルカ「ふあゝ」

今日は2020年4月7日火曜日。

私は今日から高校に復学する。

カステン「おはよう、アルカ」

アルカ「あ、おはようパパ」

カステン「今日からの学校、大丈夫か？」

アルカ「うん、大丈夫！ちよつと緊張するけどね…」

カステン「まあ、そりゃそうだ。実質3年ぶりの学校だからな」

・
・
・

たしかに、私は3年ぶりに学校に行く。でも、今の私なら大丈夫だろう。

アルカ「でも、私頑張る！」

カステン「ああ、頑張れよ！じゃあ、先に仕事に行つてくる！」

アルカ「うん、いつてらっしやい！」

私が生き返つてから約半年。時間停止をうまく使いこなせるようになった。

アルカ「さて…と。時間停止！」

←ブウウウウン…

アルカ「準備もできたし、マリオ達を起こしに行こうつと♪」

ーマリオ宅ー

マリオとルイージは、すごい寝顔で止まっている。

アルカ「再生！」

→ブウウウウン…

マリオとルイージ「ZZZ…」

アルカ「スウー…起きろおおおおお！」

マリオとルイージ「はっ！今何時!?!？」

アルカ「7時半よ、早く起きて！」

マリオ「お前つてよく早起きできるよな〜」

ルイージ「ぼくたちが遅いだけだよ…」

マリオ「それもそうか…ところでアルカ、お前今日から学校だろ？勉強はできるのか

「？」

アルカ「大丈夫、私IQ169だから！」

ルイージ「そういえばそうだったね」

アルカ「さて、私学校行くから、じゃーねー☆」

マリオとルイージ「おう、いつてらっしやい」

それから、私はゆっくり学校に行った。

11時間後、学校でー

ザワザワ：

先生「今日から新しい編入生が来ました。」

生徒1「え、編入生？」

生徒2「転校生じゃないの？」

生徒3「可愛い子かな？」

先生「それでは、入って自己紹介してください」

先生に呼ばれて、私はクラスに入った。

アルカ「アルカ・パンドラです。とある理由で編入してきました。よろしくお願いします」

生徒1「うわー可愛いー！」

生徒2 「タイプだわー！」

先生 「さて、パンドラさん、あなたはそこの席です」

席に座ると、隣の席の子が話しかけてきた。

キノミ 「わたし、キノミ！パンドラさん、よろしくね！」

アルカ 「うん、よろしく」

この子、あのマツシユルムヘッドに似てるな…

先生 「さて、みなさん、この自己紹介の紙に記入してください」

さて、描いていくー☆

名前 アルカ・パンドラ

誕生日 6月9日

好きな教科 体育 好きな食べ物 クッキー

趣味 犯罪者逮捕 得意なこと 時間停止

将来の夢 保育士

…こういう感じかな♪

天の声 「逮捕と時間停止はおかしいだろ！」

今誰かの声が聞こえた気がしたけど、無視無視♪

キノミ 「ヘエーすごい趣味だね…」

アルカ「ま、まあね…ツッコまないでね」
キノミ「う、うん…」

先生「それでは、提出して下さいーい」
パラパラ…

先生「ん？パンドラさん…」

アルカ「はい、何ですか？」

先生「何ですかって、どう見ても趣味と得意なおかしいですよ！訂正してくださいー！」

アルカ「いや、本当のことなので」

先生「なら、証拠を見せてください」

アルカ「…はい、どうぞ」

私は、バイトで警察官として働いている。その身分証明書を先生に見せた。

先生「これ、偽物ですよ？偽造は犯罪ですよ？」

アルカ「なら、今から警察官を呼んできてもいいですよ？」

先生「…でも、得意なことは…」

アルカ「先生以外時間停止！」

←ブウウウン…

先生は、口をあんどぐり開けていた。
そりやそうね。

先生「は、はい、訂正しなくていいですよ」

アルカ「わかりました。再生！」

→ブウウウウン…

先生「(とんでもない編入生がきたな…)」

生徒「あれー、先生ぼーつとしてますけど、大丈夫ですか？」

先生「あ、なななんでもないですよ。他の皆さんも提出して下さいーい」

あらあら、ちよつと脅かしすぎたかな？

ま、いいや。これからがんばろー♪

カンニング？なにそれおいしいの？

side アルカ・パンドラ

ー休み時間ー

生徒1 「なあパンドラさん、どこからきたんだ？」

アルカ 「私は編入生よ。転校してないわ」

生徒2 「趣味ってある？」

アルカ 「私の自己紹介プリントを見なさいよ」

生徒2 「えーと…あつた！どれどれ…フア!!?」

生徒1 「うわー、マジかよ…」

クラスメートたちは引いている。

生徒2 「さすがにその趣味はないわ」

生徒1 「てか、時間停止って…」

生徒2 「パンドラさんって、中二病？」

アルカ 「あ？いまなんつったゴラア」

シュッ！

生徒1「え、いつの間に後ろに!?!」

フッフ、時を止めて回り込んだのよ。

生徒2「ひ、ひゃー!逃げろー!」

あら、そんなに怖がらなくてもいいのに:

ー確認テストー

先生「はい、それでは確認テストをしまーす」

生徒「うわーマジかよー」

生徒「オレ勉強してねー」

先生「それはあなたたちのせいです。それではスタート!」

サラサラサラサラ:

なにこの問題。めっちゃ簡単じゃん。

半年ぐらい参考書を読んだ甲斐があつたわね。

アルカ「(ふう〜終わったー☆)」

時間停止なしで10分しか使ってないわね。

そう思っていると、先生が近くに来て、回答を見てきた。

先生「キミ、カンニングしましたね?」

アルカ「は?してませんよ?」

先生「でも、早すぎないですか？見直しました？」

アルカ「しましたよけど？」

先生「とにかく、やり直しです。はい、もう一枚。今度は私が見ながらやって下さい。」

アルカ「は、はい……」

なに？この先生。さすがに理不尽じゃない？

ま、いいや。サラサラサラサラサラ……

10分後……

アルカ「はい、また終わり！」

先生「ほ、本当に速いだけだった……」

キノミ「(うわー、パンドラさんはっやーい……)」

キーンコーンカーンコーン……

あ、チャイムだ。

先生「手を止めてください。テスト終了です」

生徒「うわー、全然できんかった……」

生徒「俺は自信あるぜ！」

キノミ「パンドラさん、問題解くの速いね！すごい！」

アルカ「えへへ〜そうかなー？」

なんか照れるわね♪

キノミ「だって、10分で全部解いたでしょ!?!もしも全問正解だったら…」

先生「採点が終わりました。〇〇さん、85点」

生徒「よし、まあまあ高いぜ…」

先生「〇〇さん、58点。ちゃんと勉強しました?」

生徒「してませーん!ちくしょー!」

先生「松田さん、95点。惜しいですね」

へえ、キノミさんの苗字は松田なんだ。

キノミ「うわー、おっしー!」

アルカ「ドンマイ」

先生「パンドラさん、100点2枚。あなた本当に速いですね」

生徒「え!?2枚!?なんで2枚?」

アルカ「先生が私がカンニングしたと思って、もう一枚やらされたのよ」

生徒「すげー…しかも両方100点…天才?」

アルカ「天才ねえ…」

キノミ「パンドラさん、あとで問題教えて?」

アルカ「別にいいけど…」

キノミ「やったー！ありがとー！」

今から57年後、キノミさんの孫があいつの転生だと知るんだけど、それはまた別の話。

不良をボコボコ♪

side アルカ・パンドラ

私は今、キノミさんと学校から帰ってるところだ。

雑談しながら、ゆっくり帰っているよ…

キノミ「!!パンドラさん、あれ…」

アルカ「?あ、不良ね。それがどうしたの?」

キノミ「どうしたのって早く逃げようよ…見つかったらひとたまりもないわよ…」

アルカ「ふーん…:スウー…おーーい!そこの不良さんたちー!」

不良1「あ?」

不良2「なんだゴラア」

キノミ「う、うわあー!なにやってんの!!パンドラさん!バカなの!!不良だよ!!」

アルカ「あんたたち、人をいじめたことある?」

不良1「当たり前だ!」

不良2「オマエにもしてもいいんだぜ?」

アルカ「そう?かかってきなさい」

キノミ「パンドラさん!?なに言ってるの!？」

不良1「くらー」

アルカ「キノミさん以外時間停止!」

←ブウウウウン…

キノミ「え!?!と、止まった!?!」

アルカ「時を止めたのよ。さて…」

私は、カバンから常に持ち歩いている縄をだして、不良どもをしばった。

キノミ「パンドラさん…すごい…」

アルカ「ま、これも一応仕事だしね♪」

キノミ「仕事?」

アルカ「私、バイトで警察やってるのよ」

キノミ「ほわーう…」

キノミさんはめっちゃビックリしている。ま、そりやそうだから、私はあまり驚かないけど。

アルカ「さて、これでいいかな?再生!」

→ブウウウウン…

不良1「ーえ!…あれ?」

キノミ「は、はあ…」

この平和な日常は、約2年続いた。

運命の歯車は、動きだした…

次回 第2章 脱獄者の逆襲!?

第2章 脱獄者の逆襲!? 突然の事件

今は2022年。

マリオたちは28歳、アルカは18歳である。

sideマリオ・マリオ

マリオ「ふう〜休日最高!」

ルイージ「だよね〜、疲れが取れる〜」

アルカ「あとアニメを一日中見れる〜!」

俺たち3人は、テレビでアニメを見ながらゆっくりしていた。すると突然、緊急速報が流れてきた。

「緊急速報です。昨夜、刑務所から大量の犯罪者が脱獄しました。直ちに家の鍵や窓、カーテンを閉めてください。」

そして、外出は極力避けてください。」

全員「な……なに!?!」

アルカ「大量脱獄!?!」

「マリオ「こりや休んでる暇ないじゃないか！」

ルイージ「でも、どうする？ なにから始める？」

うーん、それもそうだな…よし！

マリオ「今すぐ仲間たちに電話だ。できるだけ戦力を集めよう」

アルカ「マリオ…冷静な判断をしてる…」

ルイージ「よし！ 兄さん、キノピオはすでに向かってきてて、カービイはアドにも連絡、ノリオはジーノ、ミールと一緒に来るみたいだ！」

マリオ「OK！ 次は食べ物とかを…」

アルカ「私がすぐに買ってくる！」 ダダダ

たしかに、アルカが適任だな。

マリオ「おう、まかせた」

ルイージ「ボクはこの蓄電池にでんきを貯めておくよ。テレビもいるかな？」

マリオ「ああ、それも持っていけ」

あとは…あれだな。

マリオ「俺ら、武器はどこにしまってたっけ？」

ルイージ「床下だよ、兄さん」

マリオ「了解！」 ガチャガチャ…

マリオ「あとはみんなが来るのを待つだけだな」

ルイージ「そうだね」

数時間後…

アルカ「これでほとんどいるかな？」

今ここにいるのは、

俺、ルイージ、アルカ、キノピオ、カービィ、アド、ノリオ、ジーノ、ミール、リボン、ピーチ、クッパだ。ここにいないのはハリー、ロゼッタ、デイジーくらいか？

マリオ「さて、作戦会議を始めよう」

キノピオ「まずは警察側の俺からだな。昨夜、犯罪者たちがほとんど脱獄した。その後、巨大な犯罪組織を作ったらしい」

犯罪組織か…それはやばいな。

ノリオ「次に犯罪者側の私ですね。アイツらをミール、ジーノと一緒に少し偵察をしたんですが、恐らく目的はキノコ王国を乗っ取ることでしょう」

ミール「どうやら約1週間前から脱獄する作戦を立てていたらしいわ」

なるほど、たしかにそういう目的かもな…

クッパ「次はワガハイだ。ワガハイは数時間前に組織に勧誘された。だが、もちろん断った。アイツらの目的を知ってすぐに、ワガハイはピーチを連れてここに来た」

ピーチ「クツパが少し遅れていたら、恐らく私はさらわれていたわ」

組織への勧誘か：ノリオも勧誘されそうだな：

マリオ「意見はあるか？」

アルカだけに。お、反応した。

アルカ「あるわ。マリオやルイーゾも元犯罪者だったし、そのうちここへ犯罪者が来る可能性はあるわ」

ジーノ「そこは問題ないね。ボクの秘密基地へ行こう。この人数だったら、充分スペースもある」

カービィ「じゃあ、だれか組織に侵入する？」

キノピオ「そこも問題はない。そのうち組織に接触するだろうし、その時にGPSや盗聴器をつければいい」

ピーチ「警察と手を組む、なんてのはどうかしら？」

ノリオ「私がいることを忘れないでください」

ピーチ「あ、そうだった：」

アド「早めに移動した方がいいんじゃない？」

リボン「たしかに、組織の人がいつきてもおかしくないわね：」

アルカ「それもそうね。ジーノの秘密基地へGO！」

こうして、俺たちの犯罪組織ブチコワ計画が始まった。

ジーノの秘密基地

side マリオ・マリオ

マリオ「さて、いくか」

アルカ「時間停止！」

←ブウウウウン…

いやー、便利だなー時間停止は。

カービィ「ジーノ、秘密基地ってどこにあるんだい？」

ジーノ「このアパートの真下だよ」

ルイーザ「ファア!?いつのまに作ったの？」

ノリオ「チョコロプーさんに頼りましたね」

なるほど…

キノピオ「早く行こうぜ」

それもそうだな。

ー移動したー

ジーノ「この1階の奥に穴があって、そこから入るんだ」

アド「秘密基地っぽいわね」

クツパ「ワガハイって、入れるのか？」

ジーノ「一応入れるように作ってある」

クツパ「おお、たしかに」

大きな穴だなー。

ピーチ「でもこの穴って、そのうちバレない？」

ミール「大丈夫よ、ちゃんとした扉があるから」

リボン「はあー、よくできてるわね」

そう言つて、俺たちは穴の中に入った。

デイウツデイウツデイウ←（土管に入る効果音）

マリオ「すげー仕組みだな、この秘密基地」

ルイーザ「トイレやキッチン、風呂もある！もはや住めるじゃん、ここー！」

ノリオ「まあ、実際にここは私の隠れ家なんですけどね」

アルカ「部屋も10個ある：まさか、こんな事態を想定して作ってもらったの？」

ジーノ「うん、その通りだよ。ちなみに、奥の部屋は倉庫だよ。武器とか保存食とかがある」

カービー「あ、早速食べていい？」

アド「いや、ダメでしょ」

ピーチ「あ、アルカ、アンタ時間停止を解除し忘れてるわよ」

アルカ「そうだった！再生！」

→ブウウウウン…

俺も忘れてたぜ。

リボン「ちなみにここって、インターネット繋がる？」

ミール「繋がるけど、どうしたの？」

リボン「電子書籍版のマンガを読むから…」

おまえ、書く側じゃなかったか？

ルイーダ「一応この蓄電池にでんきを貯めておいた。電気が流れなくなったらこれを

使おう」

クツパ「なんで直接サンダーで流さないんだ？」

ルイーダ「強すぎて機械が壊れてしまうかもしれないからだよ」

アルカ「さて、私は風呂にでも入っとくわ」

アルカの風呂か…覗きたいけど殺されるからな…

天の声「→いやいや、理由がおかしいだろ！」

ん？なんか聞こえたような…ま、いいや。

ジーノ「さて、部屋の割り振りをしよう」

話し合いをした結果、俺とアルカ、ルイーダ、キノピオ、カービィとアド、クッパ、ピーチ、リボン、ジーノ、ノリオとミールになり、最後のひと部屋はもしもの時のためにとっておくことにした。ノリオとミール、カービィとアドはわかるが、なんで俺とアルカなんだって？アルカがどうしても断らないから仕方なくだ。ま、悪い気はしないが。

アルカ「同じ部屋よろしくね♪マリオ♪」

マリオ「お、おう…」

うわ、こいつかわいい…

偵察に行くこう①

side マリオ・マリオ

いま、俺たちは秘密基地のリビングでニュースを見ている。情報収集は大切だ。

「今日のニュースです。キノコ市在住の鳴花（めいか）家が先日脱獄したと思われる犯罪者に抹殺されました。そのうち3人は射殺、1人は全身を強く打って死亡。現在犯人を調査中です」

マリオ「くそ…もう被害者が出ってしまった…!」

バアン!

俺は怒りのあまりに机を思いつきり叩いた。

ルイージ「兄さん…僕も同じ気持ちだよ…」

アルカ「私たちもよ。でも、今は冷静に行動しなきゃいけないわ」

キノピオ「その通りだ。今キレたらさらに被害者を出すことになる」

マリオ「くっ…そうだよな……」

ノリオ「さらに被害者を出さないためにも、偵察に行く必要がありますね」

カービィ「偵察といっても、どこに？」

ノリオ「それはアドさん、あなたが答えてください」

アド「うん。さつきミールちゃんと一緒に犯罪組織の構成員を見付け、こつそりGPSをつけたわ。そいつは今、巨大キノコ山脈に向かってるわね」

巨大キノコ山脈だど!?

ミール「巨大キノコ山脈なら、組織の本部なんて建てても、全然バレないからね」

アルカ「……私の故郷に手を出してたら……」

リボン「絶対に許せないわね……」

ピーチ「アルカちゃん、きつと大丈夫よ」

クツパ「落ち込むのはお前らしくない」

アルカ「……そうよね……私の考えすぎかな？」

ノリオ「さて、偵察に行くのは私、アルカさん、カービィさんの3人でいいでしょう。

後のみんなは待機という形で、いつでもドンパチが出来るようにしてて下さい」

全員「了解！」

この後、まさに61年後、俺の転生が鳴花兄妹の転生に会い、共に戦うことになるんだが、それは別の話だ。

sideノリオ

ノリオ「それでは、アルカさん、お願いします」

アルカ「(ノリオ、カービィ以外) 時間停止!」

←ブウウウウン…

↑アパートの外↑

カービィ「さて、出発しよう」

アルカ「再生!」

→ブウウウウン…

カービィ「ワープスター様、ハンサムですねー!」

|| || ☆

お、きましたね。

カービィ「GO!」

↑組織の屋根の上↑

ノリオ「みなさん、盗聴器の用意はできてますか?」

カービィ「OKだよ」

ノリオ「それではアルカさん、お願いします」

アルカ「時間停止!」

←ブウウウウン…

アルカさんに時を止めてもらってから、私たちは建物の中に入りました。

カービィ「うわー、あちこちに武器とかクスリとか置いてある。あ、こういうところがいいかな？」カチャツ

ノリオ「いい盗聴スポットですね。進みましょう」

ここは、牢屋ですか？大量に人質が捕らえられてますね…

アルカ「どうする？解放する？」

ノリオ「いや、敢えてほうっておきましょう。今回の目的はあくまでも偵察です。それを忘れないでください」

カービィ「それもそうか…ん？あの部屋は？」

ノリオ「入ってみましょう」

ガチャ…

!!

私たちは今、とんでもないものを見てしまいました。

そのころ、魔界では…

side逆さの悪魔

あれ？僕は死んだはずじゃ…

ここはどこだ？

………。

偵察に行こう②

sideノリオ

私たちは、今とんでもないものを見てしまいました。

それは…

アルカ「なんでブレインがここに!?!」

そう、約3年までに私を洗脳した、ブレインに似たものが、そこにあつたのです。

ノリオ「なぜここに……」

カービィ「これだけは無視できないね」

ノリオ「ぶちこわしてやりましょう」

そういつて、私はバズーカを構えました。

アルカ「いやまって、壊すのはいいけど、再生する必要があるわよ」

あ、そうでした……私としたことが……

カービィ「じゃあ、さつき見つけた爆弾を吸い込んでくるね」

ノリオ「その手がありましたね、カービィさん、お願いします」

カービィ「すう……ピロリン☆ボム！」

アルカ「えーと、じゃあこことこことこことここに爆弾を置いて」

カービィ「設置完了！」

ノリオ「あとは他の部屋に盗聴器をつけなければいいだけです。急ぎましょう」

その後、いろんなへやをまわって、盗聴器をつけていきました。

ー組織の屋根の上ー

アルカ「再生！」

→ブウウウウン……

カービィ「スイッチON！」

ドカーン！少し離れたところで爆発がありました。成功のようですね。

敵「なんだなんだ!？」

敵「やべー！機械が何者かによって爆破された！いつのまに!？」

敵「すぐにボスに連絡だ！」

おやおや、相当焦ってますね。

カービー「さて、帰ろう」

アルカ「そうね」

ー帰ったー

ノリオ「ただいま…!?!なんですか、この状況…」

秘密基地に帰ると、全員無言で個人の作業をしてました。

静かすぎませんか？

マリオ「おう、おかえり。どうだった？」

ノリオ「盗聴器は設置完了しました」

アルカ「あと、ブレインみたいな機械があっただけど、ぶちこわしてやったわ」

カービー「偵察ってなんか楽しかったねー」

ルイーダ「ご苦労様、休んでて」

ノリオ「そうさせていただきます」

アルカ「マリオーナデナデしてー♪」

マリオ「なんだ、いきなり…ま、いいけど。ナデナデ…」

アルカ「えへへ／＼／＼」

アルカ、マリオ以外全員「わーお、ラブラブしてるのに付き合っていないの!?!おかしくない?」

カービィ「…。な、なんか食べていい?」

ミール「カ○リーメイトあるけど、食べる?」

さらつと現実のおかしを出さないでください。

→メタい!

でも、たしかにもう18時だからお腹空かしてもおかしくないんですけどね…

ノリオ「まさか、私たちがいない間に外食しました?」

キノピオ「ああ、その通りだ。もちろん、ちゃんと持ち帰りはあるぜ」

ほう…サイ○リアですか…あ、私も現実の食べ物をつちやいましたね。↑だからメタいつて!

アルカ「明日も頑張ろう!」

全員「おーー!」

普通?の朝

side マリオ・マリオ

昨日はノリオ達が偵察の報告をしたあと、すぐ寝た。

しかし、朝起きると、俺は縄で縛られていた。なぜつて?それは…

アルカ「マリオく…だいしゆき…Zzzz…」

アルカが俺を抱き枕にしていたのだ。おそらく俺が手を出さないように縛ったのだろう。だが、手を出すのは俺じゃなくてアルカだと思っそうそ?

アルカ「ムニヤ…ん?あ、おはようマリオ」

マリオ「おはよう、アルカ。抱き枕にするのはいいが、縛るのはおかしくないか?」

アルカ「縛ったのは私じゃなくてルイーダよ、しなくても良かったのに」

マリオ「あいつか…あとでボコそうぜ」

アルカ「ボコすのはルイーダじゃなくて犯罪組織にしなさいよ」

あ、それもそうか。ま、いいや。

マリオ「取り敢えず縄解いてくれない?」

その次の瞬間、縄が解けていた。時間停止はホント便利だねー。

アルカ「うん、たしかに便利ねー」

は、？おまえさらつと人の心読んでない？心を読む能力も手に入れたの？

アルカ「いや、カンよ」

マリオ「カンかよ。まあ取り敢えず部屋出て朝飯食うか」

アルカ「そうね、行こう行こうー♪」

そう言つて、俺たちは談笑しながら飯食つた。

ー3時間後ー

ルイーダ「……おかしくない？なんでまだ起きないの？」

アド「さつき起こしたけど、口開けてきたから逃げた」

さて、問題です。誰が起きてないのでしょうか？

チクタクチクタク…

正解は…

カービィ「ムニヤムニヤ…パイウー♪Z z z…」

ズバリ、カービィである。

ノリオ「バズーカをぶっ放しますか?」

キノピオ「やめて差し上げろ」

ミール「でも、どうやって起こすの?」

クツパ「ふふふ…ワガハイに任せろ」

クツパはカービィに近付き、ささやく。

クツパ「期間限定のパン買ってきたぞ」ボソツ

次の瞬間、カービィはがばつと起きた。

カービィ「え?どこどこどこどこどこ?」

マリオ「残念だったな、そんなものはなー」

クツパ「ほれ」

リボン「ホントにあったのね…」

カービィ「んまーい！…ところで、今何時？」

マリオ「10時だ」

それを言った瞬間、カービィは青ざめた。どうした？と思つて振り向くと、アドがオーラを出してても違和感がないぐらいニツコリ怒っていた。そう、怒っていた。

アド「カーくん、昨日の約束はどうしたの？」

ルイーダ「約束？」

アルカ「私とアドちゃんと3人で買い物に行く約束よ。8時に行く予定だったの」
なるほど…見事に約束を破ったな。

カービィ「あ、アド、これには訳があつて…」

アド「訳？言ってみなさい」

カービィ「二度寝しちゃった、テヘ♪」

マリオ「おいバカ、それは訳じゃー」

アド「フフフフフフフフフフフフ…そう。それが訳ね。なら、覚悟はいい？カーくん

♪

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…

あ、終わったな、カービィ。南無南無…

カービィ「あ、いや、その…」

アド「お仕置きよ!ザ・ワールド・ドロペイン!」

バシユツ!筆がカービィの顔面にクリーンヒットした!

カービィ「ぶべらあ!」

ノリオ「明らかに…」

ミール「やりすぎね…」

アド、カービィ以外全員「南無阿弥陀仏…」

カービィ「ぼ…くは…しん…で…な…い…!」

因みに、この世界に仏教は存在しない。↑メタ!

ドンパチ①

sideマリオ・マリオ

アドがカービィをボコしたあと、俺たちは組織の人質を助けることにした。

マリオ「5人くらいで行くのが妥当じゃないか？」

ルイージ「それがいいね」

アルカ「私は確定ね」

キノピオ「あとはマリオ、ルイージ、ノリオ、リボン、おまえらがいけ」

ルイージ「了解！」

リボンは敵の拘束が得意だしな。

準備をして、俺たちは出発した。

ノリオ「移動はアイツに任せましょう」

リボン「アイツ？」

アルカ「まさか…◇？」

ノリオ「Exacty（その通り）」

マリオ「まあ、そうしないと急げないからな」

ルイージ「早速バスに……」

どんがらがっしやん!

マリオ「!?なんだなんだ!?!」

◇「フェエエエエイ!バスだぜー!のれええ!」

ルイージ「でやがった!」

ノリオ「すぐに乗りましょう!」

ガタン。：ビュウウウウウウウウウウウウ!

◇「行き先は、巨大キノコ山脈でーす!フェエエエエイ!」

◇は、一応高速道路を走っている。

時速1450 km だけどな。

アルカ「高速すぎる……音速超えてるし……」

*空中での音速は時速1193・2 km です

そんなこんなで、俺たちは目的地に着いた。

アルカ「さて……時間停止!(味方と人質以外)」

←ブウウウウン……

マリオ「よし、突入!」

ノリオ「牢屋はこの先です!」

ガタン！うわっ、すごい数だ。

アルカ「鍵はあつたわ！」

ルイージ「開けるよ！」

ガラガラガラガラ：

人質「ありがとう！」

人質「はやく逃げよう！」

だだだだだー

リボン「あとは…」シユルルルル…

リボン「この犯罪者たちを縛っておくだけね」

マリオ「縛つたあとはさっさと逃げるぞ！」

ー数分後ー

ノリオ「これで全員ですね。私たちもトンズラしましょう」

ー建物の外ー

アルカ「再生！」

→ブウウウウン…

ルイージ「あとは逃げー」

敵「させるかー！」

ピュンピュン!

俺たちは、いきなり敵に囲まれた!

マリオ「こ、ここ光線銃!」

ルイーダ「勝ち目ないよー!」

アルカ「フッフ、そうかしら?」

敵「動くな、打つぞ」

ノリオ「ここじゃぶつ放せない…そこを狙われましたか…」

敵「さあ、大人しく捕まれ」

アルカ「フッフ…ハハハ! バカね、私には光線はきかないわよ!」

ドゴォ!

敵「グウツ!」

敵「女を打てええ!」

ピュンピュン!

マリオ「アルカー!」

アルカ「……………効かないわね」

よく見ると、アルカは打たれたはずなのに、傷一つ無かった。

敵「ギリギリ避けたんだろ! もっと打てー!」

ピュンピュンピュンピュン！今度は全方位から集中放火を食らった！流石にこれは
：

アルカ「……………だから、効かないって言ってるでしょ？」

ドンパチ②

sideマリオ・マリオ

アルカは、敵に集中放火された。

しかし、無傷だった。むしろさつきより元気そうだった。

アルカ「だから、効かないって言ってるでしょ？」

敵「…チツ！他のやつを狙え！」

ガチャツ！まずい！リボンが狙われた！

リボン「なめないで！」

おお、すばしっこいのを忘れてた。

アルカ「よそ見してる場合かしら？」

敵「なにい?!?いつのまに!?クツ…！」

ピュン！

ルイージ「至近距離で打たれた…」

アルカ「ふう…危なかったわね…」

吸収！」ギユルルルル！」

アルカの両手からうずまきみたいなものが出現した！

ノリオ「…なるほど、ここで使うとは」

マリオ「おまえ、知ってたのか？」

ノリオ「はい、特訓に付き合ってたので」

アルカ「半年前に作った技よ。これで私にエネルギー攻撃は一切きかないわ」

ルイーザ「アルカすげー」

うん、さすがアルカだ。能力がチートレベル。

天の声「まあ、この先もっとチートな奴が出てくるがな」

へえ、それは楽しみだ。

敵「かまうな、そのオツサンを打てー！」

マリオ「ほう、オレを狙うんだな？ Bダツシユ！」
ダダダー

マリオ「てやあ！」

敵の顔面にパンチ！ドゴオ！

敵「グフウツ！」バタン

アルカ「クールダウン終了！時間停止！」

←ブウウウウン：

タイミングよくね？

リボン「敵を縛ってはやく逃げましょ！」

ルイーダ「アルカ大活躍だったね」

アルカ「えへへ」

その後、俺たちはまた◇のバスに乗って帰った。

ー秘密基地ー

マリオ「ただいもー」

カービー「おかかえりー」

キノピオ「うまくいったか？」

アルカ「うん、途中でドンパチだったけどね。新技を使って勝ったわよ！」

クツパ「新技？みせてみる」

アルカ「吸収！」ギョルルルル！

ルイージ「エネルギー攻撃は一切きかなくなるらしいよ」

アド「さすがアルちゃん！」

ノリオ「ところで、朝からジーノさんがいないんですが、どうしたんですか？」

キノピオ「警察のところに行って交渉してる」

ミール「兄さんがいることは隠してるけどね」

ピーチ「とにかく、お疲れ様。ご飯できたわよ」

マリオ「さて、食べるか！」

side???

??「やめてくれ…オレはもう悪さはしたくないんだ…」

敵「ダメだ、おまえの力で国を乗っ取るからな」

オレの…力で…？

とにかく、大変なことになる前に逃げないと…

敵「逃がすでも思ったか？」

ガシイッ!

??? 「くそっ 離せ! オレは更生したいんだ!」

敵 「残念だったな、更生は地獄でしろ」

意識がだんだん薄れていく…

助けてくれ…

…ル…お姉……ん…

キヤラ壊れてきてない？

side マリオ・マリオ

数時間後、ジーノは帰ってきた。

マリオ「で、どうだった？」

ジーノ「無事に交渉成立したよ、どうやらロボたちが一緒に突入するらしい」

ルイージ「ノリオのことは言っていないよね？」

ジーノ「もちろん、仲間を売るはずがないだろ？」

アルカ「とにかく、お疲れ様。今日は休んでて」

ジーノは自分の部屋に戻っていった。

ノリオ「あ、そういうえば、マリオさん達は仕事をどうするんですか？」

マリオ「大丈夫、1週間ほど休暇を取った」

カービィ「それなら心配ないねー」

アド「あ、カーくん、自分のことを心配したほうがいいと思うよ？ちゃんとした罰を
与えてないから♪」

カービィ「……は、はい……」

なんかさ、最近俺たちのキャラ壊れてね？

アルカがチートレベルに強くなったり、カービイがギャグキャラになったり、アドが根に持つタイプになったり…

色々ありすぎるから、とりあえず

それはさておき

俺たちはそのあと、ちよつと会議をしてから、個人の作業をすることにした。

オレの作業はって？

それは…

アルカ「……………／／／」じー

マリオ「いやいや、顔近くね？しかも赤いし。おまえ最近めっちゃ好き好きアピールしてくるよな。別にいいけど」

アルカ「べ、別にいいなら指摘しなくても良かったじゃない！もう、照れる／／／／」
マリオ「褒めてないんだが？」

アルカ「／／／／／／／／／／」じー

マリオ「ほんとに、何がしたいんだおまえ」

アルカ「じーっとマリオを見つめていたい」

マリオ「なにそれキモっ」

アルカ「アンタに言われたくないわよ」

マリオ「グハッ！」

アルカの口撃！効果はばつぐんだ！

マリオはショックで倒れた！

バタン。

アルカ「え、そんなので傷ついたの？メンタルそんなに弱かったっけ？」

マリオ「オレハキモイオレハキモイオレハキモイ…」

アルカ「あ、戻ってきてマリオー！」 チュツ♪

マリオ「……ハッ！オレはなにを？」

アルカ「特になにもしてないわよ？／／／／」

？なんかあったような……まあいいや。てか、こいつずっと照れてね？オレまじで萌え

死にしそうなんだが…

マリオ「とりあえず、寝るか」

アルカ「寝るの？フフフ…」

マリオ「縛るぞ」

アルカ「え、なんで？」

マリオ「一緒に寝るのはいいが、襲われそうでコワイからな」

アルカ「そ、そそそんなことしないわよ、頭おかしいんじゃないの？」チツ…

マリオ「ほら、おまえ今舌打ちした。バレバレだぞ？」

アルカ「でも、マリオが襲ってきたらどうするのよ」

マリオ「オレが殺されるな、物理的にも、精神的にも、社会的にも」

アルカ「私はそんなことしないわよ？」

マリオ「アホか、他の奴らがだ。…喋るのも疲れた。もうねる」

アルカ「フフフ…おやすみ♪」

こいつ、絶対ロクなこと考えてないだろ…

作戦会議

side マリオ・マリオ

マリオ「ふあゝ」

朝になった。多分7時くらいだろう。

予想通り、アルカがオレの隣で寝てる。だが、今度は彼女が縛られている。寝る前にルイージに縛られたのか？

アルカ「うーん…ふあゝ。ん？あ、おはよー」

マリオ「おはよう、アルカ。ちよつとどいてくんない？オマエが邪魔で起きれないんだが」

アルカ「え？あ、うん。どくよー。よいしよ」

こいつ、よく縛られた状態で立てたな。ベッドのバネを利用したのか？

アルカ「その通りよ、マリオ。よくわかったわね」

マリオ「よくわかったわねはオレのセリフだ。いつからオレの心が読めるようになった」

アルカ「カンよ、カン♪」

マリオ「その答え方、めっちゃ怪しいんだが…ま、いいや。朝飯食いにいこーぜー」
アルカ「その前に、縄解いてくれる？」

マリオ「あ、そうだった。ほらよ」

オレはフアイアで縄を焼き切った。

シユルルルル…

アルカ「すごい精密動作性ね。あ、昨日ジョジョ読んでたから、つい言っちゃった。あと、人が縛られているのを火で解くって、おかしいんじゃないの？」

マリオ「ジョジョの口調になってるぞ。…さて、縄も解いたし、朝飯朝飯」

天の声「豆知識：アルカの好きなマンガはジョジョである。ちなみに好きなキャラは仗助だぞ」

いいいや、それはオマエだろ。オマエの趣味をアルカの設定にするな。↑メタい！
それはさておき

朝飯のあと、俺たちは敵の組織への突入のための作戦会議をすることにした。

キノピオ「さて、会議を始めよう。ノリオ、情報を頼む」

ノリオ「はい。見たところ全員光線銃と拳銃を所持しており、5人くらいのチームで構成されています。基地内では、武器倉庫や、クスリの原料を育てる部屋、今は空っぽの牢屋、爆破されたブレインの部屋などがありました。しかし、一部屋だけ鍵がかかって

いました。」

アルカ「幽霊の私だったらすり抜けられたけど……」

ルイーダ「過去のことは気にしない方がいいよ、アルカ」

アルカ「……そうね」

ノリオ「鍵がかかっていた部屋は、場所的に研究室かボスの部屋でしょう。鍵は南京錠ではなく電気なので、ルイーダさんがサンダーでこじ開けれます。私の話は以上です」

キノピオ「……さて、だれか提案や意見はあるか？」

しばらくの沈黙の後、口を開いたのはアルカだった。

アルカ「あるわ。警察が協力するならば、雑魚はいいとして、幹部みたいなやつがいなとは限らないわ。私が時を止めて、その間にルイーダがドアをこじ開けて、後の人たちは中に入る。そして、敵がどれくらいいるか、どういう武器を持つてるかなどを確認した後、私が時間停止を解除する。そのあと、光線銃が効かない私と弾丸が効かないクツパさんが敵に向かって突進し、一掃する。この作戦でどうかしら？」

アルカ「……すごいな。すっかりした作戦を立てている。」

俺たちの会議は続く……

作戦会議②

side マリオ・マリオ

なるほど、いいな、その作戦。

クツパ「その作戦、気に入った。だが、少し質問がある。敵の数を確認してから時間停止を解除するんじゃないやなくて、武器を奪ってから縄で縛れば済む話だろうか？」

質問に対して、アルカは答えた。

アルカ「たしかにそうね。でも、もしも縄じゃ縛れない数の敵がいたら？もしくは、縛れないぐらい大きいまたは小さい敵がいたら？そのことを踏まえると、大量に縄を持っていくという方法があるけど、荷物の多すぎは戦闘に支障をきたすわ。だから、縛るのはある程度の数の敵だけよ」

マリオ「完膚なきまでに論破した…」

ルイージ「しかもすごい簡潔にまとめてる…」

キノピオ「…よし、ならその作戦を採用しよう。アルカ、その頭脳を褒めてやる」

アルカ「えへへ」

ピーチ「あとはフォーメーションなどを決めなきやいけないわね」

ノリオ「ピーチさんは回復役なので、私たちが囲むように守りながら戦う感じですかね」

カービー「僕はその時ソードになった方が良さそうだね」

アド「私は鎧を描いて装備するから、そんなに守られなくてもいいよ」

ミール「私はバイクで突っ走って麻酔銃で銃撃するから、建物の外にいる敵を片付けるわ」

リボン「私はミールさんと一緒にバイクに乗って眠った敵を縛るわ」

ジーノ「順調だね。僕は屋根の上などから援護射撃するよ」

キノピオ「あとは俺とマリオとルイージだな。俺たちはノリオ同様ピーチを守りながら戦うぜ」

マリオ「ファイアボールを投げる練習をしておかないとな」

ルイージ「僕はルイージフラッシュで敵を一気に倒せるから大丈夫かな？」

アルカ「敵味方関係なく倒す気？」

ルイージ「最近気づいたんだけど、目をつぶってたら普通に大丈夫だった」

クツパ「もつと早く気づけよ…」

キノピオ「そういう感じで良さそうだな。よし、作戦会議終了！突入は明日だ！準備するぞ！」

全員「おー！」

こうして、俺たちの作戦会議は終わった。

一方、天界では：

side 仮面の天使

あら、なかなかいい作戦じゃない？失敗作としては上出来だったわね。フフフ…うまくいかは別だけど。

は従順な部下になってくれたし、愚かな人間どものガラクタな未来を見るだけヒマだわ。いつそのこと、私の未来でも占おうかしら？

………!?

なに…この未来？ありえないわ。絶対にありえない。

61年後にあの失敗作の転生に殺されるですって？

ふんっ、占いなんて役立たずね。もういいわ。

あら、ちょうど死にそうな人がいるわね。

人「たすけて…くれ…」

ドスッ

ガハッ！」

「痛いでしょ？ほらほら…」

4部 転生幻影 ザ・ネロイズム ラ・アンヘル 予告 完

突入準備

sideマリオ・マリオ

キノピオたちは今、武器の確認や点検、物資の準備などをしている。

俺は、アルカと特訓中だ。

マリオ「アルカ、吸取ってどういうものを吸い取るんだ？」

アルカ「エネルギー系のものよ。光線とか火とか」

マリオ「つまり俺とオマエが手合わせしたらほぼ確実に俺が負けるってことか…」

アルカ「だってそんなに強くならないと、アンタを守れないでしょ？」

マリオ「オマエは自分を守れや」

アルカ「…とにかく、そのファイアで新しい技を作ってみて！」

マリオ「新技か…うーん…」

アルカ「あ、いいこと思いついた！」

マリオ「それって大抵まともなことじゃないんだよな…」

アルカ「大丈夫！まともだから！マリオ、ファイアを拳にまとってみて」

マリオ「…こうか？」ボオオオ

アルカ「そうそう！そしてその状態で……ごそつ……ん？なんだ？鉄板？」

アルカ「この鉄板を全力で殴ってみて♪」

マリオ「フア!?俺に怪我しろと？」

アルカ「うーん……いい考えだと思っただけだなあ〜」

マリオ「……なら、アルカ、オマエが俺の帽子をかぶってそれをしてみろ」

アルカ「女に怪我させろと？……まあいいわよ」

そういつて、俺は帽子を渡した。

アルカ「あまりフアア使い慣れてないのよね……」

マリオ「はよやれや」

アルカ「フアア………てやあ！」ドゴオ!

マリオ「おお、すごい威力だな！怪力とフアアが合わさっていい感じにへこんでやがる！」

アルカ「名付けてフアアパンチかな？」

マリオ「シンプルだし、いい名前じゃね？」

アルカ「さて、これで特訓終了かな？帽子返すわよ、ほい」

パサツ ふう……具合が良くなった……

マリオ「キノピオたちを手伝うか？」

アルカ「私たちが手伝ったらかえって邪魔にならないかしら？サボる？」

マリオ「いや、サボりたいのは山々だが、さすがにダメだろ。俺たちはメシでも作ろうぜ」

アルカ「いい考えね。元気が出るような料理を作りましょ♪」

その後、俺たちはなかなか美味しい飯を作って食べて、数時間後に寝た。

ー当日ー

ハリー「よう、オマエら。雑魚倒し俺たち警察に任せろ」

マリオ「おう、任せた。オマエら、準備はいいか？」

全員「いつでもOK！」

マリオ「よし！それじゃあ：突入だ！」

ワアアアアアア！

敵「なにい!?け、警察う!?!大変だ!!」

敵「今すぐボスに連絡しろ！一大事だ！」

アルカ「組織は今日、ぶっ潰してやるわ！」

一方、その頃：

敵「ボス、大変です！警察どもが突入してきました！」

??? 「ほう、そいつらは…」

ドン!

ハリオ 「覚悟ができてるんだろっうな？」

組織潰し①

side マリオ・マリオ

アルカ「時間停止！」

←ブウウウウン…

警察「今のうちに逮捕だー！」

マリオ「鍵がかかっている部屋に行くぞ！」

しばらく進んだ後、頑丈そうなドアがあった。

ルイージ「これかな？よし！」バリバリバチバチ…

ウイーン…

ノリオ「空きましたね。敵の数は…」

クツパ「ざっと50人くらいか？」

ピーチ「あれ？あの人、マリオに似てない？」

マリオ「あ、あれは…ハリオだ！敵があいつ！」

アルカ「あいつは厄介ね…再生！」

→ブウウウウン…

敵「侵入者だ！打てえええええ！」

クツパ「銃は効かん！うおおおお！」ドガドガッ！

クツパが敵を蹴散らしていく。

見ろ！人がゴミのようだ！↑ム○カ大佐か！

敵「うわー！光線銃だ！打てー！」

アルカ「私の出番ね。吸収！」ギョルルルルル！

敵「光線銃もきかないだど!?!」

ハリオ「まで、そう焦るな。俺がやる」

敵「ボス！すみません、役に立てなくて！」

・
・
・

ハリオ「いや、相性が悪かったただけだ。あいつを準備しろ」

あいつ？誰のことだ？

ノリオ「ムキムキマン、あなたがボスなんですな」スチャ

ハリオ「俺はムキムキマンじゃなくてハリオだ。オマエらをぶつ潰してやる」パクッ

ムキムキムキッ！

アルカ「変身したわね。あなたの相手は私と」

クツパ「ワガハイだ。なめるなよ」

ハリオ「ほう…ずいぶんふざけたことを…オマエら全員でかかってきても、この俺には勝てない」

ハリオvsアルカとクツパ

マリオ「先に行くぞ！絶対に勝てよ！」

クツパ「任せろ！」

ハリオ「…ふん。先に行っても何の意味もない。勝手に逝つてろ。」

sideアルカ・パンドラ

マリオたちは、部屋の奥へと進んでいった。

私はクツパと一緒に、このムキムキマンことハリオと戦っている。

ハリオ「オラオラア！攻撃してこいよ！怖気付いたか!？」ドガッ！

クツパにストレートが入る！

クツパ「ぐうっ！クツパファイア！」ボオオオー

ハリオ「その程度か？ちよつと暑いくらいだな」

クツパ「やはり効かない…くそっ…」

ハリオ「ところで、あのガキはどこいった？」

ずっと後ろにいるわよ。

アルカ「了解。オラア！」ドガツ！

ルイージ「……!?あれって……」

……まさか、あんたが捕まってるとはね。

ラリー「た……すけ……て……くれ……俺……は……悪い……こと……を……したく……ない……んだ……」

敵「やつとききたか、オマエら。だがもう遅い！変身しろ！ラリー！」ポチツ

ギユオオオオオオオオ！

アルカ「ラリー！」

ラリー「ぐあああああ！助けてくれー！……お姉……ちや……ん……」

お姉ちゃん？……ふっ、反省しようね。

アルカ「ラリー、アンタを絶対に助けてやるわ！」

組織潰し②

side マリオ・マリオ

ラリー「ぐおおおおおおおおオオオオオオオオオオ！」

マリオ「何だ何だ!? 巨大化しやがった！」

ルイージ「反省している人に何てマネを！」

アルカ「ラリー、絶対に助けてやるわ！」

ラリー「ボオオオ！」

巨大なラリーだし、ギガラリーと名付けよう。

ギガラリーは、口から火を出してきた。

アルカ「問題ないわ! 吸収!」ギョルルルル!

ノリオ「目を覚ましてください!」ドガン!

ラリー「ぐおっ…ぐごお!」フウウウウ…

アルカに大きな拳が降りかかる。

マリオ「危な…あれ?」

時を止めたのか。まあ、当たらなかつたしいいけど。

ラリー「……ぐごっ!？」

アルカ「ふふっ、気づかれた？私はここよ」

アルカはなんと、ギガラリーの肩に乗っていた！

どうやってそこまでいったの、あいつ？

アルカ「さて…暴走した弟にはちゃんとしたお仕置きがあるわね。」コキコキ…

あ、これはまさか…

アルカ「目え覚ませえ！ゴラア！」

パシイイイイイイイイン！

アルカはギガラリーに向かって強烈なビンタをかました！

めっちゃすごい音がした。絶対今の全力だよね？

ラリー「ぐ…ご…お…」シユウウウウ…

敵「な!?!戻っただど!？」

クツパ「モブは黙ってる！」ドガッ!

敵「グフウ！」バタン…チーン♪

モブ…物理的にも精神的にも再起不能

ラリー「……あ…れ?俺は…何を…?」

アルカ「……ラリー…よかったあ！」ダキッ

アルカはラリーに抱きついた。感動の再会か？

俺は見守ろう。

ラリー「お姉…ちゃん？俺…犯罪者に無理矢理連れていかれて…もしかして…助けてくれた？」

アルカ「その通りよ。アンタは私の弟なんだから。当たり前でしょ？」

ラリー「ううっ…お姉ちゃん！ありがとう！うわああああああん！」

アルカ「もう大丈夫よ、ラリー」

ラリー「お姉ちゃん…ごめんね…2年前に逆恨みして…」

アルカ「そんなこと、どうでもいいわよ。アンタが反省してるんだから、許すわよ」

ラリー「……お姉ちゃんは…優しいね…どこが失敗かがわからない……」

アルカ「あなたの”元”母親のことはもう忘れなさい。……ラリー、約束して。二

度と悪いことはしないって」

ラリー「…うん。約束するよ。悪いことはしないし、したくない。俺は、お姉ちゃん

を助きたい！」

アルカ「ふふっ、いい子でよろしい！」なでなで

ラリー「お姉ちゃん……」

マリオ「多分、かわいい弟が欲しかったんだろうな…」

ルイージ「そうだろうね…」

その後しばらく、ラリーはアルカを抱きしめていた。

最後っごっこ♪

side マリオ・マリオ

組織を潰した後、俺たちはテレビでニュースをみていた。

「数日前の大量脱獄は、”裏番”と名乗る者とその仲間たちにより、全員逮捕されました。現在首謀者のハリオ容疑者の裁判中です。続きましては……」

マリオ「とりあえず、これでよかったな」

ルイーダ「ラリーは釈放されて、パンドラ家に引き取られたんだっけ？」

アルカ「そうよ。ラリーったら、めっちゃ甘えてくるのよ。相当寂しかったのね」

マリオ「そりゃ、4歳で刑務所行きで、2年もそこにいたんだからな。それと、優しい姉がいて嬉しかったんだろ」

アルカ「ふふっ、アンタはそのうち義兄になるわよ♪」ボソツ

ルイーダ「ん？アルカ、なんか言った？」

アルカ「なんでもない♪」

マリオ「ま、いいや。一応1週間休暇とったし、ゆつくりするか」

ルイーダ「あ……アルカ、学校は？」

アルカ「今日まで学校閉鎖よ。だからここにいるのよ。私は学校をサボるようなやつじゃないでしょ？」

マリオ「それもそうか。さて……」スクツ

俺は立ち、ガッツポーズをする。

マリオ「しばらく平和を楽しむとするか！」

アルカ「そうね！」

その後、警察署では……

ハリオ「ふざけんな！きのこ王国を乗っ取ってやる！」

ハリー「いや、オマエはこのまま死刑だ。執行人」

アルカ「……………」

ハリー「いいのか？オマエがやって」

アルカ「それでいい……なんせ私は裏番だから。こいつを裁けるのは私だけよ」

ハリオ「ハッ！オマエのようなガキが俺を殺す!?できるわけねーだろ!!」

アルカ「ダメレ……………」グシュツッ!

ハリオは断末魔の声を上げて死んだ。

アルカ「……………」ハリー、後始末をお願いするわ」

ハリー「ああ、任せろ」

アルカはその場を去り、独り言をつぶやいた。

アルカ「私はクズを取り締まる裏番……」

それぞれのその後

マリオ…元の生活に戻る

ルイーダ…以下同文

アルカ…裏番としてクズどもを裁く

ピーチ…元の生活に戻る

ノリオ…少し年数が減らされる

キノピオ…ランクが団長になる

ミール…警察になる

ジーノ…弓道の大会で優勝する

アド…有名画家になる

カービィ…ぐうたら生活

クツパ…ちよつと旅に出た

リボン…相変わらず漫画かいてる

ラリー…アルカたちに引き取られ、生活する

ハリオ…死亡

ハリー……ランクが側近になる

鳴花??? ……死亡、
になる

鳴花?? ……死亡

?????
……不明

一年後

洗脳メガネ、再び

怪盗により、洗脳メガネが盗まれた！しかも、怪盗は透明マントを持っている！時間
停止 vs 透明人間、どちらが勝つのか!?

じけーれつは続く……

第3章 洗脳メガネ、再び

洗脳メガネが盗まれた!?

side マリオ・マリオ

あれから一年が経った。

アルカは大学生になり、相変わらず文武両道で成績がいい。

今は夏休みで、俺たちは家でゆっくりしていた。

マリオ「ひまですな〜」

ルイージ「そうですね〜」

アルカ「ガリ〇リ君買ってきますな〜」

カービィ「いつてらっしやいですな〜」

アルカ「いつてき〜」どゴツ!

キノピオ「オマエら、大変だ!!」

マリオ「どうした、そんなに慌てて」

キノピオ「盗まれたんだ!」

ルイージ「何が?」

キノピオ「洗脳メガネが盗まれたんだ！」

アルカ「ふーん……………え？」

全員「えええええええ！」

カービィ「ボクがかけておかしくなったやつでしょ、それ！誰に、いつ、どうやって盗まれたの!?!」

キノピオ「すまない、落ち着け。昨日の夜中に、危険物保管倉庫から盗まれた。しかも…」

マリオ「しかも？」

キノピオ「信じられないかもしれないが、犯人は透明人間だったんだ！幽霊じゃなくて、透明人間だ！」

ルイージ「と、とと透明人間!?!」

アルカ「肝心の犯人は誰なの？」

キノピオ「犯人はこんな紙を置いていった」パサツ

「メガネはいただいた。次は開けてはいけけない箱をいただこう。さらばだ。

オードロボー」

カービィ「オードロボー？だれそれ？」

アルカ「そこそこ有名な怪盗よ。これは私の裏番としての仕事になるわね。しかも、

次に盗むのが私のオルゴール箱なんてね：私は生きてるし、何に使うのかしら？」

マリオ「開けたら消えることだけを知ってるんじゃないやね？ものを盗んで、邪魔者は消す
みたいな」

ルイーダ「それが妥当だね。でも、いつ来るかがわからないよ？」

キノピオ「いや、そこは大丈夫だ。オードロボーはなにかを盗むと書いた1週間後の
夜中に盗む。待ち伏せすれば問題ないだろう」

アルカ「透明人間 v s 時間停止ね。望むところだわ」

カービィ「今日はアルカの家で泊まらない？一応偵察しにくるかもしれないし」

マリオ「そうだな。アルカ、それでいいか？」

アルカ「構わないわよ。むしろ大歓迎だわ♪」

ルイーダ「(あ、こりや兄さん抱き枕にされるな...)」

カービィ「そうと決まったら、準備しよう！」

その後、刑務所では：

キノピオ「なんか用でも？」

キノピオ「ああ、大アリだ。オマエのメガネが盗まれた」

キノピオ「え!?!どうやって!?!」

キノピオ「怪盗によって盗まれた。そこで、頼みがある」

キノピコ「頼み？何かしら？」

キノピオ「犯人を捕まえるのに協力してくれ。場合によればその場で釈放もする。どうだ、乗るか？」

キノピコはしばらく考えたあと、頷いた。

キノピコ「……いいわ。乗ってやるわよ。おじいちゃんのを悪いことに使わせて欲しくないわ」

早速遭遇

side マリオ・マリオ

オードロポーの次の狙いがアルカのオルゴール箱だと知った俺たちは、今夜からしばらくはアルカの家に泊まることになった。俺以外全員客部屋で寝るんだが、何故か俺だけアルカと同じ部屋で寝ることになった。こいつ、いろんな意味で俺を殺す気か？

アルカ「いや、殺す気は無いわよ」

マリオ「また心を読んだのか。本当にカンか？それ」

アルカ「本当カンよ。あと、早く寝ましょ」

マリオ「いや、一応夜中まで起きておこう。特にオマエは絶対起きておけ。いつ来てもおかしく無いんだからな」

アルカ「はいはい。でもその時まで暇ね。マリオ、面白い話して」

マリオ「おーもーしーろーいー…と言っても通用しないか。うーん…」

アルカ「別に無理矢理考えなくてもいいわよ。私が話すわ」

マリオ「何を話すんだ？」

アルカ「私の高校時代の生活よ」

マリオ「…まあ、確かに、オマエそんなに話してないからな…」

それからしばらく、アルカは高校時代の生活を話した。色々あつんだな、と改めて実感した。どうやら何回か裏番だということがバレそうになつたらしい。俺もその時はヒヤヒヤしてたな…ルイージのつつさのカバーでギリギリバレなかつたよな、確か。

アルカ「あら、話してたらもうこんな23時半ね。そろそろ気を引き締めた方がいいわね、マリオ」

マリオ「そうだな。罨を張って、寝てるフリをしよう」

すぐに罨を張って、俺たちは寝たふりをして待ち伏せする。どんな罨かって？それはお楽しみだ。

―数分後―

ガタツ…ガシャン！…コトツ…コトツ…

案の定、誰かが窓から入ってきた。暗いから人影しか見えないが、確かにいる。犯人はゆつくりとオルゴール箱に近づいて、さっと取ろうとする。しかし…

ピカア！

罨が発動する！

罨は、オルゴール箱の下にめつちや明るい電球を隠し、とつたらつくようにしたものだ！

犯人は直接光を見てしまったのか、フラフラしている。今だ、アルカ!

アルカはうなづいて、

アルカ「マリオ以外時間停止!」

←ブウウウウン:

マリオ「さて、犯人は:!?」

アルカ「こいつは:」

マリオ「大家じゃねーか!しかもメガネをかけてる:また第1被害者になりやがって

:」

アルカ「どうする?メガネをとって事情聴取する?」

マリオ「ああ、それがいい。あと、」バリーン!ポオオオ!

マリオ「言い忘れていたが、KPのインシヤルがないメガネは砕いてから燃やせ。被

害者を増やさないように」

アルカ「さて、と。再生!」

→ブウウウウン:

大家「:…あれ?ココドコだ?」

さて、事情聴取するか。

事情聴取

side マリオ・マリオ

ドタドタドタ!

うるさいから駆けつけてきたのか、ルイージたちが部屋に入ってきた。

ルイージ「兄さん! どうした:!?」

キノピオ「こいつは大家!? まさか: 洗脳されたのか!」

マリオ「大家さん、メガネをかける前なにしてたんすか?」

大家「うーん: たしか俺はメガネをコレクションを眺めて、一個ずつかけてたら、いきなり意識が飛んだんだ。そして目が覚めたらここにいた」

アルカ「メガネをそこに置いた覚えはありますか?」

大家「ないな。誰かが置いていったのか?」

キノピオ「: : : : 事情はわかった。ルイージ、大家さんを帰してやれ」

ルイージ「了解!」

大家「すまん」スタスタ:

カービィ「でも、どうやってそこに置かれたのかな?」

マリオ「オードロボーがこつそりそこに置いたんだろ。大家さんメガネを大量に持っているし、バレにくいと思っただんじやね？」

アルカ「そして結果的にうまくいったと……今回の相手は手強いわね。気を引き締めましょ」

キノピオ「そうだな。俺は一旦警察署で報告する。じゃあな」ガチャ：

マリオ「うーん……俺らはどうする？オルゴール箱を隠すか？」

アルカ「いや、隠さずに置いときましょ。そのうち犯人が来るだろうから。今みたい」ガシツ！

モブ「なににい!? バレただと!? 俺は影が薄いのに!？」

カービィ「堂々が入ってるからバレバレだよ。メガネをぼいっと」ポイツ！

アルカ「そして確認してグシャツと」グシャツ！

マリオ「最後にボオオオっと」ボオオオ！

モブ「……あれ？ ミーは何しにこの部屋へ？」

天の声「ユーは何しにニツポンへ？をマネするな！」

→メタイ！この世界にニツポンはない！

なんか変な声が聞こえた気がするが、無視しよう。

モブ「というか、ここはどー」シユツ！

アルカ「ふうく、ダツシユで家に帰したわ」

カービィ「なんで家がわかつたの？」

アルカ「あの人たまたま手紙を持ってたのよ」

マリオ「持つてなかつたら、どこに連れて行くつもりだったんだ？」

アルカ「交番」

カービィ「落し物じゃないよ……」

アルカ「まあ、落し物じゃなくて落し者ね♪」

マリオ「ナイスダジャレ！」

ガチャツ！

ルイーダ「ただいもー」

・
・
・

カービィ「おおかえりー」

アルカ「ルイーダ、おつかれ。キノピオは？」

ルイーダ「もう帰ったよ。疲れてるからね」

マリオ「俺たちも寝るか！」

アルカ「そうね♪」

sideオードロボ―

ちえつ！メガネを2個も割られちまった！……ま、工場があるし、いいか。あとは作戦だな。まさかあのオルゴール箱に罠を張られるとはな…頭を使って考えるか…

とる人質をまちがえた

side マリオ・マリオ

オードロボーがオルゴール箱を盗もうとしてから数日後。

俺とルイージは外食から帰っていた。

マリオ「いや〜うまかったな〜」

ルイージ「3年前の僕たちはこんなことできないよね〜」

マリオ「働いて正解だったわ〜案外楽だし」

雑談をしながら歩いていると、突然10人ぐらいに囲まれた。しかも、全員メガネをかけてる。

敵「よう、オッサンども。数日前はよくも邪魔してくれたな!」

マリオ「よくこんな被害者が出たもんだ!」

ルイージ「どうやって全員メガネをかけたんだろ! 気になる!」

敵「ごちゃごちゃうるせえ! おまえら、かかれえ!」

敵「うえーい!」ブンブンツ!

敵はこちらに向かってケツバットを振り回してくる。

マリオ「あらよつと」ガシッ

しかし、それを簡単につかむ。敵は動揺している。

敵「なにい!? 離せゴラア！」

ルイージ「離すわけないでしょ…サンダー！」ビリイ!

敵全員「ギヤアアアアア！」ボタン

マリオ「相手が悪かったな。さて…」ボオオオ!

ルイージ「さつさと後始末をしよう」

と、ルイージが言った次の瞬間、いつのまにか後ろに敵がいた。しかも、少女を人質にしている。ああ、お前か…

敵「まってえ! こいつがどうなってもいいのか!？」

俺は焦ってるフリをする。

マリオ「なに!? まてえ! 汚いマネを！」

敵「なら、大人しくメガネをよこせ」

ルイージ「……………」グッ

少女「……………」グッ

合図はできたな、よし。

マリオ「…断る！」

敵「ああ!?!ならこいつを撃つぞ!」ガチッ!
マリオ「やってみろ。やったら……」

お前が人質に取ってる”裏番”アルカが許さない!

敵「はあ!?!なに言ってるんだ!?!お前!このガキがあつ裏番だとお!?!バカ言ってるじゃガ
フウ!」

アルカ「あらあら、いつクズに喋る権利を与えたの?オードロボーさん?」

敵「う……ぐう……まさか本当に裏番とは……まあいい。ちようどいい相手ができたつて
とこかな。また会おう、裏番!」

アルカ「バリツ…はあ…バレてしまったわね…」

マリオ「余計なことを言ってしまったな、すまん」

アルカ「いいわよ、別に。私の正体が公に晒されなければ。あとで頭撫でてね♪」

ルイージ「でもその前に…」バリツ

ルイージ「兄さんこれ全部燃やしてくれる？」

マリオ「了解！」ボオオオ

アルカ「これで一件落着ね。もつと敵がいるかもしれないから、速く行きましょ。時

間停止！」

←ブウウウン…

ルイージ「さて、帰ろ帰ろ」スタスタ

sideオードロボー

ふふふ…なめんなよ、裏番。手駒ならいくらでもいる。さて、こいつを操作しよう

……………!?

何!?!あの3人、突然消えたぞ!?!瞬間移動でもできるのか!?!

……………俺も油断はできないな。

3度目のエンカウント

sideマリオ・マリオ

今日もアルカの家で泊まることになった。

そして今、俺たちはオードロボー対応のための作戦会議をしている。

マリオ「同じ罠が二度も通用するはずがないからな…」

ルイーダ「サンダーでトラップでも作る？」

アルカ「私たちも引つかかるわよ…」

カービィ「あ、いいこと思いついた！」

カービィ以外全員「絶対いいことじゃねえ…」

カービィ「まあ、そんなこと言わずに聞いてよ」

マリオ「とりあえず言ってみろ」

カービィ「ブザーを設置するのは？」

カービィ以外全員「ソレだ!!!」

ルイーダ「意外といい提案だった…」

アルカ「おかしいわね、ポケ役のカービィが真面目なことを言うなんて。明日は悪魔

でも降ってくるのかしら？」

カービィ「ひどいよー。あと、なんで悪魔？」

アルカ「いや、なんとなく」

一方、そのころ…

「ひつくし！……だれか僕のこと噂してるのかな？」

「あれ、??君、どうしたの？」

「いや、何でもないよ」

戻る…

天の声「なんか変な会話を聞いたような…」

お前が話しかけてくるのも充分変だぞ。

マリオ「ブザーって、どこに設置するんだ？」

ルイージ「ほとんどのやつは分かりにくいところに設置して、何個か堂々と部屋のど

真ん中に置いてみようよ」

アルカ「いい考えね、不採用」

俺の迷言を言うな。

カービィ「え、なんで？」

アルカ「私たちの目的は敵、つまりオードロボーをおびき寄せることよ。堂々とブ

ザーを置いて警戒されて来るのをやめたら、元も子もないわ」

マリオ「確かにそうだな…じゃあどこに置けばいいんだ？」

アルカ「そこは私に任せて」

ルイージ「うん、任せよう」

カービィ「否定したのはアルカだしね」

アルカ「なんか地味にプレッシャーが……」

マリオ「いつも堂堂々としているお前が言うな」

こう言う感じで作戦会議が終わり、俺たちは色々ブザーをアルカが指定した位置に設置した。今はアルカとゲームしてる。何をつて？マイクラだ。

マリオ「あ、またゾンビに殺された！くそお……」

アルカ「あら、弱いわね。はい、落し物」

マリオ「あざます」

しばらく遊んでいると……

ピンポン

アルカ「？私なんか頼んだかしら？」

マリオ「俺が行く」スタスタ……

マリオ「はい……ガチャツ……あれ？」

ドアを開けたが、そこには誰もいなかった。

…やはりな、そうきたか。だが残念だったな、あつちには裏番がいるぞ。

「ギヤアアアアア！」

オツサンの悲鳴が聞こえた。作戦成功だ。

俺は急いで部屋に戻る。

ガチャッ

アルカ「敵は縛ったわ。さて…」ギロリ

尋問タイムだ。

透明人間!?

side マリオ・マリオ

さて、尋問タイムだ。

人「う…あれ?ここはどこだ?」

マリオ「気がついたか。ちよつと質問がある」

アルカ「メガネをかける前、アンタは何してたの?」

人「え、いきなりそんな質問されても…」

アルカ「答えなさい」ギロリ!

人「ひ、ひいひい!た、確か給料が高いバイトに雇われて、待ち合わせ場所に行つたら後ろからメガネをかけさせられて…そこから記憶がありません…」

マリオ「高いバイト?場所は覚えてるか?」

人「えつと…ちゃんとした場所は覚えてないんですけど、やけにニンニク臭いのは覚えてます」

アルカ「ニンニク臭い?……ワリオの家ね…」

マリオ「お前は帰っていいぞ」

人「あ、はい。失礼しました」スタスタ：

アルカ「……ところで、ルイージたちはなんで来ないの？」

マリオ「俺が確認してくる」

アルカ「うん、お願い」

ガチャツ、スタスタ：

コンコン。

返答なし。おかしいな：

マリオ「入るぞ：!？」

ドアを開けると、ルイージとカービィは気絶していた。しかも、何度も殴られた跡がある。

誰が：誰がコイツらをこんな目に：許さん：

「どうだ、いい眺めだろう」

マリオ「!? 誰だ! どこにいる！」

オードロボー「俺だ。お前らが探しているオードロボーだ。今回は俺が直々にオルゴール箱をいただきに来た」

マリオ「そんなことさせ：ぐあつ！」

なんだ!?! いきなり殴られたぞ!?

…コイツ、透明人間か！

マリオ「アルカ！オードロボーが来たぞ、お前の出番だ……がふっ！」

オードロボー「ダメレ、カス！」

ぐうう…コイツ、容赦がねえ…

オードロボー「さて、トドメだ…何!?消えた!？」

ふう、もつと早く時を止めろよ…

sideアルカ・パンドラ

やつと私の出番ね。

アルカ「マリオ、あとは任せて。さて、オードロボー、覚悟はいい？」

オードロボー「ほうほう、裏番が自ら現れるとは…だが、俺は透明人間だ！居場所は

悟れねーよ！」

アルカ「……透明人間だから何？私の前ではそんな能力無駄よ」

オードロボー「ヘッ！言ったなあ！オラア！」ドガッ！

なに、今の。弱くない？

アルカ「あら、マツサージをしてるつもり？もつと強くしなさいよ」

オードロボー「!?コイツ、ビクともしねえ!…なら、これはどうだ！」バンツ！

今度は銃ね。最初からすればよかったのに。

アルカ「よっ」パシッ

オードロボー「フア!?!銃弾をつかんだだど!?!」

アルカ「さて、勘弁なさい。降参したら、ボコすだけで済ませるから、ね?」

オードロボー「ボコす前提かよ!却下だ!」

はあ…ちよつと長くなりそうね。

偽物!?

side アルカ・パンドラ

オードロボーは高速で移動しながら銃を撃ってくる。

それを私は時を止めて回避する

オードロボー「くそっ！お前はどうかやって全部避けてんだ!?この、このお！」

アルカ「透明人間なんで無駄って言ったじゃない？そういうことよ」

オードロボー「!……なら……!」

シーン……

コイツ、今度は静かに近づいてくる気ね。

ま、対処はしてるけど。

コッソ

ほらね。

アルカ「そこね！」ドゴツ!

オードロボー「ぐうっ！コノヤロー！」バンバンッ!

アルカ「時間停止！」

←ブウウウウン…

私は冷静に弾道をオードロボーがいると思われる位置に向ける。

アルカ「よし。再生！」

→ブウウウウン…

ドスウツ!

オードロボー「くそつ、足が!ぐううう!」

アルカ「さて、観念しなさい。透明コートを脱いで」

オードロボー「する…わけ…ね…だろ…!」

アルカ「ま、いいわ。縛られなさい」

ギユウウウウ!

オードロボー「クソオ、これじゃ逃げれねえ!」

アルカ「さて、コートを…!」

しかし、そこにいたのは、オードロボー本人ではなく、スピーカーを持った洗脳されたひとだった!

オードロボー「ふふふ…ははははは!俺は最初からここにいねーよ!オルゴール箱は頂けなかったが、次こそは成功する!さらばだ!」ジジツ…

アルカ「野郎…:…なかなか頭が切れる奴ね…あと、この透明コート、あとでマリオに

よ
」

マリオ「そうだな。今日はもう寝よう。おやすみー。……………くかー……」

ルイーダ「寝るのはやっ！」

カービィ「僕たちも寝よう」

アルカ「そうね」

ルイーダ「ふわあ……」

私はマリオを抱き枕にして寝た。

くっしやああああい！

side マリオ・マリオ

次の日…

マリオ「さて、ワリオの家に行くか」

アルカ「どこにあったっけ？」

ルイーダ「確か、公園の近くにあったような…」

カービィ「レッツゴー♪」

ー移動中ー

マリオ「確かこの公園を曲がって…」

アルカ「アレよね？」

もわーん（ニンニク臭）

ルイーダ「うわっ！くっしやああああい！」

カービィ「鼻が曲がるうう！」

アルカ「みんな、これをつけて！」カチャツ！

マリオ「いつのまにガスマスクを持ってきたんだ？」

アルカ「一応持ってきたの。これがなかったらわたし達は気絶してたわね」
ルイーダ「すうー、はぁー」

カービー「ちゃんと息ができる…ありがとう、アルカ」

アルカ「どういたしまして。入るわよ…ん？」

マリオ「なんだ、この張り紙？」

「しばらくお宝探しの旅に出ます。ワリオ」

ルイーダ「留守なのか…」

カービー「オードロボーはこの家を拠点にしてるのかな？」

マリオ「ワリオがしばらく帰ってきてなかったらありえるな」

アルカ「しかも臭いから、誰も近づかないし。かなりいい隠れ家になるわね」

マリオ「鍵がかかっているな…ん？窓が割れてる。オードロボーはここから侵入したのか？」

アルカ「中に人がいるか確認するわ。………誰もいないわ、出かけてるのかしら？」

ルイーダ「とりあえず入ろう」

ワリオの家の中は、まるで台風が過ぎたように散らかっていた。

カービー「どうやったらこんなに散らかるんだろう。キノコ町七不思議に入りそうだね」

マリオ「いや、家の七不思議に入りそう」

アルカ「そんなこと今はどうでもいいから、調査するわよ」

ルイーダ「ゴソゴソ………ん？これは…」

カービー「デデデのハンマー？なんでここに？」

マリオ「オードロボーが盗んできたんだろ」

アルカ「ありえるわね。他にあるかしら？」

ルイーダ「……今気づいたんだけど、ぼくたち不法侵入だよな？」

カービー「………あ。」

アルカ「大丈夫よ、これは調査だから！（汗）」

マリオ「それは流石に無理があるだろ」

ルイーダ「じゃあはやく調査してトンスラしよう！」

カービー「うん、そうしよう」

side オードロボー

今日はブルームプラネット国にいる。

俺の隠れ家バレてなきやいいが…（もう既にバレています）

裏番が相手だから、準備しなきやいけねー。だからここで

色々盗むことにした。裏番の能力は瞬間移動じゃなさそうだしな…うーん…!!まさ

か、時間停止か!?

それはまずい! 隙を突かれたらすぐやられるじゃねーか!
あのマントも取られたし…どうすればいいんだ…クソ…

ただいま調査中

side マリオ・マリオ

マリオ「ゴソゴソ…いろんなものがあるな…」

アルカ「でも全部ボロボロね。要らない物は捨てたのかしら？」

ルイーダ「それとも需要が無かったとか？」

カービィ「ありえるね…ん？これは？」

カービィはゴミの中から白い玉を見つけた。

ん？白い玉？なんか見覚えが…まさか!?

マリオ「おい、それって犯罪ボールじゃないか!？」

アルカ「何ですって!?!今すぐ壊すわよ!」ドゴォ!

バリイーン!ボオオオ!

犯罪ボールは跡形もなく消え去った。

ルイーダ「あんな危険物を散らかしてるなんて、オードロボーは頭のネジが飛んでる

よ、きつと」

カービィ「そのセリフ、別のところで聞いたような…」

どこだったっけな…

天の声「呪いの帽子で言ったぞ。どこで言ったか探してみてね☆」

おい、原作を宣伝するな！

…とりあえず、

閑話休題。

マリオ「とにかく、気をつけろ。とんでもない危険物が混じってるかもしれない」

アルカ「そうね、気をつけましょ」

その後もうしばらくワリオの家を調査した。

マリオ「そろそろ帰ろうぜ。オードロポーが帰ってきそうな感じがする」

アルカ「私も同感よ。時間停止！」

←ブウウウウン…

ルイーダ「窓をよいしょと…」

カービィ「帰ろ帰ろくお家に帰ろうくでんでんでんぐり返しでバイバイバイ♪」

マリオ「幼稚園児か！」

アルカ「カービィ、幼児退行した？」

ルイーダ「そもそも何歳かわからないんだけどね」

カービィ「ボクはこう見えてもマリオ達と同年だよ！」

マリオ「へえー、以外」

アルカ「肉体年齢と精神年齢が釣り合っていないわね。いい精神科を紹介するわよ？」
カービィ「子供の歌を歌っただけで酷くない!？」

結論。カービィはイジリキャラである。

sideキノピコ

私は今、こっそり洗脳された人達を解除している。

今のところバレてないけど、気をつけないとね。

おじいちゃんのメガネをこんなことに使つて欲しくない!

だから、罪滅ぼしのためにも事件解決のために動いてる。

……しかしよくこんなに洗脳ができたわね。

メガネ工場を復活させてるし。これはキノピオに連絡ね。

プルルルル：ガチャ。

キノピオ「おう、進展あったか？」

キノピコ「ええ、オードロボーはメガネ工場を復活させてるわ。できるだけ早く潰さ

なきやいけないわ」

キノピオ「分かった。引き続き頼んだ」ガチャツ。

これで連絡は完了ね。さて、捜査の続きを…

カタカタカタカタカタカタ…カタツ。

これでまた一人解除したわ。

この作業はしばらく続きそうね。

メガネ工場

side マリオ・マリオ

マリオ「……で、明日は工場を潰して来いと」

キノピオ「ああ、行ってくれるか？」

マリオ「どうせアルカに連れて行かれるしな。行くぜ」

キノピオ「了解。任せたぞ」ピッ。

しかし、メガネ工場が復活してるとはな…

前はバズーカで製造ラインを破壊したんだっけ？

どうやってなおしたんだろうな。

そんなことを考えてると、アルカが部屋に入ってきた。

アルカ「何て言われたの？」

マリオ「明日メガネ工場を潰して来いと言われた。一応場所は覚えてるぜ」

アルカ「あのマッシュルームヘッド、自分でやりなさいよ…」

マリオ「ま、とにかく、準備しとけ」

アルカ「はい」

sideキノピオ

さて、アイツに伝えたいし、仕事に戻…

キノピオ「へつくし！…アルカにマッシュルームヘッドって言われたような…」

天の声「的確過ぎだろ！」

ま、いいか。キノピオの作業も順調に進んでいるし、今のところ問題は起きてない。

それにしても、オードロポールの透明コートを燃やしてやったのはでかい。俺が覚える限り二着しかないからな。

……。

俺も頑張るか。

sideマリオ・マリオ

ー次の日ー

カービィ「みんな準備はいいかい？」

アルカ「オツケー！」

カービィ「それじゃ、出発！」

ーバスでー日かかったところー

マリオ「ふうーついた」

ルイージ「最後ここにきたのは3年前だったよね」

アルカ「年数減らしてた時ね。懐かしいわ」

カービー「おお、武器屋がラーメン屋に変わってる。後でここで食べようよ」

マリオ「別にいいが、まずは工場を潰すぞ」

しばらく歩くと、新しく建てられたような工場があった。

メガネをかけたやつが門番になってる。

アルカ「入るわよ。時間停止！」

←ブウウウン…

止まった時の中で、俺たちは工場に入る。

中はまあまあ広いが、製造しているもの以外何の変哲も無い普通の工場だった。

ルイーダ「ところで、どうやって工場を潰すの？」

アルカ「ふふふ…大丈夫、そこはすでに手を打ってあるわ。あんた達は司令室に行きなさい」

カービー「アルカは何するんだい？」

アルカ「それはお楽しみよ♪」

うわっ、絶対口クでも無いことをするつもりだこいつ…

マリオ「…：任せたぞ、アルカ」

アルカ「ふふっ、任せなさい！」 たたた…

「司令室」

マリオ「色々機材があつて司令室らしいな」

ルイージ「えつと、この電源を切ればいいんだよね？」

カービィ「うん、多分あつてる」

マリオ「ん？自爆スイッチ？おい、なんかめつちや怪しいボタン見つけたぞ。押すか？」

ルイージ「バカなの!?!絶対押しちやダメ！」パシーン！

マリオ「ふあい：叩く必要なかっただろ：」

その後、作業を終えてアルカと集合した。

大☆爆☆☆発

side アルカ・パンドラ

マリオ達に司令室を任せただけ、遭遇した全員のメガネを取って壊した。流石の私でも普段の10倍疲れる空間でダッシュしたらちよつと疲れるわね。ま、もう疲れてないけど。

アルカ「後はマリオ達を待つだけね」

ー集合したー

マリオ「ルイージから叩かれてまだいてえよ…」

アルカ「何したの？」

ルイージ「自爆スイッチを押しそうとしてた」

マリオ「冗談だったのに…TOT」

カービィ「ところでアルカ、なんでまだ再生しないの？」

アルカ「ふふふ…それはね…」

マリオ「何だ？早く言えよ」

アルカ「この工場にいる人全員救助するからよ！」

side オードロボー

ここ数日不幸続きだ…

透明コートが一枚燃やされたり、相手が裏番で時間停止（一応予想）が使えたり、何故か次々と洗脳が解かれていたり。

そして今日、メガネ工場が爆破されたという情報が入った！嘘だと思ったが、実際に行つて確かめてみると、工場は跡形もなかった。

クソツ…俺はただ珍しいものが欲しいのに…ただでもらいたいだけなのに…何故こうなるんだ!?

…。

…。

…。

コートはもう一枚ある。

やるしかない…。

追い詰めた！

sideマリオ・マリオ

昨日メガネ工場を爆破した後、ラーメン食って家に帰ったんだが、とある理由で家に
入れない。

ここで問題だ。何で入れないと思う？

- ① 鍵を無くした
- ② 家の前に敵がいる
- ③ 用事ができた

正解は…

敵「オラオラ！出て来いや、赤い帽子をかぶったオツサン！」

敵「そろそろこじ開けるぞゴラア！」

答えは②だ。全員メガネをかけている。

マリオ「おい、お前ら。人の家の前で何してやがる」

敵「ボスからの命令だ、お前を殺す！」

アルカ「……殺す？今マリオを殺すって言ったの？」

敵「そうだ、こいつを殺すんだよ！」

ルイーダ「あ、こいつら終わったね」

カービィ「そうだね」

マリオ「アルカに殺すという言葉は禁句だぞ」

敵「禁句だからなんだ、殺すのは変わらぐホオ！」

ドッゴオン！

敵の顔面にストレートが入った！

しかし、アルカを怒らせたならこの程度じゃ終わらない。

敵「やりやがったな！」

敵「オツサンは後だ！このガキを殺れ！」

アルカ「……………」。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

アルカはブチ切れていた。完全に裏番モードになっている。コイツはもう止まらな
いぞ。

敵どもは銃を発射したり刃物を振り回したりするが、アルカはそれを返り討ちにす
る。

敵「な、何だこのガキは！」

敵「強すぎる！」

敵「おい、まさか、コイツが裏番なんじゃないのか!？」

気づくの遅くね？

敵「ひいひい！お助けをー！」

アルカ「……………洗脳されてるとはいえ、私の仲間、しかもマリオに殺害予告をす
るのは許さないは。…………ただ」

敵「ただ？」

アルカ「ただ、今オードロボーがどこにいるのかを教えてください。ボコすだけで

済ませるわ。さて、どうする?」

ボコす前提かよ。アルカらしいな。

敵「……………。わかった、教えてやる。ボスは今…

お前の背後にいる」

マリオ「何!?!」クルツ

ルイーダ「透明人間か!」

カービー「気配はしたけど気づかなかった!」

オードロボー「……………。やっと俺の出番か…」

マジでいた！

マリオ「泥棒がそんなに堂々としていいのか？」

オードロボー「俺は今透明人間だ、どうせ見えないだろ」

ルイーダ「こりや厄介な敵だね」

アルカ「透明人間だから何？私に勝てるだけでも？」

カービー「アルカ、そのセリフは負けフラグだよ」

マリオ「大丈夫だ、アルカにそんな理屈は成り立たない」

オードロボー「ハハハ、そうさ！俺は透明人間！お前らに俺は見えねえ！だから俺と戦うことはできない！これは一方的な暴力だ！フハハハハ！」

ルイーダ「ねえ君」

オードロボー「何だ、降参か？ならばオルゴール箱をよこせ」

カービー「自分の状態を何で気づかないの？」

オードロボー「何のことだ？……な!？」

アルカ「……………。捕縛完了」

オードロボーはいつのまにか、アルカに縛られていた。

フルボッコ♪

side アルカ・パンドラ

マリオ「早くコートを取って本物か見てみようぜ」

アルカ「そうね。さて…」

パスツ…

透明コートを取ると、外には仮面をつけた紫色のチビがいた。

オードロボー「クソツ！ 正体がばれちまった！」

へえ。このチビが本物？

アルカ「驚いたわ。まさか本人が来たとはね。相当追い詰められていた証拠ね」

オードロボー「フン！ 俺が負けたと思うなよ！ お前ら、かかれえー！」

敵「ボスを助けるー！」

敵「裏番を殺れー！」

ルイーダ「おっと、そうはさせないよ。サンダー！」

ビリビリッ！

ナイスよ、ルイーダ！

敵「ギヤアアアア！」

オードロボー「ああ、俺の手駒が！」

うるさい、屑。

アルカ「…だまれ」ドゴツ！

☆説明しよう！アルカは裏番モードになると、口がめっちゃ悪くなる！

オードロボー「ぐはっ！」

アルカ「それ以上喋ったらここで処刑するわよ」

オードロボー「……………。(クソオ…完全に詰んだ…一体どうすれば…)」

アルカ「さて、質問に答えなさい。洗脳メガネの本体(KP)のインシヤルがあるやつはどこにやったの?返答次第であんたは死ぬけど」

オードロボー「俺の隠れ家の地下にある。まあ、どこにあるか知らないだろうが」
「ワリオの家ね。行ってくるわ」……………なぜ分かった!?!」

アルカ「あんたの隠れ家なんで既にばれてたのよ」

私は時を止めてワリオの家に行く。

アルカ「……………。あつたわ。なんで気づかなかつたのかしら?普通にポンと置いてあるのに」

これが灯台下暗しなのね。

すぐにダツシユで戻り、再生する。

カービィ「あ、時を止めたんだね」

アルカ「そうよ。簡単なところに置いてあつたわ」

オードロボー「くっ…時を止められるのは本当だったのか!」

アルカ「まあ、知ったところでアンタはどうせ捕まるけど」

オードロボー「捕まるだど?この俺が?ふざけガフウ!」

私はオードロボーの態度にイラついたためセリフが終わる前に腹パンを入れた。仕

方ないでしょ？ウザいんだから。

アルカ「キノピオ、犯人を逮捕したわ。受け取りをお願い」

キノピオ「おう、流石だな。分かった、すぐ行く」

マリオ「ふう、やっと終わったー♪」

ルイーダ「明日からはゆっくりできるね」

アルカ「明日からはね。今日はこいつをボコボコにするわよ♪」

カービィ「…いい考えだね：僕たちの休日を邪魔したんだからね…」

マリオ「思いつきりしばかなきゃな」コキコキ…

ルイーダ「あと、永遠にトラウマを植え付けなきゃね」

バチバチ…

アルカ「あと、顔面を再起不能になきゃ♪」ゴゴゴ…

オードロボー「や、や、やめてください…もうしませんから…おねがいます…」ガ

クガクブルブル…

オードロボーは命乞いをしている。でも、

アルカ「もう遅いわよ。地獄を見なさい」

まずはカービィからね。

カービィ「吸い込み！スウウウウ…ハッ！」

ドコオ！バガア！ボガア！

オードロボー「……………」

オードロボーは意識を失い、無残な姿で倒れていた。

その数分後にキノピオがきて、やりすぎだと説教されたのは別の話よ。

最終回の前の回の次の回

side マリオ・マリオ

キノピオが駆けつけてきたときには、オードロボーがボツコボコにされており、やりすぎだと説教された。

だが、アイツは俺たちの休日を邪魔したのを知っていたため、罰は特になかった。今、俺とルイージとアルカとカービィの四人は、ニュースを観ている。

「昨晚、有名な怪盗であるオードロボー・トツテンが逮捕されました。どうやらあの”裏番”が捕まえたそうです。トツテン容疑者が盗んだものは数日前盗まれた洗脳メガネに加えほとんど見つかっており、順調に調査は進んでおります。続いては…」

マリオ「これで一件落着だな」

ルイージ「これで休日をゆっくり過ごせるね」

アルカ「ふいふ」

カービィ「アルカは大活躍だったね」

マリオ「さすが俺の妹分だ」

アルカ「いつのまに妹分になってたの……妹分じゃなくて嫁なのに……」ボソツ

ルイーダ「ん？アルカ今なんか言った？」

アルカ「な、何でもない／＼／＼／」

マリオ「何で照れてんだ？」

アルカ「何でもないっただら！／＼／＼／」

3人「??? まあいいや」

アルカ「（ふう…よかった…みんな鈍感で）」

その後約6年、平和な日常が続いた。

洗脳メガネ、再び

完

じけーれつは続く……

それからの時系列

2023 メガネ事件解決

2024 アルカが成人になる。

2025 特に何も起きてない

2026 マリオとアルカ、ルイージとデイジー、キノピオときの子ちゃんなどが

結婚する（アドは別の画家と結婚して、きのこ王国に引越してきた）

2027 6月3日 アルミ・マリオ誕生

同年 6月14日 ルイス・マリオ誕生

同年 10月10日 キノ太郎誕生

同年 12月3日 アドレーヌ誕生

2028 キノピオが刑務所の所長、ハリーが警察総監に就任する。

2029 第3章 世界がバグった！

妻のアルカ、娘のアルミと共に幸せに暮らしていたマリオ。そのときに、事件は起きた。

この世に存在してはいけない生き物「グリッチ」が、世界を滅亡の危機に直面させる

!

しかし、マリオは9年前の占いを思い出す。内容は、「2029年のどこかで世界を救って死ぬ」というものだった。

マリオは果たして世界を救えるのか!?そして、英雄として死ぬのか!?

豆知識集

◇は、カーレーサーになった。いつも優勝している。

コメント フェエエエイ!

アルカは保育士として働いており、警察は副業である。

コメント 副業だけで1000万稼いでます。

マリオは配管工のプロであり、すごい技術を持っている。

コメント 配管工にプロってあんの!?

マリオやルイージの変身をスーパージ化といい、4種類ある。

コメント 後の3種類は記憶が消えないという…

第4章 世界がバグった！

平和の崩壊

side マリオ・マリオ

……。

……。

……。

あれから6年経った。

俺とアルカが結婚したり、アルミが生まれたり、ハリーが警察総監に就任したりと、いろんなことが起きた。

ピリリリリリリ…

朝の7時のアラームが鳴る。

マリオ「ふあゝ」

大きなあくびをする。さて、起きるか。

そう思つてると…

ガチャッ。

アルカ「あら、おはよう。ご飯できてるわよ」

アルミ「おとーさん、おはよー」

妻のアルカと娘のアルミが入ってきてあいさつする。

アルミはまだ2歳だが少し喋ることができる。

見た目は母親似で、黒髪ショートで赤いパーカーを着ている。そして、かわE。

マリオ「ああ、おはよう、アルカ、アルミ」

今日も平和な1日が始まる：はずだ。

side?????

数日前：???

フウ：フウ：

ヤットチジヨウニデレタ。

サテ、ドウシヨウカ：イマズグセカイヲコワスカ？

ウン：イヤ、イマハチカラヲタメヨウ。ウン、ソウシヨウ。タノシミダ：クククク

ク：

sideアルカ・マリオ

マリオ「行ってきまーす」

アルカ「行ってらっしゃい♪」

ガチャッ。

アルカ「さて、アルミ、私は仕事に行くから、ピーチの所に行く準備して」

アルミ「うん！たのしみ！」

ふつつ、「可愛い子ね。いつも元気そうで何よりだわ♪

アルミ「おかーさん、なんかいいことあったの？」

アルカ「いや、アルミが元気そうでいいなと思ってただけよ」

アルミ「そういつてるおかーさんもげんきそうだよ！」

アルカ「そう？ありがと♪お礼としてアルミの頭を撫でてあげる♪」ナデナデ

アルミ「えへへ〜」

私はふと、こんな日常が続けばいいなと思う。

数時間後、世界の危機に直面するとも知らずに…

side マリオ・マリオ

マリオ「今日はあまり仕事がねーな〜」

俺は配管工の事務所で待機しているんだが、普段と比べて仕事が全然来ない。仕事はめんどくさいから少なくなるのは嬉しいが、なんか嫌な予感がするんだよな…

……………！

確か、9年前、デイジーに俺の未来を占ってもらった時、今年のどこかで世界を救っ

て死ぬという結果が出たな。かと言って、今はもう12月中旬だしな…アレはハズレかな？

そう思つて窓を見てみると、俺は絶句した。

なぜなら…空は…

ギユオオオオオオオオオオ…

訳の分からない謎の物質に包まれていたからだ。

ドドドドドドドドドドド

……これは、マズイぞ。

マリオ「今すぐ仲間たちに連絡だ！」

「数分後、ジーノの秘密基地にてー

マリオ「これでみんな集まったな」

ルイーダ「これはとんでもない事態だ、集まるのは当然だよ」

アルカ「アルミたちはここに置いていくわ。危険すぎるもの」

ピーチ「なら、私が彼女らを見張って置くわ」

キノピオ「空に浮かんでいる謎の物質は、ソジック国のイビト山付近から来たものだと分かった。ソジック国は魔法を使う人々が住んでることでも有名だ。相当危険なものに違いない」

ノリオ「久しぶりの大事件です、気を引き締めましょう」

全員「おお！」

こうして、俺にとっての最後の戦いが始まった。

付近を調査

現在ここにいる人は、

マリオ、アルカ、アルミ、ルイージ、キノピオ、ノリオ、ミール、クツパ、ピーチ、カービィ、アド、アドレーヌ、ジーノである。

sideマリオ・マリオ

マリオ「まずは情報収集だな」

ルイージ「そうだけど、どうやって？」

アルカ「ネットで調べたり、発生源を調査したりするのよ」

キノピオ「その通りだ。いきなりだが、数人でイビト山付近を調査してもらう」

カービィ「ワープスターを持つてる僕は確定として、あと3人かな？」

アド「私の攻撃は汎用性が高いから、私も行くわ」

クツパ「ワガハイも連れて行け」

ノリオ「後は私ですかね」

もう決まってやがる…

ミール「ネットで情報収集するのは私でいいわよ。こういうのは慣れてるし」

確か、ミールはネット監視警察だったな。こいつが妥当だな。

マリオ「アルミ、お前はここでピーチと一緒に待つとくんだぞ」

アルミ「うん！おとーさんおかーさんたち、がんばって！」

アドレーヌ「ママ、わたしは？」

アド「レーヌはここでアルミちゃんと遊んでて」

アドレーヌ「はい！」

☆説明しよう！

アドは娘のアドレーヌのことをレーヌと呼んでいる！

マリオ「ところでルイージ、ルイスはどこだ？」

ルイージ「もうすぐデイジーとここへ来るそうだよ」

キノピオ「きの子もキノ太郎とここへ来ると言ってたな」

アルカ「なら戦えない人達は安全ね。現地調査組は今すぐ出発して」

カービィ「OK！」

クツパ「行ってくるぞ！」

ノリオ「あなたたちも健闘を祈ります」

アド「レーヌを頼んだわ」

そう言つて、4人は出発した。

マリオ「残った俺たちはキノコ市辺りを調査しよう」
☆説明しよう！

9年前はキノコ町だったが、今はキノコ市である！

ちなみに人口は約150万人だ！（2029年）

ルイージ「それが一番だね」

ブルルルル！

アルカ「あら、電話だわ。はい、もしもし……はい……はい……はい、そうですが……え!?
はい、今すぐ伝えます！

……はい、失礼しました！ガチャ　みんな、大変よ！ピーチ城周辺に黒い謎の生

命体が暴れてるらしいわ。今すぐ戦闘準備よ！」

ジーノ「早速だね。僕はいつでもオーケーだよ！」

マリオ「俺も準備完了だ」

ルイージ「僕も用意できたよ」

キノピオ「俺は一応ここで残っておくぜ、お前らに任せた」

アルカ「じゃあ、行くわよ！時間停止！」

←ブウウウウン…

俺たちの周りはモノクロになって止まる。

マリオ「急ごう」

ーピーチ城付近ー

城の近くでは案の定黒い生命体があった。人型の形をしており、目と思われる位置が赤く光っている。

その生物の周りの車や塀は、ところどころ潰れたり砕けたりしていた。

マリオ「こいつ、とんでもないパワーを持つてやがる」

アルカ「ええ、でも関係ないわ。こいつはぶつ殺すだけよ」

おお、怖い怖い。裏番モードになったな。

アルカ「覚悟はできた？再生！」

→ブウウウン…

世界は色を取り戻す。

…戦闘開始だ。

黒い生命体

side マリオ・マリオ

戦闘開始だ。

黒い生命体「グオオオオオ！」

マリオ「こいつ、なんで暴れまわってるんだ？」

アルカ「関係ないわ、行くわよ！」

ルイーダ「サンダー！」ビリビリ！

黒い生命体「グオツ!?!グググ：グオツ!!」

ギユウン！

マリオ「あまりダメージが入ってないぞ！」

アルカ「なら、殴るわ！否テテテテテ定！」ドゴオ！

黒い生命体「グオツ：グオオ！」

黒い生命体は、少しよろめいた。流石にアルカのパンチは効いたようだ。

ルイーダ「もう一回サンダー！」バチイッ！

黒い生命体「グギイッ!?!」ビリイッ！

マリオ「ん？攻撃が効いたぞ？アルカ、お前こいつの防御みたいなやつを砕いたんじゃないね？」

アルカ「ありえるわね。一気に畳み掛けるわよ！」

兄弟「おお！ブラザーリアクション！」ドシユウ！

黒い生命体「グオオオオオ……」フツ……

黒い生命体はやられ、そのまま消滅した。

マリオ「……なんだったんだ、今のやつ？」

アルカ「パワーは大体1000くらいかしら」

ルイーダ「でも、空はまだ黒いし、もっといそうだね」

マリオ「現地調査組はやられてなきやいいが……」

sideアド

私たちはついさつきソジック国のイビト山付近について、今から調査を始めるところよ。

アド「まずは聞き込みかな？」

ノリオ「そうですね。でも、私は通報されそうなので、遠慮しておきます」

クツパ「ワガハイも見た目が……」

カービー「なら、僕とアドの2人が聞き込みするから、ノリオとクツパはここを見張つ

てて」

ノリオ「了解です」

アド「じゃあカーくん、行こっか」

カービィ「うん…」

ー聞き込みしたー

数分後、私たちは集合した。

アド「やっぱり、ここ付近で黒い何かが出てきて、空が黒く染まったのは間違いないみたい」

カービィ「あと、そこらじゅうで黒い生命体が暴れまわってるみたいだ。早く止めないと」

ノリオ「そうですね。久しぶりにコイツ（バズーカ）を使ったかったのでちようどいいですね」

クツパ「ワガハイも戦うぞ。それしか取り柄がないからな」

アド「じゃあ、早速行こう！」

少し移動すると、そこには人型の黒い生命体があった。

この生命体が敵ね。

黒い生命体「グオツ！グオツ！」

ノリオ「いきなりドーン」ドーン！

黒い生命体「グオオオオ！」シユユウ！

クツパ「大ダメージみたいだな！ファイア！」ボオオオ！

黒い生命体「グオオツ！グオオ…」フツ：

アド「あれ？もう倒したの？」

カービィ「出番がなかったね」

ノリオ「いや、恐らくもつといますよ」

クツパ「出番はいくらでもあるだろう。とりあえずマリオたちに報告だ」

その後、私たちはワープスターで帰ると、マリオたちも同じようなやつと戦ったのを知った。

ちよつと技披露

☆現在、キノピオは別行動です。

side マリオ・マリオ

俺たちが黒い生命体を倒したあと、一旦秘密基地に戻り、カービイたちが帰ってきたあと、一旦情報を整理した。

ミール「今のところ黒い生命体はあまり出現していないみたいね」

マリオ「一体でもなかなかのパワーだぞ、あれ」

ルイーダ「もしも個人で行動してるときに遭遇したら、アルカやノリオぐらいしか対処できないよね？」

アルカ「そこは問題ないわ。個人で行動することがないようにすればいいのよ」

カービイ「確かに…元からしなきゃいいね…」

アド「二人一組でチーム作る？」

ノリオ「あまり多すぎてもダメでしょうし、それが妥当でしょう」

ジーノ「早速決めよう」

ペアは、俺とアルカ、ルイーダとクツパ、カービイとアド、ノリオとジーノになった。

アルカ「よろしくね、愛棒♪」

なんか相棒の漢字が違うような気が……まあいいや。

カービィ「ねえねえ、ちょっと提案があるんだけど、ロゼッタに会って協力を頼んでみない？」

ノリオ「それはいい提案ですね。それでは、行ってきてください」

カービィ「え、今!？」

アド「カーくんが言い出したんでしょう？行ってきてよ」

カービィ「え……」

ノリオ「安心してください、冗談です。今日はもう休んで明日行きましょう」

カービィ「はあ、良かった……」

コイツ、マジで行くと思ってたの？まに受けすぎだろ。

マリオ「とりあえず、今日はもう寝ー」

ドガーン！

アルカ「外で何かあったみたいね。今すぐ行くわよ！」

ルイーダ「黒い生命体だろうね……」

急いで外に出てみると、黒い生命体の集団が辺りを荒らしていた。10体ぐらいいるなこりや。

ノリオ「ドーン」ドーン！

黒い生命体「グオオオオ！」 シュウウ…

アルカ「マリオ、帽子借りるわよ！」 パサツ

マリオ「おい、いきなり「何か文句でも？」ないです、お好きに使ってください、うううう…」

ルイージ「兄さん、ドンマイ」

クツパ「話はそこまでにしようぜ。ファイアー！」

ボオオオ！

黒い生命体「グオオオ…」 フツ…

アルカ「あと9体ね。ファイアパンチ！」 ドゴオ！

黒い生命体「グオツ…」 フツ

アド「あと8体！ ザ・ワールド・ドローペイン！」

バシュツツ！

あと7体だな。

カービイはいつのまにかソードにコピーしていた。

カービイ「ルイージ、サンダーを剣に当てて！」

ルイージ「お、おう！ サンダー！」 ビリイツ！

カービィの剣は、サンダーをまとった！

確か、俺のファイアをまとってフレイムソードとかやってたな。

カービィ「サンダーソード！」

カービィはサンダーをまとった連続切りを放ち、あつという間に黒い生命体どもを蹴散らした！

アルカ「おお、強いわね。まさか鍛えたの？」

アド「してたわね、毎週」

クツパ「この戦いが終わったら、手合わせしようぜ、カービィよ」

カービィ「う、うん…（勝てる気がしないな…）」

その後、アルカに帽子を返してもらい、疲れたのですぐ寝た。

「テテテテテテテテテテ定！」

ドガドガドゴオ！

黒い生命体「グオオアツ！」フツ：

アルカ「よっ」ピヨーン

アルカはワープスターに飛び移った。すごい運動神経だなおい：

アド「アルちゃん、今のは心臓に悪いよ…」

アルカ「そう？ゴメンゴメン、テヘ♪」

マリオ「謝る気ねーだろ…」

カービィ「あ、そろそろ着くよ」

ティウルルルルル…

ーブルームプラネット国ー

マリオ「着いたぜ」

シーン…

カービィ「なんかやけに静かだね。誰もいないのかな？」

アド「みんなやられたりしてないよね？」

アルカ「フラグ立てn「ドガン！」…ほら、なんかあったじゃない！」

マリオ「早く行くぞ！」

―城の前―

黒い生命体「グオオオオ！」

ロゼッタ「この数は多すぎますわ…」

家来「女王！逃げて助けを呼んでください！ここは私たちが止めます！」

ロゼッタ「いえ、そんなことはできません！」

家来「で、でも！」

ロゼッタ「私はこの国を治める女王、逃げるといふ選択肢はあり「あるぜ」…え!?」

マリオ「ようロゼッタさん、久しぶりだな」

アルカ「助けに来たわよ」

ロゼッタ「みなさん…協力をお願いします！」

アド「うん、一緒に戦おう！」

カービー「フレイムソード！」ボオシャキーン！

数はおよそ15体か…多いな…

黒い生命体「グオツホツホツ…グオツ！」グワア！

ロゼッタに黒い生命体が襲いかかる！

ロゼッタ「ブルームシヨック！」ドゴツ！

それをロゼッタがブルームシヨックで相殺する。

実況者、マリオ。

sideマリオ・マリオ

アルカ「ぎつと数えてあと13体ね」

マリオ「ぎつと」してないんだが」

カービィ「そんなことは今どうでもいいから、攻撃してよ」

マリオ「ふあい…ファイアー！」ボオオオオ！

黒い生命体「グオオオオオ」ボオオオオ：

アド「え、焼かれてない!？」

ロゼッタ「火炎耐性があるみたいですよ」

マリオ「俺、まさかの役立たず!？」ガーン

(マリオの攻撃力が低いだけ)

アルカ「うーん…じゃあ、実況たのむわ」

マリオ「お、おう…」

実況はこちらら、マリオが担当いたします。

黒い生命体「グオオオオオアアアア！」グオオオオオオ！

黒い生命体「グオオ……」フツ……

あれ、恐らくカービィは本気を出してないな。

カービィ「次はどいつだ!？」シャキーン!

カービィは剣を突き立てて威嚇する。偉そうだな。

黒い生命体「……グオオオオオ！」ドドド……

黒い生命体は突進してきた。それをカービィは……

カービィ「ハアアア！」ズバツ!

一撃で倒した。やっぱり本気を出してなかったな、コイツ。

アルカ「アド! 必殺技をして!」

え、いきなり!?

アド「え、今!？」

アルカ「今よ! 早く!」

アド「う、うん! ザ・ワールド・ドローパーン!」

パシユツ!

黒い生命体「グオオオオオオオオ!」ドゴオン!

黒い生命体たちは互いにぶつかり合って硬直する。

これが狙いか!

アルカ「マリオ、帽子借りるわよ！」パサツ

マリオ「あ、またかよ…」

何をする気だ？

そう思っていると、アルカはサッカーボールサイズのファイアボールを作り出した。

アルカ「いやー、この技真似してみたかったのよねー♪」

そういつて、アルカはジャンプして回転し始めた、

まさか、こいつイナ○レの真似を…

ここで問題だ。アルカはどの技を真似したんでしょうか？

①爆熱スクリュー

②ファイヤートルネード

③マキシマムファイヤー

答えは…

アルカ「爆熱スクリュー！」グルグルドツゴオン！

①だ。めっちゃ回ってるんだが、目は回ってないみたいだ。すげーな。

黒い生命体「グオオオオオ……」フツ……

黒い生命体たちは一気に消え去った。

見て気づいたんだが、強い技で相手を一気に蹴散らすのって気持ちいいよな。

アルカ「はい、帽子」パサッ

マリオ「おう、かつこよかつたぜ」グツ

アルカ「ありがと、これでロゼッタさんにやっと話せるわね」

マリオ「そうだな」

さて、ロゼッタさんに協力をお願いするか。

アルカの役職

side マリオ・マリオ

マリオ「あ、ロゼッタさん、話があるんだが」

ロゼッタ「あら、なんですか？」

アルカ「実は…」

―説明中―

…ということなの。協力する？」

ロゼッタ「みんな、私は行きますが、それでいいのですの？」

ロゼッタさんは家来たちに呼びかける。部下思いだな…

家来「全然大丈夫です！」

家来「城のことは私たちにお任せください！」

ロゼッタ「ありがとう、みんな」

カービー「ふう、よかった…」

アド「あの、ロゼッタさん、私たちが知らない情報を持つてたりする？」

ロゼッタ「……………」。えつと…まず、あなたたちが持つてる情報を知らないんですわ…」

アド「あ、そうだった」

マリオ「そこは俺が説明する。かくかくしかじか…」

―数分後―

ロゼッタ「なるほど、ありますわ」

アルカ「え!?!すぐに教えて!」グイグイ

ロゼッタ「か、顔近いですわ…」

アルカ「あ、ゴメン」スイツ

ロゼッタ「さて…この紙を見て欲しいんですわ」ペラツ

カービィ「ん?なにこれ、手紙?」

アド「全部カタカナで書いてあるわね…」

マリオ「えつと、なにに?『コウフクシロ、シタクナイナラチカラズクデツブス』だ

そうだ、これになんの情報があるんだ?」

アルカ「…」。ロゼッタさん、この手紙、他の国にも送られてるんでしょ?」

ロゼッタ「その通りですわ。今のところ襲われているのはこの国だけです…」

カービィ「僕たちが知ってる国は、ここ、きのこ王国、ドルピック島、カメーン国、ソ

ジツク国、ププランドだね」

アド「ププランドはそもそも惑星が違うから除外ね」

マリオ「ソジック国は昨日調査したから除外だな…」

アルカ「なら…」「プルルル…ピツ」はい、もしもし…はい、今はブルームプラネット国にいますが…え!?今度はそこですか…。了解です。失礼します。「ピツ」今度はカメイン国が襲撃されてるらしいわ。早速行くわよ!」

カービィ「アルカ、昨日も気になってたんだけど、誰と電話してたの?」

アルカ「ハリー総監だけど?直接依頼されてるのよ」

マリオ「警察が副業なのは知ってたんだが…」

ロゼッタ「どういう役職なんですか?」

アルカ「特別捜査官よ。一応3番目に偉い役職ね」

アド「3番目!?めっちゃすごいじゃん!」

アルカ「ま、職権乱用はしないけどね」

マリオ「アルカらしいな。それよりも…」

カービィ「早く行こ?」

アルカ「あ、忘れてたわ。カメイン国に行くわよ!」

マリオ「あ、ロゼッタさんは…」

ロゼッタ「私はブルームフライで飛ぶので大丈夫ですわ」

カービィ「なら大丈夫だね。レッツゴー!」

そして俺たちは、カメーン国に出発するのであった。

久々のカメーン国

side マリオ・マリオ

ーカメーン国ー

マリオ「ついた…あいかかわらず暑いな、ここ」

アルカ「カメーン城へ行くわよ！」

ロゼッタ「どこにあるんですの？」

カービィ「うーん…場所は変わってないと思うけど、確かこの家に…」ガチャ

アド「それで、このクローゼットに階段があったんだよね？」ガチャ

アドがクローゼットを開けると、そこには改装された階段があった。

マリオ「ここってまだ利用されてたんだな…」

アルカ「入るわよ」

階段を下ると、薄暗い通路に入ってきた。

ロゼッタ「なにも見えませんわ」

カービィ「アド、ライトをお願い」

アド「オツケー！はい」カチャツ

カービー「ん？なんか被ってるような…」

マリオ「おいアド、お前9年前に同じ間違えしたよな」

アド「いや、今度は大丈夫よ」

カービー「ま、いや。ライト！」カチツ

ピカア！

アルカ「あ、今度はちゃんと明るいわね」

ロゼッタ「進みましょう」

俺たちは曲がりくねった道を進んで行く。曲がりすぎだろ…

カービー「あつ、出口だ」

ガツシヤアアアン！

アルカ「すでに暴れまわってるようね。時間停止！」

←ブウウウウン…

マリオ「なあアド、俺の帽子を描いてくれ」

アド「え？あ、うん…はい」パサツ

マリオ「よし、アルカ、お前は本物をかぶれ」パサツ

アルカ「え、なんで？アドが描いたそれはファイアが出せないでしょ？」

マリオ「お前に帽子を貸す時いちいち体調を悪くしたくねーんだよ」

ロゼッタ「なるほど…」

マリオ「準備ばできたし、進むぞ」

城の前では、黒い生命体が20体暴れまわっていた。

(時は止まつてるから動いてないが)

アルカ「再生！」

→ブウウウウン…

黒い生命体「…！グオオオオオ！」

ロゼッタ「ブルームシヨック！」ドゴオ！

黒い生命体「グググ…」

アルカ「一人で4体くらい倒せばいけるかな？」

マリオ「スマ○ラのマ○スの真似するな！」

カービィ「…でも、事実じゃん」

マリオ「俺は戦えないんだが…」

アド「はい、これ」スチャ

マリオ「武器か、なんだこれ？」

アド「ファイアセーバーよ、それを使って」

マリオ「ダース○ーダー？」

アド「ルイージと同じことを言ったわね……」

(宝探しデスゲームで)

黒い生命体「グオオオ！」

マリオ「まあ、いいや。試し斬りと行くか、オラア！」

ヴオオン！スパーン！

ファイアセーバーは黒い生命体を真つ二つに切り裂いた！

黒い生命体「グオオオオオオオ……」 シュウ……フツ……

マリオ「はあ!? 強くね、これ!？」

アド「あ、それ5分しか持たないから、早めに片付けてね」

マリオ「おう、任せろ」

side アルカ・マリオ

マリオ、随分と強い武器を手に入れたわね。カッコいいわ。

黒い生命体「グオオオオオ！」 グオオオ!

アルカ「おっと、危ないわね」 サツ

黒い生命体の攻撃を紙一重でかわす。

いやー、危ないわね。さて……

アルカ「どのアニメの技を真似しようかしら……」

黒い生命体「グオツ、グオオオオオ！」ドゴツ、ドゴツ！

アルカ「もう、考えさせなさいよ！」

そんなに早く消えたいの？

なら、ワン〇ースの〇ースの技を使ってやるわ。

ボオオオ：

アルカ「くらえ！火拳！」ボオオオオオオオ！

黒い生命体「グオオオオオオ……」フツ：

さつきの技で5体くらい一気に倒せたわね。さて、勝負はこれからよ！

黒い巨人

side マリオ・マリオ

マリオ「敵はあと14体か…」

アド「アドミサイル！」ドガーン！

黒い生命体「グオオ…」フツ…

マリオ「相変わらずのエグいパワーだなおい」

アド「そんなこと言つてないで早く斬つちやいなさいよ」

マリオ「へいへい、オリヤア！」ズバァン！

黒い生命体「グオツ…」フツ…

アルカ「なんか、簡単すぎる気がするんだけど…」

カービィ「フラグになってなきやいいんだけどね…」

ロゼッタ「あれ？なんか集まってませんか？」

マリオ「ん？」

ロゼッタさんが指差した方向を見ると、黒い生命体たちが集まって発光している。おい、まさか…

アド「あれ、絶対合体してるよね……？」

アルカ「いきなりフラグ回収したわね」

黒い生命体「……。グニユグニユ……」

カービィ「大きくなってる……」

ロゼッタ「まずいですわ……」

マリオ「油断するな、いつ合体が終わるかわからん」

アルカ「それまでに戦闘準備よ」

―数分後―

ピッカーン！

眩しい光と共に、黒い生命体は合体し、巨人となった！

巨人「グオオオオオ！」プンツッ！

巨人は突然拳を振り下ろしてきた！

マリオ「うおっと！あぶねー！」

アルカ「ファイアパンチ！」ボゴオ！

巨人「グオ？」シュウ

カービィ「あまりダメージが入ってないね……」

アド「アドミサイル！」ドガーン！

巨人「グオオオオオ…グオツ！」ガシツ！

アド「え、掴んだ!？」

ロゼツタ「アドさん、危ない！ブルームガード！」

キーン！

アド「あ、危なかった…ありがとう…」

ロゼツタ「お礼はいりませんわ、それよりも巨人を倒す方法を考えましょう」

マリオ「うーん…ほい」ズバツ…シユウ…

ファイアセーバーは、最後の一撃で巨人の足を少し斬ったあと、消えてしまった

巨人「グオオオオオ！」シユウウ！

マリオ「あ、消えちゃった」

アルカ「でも、これで無敵ではないことがわかったわ、徹底的に痛めつける！

ハアアアアアア！」

ボオオオオオオオ！

カービィ「フレイムソード5連発！」

ズバズバズバズバズバツ！

巨人「グオオオオオ…グオオオオオ！」プンツ！

巨人はアルカ目掛けて拳を振り下ろす！

アルカ「うん…でも少し熱すぎたわ。反動がキツイ…」
カービー「まあ、ゆっくり休みなよ」

アルカ「そうするわ。はい、帽子」パサッ
こうして、巨人とのバトルは勝利に終わった。

一方、ノリオたちは…

sideノリオ

アルカさんたちが私の故郷、ブルームプラネット国へ出発した後、私たちは武器の整理をしていました。

ノリオ「ルイーダさん、このバズーカにサンダーを投げ込んで下さい、試したい事があるのです」

ルイーダ「オツケー、いつでもいいよ」
スチャツ

私はバズーカを的に向けて構えました。

ノリオ「チャージ…完了。ルイーダさん、今です！」

ルイーダ「よし！ピッチャー、投げましたー！」ポイツ！

ノリオ「サンダーキャノン！発射！」

ピリドツゴオン！

的壁



ルイーダ「うわっ…すごい威力…」

ノリオ「あの壁も突き抜けてしまいましたね。修理は後回しにしますか」

ルイーダ「あ、そうだ。実は僕も新技作ったんだよ、見てみる？」

ノリオ「そりや見ますよ」

ルイーダ「オツケー、それじゃ…ウオオ…」ピリピリ…

ルイーダさんはサンダーを網のような形にしています。ポケ○ンの真似ですか…

ルイーダ「エレキネット！」バシユツ！

ノリオ「いい技ですね、相手を拘束するのに使うのが妥当でしょう」

ルイーダ「まあ、他にも10万ボルトとかボルテッカーとかいろいろ…」

ノリオ「いったんポケ○ンから離れてください」ドガン

ルイーダ「ギヤアアアア！」

あ、さらに壁を壊しちやいましたね。チョロプーさんでも呼んで修理してもらいます

か…

天の声「ルイーダの心配をしろ！」

sideキノピオ

ーきこの王国警察本部ー

ハリー「ーで、今アルカたちがカメーン国にいるんだが、警察部隊をどう動かす？」

キノピオ「黒い生命体の駆除はアイツらに任せて、国民の救助を優先したほうがいいだろう」

ハリー「そうだな…黒い生命体の正体も知らないしな…」
プルルルル…

キノピオ「ん？ピツ はい、もしもし…」

ミール『私よ、キノピオ。たった今アルカたちから黒い生命体が討伐された報告が入ったわ』

キノピオ「おう、分かった。引き続きよろしく頼む」

ミール『ええ、そうするつもりよ。それじゃ』ピツ

ハリー「今の電話は誰からだ？」

キノピオ「ミールからで、今さつきアルカたちがカメーン国にいる黒い生命体の討伐を終えたらしい」

ハリー「それはご苦労だったな、しかし、黒い生命体の一部でも手に入れられたら、調べることができるんだがな…」

キノピオ「なら、次の襲撃の時に、アルカたちに黒い生命体の一部を採取するよう頼んでおくわ」

ハリー「ああ、そうしてくれ」

キノピオ「今すぐ伝えておくか…」

バリーイイン！

ハリー「!?何だ!?!」

急いで窓の外を見てみると、そこには黒い生命体が大量にいた！

ハリー「まずい、すぐに警察部隊で応戦だ!」

キノピオ「俺は直ぐにアルカたちに連絡する!」

これは…まずいぞ…!

ファイトロボットファイト

sideキノピオ

これは…まづいぞ!

今すぐミールに連絡だ!

ピポパ…プルルル…ピツ。

ミール『もしもし? さつき電話したばかりなのに、何でまた「襲撃されてるんだ!」え
!?!』

キノピオ「今この警察本部が襲撃されてるんだよ! 今すぐ援軍に来てくれ!」

ミール『わ、分かったわ。10分後にはそこに着くわ、それまでに持ちこたえて頂戴
!』

キノピオ「了解だ、さっさと来いよ!」ピツ

ハリー「とりあえず10分、持ちこたえればいいんだな?」

キノピオ「ああ、久々に”アイツら”の出番だな」

ハリー「そうだな、よし…」

ハリーは司令放送を流す。

ピーンポーンパーンポーン♪

ハリー「ロボット部隊、出動！」

—————

ロボ1「久々のシュツドー！」ウイーン！

ロボ2「敵ハッケン！レーザー用意！」キュイーン：

ロボ3「ハツシャー！」ズドーン！

黒い生命体「グオオオオオ！」ジユウウウ：

ロボ1「おお、こいつらシブトイ！」

ロボ2「デモ、オレたちは体力がム・ゲ・ン！」

☆説明しよう！

警察の逆襲の時は、こまめに充電する必要があつたが、全身太陽電池をつけてもらい、体力がほぼ無限になつたのである！

ロボ3「もう一回レーザー用意！」キュイーン：

ロボ123「発射アアアア！」ズッドオオオオン！

黒い生命体「グオオオオオ！」フツ：

ロボ1「あつ、1体タオシタ！」

ロボ2「この調子でどんどんイクゾー！」

ロボ3 「オー！」

ハリー「……………」。

キノピオ「持ちこたえてるどころか、むしろ攻めてないか？」

ハリー「よし、なら…ロボット第二部隊、出動！」

ロボ4 「ラジャー！」 ウィンウィン！

ロボ5 「出番がキタゼー！」

ロボ6 「ウズウズしてたんダヨー！」

キノピオ「おい、こいつらまさかの戦闘狂か？」

ハリー「まあ、そうだな。死刑じゃ収まらない罪を犯した犯罪者をロボ化させたんだからな」

キノピオ「だれがそうしろと？」

ハリー「…………アルカだ」

キノピオ「…………裏番モードのアイツか…。それなら、ムダに殺さなくて済むからな…」

ハリー「まあ、流石にアイツはあまり手も汚したくなかったんだろ」

キノピオ「そうだろうな」

…………アイツ、いつから裏番モードのような性格になったんだ？7年前にはすでになっ

てたし…うーん…

アルカ「ヘックシ！」

マリオ「いきなりどうした、風邪か？」

アルカ「いや、誰かが私の事を言っているような気が…」

カービー「あ、それ、よくあるよねー」

アド「私はないけどね」

アルカ「うーん…ヘックシ！」

マリオ「またかよ！」

アルカ「今度は私の性格の事を言っているような…」

マリオ「なにそれ怖くね？」

キノピオ「ヘックシ！」

なんだ、誰が俺が怖いとか考えてるような…。

…気のせいだ、気にしないでおこう。

ルイーダのドンパチ①

sideルイーダ・マリオ

ルイーダ「ケホツ…ノリオ…流石にバズーカは…やりすぎだ…」

ノリオ「でも、技名を考える時にポケ○ンネタを使うのもおかしいとおもいますよ」
ルイーダ「それもそうだけど…」

その時、ミールがかなり焦った表情で部屋に入ってきた。

ミール「2人とも、大変よ！警察本部が現在進行形で襲撃されてるわ！急いで向かうわよ！」

ルイーダ「わお、早速新技が使える…」

ノリオ「腕がなりますね」

僕は、ノリオ、ミール、ジーノ、クツパと共に、警察本部へと向かった。

―警察本部―

ルイーダ「……………」

いざけい警察本部に着くと、黒い生命体は警察ロボに討伐されていた。

ノリオ「私たちが来た意味ありましたか？」

キノピオ「あつたぞ」

ジーン「い、いつのまに…」

キノピオ「お前らがいたほうが早く討伐できるんだよ。俺も戦うぜ」
クツパ「よし、焼き尽くしてやる、ファイア！」

ポオオオオオオオ！

黒い生命体「グオオオオオ！グオツッ！」プンツッ！

黒い生命体は拳を振りかぶる。

ミール「させないわよ」バンバン！

それをミールが妨害する。しかし、銃じやあまり効いてないようだ。

ノリオ「ルイーダさん、お願いします」スチャツ

あ、もうするんだ…

ルイーダ「オーケー！ピツチャー、投げましたー！」

ポイツ！

ノリオ「チャージ完了！サンダーキャノン！」

ノリオのバズーカから極太レーザーが発射される！

その前にいた黒い生命体たちは跡形もなく消滅する。

クツパ「なかなかいい技だな」

ジーノ「僕も負けないよ！加速矢！」ギユウン！バズッ！

黒い生命体「グオツ!？」ドスツ、ドスツ！

ジーノが放った矢は、黒い生命体を貫通するが、少し距離をとったあと、再び黒い生命体に向かって飛んでいく！

これはまさに

ルイージ「ミサイル型だ…」

ノリオ「しかも飛距離とスピードが比例してますね。なかなか厄介な飛び道具ですね」

黒い生命体「グオオオ！グオツ!？グオオオオ…」フツ…

黒い生命体は何度も矢にいられ、最終的に消滅した。

キノピオ「あと15体ぐらいか？」

ミール「いや、あと1体よ」

ルイージ「は!?!何でそうなるの!?!」

ミール「さっきアルカから連絡があつたのよ。黒い生命体が15体ぐらい集まって合体して、黒い巨人になるって」

ノリオ「巨人ですか…パワーはどれぐらいですかね？」

ミール「約15000らしいわ」

クツパ「おい…合体ってあれか？」

ギユウウウウウン…

黒い生命体たちは集まって発光している。

なんか気持ちわりー。

ジーノ「大きくなってきたるね」

ルイーダ「うわー、10メートルぐらいあるよ、こいつ…」

巨人はに合体し終わったのか、大きな雄叫びをあげた。

巨人「ギユウウウウオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

ルイージのドンパチ②

sideルイージ・マリオ

巨人「ギユウウウオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

ルイージ「うわっ、うるせー…」

ノリオ「耳がちぎれます…」

ロボ1「ん？でっかくなったナ！」

ロボ2「レーザーハツシヤー！」ピュン！

巨人「グオオ？」シユウ…

ジノ「全然ダメージが入ってない…」

ロボ3「もつとだ！モットモット！」ピュンピュン！

ロボたちは何度もレーザーを撃つが、ダメージが全然入ってない。

ロボ4「くそっ、コウナツタラ！」ギユイーン…

ミール「何する気？」

ロボたちはエネルギーを一点に集中させている。

極太レーザーか？

ロボ5 「10%…20%…30%…40%…50%…」
 ギユイイイイイイイン…

ロボ6 「…60%…70%…80%…90%…」

ロボ1 2 3 4 5 6 「100%!ウオオオオオ!」 キラーン!

ルイージ 「…これ、離れた方がいいんじゃないや…」

ノリオ 「そうですね、距離をとりましょう」

僕たちは10メートルぐらい距離をとる。

ロボたちはすでに発射準備が整ったようだ。

ロボ1 2 3 4 5 6 「ウルトラロボットコウセン!ハツシヤヤヤヤアアアアアアア

!」

ビユウウウウン!

極太レーザーが巨人に向かって放たれる!

巨人 「グオオオ!?!グググ…グオオオオオオオ!」

ガチイッ!

巨人はなんとそれを止めようとする!

しかし、かなり強いレーザーに耐えられるはずもなく、

巨人は力負けし、消滅する。

巨人「グオオオオオオオオ……」フツ……

ロボ1「ハア……ハア……」

ロボ2「サスガ二今ので疲れたナ……」

ロボ3「ニンムカンリヨウ！」

ロボ4「オレたちのシヨウリだ！」

ロボ5「総監にホウコクだー！」

ロボ6「ホウコクだー！」

ウインウインダダダー

ロボたちは警察本部の中へ戻っていった。

キノピオ「うーん……ハッ！俺は何を……」

クツパ「おい、お前、ずっと気絶してたのか？」

キノピオ「ああ、多分黒い生命体に頭でも打たれたと思うんだが……討伐は終わったのか？」

ルイージ「うん、今さつき終わったよ」

キノピオ「くそつ、俺の出番が……」

ミール「残念だったわね（ザマア☆）」

ジーノ「もうすることないし、基地へ帰ろうよ」

ルイージ「それがいいね。帰ろ帰ろ」

ロボたち、めっちゃ強かったな：

side????

黒い生命体「グオオオオ、グオオ、グオオ！」

????? 「ホウ、オレノヤボウヲボウガイスルバカドモガイルンダナ？」

黒い生命体「グオグオオオ！」

????? 「ナニ!? キョジンマデタオスダト!? ナカナカツヨソウダナ：ヨシ、ツギハヒヤクタ
イシユウゲキサセロ！」

黒い生命体「グオオオオ！」

ニクキニンゲンドモ：ブツブツシテクレル！

ヒミツはバレバレだよーん

side マリオ・マリオ

4日ぶりに俺の視点になったな。待ちくたびれたぜ。

さて、メタい話しは置いて、

俺たちは今、ロゼッタの城でタダ飯を食べている。

え、なぜって？

事の成り行きはこんな感じだ。

カメーン国から帰ろうとする

←

俺の腹がなる（恥ずかしい）

←

ロゼッタが城で食べていけと誘う

←

しかし、警察本部が襲撃されていることを知る

←

急いで向かおうとする

←

移動中に討伐された

←

急がなくてもよくなったため、ロゼッタの城へ行くことになった

←

現在

ーと、いったところだ。昔はタダ飯の時は思いつきり食べていたんだが、俺はそこそこ金があるため、少し遠慮している。だが、ひとつだけ言おう。うまい。

マリオ「このことはルイージたちには内緒にしとこうぜ」

アルカ「そうね、聞いたら発狂しそうだわ」

カービー「マリオは結構変わったけど、ルイージは遠慮なく大食いするだろうからね」

アド「私たち4人が来て正解だったわ」

ロゼッタ「……………」。(あの、誘った本人がいるんですけど…)」

ー数分後ー

マリオ「ふう、うまかった…ありがとな、ロゼッタさん」

ロゼッタ「お礼は要りませんわ、当然のことをしたまです」

カービィ「oh…聖人だ…」

アルカ「カービィ、何言ってるの？」

アド「多分自分の世界に入ってるんじゃない？」

カービィ「ひどいよ！僕はただロゼッタさんのことを聖人といっただけだよ！」

マリオ「まあまあ、そんな怒らずに、帰ろうぜ」

アルカ「そうね、ロゼッタさんもついてきて」

ロゼッタ「そのつもりですわ」

―帰宅―

秘密基地に戻ると、何故かルイージがドアの前で仁王立ちしていた。こいつ、何してるの？

マリオ「ルイージ、そこで何して「兄さんたちこそ何してたんだい？遅過ぎるよ」…

いや、その、えっと…」

ロゼッタ「私の城で食べさせてましたの」

アルカ「あ、いっっちゃダメエエ！」

ロゼッタ「あら、口が滑っちゃいましたわ」

カービィ「絶対わざとだよね…」

アド「そ、それよりもルイージが…」

大軍襲撃!?

side マリオ・マリオ

ルイージにアイアンクローをされた次の日、俺たちはピーチ城で戦闘準備をしていた。理由は、数十分前さかのぼる。

―数十分前―

マリオ「ふあゝ…まだ頭が痛え…」

アルカ「ルイージの握力どうなってるの?」

ノリオ「ルイージさん、いくらなんでもアイアンクローはやりすぎです。頭が痛くて戦闘に支障がでてしまったらどうするんですか?」スチャ

ルイージ「いやいや、バズーカをぶつ放されたせいで戦闘に支障が出たらどうすんの…」

そんな話をしてると、突然ミールが叫んだ。

ミール「みんな、ピーチ城に襲撃予告が来たわ。しかも今度は100体の大軍を送るらしいわ。すぐに戦闘準備をして!」

…え?

カービー「ひゃ、1000体!」

アド「多過ぎでしょ!」

こんな感じで焦ってる人もいれば、

クツパ「どうやら本気で潰しにきたようだな」

アルカ「遅かったわね」

それで納得した人もいた。

……クツパとアルカ、冷静すぎないか?

ルイーダ「1000体って数は多いね……でも、僕たちは結構強い」

ノリオ「私たちは数の暴力で負けるような弱者ではありません。万全の状態で大軍を

迎え撃ちましょう!」

全員「おう!」

ー現在ー

ミール「そろそろ襲撃時刻よ」

アド「!!みんな、空を見て!」

全員「……!!来た!」

空を見上げると、そこには黒い生命体の大軍がいた。どんどんこちらに近づいてくる。

他のやつらも自分たちの技で倒していく。だが…

マリオ「これじゃキリがないな…」

アルカ「そうね…こんな時に広範囲攻撃ができる技があればいいんだけど…」

広範囲攻撃か…うーん…!!

マリオ「なあアルカ、今から俺が言ったことをしてくれ」

アルカ「何？作戦でも思いついたの？」

マリオ「ああそうだ、とりあえず俺が言ったことをしてくれ」

アルカ「了解」

よし。これは面白いことになるぞ。

マリオの天才的?な作戦

sideマリオ・マリオ

これは面白いことになるぞ。

マリオ「よし、アルカ、まずは時間停止をしてくれ、俺以外」

アルカ「分かった！時間停止！」

←ブウウウン…

マリオ「次は、黒い生命体どもを一点に集中させるぞ」

アルカ「…あ、考えてること分かったわ。その後に私たちが集中攻撃をするんでしょ？」

マリオ「チツ、もう気づいたか。つまんねーの…まあいい、その通りだ。早くこいつらを動かすぞ」

アルカ「はーい♪」

―数分後―

マリオ「ハア、ハア…こいつら軽いけど何回も動かすのはしんどかったぜ…」

アルカ「あんたが思いついた作戦よ。しょうがないじゃない」

マリオ「それもそうだな。解除してくれ」

アルカ「再生！」

→ブウウウウン…

黒い生命体「グオオオ！……グオツ！？」

ルイージ「……え、集まってる!?!」

カービィ「アルカ、時を止めたのかい!?!」

アルカ「そうよ。これでだいぶ攻撃しやすくなったはずよ!」

マリオ「集中攻撃だあ!!」

ノリオ「了解です。ドガーン」ドガーン!

クツパ「ファイアー！」ボオオオ!

アド「アドレーザー！」ビュウウン!

黒い生命体「グオオ…」フツ…

黒い生命体たちは状況を理解できずになすすべもなくやられている。これは作戦成功か？

ジーノ「ミサイルアロー！」ピュン!

カービィ「連続射撃！」ピュンピュン!

ミール「マシンガン！」ダダダダダダダダダダダダダダダダダッ!

黒い生命体「グオオ…」フツ…

…ミール、マシンガン持ってたのかよ。いつ出したん？

ルイージ「サندان…」バチバチ…

ロゼッタ「…ブルーム！」ビリッドゴオ！

2人はとっさに思いついた連携技で攻撃する。

マリオ「斬ッ！」ズバアッ！

アルカ「ハアアアアアアア！煉獄パンチイッ！」

ドツゴオン！

俺はファイアセーバーで斬り、アルカは煉獄パンチで殴る。黒い生命体どもはやつと状況を理解したようだが、時はすでに遅く、大軍は半壊していた。

俺の作戦は大成功に終わった。

アルカ「ぐうっ…やっぱり私はまだ慣れないわね…」

マリオ「いや、反動に耐えてるだけかなりすごいと思うが…」

クツパ「お前ら、喋ってるヒマねーぞ。あれ見ろ」

クツパが指差した方向を見てみると、黒い生命体どもが集まって発光していた。おい

おいまじかよ…

マリオ「…うわ…またかよ…」

ルイージ「しかも今度は3体いるし…」

ノリオ「どうしましょう…」

アド「…カー君、これ吸い込んで！」

カービィ「え？あ、うん」スウウウウウ…ポワン！

カービィは頭に星がついた剣士みたいなやつを吸い込んだ。あれってすごいやつだよな？

アルカ「おお…強そうね」

カービィ「ウルトラソード!!」シャキーン！

ウルトラソード!

sideマリオ・マリオ

カービィ「ウルトラソード!」

カービィは変身してでっかい剣を持っていた。

大きすぎね? どうやってそんなもん振り回すんだ?

マリオ「剣でかくね?」

アルカ「あんなもので斬られたらひとたまりもないわね」

カービィ「一刀両断! ハアアアアアア!」

スパーン!

カービィは一振りで巨人の片腕? を切り落とした。

うん、すごい威力だなおい。

巨人1「グオオオオオオオオ! ググググ!」

巨人1は少しひるむが、すぐにもう片腕の拳を振りかぶった。

巨人2「グオオオオオオオオ!」ブンツ!

巨人3「グオオオオオオオオ!」シユツ!

巨人2と巨人3もカービィを狙って拳を振りかぶる。

アルカ「させないわ！炎突！」ドゴオ！

アルカは火をまとったかかと落としを巨人2にお見舞いする。

マリオ「また新技かよ」

アルカ「いや、これは新技じゃなくて『桜咲く。』という小説からもじった技よ」

マリオ「……………どこかで聞いたことあるような…」

すると突然どこからともなく声が聞こえてきた。

天の声「☆説明しよう！

「桜咲く。」は、現在作者が計画中のオリジナル小説である！炎突はそこで登場する技だ

ぞ！いつ投稿されるかはお楽しみに！」

計画中の小説を宣伝するな！メタイぞ！

まあ、それはさておき…

ノリオ「サンダーキャノン！」ドツカーン！

巨人3「グオオ!?!」シユウウウ…

ノリオはルイージのサンダーボールをバズーカの中に入れてパワーアップした光線を巨人3に当てた。

その結果、巨人3の腹？に風穴があいた。

巨人1「グオオオオオ！」ブンツ、ブンツ!

カービィ「フツ、ハツ！」キーン、キーン!

巨人1の拳をカービィは剣でカードしている。

巨人1「グオツ！」ドガツ!

巨人1は再び拳を振り下ろしたが、拳は地面にめり込んでしまう。

カービィ「チャンス!ハアアアアアアア!」ピカア!

カービィは隙を見て、剣に光を集中させた。とどめか?

カービィ「一・刀・両・断ツ！」

ズバアアアアツ!

巨人1「グオオオオオオオ!グオオ…」フツ:

真つ二つに斬られた巨人1は消えていった。

アルカ「やったようね。なら、私も…!」

アルカは火の玉を出してジャンプし、回転し始める。

またあれか:

アルカ「爆熱スクリュー・改!」ボオオオオオオ!

…しかも強くなってやがる。いつ強化したんだ?

「「「「「「「「「「「「「
○巨人

それは…

…天の声はメタい話またはそれに関係ある話しかしてこないということだ。
天の声「んだとゴラア！」

ミニ祝勝会

side マリオ・マリオ

黒い生命体の大軍をなんとか討伐した後、

(案外余裕があった)

俺たちは秘密基地でミニ祝勝会をしていた。

発案者はアルカだ。なぜ認めたのかって？この中では実質あいつが一番偉いからだ。最年少なのに。まあ、楽しいから別にいいが。

アルカ「勝利を祝して、乾杯！」

全員「乾杯!!!」

ワイワイガヤガヤ：

マリオ「いやあく疲れたな」

アルカ「そうね。流石に今回の相手は強かったわ」

ルイージ「というか兄さん、そんなに活躍してないよね？」

マリオ「細かいことは気にしな〜い♪」

カービィ「あ、逃げた」

アド「逃げたわ」

ノリオ「逃げましたね」

ジーノ「逃げたね」

クツパ「逃げたのだ」

ロゼツタ「逃げましたわ」

マリオ「……現実逃避でこんなに責められるとは……」

アルカ「私は責めてないんだけどな……」

アルカ、やはりお前は俺の味方だ。

ルイージ「まあ、そんなことは置いといて、早く食べよーよ」

始めたのはお前だろうが!!

そう思いながら、俺はフライドチキンを食い始める。

ちなみに言うと、今俺たちが食ってる飯はマク○ナルドからデリバリーで頼んだ。世

界はこんな状況なのにご苦労なこった。

天の声「世界はこんな状況なのによく呑気に祝勝会なんのできるなおい」

安心しろ。祝勝会じゃない。ミニ祝勝会だ。

天の声「また言い訳を……」

マリオ「そんな言い訳行つて言い訳?なんてな」

ルイージ「兄さん、今のは寒いよ」しらー

アルカ「一瞬でここがマイナス18度になったわね」しらー

カービィ「座布団マイナス100枚だね」しらー

マリオ「あれ？なんでお前からそんなに引いてんだ？」

アド「なんで分からないの？あんなに寒いダジャレ言ってたのに？」

え。まじかよ。

マリオ「声に出してたのかよ…恥ずい…」ズーン

冗談抜きで恥ずかしいんだが…

マリオ「くそお、こうなったらやけ食いだぜゴラア」ムシヤムシヤ…

ルイージ「あ、また逃げた」

カービィ「また逃げたね」

アド「また逃げたわね」

ノリオ「また逃げましたね」

ジーノ「また逃げたね」

クツパ「また逃げたのだ」

ロゼッタ「また逃げましたわ」

マリオ「頼むからこのくだりはもうやめてくれ…」

そんなに責められたらオッサンの俺でも泣いちゃうぞ。

ルイーダ「……流石にもうやめておこう」

アルカ「そうね。マリオのメンタルが壊れて戦闘に支障が出てしまったらひとたまりもないわね」

マリオ「心配のしかた……「なーんてね♪」え？」

アルカ「もう責めたりしないから、今夜は楽しましょ！せつかくのミニ祝勝会だし！」

マリオ「……そうだな。楽しむか！」

その後、アルカが酒飲んで酔ってしまい、暴れそうになるのを必死で止めたのは、また別のお話。

親玉、登場。

sideグリッチ

……。

ナントイウコトダ……。ジャマモノヲツブスタメニヒヤクタイモオクリコンダトイウ
ノニ、ツブスドコロカギヤクニツブサレルトハナ……。コレハヨソウガイノジタイダ……。
ニンゲンドモヲアマクミスギテイタ……。

……。

ソロソロチョコクセツテラクダストシヨウカ。オレノパワーハヒヤクマンヲコエテイ
ルシ、モンダイナイハズダ。

ニンゲンドモヨ……モンスターノウラミヲハラシテヤルゾ！

黒い生命体の親玉、グリッチは、こうしてマリオたちに直接手を下すことにしたので
あつた。

sideマリオ・マリオ

……。

なんかアルカみたいなやつがカービィと10歳くらいの少年と一緒にモンスターが

いるところで冒険してる夢をみたんだが……。あれはなんだ？ たんだ？ ま、いいや。

天の声 「3部の伏線に気づかないマリオなのであつた」

何実況してんだコラ。メタいから黙れ。

天の声 「いやーだ！ 黙りたくないもん！ フンツ！」

：作者つて黙れと言われると幼児退行するのか？

(しません。)

ま、いいや。閑話休題。

黒い生命体の大軍を倒して数日、一回も襲撃をくらつてない。まるで嵐の前の静けさだ。本当に嫌な予感がしてたまらない。

アルカ 「マリオ、さっきから何ぼーつとしてるの？」

マリオ 「いや、なんかめっちゃ嫌な予感がするんだよ。お前もそんなことには敏感だろ？」

アルカ 「……まあそうね。ここ数日一回も襲撃されてないから、気味が悪いわ」

マリオ 「敵が諦めただけだといいが……」

そう思った矢先、ミールが部屋のドアを荒々しく開けてきた。

ミール 「大変よ！ 今すぐ会議室にきて！ 重大な話があるの！」

アルカ 「フラグ回収早いわね……」

マリオ「…とりあえず行くぞ」

ー会議室ー

ルイーダ「みんな集めてどうしたんだい、ミール」

ミール「…ついに親玉が動き出したのよ」

ついか。「カービィとアドは驚いている。」

カービィ「…え？」

アド「どこに…？」

ミールは少し間をおいて答えた。

ミール「…私たちを直々に潰しにきたわ」

全員『な……!?!』

親玉が…俺たちを？

ノリオ「嘘…ですよね？私たちを？」

クツパ「冗談にしては面白くないぞ」

ミール「…本当よ。だって…」

ミール「私の右腕がそいつに吹き飛ばされたから」

ミールはそう言つて、右袖をめくりあげた。

そこに右腕はなく、かわりに棒が突き刺されていた。

ノリオ「……!?!ミール…その腕…」

ミール「ハア…ハア…あいつは今、メガネ工場の跡付近からこっちに向かつてるわ…。
今すぐ戦闘準備を…して…」

ミールは痛みを耐えながら俺たちに指示をだす。

マリオ「…おう。俺たちに任せろ」

アルカ「アンタは休んでて」

ノリオ「よくも妹の腕を…ぶち殺してやります」

ロゼッタ「その前に、あなたの腕が吹き飛ばされた時の状況を説明してくれますか？」

ミール「ええ。私がちょうどバイクから降りてメガネ工場跡に向かっていたら、突然空から黒い生命体が降りてきたの。私はそれを見て慌てて木陰に隠れたから、バレなかったわ？その黒い生命体は、あたりを見回した後、『フン、イッタンココデチカラダメシルカ』と喋り出したの。そしてすぐに手から黒い波動弾みたいなものをだして、あたり一帯を地獄絵図にしたのよ。私はその時に右腕が吹き飛んだわ。その後すぐにこのことを知らせにバイク全速力で戻ってきたわけよ」

……！つ言っていい？

マリオ「よく生きてたな、お前」

ミール「フツ……まあ……ね」

ミールはそう言っ、安心したのか眠りだした。

……親玉か。絶対に倒してやる。

◇再び

side マリオ・マリオ

敵の親玉か…。

おそらくこれで最終決戦になるだろう。

俺が死ぬのはほぼ確定だ。だがそれだからって諦める気はない。

マリオ「一回アルミに会うか」

ー子供部屋ー

ドアを開けると、アルミがトテトテと走ってきた。

2歳なのにすげー元気だな。

アルミ「おとーさん、どーしたの？」

マリオ「おう、お父さんたちはな、今から悪い奴を退治してくるんだ。ここで待って
てくれないか？」

アルミ「うん！おとーさん、がんばって！」

マリオ「ああ、頑張るぞ。じゃあな」

アルミ「うん、またね！」ガチャツ。

またね…か。そうなるように頑張らなくちやな。よし！

マリオ「準備はできたし、いくか！」

―数分後―

アルカ「これで全員ね。行かない人はすぐに挙手して」

全員「……………」

挙手をする人はいなかった。つまり全員行くつてことだ。

アルカ「それじゃ、みんな、いくわよ！」

全員「オオオ！」

土気が上がったところで、俺たちはバスに乗り込んだ。

運転手は◇である。急がなきゃいけないからな。

◇「いくぜえー！フエエエエイ！」

その次の瞬間、どこからともなく音楽が流れ出した。

テテテテテテテテテテツテテン♪

◇「ぶーぶーぶー！バスぶーぶー！」

警察きーでも捕まらなーい！（許可を取ったから）

オーレのバスに乗ってゆく！フエエエエイ！」

相変わらずノリノリだな、こいつ。

だがお陰で緊張がほぐれたぜ。

と、少し◇に感謝していると、急にバスが止まった。

マリオ「どうした？ エンストか？」

◇「いや、そんなんじゃない。前に…道がねーんだ！

これじゃバスを走らせることができねーよ！ フェエエエエ！

アルカ「え!?!」ダッ

アルカはそれを聞いて運転席の窓を見てみると、前の方は文字通り車道がなくなっていた。それどころか、周りの建物も半壊していた。

マリオ「なんだ、この状況…今回の敵は本当にやばい奴だぞ…」

ルイーダ「でも、何のためにこんなことを？」

ノリオ「…侵略、でしょうか？」

カービィ「宇宙人侵略ならありえるね…」

キノピオ「考えていても仕方がない。とりあえずバスを降りるぞ」

ロゼッタ「ええ、そうし m 『ドッガアン!』…え!?!」

アド「何、いまの轟音!?!」

◇「…!?!? お前ら、あれを見ろ！」

急いでバスから降りて◇が指差した方向を見る。

そこには、黒い生命体がいた。

???? 「……………キタカ」

クツパ 「!!? あいつ、今喋って…」

ドゴオ!

クツパは喋り終わる前に黒い生命体に殴られていた。

…何だいまのとんでもないスピード!?

クツパ 「…ガハッ!」

???? 「…ホウ。イマノイツパツニタエルトハナ」

マリオ 「お前、何者だ!」

グリツチ 「オレハグリツチ。オマエラニオクリコンダヤツラノオヤダマダ。イマカラ

オレジキジキニオマエラヲブツコロス」

アルカ 「…何故、そんなことを？」

グリツチ 「…コタエルヒツヨウナドナイ。カカツテクルガイイ!」

最終決戦①

sideマリオ・マリオ

味方「……………」

グリッチ「…ドウシタ。ハヤクカカツテコイ。ソレトモオジケツイタカ？」

グリッチは挑発をしてくる。しかし、俺たちは別に怖気付いてるわけではない。どう攻撃すればいいか考えてるだけだ。

グリッチ「…ケツ、モウマテネエ。コツチカライクゾ！」

シュツ！

気づいたらグリッチはカービイの目の前にいた！

カービイ「な…!?!」

ドゴオ！

カービイ「…グハッ！」メリイ…

グリッチの拳がカービイの体にめり込む。まさか…！

グリッチ「ボールハコノママフツトンデロー！」ギョーン！

カービイ「いやーやーやーやー…」

ビュウウウン!

カービィはグリッチに文字通り吹っ飛ばされてしまった。

カービィ: 吹っ飛んだため戦闘離脱

グリッチ「サア、ツギハドイツダ?」ギロツ

アルカ「:時間停止!」(味方以外)

←ブウウウウン:

マリオ「:どうする?下手したら俺たち全員あの世行きになっちゃうぞ」

ルイーダ「どうしろと言われても:」

クツパ「ぐう:あいつのパンチ、相当強力だ。例えるならアルカの倍ぐらいだな」

キノピオ「アルカの倍だ?!」

えげつないなおい:

ロゼッタ「クツパさん以外が攻撃されたらひとたまりもありませんね:」

しばらくの沈黙。それを破ったのはジーノだった。

ジーノ「:僕が攻撃するよ」

全員「!?!」

マリオ「おい、正気か?お前は一番防御力が低いんだぞ?一撃でやられてしまうだろ

!」

ジーノ「大丈夫さ。僕は素早いし、遠距離だから、グリッチは移動する必要がある。その時に集中攻撃をしてくれ」

アルカ「わかったわ。その作戦で行きましょう。再生！」

→ブウウウウン：

グリッチ「：？サツキマデノバシヨトチガウヨウナ：マアイイカ。クラエ！」
ギユイイイン：

グリッチは黒い波動弾をチャージしている。

マリオ「今だ、ジーノ！」

ジーノ「加速矢！」ビュウン！

グリッチ「ムツ!？」パシツ！

グリッチは加速矢を手で掴むが、矢はどんどん加速し、徐々に押されていく。

マリオ「一斉攻撃だ！ファイアボール！」ボオオオ！

アルカ「かかと落とし！」ドゴオ！

ルイーダ「サンダーボール！」ビリイイ！

ノリオ「ドガン」ドガン！

キノピオ「シユルムパンチ！」（普通のパンチです。）

ロゼッタ「ブルームシヨック！」ドガツ！

クツパ「フアア！」ボオオオオ！

マリオ「ダメージは入ったか…？」

さっきの集中攻撃で出来た煙が晴れていく。

そこにあつたのは…

グリツチ「フフフ…フハハ！イイタテガイタモノダ！フハハハハ！」

無傷で立ってるグリツチと、盾にされ集中攻撃を食らったジーノだった。

最終決戦②

side マリオ・マリオ

グリッチ「フハハ！イイタテガイタモノダ！」

煙が晴れた先にいたのは、無傷のグリッチと盾にされ集中攻撃を食らったジーノだった。

マリオ「ジーノ……！」

ジーノ「………」

ルイーダ「ジーノを……盾に……！」

アルカ「……おい、このクズ」

アルカは明らかにやばい殺気を出していた。

この量は裏番モードを超えているぞ……！

グリッチ「ア？ドウシタ？コイツガホシイノカ？」

アルカ「即死かなぶり殺されるか、どっちがいい？」

グリッチ「……。ソウダナ……。エラプトシタラ……」

グリッチは考えるようなそぶりを見せたあと、拳に力を入れて言った。

ドガッ！ドゴッ！ドガア！ドゴオ！

アルカは容赦なくグリツチにラツシユを叩き込む。

ジーノはその間に俺が回収した。

—————

キノピオ「ジーノ！しっかりしろ！」

ジーノ「ぐ……う……」ギギギ……

アド「ジーノ！しっかりして！」

ジーノ「僕……は……もう……ダメ……かも……しれない……」

クツパ「そんなことはない！諦めるな！ジーノ！」

ジーノ「いや……もう……本当に……限界……だ……」

ノリオ「ジーノさん……！死なないで下さい！みんな生きて帰るんですよ！」

ジーノ「なら……この体を……修理して……あの世の……広場で……生き返らせて……くれ……」

ルイージ「それは最終手段だ！一人一回までしかできないんだ！死ぬなああ！」

ジーノ「は……は……後は……たのん……だ……よ……」

ロゼッタ「ジーノさん……」

ジーノ「……」ガクツ

マリオ「ジーノ……」

全員「ジイイイイイイイオオオオオオ！」

ジーノ……1回目の死亡。死因は戦死。

最終決戦にて、ジーノは息を引き取った。

現在の味方

マリオ、ルイーダ、アルカ、クツパ、キノピオ、アド、ロゼッタ

戦闘不能

カービィ、ジーノ

最終決戦③

side マリオ・マリオ

ジーノ……くそっ……

マリオ「……許さねえ」

キノピオ「さてマリオ、俺たちも同じ気持ちだ。ここは一旦アルカにやらせろ」

マリオ「アルカも見殺しにするのか!？」

キノピオ「そういうことじゃない。アイツは今暴走している。お前がいくと巻き込まれるぞ」

マリオ「……そういうことか……くそっ……!」

俺は……なんでこんなに弱いんだ!!

—————

side アルカ・マリオ

アルカ「ハア……ハア……この……クズが……」

グリッチ「グウウ……イマノハナカナカイタカツタゾ……ソロソロホンキヲダストスルカ

……!」ギユオオオオ!

アルカ「……ッ！」

グリツチは猛スピードで私に突っ込んでくる。

グリツチ「シネエ、ニンゲン！」ドゴオ！

私は拳を受け止めるが、衝撃で骨にヒビが入る。

アルカ「…ガハッ！」バキッ！

グリツチ「ソウダ、ソノカオダ！モットクルシメ！」

ドゴッ、ドゴオ！

アルカ「調子に…乗るなあ！」シュツ…

グリツチ「オツト、ソノテイドジャアタラナイゾ」

アルカ「く…そお…！」

グリツチ「ハア！」ギユウン！

グリツチは手から黒い波動弾を放つ。これなら問題ない。

アルカ「…吸収！」ギユルルル！

グリツチ「ナンダト!?オレノハドウダンヲキュウシユウシタダト!?」

グリツチは焦る。今よ！

アルカ「反射っ！」ギユウン！

さつき吸収した波動弾に私のパワーを上乗せして放つ。

グリッチ「ナニイ!?…ガバアッ!」ボゴオ!

波動弾はグリッチに直撃する。どうやらダメーヅが少し入ったようだ。

グリッチ「…オレノハドウダンヲキュウシユウシ、サラニキョウカシテハナツトハ

…キンセツセンニモチコムシカナイヨウダナ…」

…チッ!もう弱点がバレてしまった!

私のパワーは20万に対し、

グリッチのパワーは確実に100万を超えてる!

このままだとバイツァ・ダストだ!(負けて死ぬ)

グリッチ「イクゾ、ニンゲン!」ギユンッ!

アルカ「くっ…!」

マリオの帽子を借りずに火が出せれば…!!

火を出す?誰ができないと言ったの?…誰も。

じゃあ、やったことは?…ない。

アルカ「やるしかない!ハアアア!」

手に力を集中させる。

グリッチ「?ナニヲスルカワカランガ、サセナイゾ!」

アルカ「ハアアアッ!」ボオオオ!

手から火が出た。喜ぶのもつかの間、すぐにそれを手に纏ってさらに温度を上げる。
グリツチ「ナニ!? ヒダト!」

アルカ「…煉獄…パンチ…改イツツ!」ドツゴオン!

グリツチ「グツ…グググ…ナンドコノネツリヨウハ…グハア!」ボツゴオオン!

グリツチは手で拳を止めるが、熱に耐えられず、攻撃を食らう。

アルカ「ハア…ハア…グツ…!」

グリツチに大ダメージを与えることができた。しかし、手は未だに熱に耐えられず、反動で火傷してしまった。これじゃあもうまともに戦えないと悟った私は、早めにかたをつけることにした。

アルカ「ハア…ハア…トドメよ…!」ボオオオ…

グリツチ「…フツ…フハハハ! タシカニイマノコウゲキハツヨカッタガ、ソレダケ

ジャオレハタオセナイ! ニンゲンヨ、オマエノマケダ!」ドゴツ!

アルカ「…ガフツ! ゲホツ…ゴホツ…」

グリツチの拳が鳩尾に入り、私は血を吐き出す。

グリツチ「トドメハオマエニタイシテダ! クラエ!」

ギユオオオオ…

私は悔しきでいっぱいになり思わず目を瞑った。

しかし、その拳が、私に到達することはなかった。

グリッチ「!? ナンダ、オマエ。スガタガカワツタヨウナキガ…」

S マリオ「…待たせたな、アルカ。後は任せろ」

アルカ「…スーパーマリオ!」

スーパー化したマリオが、グリッチの拳を受け止めていた。

最終決戦④

side マリオ・マリオ

S マリオ 「アルカ、待たせたな。後は任せろ!!」

アルカ 「…スーパーマリオ!」

S マリオ 「早く行け!」

アルカ 「…頼んだわよ!」 ダッ!

グリッチ 「…ニゲラレタカ。マア、シヌノガオソクナルダケダガナ。サテ…」

グリッチ はこちらに拳を向ける。

グリッチ 「オマエノチカラ、ミセテモラオウカ」

S マリオ 「早く戦おうぜ。早めにカタをつける必要があるんでな」

グリッチ 「ソレジャア、イクゾ!!」 ギユウン!

S マリオ 「…フンッ!」 ガシッ!

グリッチ 「ナニッ!?!」

S マリオ 「オラア!」 ドゴッ!

グリッチ 「…グフウッ!」 メリイ…

S マリオ 「ファイアアアアア！」 ボオオオオ！

グ リ ッ チ 「グオオオオオオオ！」 メラメラ…

コイツを使うか！

S マリオ 「ノーマネースペシャル！ 1人バージョン！」

グ リ ッ チ 「…ッ！ コノパワーハ…！」

ド ッ ガ ア ア ア ア ア ア ン ！

グ リ ッ チ 「グハアアッ！」 シユウウ…

必殺技を使いグリップチに大ダメージを与える。

S マリオ 「…後少しで時間切れだ…」

グ リ ッ チ 「グッ…イマノハアブナカッタゾ…ダガ…！」

シ ョ ッ ！

S マリオ 「…ッ!？」

グ リ ッ チ 「ソレデモオレノハウガツヨイ！」 ドゴオ！

S マリオ 「…ガバアッ！」

ヒ ャ ウ ウ ウ ウ … ドゴオオ！

グリップチに殴り飛ばされ、近くの残骸にぶつかる。

く…：そお…：アルカ…：すまなかつた…。

ビリビリビリ……

マリオ「……あれ？俺は何を……「イマノハイチジテニナモノカ？」……何のことだ？」

グリッチ「……イマノオマエノハンノウカラミルト、ドウヤラキオクモナクナルヨウダナ。チイツ、セツカクナカナカツヨイヤツガイタトオモツタノニヨ……」ギユイイイン……
グリッチは黒い波動弾をこちらに向けてくる。

グリッチ「トドメダ……シン「させませんっ！」ムッ!?」

ドガーン!

……おせーよ、お前ら……

ルイージ「兄さん！大丈夫か!?!」

マリオ「いや、大丈夫じゃねえ。ところどころ骨が折れてやがる」グググ……

キノピオ「ここは俺たちがやる！お前は休んでろ！」

グリッチ「……クツ……コノクソカスドモガ……!ジャマシヤガツテ……マアアイ。シヌノ

ガハヤクナルダケダ！」

ロゼッタ「私たちは死にませんわ！フルームストーム！」

ドギユルルルル……!

グリッチ「……ソノテイドカ？」

ロゼッタ「!?必殺技を無傷で!?!」

グリッチ「ヒツサツワザ？オマエラノヒツサツワザナド…」シュツ！

ロゼッタ「まずい！ブルームガー」「ゴミニヒトシインダヨ！」「ドゴオ！……ガフツ！」
マリオ「ロゼッタ！」

ロゼッタ「…が…はっ…」バタン

ロゼッタ…気絶、戦闘不能

キノピオ「クソオ、この化け物が…！」ダダダダダダ！

グリッチ「…ヨワイマツサージダナア」シュツ

キノピオ「なん…だと!？」

グリッチ「ヤルナラモツトツヨクヤレエ！」ドゴオ！

キノピオ「く…くそお…」バタン

キノピオ…気絶、戦闘不能

ノリオ「キノピオさんまで…」

クツパ「後俺たちだけか…」

ルイーダ「兄さんは下がってて！サンダールーム！」

バチイッ！ビリビリビリ…

ルイーダは周りに雷のバリアーを張る。

グリッチ「…コザカシイマネヲ！」ビリイッ！

ノリオ「今です！サンダーキャノン！」

ドツガアアアアアン！

グリツチ「…キ…キカーン！」 シュウウ…

ノリオ「そんな…効いてない!?!」

グリツチ「オラア！オラアア！」 ドゴツ、ドゴオ…

ルイージ「そんな…」 バタン

ノリオ「強…すぎます…」 バタン

ルイージ・マリオ…気絶、戦闘不能

ノリオ…気絶、戦闘不能

…なんだ、この絶望的な戦いは…。

最終決戦⑤

sideマリオ・マリオ

ロゼッタ「……………」

キノピオ「……………」

ルイーダ「……………」

ノリオ「……………」

マリオ「お…前…ら…!!」

グリッチ「アトフタリカ…オンナガドコヘイツタガシランガ、サキニオマエラヲシト
メルトシヨウ…!!」

クツパ「そんなことはさせせん!ファイア!」ボオオオ…

グリッチ「フン、ソナヨワイヒナド、キクワケガナイ!」ドゴツ!

クツパ「グフツ!」ヨロツ…

マリオ「クツパ!」

クツパ「ハア…ハア…なんとか耐えたぜ…」

グリッチ「ホウ、タエタカ。ダガ、オマエモココマデダ!」ドガツ!

クツパ「ガフツ！ゲホツ…」ブシヤツ

クツパは攻撃に耐えられずに血を吐き出す。

マリオ「クツパ、もうやめろ！お前も死んじまうぞ！」

クツパ「ハア…ハア…あと…少し…なんだよ…！」

グリツチ「ソウダナ。オマエハアトスコシデシヌナ。トドメダ！」シュツ！

グリツチはその拳を振りかぶる。しかし、次の瞬間、グリツチはそこから数メートル先に吹っ飛んでいた。

アルカ「クツパ、時間稼ぎありがとう。後は私たちに任せて」

クツパ「ああ。そうさせて…もらう…ぜ…」バタン

クツパ…気絶、戦闘不能

マリオ「なんだ、その姿…」

アルカは、周りにグリッチに似たような赤いオーラを纏っていた。

アルカ「あいつの力の一部を取り込んだのよ」

マリオ「…そうか」

アルカ「あんたは休んで。私があいつを消すわ」

…コイツ、殺すじゃなくて消すと言ったのか？

マリオ「殺す、じゃないのか？」

アルカ「いや、消すであつてるわよ。あんな生命体が行き帰りでもしたらひとたまりもないわ」

マリオ「…そうだろうな」

グリッチ「グ…ウ…コノオンナガ…オレノチカラヲウバイヤガツテ…タダデスムトオ

モウナヨ…！」

アルカ「あんたこそ、ただで済むと思わない方がいいわよ」ボオオオ…

おい待て。こいつ、いつのまにか帽子なしで火を出せるようになったんだ？俺でもできないのに…

グリッチ「マタヒカ。オナジテニノラネエヨ！」

アルカ「ふーん。じゃあ、これならどう？」

アルカはサツカーボールサイズの火の玉を出し、ジャンプして回転する。3度目のイナ○レだな。

アルカ「真・爆熱スクリュー！」

グリッチ「：ソナコウゲキ、トメテヤル！フンッ！」

グリッチは火の玉を手で掴み、止めようとす。しかし、火の玉の勢いが勝ち、グリッチの手は燃やされ、火の玉は顔面に直撃する。

グリッチ「グオオオオオ！」ボオオオオ！」

アルカ「よし、決まった！」

グリッチ「コノ：コノオ！モウユルサン！ブチコロシテヤル！」シュッ！」

アルカ「フッ！」パシッ！」

グリッチの拳をアルカは手でしっかりと受け止める。

その後しばらくグリッチとアルカの攻防が続く。アルカはしだいにグリッチを押し
ていく。

グリッチ「コノオ！」ブンッ！」

アルカ「ハアッ！」ドゴオ！」

あれを…使う時が来た。

最終決戦⑥

side マリオ・マリオ

…アレを、使う時が来た。

もしもの時のために取っておいたが、使う羽目になるとはな。

グリッチ「…アトハオマエカ」

マリオ「ああ、そうだ。俺は宣言する。お前は、俺に指一本触れさせることができない
くなる」

グリッチ「ナンダト？ソコニタオレテルオンナヨリダンゼヨワイオマエニフレラレナイ、ダト？」

マリオ「その通りだ。早くかかってこい」

アルカ「マリオ…何を…する…気なの？」

アルカは俺の発言に困惑する。しかし、もう後戻りは無い。

マリオ「アルカ…今まででありがとな」

アルカ「…え？」

マリオ「これから俺は寿命と引き換えの技を使う。だからお前に別れを言った」

アルカ「寿命と…引き換えの…技?…まさか!」

マリオ「ああ、そのまさかだ。時を止めても無駄だぞ」

アルカ「そんな…マリオ…死な…ない…で…!」

マリオ「…すまない。アルミは任せた」

アルカ「やめて…マリオ…」

…俺なしでも、がんばれよ。

マリオ「来いよ、グリッチ」

グリッチ「イワレナクテモ…」ドツ!

マリオ「…」スッ

グリッチ「ワカルニキマツテルダロウガアアアア!」

ビュウウウ…

グリッチは俺に攻撃する。しかし、その攻撃はすぐにかわされた。

グリッチ「ナニ!? コノ、コノオ!…ナゼアタラナイ!」

グリッチは動揺している。それもそうだ。さつきまでと比べて何十倍も速くなってるんだからな。

俺は何をしたのかって? ただ…

前飲んだドリンクによって体のリミッターを強制的に解除しただけだ。

マリオ「ファイナルモード、チャージ」ギユウン：

グリツチ「クロイハドウダン！コレナラドウダア！」

ドゴオ！

黒い波動弾は俺ではなく、グリツチに当たる。

俺はあいつの体を超高速で動かしたただけだ。

グリツチ「グハツ！：オレヲウゴカシタダト!?シカモ、オレガキツカナイスピードデ

：オマエ、イツタイナニヲシタ!？」

マリオ「お前に言うまでもねーよ、どうせ今から死ぬし」

グリツチ「コノオレガ…シヌ？アリエナイナ」

マリオ「現実逃避はもうやめとけ、意味がない」

グリツチ「シヌノガアリエナイノハジジツタ」

マリオ「そんな事実は無い。…そろそろだな」シュツ！

グリツチ「…ドコニイッタ…!?」ギユウ…

目にも留まらぬスピードで、グリツチを縄拘束する。

グリツチ「イマサラコンナモノ、ムイミダ！」ブチイッ！

しかし、グリツチはそれをすぐに破る。

…これで隙ができた。

マリオ「…チャージ、完了」ダツ！

グリツチ「ハッ！…シマツタ！」

マリオ「究極奥義…」

世界一の配管工の最期

side マリオ・マリオ

……。

俺は、勝った。

グリツチは、消えた。

しかし、その次の瞬間、俺の意識は途絶えた。

……。

「ピッ…ピッ…ピッ…ピッ…」

マリオ「…ん…ん…ん…知らない…天井だ…」

ここは…病院か？

よく見ると、俺の口には呼吸器が付けられている。

そして…

アルカ「マリオ!!」ダキッ!

周りには仲間たち全員がいた。

ジーノもどうやら修理され、生き返ったようだ。

ルイージ「兄さん…具合はどう？」

マリオ「…最高だ」

キノピオ「本当か？よかったぜ…」

カービィ「僕、役に立てなかった…」

マリオ「いや…もしお前が吹っ飛んでなかったら…真っ先に死んでいただろう」

アド「もう…怖いと言わないでよ…」

マリオ「いや…こんなもん怖く無いぞ…なんせ…この中に…死人が…出るからな」

ノリオ「死人？誰ですか？」

アルカ「…マリオ、嘘よね？」

クツパ「誰だ、その死人ってのは」

マリオ「……俺だ」

全員「!?!」

ハリー「おいおい、見苦しい嘘つくなよ…」

マリオ「いや…本当…だ…ゲホツ…」

アルミ「…おとー…さん…?」

マリオ「ハア…ハア…どうやら…お話の…時間…は…もう…すぐ…終わる…よ
うだ…な…」

アルカ「まさか、リミッターを限界まで解除して…!」

ルイーダ「死ぬな、兄さん!」

マリオ「……俺は…幸せ者……だ…仲間たちに……囲まれて……死ぬる……なん
てな…」

カービー「マリオ…諦めないでよ!」

アド「ここで死んだら幸せ者じゃないよ!」

マリオ「いや……今が……幸せ……だ…」

ノリオ「あなたが死んだら、誰が一番煎じになるんですか!」

クツパ「まだワガハイと決闘してないぞ！」

…そんな約束、したんだっけな…。よく覚えてないや…。

アルカ「私の力を分けるから、お願い…マリオ…死なないで…お願いだから！」

キユイイイン…

アルミ「おとーさん…いなくならないですよ！ううう…」

アルカは力を分けようとし、アルミは泣くのを必死に堪えている。

マリオ「アルカ…それ…は…もう…無意味だ…」

アルカ「そんな…マリオ…マリオオオオオ！」

マリオ「最期の…一言…だ…アルミ…俺の帽子を…あげるぜ…」

……長生きしろよ、俺の娘」パサツ……

「ピッ……ピッ……ピッ……ピッ……」

俺はそこで息を引き取った。

35年の人生。

盗撮して捕まり、脱獄したり……

箱から解放した幽霊が俺のファンだったり……

一回死んで生き返ったり……

帽子に呪いがかけられてしまったり……

2年前にタイムリープしたり……

警察が国家を乗っ取ろうとしたり……

とんでもないデスゲームに参加して世界を救ったり……

犯罪だらけの異世界にいたり……

幽霊が生き返ったついでに時間停止能力を手に入れたり……

刑務所から大量脱獄事件が起きたり……

オルゴール箱が盗まれそうになったり……

本当に、いろいろあったな。

アルカ…アルミ…そしてみんな…

さよならだ。

世界がバグった！ 完。

第5章 アルミの特訓！

アルミ、特訓を始める。

sideアルミ・マリオ

……。

暇だなあ。夏休みの宿題は3日で終わらせたし…

お母さんは今買い物に出かけてるし…暇だなあ…

あ、そうだ！どうせ暇だし家の物いじろーつと。

ゴソゴソ…

アルミ「ん？何これ？」

家の棚の奥の方にあつたガラス瓶にはこう書いてあつた。

「時間停止ドリンク」

アルミ「時間停止？お母さんが使ってるやつだよね？」

つまり…お母さんはこれを飲んで能力を手に入れたってこと？

アルミ「怪しいなあ…ま、いいや。飲んでみよー」

私はガラス瓶から液体を少しコップに移し、一口飲んだ。

アルミ「ゴクツ…これ、リンゴの味がする！おいしい！」
今度はコップ一杯分入れて、ガラス瓶を閉める。

アルミ「ゴクツ…うん、おいsh」
「ピンポーン♪」…あ、やばっ
ガチャツ

アルカ「たっだーいまー♪」

やばい、お母さんが帰ってきた。バレたらどうしよう…

アルミ「お、おとお帰り、お母さん…」

アルカ「ん？何飲んでるの？」

アルミ「リンゴ…ジュースだけど？」

アルカ「ふうん…」

よかった…バレなくて…

…ウソね」

アルミ「…え？」

アルカ「残念ながら私は記憶力が良くてね、冷蔵庫にはぶどうジュースしかなかったはずなのよ」

アルミ「あ、そうだった」

アルカ「さて、本当のこと言ってくれる？お母さん怒らないから、ね♪」ニコツ
お母さんはニコツとするけど、目が笑ってないよ!?

怖い怖い怖い!

アルミ「怖いから、その顔やめてよお母さん。本当のこと言うから」

アルカ「…いいわよ。早く言いなさい」

アルミ「私…時間停止ドリンクって書いてあったガラス瓶の中の物を飲んだの」

アルカ「…へえ。」

アルミ「……は？」

アルカ「だから、アンタは、時間停止能力を手に入れたってことよ！」

アルミ「ホントに？」

アルカ「ホントに」

アルミ「……どうやってするの？」

アルカ「時間停止って、叫んでみなさい」

アルミ「うん。時間停止！」

私がそう叫んだ瞬間、

←ブウウウウン

という音とともにお母さんと私以外は色を失い止まった。

アルミ「うわ…時計が止まっている…お母さんが使った時みたい…」

アルカ「これで実感湧いた？」

アルミ「うん、すごいすごい！」

アルカ「さて、今からその能力についての説明をするわ」

お母さんが説明したことをまとめると、

止めれる時間は1時間まで。

止めた時間分のクールダウンがある。

止まってる時間の中で動けるものを無制限に指定できる。

止まってる時の中では消費する体力が10倍になる。

止まってる時の中での衝撃などは蓄積しない。

…って感じだ。

アルミ「いろいろあるんだね」

アルカ「そうね。再生！」

→ブウウウン…

お母さんがそう言った瞬間、私たちの周りは色を取り戻した。

アルカ「アルミ、アンタはこれから時間停止をかなり使うと思うの」

アルミ「うん、私もそう思う」

アルカ「だから、今日から体力作りのための特訓をするわよ！」

アルミ「えええ!? 嫌だなあ〜」

アルカ「じゃあ、勝手にドリンクを飲んだのは誰？」

アルミ「私です…」

アルカ「正直でよろしい。早速いくわよ！」

アルミ「ふあい…」

特訓って、何するんだろ？

ただ走れと？

side アルミ・マリオ

アルミ「特訓って、なにするの？」

アルカ「とりあえず、ついてきなさい」

アルミ「うん……」

どこにいくんだろ……

―数分後―

アルカ「ついたわよ」

アルミ「え、ここ？」

ついたところは、道路によった小さな公園だった。

(場所は原作のタイム恋愛のアルカがタイムマシンを使うために走ってた道路です。)

アルカ「ここよ。アンタはこれからこの道路を走ってもらいわ」

アルミ「……え？」

アルカ「え？じゃないわよ。ほら早く走って」

アルミ「……それだけ？」

アルカ「言い方が悪かったわね。この道路を10往復してきなさい。片道10kmだから、合計200kmね」

アルミ「フア!? 2、200km!?!無理無理無理無理!」

アルカ「無理じゃないわよ、私の子だから」

アルミ「その子に200km走らせるっておかしくない?」

アルカ「そう? うーん…いや、わからないわね。なにがおかしいの?」

アルミ「お母さん、まさか200km走るのが普通だと思ってるの?」

アルカ「そうよ。私、こう見えても毎日1500km走ってるからね?」

アルミ「まじですか…」

アルカ「さて、話はここまでにして、行ってきなさい」

アルミ「逝ってきなさいの間違いでは?」

アルカ「この程度で死ぬはずがないわよ。ほら、行った行った!」

アルミ「ふあい…スウ…うおおおおおおお!」

ダダダダダダダダ…

アルカ「あら、思ったより速いわね。距離を増やした方が良かったかしら?」

お母さんのスパルタ発言を、私が聞くことはなかった。

―結構あと↑↑適当だなおい!

アルカ「あ、あとちよつとよ、頑張つて〜」

アルミ「ハア：ハア：あと：数歩：」

アルカ「オケー、終〜了〜♪」

アルミ「終わつた：」バタン

アルカ「お疲れ様。明日もやるから、しっかり休みなさいよ」

アルミ「あ、明日も!？」

アルカ「そう、明日も。明日どころか、毎日やるわよ」

アルミ「ま、毎日!?!私、死なないよね?」

アルカ「大丈夫!娘に死なせてたまるもんですか!」

アルミ「じゃあなんで毎日：：」

アルカ「体力作りのためよ」

アルミ「そんなこと他のことで「甘いわね」：え?」

アルカ「私達のような人が体力を増やすのはかなり難しいのよ。だから一番簡単なラ
ンニングにしているのよ?」

アルミ「ほ、他にはどんなものがあるの?」

アルカ「ブルームプラネット国の滝登りとか、カメーン国の兵士と手合わせした
り、まあいろいろと」

アルミ「さらつととんでもないことを聞いた気がする…」

アルカ「で、どうする？変えるの？」

アルミ「変えません！ランニングで結構ですっ！」

アルカ「ふうん、つれないわねー、案外楽しいのに…」

いやいや、そんなことで楽しむのはお母さんぐらいだよ。

天の声「将来アルミが英雄になっていた時、アルカにかなり似ている性格になっていたのは別のお話」

…なに今の？

飯食いタクシードライバー（仮）

sideアルミ・マリオ

ー次の日ー

アルミ「ふあくよく寝たく」

アルカ「おはよう。ご飯はもうできてるわよ」

アルミ「ありがと。いただきまーす♪」パクッ。

朝ごはんは食パンと目玉焼きだった。

私の家ってパン派なのよね。

アルミ「ごちそうさま。ところでお母さん」

アルカ「どうしたの？」

アルミ「昨日やったことって夢だよね？」

アルカ「…現実逃避をするのはマリオに似てるわね」

…夢じゃなかったの!? 200km走るんだよ!? 普通の人では到底できないよ!?

（安心してください。あなたはすでに常人離れしています。主にあなたの母親の影響で）

アルミ「いやーやーだー、走りたくなーいやー！」

うええええええん！

アルカ「ハア…あとでヨッシーのクツキー買ってあげるから…」ボソツ

ムツ!?今の発言、しつかり聞いたぞ!

アルミ「ホントに!?!」キラーン

アルカ「…ホントよ。やるの?」

アルミ「うん!やるやる!」

アルカ「(こういうところは私に似てるわね。まあ、もうクツキーの誘惑に負けることはないけど) …じゃあ、早速行きましょ」

アルミ「今すぐ準備するね!」ガサガサ…

クツキーのためならばほぼなんでもするよ!これぞクツキーオタク(自称)の極み!

(全然極めてない)

ピンポーン♪

アルカ「誰かしら?はーい」ガチャツ

????? 「あなたの親友です。入っていいですか?」

アルカ「もちろんよ。入って」

????? 「失礼しまーす♪」テクテク

アルミ「ん？あ、来た、ピンクボール」

カービィ「ピンクボールとは酷いなあ、僕にはカービィというちゃんとした名前があるのに。アルカ、ちゃんと教えてやったの？」

アルカ「当たり前よ。というか、ポケ係のアンタが突っ込んでどうするのよ（メタイ！）」

カービィ「あーごめんごめん。最近アドとアドレーヌにもあまり会えてないからちよつとね」

ふーん「アドさんとアドレーヌ、夏休み何してるのかな？」

やつぱりずつと絵を描いてるのかな？

アルミ「あ、そうだ。カービィさん、一緒に特訓いきませんか？」

カービィ「特訓？」

アルカ「それがね、このアホが勝手に時間停止ドリンクを飲んだのよ。しかも、能力を手に入れて。だからそのための体力作りに特訓させてるのよ」

カービィ「はあ：：親子そろってアホだね：：マリオとアルミは性格が似てるね」

アルミ「またお父さんの話ですか：：で？行くんですか？行かないんですか？」

カービィ「もちろん、いくよ。どうせ行かなかったら暇になつてププランドに帰つてウイスピーりんご食べまくつてからまたここに帰つてきて近くのラーメン屋で大食

いして食い逃げしようとしたところをロゼッタさんに見つかって代わりにお金を払ってもらっただけだし」

アルカ「…今のセリフ、やけに長かったわね。まさか体験談？」

カービィ「いや、想像しただけだよ」

アルミ「しかしよく早口で言えましたね…」

ということ（どういうこと？）、

カービィ が特訓に付き合うことになった！

おいおいマジかよ…

前回の出来事

カービィが仲間になった。以上。

side アルミ・マリオ

アルカ「カービィが協力するのなら、特訓の幅も広がるわね」

アルミ「コピーを利用するの？」

カービィ「多分そうだろうね」

アルカ「さて…キングクリムゾン！（時間停止です。）」

ヴォン！

気づいたら昨日行った公園にいた。

アルミ「え!? どうやって…あ、なるほど」

アルカ「ハア…ハア…少し疲れたわ…」

カービィ「時を止めて僕たちをここまで運んだんだね」

アルミ「ま、いいや「良くないっ！」…とにかく、さつきと走るね」

アルカ「ハア…やく…行って…きなさい」ゼエ…ゼエ…

カービィ「僕が見ておくよ。アルカは…大丈夫？」

アルカ「いやー、言い忘れてたけど、アンタたちをここに運んだあと、ミネラルウォーターを6リットルほど買ってきたのよ」ポトン。

カービィ「だからまだ疲れてるんだね…アルミ、もう行ってい…あ、もう行ってたか」
アルミ「うおおおおおおお！クツキイイイイイイイイイイイイ！」
ダダダダダダ

アルカ「わお、昨日より速いわねー」

カービィ「クツキーほしいからじゃない？」

アルカ「やはり報酬があるとやる気でのね…」

ー数十分後ー

アルミ「ハア…ハア…ゴール…！」

アルカ「おつかれー、カツカレー、キーマカレー♪」

カービィ「マヨネーズかけると美味しいヨ♪」

(作者はカレーにマヨネーズかけます。案外美味しいですよ。試してみてください)

アルミ「???」

なんか、変なネタ言われた気がする…

アルカ「はい、クツキー」ソツ

アルミ「クツキー!? フェエエエイ!」サツ!

お母さんがクツキーを出した瞬間、私はそれを奪い取った。

カービィ「疲れてるはずなのにすごいスピードだったね…フェエエエイつてもう◇
だし…」

アルミ「パクパクパク…んま〜い♪」ホワーン

クツキー最高〜♪

アルカ「それ、食べ終わったら次の特訓始めるわよ」

アルミ「んむっ!? ゲホゲホ…まだあるの?」

お母さんの発言に驚き、むせてしまった。

カービィ「ああつ、アルカいきなりいうから…」

アルカ「あらゴメン☆」テヘペロ☆

お母さん、その顔ウザいよ。殴りたいその笑顔。

アルミ「でも…私もう疲れてるのよ?」

アルカ「安心して、クツキーまたあげるから」

…!! その手があったか!

アルミ「ホント!?」キラーン

カービィ「ハア…」

カービイさんはなぜか呆れた顔をしてるけど、今は気にしない！

アルカ「ホントよ。やる？」

アルミ「はい、やりますお母様！」ピシッ！

カービイ「なぜ敬語？」

アルカ「オーケー。それじゃ、カービイはこれを吸い込んでー」

お母さんは2リットルのミネラルウォーターを出す。

カービイ「え？あ、うん。スウウウウウ…ウオーター！」

ピロリン☆

アルカ「さて、アルミ、アンタは今からファイアを出しっぱなしにして、カービイが水をかけても消えないようにしなさい」

アルミ「フア!? 火いいいい！」

思わずダジャレを言ってしまった。

アルカ「……………」しらー

アルミ「はいはい分かりましたやりますってば！」

ー1時間後ー

アルミ「ハア…ハア…もう…火出ない…」シユウウ…

アルカ「まだよ！もつと出しなさい！じゃないとクツキーあげないわよ！」

アルミ「クツキーのためなら……うおおおおお！」
ビリリリリリリリリ！

カービィ「!?」

アルカ「これって……まさか……！」

Sアルミ「………なんか変わったような気が……」

カービィ「アルミが……」

アルカ「スーパー化した!!」

スーパーアルミ

sideアルミ・マリオ

Sアルミ「あれ？なんか疲れが取れたような…」

カービィ「アルミが…」

アルカ「スーパー化した…!」

カービィさんとお母さんはなぜか驚いてる。なんでだろ？

Sアルミ「まあいいや。ファイア…!?!」ボオオオ!

いつも通りファイアを出してみる…でも、いつもと違って青に火が出た。なにこれ!?

Sアルミ「な、なななんで青いの!?!」

カービィ「…」。強化されたのかな？」

アルカ「そう考えられるわね」

Sアルミ「…ええっ!?!」

下を見てみると、私はなぜか白いパーカーを着ていた。それだけじゃない。靴や帽子も白くなっていた。

Sアルミ「私、真っ白しろすけになってるうう!?!」

カービィ「あ、やっと気付いた」

アルカ「アルミあんたはいまスーパー化してるの」

S アルミ「スーパー化？お父さんができたやつ？」

アルカ「そうよ。だからあんたは服が白くなったり、ファイアが青くなったりしてるのよ」

S アルミ「なるほど…え、でも、今私にそれ教えたら元に戻った後記憶が消えるんじゃない?」

カービィ「そうだよ。アルカ、なんで今教えたの？」

アルカ「答えはシンプルよ。」

あんたのスーパー化は記憶が消えないタイプなのよ」

カービー「……………!?!」

Sアルミ「そんなのがあるの!?!」

アルカ「そう。スーパー化には4種類あつて、

①爆発タイプ

パワーが10000倍になり、効果時間は1分。条件は追い込まれて特定の行動をすること。変身が解けると記憶がなくなる。マリオとルイージはこのタイプ。

②敵討タイプ

パワーが100000倍になり、効果時間は10分。条件は味方の誰かが死んだりすること。最も珍しいタイプ。

③進化タイプ

パワーが10000倍になり、効果時間は10分。条件は様々だが、強化すれば条件なしで変身できるようになる。アルミはこれ。

④蓄積タイプ

パワーが1000倍になり、効果時間は100分。しかし、条件は怒りや恨みなどで、蓄積すればするほどパワーアップする。最大は100000倍。

：以上、この4つだわ。マリオとルイージは①で、あんたは③ね。ちなみに、スーパー化できるのは私たちの家系だけじゃないのよね〜」

S アルミ「は、はあ…」

カービィ「長い説明お疲れさん」

アルカ「どう？理解できた？」

S アルミ「う、うん、多分…」

ビリビリビリビリ…

カービィ「あ」

アルミ「…あ、戻った」

アルカ「残念ね、色々試したかったのに」

カービィ「なんかやばいことする気だっ！「あんたに試そうか？」…いや、やめとき

ます、すみません」

アルカ「よろしい。アルミ、今日はここまでにはしましよ。あんたは気付いてないだろうけど相当疲れてると思うし」

アルミ「うん…そう…す…る…」フラツ…

あれ？なんか…眠気が…ZZZZ…

フラア…

アルカ「よっと」サツ

カービィ「本当に疲れてるみたいだね」

アルカ「さて、帰りましょ」

カービィ「あ、アルミは僕が持つよ」

アルカ「その前にコピー解きなさい」

カービィ「あ、そうだった。…よし」ピコーン♪

アルカ「オケ、はい」ドサツ

カービィ「うおっと、ふう…」

アルカ「………」スタスタ

カービィ「え、ああつ、待ってよろ」タタター

アルカ（もうすぐお盆ね……教えたら驚くかな？）

こうして、私のスーパー化初体験は終了した。

平和な朝

side アルカ・マリオ

ー次の日ー

アルミ「ムニャ…」

アルカ「起きなさい、アルミ。もう9時よ」

アルミ「ムニャ…あと3時間だけ…」

カービィ「3時間って、もう昼じゃん…」

昨日スーパー化して疲れてたのは分かるけど、こんなに寝るとはね…こうなったら…

アルカ「……………あーあ、今日の朝ごはんクツキーサンドイッチなのに…」ボソツ

アルミ（ク…ツキー…サンド…イッチ？）

アルミ「ほんとおおおお!!」ガパツ!

カービィ「あ、起きた」

アルカ「ホントよ。ほら、早く起きなさい」

アルミ「うん!クツキークツキー♪」

カービィ「すごいクツキーを食う気だねー」テテツチく♪

カービイのギャグ!

ヒユウウウウウ…

アルカ「ププツ…ハハハハッ! いいダジャレね!」

アルカに効果はないようだ…

アルミ「…あれ? なんか部屋の温度が氷点下に下がったような…正確には体感温度

マイナス18、7度になってるような…」ブルブル…

アルミに効果は抜群だ!

カービイ「それ、かなり遠回しに面白くないって言ってるんだよね?」

アルカ「よくそんなに的確に言えるわね」

アルミ「うん適当だから☆」てへ☆

カービイ「適当なんだ…」

アルカ「ま、この話は置いといて、早く手洗つてきなさいよ。クツキーサンドイッチ
用意しとくから」

アルミ「え、あ、うん。洗つてくる〜」タタタ

さて、用意してきますか。

ゴソツ…

—1分後—

アルミ「クッキーサンドイッチ！クッキーサンドイッチ！」

アルカ「よし、はい。今回はチョコクッキーを使ったわ」

アルミ「わーい！いただきまーす！」パクッ！

アルミは早速クッキーサンドイッチを一口食べる。

そして：

アルミ「んま〜い♪」パクパク：

カービィ「すごいよねら、ただトースト2枚にクッキーとクリームを挟むだけのシンブルな料理なのに、めっちゃおいしいもん」

アルカ「まあ、こうでもないかとアルミは元気が出ないから、週一くらいの頻度で作ってるわね」

カービィ「なるほどね」

―数分後―

アルミ「美味しかった♪ごちそうさま！」

アルカ「食べ終わったわね。さて、特訓の準備するわよー」

アルミ「うん！着替えてくる〜」タタター

カービィ「ところでアルカ、そのパーカー何着あるの？」

カービィは私が着ているパーカーを見ながら言う。

アルカ「他の色は2着ずつで、赤は…10着ぐらいあるわね。ちなみに全部オーダーメイドなのよね。通気性も結構いいから、毎日着るのよ」

カービィ「わお…どうりで年中パーカーを着るわけか。寒いなら下に厚着でもすればいいしね」

アルカ「うん、パーカー最強♪」

カービィ「はあ…」

カービィは少し呆れた顔をする。なんでそんな顔するの？パーカーって最強じゃないの？

天の声「余談だが、アルカのパーカー最強理論はアルミにも遺伝し、チームの制服までパーカーにするようになったのはまた未来の話」

…あの、ネタバレするのやめてくれない？次言ったらぶっ飛ばすわよ？

天の声「すみません…」

…よろしい。

アルミ「お母さん、準備できたよ！」

アルカ「うん、それじゃ行きましょうか」

今日もアルミを鍛えていく〜！

クッキーサンドイッチを食べた後のアルミがスーパー化する、こうなる。

sideアルミ・マリオ

―特訓する所―

アルカ「200km走、スタート！」

アルミ「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお…」

カービィ「さて、僕はウオーターにコピーしておこつと」

アルカ「…なんか今日速いわね」

カービィ「朝ごはんがクッキーサンドイッチだったからじゃない？」

アルカ「ほぼ絶対そうでしょうね」

―数分後―

アルミ「終わったぜえーフエエエエエイ！」

カービィ「◇みたいな性格になつてる…」

アルカ「…とりあえず次の特訓を始めましょうか」

なんか今日は調子がイイイイ！、(◇v◇)，

れてるため、時間停止が使えないんじゃない？」

カービィ「なるほどなるほどー」

天の声（いい考察だけど、スーパー化をしたら時間停止は使えないという設定だから、アルミの場合だけじゃないよ☆）

S アルミ「つまんないのーフエエエエエー！」◇v◇キラン

カービィ「完全にフエエエエエイ状態になってる…」

アルカ「気絶させた方がいいのかしら？」

カービィ「やめて差し上げろ」

S アルミ「ブルーファイア！」ボオオオ！

アルカ「え、何する気？」

カービィ「やな予感…」

S アルミ「うおおおおおおお…」

パーンチー！」

ドゴオオオオオオ！ シュウウ：

アルカ「ちよつ、何壊してんのよ！」

カービィ「しかも溶けてるし！」

Sアルミ「すごいすごい！ フェエエエイ！」

ビリリリリリリリ：

カービィ「あ、戻った」

アルカ「早めに戻ってよかったわ。これ以上スーパー化したら気絶させてたわね」

カービィ「まだそんなこと考えてたんだ！」

アルミ「戻っちゃったー！ フェエエ：」 フラツ：

アルカ「よつと」 ドサツ

アルミ「Zzzz：」 くかー

カービィ「また寝ちやつたね」

アルカ「今日はここまでね。次からは限界突破しないレベルの特訓にしないとイケなさそうね」

カービィ「そうだね…」

アルミ「フエ…イ…ムニヤムニヤ…」Z Z Z…

アルカ「……………」

カービィ「寝てもフエエエエエイ状態なんだね…」

一日中フエエエエエイ状態のアルミなのであった。

ある意味衝撃の事実

sideアルカ・マリオ

「午後10時ごろ、秘密基地にて」

アルカ「……………」コンコン

ガチャツ。

ノリオ「おや、こんな時間に何の用ですか？」

ここに住んでいるノリオがドアを開け聞いてくる。

アルカ「……………最近組はどう？」

ノリオはマリオの葬式の後、今まで助けた犯罪者たちを集め極道の組を立ち上げた。

何故そうしたのかって？

……………。

私が裏番を”ほぼ”辞めたからだ。私がいなくなつたため、裏の世界の治安維持はノリオに任せたのだ。

ノリオ「まあ、ぼちぼちですよ。それよりも入ってください」

アルカ「……………失礼します」

私は入ってそのままリビング行く。ノリオは私についていく。

ノリオ「…さて、何故こんな時間にここへ？」

アルカ「……アルミの話はもう知ってるでしょ？」

ノリオ「はい、おとといあなたがきた時に話してたので。それに関係あるんですか？」

アルカ「ええ。あの子…昨日と今日スーパー化したのよ」

ノリオ「……なるほど。ちなみにどのタイプでしたか？」

アルカ「進化タイプよ。条件は限界突破だわ」

ノリオ「おお、それなら私たちの”計画”がやっとなり始めますね」

アルカ「そうね。でも、その計画を達成させるのは私じゃない。私は”条件”を2つ達成してるけど、3つ目はノリオに断られたわ。お前はそういう危険なことはするな、ってね。だから達成させるのは私じゃなくてアルミよ」

ノリオ「え？でも、アルミさんがやっても同じ結果にならないんですか？」

アルカ「……まあ、そうなるわね。”他の身内が死なない限り”、ね」

ノリオ「そうですね。あなたが仲間から死者を出したくないんですよ？そこをどうするんですか？」

アルカ「そうね。だから死ぬのは……よ」

ノリオ「…ッ!?正気ですか!？」

アルカ「ええ、正気よ。しかも、このままいけば14年後に100%…が死ぬ。だからちようどいいのよ」

ノリオ「……どうやってそれを知ったんですか？」

アルカ「占ったのよ」

ノリオ「占ってもらったのではなくて？」

アルカ「そう、私が占ったのよ」

ノリオ「……やはりあなたは天才であり天災ですね。でも、あなたのその決断、本当にどうにもならないんですか？」

アルカ「ええ、どうにもならないわ」

ノリオ「仮に………が反対しても？」

アルカ「……ええ」

ノリオ「……なら、私はもう何も言いません。ただし、私たちの計画だけは失敗してはいけませんよ。」

あなたが見つけた”完成者”を生み出す計画は」

アルカ「……………もちろんよ」

36年後に実現したその計画は、この時すでに始められていたのであった。

お盆といえは…? :

side アルミ・マリオ

私がスーパー化してから数日が経ち、私はどんどん体力をつけていき、今は300kmを問題なく走れるようになった。

お母さんが言うには目標は500kmらしい。

何故私がめんどくさそうにしないのかって？

…なんか、特訓するのが楽しくなってきたの。たぶん、お母さんの戦闘狂の部分が現れたと思う。

アルミ「ふう、疲れた…」

カービィ「お疲れ様〜」

アルカ「今日は早めに切り上げるわ。アルミ、カービィ、今日はなんの日か知ってる？」

カービィ「え、今日? ……あ」

アルミ「8月14にちだから…あ、お盆!」

アルカ「つまり?」

アルミ「お父さんに会える！」

アルカ「その通り☆今すぐあの世の広場へGO♪」

☆説明しよう！

お盆の時のみ、死んだ人々はその世の広場経由でこの世界で過ごすことができる！その時は幽霊アルカの誰でも見えるバージョンになる！

カービィ「ワープスター様、今日もイケメン！」

カービィさんは訳わからないことを叫ぶ。すると…

ティウルルン…☆

アルミ「あ、きたきた」

ワープスターが飛んできた。なんでおだてたらくるんだらうね…

カービィ「さあ、乗って乗って〜」

カービィさんはワープスターに乗ってそう言う。そして私とお母さんもワープスターに乗る。

カービィ「しゅっぱーっ♪」

ビュウウウン！

ーあの世の広場ー

カービィ「とうちやーく♪」

アルカ「今年も人が多いわね」

広めたのはお母さんたちのくせに何いつてんの？

(アルカが生き返ったことは6年前世間に報道され、この事も同時に判明したのである。)

アルミ「お父さん、どこかな？」

???「……………ん？」

アルミ「……………あ！いた！」

???「…よう、アルミ」

アルミ「お父さん、1年ぶり！」

マリオ「おう、大きくなったな」

アルミ「うん！私8才になって九九もできるよ！」

マリオ「そうか、偉い偉い」ナデナデ

アルミ「えへへ」ニコツ

アルカ「ふふつ、相変わらず娘に甘いわね」

カービィ「アルカの真ぎゃk「今なんて？」…すみません何も言つてませんごめんなさい」

アルカ「よろしい。1年ぶりね、マリオ。元気だった？」

マリオ「死んでるやつにするには変な質問だが、元気だったぞカービィ「僕のこと忘れてないよね？」

マリオ「俺の代わりにボケ役をしてるやつを忘れる訳ねーだろ。よう、カービィ」
アルミ「お父さん、私ね、時を止める能力を手に入れたの！」

マリオ「フア!?あのドリンクを飲んだのか!?腹痛にならなくてよかったな、お前」
アルカ「アンタはなったもんね〜♪」

マリオ「うっせ。アルミ、続けろ」

アルミ「うん。それでね、私ね、スーパー化もできるようになったの！」

マリオ「スーパー化?ああ、俺がなれるって言われてたやつか。俺は爆発タイプだったから記憶は飛んでたんだよな。お前は？」

アルミ「進化タイプって言われた！」

マリオ「そうか。ま、その力に頼りすぎるなよ」

アルミ「うん！」

アルカ「さて、マリオ、帰りましょ」

マリオ「ああ、帰るか。」

俺の自宅
(故郷)
へ」

お盆パーティー

sideアルミ・マリオ

ー秘密基地ー

アルミ「お父さん、ちよつとここで待っててね」

マリオ「何するんだ？」

アルカ「そこはまだ内緒よ。とりあえずまってて」

マリオ「おう、待つとくわ…」

カービー「すぐに呼ぶからね」タタタ：

ガチャツ。

アルカ「みんな、もういる？」

スタスタ：

ルイージ「僕たちはもういるよ」

デイジー「準備もほぼ終わってるわ」

ルイス「アルミ！ちよつと手伝ってくれ！」ゴトツ

アルミ「あ、うん！」サツ

アドレーヌ「食べ物描きたかったなあ〜」

アド「レーヌ、これは祝いなんだからそんなこと言わないの」

アドレーヌ「はい…」

ノリオ「今日は部下に任せました」

ミール「兄さん、警察が左右にいるのに何言ってるの？」

キノピオ「俺は気にしないぞ、逮捕する気ねーし」

ハリー「しかも仲間だし」

ミール「…まあ、私もだけどね」

キノ子ちゃん「私も通報しません！」

キノ太郎「えっと、お、俺も…」

ジーノ「一発芸のネタも用意したよ！」

ピーチ「あら、それは楽しみね」

クツパ「つまらなかつたら燃やすぞ、冗談だけどな」

カービィ「マジだったらひとたまりもないよ…」

今ここにいるのはお父さんとお母さんの仲間たちだ。

来てないのはロゼッタさんだけかな？女王様だから仕方ないかもしれないけど。

―数分後―

アルカ「よし、準備完了！アルミ、マリオ呼んできて」

アルミ「うん！」タタツ、ガチャツ。

マリオ「おう、終わったのか？」

アルミ「うん、終わったよ！さあ、入って入って」

マリオ「失礼します…ん？暗いな」

シーン……

アルミ「(あ、あったあった)コトツ

お父さん、このボタンを押してくれる？」

マリオ「ん？おう」ポチツ

次の瞬間……

全員「マリオ、お盆おめでとう！」

ドンドンパフパフ〜！

明るい光とクラツカーと共に全員でお父さんに祝いの言葉を言った。

マリオ「おお…！みんな、ありがとな！」うるっ…

ルイージ「兄さん、これは祝いなんだから泣かないでよ」

マリオ「いや、つい感動してな…」

アルカ「毎年この反応ね」

マリオ「毎年感動するんだよ、悪いか？」

カービィ「そんなことないよ。喜んでもらえて僕たちも嬉しいよ」

アド「その通りよ。今は楽しみましょう♪」

マリオ「ふっ…：そうだな！」

そして私たちのお盆パーティが始まった。毎年恒例の行事だけど、お父さんと過ごせる数少ない時だから、本当に楽しい。

アルミ「お父さん、私、鮭のバター焼き作ったよ！食べてみて！」

(アルカの得意料理は鮭のバター焼きです。なのでアルミはアルカに教えてもらいました)

マリオ「おお、美味しそうだな。いただきます」パクツ
お父さんは一口食べる。

アルミ「どう？美味しい？」ワクワク

マリオ「ん、アルカと同じぐらい美味しいぞ！」

アルミ「ホント？やった〜！」

良かった、美味しいって言われて。嬉しい〜♪

その後もいっぱい楽しんで、気づいたら時間があつという間に過ぎていた。

アルカとアルミはそろって可愛い。

side アルミ・マリオ

―次の日―

アルミ「ふあああ〜…」

アルカ「おはよう、アルミ。マリオを起こしてきてくれない？」

アルミ「了解！」タタツ

ガチャツ

マリオ「アルカは世界一可愛い…ムニヤムニヤ…」

お父さん、どんな夢見てんだろ？お母さんが可愛いっ…

…ちよつと寒気がしてきたからこれ以上考えるのをやめよう。うん、そうしよう。

アルミ「お父さん、起きて〜」ユサツ

マリオ「アルミも可愛いぞ…ムニヤムニヤ…」

アルミ「え／＼…もう、何言ってるのお父さん！」ユサツ

可愛いって言われるのは嬉しいけど、早く起きてよ！

アルミ「うーん…あ、そうだ！確か…お父さん、競馬場へ行こうよ！」

こう言えばいいんだっけ？

マリオ「何!?! 本当か!?!」ガパッ!

アルミ「おはよう、お父さん。引つかかったね☆」

マリオ「……ハッ! しまった! 俺はもう賭け事はしないことにしてたの! つい反応してしまった!」

アルミ「え、お父さん昔そんなことしてたの?」

マリオ「まあな。アルカと付き合う前の話だな」

アルミ「へえ。ま、とりあえずお父さん、起きて起きて」

マリオ「おう。やっぱこの寝心地はいいぜ」

お父さんはそう言って大きな欠伸をする。天国の方が寝心地よさそうなんだけどね
…そのうち飽きちやうのかな?

アルミ「お父さん、おんぶして〜」

マリオ「いいぞ。乗れ」

アルミ「よいしょっ」

マリオ「おお、去年より重くなってる。ちゃんと食べてる証拠だな」

アルミ「女に重いという言葉は禁句だよ?」

マリオ「あ、すまん、そういうことじゃ「ま、別に私は気にしないんだけどね」…

そ、そうか。朝飯でも食うか」

アルミ「うん！」

その後、朝ごはんを美味しく食べて、私たちはいつもの特訓をしに行つた。

――1時間後――

アルカ「300km走、スタート！」

アルミ「うおおおおおおおおお！」ダダダー！

マリオ「速いな。流石俺の娘だ」

アルカ「ほんと、最近特訓を始めたというのにこのスピードよ。ジヨジヨという成長性Aなんじゃない？」

マリオ「ま、まあ、そうかもな（やべ、言つてることが分からん）」

アルカ「あ、別に無理に理解しようとしなくていいわよ」

マリオ「さらつと心を読むな」

アルカ「別にいいじゃない。減るもんじゃないし」

マリオ「俺のプライバシーたるものがガクンと減るんだよ！」

アルカ「…ブーブー、つまんない」

マリオ「お前は幼稚園児か」

アルカ「マリオに対してだけこうなるの、プンプン！」

マリオ（何、この妻。めっちゃ可愛いんだけど）

アルカ「へっ？アンタ、久しぶりに私のことを可愛いって言ったわね／＼／」

マリオ「あ、口に出たか？本当のことだから安心しろ」

アルカ「う、うん／＼／」

アルミ（すでに走り終わってるんだけど、ラブラブすぎませんか？）

結局、私は大声で叫ぶまで気付かれなかった。

マリオは案外教えるのが上手い

side アルミ・マリオ

アルミ「もう、ラブラブしすぎでしょ！砂糖吐きそうになったじゃん！」

マリオ「なんでその表現知ってんだ？まだ8才だよな？」

アルカ「さあ。小説でも読んでたんじやない？」

はい、お母さんのスマホ借りて小説サイトで読書しました。

アルミ「そこは置いといて：お父さん、新しい技教えてよ！」

マリオ「うーん：新しい技か：。アルカ、アレはもう見せたのか？」

アルカ「いや、まだね」

マリオ「よし、ならそれを披露しようぜ」

アルカ「どうせ私がやるんでしょ？」

マリオ「いや、俺がやる。天国で記憶だけで練習してみただ」

アルカ「ふーん。なら頼んだわよ」

マリオ「オーケー、任せろ」

アルミ「お父さん、話は終わった？」

マリオ「おう、終わったぞ。まず技を見せるからよく見ておけ」
アルミ「うん！」

マリオ「……ハッ！」ボツ

お父さんは少し大きめの……うーん……サッカーボールぐらいの大きさの火の玉を出して地面に置いた。

マリオ「フツ！ハアアアアツ！」グルグルボオオオ……

そしてそれを蹴り上げ、お父さんは火を纏ってぐるぐると回転する。

マリオ「爆熱スクリュー！」ドツゴオン！

お父さんは思いっきり火の玉を蹴り、火の玉は地面にクレーターを残して消える。

……カッコいい！

アルカ「おお、なかなか上手く出来てたわね」

アルミ「すごい！どうやってやるの、それ!？」ワクワク

マリオ「まず、サッカーボールぐらいの大きさの火の玉を出してみろ」

アルミ「フウウウ……こう、かな？」ボオオオオ……

マリオ「ちよつと見せてみる」

アルミ「はい」

火の玉をお父さんに渡すと、お父さんはそれを叩いたり軽く潰したりした。なんでだ

ろ？

マリオ「なるほどな……。アルミ、お前のファイアボールは耐久力が足りないな」

アルミ「耐久力？なんで？」

マリオ「ああそうだ。だってよ、これを思いつきり蹴るんだぜ？そこで消えちまったら意味がないだろ？だから耐久力が足りないんだ」

アルミ「なるほど…で、どうやってそれを鍛えるの？」

マリオ「簡単だ。耐久力を上げるにはエネルギーのコントロールが必要だ。火の玉を少し圧縮する必要があるからな。だから、まずは瞑想だな、うん」

アルミ「えー、瞑想？めんどくさいじゃん！」

マリオ「じゃあ、お前に技を教えるのもめんどくさいからやめてもいいか？」

アルミ「あー、やっぱダメ！ちゃんと瞑想する！」

マリオ「よろしい。じゃあここに座って…」

アルカ「……………（マリオに会えるのは年に3日だけだから、かなり必死なのね…ま、私もそうじゃないつで言ったら嘘だけど）」

一方そのころ、マリオ自宅では…

カービィ「…………ハッ！」ガパッ

カービィがやつと起きた。

カービィ「今何時だろ?……え、もう13時!?午後じゃん!僕そんなに寝てたの!?!」
昨晩のパーティーで食べすぎた(カービィなのに?)カービィは、半日以上寝てたのである。

ノリオの家族

side アルミ・マリオ

マリオ「よし、もう一回ファイアボールを出してみろ」

アルミ「うん…ハアッ！」ポオオオ…

マリオ「…おつ、これなら充分丈夫だな。これを蹴つても消えてしまうことはないだろう」

アルカ「なら、ここで一旦休憩しましょ」

アルミ「やったー！」

マリオ「なあアルカ、アルミとキャッチボールしてたことあるか？」

アルカ「ダジャレのつもり？したことないわね」

マリオ「いや、そのつもりは無かったんだが…したことないのか…」

アルカ「何するの？」

マリオ「アルミ、今からファイアボールでキャッチボールしないか？それなら遊ぶと同時に特訓もできるぞ」

アルミ「うん！やるやる！」

マリオ「よし、お前が先に投げろ」

アルミ「ハアアア：タアッ！」ポイツ！

マリオ「よつと、ほい」ガシツ、ポイツ。

アルミ「フツ！ハツ！」ガシツ、ポイツ。

それからしばらくキヤッチボールをし、その後帰った。楽しかった。

sideノリオ

：ふう、やつと仕事も終わりましたし、帰りますか。

「お頭、お疲れ様ですー」

ノリオ「はい、お疲れ様です」

部下に挨拶されたので、私も挨拶を返します。当たり前のことですね。部下でしてない人がいたらバズーカをぶっ放してますので、しない人はいないと思いますけど。

天の声「さらつととんでもないこと言うな！そしてするな！」

いやいや、やらせたのは作者のあなたですよね？

天の声「メタい！」

あなたが言わないでください。あとさようなら。

ドガン！

天の声「ギヤアアアア：」フツ：

「……………（今誰に撃ったのか分からんけど、お頭怖えな…）」

「お頭、大変です！○○組がうちのシマで暴れまわってます！どうしやすか？」

ノリオ「公衆電話から警察を呼び、そいつらは縛っておいてください」

「へいー」 タタツ！

私はアルカさんに裏の世界の治安を守れと言われているので、この程度でひるむことはありませんね。

ー秘密基地ー

ノリオ「ただ今」

??? 「お父さん、おかえり」

奥の方から緑髪の少女が走ってきました。

ノリオ「歓迎ありがとうございます、ノア」

ノア「荷物持つから、早く上がって」

この子は私の娘のノアです。年齢は10才ですね。

ノリオ「ありがとうございます」

ノア「気にしないでよお父さん。私を拾ってくれたのは感謝してるんだから」

そう、この子は養子なんです。6年前の事件の時に両親を亡くし、そこで私が見つけ、拾ったんです。小さい頃に親を亡くす気持ちは私にも分かりますからね。

ノリオ「ノーア、何か食べたいものでもありますか？」

ノーア「お父さんが作ってくれるの？じやあ…ハンバーグで！」

ノリオ「分かりました。ひき肉を持ってきてくれませんか？買ってきたので荷物に入ってるはずですよ」

ノーア「はい。えつと…あ、あつたあつた。はい、お父さん。他にできることある？」

ノリオ「ありがとうございます。そうですね…食器でも準備しててくれますか？」

ノーア「うん！」タタツ

本当に、いい子ですね。極道の子にはもつたないくらい。私の組を継ぐのは彼女自身に決めさせましょうか。

また来年

sideアルミ・マリオ

今日は8月16日、つまりお父さんは今日天国に帰るということだ。その前に爆熱スクリューを完成させないとね。

アルミ「ハアアアアツ！」ドツゴオ!

マリオ「おお、なかなか上手く行ったぞ、今の」

アルミ「ホント? やった!」

マリオ「あとは角度ぐらいだな」

アルミ「角度?」

マリオ「そう、角度だ。人によつて蹴りやすい角度が違うからな。そこさえできれば完成だな」

アルミ「がんばる! ハアアアアツ!」ドゴオ!

アルカ「マリオは何時戻るつもりなの?」

マリオ「昼過ぎだな。昼飯食つてから昇るつもりだ」

アルカ「また1年寂しくなるわね」

マリオ「お前は待つのが得意だろ？オルゴール箱の中で1年近く待ってたんだから。それとお前にはアルミたちがいる。寂しくなることは決してねーと思うぞ」

アルカ「ふふつ、それもそうね」

アルミ「ここは？……うーん、ちよつとずらしたら……もうちよつとかな……」

マリオ「アルミ、お前に1つアドバイスをやる。蹴る角度は計算するんじゃなく直感でやれ。その方がしっくりくる」

アルミ「直感？分かった、やってみるね。……ここっ！」ドツゴオン！

お父さんが言った通り直感で蹴ってみた。するといつもより手応えを感じ、ファイアボールは地面に激突しクレーターを作り消える。

マリオ「……！（今の音、成功だ！）」

アルミ「……今のは！」

マリオ「すげーな、アルミ。アドバイス1つで完成しやがった」

アルミ「やったー！お父さん、ありがとう！」ダキッ！

マリオ「ただアドバイスしただけなんだけどな……」

アルミ「お父さんのアドバイスがよかったの！」

マリオ「そうだったか？まあ、どういたしましてだな」

アルカ「特訓もここまでにして、昼ごはんを食べましょう」

アルミ「うん！お父さん、行こう！」タタター

マリオ「あ、おい、待てよ」タタター

アルカ「…よかった、アルミが笑顔で」

そして、私たちは昼ごはんを楽しく食べた。

―あの世の広場―

アルミ「お父さん…元気だね」ウルツ

マリオ「ああ。アルミ、お前はもつと強くなれ。そしてその力を人を守るのに使うんだ」

アルミ「……………うん！」ダキッ！

アルカ「また来年ね、マリオ」

マリオ「そうだな。それじゃ、元気だな……………」パアアア…

お父さんは光と共に消えていった。

アルミ「お父さん……………私、強くなって1年後に驚かしてあげるから、天国でゆつくり過ごしててね！」

アルカ「……………（この子の考えも随分変わったわね。最初はあるなにめんどくさがつてたのに、今じゃ進んで特訓してるわ）」

アルミ「お母さん、帰って特訓しよ！」

アルカ「ふっ、そうね、行きましようか」
その時、2人の近くを紅い桜の花びらが通ったのは、誰も気づくことはなかった。

そしてアルミは強くなり、プロローグは終わる

side アルミ・マリオ

お父さんが天国に帰ってから数日後、私はひたすら足と肺を鍛えていた。どうやって肺を鍛えてるのかって？ マスク10枚つけながら特訓してるのよ。

アルミ「ハア：ハア：爆熱スクリュー！」 ドツゴオン！

今は技を鍛えてる。なんか新技が出来そうな気配がするんだけど、いまいち何かができるんない。

アルミ「お母さんは今日から仕事だしな…」

???「あ、アルミ！何してるんだ？」

アルミ「あ、ルイス！」

ルイス「よっ」

キノ太郎「俺もいるぜ」

アルミ「あ、キノ太郎もいたのね。私は今、特訓してるのよ」

ルイス「主になんの特訓だ？」

アルミ「新技を開発してるのよ」

キノ太郎「…なるほどな。俺たちでよければ手伝うぜ！」
アルミ「ホント!? ありがとう！」

それから数日、ルイスとキノ太郎に手伝ってもらいながら、私は新技の開発をしたり肺を鍛えたりした。

そして、夏休み最後の日：

アルカ「本当にテストを受けるのね？」

アルミ「うん、絶対合格してみせる！」

テストというのは、500kmを3時間で走るというテストだ。技を作ろうとしたのはこのためだ。

アルカ「じゃあ、私がいるところまで走ってきてね。それじゃ、スタート！」ピッ!

アルミ「うおおおおおおお！」ダダダダダダ

アルカ「おお、速くなってるわね。さて、移動移動つと」

私は30分ほど走った後、一旦立ち止まり、足に火を纏わせた。

アルミ「ハアアアア：ブーストダッシュ！」ドビユウン!

そう、これが私の新技。足に火を纏わせてロケットブースターのように加速させる。はじめから使わなかったのは距離的に体力が足りないからだ。

アルミ「このままダアアアッシュ！」

ー1時間15分後ー

side アルカ・マリオ

あと15分で2時間ね。それにしても暇だわ。

アルカ「ピー♪」

と思つてると、次の瞬間。

ビュウウウウン！

赤い服を着た人が通り過ぎ、突風が起きた。

アルカ「!?今のは…アルミ!?…時間停止！」

←ブウウウウン…

時を止めて誰が通ったかチェックしてみると…

アルカ「うん、やつぱりアルミね。なるほど、足に火を纏わせて走ってたのね。これ

なら速いのも納得だわ。再生」

→ブウウウウン…

私は時を再生させ、アルミの真ん前に行く。

アルミ「うおおお…お、お母さん!?!と、とと止まれな…い!助けて!」ドドドドド

アルカ「ハアッ!」ドゴッ!

私は冷静にアルミを片手で止める。

アルミ「グフツ…ハア…ハア…止まった…」

アルカ「アルミ、アンタさつきゴールを通り過ぎたのよ」

アルミ「え、そうなの？つまり…」

アルカ「ええ、タイムは1時間45分。合格よ、おめでとう」

アルミ「や……」

アルカ「や？」

アルミ「やったあああああ！」

アルカ「ふふつ、相当嬉しいようね」

アルミ「うん、これで目標が達成できたから！さて、特訓に戻…ろ…」フラツ

アルカ「あら」スツ

アルミ「Z z z …」くかー

アルカ「ふふつ、お疲れ様、アルミ。ゆっくり休みなさい」

こうして、アルミの体力を増やすための特訓は終わった。しかし、アルミはその後も特訓を続け、どんどん力をつけていった。

そしてまた四年間、平和が続いた。

アルミの特訓！ 完

キャラクター紹介

アルミ・マリオ

今の主人公。マリオとアルカの娘。

マリオのファイアとアルカの時間停止を使いこなす。

見た目はアルカに似ており、マリオの帽子のMをAに変えたものをかぶっている。

進化タイプのスーパー化ができる。条件は限界突破。

好きな食べ物はクッキー。

マリオ・マリオ

前の主人公で、アルミの父親、アルカの夫。

6年前に世界を救って死んだ。

ファイアを使って戦う。

爆発タイプのスーパー化ができる。条件は追い込まれて開き直すこと。

アルカ・マリオ

アルミの母親で、マリオの妻。

仲間たちの中で一番強い。

時間停止というチート能力も持っている。

しかも帽子なしで火を出せる。

実の母親に車にひかれ一度死んでいる。

この物語で登場し続ける人物。(転生含む。)

ルイス・マリオ

ルイージとデイジーの息子で、アルミのいとこ。

サンダーを使う。

父親と違ってボケ役。

進化タイプのスーパー化ができる。

ルイージ・マリオ

マリオの双子の弟で、ルイスの父親、デイジーの夫。先代ツツコミ役。

サンダーを使う。発電所の所長である。

爆発タイプのスーパー化ができる。条件はマリオ同様追い込まれて開き直すこと。

すでに一回死んでいる。

デイジー・マリオ

ルイージの妻で、ルイスの母親。

占い師で、かなり高確率で占いが当たる。

ノーマ・???

ノリオの義娘。6年前に両親を亡くし、ノリオに拾われた。

ノリオ同様バズーカを使って戦う。

見た目は緑髪で青い帽子とパーカーを着たアルミ。

蓄積タイプのスーパージョウ化ができる。

ノリオ・???

マリオの青いパチモンで、ノーマの義父。犯罪者。

バズーカを使って戦う。

極道組織のボスで、裏社会を守っている。

ここまで聞くと悪いやつだと思うが、実は妹であるミールを助けるために犯罪をしてきた。

今はもう助けたが、もう辞めることができないらしい。

ミール・???

ノリオの妹。バイクに乗りながら銃を撃ちまくって戦う。

情報捜査が得意で、刑事として働いている。

カービィ

ピンクの丸いやつ。マリオからボケ役を引き継いだ。

ものの性質を真似するコピー能力を使って戦う。

大食いのため奢る時注意。不老である。

アドレーヌ

アドの娘。絵を実体化させる能力を持っている。

アドより体力はあるものの、パワーは半分。

??タイプのスーパー化ができる。

アド

アドレーヌの母親。絵を実体化させる能力を持っている。

圧倒的パワー型で、HP10。

昔は人を○○さんや○○ちゃんとニックネームをつけていた。

キノピオ

キノ太郎の父親。

マッシュルームヘッド。足が速い。

警察署の所長として働いている。

キノ太郎

キノピオの息子。

正義感が強く、足が速い。

力が弱いので技術で戦う。

ピーチ

キノコ王国の女王。

ロゼッタ

ブルームプラネット国の女王。

クツパ

デカブツ。銃弾が効かない。

一人称がワガハイ。ピーチ大好き。

ジーン

木製のロボットだが、魂が入っている。

弓矢で戦う。

第6章 ただいま命がけで逃走中 突然すぎるニユース

sideアルミ・マリオ

アルミ「ヒマですな〜」

ルイス「そうですな〜」

キノ太郎「何もすることがありませんな〜」

アドレーヌ「私は絵を描いてますな〜」

ノーア「私もしますな〜」

アルミ「テレビでも見ますな〜」ポチツ

ニユースでも観よつと。

『今日のニユースd『オラア!』グハツ!?!』

ニユースキャスターが突然誰かに蹴飛ばされた!

ルイス「フア!?!」

そして黒いマスクをつけた人がカメラの前に立つ。

『やあ、キノコ王国の諸君。これから君たちには…』

…逃走中という名のデスゲームをしてもらう』

アドレーヌ「で、でデスゲーム!?!」

この人いきなり何言ってるの!?

『この「ハンター」と呼ばれる人たちに遭遇したら、出来る人は戦い、できない人は逃げるといい。負けたり、捕まったりしたらアウト、つまり死が待っている』

キノ太郎「マジかよ…」

『言っておくけど、制限時間はこの私を倒すまでだからね。逃げるだけじゃ永遠に終わらないよ』

ノーア「そもそもアンタ誰よ…」

『それと、範囲はキノコ王国全体だよ。もうすでに国の外に出ることはできない。ちなみに国に入ることもできないよ。見張りに大量のハンターがいるからね』

アルミ「じゃあカービーさんやロゼッタさんは外で待機になるわね…」

『最後に、この私が優先的に狙う人たちを言おうと思う。』

…まず、ルイージ・マリオ』

ルイス「父さん!?!」

『アド、ノリオ、ミール、キノピオ、ハリー、リボン、クツパ、ジーノ』

お母さんの仲間たちの名前が次々と告げられる。

キノ太郎「父さんたちも…」

『そして、私が最も優先的に狙う人は…』

アルカ・マリオだ。以上が私が優先的に狙う人たちだ」

アルミ「お母さんが最も優先的に狙われてる人……」

『逃走中は明日8時にスタートする。それまでに逃げる準備しておくことだね。それじゃ』プツツ……

……。

アルミ「とんだ」とんでもないことになってしまったわね……先に言われた……」

アドレーヌ「あー！あー！どうしようどうしようどうしよう！……」あたふた

ノーア「アドレーヌ、落ち着いて。大丈夫、大丈夫だから」

アドレーヌは慌てるが、ノーアが年上の包容力で落ち着かせる。

その時、玄関の扉が勢いよく開いた。

アルカ「アルミ、ルイス、アドレーヌ、キノ太郎、ノーア！5人ともいるわね!!」

アルミ「お母さん！さっきのニュース……」

ルイージ「残念ながら本当のことだよ」

ルイス「そ、そんな…」

アド「だから、私たちは今から秘密基地で作戦会議をするわ！レーヌたちはついてきて！」

アドレーヌ「う、うん！」

ノリオ「荷物を持って出来るだけ早く降りてきてください。くれぐれも物忘れのないように」

ノーア「…分かった！」

キノピオ「そういうことだ、さっさと準備しろよ」

キノ太郎「…：…おう！」

私、未だに本当なのかが信じられないんだけど…。

逃走中、スタート

sideアルミ・マリオ

―秘密基地―

アルカ「みんな集まったようね。これから私たちがすることをつたえるわよ」

全員「……………」ゴクリ…

アルカ「みんなはもう分かると思うけど、私たちはこのデスゲームの首謀者を探し、ぶちのめすわよ！」

うん、そういうと思った。

ルイージ「でも、どうやって探すんだい？」

アルカ「そこが問題なのよ。テレビでは仮面をつけてたし、声も変声機を使った可能性もあるわ。だからまずは明日ハンターに盗聴器でもつけましょう」

キノピオ「おお、それはいい考えだな。俺たち警察も追いかけるだろうし、それの方が証拠を集めやすい」

アルカ「そういうことよ。そして、これから私たちはここで住むわよ。この基地は地下にあり、ミールやジーノがつけたセキュリティがあるからバレにくいね。部屋は大

量にあるし、設備も充実してるからむしろ喜んですみそうだけど」

ノリオ「既に私とノーア、ミール、ジーノさんの自宅なんですけどね」

アルカ「まあそうね。最後に、アルミたちにミッションを与えるわ」

アルミ「ミッション？」

アルカ「そうよ。アルミ、ルイス、アドレーヌ、キノ太郎、ノーア。アンタたち5人には外で情報収集をしてもらうわ」

ルイス「ええ…」

アルカ「安心して。もし死にそうになったりしたら私がすぐにかかけつけるから。ま、そんなことは起こらないだろうけど」

キノ太郎「でも、俺たちは主になにすればいいのか…」

アルカ「そこは“後輩”に教えてもらいなさい」

アルミ「後輩?…分かった」

あの人、今何してるんだらう。

アルカ「伝えることは以上よ。解散」

ーアルミの部屋ー

アルミ「……………」

デスゲームって、お母さんからの話で聞いたことあるんだよね…確か、宝探しデス

少女は何かを放ち、それが地面に当たった反動で着地する。

?? 「ふう、なんとか着地できた」

—————

アルミ「…ん？」

外に出てみると、そこには黒髪ロングでお母さんと同じパーカーを着た少女がいた。

まさかこの人が？

アルミ「あのー、すみません」

?? 「ん？…あ！アンタまさかアルカ先輩の娘!？」

アルミ「はい、アルミと申します。あなたが後輩さんですか？」

ルメ「そうよ。私はルメ・パンドラ。先輩の従姉妹兼後輩ね」

え、従姉妹なんだ。通りで顔が少し似てるわけか…

ルメをよく見てみると、少し透けていた。この人…

アルミ「ルメさんって幽霊なんですか？」

ルメ「あら、よく分かったわね。その通りよ。アルカ先輩が死んだ一年後ぐらいに死んだわね。いやー、アルカ先輩は幽霊たちの救世主なのよねー！」

アルミ「そうなんですか？」

ルメ「そうそう。幽霊なのに何度も世界を救ってるし、他の幽霊を助けるし、生き返っ

てまた強くなるし…本当に凄いのよ」

アルミ「流石お母さんですね。」

ルメ「あ、そろそろ家に入ろうか、ハンターたちに見つかってしまいかもしれないし」
アルミ「それもそうですね。どうぞ」ガチャツ

ルメ「失礼します♪」

―秘密基地―

ルメ「アルカ…先輩…！」うるっ

アルカ「ふふっ、久しぶりね、私の従姉妹兼後輩、ルメ」

ルメ「アルカ先輩。あいたかったですうー！うわああああん！」ダキッ！

アルカ「あらあら、まだ子供ね。昨日いきなり電話して、びっくりした？」ナデナデ
ルメ「びっくりしてません…むしろ嬉しかったです。あと、私は永遠の15歳なので、

ずっと子供です！」

アルカ「そのセリフ、昔私が言ったような…」

(アルカは永遠の16歳と言っていた)

ルメ「…多分気のせいですよ。ところで、私を呼んだのは協力してほしいからですよ
ね？」

アルカ「理解が速くて助かるわ。実はね…」

「ただ今説明中」

→ やつとこのネタ出した

…と言うことなのよ。お願いできるかしら？」

ルメ「もちろんです！この”風幽のルメ”に任せて下さい！」

風幽？風幽の幽霊…かな？

アルカ「任せたわ。早速5人と調査してきてくれるかしら？」

ルメ「オーケーです！アルミたち、行くわよ！」

5人「…はい！」

こうして、私たちは強力な協力者をつけることになった。

(ダジャレオチ草)

あれ？弱すぎね？

sideアルミ・マリオ

私たち6人は調査のために外に出る。

アルミ「ルメさん、周りにハンターはいますか？」

ルメ「…いるわね、10体ほど」

ルイス「見つかりそうですか？」

ルメ「ふふっ…ほい」ドンッ

ルメさんは私を押し出した。

アルミ「え!?!…やべっ」

ハンター「…!!逃亡者、発見！」ダッ!

ルメ「あらら、バレちゃったわね。どうしましよったらどうしましよ」

アルミ「あなたのせいじゃないですか!…こうなったら！」ポオオオ…

ノーア「私も…！」スチャッ

私はファイアボールを出し、ノーアはバズーカをハンターに向ける。

ノーア「ドガン」ドガン!

ノーアはバズーカを放ち、それで一人跡形もなく消え去る。

アルミ「ハアアアア…」グルグル…

私はファイアボールを蹴り上げ、炎を纏って回転する。

ハンター「逃亡者を、撃て」バンバン!

ルメ「おっと、させないわよ」ビュン!グシャツ!

キノ太郎「は、速い…!」

ルメさんは目にも留まらぬスピードでハンターたちの銃を奪い、砕いた。

アルミ「うおおおおお!極・爆熱スクリュー!」

ドツゴオオオオオオオン!

ハンター「うわー」シューウウ…

ハンター「今日は暑いな…」シューウウ…

私が蹴り飛ばしたファイアボールはハンターたちに直撃し、ハンターたちは蒸発する。

アドレーヌ「このハンターたち、人間じゃないみたい」

ルイス「まるで分身みたいだ…」

ルメ「いい予想ね、多分正解よ。私の予想だけど、恐らく本体のエネルギーを使って分身を作ってるわ」

アルミ「なるほど、だから手応えがなかったんですね……」

ルメ「とりあえず敵は倒したし、進みましょう」

アルミ「はい！」スタスタ……

私たちは街を歩いて行く。

途中何人か逃亡者がいたが、問題なく逃げれていたようだ。

そして私たちはピーチ城の近くまで来た。

アルミ「あれは……！」

ハンター「…………」じー

ルメ「どうやらピーチ城は乗っ取られてるようね。ピーチ姫どころか、家来たちも捕らえられてると思うわ」

キノ太郎「……お母さん！」ダッ

キノ太郎はピーチ城に走ろうとするが、それをルイスが止める。

ルイス「落ち着けキノ太郎。下手に動いたら殺されちまうぞ！」ガシッ！

キノ太郎「ッ……！」スッ

ルメ「キノ太郎くん、きつとお母さんは無事だから。私たちは調査に集中しましょう」

キノ太郎「……はい」

ルメ「よろしい。さて、そろそろ戻った方がいいわね。時間をかけ過ぎると見つかる

確率も上がるし。レーヌちゃん、ここにさつき渡したカメラを置いてくれる?」

アドレーヌ「はい!ここですか?」

ルメ「うん、そこよ。さて、帰るわよ」

ルメさんはそう言い、私たちは秘密基地に帰っていった。

――

―その夜―

アルカ「ルメ、アンタに大事な話があるの」

ルメ「何ですか、先輩?」

アルカ「私、10年後に……の」

ルメ「え……?嘘ですよね……?」

アルカ「いや、本当よ。何度占つても同じ結果よ。原因も全く同じ」

ルメ「その原因って……?」

アルカ「………の………よ」

ルメ「…ツ!」

アルカ「でも安心して。その時の……者は………だけだから。しかもその後………は二度と………しないし、私はその後………するから。アンタはアルミを支えてくれる?」

ルメ「…分かりました。アルカ先輩がそこまで言うなら何も言いません。…でも…

勝手に自分を……ないでくださいよ、先輩。……失礼します」

そしてルメは自分の部屋に入っていった。

アルカ「……それもそうね。でも……」

私は一息着いてから言う。

この世界はそうなってるから、どうしても起きてしまうのよ、ルメ」
私の意味深な発言は……

?? 「……………（私、この時にこんな意味深発言したのね）」
未来から来た誰かが聞いていた。そのことは私も知ることはなかった。

幽霊の特権

side アルミ・マリオ

ー次の日ー

アルカ「今日も調査をしてもらうわ。ただし、アルミとルメとリボン先生の3人で行きなさい」

リボン「やっと私の出番が来た…」

ルメ「了解です！」

アルミ「今度こそドンパチになってほしい…」

アルカ「この3人が一番調査をしやすいと判断したわ。出動！」

2人「はっ！」

ルメさんとリボン先生はノリノリね。

アルミ「出動って…って、もういない!? まってー！」

ーピーチ城付近ー

ルメ「昨日設置したカメラの映像によると、1時間に30秒ぐらい見張りがいない時があつたわ。そこを狙ってリボン先生と私が空に飛び、アルミは時を止めてピーチ城に

潜入するわよ。もちろん、私とリボン先生は動けるようにしてね。分かった？」

アルミ「分かりました。でも、何で今から時を止めてはいけないんですか？」

ルメ「タイミングの問題よ」

リボン「はあ……」

―数分後―

ハンター「おつ、そろそろ交代の時間だ。おい……」

テクテク。

ルメ「……今よ！」

アルミ「時間停止！（ルメさんとリボン先生以外）」

←ブウウウン……

リボン「これが、時の止まった世界……」

あ、そういえばリボン先生は初めてだったわね。

ルメ「なるほど、モノクロになるのね。……行きましょう」

―城の中―

アルミ「中もハンターが見張ってますね……」

ルメ「リボン先生、縛っててくれる？」

リボン「オーケー♪」ぐるぐる……

リボン先生は触覚を伸ばしてハンターたちをぐるぐる巻きにし、結んだあとに切り離れた。

リボン「これで完了♪」ギユウウウ：

…これ、時が動き出したら絶対ビツクリするよね？

ルメ「さて、進みましょう」

スタスタ：

―牢獄部屋―

リボン「家来たちが捕まってる…」

アルミ「…あ、きの子ちゃんさん！」

→チャン付けしなきやいけないため、ちゃんの後にさんを付けた。

牢獄の中にはきの子ちゃんさんもいた。

ルメ「…あつたわ」ジャラ：グシャツ。

ルメさんは近くにいたハンターから牢獄の鍵を奪い、銃を砕いた。ちなみに中にいたハンターたちが持ってた武器は全て奪い、燃やすか砕くかどちらかをしている。

アルミ「これで後々助けられることができますね！」

ルメ「そうね。次の部屋へ行きましょう」

―王室―

リボン「でっかい扉ね……」

ガチャガチャ……

ルメ「中から鍵がかかっているようね。恐らく中に首謀者がいるわ」

アルミ「……ルメさん、この部屋に窓ってありました？」

ルメ「一回入ったことあるけど、確かあったわね。……まさか、そこから中を覗くの？」

アルミ「はい、その通りです。やってみます？」

ルメ「そうね……。でも、そろそろ1時間経つし、アンタとリボン先生は先に帰って。あとは私がやるから」

リボン「……死んだりしないよね？」

ルメ「安心して、私はもう死んでるから。行きなさい」

アルミ「……はい、分かりました。リボン先生、行きましょう」スタスタ……

リボン「う、うん……」

私とリボン先生は先に帰っていった。

side ルメ・パンドラ

ルメ「……行つたわね。さて……Let's do this。(やろうぜ)」

私は城の外に出てから空を飛ぶ。どうやって飛ぶのかって？ 私は風を使うから、それ

で飛ぶのよ。

ルメ「さて、部屋を覗いて…と」チラッ

中には檻に入っているピーチ姫ともう1人、黒い仮面をつけた人がいた。

??? 「ふふふ…私の計画は順調ね…」

この声…どこかで聞いたことあるような気が…

??? 「このDSさえあれば、私はどんなこともできる…ふふふ…はははははっ！」

DS? うーん…この人どこかで…

とりあえず首謀者らしき人は見つけたわ。帰ってアルカ先輩に伝えることにしよう。

??? 「……………」

ルメ「？」

私は一瞬見られた気がしたが、気のせいだろうと思い、そのまま空を飛んで秘密基地に帰った。

速すぎる展開…まさか!?

side アルカ・マリオ

ー次の日ー

昨日ルメからピーチ城の様子を報告された。

首謀者らしき人物はどうやら黒い仮面をつけている女の子で、DSを持っていたらしい。

アルカ「今日は…何もしなくていいわよ」

アルミ「…え？」

アルカ「私が調査するわ。気になることがあるし」

ルメ「でも先輩、それ危ないですか？ここはバレにくい私が「何言ってるの？ア
ンタもくるのよ」…そうだったんですね…」

アルカ「ということで、ルメ、行くわよ」

ルメ「はい！」ガチャツ。

さて…と。

アルカ「ルメ、頼むわよ」

ルメ「了解！」ガシッ

ルメは私を持ち上げて空を飛ぶ。

地上にいるハンターたちはそれに気付く。

ハンター「逃亡者、発見！撃ち落とせ！」バンバンッ！

ルメ「うわっ、当たっちゃいますよー！」

アルカ「…ルメ、アンタを踏み台にするけど、いい？」

ルメ「え？いいですけど…ぐえっ」ドッ

私はルメを踏み台にしてジャンプし、足に火を纏わせて縦に回転する。

アルカ「ルメ！風を！」

ルメ「はい！…ハアッ！」ビュンッ！

ルメは風の球を投げてくる。それに私がかかと落としを入れる。

アルカ「フレイムドロップ！」ドッゴオオ！

ゴオオオ！

私が蹴り飛ばした火を纏った風の球は敵に向かって飛んでいき、見事に命中する。

ハンター「ぐああああっ！」フツ…

ルメ「ぐえっ」ドゴッ

アルカ「さて、進むわよ」スタッ

ルメ「先輩、もうちよつと優しい着地をしてください…」

アルカ「私の家の近くでクレーターを作って着地したアンタに言われたくないわよ」

ルメ「あ、そうでした。…とりあえず進みますか」

アルカ（あ、逃げた）

ーピーチ城屋根ー

アルカ「さて、ここからは慎重に行くわよ、ルメ」

ルメ「はい、分かってます…」スツ…

ルメは王室の窓から中を覗く。

???「……………あれ？おかしいなあ…電池切れかな？」

ルメ「……………状況はグリーンです」

アルカ「オーケー。時間停止！（ルメ以外）」

←ブウウウン…

パリンツ！

時を止めた私は王室の窓ガラスを割り、中に侵入する。

ルメは私の後に入ってきて、すぐに首謀者らしき人物の前に行く。

ルメ「さて、正体を現してもらおうわよ！」バツ！

ルメはそう言って仮面を取り外す。

アルカ「……………ツ!？」

仮面の下の人物は私の知り合い、いやルメの友達だった。

ルメ「……………すみれ!? 何故ここに!？」

首謀者らしき人物の正体はすみれだった。

アルカ「……………すみれの目、いつもは青いはずなのに今は赤いわね。恐らく洗脳されてるんだわ」

ルメ「…ハア、よかったです。もしもすみれが首謀者だったら私…やばいことになってましたよ」

アルカ「とにかく、アンタはDSを取って隠しておきなさい！再生！」
→ブウウウウン…

すみれ「え!?!何でここに敵が!?!」

…さて、これはおかしなことになりそうね。

ステージ1…だと!?

side アルカ・マリオ

すみれ 「何でここに敵が!？」

ルメ 「すみれ、私よ! ルメよ!」

すみれ 「ルメ? うーん………フーアーユー?」

アルカ 「すごい煽り方ね…」

ルメ 「……私を忘れたの?」 イラッ

すみれ 「アイドノンノーフューアー」

ルメ 「……なら、思い出させてあ・げ・る♪」 ゴキゴキ…

すみれ 「あ、煽りすぎた。DSを「渡さないわよ」…え!? 返してよー!」

アルカ 「敵に武器を返すわけないでしょ! アホなの!？」

すみれ 「あ! 今アホって言った! アホって言ったのがアホなんだよ!」

アルカ 「子供か!」

すみれ 「子供ですけど何か?」

アルカ 「ぐぬぬ…ルメ、やっっちゃいなさい!」

は巨大キノコ山脈を加えた地域になる。これで逃げる選択肢が増えるかもしれない。今のところ死者はいないが、このステージで大量に出るだろう。気をつけたまえ。それでは御機嫌よう』プツツ：

…ステージ…1…だど!?

ルメ「展開が速すぎると思つたら…!」

まさか…!

アルカ「ピーチが檻の中にいない!」

ルメ「別の所に転送されたんでしょうか…?」

すみれ「え?え?どういう事?」

アルカ「私が説明するわ。これはね…

ーただ今説明中ー

…という事なのよ。さて、アンタはどうするの?」

すみれ「私は…みんなと合流して逃げます。貴女たちの力になれそうにないです」

ルメ「いやいや充分なれるでしょ!?!」

アルカ「…分かつたわ。とりあえずアンタの仲間たちのところまで連れて行くわ」

すみれ「あ、その必要はありません。えっと、こうしてこうして…ハッ!」ポワン!

すみれはDSで絵を描くと、画面をタップしてそれを実体化させた。これは…ワープ

機?

すみれ「それでは、さようなら!」シユツ…

すみれはワープ機で転送され、ワープ機は消えてしまった。

アルカ「なんか…嵐のような人だったわね…」

ルメ「すみれの能力はチート級何ですけどね…DSがなければ無力なんですよね…」

アルカ「ま、いいわ。早く帰ってみんなにこの事を伝えましょう」

ルメ「…はい!」

…このデスゲーム、長い戦いになりそうね。

二番煎じってなーに？

side アルミ・マリオ

アルカ「……と言うことなのよ。理解できた？」

私はお母さんからこのデスゲームのレベルについて聞いた。

アルミ「……全部で何レベルあるんだろ？」

アルカ「それも不明よ。だから今からアンタとノーアに調査に行かせるわ」

ノーア「はい！アルミの二番煎じ、出動します！」

……二番煎じって何？

(マリオが言うにはノリオが二番煎じ、ハリオが三番煎じとなっている。ノーアはアルミの髪が緑色でパーカーが青バージョンのため、ほぼパチモンである)

アルカ「あ、その前に：ノーア、これをかぶっていきなさい」スツ

お母さんはそう言って真っ白な帽子を出した。

ノーア「何ですか？これ」

アルカ「これはスーパークャップと言って、これを初めてかぶった人によって色が変わり、出せるようになる能力が変わるのよ。ちなみに、今アルミがかぶってる帽子は、マ

リオがかぶって赤くなったスーパーカーキヤップね」

ほえー、そうだったんだ。

ノーア「これをかぶるんですね？分かりました…」パサツ

ノーアは帽子をかぶった。すると、帽子は青くなり、その真ん中にNと言う文字が浮き出た。

アルミ「うわっ、すごい仕組み…」

アルカ「どうやら成功したようね。どんな能力になったのか出してみて」

ノーア「はい……ハッ！」カチン！

ノーアは手に力を入れると、氷の球が出てきた。

アルカ「なるほど、氷ね。本当にアルミの二番煎じになっちゃったわね…」

アルミ「さっきから二番煎じって言ってるけど、どう言う意味？それ」

ノーア「……察しなさい」じー

アルミ「……あ、はい、すみませんでした」

知ってない方がおかしいという事は分かったわ。

アルカ「それじゃ、行ってきなさい」

アルミ「はい、行ってきまーす」ガチャツ。

ー外ー

アルミ「…さて「さて、どこから行く?」…………。そうね、まずはピーチ城をチエツクしない?」

ノーア「それが良いわね、途中でハンターに遭遇したら能力を試せるし」

アルミ「それじゃレツツg「逃亡者、発見!」…もう!」

ハンター「吹き飛ばしてやる!」スチャツ

ハンターは1体だけだけど、バズーカを持っていた。

ノーア「…アイスボール!」カチンツ!

ノーアは氷の球を投げる。

ハンター「ムツ!?!…あ」カチーン

アルミ「おお、お見事!」

ノーア「さて、行こ行こ!」テクテク

アルミ「おー♪」スタスタ

ハンター「……………(だれか、溶かしてくれー!)」

凍らされたハンターの思いは、届く事はなかったのであった。

ピーチ城崩壊!?

side アルミ・マリオ

ノーア「ハンターが少ないわね」

アルミ「しかも、ピーチ城からまるで逃げてるみたいだわ。なんか起きたのかしら？」

ノーア「とにかく、急ぎましょう」

アルミ「…ええ」

ーピーチ城ー

ピーチ城に着いたけど、何もおかしいことは…

シユウウウウ…

…あつた。

アルミ「何？この音」

ノーア「中の方からするわね」

私とノーアは城の中に入る。すると…

ハンター「あと、30秒…」シユウウウウ…

ハンターが縄と黒い球を持って突っ立っていた。

ノーア「あ、アルミ、あの黒い球って…」

アルミ「十中八九爆弾ね」

ノーア「早く止めないと！」

アルミ「そうね。時間停止！（ノーア以外）」

←ブウウウウン…

アルミ「で、どうするの？」

ノーア「こうする！アイスボール！」カチン！

ノーアは導火線を爆弾とハンターごと凍らせた。

アルミ「なるほど、いい考えね」

ノーア「ハッ！……もう大丈夫だと思っわ」

アルミ「オーケー！再生！」

→ブウウウウン…

ノーア「ふう、とりあえず2階に上がり「ピッ…ピッ…」何今の音？」

アルミ「まさか…別の爆弾が？」

ノーア「……………」

2人「……………逃げよう、今すぐ！」ダダダダー！

私たちは全く同じことを言った。って言ってる場合じゃない！逃げないと！

アルミ「ノーア！掴まって！」バツ！

ノーア「…うん！」ガシッ！

「ピピピピピピピ…」

アルミ「うおおお！超ブーストダツシユ！」ドツゴオン！

私は音速レベルのスピードでピーチ城から逃げ出した。ノーアをお姫様抱っこしながら。

ノーア「はー！ー！やー！ー！いー！ー！わー！ー！よー！ー！」

アルミ「我慢しなさい！」

そして…

ドツ…ガアアアアン！

背後でピーチ城が爆発した。大きなキノコ雲を残して。

アルミ「くっ…見つけられなかった…私のせいで…！」

ノーア「アルミ…今のは仕方なかったのよ。私たちはまだ経験が足りなかったの。そして幸い中には誰もいなかった（すみれを倒したあとアルカが捕まっていた人たちを逃したから）でしょ？だから被害であるピーチ城は直せばいいは後悔するより、次に出来ることを考えない？」

ノーアは、私にそう話しかけた。

……子は親に似るものね。ノリオさんみたいに優しいわ、ノーアは。

アルミ「……ありがとう、ノーア。少し気分が良くなったわ」

ノーア「どういたしまして」

アルミ「……さあ、調査を続けましょう」

ノーア「了解」

私の行動不足で、ピーチ城は爆発し、崩壊してしまった。これは私にとって大きな経験になった。二度とこんな失敗をしないよう、私はケツイをするのであった。

遊びま死よう♪

side アルミ・マリオ

アルミ「ハア…ハア…」

ノーア「大丈夫？走った上に時間停止もしたから疲れてるでしょ？」

アルミ「そうね…少し休憩するわ」

ノーア「ところで、いつ帰って連絡するの？」

アルミ「夕方かな？それが妥当だとおm「ギャアアアア！」……え!？」

ノーア「行ってみよう！」タタツ!

私とノーアは急いで声がした方に走った。

そこには…

ノーア「何、この光景……」

アルミ「酷い……」

???「……あれー？もう死んじやったのー？つまんなーい！」

1人の少女を中心に血まみれの空間があった。

所々に無数の刺し傷がある遺体があり、壁や床には血が付いていた。特に遺体の周り

には血だまりができていた。

ノーア「……っ！この異臭……！」

アルミ「おそらく死体から来たものね……グロすぎるわ……」

???「んー？あつ！遊び相手を2人みつけ！」クルツ

少女はそう言っつてこつちを向いてきた。

彼女は橙髪で、オレンジとピンクのしましまのセーターを着ていた。

ケーティ「私はケーティ・ノーア！いつ死よに遊びま死よ♪」ジャキツ！

そしてナイフをこちらに向けてきた。

ノーア「アルミ……！」

アルミ「……ええ。この娘……」

…とんでもないサイコパスね」

ケーティ「さいこばす？何それー？」

アルミ「アンタみたいな人殺しのことよ。それよりもアンタは何故殺したの？」

ケーティ「なんでつてー？それはねー、私が殺したらー…」

「ジャキッ

ケーティは喋りながらナイフを構え…

ノーア「……………まずい！」

アルミ「……………ッ！」キッ！

ケーティ「EXPが貰えるからだよー？」ズバツ！

私に殺気のコモった斬撃を1発入れてきた。しかし…

アルミ「……………ぐっ…！」ギギギ…

私はそれを白刃どりにした。ギリギリ止めた。

ノーア「アルミ…！」

ケーティ「わーっ、すごいね！私のナイフを止めたー！でも、次は当てるからね？」

サッ

ケーティはナイフを抜き、数歩下がった。

ケーティ「……………バトルスタート！」

チツチツ…ピユウウン！

彼女がそう言った次の瞬間、周囲は暗転し私たち3人は白くなった。そして、私は赤、ノーアは青、ケーティは橙のハートが浮き出していた。

ノーア「え!？」

アルミ「なにこれ!？」

ケーティ「……………ふーん、セイジツとケツイかー。ケツイの方は殺しがいがありそうだねー♪」

ケツイ?セイジツ?このハートのことかしら?

ケーティ「さーて、そのタマシイ、いっただきい!」ザツ

ノーア「アイスガード!……………ぐうっ!」バリッ!

アルミ「ノーア!」

ケーティはノーアに突撃し、ノーアの氷のガードをいとも容易く割ってしまふ。

ケーティ「弱い防御だねー!」ザクッ!

ノーア「……………危なかった…」

ケーティはその隙にナイフで刺そうとするが、ノーアは紙一重でかわし、ナイフは壁

に突き刺さる。

アルミ「…もう見てられないわ！ハアツ！」ボオオオ！

ケーティ「うわっ！熱ーい！」ボオオオ！

ノーア「今よ！ドガン！」ドガン！

私はファイア、ノーアはバズーカでケーティを攻撃する。

ケーティ「ううう…痛いよお…」シユウウ…

ケーティは足に風穴が空き、腕が焼けている。なのに全然大丈夫そうな顔をしている。

アルミ「何よ…その顔…！」ゾツ…

ノーア「サイコパスすぎる…！」ゾツ…

ケーティ「さあ、遊びを続けま死よう♪」きゃははっ♪

この時、私は初めて死の恐怖を知った。

残酷な死闘

sideアルミ・マリオ

……怖い。目の前にいる少女が。

燃やされた上に足に風穴が開いているのに、平然な顔をしてるケーティが。

ケーティ「きやははっ、来ないなら私から行くよー！」ズバツ！

ノーア「アルミ！危ない！」カチン！

ケーティ「フン！」バリン！

アルミ「………ツ！」サツ！

気付いたらケーティは目の前に来ていた。しかも、ノーアの氷のガードを簡単に砕いて。

ケーティ「あれー？かわしちゃったー？」

アルミ「………っ、来るな……」

ノーア「アルミ……？」

ケーティ「ん？もしかして……怯えてるー？」

アルミ「来るな………」

ケーティ「きゃははっ、怯えてるねー！」

ノーア「アルミ、しっかりしなさい！敵は目の前にいるのよ！」

アルミ「……っ！そうだった！」

ケーティ「あつ、残念だったな。あとちよつとで絶望した顔が見れたのに……」ギロツケーティは殺気のコもつた目つきで睨んでくる。

アルミ「ハア……ハア……ハアツ……！」ポオオオ……

私は睨まれ怯みながらも火を出して攻撃準備をする。

ケーティ「ふーん、耐えるんだ……こつちは？」ギロツ

今度はノーアを睨む。

ノーア「……この……殺人鬼！」ドガーン！

ケーティ「……ガツ」ズドツ

ノーアは怯まずにバズーカを放ち、光線はケーティの脇腹の一部を吹き飛ばす。

ポタ……ポタ……

ケーティの脇腹から血が滴る。

ケーティ「……あれ？また当たっちゃったね。おかしいな、今日は調子が悪いのかな

？」

なのにまた平然とした顔。

……なに、コイツ。

アルミ「アンタ…本当に生きてるの？」

ケーティ「えー？もちろんだよー？脇腹とか足に穴が空いてちよつと痛いけど、まだ戦えるよー？どうせタマシイをいただいたら回復するしー」

ノーア「……とんだサイコパス殺人鬼ね。消えなさい」ギユウウン…

ケーティ「させないよー？」ズバツ！

アルミ「ハアツ！」ドゴツ！

ノーアがバズーカのエネルギーをためているところをケーティが邪魔しようとするが、私が止めに腹パンをいれた。

ケーティ「…ガハツ！」ブシヤツ！

ケーティは血を吐き出し、少し私にかかる。気持ち悪い…吐きそうになるのを必死に我慢しながら、足に火を纏わせる。

アルミ「ぐっ……オラア！」ドガツ！

ケーティ「グハツ！」ボキツ！

そしてケーティに腹を思いつきり蹴る。ケーティは倒れ、再び血を吐き出す。

アルミ「…もう、諦めなさい」

ケーティ「…そうだね…私はどうせ殺人鬼だし、もう殺してよ」

あっさりと諦めていた。

ノーア「……………アルミ、どうするの？」

アルミ「…ケーティ、負けを認めるの？」

ケーティ「そうだねー…もう、動けないし、タマシイもただけじゃないし…私の負けだよ」

ケーティがそう言った瞬間、世界は色を取り戻した。

アルミの本性

sideアルミ・マリオ

……………。

ケーティ「で、どうするのー？私を殺すの？見逃すの？」

ノーア「アルミ、殺すと言ったらすぐにこのバズーカをぶっ放してこいつを跡形もなく消し去るわよ。絶対に選択を間違えないでね」

アルミ「……………ケーティ、いくつか質問があるわ」

ケーティ「なーに？」

アルミ「アンタは今まで何人殺したの？」

ケーティ「……………それを聞いてどうするつもr」答えろ、死にたいのか？……………ッ、

56人だよ」

アルミ「へえ……………次の質問よ。アンタを解放したらどうするつもり？正直に答えなさい」

ケーティ「……………いつも通り殺しまくるねー」

アルミ「……………そう。じゃ、最後の質問だわ。アンタ…

”誰に”殺せと言われてるの？”

ケーティ「……………!!」

ケーティはその質問に目を見開く。

ノーア「アルミ、どういうこと？」

アルミ「ケーティは確かにサイコパスみたいね。でも、わずかに躊躇いを感じた。本当に殺したいなら私たちはすでに腕一本斬られてるわよ」

ケーティ「私は……………！」うるっ

ケーティの表情は一転し、泣き出しそうな顔になる。私はケーティに歩み寄り…

アルミ「さあ、今までのことを正直に話しなさい、”妹”よ」ナデナデ
頭をそつと撫でる。

ケーティ「う……うわああああん！ごめんなさあああい！」ギユツ！

ノーア「……！」

ケーティ「わだじ、はつぞうがぐるつでるがらりようじんはずでられて、ずぐじづま
えにひろわれだんだよ。でも、あいづはわだじにぜんいんごろぜとめいれいしでぎだん
だ！しないとごろざれるんだ！ぞじでぎづいだらごろずのをたのじむようになつでだ。
ほんとに、ほんとにごめんなさああい！うわああああん！」

（私、発想が狂つてゐるから両親に捨てられて、数日前に拾われたんだよ。でも、アイツは
私に全員殺せと命令してきたんだ！しないと殺されるんだ！そして気付いたら殺すの
を楽しむようになってた。本当に、本当にごめんなさい！）

ケーティは私に抱きついてまるで呪縛から解放されたように泣き出した。

アルミ「そうだったのね、かわいそうに……でも、もう安心して。私がある限り、アン
タは二度と人殺しなんてしなくていいわ」ナデナデ

ケーティ「ううう……本当？」

ケーティは顔を上げて聞いてくる。

アルミ「ええ、本当よ。絶対に助けてあげる」

ケーティ「ありがとう……お、お姉ちゃん！」ダキッ！

ノーア「……いい考えね、ふふっ」スチャッ

ノーアはバズーカを下げ、電源を切った。

アルミ「これからよろしくね、ケーティ」ナデナデ

ケーティ「うん！……なんか、眠い……Zzzz……」スヤスヤ……

ノーア「あら、寝てしまったわね」

アルミ「傷には包帯でも……あれ？」

シユウウウウ……パッ！

ケーティの体の傷はどんどん回復し、しまいには傷跡も無くなっていた。

ノーア「すごい回復力ね……」

アルミ「そうね……さて、帰りましょうか」

新しい家族を連れて。

本当の姉妹にしか見えない

side アルカ・マリオ

ー秘密基地ー

アルカ「……ハア」

アルミとノーアが調査から帰ってきた。そこまではいい。

ノーア「あはは……」

アルミ「……連れてきたの」

ケーティ「お姉……ちゃん……ムニヤムニヤ……」スヤスヤ

アルミは気持ち良さそうに寝ている橙髪の女の子をおんぶしていた。

アルカ「連れてきたのは分かるけど、その子誰？」

アルミ「この子はケーティ・ノーア。私の妹になる子よ」

……え？妹？

アルカ「……説明しなさい」

ーただ今説明中ー

アルカ「なるほどね……」

アルミはノーアの補助と共になぜケーティを連れてきたのか、なぜケーティを妹と呼んでいるのかをちよんと説明してきた。その時のアルミの目はケツイがこもっていた。嘘はないようね。

アルミ「お願い！ケーティを引き取って！」

アルカ「……………」今は「ダメよ」

アルミ「……！じゃあいつ？」

アルカ「数日前にケーティを拾った人をどうにかしてからよ。それまでは引き取らないわ」

アルミ「……分かった！」

ケーティはそんな年齢で人殺しをしている。しかも私の半分ぐらい。

（アルカは裏番として屑どもの死刑執行人をしていた為、120人ほど殺している。しかも一撃で）

しかし、アルミのその性格、まるで本当の姉ね。姉である私でこそ分かるわ。

ノーア「私はこれで失礼します」ガチャッ。

アルカ「ええ、お疲れ様」

アルミ「……………」ナデナデ

ケーティ「うーん……ふわあ〜」

アルミ「あら、起こしちゃったわね。おはよう、ケーティ」
ケーティ「おはよう！お姉ちゃん〜！」ダキッ！

アルミ「ふふっ、可愛い妹ね」ナデナデ

アルカ「……………ふふっ」

まるで本当の姉妹だわ。今日会ったばかりなのに。

ケーティ「んー？」クルツ

アルミ「この人がお母さんよ」

ケーティ「わーい！お母さん！」ダキッ！

アルカ「…ふふっ、お母さんよ。よろしくね、ケーティ」

ケーティ「うん！よろしくー！えへへ〜」

…この子、アルミのおおかげかな、かなり明るい性格ね。

アルミ「ケーティ、お姉ちゃんと一緒に、みんなに自己紹介しようか？」

ケーティ「うん！お母さん、また後で！」タタツ

アルカ「ええ、また後で、ね♪」

ガチャツ。

アルカ「……………あの子の目、呪縛から解放されたような目をしてるわね。流石私の長

女、と言った所かしら？…さて」

………可愛い次女に人殺しをさせた最低で屑な犯人探しを始めましょう。

アルカ「久々に本気を出す時が来たようね……」

ふふっ……誰かはそのうち知ることになるだろうけど、覚悟しておきなさい、犯人さ

ん♪

本格調査開始！

sideアルミ・マリオ

ー次の日、会議室にてー

アルカ「今日はキノコ王国及び巨大キノコ山脈を徹底的に調査するわよ。そこで、4つのチームに分けることにしたわ。各チームのリーダーは私、ルイージ、キノピオ、ノリオよ。メンバーはこういう感じだわ」カキカキ

そしてお母さんは会議室のホワイトボードにチームメンバーを書いた。

現在ここにいるメンバー（戦闘可能）

アルカ、ルイージ、キノピオ、ノリオ、クツパ、アド、リボン、ハリー、ミール、ジーノ、アルミ、ルイス、キノ太郎、アドレーヌ、ノーア、ケーティ（16人）

巨大キノコ山脈チーム1

アルカ、ハリー、ジーノ、ルイス

巨大キノコ山脈チーム2

ノリオ、アド、アルミ、ケーティ（殺人禁止）

キノコ王国チーム

ルイージ、ミール、キノ太郎、ノーア
待機チーム

キノピオ、クツパ、リボン、アドレーヌ

……なるほど、上手く力を分散させてるわね。

アルカ「反対意見はあるかしら？」

全員「……………」

アルカ「…よし、じゃあ、各チーム調査開始！」

全員「おお！」

そして、私たちはそれぞれの場所へ移動するのであった。

sideアルカ・マリオ

ー巨大キノコ山脈（犯罪組織アジトの跡付近）ー

アルカ「私たちが調査するのはここ辺りよ」

ハリー「アジトの跡があらさまに怪しいな」

ジーノ「その前にその周りを調査しよう」

ルイス「……………（出番、あるかな…？）」

スタスタ…

私たちはしばらく辺りを調査するが、たまに逃げている人に遭遇するぐらいで敵は全

く出てこなかった。「逃亡者、発見！」…やっと出たわね。

ハンター「発射用意！」スチャッ

ルイス「バ、バズーカ!?!」

ハンター「撃てー!」

ハンターはバズーカを撃つ。

…：久々に使うわね。私はみんなの前に出る。

アルカ「吸収改!」ギョルルルル!

そして光線を吸収した。

ジーノ「おお、久々に出したね、それ」

アルカ「そうね。ルイス、サンダーボールを私に向かって投げなさい…」

ハンター「理解不能理解不能…」

アルカ「ハンターが混乱してるうちに」

ルイス「は、はい!ピッチャー、投げましたー!」ポイツ

アルカ「よっ」ガシッ

私は飛んできたサンダーボールをキャッチし、ハンターに向ける。

ハリー「おいおいまさか…」

アルカ「ハアアアアッ!サンダーキャノン!」

何故ルメが居ないのかって？

ケーティが連れて来られた次の日の早朝……

sideルメ・パンドラ

昨日はびっくりした。

アルミが女の子を連れてきて、その子を妹だと言ってることに。名前はケーティ。

しかも、ケーティに殺されそうになったらしい。すごい度胸ね。さすが先輩の長女だわ。

え、何故アルミの事を長女と呼んでるのかって？ケーティが次女になるからよ。これはほぼ確定事項ね。

ルメ「それより、派手に爆発したわね……」

私は今、昨日リア充のように爆発したピーチ城の残骸を調査している。

ルメ「何故、爆破したのかしら……」

いくつかの理由が考えられる。

1つめは、もう用済みだから。

ボス戦の戦場としてピーチ城を残し、その後に爆破したという説。

2つめは、ただ爆破したかったただけだから。

人々の混乱を招くためにしたという説。

そして、3つめは…

何かを隠すために爆破した。

爆破することで敵(つまり私たち)がピーチ城を怪しまないようにし、その付近にあった施設などで計画を進めたりしているという説。

私は3つとも正解だと思う。

何故なら、城を爆破したのはすみれを助けた次の日であり、すぐ後ではないこと。

それと、ハンターは爆弾を隠していて、それを起爆するには1人犠牲になる必要があるということ。

そして、ハンターは爆破する時に、わざわざ何秒前か数えているという事。しかも、それが爆弾が実際に爆発する時間から5秒ほどズレているということ。

……理由は設置してたカメラやアルミとノーアの証言をもとに考えた。すごいでしよ。

ルメ「さて、調査調査つと…」ガチャツ

私は瓦礫をどかしながら、何かが隠れてないか探す。

ルメ「……………」

よく見ると、いくつかの瓦礫は丁寧に重ねられていた。まるで誰かがそう重ねたように。

ルメ「よい……しよつと。………ん？」

瓦礫をどかすとそこには紙が一枚置いてあった。どれどれ……

『↓↓↓→↓←↑↓→→←↑↓↓↓←←↑↑』

……どうやらヒントのようね。

ルメ「まず右に二歩で、前に一歩、右に一歩、後ろに一歩、左に一歩、後ろに一歩、右に一歩、前に二歩、後ろに一歩、左に一歩、右に三歩、後ろに二歩、左に一歩、最後に前に一歩……と」

一応ヒント通りにやった。

ルメ「ここの地中かしら？」ドゴツ

私は真下にあつた瓦礫をどかす。しかし、そこに入り口らしき所はなかった……

ルメ「……何これ、カギカツコ？」

が、そこには絵の具かなんかで『』の記号が書かれていた。これもヒント？

ルメ「じゃあ『』はどなん………あつ！」

ヒントの紙があつたところね！

つまり、この2つの地点の間は……

ルメ「ここになるわね。ハッ！」ドゴツ
瓦礫をどかすと……………。

ルメ「…B i n g o ♪」グツ

予想通りそこには扉があつた。

ルメ「突入！ハアア！」ガチャッ

さて、潜入開始！

ただ今潜入中

sideルメ・パンドラ

ルメ「突入！ハアア！」

私は隠されていたトラップドアを開け、中に入る。

ー潜入開始！ー

中は何らかの研究所みたいな感じだった。

ルメ「何か秘密がありそうね：おっと」サツ

私はすぐにどこかに隠れる。

ハンター「……………」スタスタ

そしてハンターは通り過ぎていった。

ルメ「……………」あ、私、幽霊だった♪」

隠れる必要も無かったわね。

ルメ「ま、出来るだけ足音を立てずに行動しましょうか」

スタスタ…

私はカメラを起動し、動画を撮りながら潜入調査をする。しばらく歩いた後、いくつ

かの扉がある部屋に着いた。

ルメ「ここは……？」

あつた部屋は、

『研究室』『倉庫』『砂場』『処刑室』『よく分からん』

……3つ目と5つ目が意味不明なんだけど。まずは研究室ね。

私は研究室の扉を……

ルメ「オラア！」ドゴオ！

文字通りぶっ飛ばした。

研究員「!?誰だ!そこにいるのは!」

研究室「だ……誰もいないぞ!?!幽霊か!?!」

中にいた研究員らしき人々が慌てている。つて、もう幽霊だとバレてるじゃん!

研究室「霊視ゴグルだ!カチャツ

ルメ「あ、やべ」

研究室「いたぞ!容姿が”裏番”に似てるぞ!」

研究室「ハンター召喚!」ポチツ

研究室の1人がボタンを押す。すると……

シュッ!

ハンター「侵入者、発見！」ダダダ

ハンターが数体現れ、私を捕まえに走ってきた！

ルメ「バトるしか無いようね。螺旋丸！」ギョルルル！

私はナ○トの十八番技、螺旋丸を繰り出す。一応エネルギーと風で出来てるから、風遁螺旋丸かな？

ルメ「くらえー！」ヴィイン！

私は螺旋丸でドリルのようにハンターたちを殴る。

ハンター「ぐああああっ！」フツ：

ハンターたちはあっけなく消え失せる。

研究員「くつ…この役立たずどもが！」スチャツ

ルメ「……………ツ!？」

研究員はポイントラインが付いた光線銃らしき物をだし、私の額にラインを当てる。
……………。

研究室「ククク…動くなよ？これを当てたら幽霊でも重傷を負うからな？」

ルメ「……………。へえ…」

…やってみろよ、愚か者」

研究員「な、何だとお！そんなこという奴にはこれだあ！」ピュンツ！
ハア……何で分からないのかしら…。

私は既に”そこにはいない”のに…
シユツ…

研究員「何っ!?! すり抜けただど!?!」

研究員「その光線銃は幽霊にも効くはずだぞ…!?!」

ルメ「いつ私がそこにいると言ったの?」

フツ…

さつきまでそこにいた私は消えた。

研究員「まさか…:…残像か!?!」

ルメ「その通り。気付くのが…:…遅すぎたわねっ!」ドガツ

私はずつと研究員たちの背後にいた。

研究員「ガッ!」バタン

研究員たちを全員気絶させた。殺しはしたく無いからね。

ルメ「さて、研究資料などを撮ってつと…:」

次の部屋に行きますかー♪

アマルガム……グレイ

sideルメ・パンドラ

研究室の資料も特に怪しいものは無かったので、次は倉庫に行くことにした。

―倉庫の前―

ルメ「……あれ？開かない？」

どうやら鍵がかかっているようね。なら……

ルメ「ほいさっさほいさっさー♪」スーッ

私は扉をすり抜けた。

―倉庫―

♪UNDER TALE―We are here

中には主に武器や化学薬品が保管されていた。それと……

ルメ「……なにこれ？」

ガラス瓶の中に”灰色の”ハートのようなものが入っていた。容器ラベルには”タマシイ”と書かれている。

『タ……スケテ……』

ルメ「ん？今声が…」

『タスケテ…』

ルメ「まさか、タマシイが…？」

『ピンを…開けて…』

ルメ「あ、うん…」パカッ

ピンを開けると、中からタマシイが出てきた。

『ありがとうございます』

すると、タマシイは私の中に入ってきた!?

ルメ「え、ちよっ、何してるの!？」

『助けてくれた…お礼…』

ルメ「お礼って…そもそもアンタ誰よ!？」

『あ、その前に…!』カッ!

ルメ「…!!？」

灰色のタマシイは光を発し、灰色の人の形になった。

アマルガム「ボクはアマルガム…そう呼ばれてた…ような…気がする…」

呼ばれてたような気がする…？

ルメ「今は？」

アマルガム「今は……名前はない……かな……」

ルメ「記憶とかは……ある？」

アマルガム「殺された時から……ほとんどないんだ……ボクがアマルガムと呼ばれていたこととか以外は……」

ルメ「……じゃあ、私がアンタに名前をあげるわ。そうね……アンタはこれからグレイと名乗りなさい」

グレイ「グレイ……いい名前だね……気に入ったよ……」

ルメ「あ、自己紹介が遅れたわね。私はルメ・パンドラよ。よろしくね、グレイ」

グレイ「うん、よろしくね……主人……」スウウ……

ルメ「あ、入ってきた」

グレイはまたタマシイとなり、私の中に入っていく。

グレイ『心の中にボクはいるよ。いつでも呼んで、主人』

ルメ「……よく分からないけど、分かったわ」

グレイ『それじゃあ、それまでボクは寝てるね……』

そしてグレイの声は聞こえなくなった。

ルメ「……とんでもない出会いをしたわね」

ま、今は気にしないでおうかしら。

ルメ「さて、次は砂場ね…」

嫌な予感しかないわ…先輩からマリオさんが脱獄した時の話を聞いたことあるけど、マリオさんは砂場恐怖症になったらしいし。

(マリオの脱獄を見れば分かるぞ)

―砂場―

……………。

ルメ「本当に何の変哲もないただの砂場ね」

そう思ったその時。

ウー！ウー！WARNING！WARNING！

突然アラーム音が鳴り出し…

ルメ「……………ツ!?」ズズツ

砂場の中心に大きな穴が空き、私は吸い込まれ始めた！

ルメ「やばい…落ちたら確実に死ぬわね。幽霊でも」

うおおおおお！走れええええええ！

ルメ「この穴の吸引力半端なさすぎる…！」

グレイ『…どうやらボクの力を使う時が来たみたいだね』

ルメ「え、この状況をどうにかできるの…!?」

てか、どうにかできるのなら早くしなさいよ!

グレイ『ごめんね、早めに言えなくて。召喚、グレイ! って言ってみて』

ルメ「グググ……召喚、グレイ!」

すると…

カッ!

私の前にグレイが現れた。

グレイ「ボクの出番だ! ハアツッ!」ガシッ!

グレイは片腕で私を掴みもう片腕を伸ばし砂場の扉を開ける。……腕伸ばせるって、ル○イなの!?

グレイ「ボクの身体は少し特殊でね。さて…離さないでね!」ギユウン!

ルメ「うわあああ!」ピユウン!

グレイはまるでゴムゴムのロケットのように私を掴みながら砂場の外へ飛んで行った。

グレイ「ふう、これで大丈夫かな…?」

ルメ「…ええ、大丈夫よ、ありがとう」

グレイ「お安い御用だよ、主人。それじゃあねー…」スッ

そしてグレイは私の中に戻っていった。

ルメ「……………頼れる仲間をゲットしたわね」

グレイのことはまだまだ知らないことばかりだけど、敵にはならなさそうだしいいよね。

グレイ（うん、主人は助けてくれたんだもん、これくらい当然だよ）

アマルガムのグレイがルメの式神みたいな人になった！

大救出！（100話突破！）

sideルメ・パンドラ

次の部屋は…

『処刑室』

……ここね。嫌な予感しかしないわね。

ガチャツ…

ー処刑室ー

扉を開けると、そこには大量に住民が捕らえられていた。

「うう……俺たち、もう終わりだ…」

「クソオ……彼女欲しかったぜ…」

「ママ……私たちここで死ぬの…？」

「ダメよ……そんなこと言わないで…」

そしてほぼ全員、絶望した表情をしていた。

ルメ「ん？これは…」

檻の隣には、タイマーが置いてあった。残り時間は30分ほど。

…恐らくこのタイマーの時間が切れたら毒ガスでも作動するんでしようね。その前に助けないと…！

ルメ「むやみに檻やタイマーを壊したら作動するかもしれないわね…：近くに管理室があるはず！」

でも、扉は5つしかなかった…：まさか!?

ルメ「研究室にあるの!？」

急いで行かないと！

ー研究室ー

ルメ「よく分からん」手のような”記号が書かれた資料ばかりね…：あ！”

散らばってた資料が置いてあった机に隠し引き出しがあり、それを開けてみると…

ルメ「…これば操作盤ね。えつと…？」

『自爆スイッチ』

…：これは絶対押しちゃダメね。

『よく分からん部屋の鍵解除』

…：…一応押しておきましょつか。ポチツとな。

…ガチャツ。

どこかが開く音がした。

『処刑室の電源』

…これよ!ポチツ!

ブウウウン……

何かが動いた音がした。急いで戻る!

―処刑室―

戻ってみると、檻は無くなっており、タイマーもポーズされていた。

「…檻が、無くなった!」

「俺たち、死なないのか…?」

…私の出番のようね。ハッ!

ルメ「みんな、今すぐ逃げなさい!出口はあつちよ!」

私はここにいる全員に姿を現し、逃げるように促す。

「お、おう、誰かは知らんが助かったぜ!」ダダダ―

「ありがとう、お姉ちゃん!」

そして私に誘導され、捕まっていた人たちはみんな逃がされた。

…え?ハンターに見つかつたらどうするのかって?

安心して、そのことは既に私の幽霊仲間に伝えているわ。

(行動早すぎだろ!いい方で!)

ルメ「ふう、これで一仕事終わったわね。あとは…」
『よく分かん部屋』

…ここだけね。

ガチャツ…

中は…真つ暗だった。

ルメ「何も無い……？」

…何も無かった。床以外は。しばらく部屋の中を進む。

ルメ「…………？」

そこには、黒いコートを着ており、ひび割れた骸骨のような見た目をした人物がいた。

???? 「… ?? W・D・???? ?? ?」

……今何て言った?

グレイ『まさか……ありえない……!』

ルメ「グレイ!?! どうしたの!?!」

グレイ「その人は……」 跡形もなく消えた”はず……!」

???? 「B……? …… フツ…

ルメ「え……？」

さつきまで目の前にいた人物は、”まるで最初からそこに居なかったように”消え

去った…。

ルメ「今のは…?」

グレイ『ハア…ハア…』

ルメ「グレイ…大丈夫…?」

グレイ『ごめんね…もう大丈夫だよ…』

………今の人、誰だったんだろう…。

それを知るのは、70年以上後のことになる。

……ポチツとな♪

sideアルミ・マリオ

「巨大キノコ山脈のどこか」

ノリオ「私たちが調査する所はここですね」

アド「ここまで来るのに誰にも遭遇しなかったのが怖いわね……」

アルミ「お母さんの故郷の村に人はいましたけど……」

ケーティ「お姉ちゃん、怖いよ……」

ケーティは少し怖がっている。

アルミ「大丈夫よ。私がいるから」

ケーティ「うん……」

……これで少しは怖がらなくなったかしら？ そう思いながら私たち4人はしばらく辺りを調査した。そして分かったことは……

ノリオ「ここ一帯はスイツチのように平たいキノコが多く生えていますね」

アド「……もしかしたら中に本当のスイツチが混じってるんじゃない？」

アルミ「……？……？」

私はケーティがどこかをじーっと見ていることに気付く。

アルミ「ケーティ、さつきから何を見てるの？」

ケーティ「お姉ちゃん：アレ、スイッチじゃない？」

ケーティはキノコの中を指差す。その方向を見てみると：確かに形が周りとは微妙に違うキノコを見つけた。アレはキノコじゃなくてスイッチね。報告つと。

アルミ「ノリオさん、アドさん、あつちに赤いスイッチがありました」

ノリオ「あつたんですか？どれどれ：」

アド「よく見つけたわね：紛らわしいわ：」

そして2人はスイッチの周りに罠がないかチェックする。

ノリオ「罠は無いようですね。さて、アドさん、お願いします」

アド「了解！アドミサイル！」ドガーン！

アドさんはスイッチを押さずに攻撃し始めた！

アルミ「え!？」

ノリオ「アルミさん、罠があろうと無かろうと、むやみに押すとは危険すぎます。まずはずち壊してから安全性をチェックするのが妥当です」

アルミ「はあ：」

アド「破壊完了よ！」

ノリオ「どうやら完全に安全なようですね。押ししてくd「ポチツとな♪」…行動早すぎませんか？」

ノリオさんが言いきる前にケーティがスイッチを押した。

ケーティ「早く押したかったんだもん！」

ノリオ「…まあいいです」

ゴゴゴゴゴ…

どこかで何かが動いた音がした。

アド「あつちから音がしたわね。行きましょ」

アルミ「あ、はい…」

私もスイッチを押したかったな…。

sideノア…???

ーキノコ王国ー

どもー、アルミの唯一無二のパチモン、ノアだよ☆

…ちよつとキモかったわね。てか、唯一無二のパチモンって矛盾してない？

ま、それは置いといて…

私たちは今、キノコ王国ビル街を調査している。

ビルの名前は、『あ』、『い』、『う…?』というシンプルかつ変な名前だけだ。 (このネ

タ知らん奴は原作見直してこい！)

ルイージ「さて、ここで三手に分かれよう。僕は右で」

ノーア「じゃあ私とキノ太郎は左で」

ミール「私は？」

ルイージ「真ん中をお願い」

ミール「オツケー♪」

あ壁壁壁壁壁壁壁壁う…？ (この光景、どこかで…)

↑ルイージ

→ミール

私↓

ドゴツ。(ミールが壁に当たる音)

ミール「つて、真ん中なんて無いじゃない！」

キノ太郎「…あれ、今気付いたのか…？」

ノーア「…私たちは何も見なかった、オツケー？」

キノ太郎「オ、オツケー…」

…ルイージさん、超自然にミールさんを騙しましたね、流石です。

赤いブロックと……？

sideノア・???

ミールさんがルイーダさんに騙されたのを無視して、私はキノ太郎と右の道を進む。
(今更気付いたが左じゃなかった)

キノ太郎「ん？ノア、これを見ろ」

ノア「…何この枠のようなもの？」

キノ太郎が見つけたものは赤と青の枠のようなものだった。

キノ太郎「分からん。ちよつと怪しいから離れ」
「ビビビッ！」
「…うわつ、ビツクリした!？」

突然音がしたと思ったら、赤い枠があつた所がブロックに変わっていた。

ノア「なんだろ、これ……？」

と思つていると、渡されたトランシーバーからお父さんの連絡がきた。

ノリオ『皆さん、今さつき赤いスイツチらしきものを押ししました。何か変わったものがあれば連絡して下さい、以上』

キノ太郎「……なあ、ノア」

ノーア「絶対これね。ルイーダさんたちを呼んできて」

キノ太郎「了解」タタツ…

さて、私も連絡つと。

カチツ

ノーア「さつき近くの赤い枠がブロックに変わりました。隣に青い枠もあったので青いスイッチもあるのかもしれませんが、以上」カチツ

ふう、言えた…。

そして、ルイーダさんたちが来た。

ルイーダ「これがその赤いブロックか…」

ミール「……………」ムスツ

ミールさんは未だに拗ねている。ルイーダさん、謝ったのかな……………? ルイーダさん本人はそれを全く気にせず、ブロックを叩いたり、上に乗ったりしている。

ルイーダ「これはちゃんとしたブロックだね。結構硬いし、足場にもなる。レベル2をクリアするヒントかもね」

キノ太郎「そうだったら青いスイッチはどこにあるんでしょうね?」

ルイーダ「それを今から探そう!」

ノーア「はあ…」

ミール「……………(マジムカつく…) イライラ

ルイージ「あれ？ミール、なんでそんなにイライラしてるんだい？」(とぼけてる)

ミール「誰のせいよ、誰の…」

義手で壁をトントンしながら拗ねているミールなのであった。

side アルカ・マリオ

さつきノリオとノーアの連絡を聞いた私たちは、目の前にある枠の大群を見つめていた。色は赤、青、黄色、緑。

アルカ「赤以外全部枠になってるわね」

ハリー「他のスイッチも押さなきや通れないタイプのやつか？」

ジーノ「十中八九そうだろうね」

ルイス「……………でも、アルカさんの規格外なパワーでなんとか行けるんじゃないですか？」

アルカ「……………ルイス？私はこう見えても怒るのよ？」ハイライトオフ

私は目のハイライトを消して真顔でルイスを向く。

ルイス「すみませんでした殺さないで下さい真顔は勘弁して下さい怖いのでハイライトをオンして下さい」

それを見てルイスは早口で謝る。この世代のバカキャラは間違いなくルイスね…。

アルカ「アホな事を言う前に考えなさい」

ルイス「あ、はい……」

ルイーダはツツコミ役だったのにどうしてこうなったのかしら……？

2 度目の正直

side ノーア・???

ルイージ「さて、近くにスイッチがないか探してみよう」

2人「はい！」

ミール「……………」

そして私たちは再び3組に分かれた。

―数分後―

私たちは今公園で休憩している。

(ただ今逃亡中でワリオが金を埋めた公園)

キノ太郎「しばらく歩いたが、棒とハンターしか見当たらなかつたな…」

ノーア「ハンターは凍らせるか消し飛ばすかで対処できるし、ヒマね」

キノ太郎「スイッチを探してるんだからヒマじゃないだろ。とりあえずあつちの道に

行こうぜ」

ノーア「ええ」

…にしても、なんかニンニク臭いわね。

そして道を少し進むと、窓にガムテープが貼られまくっているボロ家があった。
プーン……

キノ太郎「……臭っ!？」

ノーマ「何このニンニク臭!?!こうなったら!」カチン!

私は氷で鼻せんを作った。

キノ太郎「おう、俺にもくれ」

ノーマ「ほい」

キノ太郎「……ふう、これで鼻を曲げずに済むぜ」

ノーマ「それにしても、ここに誰がいるのかしら?」

キノ太郎「看板があるな……『ワリオのアジト』だつてよ。確かワリオつて……」

ノーマ「有名なお宝探検家ね。お父さんたちの知り合いの」

キノ太郎「情報が欲しいしな……それっ!」ピンポーン♪

キノ太郎はピンポンを押し、数秒後誰かがドアを開けた。

???「誰だー?」

キノ太郎「あ、あの……こんにちは。ワリオ……さんですよね?」

ワリオ「おう、そうだが……キノピオに似てるな、お前」

キノ太郎「はい、その息子のキノ太郎です。それと……」

ノーア「ノリオの義娘のノーアです」

ワリオ「アイツら子供が居たんだな……13年ほど会ってなかったし、おかしくないか。それで、何の用だ？」

キノ太郎「ここ辺りにスイッチのようなものってありますか？」

ワリオ「スイッチ？……ああ、確かに一個あった気がする」

ノーア「そ、それってどこですか!？」

ワリオ「港の近くに青いスイッチがあった気がするぜ」

キノ太郎「情報ありがとうございます！俺たちはこれで失礼します！」タタツ

ワリオ「おう」

そして私たちは港へと向かった。

ワリオ（マリオは死んだというし、アルカは未だに強くなり続けてる……昔と比べて色々変わったな……。俺もヒマになったら、久々に力を貸してやるか!）

ワリオの決心が叶うのはそう遠くない。

―港―

キノ太郎「まさかハッピーアパートの近くに港があったなんてな……」

ノーア「まあ、角度的に分かりづらい場所なのも理由になるでしょ」

キノ太郎「そうだな。……ん？おい、海に浮かんでるアレ、なんだ？」

ノーア「海?.....何アレ?」

ぐおおおおお...

キノ太郎が指差したものはどんどん膨れ上がり...

キノ太郎「.....Oh my god」

.....巨大なイカとなった。

ノーア「デカすぎるでしょ!?!」

大阪弁で話すイカ

side ノーア・???

巨大イカ「……………」じー

ノーア「何? じーつと見てる…」

巨大イカ「お前、どこかで見たことあるような…」

※アルカに似てるためそう思われてます。(アルカに似てるアルミのパチモンだから)

キノ太郎「…なあ、ノーア、あのイカの頭の上見ろ」

ノーア「ん……………! あんな所に青いスイツチが!」

巨大イカ「…これのことかいな?」スツ

キノ太郎「シヤベツタアアア!」

巨大イカ「おお、わては喋れるで」

ノーア「しかも大阪弁……………(大阪ってどこ?)」

※この世界に大阪は存在しません。

巨大イカ「まさか、おまいらわての帽子盗みきたんちやうか!」

キノ太郎「いや、そのスイッチを押しただけですけど……」

巨大イカ「何!?! わてを押しかけて盗むだど!?! させへんで!?!」ムキーツ!

巨大イカは何故か勘違いして怒り出した。

ノーア「これって、逃げた方がいいんじゃない?」

キノ太郎「:?! ノーア、危ない! 避けろー!」

ノーア「え!?!」

シュツ!

気づいたらイカの腕が私に振り下ろさせていた。

ノーア「……ツツ!」ドガン!

巨大イカ「あー! わての腕がー!」

しかし私はギリギリそれをバズーカで消しとばす。

巨大イカ「そのバズーカ、昔戦った青いオツサンのバズーカに似てるで!」

キノ太郎「……青いオツサン? バズーカ? まさか……」

……あ! 思い出した!

ノーア「あ! アンタ、昔お父さんが腕を全部消し飛ばしてから文字通りぶつ飛ばした

巨大イカなの!?!」

巨大イカ「……ムググ……」グググ……

キノ太郎「おい、嫌な予感がするんだが……」

巨大イカ「わての元の縄張りを奪ったオツサンの娘が、今度はわての帽子を盗むだ
とー!?許さん!野郎ぶつ殺してやる!(青い狸風)プシュー!

ノーア「キレてる……」

巨大イカは頭から湯気を出しブチギレている。

キノ太郎「こりややばいぞ!逃げるぞノーア!

逃げる?

ノーア「……いい考えね、不採用」

キノ太郎「は!?なんでだよ!?ぶつ潰されるぞ!」

ノーア「…フツ、コイツは昔お父さんが倒した相手よ。お父さんが倒せて私が倒せな
いワケがないわ!」

キノ太郎「…マジかよ」

ノーア「アンタはルイーダさんたちを呼んできて!それまで私がどうにかする」

キノ太郎「…分かった。絶対死ぬなよ!」ダツ!

そしてキノ太郎は走り去った。

ノーア「さあ、かかってきなさい!」

巨大イカ「わての縄張り、返してもらおうでー!」

ノーア（縄張りは持っていないんだけどね…）
そして、私vs巨大イカのバトルが始まった。

巨大イカ対2代目バズーカ使い

♪SharaX | Hysterical

sideノーア???

ノーア「さあ、かかっつきなさい！」

巨大イカ「くらえー！」ブンツッ!

巨大イカは早速腕を振り下ろしてきた。

ノーア「ドガン」ドガン!

その腕の根元を私は消しとばした。何故腕を消しとばさないのかって?.....イカ
焼きが食べたいからよ、悪い?

巨大イカ「あー、わての腕がー!」

ノーア「ハアアアアア:~!」パキパキ。

私は氷を纏い、回転する。新技を思いついた。

巨大イカ「ムッ!?させへんで!」ブンツッ!

そんな私に向かって巨大イカは再び腕を振り下ろしてくる。

ノーア「:~ヘイルストーム!」ガッチイン!

私がそういった次の瞬間、氷の嵐が巨大イカを襲う！

巨大イカ「ぬあああ！冷凍食品になってしまおうでー！」

ノーア「よし、決まった！」

ノーアはヘイルストームを覚えた！

巨大イカ「ぬあああ！ブクブク…プハーツ、危なかった…」

巨大イカは一旦水中に潜り氷を溶かし、戻ってきた。

巨大イカ「ハア、ハア…次は当たたらへんで！」

ノーア「へえ、ホントかしら？」

巨大イカ「今度はこっちの番や！イカスミ！」ブシャツ！

……来ると思ったわ。

ノーア「よっ」サツ

巨大イカ「よけるな!!」

ノーア「いやいや攻撃はよけようとするでしょ？」

巨大イカ「グググ…こうなったら…！」ピヨーン…

巨大イカは大きく跳び上がった。もう姿が見えない。

ノーア「これは…落ちてくるわね。チャージ…」ギューイイン…

私は冷静にバズーカをチャージする。

そして：

巨大イカ「くーらーえー！」ヒュウウウ：

案の定巨大イカが落ちてきた。

ノーア「そしてアイスボールをいれて……！」

巨大イカ「ぶっ潰れろおお！」

ノーア「アンタは吹っ飛びなさい！アイスキャノン！」ドツガアアアン！

私は氷を纏った極太ビームを放つ。

巨大イカ「何い!?わての、わての出番がー！」ピュウウウウウ！

そして巨大イカは吹っ飛んでいった。青いスイッチを落として。

ノーア「よし!……ポチツとな♪」ポチツ

ビビビツ!

どこかで何かがどうにかなった音がした。

ノーア「ふう、疲れたー」

―数分後―

キノ太郎「おーいノーア!大丈夫か……え!?!」

ミール「あれ?イカは?」

ルイーダ「まさか……倒したの?」

ノーア「はい、腕をもぎ取ってから吹っ飛ばしました！ほら、コイツをイカ焼きにできませすよ！」スツ

私をもぎ取った腕を見せてそういう。

ルイーダ「お、おお：今夜はイカ料理だね：

キノ太郎「：強すぎだろ、お前：

ノーア「安心して。私よりアルミの方が強いから♪」

キノ太郎「俺が一番弱いから安心してきねえ：

ミール「あ、ところで、青いスイッチは見つけた？」

ノーア「はい、数分前に押しました」

ミール「なら、私たちの仕事は終わりね」

：あとのスイッチは他の人に任せよつと。

共通点

side アルカ・マリオ

ビビビツ!

アルカ「あ、青い枠がブロックになったわね」

ルイス「あと2つですね」

ハリー「俺たちもスイッチを探そう」

ジーノ「…ねえみんな、今から連想ゲームしない?」

………!

2人「…は?」

アルカ「なるほどね…」

ハリー「何故連想ゲーム?」

ジーノ「…赤いスイッチと青いスイッチが発見された場所を思い出してみて」

ハリー「場所? 赤いスイッチは確かキノコの中に紛れてて…」

ルイス「青いスイッチは巨大イカが持ってましたね…あ!」

アルカ「…気づいたかしら?」

ルイス「スイツチがあつた所はその色がある場所ですね！」

ジーノ「正解！そういうことだよ」

ハリー「：推理もする警察の俺が気付かなかつただと：」ズーン

ハリーは落ち込んでしまった。：しばらくほつとくわ。

アルカ「：で、よ。黄色または緑が多い場所つてある？」

ルイス「緑は森とか：ですかね？」

ジーノ「黄色は：」「ビビビツ！」：え？」

アルカ「黄色のスイツチが押されたようね」

ジジツ：

ルメ『なんか黄色いスイツチらしきものを押したわ。以上』ツー：

アルカ「なるほど、ピーチ城の壁の色は黄色だからそこにあつたのね。ちようどそこ

にルメを向かわせたから、ある意味偶然ね」

ジーノ「じゃああととは緑のスイツチだね」

ハリー「森といえは、山とかだよな？」

アルカ「ここは山脈だけど、ほぼ赤いキノコね。ここではなさそうね」

ルイス「他の人たちに山が近くにあるか聞いてみます？」

アルカ「ええ、そうしましょう」カチツ

ジーノ「……………」

アルカ「最後の緑のスイッチは、山にある可能性が高いわ。近くににいる人に山周辺の調査をお願いするわ。以上」カチツ

……これでオーケーね。

ハリー「…なあ、俺たちつてやっぱここで待機か？」

アルカ「ええ、そうなるわね」

ルイス「…俺の出番が…」ズーン

今日落ち込んだ人2人目ね。

sideルメ・パンドラ

カチツ。

ビビビツ!

ルメ「!?何今の音!」

とりあえず、連絡ね。

カチツ。

ルメ「なんか黄色いスイッチらしきものを押したわ。以上」カチツ

これでオーケーね。

ルメ「さて…何しようk『最後の緑のスイッチは、山にある可能性が高いわ。近くに

いる人に山周辺の調査をお願いするわ。以上』…今のスイッチだったのね。それよりも山ね…」

近くに1つあった気がするわね。

ルメ「さて…」フツ…

私は風を纏い空を飛ぶ。スカートの下が見えないのかって？安心しなさい、今はズボンを履いてるわ。

ルメ「飛んでいくー！」ピユウウウウウ！

私は山の方へと飛んで行った。

ザ・マウンテン

sideルメ・パンドラ

私は今、空を飛んでいる。比喩ではない。ヒユウウウつと飛んでいる。

テテツチー！（または”バダmpsss！”）

…いいダジャレね。

ルメ「あ、そろそろ見えてきたわね」

この山、名前はないけど先輩たちがよく訪れている。

バスの運転手を吹っ飛ばした◇が圧倒的な時間短縮で（突っ走ってるだけ）ここに連れてきたり…

メガネ工場を発見したり…

武器屋でバズーカ買って料金払わなかったり…

一次洗脳メガネ事件犯人の祖父にあったり…

（→洗脳メガネ）

クツパがこっちに逃げたり…

不良どもをとっちめたり…

武器屋店長を逮捕したり…

(→ただ今逃亡中)

またメガネ工場に来たり…

爆破したり…

(→洗脳メガネ、再び)

調査にきたミールの右腕が吹き飛んだりと、

(→世界がバグった！)

色んなことがあった。

そんな名誉ある(?) 山に名前をつけようと思う。

名は…

ザ・マウンテン！(そのまんまじゃねーか！)

チツチツチ、これにはちゃんとした理由があるのよ。

そもそもこの世界の山は名前がついてる確率はかなり低い！

だからシンプルな名前を付けてもかぶることがない！

それと、名前をイナイレの技にすることでクロスオーバーの概念(?) が達成できる

！

これが理由よ！

ルメ「さて、看板を置いて、ザ・マウンテン…と」カキカキ

グレイ『主人、命名するの得意そうだね』

そうかしら？ アンタとこの山のしか名付けてないけど？

グレイ『そうなんだ。僕は主人の初めてをもらったんだね！』

けしからん勘違いを生みそうな言い方はやめなさい。私はまだ処女よ。

グレイ『主人が下ネタ言ってるじゃん…』

…閑話休題。

私は看板を山道の入り口に立て、山に入っていく。

♪ *Deltarune* | *Field of hopes and dreams*

辺りを見回す。どこをみても森。森、森、森、森、杜王町レディオ♪…やかましい

わ。

たまにカサカサと音がするだけで特に変なものは見つからない。そう思っていると、

グレイが話しかけてきた。

グレイ『主人、敵が近くにいますよ』

…知ってるわよ。これも作戦。わざと的に囲まれてるのよ。よく覚えておきなさい。

い。

グレイ『あ、なるほどね…よく覚えておくよ』

よろしい。

さて、そろそろね。

ルメ「そろそろ出てきたらどう？ 敵さんたち」

ハンター「何?! バレてただと!」

ハンター「まあいい。逃亡者、発見!」スチャッ!

ハンターたちはショットガンを向けてきた。バズーカの次はそれね。しかも平然と幽霊である私が見えてるし。

ルメ「…吹っ飛ばしてやるわ! ハアアアッ!」ヒュウウ:

私は渦状に風を纏い、走り出す。

ハンター「動いたぞ、撃てー!」ダダダダッ!

ルメ「当たらないわよ! 風神の舞!」ピュウウウン!

そしてハンターたちの周りで風を起こし、吹き飛ばす。

ハンター「あー! れー!」ピュウウウ:

ハンターは 空の彼方へ 飛んでいく — ルメ・パンドラ

いい川柳ができたわね。

さて、調査を続けましょ。

未来から来た誰かさん

sideルメ・パンドラ

しばらく山を調査するが、スイッチらしきものは見つからない。

ルメ「ハンターたちも集団でかかってくる」「逃亡者、発見！」……風神の舞改！」
ビュウウン！」

私は敵を吹き飛ばし過ぎて進化した技で敵をまた吹き飛ばす。

ハンターたち「あーれー……」ピュウウウ……キラーン☆

ハンターは 空の彼方へ 飛んでいく

どこへ行くのか 誰も知らない

——ルメ・パンドラ

2時間前に作った川柳を進化させて短歌にしたわ。なかなかいい出来ね。

ルメ「それよりも、スイッチは……ん？」

??「……………」キョロキョロ

山道に周りをキョロキョロ見ている少女がいた。

ルメ「何か探してるのかしら？」

?? 「…ん？あ。やべーじー

ルメ 「…私が見えてるの？」

?? 「ええ、見えてるわよ。貴女は私だからね。」

ルメ 「……………は？」

どういふことなの？ルメ分かんない。

留美 「私は未来から来た赤坂留美。とある事情で過去に来たのよ」

留美？私の名前と一文字だけ違うわね。

ルメ 「未来って、何年後？」

留美 「ええつと、2095年だから…」

……………今なんて!?

留美 「56年後ね。それがどうしたの？」

ルメ 「あ、いや…えつと…なんか変な数字ね」

留美 「私もそう思ってるわよ。日花さんを探してるのに、まさか前世に会うなんて…」

ボソツ

ルメ 「今なんて？」

留美 「…なんでもないわ。それじゃあね、ルメ」ピユウウウ…

留美は何故か教えてもない私の名前を呼び、”風を纏って空を飛んで行った”。…

ツツコミ所多過ぎて意味わからないんだけど。

ルメ「…今のは忘れよう。さて、調査つと」スタスタ
一方、その頃…

side アルカ・マリオ

アルカ「……………ヒマね」

ルイス「そうですね…」

ハリー「なら調査すればいいじゃないか」

ジーノ「いやいや、リーダーはアルカで指示は待機だから仕方ないんだよ」

アルカ「さらつと私のせいにしてるわね……………ん？」

??「……………」ダダダー

ちようど視界の隅で赤いパーカーを着た女性が走ってるのを見た。しかも私と全く同じパーカーを。あと赤い帽子をかぶっていた。どうやってそこまで分かったのかって？それは…

アルカ「アンタ、誰？」

??「……………マジか…」

女性の目の前まで移動したからだ。

??「あ…あはは、ただの通行人ですよ…」

アルカ「いやいや絶対ありえないわよ。ここ山脈の奥地よ?」
??「ま、そりやそうですよね……と……ということ、さよなら、”前世さん”♪」シユツ

!

アルカ「……………は?」

彼女は前世とか言い、消えてしまった。…今のは忘れよう。

鴨フラージュ

sideルメ・パンドラ

変な人に会って現実逃避した後、私はしばらく進み池に着いた。

ルメ「……？」

「……………」

なんか…池の中に少しだけ鳥の輪郭が見えるような…

ルメ「わっ！」

鳥を驚かす為に叫んでみる。すると…

「ガーガー！」バサッ！

池から突然鴨が現れた！

ルメ「まさか、鴨フラージュしてたの？なんつって…」テテツチー！

(やかましいわ！)

ヒラヒラ…

鴨はなにかを落としていった。ん？なんか書いてある。

『鴨の中にスイッチが紛れ込んでるヨ』

…どうやって書いたんだろ？不思議でたまらない。
ま、とにかく、探してみよ。

私は指先に風を溜める。

ルメ「エアーガン！」バンツ！

そしてそれを銃のように撃つ。

「ガーガー！」バサッ

「グワグワッ！」バサッ

今度は2匹鴨フラージュしてた鴨が飛んで行った。

(……ダジャレはもう気にしないでおう)

そしてしばらく同じ作業を繰り返した。

―数分後―

ルメ「……ん？」

プカプカ…

気付いたら緑のスイッチが池の上に浮いていた。恐らく鴨に乗つけられてるわね。

よし！

ルメ「宙に浮いてと。そーつと…」そーつ

私は宙に浮き、ゆっくりと鴨に近づく。そして…

ルメ「ほいつ！」サツ

「ガー？」

スイツチをサツと奪う。

ルメ「ポチツとな♪」ポチツ

ビビビツ！

どこかでそんな音がした。

ルメ「これで全部押されたのかしら『諸君、おめでとう！レベル2がクリアされた！』

……え!？」

突然のどこからともなく流れてきたアナウンスに私は戸惑う。

『4つのスイツチが押され、新しいエリアが解放された！そこには絶対に捕まらない”無敵ゾーン”というものもある！このまま逃げ隠れるのもよし！新エリアに行き無敵

ゾーンに籠るのもよし！さあ、レベル3スタートだ！』プツツ…

…一体何レベルまであるのかしら？

そんなことを考えながら、私は秘密基地に帰るのであった。

sideアルカ・マリオ

ジーノ「まさかスイツチを押すのがレベル2だったとはね」

ハリー「しかも今俺たちの目の前にあるブロックたちが…」

ルイス「レベル3からの新エリア…」

アルカ「…今日はここまでにして一旦帰るわよ」

―秘密基地―

アルカ「ただいま。みんな、帰ってきたかしら？」ガチャツ

アルミ「あ、お母さんおかえり。みんな帰ってきてるよ」

ルメ「…先輩」

アルカ「何、ルメ？」

ルメ「調査中に変な人に会いませんでした？」

変な人？

『前世さん♪』

………。

アルカ「まあ、いたわね。アンタも？」

ルメ「はい、見た目や能力、名前が私に似てました」

アルカ「名前はなんなの？」

ルメ「赤坂留美だとか言っていましたね」

アルカ「留美…確かに似てるわね…どういことなのかしら？」

ルメ「さあ、分かりません…」

アルカ「うーん…あー！こんな話はもう辞め！結果報告をするわよ！」
ルメ「あ、はいー！」

変な人に会ったなんて忘れよう！

四角だらけの国

side アルミ・マリオ

ー次の日ー

アルカ「今日は新エリアの調査をするわ。メンバーは…私、アルミ、ケーティ、ルメの4人ね。後のみんなはキノコ王国周辺をお願いするわ。それじゃ解散」

スタスタ…

アルカ「さて、3人とも、準備はできたかしら？」

アルミ「うん！」

ケーティ「できたよ、お母さん！」

ルメ「いつでもオーケーです」

アルカ「よし、じゃあ出発よ！」ガチャツ。

ー数分後、新エリアの入り口にてー

お母さんが連れてきた場所には、4色のブロックで出来た階段があった。どうやらここが新エリアの入り口らしい。

アルカ「さて、登って行くわよ」

スタスタ：

―数分後―

しばらく登り続けるが、奥が見えない。既に少し疲れてきた。

アルミ「この階段、どこまで続いているんだろ…」

ケーティ「ハア、ハア、お姉ちゃん、もうダメ…」

アルミ「ほら、おぶってやるわよ」

ケーティ「うん、よいしょ」バツ

ケーティが私の背中に乗ったことで、さらに疲れやすくなる。早く終わらないかな、この階段。

ルメ「…そろそろ着きそうね」

アルミ「どこにですか？」

アルカ「階段の終わりよ」

アルミ「え…あ」

気付いたら階段が終わり、私たちは平地を歩いていた。ただ、雲なのか霧なのか分からないけど前がよく見えない。

ルメ「…ええい！吹き飛んじやえ！」ピユウウウ！

ルメさんは雲を風で吹き飛ばした。

…すごいパワーね。スカート履いてたら間違いなく捲れてたわ。ズボン履いててよかった…。

アルミ（ま、パンツを見る男性もここにはいないんだけどね）

ケーティ「わあ…」

アルミ「ん？ケーティ、どうしたの？」

ケーティ「お姉ちゃん、前みて」

アルミ「え？おお…」

アルカ「いい景色ね…」

目の前にはブロックだらけの世界が広がっていた。しかし、自然を感じさせるいい景色だった。ここが新エリアなのね。

ルメ「ここは確か…スカイブロック？」

アルカ「ああ、マイン国の空のエリアね」

アルミ「マイン国？」

アルカ「国中がブロックで出来た国よ。住民や生物まで角角してるわよ」

ケーティ「へえ〜」

ルメ「ここが新エリアとは予想外だったわ」

アルミ「でも、敵の気配が「ヴヴウ…」…え」

ゾンビ「うがー！」

ゾ、ゾゾゾンビ!?

アルカ「出たわね。ハッ！」ドゴッ

ゾンビ「ウゴッ」バタン

ゾンビはお母さんにストレートを入れられ、倒れる。

アルカ「しばらくすると消えるから大丈夫よ」

アルミ「は、はあ…」

なんか、よく分からない所ね、ここ。

アルカ「とりあえず、進みましょう。ハンターがいたら来た方向を進むという事で」

アルミ「う、うん…」

さて、どうなることやら…

例のアイツ

s i d e アルミ・マリオ

アルカ「……………」

ルメ「あ……………」

アルミ「なにこの緑色の生物？」

前には角角した緑色の生物がおり、近づいてきている。

ケーティ「お姉ちゃん、嫌な予感がするよ……？」

アルミ「そう？」

生物はどんどん近づいてきた。何する気なのかしら？

「……シユウウ」

アルミ「え……？」

生物はチカチカ光り出した。そして……

アルカ「……ッ、オラア！」ドゴツ！

「プスツ！」ピユウウウ……

お母さんは生物を殴り飛ばし……

ドツガアアアン!

アルミ「!?」

ケーティ「ば、爆発!」

生物は文字通り爆発した。今の何!?

ルメ「いやー、クリーパーは心臓に悪いですね…私に心臓は無いですけど」

グレイ『まあ、幽霊だからね』

アルカ「はあ…アルミ、ケーティ、今の生き物はクリーパーといって、後ろからこつそり近づいてきて爆発する危険生物なのよ。爆発する前に倒したら火薬が手に入るけど…とにかく、見つけたら素早く倒すか逃げるかしなさい。爆発に巻き込まれると結構痛いわよ」

ケーティ「うん、分かった!」

ケーティは納得したように頷くけど…

アルミ「…痛いだけで済むのってお母さんやルメさんだけじゃない?」

アルカ「そうかしら? 4年も特訓してるんだから多少は耐えられるでしょ?」

アルミ「ま、まあ、多分…」

アルカ「じゃあ問題ないわよ、進みましょ」スタスタ

―数分後―

少し、疲れてきたわね……

アルミ「ハア……ハア……「ハア」……え？」

今、どこから声が？」

ルメ「……あ、ここに村人がいるわね」

村人「ハア」

場所的に街に近いのかな？」

アルカ「あの……この辺に街ってありますか？」

村人「あつちにあるよ」

アルカ「分かりました、ありがとうございます。さあ、行くわよ」スタスタ

そしてしばらく進むと、建物の形から住民までブロックで出来た街に着いた。お母さんは看板を読んで言う。

アルカ「ここはマイン国スカイブロック地方のシラ町みたいね」

ルメ「シラ、ですか？」

アルカ「ええ、スカイブロック地方には4つ町があつて、ヴァルキリー、ハイピリオン、シラ、アストレーアの4つよ。この町は確かアーチャーが多いと聞いたわ」

アルミ「どうやってその情報を仕入れたの？」

アルカ「……私は特別捜査官よ？知らなきゃ捜査ができないのよ」

※アルカは実はマイン国に何度も訪れています。

村人「ハア〜」

村人「ハツハ〜！」

村人「ハツ？」

村人「ハハ〜」

アルミ（ここの住民たちの口癖ってハア〜なのかしら？）

※そうです。むしろ原作ではそれしか話せません。

アルカ「ま、とりあえず、調査を始めましょう！」

4人「おお！」

一方、その頃…

sideノア・???

アルミたちが新エリアを調査しに出かけた後、私とルイス、アドレーヌ、キノ太郎はキノコ王国の調査に出かけた。

ルイス「ここはキノコ市だから、しめじ町にでも行こう」

キノ太郎「本当は？」

ルイス「……久々に電車に乗りたい」

※カービイがいないため移動手段はバスや電車です。

アドレーヌ「でも、逃走中だし駅は閉まっているんじゃない？」

ノア「いや、公共機関は動いてるみたいよ。駅の外には見張りがいるけど、入れば安全だわ」

アドレーヌ「なるほどね…」

ルイス「じゃ、行こう行こうー！」

ーピーチ城駅ー

とりあえず駅についた。見張りはどうしたのかって？ 灰にしたわ。

ノーマ「えっと…しめじ町行きの切符を4枚つと。はい」
ルイス「あざっす。次の電車は…5分後だね」

ー5分後ー

『まもなくー、1番のりばに電車が到着します。黄色い線の内側までお下がりください』
ブオオオオオオオオン…！

キノ太郎「さて、乗り込もうぜ」

スタスタ…

電車の中には何人か逃亡者であろう人たちがいた。

アドレーヌ「ふう、歩くの疲れた…」

アドレーヌは座りながらさういう。

??「……………（やばいよ、にっちゃんのお母さんが近くにいるよ、どうしよう…）」

近くにいるアドレーヌに似た人がなんか慌てているのに気がついた。

ノーマ「あのー、どうしたんですか？」

??「へ？あ、なんでもないよ？」

ノーマ「そうですか、話しかけてすみません」

??「いや、別にいいよ」

なんかこの人、”語尾が伸びてる”話し方をするわね。

(桜咲くの人物だ！当ててみて！)

私はとりあえずその場から離れ、みんながいる席に戻る。

ルイス「おいノア、外を見てみるよ」

ノア「外？……うわ、いっぱいいるわね」

外にはハンターがたくさんいた。キノコ市よりいるわよこれ。

アドレーヌ「うわ、私の家大丈夫かな？」

※アドレーヌとアドの家はしめじ町にあります。

アドレーヌがそう言っている時、アナウンスが流れてきた。

『まもなく、ききr…しめじ町、しめじ町です。降り口は右側です。足元に気をつけて

お降りください』

…ん？今、別の駅を言いかけなかった？

キノ太郎「…まさか、な」

ルイス「きき…何今の？」

キノ太郎「お前ら…」ききらぎ駅、って知ってるか？」

アドレーヌ「いや、知らないわね…」

キノ太郎「ききらぎ駅は、かなり稀に到着する駅で、一度そこで電車を降りたら帰っ

て来ることがほぼ無理なんだ」

ノーア「へー。じゃあ降りなければいいじゃん」

キノ太郎「それも難しい」

ルイス「どういうことだ？」

キノ太郎「きさらぎ駅は決まって終点なんだ。しかも、どういふことか電車から押し出されるような感覚に襲われるらしい」

アドレーヌ「随分詳しいわね：なんでそんなに知ってるの？」

キノ太郎「：お父さんとアルカさんが一度きさらぎ駅に行つたことがあるらしい」

ノーア「あー、なるほど。アルカさんなら普通に帰れそうね：。ところで、肝心の帰る方法は？」

キノ太郎「アルカさんが時を止めてからフルパワーで動きまくって空間に歪みを入れてから脱出したらしい」

ルイス「アルカさんらしい動き方だな：」

再びアルカさんの規格外さに驚く私たちだった。

ピエロの襲撃

sideボンゾー

??? 「レベル2をクリアされ、いずれここにも逃亡者が現れるだろう。ボンゾー、逃亡者らを手当たり次第皆殺しにしてこい。ただし、ここの住民は殺すな。これは“王”からの命令だ、分かったか？」

ボンゾー「仰せのままに、”大博士”……」
はっはっはっ、やっつと僕の出番だね！

sideアルミ・マリオ

私たちは今シラの町の路地裏を歩いている。こういう所に敵がいたりするからだ。アルカ「……強い人の気配がするわ。こっちに近づいてきてる」

ルメ「私が見てきます……」スタスタ

そしてルメさんが偵察に行こうとしたその時。

シユウウウツ！

突然大量の風船が飛んできた！

アルミ「なにこれ……!?!」

私は目の前に飛んできた風船を叩き割る。すると…
パァン！ドスッ！

アルミ「…かはっ!？」

ケーティ「お姉ちゃん!？」

中からガラスの破片のようなものが出てきて私に突き刺さった。

アルカ「どうやら殺傷力があるようね。ルメ！」

ルメ「はい！ウインドブラスト！」ビュウウン！

お母さんは私を見てとっさに判断し、ルメさんは風船を吹き飛ばした。

???? 「ほう…風船のことはバレちゃったみたいだね」スタスタ

そこに、1人の男が現れた。

ルメ「ピエロ…?？」

見た目はルメさんの言った通りピエロそのものだった。1つ違うといえばオレンジ色の杖を持っているこのぐらいだ。

ボンゾー「僕の名前はボンゾー。見た目通りピエロさ。…1つ付け加えるなら…」
スッ

ボンゾーは杖を構え…

ボンゾー「殺しもする魔術師であることかな！」ボンッ！

…どこからともなく風船を飛ばしてきた！

アルカ「…時間停止！」

しかし、次の瞬間、風船は消えており、杖はお母さんの手元にあった。

アルカ「奪ったわよ！」

ボンゾー「え、どうやって？…ま、いいけどね！」スツ

ボンゾーは手を出す。すると杖はいつのまにか彼の手元に戻っていた。

アルカ「昔私が呪いの帽子をかぶった時、奪われても帰ってくるような感じのやつね」

(長いわ！)

ルメ「風斬！」ズバツ！

ボンゾー「ぐっ…！」

ルメさんが飛ばした攻撃はボンゾーに直撃する。しかし全く怯んでいない。

ボンゾー「はっはっはっ…僕は攻撃力は低いけど体力には自信があるんだ！（まあ、こう見えても体力も弱い方だけど…）耐久戦で殺してあげるよ！」ボンツ！

そしてボンゾーは大量の風船を出してきた。狭い路地裏で戦うのはマズい…！

アルミ「……！超ブーストダッシュュ！」ガシッ！

3人「え」

ダダダダダ！

私は咄嗟にお母さんたち3人を抱え、路地裏の外を目指した。

意外と弱い？

sideアルミ・マリオ

アルミ「ハア、ハア、なんとか表に出れた…」

アルカ「破片が刺さったのに無茶しなさんな…」

ルメ「あ、ボンゾーが来ました！」

ボンゾー「はっはっはっ…僕から逃げれるとでも？」

アルミ「逃げる気は無かったけどね…」

ボンゾー「ま、いいさ。どうせここで死ぬんだからね！」ボンボン！

ボンゾーは大量の風船を飛ばしてきた。

ルメ「うざい風船ね…ハアアアアッ！」ギユイイン…

アルミ「…!?!」

ルメさんはエネルギーで手を作り、それをグーの状態にする。あ、これはイナイレの

…

ルメ「正義の鉄拳！」ギユイイン！

ボンゾー「ほう、跳ね返してきたか…」

ルメ「うおおおおお！」ドゴオ!

ボンゾー「な……ガハッ！」ギユルル!

ボンゾーはルメさんの正義の鉄拳を跳ね返された風船もろともくらう。

ボンゾー「ぐっ……僕の、負けだ……」シユツ……

そしてボンゾーは消え去った。

ケーティ「お姉ちゃん、怖かったよ……」

アルミ「大丈夫よ、もうルメさんが倒したから」

アルカ「体力には自信があるとか言ってたくせに……」

ルメ「あ、私イラついたので本気でやってみました」

アルカ「……なら納得がいくわね」

「……………」じー

アルミ「……ん？」チラッ

「……………」サッ

今、逆さになつて悪魔がいたような……。

（あれはこの時代のアルミたちか。今はまだ子供のようだな。現在（コイツの元の時代）のアルミは善魔の僕にも勝てるぐらい強くなつたんだ、これから強くなっていくだろう。……ま、今はとりあえずテンプス・タイムを探さないとな）バサバサッ

アルミ「……!?!」

今明らかにかに角と翼が生えた人が飛んでったよね!?

……今のは忘れておこう。

ケーティ「お姉ちゃん、どうしたの?」

アルミ「え?…あ、いや、なんでもないわ」

その時、ノーアたちから通信が入った。

ノーア『現在しめじ町で調査中です、移動中きさらぎ駅へ行きそうになりました。電

車の調査をお願いします、以上』ツ…

アルカ「きさらぎ駅ですって!?!」

ルメ「今すぐ向かいますか?」

アルカ「ええ、そうしましょう。ルメ、頼んだわよ」

ルメ「はい!…ハアツ!」ビュウウン!

アルカ「2人ともしっかりつかまってなさいよ!」

アルミ「え?…うわああああああ…!」

ピュウウウ!

私たちは今、文字通り空を飛んでいる。ルメさんが風を操り、移動しているとのこと。

アルカ「すぐにシラ駅に直行よ!」

「数分後、シラ駅」

移動中お母さんはケーティにきさらぎ駅について教えた。そしてケーティはなぜかケーティ「なんかその駅かわいそうだね…」

と言っていた。私は分からなかつたけど、お母さんは理解してそうな顔をしていた。そしてなんだかんだで駅に着いた。

アルカ「さて、きさらぎ駅に着くまで止めれま1000やるわよ！」

アルミ「は、はあ…」

きさらぎ駅の調査は変な方法で行われるのであった。

不思議な少女

side アルミ・マリオ

私たちはしばらく電車でループしていた。

アルミ「お母さん、きさらぎ駅に着く条件とかあるの？」

アルカ「あるわよ」

ケーティ「なにになに？」

アルカ「1つのグループ、つまり私たち4人以外全員この電車から降りることよ」

ルメ「そんな事って……あ、ありましたね」

アルカ「でしょ？アルミ、周りを見てみなさい」

アルミ「え？……誰もない」

アルカ「つまり、もうすぐ着くのよ」

アルミ「え？ほんとう『まもなく、終点のきさらぎ』、きさらぎです。降り口は右側で

す』……マジか」

そして私たちはきさらぎ駅に降りた。

???? 「……………」 シュツ……

ーきさらぎ駅ー

駅の構内ははつきり言つて不気味だった。看板の文字が化けてるし、駅の外は歪んでるし、空は真つ暗。明かりは点滅している蛍光灯だけの、そんな空間。

アルカ「さて、ここに来たのも何回目かしら？」

アルミ「え、お母さん何回もここに來てるの!？」

アルカ「ええ、年に2、3度來てるわよ」

ケーティ「お母さんすごい！」

アルカ「でしょ?とにかく、何が隠されているものとかないか調査するわよ」

ルメ「うっ……」

アルミ「ルメさん、どうしたんですか？」

ルメ「この辺りを彷徨つてるタマシイが…多すぎるのよ…だから幽霊である私に負担がかかつてるのよ…」

アルカ「多すぎる?つまり迷い込んだ人が多かったのかしら?でも、それだと死体とかあるはずだし…原因不明ね」

…!まさか…

アルミ「…誰かが意図的に迷い込ませてるのか?」

アルカ「…あ!それありえるわね。流石アルミね、名推理だわ」

アルミ「えへへ」

ケーティ「……………ねえお姉ちゃん」

アルミ「ん？どうしたのケーティ？」

ケーティ「あそこに……」

…私より小さい女の子がいるよ？」

3人「……………え？」

女の子!?

私は慌ててケーティが指差した方を見る。

…いるわね。藍色の髪をした青い服を着ている少女が。

アルミ「というか、ずっとこつちを見てるような…」

アルカ「アンタたちはここでまってる。私が呼んでくるわ」スタスタ

お母さんは少女の所へ歩く。

少女「……………?」

アルカ「どうしてここにいるの?お名前は?」

少女「な…まえ…?」

アルカ「そう、名前」

少女「…ないの」

アルカ「え…?」

少女「わたし…なまえ、ないの。おやもいないの」

アルカ「親も…?どういう事?」

少女「わたしね、あのね…タマシイからうまれたんだ」

アルカ「タマシイから…?」

少女「うん。タマシイがあわさってね、びかーってひかって、わたしがうまれたの」

アルカ「(タマシイが合体して変異した結果この娘が?空間が歪んでいるきさらぎ駅

だからありえたのかしら) ……じゃあ、何歳?」

少女「うまれたときからよんさい…かな？」

アルカ「なるほどね…じゃあ…私が名前を付けてあげる」

少女「なまえを…？」

アルカ「そう。アンタの名前は…」

…アオイ。アオイ・マリオよ」

アオイ「アオイ…？」

アルカ「そう。よろしくね、アオイ」ナデナデ

お母さんは、アオイと名付けた不思議な少女の頭を撫でた。アオイの顔はパアつと明

るくなり…

アオイ「うん！よろしくね、おかあさん！」ギョツ！
嬉しそうな顔でお母さんに抱きついた。

????「……………」スツ…

魔術師スカーフ

side アルミ・マリオ

アルカ「この娘、引き取ることにしたわ」

アオイ「よろしく！」

アルミ「ふふっ、お姉ちゃんよ♪」

ケーティ「わ、私もお姉ちゃんだよ♪」

アオイ「よろしくね、おねえちゃんたち！」ニコッ

アオイは可愛い笑顔でそう言ってきた。

2人（癒される…）

と、その時。

????? 「いい時間を過ごしている時にすまないが、ごきげんよう」

ルメ「…誰よアンタ。まさか電車の運転手？」

スカーフ「その通り。僕は運転手をしていた魔術師、スカーフだ。意図的にこのきさ
らぎ駅に連れ込んだ逃亡者を皆殺しにしている」

アルカ「…へえ。だからタマシイが多すぎるのね」

スカーフ「そうそう。それと：殺されるのは君たちもだよ？」スツ
スカーフは魔法の杖みたいなものを出し：

スカーフ「出でよ！我が傀儡よ！」ボンツ！

「うがー！」

ゾンビを何体か召喚した。

アルミ「つて召喚!？」

ルメ「風斬！」

「ぐうっ…」

アルミ「ファイアパンチ！」ドゴツ！

「ぐおおお！」フツ…

スカーフ「ほう、あつさりやられてしまったか。では…これならどうだ!!」ポボンツ

！

「うがー！」

今度は20体ほど召喚してきた。

ケーティ「こうなったら私も戦う！ハアツ！」ザクツ

ケーティは持っていたナイフでゾンビにダメージを与えた。

アルカ「フツ、ハツ！」ドゴドゴツ！

「うぐおおー！」

スカーフ「ふっ、苦戦してるようだね…」

アルミ「うっさいわね…！極爆熱スクリュー！」ドツゴオン！

「うおおおおお…」フツ

私は怒ってゾンビ共を一掃した。

スカーフ「さて、ウオーミングアップはここまでにしようか。ハッ！」シュツ！

スカーフは黒い髑髏を飛ばしてきた。

アルカ「……………ッ！」サツ

それをお母さんがかわす。

スカーフ「一発目はかわしたか。これならどうかな！ネクロの術！」

その次の瞬間、大量の髑髏の弾幕が私たちを襲ってきた。

アルミ「……………時間停止！（味方以外）」

←ブウウウウン…

私は咄嗟に時を止めた。

アルカ「ナイスタイミングよ、アルミ！」

ルメ「このまま弾幕をスカーフに向けるわよ！」

アルミ「了解！」

―数分後―

アルカ「…ふう、これでオーケー。再生！」

→ブウウウウン…

スカーフ「……………なっ！」

ドツガアアアン！

髑髏の弾幕はスカーフに命中し、爆発する。

スカーフ「ぐっ…負けるわけには…」「あ、おもいだした…」…？」

アオイ「このひとだ！わたしのぜんせたちをころしたの…ゆるさない！」

ギユオオオオオオ！

突然アオイの周りから凄まじいパワーが溢れ出す…！

4人「!?」

スカーフ「何をする気だ!？」

アオイ「ころしたひとたちのうらみをして…ソウルブラスター！」ギユオオオオ
ン！

スカーフ「グアアアアアツ…！」シユツ…

スカーフは巨大な光線とともに消え去った…。

4人（強すぎでしょ!?)

きさらぎ駅の秘密

side アルミ・マリオ

アオイ「……ふう、これでかたきはうったよ！」

アオイはガッツポーズをした。

アルカ「あはは……アオイ、凄いわね」

アオイ「うん！」ニコツ

お母さんは褒めてはならないような言い方で言うが、アオイはそれに気付かず、眩しい笑顔を見せてきた。癒される……

ルメ「……あれ？タマシイが……減った？」

アルミ「恐らくアオイがスカーフを倒したからでしょうね」

ルメ「なら良いけど……」

アオイ「……あ！おかあさん、みせたいものがあるの！」

アルカ「なにになに？何を見せたいの？」

アオイ「ついてきて！」テクテク……

ケーティ「お姉ちゃん、何だろうね？」

アルミ「さあ……？」

私たちはアオイについて行つた。

―アオイの部屋―

アオイ「ここでわたしはねてるの！」

アルカ「…凄いわね」

アオイが見せたのは彼女の部屋だつた。4歳の子供に相応しいおもちゃがいくつもあり、小さなテレビ、ベットまであつた。

アルカ「アオイ、誰がこれを持ってきてくれたの？」

アオイ「うーん…わかんない！」

アルミ「分からない？」

アオイ「わたしがうまれたとき、もうこのへやがあつたの！ゼーんぶしんぴんだつた！」

ルメ「しかも全部新品？…誰かが意図的に置いたのかしら？」

アルカ「………？これは…何か書いてあるわね」

アルミ「え？どれどれ？」

お母さんは紙を見せてきたが、よく分からない記号で書かれていた。

アルカ「これはウインディングね。読むわよ…『ここにアオイが生まれたら、アルカ

が来るまでここにすませて下さい。日花より』……私のことを知ってる？」

アルミ「日花って……誰？」

アルカ「分からないわ。とにかく、私が出るまでって書いてあるし、未来予知でもできるとしてもいいわね」

（未来予知どころか、未来人なんだけどな！しかもお前の転生の！）

アオイ「おかあさん、よみおわった？」

アルカ「ええ、終わったわよ。そろそろ帰りましょ？」

アオイ「かえる？おかあさんのいえに？」

アルカ「そうよ」

アオイ「わかった！でも……ここにあるものは？」

アルカ「また来た時に持っていくわ。さて……時間停止！」

←ブウウウン……

お母さんは時を止め……

アルカ「ハアアアアアアアアアアツツ：オラア！」 シュツ！

エネルギーを思いつきり貯め、パンチをした。すると……

バリイン！

アルミ「え!？」

空間が文字通り割れた！

アルミ「…ふう」

アオイ「わー！おかあさんすごいすごい！」

アルカ「でしょ？さて、帰るわよ」スツ

お母さんは空間の割れ目に入っていく。

アルミ「突入！ハアア！」スツ：

ー外ー

アオイ「わあああ…！」キラキラ

アオイは周りの景色に目をキラキラさせている。そりや始めて外に出たから分かるわね。

アルカ「再生！」

→ブウウウウン：

ケーティ「帰るよ、アオイ」

アオイ「うん！おねえちゃん！」ダキッ

アオイはケーティに抱きつく。

アルミ「ふふっ、可愛い妹たちね」

血は繋がってないが可愛い妹たちに癒される私であった。

え、食べたことないの!?

sideアルミ・マリオ

―秘密基地―

アルカ「ただいまー」ガチャッ

ノーア「あ、おかえりです、アルカさん」

ルメ「あ、帰ってきてたのね」

ルイス「特に何もありませんでしたね」

……なんかデジャヴ？前同じようなこと起きなかった？

アオイ「わあー…すごい！」

アドレーヌ「ん？この子は？」

キノ太郎「まさか…」

アルカ「この子はアオイ。きさらぎ駅で生まれた子よ。……拾ってきたわ」

ルイージ「Oh…」

「……My god…」

アオイ「おねえちゃん、なんでみんなびっくりしてるの？」

アルミ「……アオイが可愛いからよ」ナデナデ
アオイ「えへへ」

「可愛いのは事実だけど違うだろ！アルカ、説明しろ説明！」

アルカ「はいはい。この子は……」

「ただ今説明中」

……ということなの。ドゥーユーアンダースターン？」

ノリオ「理解はしましたけど……」

キノピオ「きさらぎ駅ってそういう所だったか？タマシイが合体して……」

アルカ「ま、納得できなくてもアオイはケーティ同様私の娘だから」

「は、はあ……」

みんなお母さんに溜息をつく。ま、お母さんらしいといえばそうね。

アルカ「さて、そろそろ晩飯にしましょ。解散——」

ルメ「あ、はは……」

ルメさんは苦笑いをするしかなかったようだ。

「晩飯——」

アルミ「お、今夜はラザニアのようね♪」

ケーティ「美味しそう！」

アオイ「……おねえちゃん」

アルミ「どうしたの?」

アオイ「これ、なににつかうの?」

アルミ「え? 食べるけど…」

アオイ「?」

アルカ「まさか…食べたことがないの?」

アオイ「うん! いつもタマシイのちからでいきてたから、たべるってわかんない!」

アルカ「なるほどね…じゃ」コトツ

お母さんはスプーンでラザニアを一口取ると、

アルカ「アオイ、あーん」

アオイにあーんをすることにした。

アオイ「あーん…」パクッ

アオイはスプーンを頬張り、もぐもぐ食べる。

アルカ「どう? 美味しい?」

アオイ「うん! おいしい! たべものっておいしいんだね!」パアア

アオイはどやら気に入ったようだ。

アルミ「私も食べよつと」パクッ

ん、お母さんのラザニアは美味しいわね。

その後、アオイは4歳が食べるような量じやないほど食べた。すごい食欲に私は驚くのであった。

―数時間後―

アルカ「おやすみ、3人とも」

アルミ「おやすみ」

ケーティ「おやすみ♪」

アオイ「おやすみー！」

私たちはそれぞれのベットに入る。

アルミ「ふぁー……ん？」

もぞもぞ

何かが布団の中で動いているから（布団を）取ってみる。すると中には

アオイ「おねえちゃん、いつしよにねよ？」

アルミ「…ふふっ、いいわよ、おやすみ」

アオイ「うん、おやすみおねえちゃん！」ギユツ

アオイは私に抱きつく。そして数分後すぐに寝た。私も眠くなっていき、眠りについた。

アルカ（ふふっ、気持ち良さそうな寝顔ね♪）ガチャツ
その光景をアルカはずっと見ていたのであった。

大博士

sideアルミ・マリオ

ーマイン国ー

今日もマイン国に調査にきた。メンバーは私、ルメさん、ノーア、アドレーヌだ。

ノーア「本当にブロックだらけね」

アドレーヌ「骨格どうなってるんだろ…」

アルミ「アドレーヌ、それを言ったら止まらなくなるわよ」

アドレーヌ「…あ、うん」

ルメ「確か、あそこの路地裏でボンゾーに襲われたわね…」

アルミ「そういえばそうですね。あそこに何かあるんじゃないですか？」

ルメ「そうね、行ってみましょう」

ー路地裏ー

ノーア「暗い暗い、でもI, I not cry♪」テテツチー

ヒユウウウ…（寒い風）

アルミ「……………」しらー

私は少しムカつきながらノーアたちについて行った。

―数分後―

ルメ「……………」

アドレーヌ「…」

ノーア「……………」

アルミ「…何、このあからさまに怪しい建物?」

路地裏の奥の方に、どこからどう見ても怪しい建物があった。

ルメ「ちよつとここで待つてなさい」スウウ

アルミ「すり抜けた!」

ルメさんは建物のドアをすり抜けた。幽霊だからできるのかしら?

ドゴツ、ドガツ…ドガン!

アドレーヌ「な、何してるんだろ…」

ノーア「ルメさんは幽霊だから死なないけど…心配ね…」

アルミ「壁に耳をつけて中の様子を…「ドガン!」…うわっ!」

壁に耳をつけようとした瞬間、建物のドアが吹き飛んだ。

???「フハハ…貴様らがそこにいるのは分かっている。さっさと入ってこい!」

アルミ「……………誰よ、アンタ!」

ルメ「アイツは大博士、さっきのデカイ音はコイツの仕業よ」

大博士「おっと、その幽霊さん、それ以上喋るのはやめてもらおうか」シュツ
大博士は壁から光線銃みたいなものを出し：

ノーア「…ツ！アイスガード！」パキツ

ドガン！

極太光線を放ってきた！

アドレーヌ「え、ええー!?!」

ルメ「当たったらひとたまりもないわね…」

大博士「なーに、これはまだ準備運動だ。さあ…君たち逃亡者はこの私が仕留めてくれよう！」

アルミ「…燃やしてやるわ！」

V S 大博士

sideアルミ・マリオ

大博士「まず、コイツらを倒してもらおうか？」ピッ

ウイイイン…ガチャツッ!

4つの端っことから一個ずつ変な生物が入った水槽が出てきた。

アドレーヌ「なに、アレ…」

アルミ「ハリセンボンみたいに見えるわね…」

ルメ「あれはガーディアン。目からビームを出す生物よ」

ノーア「え、ビーム!?!」

大博士「確かにコイツらはガーディアンだ。だが、この私が改造したガーディアンたちだ!…ゆけっ!」ピッ

バリイン!

ガラスは割れ、水が溢れると同時にガーディアンたちが襲いかかる!

ガーディアン「ビビビイッ!」

ルメ「一人一人体ずつ倒しなさい!」

アドレーヌ「え、ええー!?!」

ノーア「やるしかない…：ヘイルストーム!」パツキイン!

アルミ「極爆熱スクリュー!」ドツゴオン!

私とノーアはそれぞれガーディアンに少しダメージを与える。

ルメ「空気爆弾!」ドガン!

ガーディアン「ビビッ…：ビー!」ピカア!

アドレーヌ「ビームが来る!?!うー…：ガード!」

シユウウ…

アドレーヌはガーディアンのビームを間一髪でガードする。

アドレーヌ「危なかった…：ミサイル!」ドゴドゴドゴ!

アルミ「…：ノーア!」ドゴツ

ノーア「なによ、アルミ!」ドゴツ

アルミ「2人で連携攻撃しない!?!」ドゴツ

ノーア「…：いい考えね、乗った!」ドゴツ

アルミ「行くわよ!ファイアボール!」ボオオオ!

ノーア「アイスボール!」ピキイイ!

ガーディアン「ビィイ…」

アルミ「トドメよ！炎突！（何故か知ってる）」ボオオ！

ノーア「冷突！（お前もかよ！）」パキイ！

ガーディアン「ビビビイ…」フツ…

大博士「ほう、一気に2体倒したか。だが甘い！」

シユウウ…！

ガーディアン「ビビビイッ！」

アルミ「な…!!？」

ノーア「復活した…!？」

大博士「4体とも同時に倒さなければ無意味なのだ！」

ルメ「厄介な敵ね。…アルミ、ノーア！力を貸しなさい！」

アルミ「は、はい！」

ノーア「何すればいいですか？」

ルメ「アルミは私の右で火を出し続け、ノーアは私の左で氷を出し続けて！……

ハアッ！」ギュルル…

アドレーヌ「私は…えーと…ミサイル！」ズドドド

アドレーヌは私たちが攻撃されないように牽制することにしたようだ。

アルミ「ハアアアアッ！」ボオオオオ！

ノーア「うおおおお！」パキイイ！

ルメ「……チャージ完了！くらいなさい……」ギョルル……！

ルメさんは火を纏った風の球と氷を纏った風の球をぶつけ合う。

ルメ「消し飛びなさい……陽風陰風！」ピュウウウン……！

大博士「な……なに……!?」ピュウウウウ！

ガーディアアン「ビィイ……！」ピュウウウウ！

ガーディアアンと大博士は空の彼方へ飛んで行った。

アルミ「勝った……んですかね？これ」

ルメ「敵は逃したけど、勝ちなんじゃない？」

大博士との戦闘は、私たちの勝ち（？）で終わるのであった。

首謀者の手がかり

sideアルミ・マリオ

ゴソゴソ、ガサガサ。

大博士をガーディアンごと吹っ飛ばした後、私たちは研究所を調査していた。

アドレーヌ「……？」

アルミ「アドレーヌ、どうしたの？」

アドレーヌ「これ、見て……」

アルミ「……『王からの命令』？……ルメさん、これ」

ルメ「王って誰のことかしら？とりあえず読んでみるわよ。えつと……『大博士に伝える。キノコ王国から侵入してきた住民を殲滅せよ。犯罪ワールドの恨みを晴らすのだ』」

……犯罪ワールドですって!？」

ノーア「犯罪ワールドって、確かミールさんが育ったところですよね？」

ルメ「ええ、そしてアルカ先輩たちが支配者であるダーククツパを倒し、犯罪ワールドは消え去ったのよ。……でも、何故犯罪ワールドがここに……」

アルミ「……王ってやつがダーククツパの知り合いだったたりして？」

ルメ「…そうかもしれないわね。他に手がかりがあるかも知れないわ。調査を続けましょう」

そしてまた数分後、私はとある紙を見つけた。私はそれをルメさんに見せた。

ルメ「どれどれ…『大博士を倒した者へ』…!？」

ノーア「まさか…大博士が倒されるのは知られていた!？」

ルメ「読むわよ…『大博士を倒した者たちに試練を与える!この紙を読んだ1分後、君たちはとある戦場に送られるだろう!そこで私と戦うがいい!ソーンより』…ソーン?」

アルミ「また敵ですか?」

ルメ「絶対そうでしょうね。それに…」フツ

アドレーヌ「え、ルメさん…?」

ノーア「消えた…!？」

アルミ「…!みんな、すぐにこの紙を読むわよ!」

アドレーヌ「う、うん!」

ノーア「私たちも同じところに送られるのかしら?」

アルミ「そんなことより、読みなさい!」

ノーア「え、ええ…読んだわよ」

ー1分後ー

アルミ「そろそろね…」フツ

ー闘技場ー

私たちが送りこまれたのは、広い闘技場だった。

ルメ「みんな、来たのね」

???'「おお！あと3人参加者が増えたみたいだね！」

アルミ「…でかいイカね…」

空中には、巨大なイカのようなヤツが浮かんでいた。

ソーン「私はソーン！見ての通りイカの幽霊なのさ！そして、君たちの試練の相手でもある！」

ノーア「試練ね…」

ソーン「そう、試練！今から君たちには…」ピカア！

4人「…っ!?」

突然周りから眩しい光が放たれる。そして…

「グルルル…」

大量の白い狼が私たちを囲んでいた。

ソーン「このソウルウルフたちと戦ってもらおう！」

「ワォーン！」

ルメ「とんでもない数と殺気ね…」

アルミ「一匹一匹の力が強そうですね…」

ソーン「さあ、試練、始めえ！」ゴーン！

「グロオオオウ！」

ソーンの号令とともに、狼たちは襲いかかってくるのであった。

カオスな戦い

sideアルミ・マリオ

「ウルオオオオウー」ドツ!

ルメ「…召喚、グレイ!」

ルメさんは突然そう言う。すると…

ギユウウン…!

3人「!?!」

グレイ「僕の出番のようだね、主人!」

ルメ「ええ、手伝いなさい!」

グレイ「了解!」

ルメさんの中から灰色のハートが出てきて、灰色の人型生物になった!

アルミ「ルメさん、誰ですか、その人!?!」

ルメ「彼はグレイ。私の…式神みたいな人よ」

ノーア「は、はあ…」

アドレーヌ「いつのまに…」

「ガルルルル……！」

ルメ「おっと、どうやら喋ってるヒマはないよう……ねっ！」ドゴツ！
「キャンッ！」

……確かにそうね。

アルミ「ファイアパンチ！」ボオオオ！

ノーア「アイスパンチ！」パキイイ！

アドレーヌ「えーと……普通のパンチ！」ドゴオツ！

「キャウン！」ボオオオ！

「カチーン

「ギャフン！」ベゴツ！

……今アドレーヌが殴った狼から出ちやいけない音が出たような気が……

（アドレーヌのパワーは3人の中で一番強いため、気のせいではない）

ソーン「……そろそろかな？」パチン！

ソーンは指（触手？）を鳴らすと、戦場の真ん中にクマが現れた。

ソーン「コイツはソウルベア。高い攻撃力と体力を持つ！」

「グオオオオオオ！」

ルメ「狼と一緒にクマも……！」

グレイ「ハアアアアッ！」 シュルルルルル！

「グッ?…グオオオオオオオ！」 ブチッ！

グレイさんは腕を伸ばすが、クマはそれを千切ってしまった！

グレイ「まずい、千切られた！」

アルミ「援護します！ファイ…」

「ガルルルル！」 ガブッ！

アルミ「…痛っ!?!」

クマに向かってファイアボールを放とうとしたその時、私は狼に噛み付かれた。

アルミ「ぐっ…離し…なさい！」 ブンブン

「グルルルル！」 ガブガブ

腕を振り回しても取れる気配はない。

アルミ「…なら！うおおおおお！」 ダッ！

「ガルッ!?!」

「グオッ!?!」

私は狼を腕に噛み付かせたままクマに向かって突進する。

「グオオオオオオオ！」 ブンッ！

クマは攻撃してきた。が…

アルミ「その為のコイツよ！」サツ

「ワウ!?!…ギャフン！」ドガツ!

噛み付いてた狼を盾にし、狼に顔面にクマの拳がクリーンヒットした。

「グオオオオオオ…」

クマは狼に対し申し訳なさそうな顔をする。

アルミ「…今よ!ハアアアアアアアアアツ!」ボオオオオ…

「グオツ!?!」

アルミ「…フレアドライブ!」ドツゴオオ!

私は火を纏い、クマに突進した。

「グオオオオオオオ…」メラメラ…

結果、攻撃は当たり、クマは燃やされた。

アルミ「ハア、ハア…ん?」

クマは消え去ったのだが、そこに何かが落ちていた。

アルミ「…弓矢?」

幽霊退治！

sideアルミ・マリオ

アルミ「…弓矢？」

グレイ「…どこかに撃つてみたら？」

アルミ「じゃあ…ソーン！くらえ！」ヒュン！

私はソーンに向かって弓矢を放った。

ソーン「フン、私に飛び道具は効かな…ガハッ!?」ドスツ

アルミ「…効いてるわね」

ソーン「グググ…何故だ!？」

アルミ「この弓矢だからじゃ…あれ？無くなってる」

ソーン「どうやって攻撃が当たったかは知らないが、もう当たらないと思うがいい！

行けっ、ソウルウルフ！」

「ウルオオオオウー！」

ソーンは怒ったのか、狼をもっと召喚してきた。

ノーア「増えた!？」

アドレーヌ「ザ・ワールド・ドローパーイン！」バシユツ！

「…わーん！」ドゴツ

ルメ「……………ねえソーン」

ルメさんはソーンに話しかけた。

ソーン「…なんだ？」

ルメ「この狼たちじゃ私たちは倒せないわよ？もつと強いヤツ、うーん…例えばクマとか出せばー？」

…ああ、なるほど。煽ってるわね。

ソーン「ムウツ…そんなに死にたいならソウルベアを大量に出してやる！行けっ！」

「グルルルル！」

ソーンはクマを大量に（と言っても3体だけ）出してきた。

アルミ「…ノーア！」

ノーア「ええ！行くわよ！」

アルミ「バーニング…！」ボオオオ！

ノーア「…アイシクル！」パキイイ！

私たちは燃える氷（どういう原理かは知らない）をクマたちに飛ばし、クマたちはそれによって消え去る。

「グルオオオ…」ポトツ

ノーア「…あ、弓矢が3本も」

グレイ「1本貸してくれ」

アルミ「…どうぞ」

私たちは3本の弓矢をソーンに構えた。

ソーン「…ふん、2度も当たると思うな！」

アルミ「2度じゃなくて…」

グレイ「…4度…」

ノーア「…当たるわよ！」

ヒュン、ヒュン、ヒュン！

私たちはほぼ一斉に弓矢を放った。

ドスドスドスツ！

ソーン「ぐっ、ぐはっ、ぐわあああつ！」

弓矢は3本ともソーンに命中した。

ソーン「こ、この…このソーンが…そのソーンがああああ！」フツ…

→D I O 風

「ウ…ワウ？」

ゾーンは消え去り、その瞬間狼たちの攻撃が止んだ。

アルミ「…洗脳でもされてたのかしら?」

ノーア「恐らくそうね…」フツ

アルミ「あれ?ノー」フツ

ー研究所ー

フツ。

ルメ「戻ってきたわね」

アドレーヌ「…連戦で疲れまして『おめでどう!レベル3がクリアされた!』…え!」
『次はいよいよ最後のレベル!範囲は変わらないけど、ハンターは倍になるぞ!がんばって逃げるがいい!』プツン

アルミ「レベル4…最後か…」

ノーア「アルミ、頑張りましょう!」

アルミ「…もちろん!」

アオイとケーティ

side アルミ・マリオ

ー秘密基地ー

アルミ「ただいまー」ガチャツ

アルカ「おかかえりー」

ノーア「……？」

アルカ「レベル3クリアお疲れ様」

アルミ「いやー、疲れたー」

ルメ「先輩、アルミの腕が噛まれています。大丈夫なのでしょうか？」

アルカ「何に噛まれたの？」

アルミ「狼」

アルカ「…どんな戦いをしたのよ、ハア…。とりあえず見せなさい」

アルミ「はい」スッ

私はパーカーの袖をめくって噛まれた部分を見せる。

アルカ「うわ…出血してるわね。なんで気付かなかったの？」

アルミ「…パーカーの色？」

アルカ「いやいや、色の濃さが違うでしょ。動かないですよ…ハッ！」カッ！
お母さんの手が光り、私の腕が徐々に回復していく。

アルカ「ふう…これでオーケーよ」

アルミ「ありがと、お母さん」

アルカ「礼はいらないわよ。部屋に戻って休みなさい」

アルミ「了解♪」スタスタ

ガチャッ。

アルミ「ふう、さて、ゲームでも…ん？」

私のベットに目をやると、布団（もちろん掛け布団）に小さな膨らみがある。

アルミ「…えいつ」バツ

布団をサツととると、そこには…

アオイ「…あ、アルミおねえちゃん」

アオイがくるまっていた。

アルミ「…何してるの？」

アオイ「おねえちゃん、しーっ。ケーティおねえちゃんとかくれんぼしてるの」

アルミ「あーなるほど。分かったわ」サツ

そして布団を元に戻した。

……ゲームでもしとこ。何をするのかって？それは…

「真！爆熱…スクリュー！」ドッゴオン！

…イナズマイレブンGOストライカーズ2013よ。

→何故フルネーム!?

お母さんの古い物にWiiとこれがあったから遊んでみたらハマった。
ちなみに言うくと22年前のゲームらしい。

天の声「というか、この世界にWiiとイナストってあったんだな」

アルミ「…失せろ」ドゴツ

天の声「え、やめ」シュツ

……害虫駆除完了つと。ゲームゲーム♪

アオイ「…プハツ！ハア、ハア、フツ！」ガパツ

……息吸ってるだけね、アレは。

―数分後―

ガチャツ

ケーティ「お姉ちゃん！アオイっている？」

アルミ「…居ないわよ？」ピコピコ

ケーティ「…じゃあ、この布団の膨らみはー？」そーつ
…あ、やべ。

ケーティ「ほいつ！…あれ？」

布団の下には誰も居なかった。何故って？

アオイ「……………」

アルミ（危なかったー！）

時を止めてアオイを急いでテレビの裏に移動させたからである。

ケーティ「うーん…どこかなー？」ガチャツ

ケーティは部屋を出て行った。

アルミ「…もういいわよ」

アオイ「あぶなかったー！ありがとう、おねえちや「やつぱりここかなー？…あ！いた！」…あ」

何故かケーティが戻ってきて、アオイは見つかってしまった。

ケーティ「アオイ見つけ！」

アオイ「みつかっちゃった…つぎはわたしがおにね！」

ケーティ「うん！10まで数えてねー」ガチャツ

アルミ「…元気な妹たちね」

癒されるわね。

そのころ、地下では…

side?..?..???

「よし、???. 起動してくれ」

「分かった」カチャツ

ウイイイイイン…!!

周りに機械の音が鳴り響く。

オイラの仕事は、タイムマシンに問題が無いかのチェックだ。

シュツ…

機械は消えた。

それを確認したオイラは、時空対応トランシーバーを使う。

「もしもし、親父、聞こえるか?」

『ああ、聞こえてる。ここは…何年後だろうか?』

「分からないのか?」

『そうだ。どうやらここは地上のどこかのようだ』

「そうか。危ないなら早く戻って『ムツ!?なんだお前は!?!』…どうした親父!?!」

『いつこの機械に入ってきた!?ぐっ…!』

「親父、どうしたんだ!?早く戻ってこい!!」

オイラは親父が襲われていることに気付き、早く戻ってくるよう伝えるが…

『……………』ブチッ

「……………途切れただど?」

シュッ…

「!?」

突然、目の前にタイムマシンが戻ってきた。

「っ、親父!」バツ

タイムマシンの中を見る。しかし、そこには…

「なんだ、この…」バグったようなオーラは…」

変な、バグったようなオーラしか無かった。

(ククク…ヨウヤクフツカツデキタゾ…アノオンナ、ブツコロシテヤル…!) カサ

カサ…

「…?」クルッ

シーン

誰か居たような気が…

…それよりも親父!!

ピッ

??? 「親父、応答してくれ!!」

…ジジッ

「……………」ズズッ

「親父!? 生きてるのか!？」

「… ?? W・D・????」

「… ?? ★?」ブチッ

「また切れた…?」

…これは早く”ドリーマー王”に伝えなきゃな。

「ニヤッ?」ガチャッ

「…どうしたんだ、パピルス」

パピルス 「兄さん、お父さんは?」

??? 「っ…………今、研究所で忙しいんだ。多分後で戻ってくるだろ」

パピルス 「そうか? ニヤハッ! 俺様のスパゲッティを食べさせたら元気出るかな?」

??? 「多分な。お前のスパゲッティは地下一だからな!」

パピルス 「…そうか! 今から作ってくるぞ!」ガチャッ

そしてパピルスは部屋から出た。

??? 「……………」

親父、一体どこへ行っただんたろうな…？

―数十年後（3部）―

アルミ「……………」スタスタ

アオイ「……………」スタスタ

「…？」スタスタ

「…よう、久しぶりだな」

―さらに数十年後―

??? 「……………」お前は!？」

?? 「…!？」

「……………」スケルトン?」

「…?? W・D・????」

3人「……………」?? ☀?」

この時、別の所で、運命の歯車を動かすものが現れた…。

全員転送!?

sideアルミ・マリオ

ー次の日ー

私たちは全員会議室に集まり、会議を始めようとしていた。

アルカ「さて、会議をstart『レベル4会場に転送するまで、残り1分!』……転送ですって!？」

アルミ「ど、どどどどうすればいいの!？」

アルカ「…みんな、今すぐ武器などの準備をしなさい!」

全員「お、おう!」

ー1分後ー

シュツ…

私たちは広い闘技場に転送された。広すぎて奥が見えないレベル。しかも…

「()は…どこだ?」

「俺たち、殺されるのか…?」

キノコ王国の住民たちも転送されていた。

アルカ「…嫌な予感がするわね」

ルイーダ「そうだね…」

ノリオ「何が始まるんでしょうか？」

????「さあ、みんな集まったようだよ！」

上から声がしたので見上げると、そこには黒い杖を持った若い男が宙を浮いていた。

セイダン「私はセイダン！このデスゲームの首謀者さ！」

「んだとおお!!」

「俺たちに何をする気だ!!」

ざわざわ…

セイダン「おっと、まだうるさくするのは早いよ？今からレベル4がスタートするんだからね！」

「とつと俺たちを解放しろー!」

「お前が何してんのか分かってんのかー!?!」

人々は非難を浴びせるが、セイダンはそれを無視して話を続ける。

セイダン「レベル4の内容は…ズバリ!」スッ

セイダンは杖を振りかぶると…

シュッ

「グオオオオオ……」

セイダンの真下に大量の土人間が召喚された。

セイダン「このテラコッタ軍団”など”から生き残ることさ！もちろん、倒そうとするのもオーケー！ただ、死んでも知らないよ？」

など？まさか……こいつらだけじゃない!?

セイダン「始まるまで、10……9……」

アルカ「……みんな、戦闘準備！」

ルイーザ「……ビリッ

セイダン「8……」

ノリオ「……スチャッ

キノピオ「……サッ

セイダン「7……」

アド「……スッ

クツパ「……ボオオオ

セイダン「6……」

ジーノ「……ギギギ

リボン「……シユルル

セイダン「5…」

ミール「…」スチャツ

ハリー「…」サツ

セイダン「4…」

アルミ「…」ボオオオ

ルイス「…」バチツ

セイダン「3…」

キノ太郎「…」サツ

アドレーヌ「…」スツ

セイダン「2…」

ノーア「…」パキイイ

ケーティ「…」ググツ

セイダン「1…」

アオイ「…」ギユルル

セイダン「…0！レベル4スタート！」シユツ！

「グオオオオオオオ！」ドドドドドド…！

「うわあああああ！」

「逃げろおおおー！」

テラコツタ軍団は一斉に襲いかかる！

アルカ「みんな…」

……全員突撃！」

全員「うおおおおおお！」

それと同時に私たちも突撃した。

最終決戦が今、始まった。

強敵の集団

sideアルミ・マリオ

テラコツタ「グオオオオオオ！」

アルミ「ハッ！」ドゴツ！

テラコツタ「グッ…グオオオオオオ！」

アルミ「くっ、しぶといわね！」

私たちは今、テラコツタ軍団と戦闘中。しかし、一体一体の体力が半端ないため、苦戦している。

アルミ「アオイ！ケーティ！近くにいなさい！」

ケーティ「う、うん！」

アオイ「ソウルブラスター！」

ギユイイン…ドガン！

テラコツタ「グオオ…フツ…

アオイ「ハア、ハア、疲れた…」

ケーティ「無茶はしないでよ？」

アオイ「うん…」

アルミ「5歳にもなっていないのに凄い威力ね…フレアドライブ！」 チュドーン！

テラコツタ「グオツ!?」 ドゴオ

ケーティ「ハアツ！」 ズバツ！

テラコツタ「グオオ…」 フツ…

アルミ「ふう、また一体…」

テラコツタ「グオオ！」 シュツ

アルミ「…よっ」 サツ

私は殴りかかってきたテラコツタの拳を難なく避ける。コイツら、スピードは遅いの

よね…

ケーティ「……鎌！」 シュツ！

アルミ「え」

ケーティはオレンジ色の鎌を作り出した！

ケーティ「…おりやつ！」 ズバツ！

テラコツタ「グオオ…」 フツ…

アルミ「……規格外な妹たちね。私も頑張らないと！」 ボオオオ…

テラコツタ「グオツ！」 シュツ！

アルミ「フツ！」サツ

私は拳に纏った火の温度は高めていき…

アルミ「お母さん直伝！煉獄パンチ！」ドゴオ！

テラコツタ「グオオ…」フツ…

ケーティ「お姉ちゃん凄い！」

アオイ「わたしもいくよー！ハアアアアッ！」ビリビリビリ…！

アオイは光を纏い始めた！あれは…

アルミ「…まさか!？」

Sアオイ「…：…へんしーん！」

アルミ「スーパー化した!？」

Sアオイ「いくよー！」ギョルル…

テラコツタ「グオオオオ！」シユツ

ケーティ「アオイ、危ない！」

Sアオイ「あぶなくないよー！くらえー！ソウルパンチ！」ドゴツ！

ケーティ「わお…」

テラコツタ「グオオ…」フツ…

テラコツタ「グオオ…」フツ…

テラコッタ「グオオ…」フツ…

スーパー化したアオイはパンチ1発で3体も倒した。

見たところ私と同じ進化タイプね。

…蓄積タイプがあんなに強い筈ないもの。

アルミ「…そうだ！時間停止！」

←ブウウウウン…

アルミ「私にファイアボール置きながらランニング…！」

↓数分後↓

アルミ「ハア、ハア…再生！」

→ブウウウウン…

ケーティ「お姉ちゃん？疲れてるの？」

アルミ「う、うおおおおお！」ビリビリビリ…！」

ケーティ「え、お姉ちゃんまで!？」

Sアルミ「スーパールミ、参上！」

テラコッタ共をぶつとばしてやるわ！

テラコツタ「グオオオオオオ！」ドドドドド

何体かのテラコツタがケーティに襲いかかる。

アルミ「つ、危ない…あれ？」

しかし次の瞬間…

テラコツタ「グオオ…」フツ…

テラコツタたちは既に倒されていた。

Yケーティ「ふう、久し振りに使うからちよつと遅くなってるな」

Sアオイ「おねえちゃん、すごい！」キラーン

Yケーティ「えへっ！私だってパワーアップできるもん！」

Sアルミ「それ、なんていうの？」

Yケーティ「タマシイ覚醒っていつて、タマシイの力を引き出すことでパワーアップするの！」

テラコツタ「グオオオオオオオ！」シユツ

Sアルミ「なるほど…ねっ！」ドゴツ

テラコツタ「グオオ…」フツ…

Sアオイ「ねえおねえちゃんたち、まとめてたおしていかない？」

Yケーティ「さんせーい！」

アルカリせーい！うるせーい！

……やかましいわ。

S アルミ「いい考えね」

S アオイ「じやあまらずはわたしから！……ソウルパンチ！」ドゴオ！

Y ケーティ「次は私！……ブレイブカッター！」ズバツ！

S アルミ「トドメは私！……ブルーファイア……パンチツツ！」ドツゴオン！

テラコツタ（大体100体かな？）「グオオ……」フツ……

私たちの鬼畜（？）な連携攻撃により、周りのテラコツタ軍団は全員倒された。

S アルミ「……いいストレス発散になるわね」

いいわね、もつとやりましょう！

（いいぞもつとやれ風）

side アルカ・マリオ

アルカ「せいっ！」ドゴオ！

テラコツタ「グオオ……」フツ……

ルメ「ハアツ！」ズバツ！

テラコツタ「グオオ……」フツ……

グレイ「とうっ！」ドゴツ！

テラコツタ「グオオ……」フツ……

アルカ「こりゃ……! キリが……! ない……! わね……!」

ルメ「どう……! しま……! しよう……! か……!」

私たちは喋りながら一体一体確実に倒している。なぜアルミたちみたいは大技を出さないのかって? ……使う気がないからよ。

アルカ「ま、使うんだけどね。…時間停止! (ルメ以外)」

←ブウウウウン……

…時間停止は大技の過程よ。

ルメ「で、何するんですか? グレイを止めて」

アルカ「この技にグレイはいらないからよ。…一点に集めるわよ」

ルメ「はい!」

↓数分後↓

アルカ「…よし、オーケーよ! 再生!」

→ブウウウウン……

テラコツタ「…グオツ!」

アルカ「焼き尽くしてやるわ! …ヘルフレイム!」

…ゴオオオオオツ!

テラコツタ「グツ…グオオオオオオオ…！」フツ…

私が放った巨大な火球がテラコツタ軍団を焼き尽くす。

ルメ「…：…わお」

グレイ「いつのまにそんな大技の準備を…？」

アルカ「ふう、ちよつとだけ疲れたわね」

き…巨人!?

sideアルミ・マリオ

セイダン「テラコッタ軍団を…倒しただと!？」

Sアルミ「ええ…倒してやったわよ！」

アルカ「アンタだけじゃないけどね…」

セイダン「フン…なら、次はコイツらだ！出て来い！」パチン
ギギギ…

闘技場の天井は開き、そこから…

「ヴヴヴ…！」

ルイージ「あれは…！」

ルイス「巨人!？」

セイダン「この私が鍛え上げた4体の巨人が相手をしてやる！」

「逃げろー！」

「踏み潰されるー！」

アルカ「つ、キノピオ、クツパ、ハリー、ミール！住民たちを逃しなさい！」

4人「了解！」

アルカ「後のみんなは全員で巨人たちを倒すわよ！」

全員「おお！」

セイダン「さて、倒せるかな？…行けっ！」

巨人「ウオオオ！」

ドスドスドスッ！

Sアオイ「うわー、おおきいねー！」

Yケーティ「見てる場合じゃないわよ！ハアッ！」ズバツ！

Sアルミ「煉獄パンチ・青！」ズドツ！

巨人「ヴヴヴ…ガアア！」ビビビビ！

アルカ「ビーム!?…吸収！」ギユルルルル！

ルメ「あの巨人、ビームも出せるみたいですね、先輩」

アルカ「そのようね。…戦力を分散するわよ！」

ルイージ「了解！サンダー！」バチッ！

ルイス「サンダー！」ビリッ！

ノーア「ヘイルストーム！」パキィッ！

アド「ミサイル！」ドゴォ！

アドレーヌ「レーザー！」ズドツ！

巨人「グオオオオオオオ！」ピョン！

アルカ「…まずい！みんな離れて！」

Sアルミ「え!?!…うわっ！」

ドゴーン！

巨人はジャンプし、着地した反動で周りに衝撃波が飛ぶ。

巨人「グオオ…」フラフラ

ジーノ「怯んだぞ！今だ!?!…加速矢！」ピュン！

ルメ「孤月十字斬！」ズバツ、ズバツ！

グレイ「おらっ！」ドゴツ！

キノ太郎「えーと…シユルムパンチ！」ドゴオ！

巨人「グオオ…グオオオオオ！」グルグル…

Sアルミ「…?…」

巨人たちは何故か回り出した。

セイダン「そろそろ必殺技を披露しようか…」

アルカ「…まさか！」

ビュウウウウン…！

セイダン「気付いたか、でももう遅い！くらえ…ジャイアントハリケーン！」
巨人「グオオオオオオオオ…！」グルグル

ビュウウウウン…！

次の瞬間、暴風が私たちを襲う！

Sアオイ「う…うわあっ!?」フワッ

アオイは軽いからか、宙に浮く。

Yケーティ「おっと…きやあっ!?」フワッ

Sアルミ「アンタも!?…掴まりなさい！」

2人「うん！」ガシッ

私は浮きそうになるが、足を地面にめり込ませることでなんとか凌ぐ。

アルカ「……………ハアアアアッ！」ボオオオ…

Sアルミ「お母さん!？」

アルカ「うおおおおおおおおおおおおお！」グルグル…

お母さんは火を纏い、ジャンプして回転し始めた！

ルイージ「アルカ！何をする気だ!？」

アルカ「この暴風を利用するのよー！」グルグル…

ノリオ「正気ですか!？」

アルカ「正気よ！ハアアアアツ！」

暴風は次第にお母さんの周りを渦巻き始める。

アルカ「…よし！くらえ！」

そして、お母さんは暴風を我が物にした。

Sアルミ「…そんなアホな」

セイダンの本気

side アルミ・マリオ

アルカ「くらいなさい！」

セイダン「嘘…だろ!？」

全員「…そんなアホな（白目）」

セイダン「…巨人たちよ！そいつを撃ち落とせ！」

巨人「グオオオオオオオオ！」ブンツ

アルカ「おっと」さっ

巨人「グオ！グオ！」ブンブン

アルカ「…もう、邪魔…するなあ！」ドゴオ！

巨人「グオツ!？」

お母さんは空中で巨人の頭を思いつき蹴り、巨人を怯む。

アルカ「一気に決めるわ！嵐…爆熱…ハリケーン!!!」

ゴオオオオオオオオオツ!!!

S アルミ「あ、巻き込まれる！時間停止！（味方以外）」

←ブウウウウン…

ルイーダ「ナイスアルミ！みんな逃げよう！」

私達はお母さんの攻撃範囲から逃れる。

Sアルミ「再生！」

→ブウウウウン…

そして次の瞬間。

ドツゴオオオオオオオオオツ!!!

巨人「グオオオオオオオオオオ…」フツ…

とてつもない風とともに巨人たちは倒された。

アルカ「…ふう、疲れたわね♪」

全員「巻き込むなよ!!」

アルカ「あ、ゴメン」

全員「…はあ」

ゴメンで済ませるお母さんに呆れる私達であった。

セイダン「く…く…く…このままでは私達の“計画”が…！」

アルカ「残ってるのアンタだけよ。覚悟しなさい！」

覚悟とは、暗闇の荒野に、進むべき道を切り開くことだ！

……ジョジョ何部の名言だったっけ？（5部です）

セイダン「……………」ゴゴゴ……

アルカ「……………！みんな離れー」

セイダン「フハハ…フハハハハハハ…！」ギユオオオオオオオオ！

セイダンから力が溢れ出す。

セイダン「この馬鹿どもが！素直に死んでいたら楽だったものを！」

ノリオ「何を…する気ですか!？」

セイダン「巨人たちよ…私と融合しろ！」

Yケーティ「ゆ、融合!？」

巨人たちの死体はくつつき、光始める。

アルカ「…今のセイダンは隙だらけ、一斉攻撃よ！」

Sアルミ「煉獄パンチ・青！」ドゴオ！

Yケーティ「ブレイブカッター！」ズバツ！

Sアオイ「ソウルパンチ！」ドガッ！

ルイーダ「サンダー……」

ノリオ「…キャノン！」ドガーン！

ノア「ヘイルストーム！」パツキイン！

アド、アドレーヌ「ザ・ワールド・ドローペイン！」バシユツ！

セイダン「グッ…邪魔…するなあ！」

セイダンは怒り、突風を起こす。

全員「うわっ！」

セイダン「…よし、後少して融合するぞ…！」

アルカ「…ヘルフレイム！」ボオオオオ！

セイダン「…フンツ！」シユツ

アルカ「片手で…打ち消した!?!」

セイダン「フハハハハハ！融合！」

カッ！

セイダンは眩しい光に包まれる。そして…

セイダン「…さあ、皆殺しにしてくれる！」

巨人となって、襲いかかってきた。

やられる…とでも!?

sideアルミ・マリオ

セイダン「…さあ、皆殺しにしてくれる!」

チュドーン!

Sアルミ「うわっ!」

ノリオ「…小手調べといきますか」

ドガーン!

セイダン「…効かん!」

セイダンはノリオさんのバズーカをもらにくらったのに、無傷だった。

セイダン「今度はこつちの“小手調べ”と行こうか!」ギョオオオオオオオオオオ…

セイダンは手に力を込め、火球を作り出す。

セイダン「くらえ!」

ゴオオオオオオツ!

アルカ「……………」

火球はお母さんに迫る…って、

フツ…

セイダンは消え去った。

「おお、帰れるぞ…!」フツ…

キノコ王国の住民たちも転送されていった。ただ…

アルカ「…おかしいわね」

ルイージ「なんで私達は帰されないの?」

????? 「それは俺の仕業だ」

Yケーティ「…なんで…?!」ガクガク

Sアルミ「ケーティ!」

ケーティは近づいてきた男を見て震えだす。

????? 「ほう、久しぶりだな、ケーティ」

アルカ「!!…まさか…」

????? 「そう、この俺がケーティを拾った人物…」カツ!

男は光りだし…3つ頭の黒い骸骨になった。

ルメ「あれは…ウイザー!」

ネクロン「そして、真の首謀者、ネクロンだ!!」

ネクロン戦①

♪Hypixel skyblock | Necron Doom

sideアルミ・マリオ

アルカ「王ってまさか…」

ネクロン「俺のことだ。俺たちの目的のために…貴様らを殺す！行けっ！」

「カカカカカカカッ」

ネクロンは大量の（ぎつと500体）黒い骸骨を召喚した。

ルイス「多っ!？」

Sアルミ「…ハッ！」ドゴッ

「カカカ？」

Sアルミ「…効いてない!？」

Sアオイ「ソウルブラスト！」ドガーン！

「カカッ…」フッ…

アルカ「物理攻撃が効かないようね…」

ネクロン「その通り！さあ、どう対策する？」

クツパ「ファイアー！」ボオオオ！

ジーノ「僕、攻撃できない…」

リボン「私も…」

ハリー「俺もだ…」

3人「シクシク…」ズーン

アド「…3人とも！これを使って！」スツ

ジーノ「おお！光線銃！」

ハリー「これなら戦えるぜ！」

リボン「ありがとう、アド！」

アド「お礼は…後でねっ！」ドガーン

「カカツ…」フツ…

アドレーヌ「ザ・ワールド・ドローペイン！」バシユツ！

「カカツ…」フツ…

ネクロン「……………（こいつら、やるな…道理で部下たちが倒されたわけか…）」

キノピオ「オラオラオラ！」ピュンピュン！

キノ太郎「ハッ、セイッ！」ズバツ！

ノーア「ヘイルストーム！」パツキイン！

お母さん時を止め、再生したときは空中にいた。

……DIOのマネをしながら。

アルカ「骸骨の骨でできたロードローラーよおおお！」

ネクロン「ほう、面白い！ぜやっ！」ドゴツ

ネクロンは頭蓋骨の弾幕をロードローラーに当てる。

アルカ「うおおおおおおお！」

ネクロン「うおおおおおおお！」

ドガン！

全員（どこのバトル漫画!?!）

ネクロン「…フン、やるな…」

アルカ「アンタこそ…！…久々に本気で戦えそうね…！」

ネクロン「…名を聞こう」

アルカ「…私はアルカ・マリオ、キノコ王国最強の人間よ！」

ネクロン「…アルカ、か。覚えておこう…！」ギユオオオオオオオオオ！」

アルカ「…本気でないかせてもらおうわ！」ギユオオオオオオオオオ！」

両者からとてつもない量のエネルギーが溢れ出す。

……私、どうやら実況者になるようね。

ネクロン「……レーザー！」

Gアルカ「吸収！」ギユルルル！

ネクロン「……チツ」

Gアルカ「ヘルフレイム！」

ゴオオオオオツ！

ネクロン「……フンツ！」シュツ！

それをネクロンが簡単に相殺する。……引かなかったわね！

Gアルカ「隙あり！煉獄パンチ！」ドシユウウウ！

ネクロン「……ガハツ!!」

Gアルカ「かーらーのー？天！」ドゴツ！

私はネクロンをアツパーで上に飛ばす。

ネクロン「ぐうっ!？」

Gアルカ「……創……」ギユイイイイイン……!

次にエネルギーで大剣を創り出す。

ネクロン「まずい……ネクロシー」

Gアルカ「……滅ツ！」

ズバアアアアアツ!!

ネクロン「…ガフツ!!」

そして大剣でネクロンのガードもろとも一剣両断する。

→刀じゃないから

Sアルミ「おお…!」

Yケーティ「すごい…!」

Sアオイ「がんばれー!おかあさーん!」

その頃、娘3人を含む仲間たちはアルカを応援していた。

ネクロン「ハア、ハア、グツ…」

Gアルカ「その程度?」

ネクロン「いや…まだだ…!」ギョオオオオオオオオ…!

Gアルカ「へえ…」

ネクロン「この俺の最強の攻撃を…くらわせてやる!」

ネクロンは自身のエネルギーを集め、凝縮する。

Gアルカ「……………」

ネクロン「いくら貴様でもこれには敵うまい…!」

ドクン…ドクン…

生成された四角く黒い球は心臓のように脈打っている。

ネクロン「くらえ…！最終奥義…ウイザー・ロード・ファイナル！！」

ギョオオオオオオオオオ……！！

Gアルカ「私も必殺技で対抗するわ……」スツ…

私は両手をくの字に曲げる。

Gアルカ「封印…

……パンドラ!!」

私の封印術とネクロンの球がぶつかりあう。

ネクロン「うおおおおおおおおおおおお！」

Gアルミ「うおおおおおおおおおおおお！」

そして、勝ったのは…

ゲームクリア

sideアルミ・マリオ

ネクロン「が…はっ…」

Gアルカ「……………」

…勝ったのは、お母さんだった。

ネクロン「俺の…負け、か…」

Gアルカ「……………」

ネクロン「とどめを…刺せ！」

Gアルカ「……………断る！」

ネクロン「……………何故だ？」

Gアルカ「このデスゲームを始めた理由も言わずに死んでもいいと？」

ネクロン「……………分かった、説明する」

sideネクロン

二十年前の話だ。

俺の良きライバル、ダーククツパは倒され、犯罪ワールドは消滅した。

俺はその時かなり驚いた。

アイツがやられるだ?!、と。

その後俺は必死に犯人を探した。

そして長い時を経て、お前たちが犯人だと判明した。

今すぐ倒そうと思った。

だが、その時はちょうど十年前。黒い生命体たちのせいでマイン国は大きな被害を受けた。

……そいつらの元凶を倒したお前らには感謝している。復讐心はなくならなかったが。

そして今。

俺は準備をやつと終え、セイダンにデスゲームを始めさせた。

キノコ王国全体を巻き込んだ理由は2つ。

巻き込んだ方が手っ取り早いのと、お前ら以外に強い住民がいたらスカウトできるからだ。

…実際に何人かスカウトした。

しかし、俺は今ここで倒された。

俺の…負けだ。

sideアルカ・マリオ

ネクロン「これが俺の話だ……」

Gアルカ「…私の異名、知ってる？」

ネクロン「キノコ王国最強、か？」

Gアルカ「それは今の異名。昔の、いや、十年前までの。私の異名は……裏番。よ」

ネクロン「……!!見た目によらず恐ろしいヤツだとは聞いたことがあったが、まさかお前だったとは……」

Gアルカ「裏番としての判決を下すわ……」

私はしばらく考える……。

ネクロン「…………」

Gアルカ「……クズではないが有罪、よって懲役刑に処す!」

ネクロン「…………分かった」

←戻った

アルカ「逮捕するわ」ジャラ……

私は手錠をネクロンにつけた。

ネクロン「……いい戦いだった」

アルカ「………そうね」

ネクロン「…ケーティよ」

ケーティ「……なに」

ネクロン「……すまなかつた」

ケーティ「……」

私はネクロンを刑務所へと輸送した。

逃走中という名のデスゲームは、今幕を閉じた。

―その後―

side アルミ・マリオ

アルカ「かんぱーい！」

全員「乾杯!!!」

ワアアアアアア!

アルミ「いやー、終わったー！」

ケーティ「疲れたね〜！」

アオイ「いまは（ジューズを）いっぱいのもうよ、おねえちゃんたち！」

アルミ「さんせーい！」

ケーティ「アルカリせーい！」

アオイ「うるせーい！」

3人「あはははははっ！」

アルカ（良い姉妹ね。しばらく平和が続いてほしいわね…）

そして、平和は数年続くのであった。

ただ今命がけで逃走中 完

アオイ「クッキー…」

ケーティ「いやいやリアクションおかしいでしょ!？」

……………。

アルミ「ま、いいや」

アオイ「だね」

ケーティ「切り替え早っ!？」

ルメ「あ、あはは…」

アルカ「…で、ルメ、なにしにきたの？」

私達3人は部屋を出た。

sideアルカ・マリオ

ルメ「……………相談ですよ」

アルカ「…相談？」

ルメ「最近、どこからか視線を感じるんですよ」

アルカ「幽霊なの？」

ルメ「はい。しかもただの視線じゃなくて、殺気がこもった視線です」

アルカ「殺気!?!犯人は分かったの？」

ルメ「視線を感じた方向にグレイを待ち伏せさせたんですが…視線を感じても誰もい

遭遇

side アルカ・マリオ

次の日…

アルミ「ふああ…」

アルカ「アルミ、おはよ」

アルミ「あ、おはようお母さん」

アルカ「3人を起こしてくれる？」

アルミ「オーケー♪」スタスタ

アルカ「……………」

―数分後―

ルメ「うおーはよーございしゅ」

ケーティ「眠い…」

アオイ「…………Zzz」てくてく

アルミ「寝たまま歩いてる…」

アルカ「朝飯できたわよ」

アルミ「あ、ほらアオイ、起きて！」ユサツ

アオイ「…もう起きてるよ？」

アルミ「あ、ホントだ」

ケーティ「……………」

アルカ「……………」

そして私達は朝飯を食べ、アルミ達はそれぞれ登校した。

ルメ「……………」ズズッ

アルカ「……………」ズズッ

ルメ「…で、どうやって犯人探しをするんですか？」

アルカ「現場に行くわ…」

ルメ「…いやいやいや！私殺されるんですよ!？」↑すでに死んでる

アルカ「…グレイと」

ルメ「それを早く言っして下さい！ハア、ハア…」

アルカ「ツツコミご苦労さん」

ルメ「誰のせいですか、誰の…」

アルカ「まあとりあえず、グレイを出しなさい」

ルメ「ハア…召喚、グレイ！」

ギユイイイイン!

グレイ「呼ばれて出てきてこんにちは!ども、グレイです」
アルカ「……キャラ崩壊してない?」

グレイ「派手な登場がしたかっただけですよ、アルカさん」
ルメ「グレイ、話は聞いた?」

グレイ「聞いてたよ、主人」

ルメ「分かったわ、先輩と行ってきなさい」

グレイ「了解」

アルカ「さて、行くわよ!」

sideアオイ・マリオ

今日は早帰りだった。

つまり……もつと遊べる!

でも、お姉ちゃん達はいつもどおりだったから、私一人だ。
アオイ「何しよつかな〜♪」

と、考えていると、近くから変な気配がした。

アオイ「……なんだろ、この感じ?」

私は気配を感じる方向に進む。

♪ UNDER TALE—G ルートのモンスターキッドのテーマ

「……………」

近?の建物の裏に、女の人^{?????}がいた。

アオイ「あ、あの……」

「……だーれ?」

アオイ「……!?!」

女の人^{?????}はこつちに振り返る。

黒いパーカーを着ていて、黒髪ロング。見た目は……

アオイ「ルメさん……?」

「ル……メ……?」ゴゴゴ……!

アオイ「……ッ!」サッ!

ドゴオ!

ルメさんに似てる人は突然攻撃してきた!とつさに防御してなかったら食らってた

……

「あれ? 避^{なん}けられちやつた^{の?}……」

アオイ「……いきなり何するの!?!」

この人は敵。敬語で話す必要はない。

ア?????
「ねえ、さっきルメって言ったよね?…どこにいるの?」
アオイ「……!!!」

テテツ…ピユウン!

視界はタマシイとエネルギー以外白黒になった。

??
?????

sideアオイ・マリオ

♪ UNDER TALE | MEGALOVANIA

?????
「次は当てるよ?」 シャツ!

アオイ「……!!」 サツ

ルメさんに似てる人は黒い弾幕を飛ばしてきた!

「ほらほら、早く当た^死ちやいなよ^{しゃいなよ}!」

?????
アオイ「死んで…たまるかっての! ソウル…ブラスター!」

ドガアアアン!

アオイ「……え!」

?????
「あー、ちよつと痛いね…」

アオイ「ほぼダメージが無い!」

?????
ソウルブラスターをモロにくらったのに!?

?????
「殺り返しだよー!」 ギユンツ!

敵は大量の黒いナイフで私を囲む。

????? 「逝っけー！」 スッ

そしてナイフを飛ばしてきた。

アオイ「……………ハッ！」 キラン

「ッ!？」 ズシッ

????? 私は敵のタマシイを青くした。

アオイ「??」

シヤッ…

????? ナイフは上に方向を変える。

「な、なんで、ナイフが!？」

????? アオイ「……………行け」 スッ

ピユウウウン…!

????? ナイフは空の彼方へ飛んでいった。

「な、なら…!？」 ズシッ

????? アオイ「…させないよ」

ギユウウウン…

私はハイエナの頭蓋骨の形をしたブラスタ―で敵を困んだ。

アオイ「くらえ…ガスタ―ブラスタ―」

……ドガアアアアアアン!

アオイ「逃げられたか……」

攻撃が終わったところには、敵はそこにはいなかった。

アオイ「……疲れた」

しばらくここで休もう……

side アルカ・マリオ

現場についた私達。

アルカ「なんの気配も感じないわね……」

グレイ「もう離れたのでしょうか?」

アルカ「おそらくそうですね。近所の人たちに聞き込みをしましょう」

グレイ「了解」

↓数時間後↓

聞き込みをしたが……

アルカ「情報は?」

グレイ「……ありませんでした」

アルカ「犯人の手がかりはないのかしら……」

と、言ったその時。

ら、ルメさんに似てる人がいたの。そして、ルメさんだと思って話しかけたら襲ってきたの……」

……………さらっと犯人言っていない!?

アルカ「その話、詳しく」

アオイ「う、うん……」

誰なのか？

side アルカ・マリオ

―自宅―

私はアオイから事情聴取（？）をし、今考察に入っている。

アルカ「ルメに似てたけど黒いパーカーを着てる…」

ルメ「私のパチモンですかね？」

アルカ「それなら、”自分は二番煎じだから本体をぶつ殺してやる!!”という感じになるわよ」

ルメ「一応ありえますね…」

アルカ「ガスターブラスターを撃った後姿が消えてるというのも謎だし…」

ルメ「……あ」

アルカ「どうしたの？」

ルメ「先輩、”例の箱”はどこにありますか？」

アルカ「例の箱？ああ、オルゴール箱のことね。実家に置いてあるわよ」

ルメ「実家？」

アルカ「ええ、結構前に改築したやつ」

ルメ「…あ、あれですか」

アルカ「行きましょ」

ルメ「…グレイとですよね？」

アルカ「いや、アンタと」

ルメ「殺す気ですか!?!」

アルカ「んなワケアルカい！今思ったのよ、私とアンタだったら大体の敵は倒せるって。だからよ」

ルメ「ま、まあ確かにそうですけど…」

アルカ「さっさと行くわよ！」ガシツ

ルメ「え、あ、ちよつとー！」

私はルメの腕を掴み、引きずることにした。

アルカ「じゃあアオイ、留守番頼むわよ」

アオイ「はーい！」

ルメ「あーれーれーれーれー！」ズズズ：

ー実家ー

アルカ「さて、ついたわよ」

ルメ「……………」ピクピク

アルカ「ん？どうしたの？」

ルメ「誰のせいだと思ってるんですか!? ああ、背中痛い…」

アルカ「ま、いいや」「良くない!」…………とりあえずノックするわよ」

コンコン。

するとドアが開き、父さんが出てきた。

カステン「おお、アルカ。どうしたんじや？」

アルカ「オルゴール箱ってまだある？」

カステン「…あるぞ。入れ」

ルメ「失礼します…」

私達は家の中に入っていった。

―アルカの部屋―

カステン「ゆっくりしていけ」ガチャツ

アルカ「これね」

ルメ「先輩と私って、確かこの中にいたんですよね？」

アルカ「懐かしいわね…」

―回想―

アルカ「ふう、疲れ…ん？開いてる…」
ガタツ…

??「うわっ!？」ポワン!

アルカ「え、幽霊!？」

??「……………え、まさか…」

アルカ「…………？」

??「世界を救った幽霊で私の従姉妹のアルカさんですか!？」

アルカ「そうだけど…あ、アンタ、もしかしてルメ!？」

ルメ「そうです！いやー、私も死んじやいました、テヘツ♪」

アルカ「“テヘツ♪”じゃないわよ!」

ルメ「あ、先輩って呼んでいいですか?」

アルカ「なんで?」

ルメ「幽霊の先輩として尊敬するからです!」

アルカ「え、ええ…」

ー回想終了ー

アルカ「それでその後アンタの未練を解決したのよね…」

ルメ「ま、成仏も復活もしないことにしたんですけどね」

アルカ「……………開けるわよ」
ガタツ…

ルメ「これは…」

オルゴール箱の中には、何故か黒いオーラが残っていた。

二度目の遭遇

side ケーティ・マリオ

ー 大体16時ー

ケーティ「あゝあゝ…疲れた…」

今日の授業しんどかった…

帰ったらアオイに癒やされよう…

「……………」ゴゴゴ…

ケーティ「……………」

あの人、なんか黒いオーラ纏ってるわね…

ケーティ「……………」まあいいや」

気にしないで置k

ズバツ!

ケーティ「……………」へえ」

襲ってくるのね…

?????
「あ、^殺なんで話^ししか^てか^あけて^げこないの?^か」

テテツ…ピュウン!

視界はほとんど白黒になった。

ケーティ「で、なんで襲ってくるのかしら?」

「…なんとなく…かな♪」ギユンツ…

…昔の私に似てるわね。

敵は黒いナイフを出してきた。

ケーティ「…鎌!」ギユンツ!

私はエネルギーで鎌を作る。

「逝けー!」ピュウウン!

「ガキーン!」ガキーン!

そして鎌でナイフを弾く。

「あーあ、避けられちゃったか…」

ケーティ「…本気で行くわ!」

私はユウキ覚醒をする。

「あはははは! 面白いね、君! 殺しがいがありそうだね かがつてきてよ!」

ケーティ「…動け!」カツ!

私は敵のタマシイをオレンジ色に変えた。

「…!?なにこれ!」ヒュウウウン!
敵は止まることができず混乱する。

Y ケーテイ「ハッ!」ズバツ!

「…ぐっ!」

…まだまだ!

Y ケーテイ「ブレイブカッター!」ズシヤツ!

鎌で敵に連撃を叩き込む。

「ガハッ…調子に…乗るな…!」スツ…

敵はナイフで私を囲む。

Y ケーテイ「……………」キンツ…

「^{ふっ}串刺し^殺にしてやる!」ゴゴゴ

Y ケーテイ「へえ…果たしてできるかしら?」スツ…

「くらえ!」シヤツ!

Y ケーテイ「……………」

?????:.....吸収!」ギユルルル!

「な:!!」

私はナイフを全て吸収した。

Yケーティ「トドメよ:ユウキ波動!」ギユウウウン:

「ヒツ:.....」

ドガアアアアアアアアアア!

ケーティ「:.....逃げたみたいね」

敵はもういなかった。

// 旧式 // ? // 新式 // ? なにそれ?

side アルカ・マリオ

アルカ「……………」

ルメ「なんでしょうかね、このオーラ」

アルカ「…この箱、一旦持ち帰りましょう」

ルメ「え、危険そうですね!?!」

アルカ「大丈夫よ…多分」

ルメ「その“多分”が心配です…」

アルカ「じゃあ、家に持って帰らないならどこに置くのよ?」

ルメ「あ、足し蟹」↑わざと

アルカ「…ね?」

ルメ「何が“ね”?」ですか。考えればいい話ですよ!」

アルカ「じゃあ、考えなさい」

ルメ「わかりました、すぐに思いつくでしょう……………」

―数分後―

ルメ「うーん……」

アルカ「…まだ?」

ルメ「まだです……!」

アルカ「あ”あ”もういい!持って帰るわよ!」

ルメ「急急!?私の考える時間をなんのために……」 or z

私は落ち込んでるルメを引きずりながらもう片腕でオルゴール箱を持って家に帰るのであった。

―家〜イ!―

ルメ「……背中痛い……」

アオイ「大丈夫ですか、ルメさん?」

ルメ「ええ、大丈夫よ……」

アルカ「いやー、ゴメンゴメン♪」

ルメ“ゴメン”で済むなら警察は存在しませんよ「私にケンカ売ってる?それ」…

あ、先輩特別捜査官でしたね…すみません」

アルカ「…それよりも箱ね」

ルメ「…さらつと話題そらすのやめてくれませんか?」

sideアルミ・マリオ

私はアドレーヌと高校から帰宅していた。

アルミ「ねえアドレーヌ」

アドレーヌ「なに？」

アルミ「今日の持久走、すごかったわね」

アドレーヌ「そうだね……」

アルミ「いやー、流石に10分で100km走るのは思わなかったわね……アンタが」

アドレーヌ「あ、あれは偶々だよ」

アルミ「アンタの体力は低いのに？」

アドレーヌ「あ、あはは……」

アルミ「怪しいわね……」じー

アドレーヌ「………特訓で体力伸ばしてた」

アルミ「なるほどね……ん？」

近くから変な気配がした。

アドレーヌ「この気配は……？」

アルミ「行ってみましょう」

アドレーヌ「う、うん……」

私達は気配がするところに近づく。

♪ UNDER TALE | But nobody came

?????
「……………誰?」クルッ

アルミ「…ルメさん?」

アドレーヌ「でも、服が違う?」

?????
「……………」

アルミ「…ルメさん、ここでなにをして…ッ!」

?????
「またルメを知ってる人…ルメは何処にいるの?」ゴゴゴ…!

アドレーヌ「…アルミ、この人はルメさんじゃない!」

アルミ「そのようね…」

?????
「ルメの仲間は誰だろうとぶつ殺す!」

アルミ「……………殺る気のようなね…なら…」

“ 新式 ” 戦!」

……………キーン!

私とアドレーヌは左側、ルメさんに似てる敵は右側に動く。

前まで“旧式”を使ってたからなれないけど…

アルミ「バトル、スタートよ!」

当たれといつて当たりに行くヤツはほぼいない

sideアルミ・マリオ

アドレーヌ「……………」

「……………」ギユンツ!

??????
敵はナイフを大量に出してくる。

アルミ「……………へえ」

??????
「逝っけー!」シヤツ!

そしてナイフを飛ばしてきた。

アドレーヌ「うわっ!?……………盾!」ガキンツ!

アルミ「…吸収!」ギユルルル!

「えー、当たってよ!」

アルミ「“当たれ”といつて当たりに行く人は多分いないわよ?」

「ムーツ、どいつもこいつもうざい!死んじやえ!」ヴォン…

アドレーヌ「あれは…」

アルミ「ソウルブラスター!?黒いわね…」

「……………」ニヤツ

…へえ。

「隙あり！」シユツ！

S????? アルミ「よっ」サツ

油断してるとでも？

S????? 「くっ……………」

S????? アルミ「…アドレーヌ、縄描いて」

アドレーヌ「う、うん…はい」カキカキ

S アルミ「ありがとう。さて、と…」シユルル…

「え」

S アルミ「よし」

????? 「ぬぬぬ…！」ギユウウウ！

縄で敵を縛った。

?????S アルミ「質問を変えるわ。…なんでルメさんを殺すとか言ってるの？」

????? 「……………」

アドレーヌ「無言だね…」

S アルミ「一旦お母さんの所に連れて帰りましょう」

正体

side アルミ・マリオ

敵を家に運んだ後、アドレーヌは帰って行った。

アオイ「……………」

ケーティ「……………」

「……………」汗

アルミ「なに、この沈黙」

アオイ「だって……」

ケーティ「ねえ？」

アルミ「まさか……アンタ達もコイツに襲われたの？」

2人「うん」

アルミ「……へえ」ギロツ

私の可愛い妹達を……？

「え、えつと……」

アルミ「覚悟しときなさい♪」

ガ?????
「オワタ…」

アルカ「あら、おかえりアルミ」

ルメ「……………」

「……！」

ルメさんと敵（縛ってる）の目があった。

「う、うう…」

ルメ「ハア…」スタスタ

アルミ「……………」

ルメさんは敵の前に立ち…

ルメ「…殺気の正体はアンタだったのね」ナデナデ

「…うん」

ルメ「探してたのよ、もう…」

「…ごめんなさい」

アルカ「アンタは…ダークルメ？」

ダークルメ「……………」

アルミ「ダークルメって？」

ルメ「この子は私の裏人格。簡単に言えば…狂気ね」

ケーティ「だから昔の私みたいだったんですね…」

ルメ「で、いつ私から離れてたの？」

ダークルメ「…先週」

ルメ「なんで？」

ダークルメ「…強くなりたかった」

ルメ「…それでどうしたら私を殺したいなんてことになるのかしら？」

ダークルメ「…ごめんなさい」しゅん…

ルメ「はあ…今回は幸いだけれも怪我してないし、許すわよ」シユルル…

ルメさんはダークルメの縄を解いた。

ダークルメ「……………」ギユツ

ルメ「あら、狂気を発動してない時は甘えてくるのね…」ナデナデ

ダークルメ「……………」♪」

アオイ「……………」お姉ちゃん」

アルミ「ん？あ、いいわよ、おいで」

アオイ「わーい！」ギユツ

アルミ「ふふっ、可愛いわね♪」ナデナデ

ケーティ「……………」じー

アルミ「あら、ケーティもおいで」

ケーティ「……………」ギユツ

アルカ「……………」(平和に解決したわね♪)」

―数分後―

ルメ「…そろそろ戻りなさい」

ダークルメ「うん…」シユウウ…

ダークルメはルメさんの中に入っていった。

ルメ「先輩、アルミ達、ありがとう」

アルカ「礼はいらないわよ」

3人「どういたしまして」

ルメ「じゃ、さよなら」ガチャツ

そしてルメさんは帰って行った。

パンドラの箱。 完

―――
最終章 5747081…?

アルミは22歳、特別捜査官。

能力を駆使して犯罪者を逮捕する凄腕警官として生活していたある日：
世界は再びバグりだす。

強くなったアイツの再来に、アルミ達は立ち向かうことができるのか!?

最終章 5747081…?

凄腕特別捜査官

side アルミ・マリオ

アルミ「……………」

私は今、仕事を待っている。

リリリリリリン！

ガチャッ

アルミ「もしもし、アルミ・マリオです」

ハリー『おう、俺だ』

アルミ「ご要件を」

ハリー『さつきハリオスデパートに泥棒が入ったとのことだ』

アルミ「…了解です、今すぐ出勤します」

ハリー『ああ、頼んだ』ガチャッ

私は赤い帽子をかぶり、玄関ドアを開ける。

アルミ「お母さん、行ってくるわ」タタッ

アルカ「ええ、行つてらっしゃい」

私は家から出て…

アルミ「…：時間停止！」

←ブウウウウン…

…時を止め…

アルミ「ハリオスデパートに向かつてダアアアアツシユ！」ダダダダダ

―数分後（感覚的に）―

アルミ「ついたわ」

まずは周りを見る。

アルミ「入り口は…問題なし。1階はいつものような光景ね」

私は次に2階へ行く。

アルミ「店員が走り回つてゐるわね。天井は…あ」

天井の換気扇が開いていた。

アルミ「そこにいるわね」

私は換気扇によじ登る。ルメさんは飛べるから便利なのよね…。

中には案の定いかにも盗んでそうな格好をした人が隠れていた。

アルミ「…さて、お決まりのセリフを…」

私は息を吸う。

アルミ「…犯罪者、発見！逮捕します！」サツ

私は持っていた縄で泥棒を縛り、天井から下ろす。

アルミ「他もチエツクつと…」

―数分後―

アルミ「泥棒は1人だけのようね。…再生！」

→ブウウウン…

泥棒「…あれ、俺は確か…あ」

店員「ありがとうございます！」

アルミ「礼はいりませんよ、仕事ですし。…これが盗まれた商品です」スツ

店員「あ、はい」

アルミ「…さて、署に連行するわよ！」

泥棒「ちつきしよー！ー！」

私は発狂している泥棒を無視して署に連行するのであった。

―数十分後―

ハリー「アルミ、ご苦労だった」

アルミ「ま、それほど疲れてないんですけどね…」

ハリー「それは言わない約束だぞ、メタい」
アルミ「あ、すみません」

ハリー「…今日の仕事はここまでだ、解散」

アルミ「失礼しました」ガチャツ

私は署を去った。

アルミ「ふう、クッキー買って帰ろつと」

と、独り言を行ってたその時。

ビリッ

アルミ「……？」

今、一瞬視界が…

ビリッ

アルミ「…バグった？」

ビリビリッ

アルミ「私だけ…なにこれ!？」

私は謎のエネルギーと共に

シュッ…

この世界から転送された。

ー???

シユツ…

アルミ「ここは…?」

アルカ「アルミ!」

アルミ「お母さん!」

ルイージ「アルミか…」

デイジー「ここは…」

ピーチ「…どこなの?」

ノリオ「このメンツ…」

キノピオ「どこかで見覚えが…」

過去に似た空間

sideアルミ・マリオ

私達は暗い空間に転送された。

アルカ「みんな、とりあえず落ち着いて」

全員「……………」

アルカ「ここはどうやら誰かが作った空間みたいよ。敵が現れる確率が高いわ」

ピーチ「敵……」

デイジー「なら、私達は戦えないわね」

ノリオ「それと、何故私達だけここにいるのでしょうか？」

アルカ「それが問題なのよね……」

ネチヨツ……

アルミ「……なんか来る！」

「グオオオオオオ！」

ルイージ「あれは……!?!」

キノピオ「黒い生命体!?! 本体は殺したはず……!」

アルカ「考えてるヒマはないわね!…新式戦!」
…キーン!

アルカ 黒い生命体

アルミ vs 黒い生命体

ノリオ 黒い生命体

※チームは3人までになっています。

アルカ「1体ずつ倒すわよ!」

ノリオ「了解です!」

アルミ「…うん!」

黒い生命体「グオオオオ!」

アルカ「20年前の敵なんて楽勝よ!…煉獄パンチ!」ドゴオオ!

ノリオ「ドカーン」ドカーン!

アルミ「…炎天掌!」ズガアン!

黒い生命体「グオオオ…」フツ…

黒い生命体に攻撃を当てると、すぐに消え去った。

アルカ「あら、意外と弱いわね…」

ノリオ「3体しか出てきませんでしたね」

アルミ「…嫌な予感がする」

ルイーダ「進もう」

スタスタ…

黒い生命体「グオオオオ！」

…キーン！

キノピオ「シユルムパンチ！」ドゴオ！

ルイーダ「サンダーハンド！」ビリッ！

黒い生命体「グオオ…」フツ…

私達は何度か黒い生命体に襲われたが、すぐに片付けた。

―数分後―

しばらく進むと、見覚えのある広場に出た。

アルカ「ここは、あの世の広場…？」

ズイツ…

ノリオ「…何か近づいてきます！」

幽霊「ううう…」

ルイーダ「えー幽霊!? キャー怖いー（棒）」

デイズ「……………」しらー

ルイージ「ゴメンって！…サンダールーム！」バチバチッ！
ルイージさんは電気の檻で幽霊を閉じ込める。

幽霊「うごうご…」フツ…

幽霊は消え去った。

アルカ「このメンツであの世の広場、そして幽霊…まさか!?）…あそこの建物に敵がいるわ」

キノピオ「なんで分かったんだ？」

アルカ「…それは後で説明するわ。行きましょ！」ダッ

アルミ「え、お母さん!?待ってー！」ダッ

私達はお母さんを追いかけて建物の中に入る。

♪ UNDER TALE | But nobody came

建物の中には所々お母さんが殴ったような跡が残っていたが、だれもいなかった。

…正確には全員お母さんが倒したのだろう。

ノリオ「アルカさんは相変わらずですね」

ルイージ「進もう」

「最深層」

「??????」
「ハア、ハア、助けてくれ…」

アルカ「…やっぱり」

「俺は、もう…人を、殺したく、ないんだ…！」

アルカ「キングテレサ…アンタ…」

キングテレサ「…！アルカ、か…？」

アルカ「ええ、そうよ。随分と苦しそうにしてるわね」

キングテレサ「助けて…くれ…グオオオオ…」

タタタッ

アルミ「お母さん！」

ルイーダ「あれはキングテレサ!？」

アルカ「いや、操られてるわ。…倒して救うわよ！新式戦！」

…キーン！

V S キングテレサ

sideアルミ・マリオ

アルカ

ルイージ vs キングテレサ

アルミ

キングテレサ「グオオオオ……」

アルカ「相手に物理攻撃は効かないわ、注意しなさい！」

ルイージ「もちろんだ！サンダールーム！」バチバチ！

キングテレサ「グオツ!？」

アルカ「ハアアアアアッ！」ボオオオオ！

キングテレサ「……………」ニヤリ

アルカ「……………」ニヤリ

キングテレサは口角を上げるが、お母さんも口角を上げている。なんでだろ？

キングテレサ「…巻き戻し！」ピカア！

アルミ「え、えええー!？」スタスタ

ルイーダ「巻き戻されるー！」スタスタ

アルカ「……時間停止！」

←ブウウウン…

お母さんは時を止める。すると…

アルミ「…あれ？」

ルイーダ「効果が、ない？」

アルカ「上手く行ったわね」

ルイーダ「…なるほど、時を止めると相手の能力も止まってるってことか！」

アルカ「あと、キングテレサは見える相手を巻き戻すことができるから、後ろに回り

込めば巻き戻されないはずよ」

私はキングテレサの後ろに回り込む。

アルミ「……こう？」

アルカ「そうよ。後は炎天掌でも打ち込めば終わり…のハズ」

ルイーダ「頑張つて、アルミ」

アルミ「あー、はい。…再生！」

→ブウウウン…

キングテレサ「……グオツ？」

アルミ「……………後ろよ！」ボオオオ

キングテレサ「……………グオ……………」

アルミ「もう遅い……………炎天掌！」ズガアアン！

キングテレサ「グッ、グオオツ……………」ヨロツ

アルカ「トドメよ！煉獄パンチ！」ドツゴオン！

キングテレサ「グオオ……………」フツ……………」

私達の連携攻撃を受けたキングテレサはフツと消え去った。

アルカ「やったわね……………」

ノリオ「……………アルカさん、何故この建物に敵がいると分かったんですか？」

アルカ「このメンツにこの場所……………30年くらい前にマリオ達が1回死んだ時と同じな

のよ」

ルイーダ「……………言われてみれば確かに……………」

キノピオ「だから俺ら以外いなかったのか……………」

ビリビリ……………」

全員「!?」

アルミ「これは……………また!?」

私達全員バグりだした。

そして…

シュツ…

再び転送された。

「?????」
「ククク…ツイニフクシウノトキガキタ…!」
「セイセイアガクガイイ…!」

シュツ

アルミ「今度は…」

アルカ「…どこ？」

キノピオ「ピーチが見当たらないな」

ルイーザ「デイジーもだ」

ノリオ「結構な人数ですね」

アド「ここどこ…?」

リボン「私は確か漫画描いてて…」

ハリー「さつきまで署にいたんだが…」

カービー「リンゴ食べてた…」

クツパ「誰なのだ！ここに送り込んだヤツは！」
さつきより人が多くなっていた。

ポリスメン!

side アルミ・マリオ

アド「アルカ、ここはどこなの？」

アルカ「ここはね……」

「ただいま説明中」

アルカ「……ということなの」

アド「なるほど……」

ハリー「じゃあこのメンツは……」

リボン「警察が逆襲した時の……」

ノリオ「そういうことになりますね」

アド「何故かロゼッタさんじゃなくて私がここに……」

クツパ「じゃあ、この敵は「犯罪者、発見!」……いきなりか」

ロボット「逮捕だー!」 ウィンウィン

アルカ「はあ……新式戦!」

……キーン!

リボン ロボット警察

アド v s ロボット警察

ハリー ロボット警察

リボン「ぐるぐるー！」シユルル

ロボット「動けないー」

ハリー「…フンッ！」バンッ！

リボン先生が敵の動きを止め、ハリー総監が頭を撃ち抜く。

ロボット「やーらーれーたー」プシユウ…

ロボット「よくも仲間を！ビーム！」ビビビ！

アド「…ガード！」キイン！

アドさんがロボットのビームを止めた。

アド「かーらーのー！ミサイル！」ドガーン！

ロボット「ぐわー！」シユウウ…

ロボット「負ーけたー！」シユゴオ…

リボン「アドさん、相変わらず強いね」

アド「えへへ〜」

ハリー「俺の出番が、ない……」

アルカ「いや、あるでしょ」

アルミ「………あ」

ロボット「犯罪者、発見！」ビビビ!

アルカ「……またザコ敵討伐作業スタートね」↑メタい!

しばらく襲ってきたロボット警察たちを倒しまくるのであった。

―数分後―

ルイージ「ふう……」

ノリオ「やつと終わりましたね」

アルカ「進みましょう」

スタスタ……

キノピオ「警察が暴走した時がここだったら……」

ハリー「ボスは間違いなくクリキングだろうな……」

アルカ「最初に転送された時から気になってたけど、ここに来る元凶は雰囲気やエネルギーからして”アイツ”だと思えない……でもそうだとしたら………嫌な予感しかしないわね」

ーさらに数分後ー

敵、多かった：

アルミ「警察本部…」

今の名前は“キノコ王国中央警察署”だけどね。

アルカ「…：時間停止！」

←ブウウウウン…

お母さんは時を止めた。恐らく安全に総監室に行きたいのだろう。

アルカ「アド、描いてほしいものがあるの」

アド「何々？…：オーケー！」カキカキ

アドさんが描いたものは…

アド「はい」

アルカ「ありがと」ブンブン

…ギャグ漫画にありそうな10トンハンマーだった。

ズシッ

アルカ「流石に重いわね、これ」

アルミ「本物なの、それ？」

アルカ「…：持ってみなさい」スッ

アルミ「うん…うわっ!?!」ズシッ

これ、ホントに、重い…

てか、お母さんはこれでなにするんだろ？

ぶっ潰す！（文字通り）

sideアルミ・マリオ

アルミ「で、お母さんはそのハンマーで何する気？」

アルカ「…当ててみて」

ハンマーですることと言えば…

アルミ「…ドアをこじ開ける？」

アルカ「それならハンマーはいらないわよ」

アルミ「あ、そうだった。………あ」

ありえるわね…

アルカ「どう、分かった？」

アルミ「…建物ごとぶっ潰す？」

アルカ「正解♪」

全員「………」サーツ

私達はお母さんから少しずつ引いていく。

アルカ「あ、あの…なんで引いてるの？」

キノピオ「その、な……」

ルイーダ「相変わらぬ……」

ノリオ「規格外さですわね……」

アド「思ってるだけだよ……？」

クツパ「勘違いしないでほしいのだ……」

ハリー「だから、建物ごと潰す場合……」

リボン「こんなふうに少しづつ……」

カービィ「離れていったほうがいいと思ってる……」

アルミ「頑張ってるわ、お母さん！」

タタター、シュツ！

（逃げて近くの壁の裏に隠れる音）

アルカ「は、はあ……とりあえず潰していきますかね……？」

お母さんは力を溜める。そして……

アルカ「……フツ！」

ピョーーン！

建物を越える高さまで飛び上がり……

アルカ「……バーニング……ハンマアアアアアア！」

ドゴオオオオオオオオオ!

火を纏わせた10トンハンマーを警察本部にぶつける。

そして数秒後…

ピキピキ…

建物は次第に割れ始め…

ドンガラガツシャーン!

バラバラに崩壊した。

男「……………(すげえ…)」

女「……………(すごい…)」

アルカ「ふう…さて、と…」ゴソゴソ…

お母さんは瓦礫の中をゴソゴソ探す。

アルカ「…あ、いた!よっ…と」ズポツ

「チーン

ルイージ「あいつは…!」

キノピオ「クリキング!」

アルカ「そ。こいつを…殴る!」ドゴツ!

クリキング「グオオ…」フツ…

クリキングはお母さんに殴られ消え去った…

ノリオ「ちゃんと攻撃しないと消えないんですね…」

アルカ「…そろそろ来るわよ」

アド「なにが？」

アルカ「…転送」

クツパ「また来るのか!？」

アルカ「ほぼ絶対に…あ、来た」

ビリビリ…

アルミ「あーれー(棒)」

シュツ…

………。

ホウ、サスガニカンタンダツタカ。マアイイ。

ジワジワトタイリヨクヲケズツテイケバイイハナシダ…。

「?????」
「コノウラミ、ハラシテヤルゾ…!」

アルミ「今度は…？」

アルカ「このメンツね…」

ルイージ「嫌な予感…」

アド「このチームって…」

カービィ「あ、アレだね…」

今度は5人だけだった。

T. S. D. G

sideアルミ・マリオ

今度転送された場所は私、お母さん、ルイーダさん、カービーさん、アドさんの5人しかいなかった。

アルカ「……ここは、カメーン国ね」

アルミ「ここが？」

ルイーダ「このメンツからしてそれしかありえないね……」

アド「私達が共闘した場所だものね……」

カービー「で、敵は？」

全員「……いない」

アルカ「いないわね……」

アルミ「隠れてるのかな？」

ルイーダ「いや、手当り次第で襲いかかってくるはず……」

アド「つまり、近くにはいないってことね」

カービー「…………」

アルカ「…カービィ？」

カービィ「…何か降ってくる！」

アルミ「あ」

ヒユウウ「…ドゴーン！」

????「よう、久しぶりだな…」

アルミ「巨大な…ネズミ？」

誰コイツ？

ルイージ「…？あー…」

アド「なんか見覚えが…」

4人「誰だっけ？」

チユルゲ「ドン・チユルゲだ！」

4人「あ、そうだった」

チユルゲ「今度こそはここを通さない！かかってきな！」ポイツ

チユルゲは爆弾を投げてきた。

…：ボムをコピーしたカービィさんのマネかしら？」

チユルゲ「違う！丸っこいヤツが私をマネしたのだ！」ポイポイ

アルカ「あ“あ”うるさいわね…アド、バット描いて」

アド「え？うん…はい」カキカキ、スツ

アルカ「ありがと」

チュルゲ「そのバットで私を叩き潰すのか？」

アルカ「いや、少し違うわね…」ブンツ

お母さんはバットで打つ体制に入る。

チュルゲ「なにがしたいのかは知らんが、させんぞ！くらえ！」ポイツ！

それを見たチュルゲが爆弾を投げる。

アルカ「来たわね…！………オラア！」

カイイイイイン！

チュルゲ「ぐほお!？」ドゴオ！

お母さんはバットで爆弾を跳ね返し、跳ね返された爆弾はチュルゲに直撃した！そし

て爆弾は爆発し…

チュルゲ「おーぼーえーてーろおー！」ピユウウウ…

キラーン☆

チュルゲは空の彼方へ飛んでいった。

アルカ「…ホームランね♪」

アド「おお…！」パチパチ

ルイージ「これで1人目を倒したね」

カービィ「あっさりすぎない？」

アルカ「まあいいじゃない、たまには」

アルミ「たまに”の頻度じゃない気が……」

ドスンドスン。

ルイージ「この足音は……」

アド「間違いなく……」

???「グオオオオオオオオオオオオオオ！」

燃えている巨大なペンギン(?)が近づいてきた。

アルカ「デデデじゃない。……操られてるわね」

アルミ「あ、大王様だったの？ 気付かなかった」

ルイージ「気付かないの!?!」

デデデ「モヤシてやるー!」

カービィ「文字が違わない!?!」

デデデ「グオオオオオ！」

昔の敵は今のモブ

side アルミ・マリオ

デデデ 「グオオオオオ！」

アルカ 「今のデデデはヒーローというやつに操られてるわ」

アルミ 「マジか…」

カービィ 「デデデのヤツ、洗脳されやすいから正直困ってるんだよね…」

アド 「確かにそうだよね…」

ルイーザ 「…来るぞ！」

デデデ 「グオツ！」 ブンツ！

大王様はハンマーをぶん回してくる。

アルカ 「…フンツ！」 ガシツ

それをお母さんが片手で止める。

デデデ 「グオツ!？」

アルカ 「煉獄パンチ！」 ドゴオ！

そしてもう片方の手でパンチを叩き込んだ。しかし…

デデデ「グッ…グオオオ！」ボオオオオ！

アルミ「燃えて回復した!？」

アルカ「あ…忘れてたわね」

アド「カービィ、コレを吸い込んで！」ポイツ

カービィ「オーケー！スウウウウツ…ウオーター！」ピロリン☆

カービィさんはアドさんが描いた水バケツをコピーした。

デデデ「グオオオオオ！」ボオオオオ…！！

それに反応した大王様が火を出してきた。

ルイーダ「サンダー！」ビリビリ！

それをルイーダさんがサンダーで相殺した。

デデデ「グッ…」

カービィ「今だ！くらえー！」

ブシャー！

カービィさんが隙について大王様に水をかけまくる。すると…

デデデ「グオオオ…」

ポワン！

ヒーロー「くっそー！濡れちまったじゃないか！」

大王様の中からヒーボーボーが出てきた。

アルカ「出たわね！…オラア！」ドゴオ！

ヒーボーボー「グフウツ！グオオ…」フツ…

お母さんが殴ると、ヒーボーボーは消え去った。

カービィ「ふう、強かったね」

デデデ「うーん…あれ？ここはd」フツ…

アド「消えた…？」

アルカ「役目を終えたからかしら？」

アルミ「どういうこと、お母さん？」

アルカ「多分ヒーボーボーとデデデはセットだったのよ。それでヒーボーボーは消えたからデデデも消えたのよ、多分」

ルイージ「なるほどね…」

カービィ「で、次の敵は…あ」

アド「…変な口調で喋るイカ！」

アルミ「え、でも10年前にノアが倒しましたよね？」

ルイージ「でももう10年経ってる。腕も戻ってるだろう」

アルカ「それもそうね。とりあえず進みましょう」

スタスタ…

一方、その頃…

シュツ

ピーチ「あら？ここは…城に戻ったようね」

「女王……！大変です！」

ピーチ「え、どうしたの!?!」

「黒い生命体が城を襲撃しています！」

ピーチ「え!?!今すぐ応援を！」

「はっ！」

ピーチ「早くロゼッタさんに「その必要はないですわ」…ロゼッタさん!?!」

ロゼッタ「今ついた所ですの。城を守りましょう！」

ピーチ「…うん！」

3度目のイカ

sideアルミ・マリオ

しばらく進むと、道はどんどんイカスミまみれになっていった。

アルカ「近くにいるわね」

カービィ「また吹き飛ばされたりしないよね？」

アド「そこは大丈夫だよ…多分」

ルイーザ「…あ、いた！」

イカ「ん?…お前らは！」

イカは私達（主にお母さん）を見て怒りをあらわにする。

アルカ「久しぶりね」

イカ「この野郎…またわたの縄張りを奪いに来たんちゃうか!?!」

アルカ「…まあ、じゃないと進めないし」

イカ「ぐぬぬ…そうはさせんでー！」

ブンッ!

アルカ「おっと」サツ

ドゴオン!

アルカ「一本ずつ腕をもいでいくわよ!」

アド「了解!ミサイル!」

ドゴドゴツ!

イカ「痛えー!」

アルミ「炎天掌!」ズガアアン!

イカ「熱いー!このおー!」ブンツ!

アルミ「時間停止!」

←ブウウウウン::

冷静に腕をよけて、と。

アルミ「再生!」

→ブウウウウン::

イカ「とりやー!::あれ?」キョロキョロ

アルミ「隙あり!炎天::」

イカ「イカスミー!」ブシヤー!

アルミ「うわっ!?!」

私に黒い墨が直撃する。

アルミ「……………」

カービィ「ブツ、アルミが真っ黒になつてる〜ww」

イカ「そうやそうや〜ww」

カービィさん、アンタ味方ですよね？

イカ「うえーい、この真っ黒くろすけww」ゲラゲラ

アルミ「……………あ？」ブチッ

アド「うわ、アルミが…」

…………丸焼きにしてやるわ。

アルミ「新式戦！」

…キーン！

アルミ vs イカ

アルミ「このお…………クソイカアー！」ドゴッ！

イカ「ぐふっ!？」

アルミ「私はまっくろくろすけじゃぬわーい！」

イカ「そこっ!？」

アルミ「そして…」ガシッ

私はイカの腕を掴む。

アルミ「…私のお気に入りのパーカーを汚した罪は重いわよ？」

イカ「は、離せ…」

アルミ「天…」ドガッ！

イカ「…ふぐっ!?（イカです）」

まずイカを蹴り上げ、飛び上がる。

アルミ「…創…」シャキン…

次に火で大剣を作る。

イカ「や、やめ…」

アルミ「…滅！」ズバツ！

最後に大剣で斬りつける。

イカ「が、はっ…」

アルカ「それじゃ…」スッ

お母さんはアドさんが描いたバットを振りかぶり…

カキーン！

イカ「あーーーーーれーーーー！」ピユウウン！

アルミ「ホームラン！」

アルカ「……………アルミ、アンタそろそろ戻れば？」

アルミ「あ、バレてた？」

火でイカスミを蒸発させれば済んだ話なのである。

ま、パーカーを汚されたから怒ったのも事実だし、別にいいよね…？

ラジコン野郎

sideアルミ・マリオ

お母さんがイカをかつ飛ばした後、私達はしばらく進んだ。
黒い生命体がうじゃうじゃいた。

アルカ「ふう…流石にこの数は疲れるわね」

アルミ「ハア、ハア…」

アド「?あつちに誰がいる!」

ルイーダ「ん?…アイツは…」

「カニカニ!」

アルミ「…カニ?」

チョッキー「久しぶりカニ!俺はチョッキーカニ〜!」

アルミ「…なら」

私はグーを出す。

チョッキー「あー!負けたカニー!」

カービィ「弱っ!」

チヨツキー「……なーんてな、カニ！ラジコン起動！」カチッ！
ヴオオン！

チヨツキーはラジコンを取り出し、起動すると、カメーン国のマークみたいなヤツが2つ出てきた。

チヨツキー「いけー、カニ！」

ズドドツ！

アルカ「弾幕ね…九州！（漢字違う！）」ギユルルルル！」

チヨツキー「な、なんだとー、カニ!?!」

アルカ「私には物理攻撃しか効かないのよ！」

ルイージ「サンダールーム！」バチバチ！

グググツ…！

ルイージさんは仮面をサンダーで止める。

チヨツキー「ぐつ、動かせない…なんで、カニ!?!」

アルミ「さあね。言うなら…アンタが時代遅れだからよ！…炎天掌！」ズガアアン！

チヨツキ「グフツ…カ…二…」フツ…

フツ…

チヨツキーは一撃で倒された。それと共に仮面を消えた。

…弱すぎない!?

アルミ「ミニボスのなヤツにしては弱すぎな気が…」

アド「アルミ、メタいよ？」

アルミ「…あ、すみません」

———
おい作者!

天の声「なんだ？」

アルミ「弱すぎるわよ！」

天の声「スマン、コイツは本体が弱い系よヤツなんだよ」

アルミ「だとしてもよ。弱すぎ！」

天の声「…安心しろ、次のヤツは少し強い」

アルミ「期待していいのね？」

天の声「おう」

アルミ「…分かったわ」

天の声「そんじゃあな」フツ…

———
アルカ「……………（アルミ、アンタいつからそれが…）」

ルイージ「アルカ、どうした？」

アルカ「え？あ、いや、なんでもないわ。進みましょう（今のヤツはメタいしね…）」
スタスタ

しばらく進むと門のようなものがあった。

アド「ここはカメーン国の…」

カービィ「入ろう」

…門に入って数秒後。

ドスーン！

???「この先は通さないケロー！」

巨大なカエルのようなヤツが出てきた。

アルカ「アンタは確か…」

マムー「マムーケロ！勝負ケロ！」

…ハア。

アルミ「イカ、カニ、カエルね…」

変な組み合わせね。

…チャチャつとやっちやいますか♪

鼓膜崩壊

sideアルミ・マリオ

マムー「歌声をくらえ！ゲロゲロ！」

ポワーン！

マムーが歌うと、♪の弾幕がとんできた。

速度が遅かったから簡単に避けられたけど。

アルカ「…マムーの歌い方によって弾幕の性質が変わるわ、気をつけて！」

マムー「ムウ…ネタバレ…するなあ〜♪」

ポワワワ…

今度は小さい弾幕が大量に飛んできた。

アルミ「吸sh…え!？」

吸収できない!?

…これ物理攻撃!?

アルカ「厄介な弾幕ね…」

マムー「ゲロゲロ！」

ポワン！

「ゲロゲーロ！」

…なんかうごメモのカエルが出てきたんだけど!? (メタァ！)

アド「これってまさか…」

マムー「いけー！」

「ケロケロケーロ、ケロケーロ♪」

カービィ「うわっ、早い！」サツ

アルカ「……………アド、耳栓描ける？」

ルイーダ「耳栓?…まさか」

アルカ「多分考えてることはあつてると思うわよ」

アルミ「お母さん、何するつもり？」

アルカ「まあ、見てなさい。カービィ、♪を吸い込んで！」

カービィ「オーケー♪スウウウツ……………マイク！」ポワン！

アド「描けたよ、はい」スツ

アルカ「ありがと。アルミ、これをつけなさい」スツ

アルミ「え?うん…こう?’」スポツ

アルカ「それでオーケーよ。…思いつきりやつちやいなさい、カービィ！」

カービィ「スウウウツ……行くぜえ！」

マムー「!?」

アルミ「この音量は……!?!」

カービィ「ぶーぶーぶー、バスぶーぶー♪「ギャアア!」ケーサツ来ーても笑うだけー♪「や、やめ……」オーレのバスに乗ってくれー!」ガハツ……」フェエエエエイ!」

マムー「負けたケロ……」フツ……

「うるさすぎるケロ……」フツ……

カービィ「……ふう」ポワン

……。

今の音量はやばかった……

ルイージ「終わった……」

アド「前は耳栓なかったから鼓膜破れちゃったんだよね……」

アルカ「マイクカービィの歌声に勝てる耳はないわね」

アルミ「あはは……（苦笑い）」

カービィ「いや、スッキリしたよ。まるでトイレでオシツ「それ以上言うのはやめなさい」あ、うん」

アルカ「進みましょう」

スタスタ…

一方、その頃…

「なんだコイツら!?…ガハッ!」

黒い生命体「グオオオオ…!」

ミール「この数は…」

ジーノ「…流石に多すぎる!」

キノコ王国は、黒い生命体の大群に襲撃されていた。

Yケーティ「お姉ちゃん、何処だろう…?」

Sアオイ「お母さんも…」

ノーア「帰ってきてよ…アルミ!」

ルイス「何処に、いるんだよ!」

彼らの声が届くことはなかった……??

カメーレン?カーメン?

sideアルミ・マリオ

道の奥には広間があった。

アルミ「誰かいる…?」

?????
「ここは…?」

アルカ「アンタは…カーメン?」

カーメン?今のカメーレン国の王はカーメン2世だから…先代?

カーメン「…何故私はここにいる?地獄で罪を償ってたはずだ…」

カービィ「こつちがききたいよ」

カーメン「何故…こつち!」

カーメンは突然顔色を悪くする。

ルイージ「まさか、キングテレサみたいに操られるのか…!」

アド「じゃあ…あのでっかい仮面になるの!」

カーメン「ぐっ…君達…本当にすまない…もう意識が…保てない…」グオオオオオ…

カーメンの周りに黒いオーラが湧き上がる。

カーメン「グオオオオ…」

アルカ（カーメンのあのオーラ……100%アイツね…）

カーメンはどんどん大きくなり…

カーメン「グオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

カービー「デスカーメン…！」

アルカ「…オラア！」ドゴツ！

カーメン「グッ…」

アルミ「炎天掌！」ズガアン！

カーメン「グオツ!?!」

アルミ「……あれ？」

ダメーじ普通に入っていない？

アルカ「…多分私とアルミが強すぎるのよ、コイツにとって。パワーも10万ぐらいよ」

ルイーザ「マジか…」

アド「ミサイル！」ドゴドゴツ！

カーメン「……グオ？」

アド「効いてない!?!」

カービー「あはは…」

アルカ「とりあえず、とつとと片付けるわよ。アルミ！」

アルミ「?…:…了解！」

カーメン「…グオオオオオ！」ズドーン！

2人「ハッ！」サッ

私とお母さんは飛び上がり、足に火を纏う。そして…

2人「…:…双飛遊星弾！」

…:…ドゴオオオオオオオオツ！

思いつきりかかと落としをいれた。

カーメン「グッ…:…グオオ…:…」フツ…:

攻撃はカーメンに直撃し、カーメンは消え去った。

アルミ「ふう、なんか疲れた…」

アルカ「これで多分ここも終わりね」

ルイーダ「やつと次d」シユツ…:

ルイーダさん、途中までしか言えなかつシユツ…:

シユツ

ルイージ「aー!」

カービィ「あ、ここは…」

アド「元の世界…?」

ルイージ「なんだよ…この…状況は…」

キノコ王国は、黒い生命体に襲撃さら、甚大な被害に遭っていた。

シユツ

アルカ「さて、今度はどこかしら?」

アルミ「…あ、ケーティ!アオイ!」

ケーティ「お姉ちゃん!」

アオイ「ここはどこ…?」

アルカ「あら、アンタ達も来たのね」

ルメ「先輩、ここ何処ですか…?」

ダークルメ「怖いよ…」

グレイ「不思議な空間だ…」

ノーア「さつきまで黒い生命体と…」

ルイス「戦ってたハズ…」

キノ太郎「?あそこに…」

アドレーヌ「人がいる…?」

今度は私の世代ばかりだった。

ネクロン再び

side アルミ・マリオ

ネクロン「…10年ぶりだな」

アルミ「ネクロン!?…アンタ達は刑務所にいるはず…」

セイダン「正直何故ここにいるのかは分からない」

ソーン「気がついたらここにいたのだ」

アルカ「…なるほど、つまり…」

お母さんは臨戦態勢に入る。

アルカ「また倒せばいい話よ!新式戦!」

…キーン!

アルカ vs ネクロン

ルメ

ダークルメ vs セイダン

グレイ

アルミ

ケーティ

vs

ゾーン

アオイ

アドレーヌ

大博士

キノ太郎

vs

ルイス

スカーフ

ノーア

vs

ボンゾー

…スタート!

sideノーア・ピース

ボンゾー「久々に動くからね、まずは小手調べといこうか!」

コイツはボンゾー。敵の中で一番弱い(と思う)はず。

ボンゾー「くらえ、風船!」ボンツ!

ボンゾーは風船を出してきた。確か割れたらダメージを受けるのよね?なら…

ノーア「…ヘイルストーム!」ビュウウウン!

…カチーン!

私は風船を凍らせた。

ボンゾー「凍らされた!?なら、コイツはどうだー!」ポイツ!

今度は黒い頭蓋骨を飛ばしてきた。コイツは…

ノーア「…ドカーン」ドカーン！

バズーカをぶつ放して消し飛ばした。

ボンゾー「スカルまで!?ぐっ…なら近接攻撃だ！」ダツ！

弾幕が無くなったボンゾーは突っ込んできた。

ノーア「……………」スッ

私は片手だけ出す。

ボンゾー「片手だけで戦うのか？馬鹿者め！」

ノーア「ハア…馬鹿者はアンタよ。…凍結拳！」パキイン！

氷を纏ったパンチは、ボンゾーの鳩尾に直撃した。

ボンゾー「が…はっ…グオオ…」フツ

そしてボンゾーは消え去った。

ノーア「…私の勝ちね」

疲れたわ…

sideルイス・マリオ

スカーフ「私と師匠が相手だ！」

大博士「かかってこい…！」

ルイス「言われなくても！…サンダー！」ビリビリ！
俺はスカーフに向かって雷を落とす。

スカーフ「…くっ」

ルイス「効いたみたいだな」

キノ太郎「オラアッ！」ドゴツ！

スカーフ「…かはっ!？」

近接攻撃に弱いようだな。

アドレーヌ「ザ・ワールド・ドローパーン！」バシユツ！

スカーフ「ガッ…グオオ…」フツ…

大博士「な…!？」

3人「…弱すぎない？」

大博士「よくも私の弟子を…！」

ルイス「いやいやいや、弱すぎるだけだろ!？」

大博士「野郎ぶっ殺してやる！」

キノ太郎「聞く気ないぞコイツ」

大博士「行けっ、ガーディアン！」ピシッ

大博士は俺達を指差す。

シーン

アドレーヌ「…あれ？なにも起きない？」

大博士「…あ、機械が無い!？」

ルイス「コイツ武器無かったら無力になる系のヤツか。…サンダールーム！」バチバチ！

大博士「グオオ…」フツ

大博士もあつさり倒せた。

キノ太郎「…俺達の出番これだけ？」

アドレーヌ「そうみたい」

カオスなバトルV2

♪MULAストーリー―アルミのテーマ

sideアルミ・マリオ

ソーン「さあ出てこい、動物達よ！」

ギユウウン……!

「ワオーン！」

「グルルル……！」

ケーティ「おお、怖い怖い（棒）」

アルミ「相変わらずの量ね……」

ソーン「行けえ！」

「ガルルルルツ……！」

アオイ「ソウルブラスター！」

ドガン！

「キャウン！」

ケーティ「せいやっ！」ズバツ！

「キャン!?」

アルミ「…炎天掌!」ズガアアン!

「ギャファン!」

私達は狼たちを蹴散らしていく。

ソーン「もつとだ!もつと来い!」

「グルルル!」

しかし、ソーンが追加で呼び出してくる。

…アイツ、攻撃が効かないのよね。

アルミ「タマシイに干渉することができれば…あ!」

確か、アオイの能力って!

アルミ「ねえアオイ」

アオイ「どしたのお姉ちゃん?」

アルミ「アンタの能力で弾幕をアイツに向かって撃つてくれる?」

アオイ「?…やってみる…」ギューイン…

アオイは能力を使って弾幕を生成する。そして…

アオイ「…発射!」

ピュン!…ドゴオ!

ソーン「グオツ!?なんだ…?」

アルミ「…よし!もつとやっちやって!」

アオイ「うん!」ギユウウン…

ソーン「お前の仕業か…そうはさせないぞ!」

「グルルル…!」

ソーン「青い子を優先しろ!」

「ワオーン!」

アルミ「通さないわよ!」ドゴオ!

「キャウン!」

アルミ「撃ちなさい、アオイ!」

アオイ「…オーケー!………ガスタープラスター!」ギユイイン…

…チュドーン!

ソーン「な…!」

ドガン!

ソーン「グオオオオオ…」フツ…

アオイの光線は直撃し、ソーンは消え去った。

ケーティ「ハア、ハア…」

アルミ「ケーティ、お疲れ様」

ケーティ「ありがと、お姉ちゃん…」

sideルメ・パンドラ

セイダン「いでよ、巨人！」

「グオオオオ…！」

ルメ「わお、デカいわね」

ダークルメ「う、うわあ…」

グレイ「4体か…」

セイダン「踏み潰せ！」

ズシツ、ズシツ！

踏まれたらペラッペラの1枚になってしまおうわね。

ルメ「絶風神の舞！」

ビュウウウン！

「グオ…！」

やっぱ風はあまり効かないわね。

ダークルメ「……………キャハハ！」

ルメ「…スイッチが入ったようね」

ダークルメは戦う時以外はまるで子供。：そう、戦う時以外は。

グレイ「主人、僕は何をすればいい？近接攻撃じゃあ無理そうだ」

ルメ「そうね…じゃあ、武器になりなさい」

グレイ「了解だ…！」シャキン！

グレイは灰色の刀に変形した。

ルメ「ダーク、行くわよ！」

ダークルメ「キヤハハ…ぶつ殺す！」

うわあ…口悪いわね…

まあいいや。倒そう。

攻 略 完 了 ！

♪かいいりきベア—アンヘル

ダークルメ「キヤハッ…！」ズバッ

「グオツ!？」

動きが速いわね…

ルメ「…風斬・鎌鼬!」

ズバズバッ!

刀(グレイ)に風を纏い、巨人を斬りつける。

「グツ…グオオ!」

セイダン「すばしっこい奴らめ…!」

ダークルメ「キヤハハ…狂斬り!」

ズシヤッ!

黒い斬撃がついに巨人の体勢を崩した。

ルメ「ナイスよ!…ハアッ!」ズバッ!

「グググツ…グオオ…」

そして私が1体目のトドメを刺した。

セイダン「くっ、3体じゃ……」

ルメ「あら、余裕ないのかしら？」

セイダン「……こうなったら……回れ、巨人よ！」

「グオオ……」

グルグル……！

3体の巨人は私達を囲み、回りだす。

ビュウウン……！

そして突風が発生する。

ダークルメ「うわっ!？」フワッ

ルメ「危ない！」ガシッ

私は浮きそうになったダークの腕を掴む。

セイダン「さあ、攻撃してみろ！」

ルメ「……………」

10年前、アルカ先輩は火を纏ってめちやくちや回転することで風を操った。

でも、私は「風幽」。風を操る。もしかしたら、できるかもしれない！

ルメ「ダーク、力を借して！」

「グオオ……」フツ……

セイダンは消え去り、巨人達も一緒に消え去った……。

sideアルミ・マリオ

アルミ「……………」

私は今、目の前の光景に驚いている。その光景は……

ネクロン「……………」ズズッ

アルカ「……………」ズズッ

……お母さんとネクロンが平和にお茶してる光景だった。

アルミ「……何してんの？」

ネクロン「むっ、終わったのか？」

アルカ「そのようね」

アルミ「……質問に答えてくれる!？」

ネクロン「ああ、その事なんだが、俺は元々戦う気がないんだ。だから速攻で降参した」

アルカ「他の奴らが倒されたらここから消えるらしいわよ」

アルミ「は、はあ……」

―数分後―

ネクロン「そろそろ時間だな。…健闘を祈る」フツ…

アルカ「…ええ」

アルミ「……………」

シュツ…

そして私達は、再び転送された…。

—————

シュツ…

「……………ヤットキタカ」

たどり着いた空間には、変な生物がいた。

なんか、黒くて、人形で、目が赤く光つてる…でも、黒い生命体より何十倍も強そう

な雰囲気。

ノリオ「なんで……………」

ルイージ「お前が…いるんだよ…!?!」

「サアナ。キセキガレンゾクデオキタケツカ、コウナツタノサ」

アルカ「……………できればこの予想、正解したく無かったわ…

……
20年ぶりね、
グリッチ

最終血戦①

♪ Stormheart | Code Red (Fatal Error Sans)
sideアルミ・マリオ

アルカ「20年ぶりね、グリッチ」

グリッチ「イヤ、セイカクニハ『アンデット・グリッチ』ダナ。……オレヲコロシタヤツガイナイヨウダナ…シンダカ？」

アルカ「……………」

グリッチ「…チンモクハコウテイトミナスゾ。ソウカ、シンダカ…オレモオナジメニアツテタカモナ。…ハナシハココマデニシヨウ」

アルカ「そうね…」スツ

お母さんはポケットから手を出す。

アルカ「……とりあえず死になさい」

シュッ！

お母さんは姿を消し…

グリッチ「…ホウ、ツヨクナツタナ」パシツ

アルカ「……………」ギリッ

…次の瞬間にはグリッチに攻撃を止められていた。

アルカ「煉獄パンチ」

ドシユウウウ！

グリッチ「グッ…アツイナ…オラッ！」ドゴッ！

アルカ「…!?ガフッ…」

ヒユウウ…ドゴーン!!!!

アルミ「お母さん!?!」

ルイージ「アルカ!?!」

い、今起こった事を話すわ…

グリッチは確かに煉獄パンチをくらった。

でも、ほぼ怯まずにお母さんにストレートを入れ、お母さんはぶっ飛ばされ壁に激突

したんだ!!

ノリオ「攻撃力が格段にパワーアップしてますね…」

アド「レーヌ、アルカの回復を頼むわ!」

アドレーヌ「う、うん!」タタッ

グリッチ「オイオイドウシタ?ハヤクカカッテコイヨ!」

グリツチ「グツ…ウゴケナイ…ナンダコレハ…」カチーン
アド「今よ！ザ・ワールド・ドローパーン！」バシユツ！

アルミ「炎天掌！」ズガアン！

クツパ「ファイアアアア！」ポオオオ！

グリツチ「グツ…コシヤクナ！」

ルメ（グレイ刀装備）「一人が無理ならみんなで総攻撃よ！風斬・鎌鼬！」ズバツ！

ダークルメ「狂斬り！」ザシユツ！

グリツチ「クソオ…チヨウシニ…ノルナア！」ドガーン！

全員「!？」

グリツチを中心に爆発が起きた。

グリツチ「フウ、ヤットカイホウサレタ…」

ジーノ「くそっ…」

ノリオ「おそらく同じ手は通じないでしょう」

戦いは、始まったばかりだ…。

最終血戦②

sideアルミ・マリオ

グリッチ「ヤツカイナヤツラカラコロシテイクカ。マズハ：オマエダ！」シュツ！

ノリオ「!!」

最初に狙われたのはノリオさんだった。

グリッチ「シネ！」

アルミ「させない！時間停止！（数人以外）」

←ブウウウウン…

私はリボン先生、ルイーダさん、ルイス、ノーアを行動可能にして時間停止した。

アルミ「ルイーダさんとルイスはサンダールーム、ノーアは凍らせ、リボン先生は縛っ

て下さい。時間は稼げると思っています」

4人「了解！」

ビリビリ！パキパキ！グルグル！

アルミ「これでオーケー。あとはノリオさんを運んで、と。再生！」

→ブウウウウン…

グリッチ「ナニ!? イツノマニ…ソウカ、トキヲトメタノカ…!」
時間停止がバレてる!?

カービー「ウルトラソード! せいやつ!」ズバツ!

アルカ「ある程度回復したわ…ヘルフレイム!」ゴオオオツ!

グリッチ「グオオ…!」

少しダメージが入ったようね。

グリッチ「シバリヤガツテ…チョウシニノルナア!」ドガーン!

アルミ「…また!」

グリッチはまた爆発を起こした。

…バンバン!

アルカ「…銃弾?」

グリッチ「グツ…」

…さつきカービーさんがウルトラソードで攻撃してた時もダメージを受けていた…。

…まさか!

アルミ「アンタ、金属が弱点でしょ?」

グリッチ「…ツ、ダカラドウシタ?」

ハリー「なら撃ちまくるまでだ! オラオラア!」バンバン!

ミール「…私の右腕の恨みよ！」ダダダダダダッ！

(58話参照)

キノピオ「俺達はこれぐらいしかできないんだ！」ズドドドドッ！

キノ太郎「なら、責務を全うするまでだ！」ドドドドッ！

グリッチ「グッ…ガアッ！コノ…クソガ！」シュッ

グリッチは銃撃チームに攻撃しようとするが…

Yケーティ「させないわよ！」ズバッ！

Sアオイ「ハアッ！」ドゴッ！

回復したケーティとアオイが妨害する。

グリッチ「ガキドモメ…！」サッ…

アルミ「危なー「させませんよ？」…!!」

いつのまにかノリオさんとノーアがグリッチの真横でバズーカを構えていた。

…なるほど、お母さんが時を止めたのね。

ノリオ「頭ぶちぬきます」

ノーア「消えなさい」カチッ

ドガン！

そのままグリッチの頭が吹き飛んだ。

グリツチ「ガ…ア…」シユウウ…

アルカ「…殺せてないようね」

グリツチ「チツ、バレタカ…ソノトオリダ」

ネチヨネチヨツ…

グリツチは新しい首を生やした。

アルカ「おそらく体全体を消し飛ばさないと倒せないわね…」

グリツチ「マアナ。…デキタラノハナシダガ」

戦いは続く…

最終血戦③

♪SHARAX—DARK DARKER YET MONSTER
sideアルミ・マリオ

アルカ「……そろそろ本気を出すわ」

ギユイイン……!

お母さんは赤いバグのようなオーラを纏う。

グリツチ「ホウ……オレノチカラヲリヨウスルカ……」

Gアルカ「ええ、とことん利用させてもらうわ……!」

ドゴオ!

グリツチ「グッ……パワーガアガツテヤガル……」

Gアルカ「まだまだだあ!煉獄パンチ!」ドシユウウ!

グリツチ「ガッ!……コノヤロウ……チヨウシニ……ノルナア!」ドゴッ!

Gアルカ「グッ……お返しよ!」ドガッ!

グリツチ「ガハッ……コノッ!」

しばらくお母さんとグリツチの接戦は続き……

G アルカ 「ハア、ハア……」

グリッチ 「クソガツ……！」

互いに結構ダメーじが入っていた。

G アルカ 「そろそろケリをつけるわ……時間停止！（アルミ以外）」

←ブウウウウン……

アルミ 「私だけ……？」

G アルカ 「指示を出すから、その時に時を再生しなさい」

アルミ 「う、うん……」

G アルカ 「ハアアアアアツ……！」

ギユイイイン……！

お母さんは手に大量にエネルギーを溜め込む。

G アルカ 「……今よ！」

アルミ 「了解！再生！」

→ブウウウウン……

グリッチ 「ナ……!？」

G アルカ 「トドメよ！封印……パンドラッ！」

グリッチ 「ナ、ナンダコレハ……!？」ギユルルル……！

グリッチはエネルギーの渦に巻き込まれていく。
グリッチ「グオオオオ……！」

封 印 完 了

「
G アルカ「……………ッ」バタン

アルミ「お母さん！」

G アルカ「ハア、ハア……疲れたわ、休ませて……」

アルミ「……………」

本当に……終わったのかな？

あつさりすぎたような……

—————

グリッチ「フウインサレテシマツタカ……」

空間の中で、グリッチは考えていた。

最終血戦④

sideアルミ・マリオ

アド「よくもカービィを……！」

グリッチ「ドウシタ？カカツテコイヨ」

アド「言われなくても……ザ・ワールド・ドロローペイン……」バシユツ！

グリッチ「マタソノワザカ……フン！」ガシツ！

アド「な……!?!」

グリッチ「オラア、シネー「時間停止！」」

←ブウウウウン……

アルミ「ハアッ！」ガシツ

私はアドさんを抱えてグリッチから距離を取る。

アルミ「再生！」

→ブウウウウン……

グリッチ「……チツ」

Sアルミ「油断はできない……スーパー化！」ビリビリ……！

S ルイス 「…俺も！」

S ノーア 「全力で行くわ！」

N キノ太郎 「ネザライトの剣、アーマー装備！」

☆説明しよう！

ネザライトはマイン国の鉱物。

世界のどの金属よりも丈夫で、融点も1万度以上。

Y ケーティ 「私も加勢するわ！」

S アオイ 「倒す！」

グリツチ 「ホウ…」

G アルカ 「アンタ達…」

S アルミ 「……………突撃！」

A ドレーヌ 「ミサイル！」ズドズドツ！

グリツチ 「フン、コンナモノ「ハイルストーム！」…!?」パキン！

S アオイ 「ガスターブラスター！」ドガアアアン！

グリツチ 「ガッ…コノヤロー！」シユツ！

…キイン！

N キノ太郎 「させねえよ！オラア！」ズバツ！

グリッチ「…グアツ、テガ…！」

Sルイス「今だ！サンダー…」ピリツ…

Sノーマ「…ストーム！」パキーン！

グリッチ「グオツ…ナカナカノイリヨクダナ…ハアツ！」ドガーン！

Sアルミ「青炎結界！」ボツ…！

結界で爆発を防ぐ。

Yケーティ「ブレイブカッター！」ズバズバツ！

グリッチ「…コレグライカワセ「ねえよな？」…ガハツ！」ズバツ！

Sアルミ「炎天掌！」ズガアン！

グリッチ「カハツ…コンナガキドモニ…」

Sノーマ「…アイスキャノン！」ドガーン！

氷の光線がグリッチに向かって飛んでいく。

グリッチ「…マケルワケナイヨナ？」サツ

Nキノ太郎「な、この…グワツ！」ドガーン！

Sアルミ「…キノ太郎!？」

Sルイス「あの野郎、盾にしやがった…！」

Nキノ太郎「く…そっ…」バタン

キノ太郎：再起不能

アドレーヌ「ミサイ「サセルカ！」…ガッ!?…ハッ…」ボタン

アドレーヌ：再起不能

アド「レーヌ！」

Gアルカ「まずい…時間停止！」

←ブウウウウン…

……。

→ブウウウウン…

グリツチ「…ムツ？」

Sアルミ「お母さん…」

Gアルカ「煉獄…パンチイツ…！」ズドツ！

グリツチ「…キカン！」ガシツ！

Gアルカ「な…!？」

グリツチ「オレノパワーハオマエヲハルカニコエテイル…クタバレ！」ドガッ！

Gアルカ「ガッ…」ボタン

グリツチ「オマエラモクタバレ…！」

シュツ、ドガッ！

ドゴツ、ドゴツ、ズガァン！

…ドガァン！

グリツチの猛攻が終わる頃には、私達はほぼ全滅状態だった…。

最終血戦⑤

sideアルミ・マリオ

Sアルミ「ハア、ハア……」

グリツチ「アトハオマエラダ……」

キノピオ「くそつ、動けねえ……」

ルメ「……まだよ！風斬・鎌鼬！」シユツ

グリツチ「……キカントナンカイイワレレバキガスムンダ？」パシツ

ルメ「グツ……オラア！」……ガハツ！」ドゴオ！」

Sルイス「ルメさん！」

Gアルカ「…………」

Sノーア「ヘイルスト「サセネエヨ！」……グツ！」ドガツ！」

グリツチ「ゼアツ！」ドスツ！」

Sルイス「ガツ、くそつ……」

Sアルミ「……炎天掌！」ズガアン！」

グリツチ「……フン」ガシツ

グリッチに手を掴まれてしまった。

グリッチ「オレヲコロシタヤツノムスメヨ…シヌガイイ！」 シュツ
グリッチの腕が眼前に迫る。

S アルミ（やばい、死ー）

ド
ス
ッ

グリツチ「…ホウ」

G アルカ「グッ…ガハッ…！」バタン

S アルミ「お母さん…!？」

S ルイス「アルカさん!？」

キノピオ「アルカ…！」

G アルカ「ハア、ハア、ふふっ…」

S アルミ「私をかばって…！」

アルカ「アルミ、私はもう…死ぬみたい…」

同時にお母さんのオーラも消えた。

S アルミ「そんな…死なないでよ！私の活躍を見てよ！ケーティとアオイの成長を見

守つてよ！…生きてよお！」

アルカ「…アルミ、私の最期の願いを聞いてくれる？」

S アルミ「…うん…！」

お母さんは赤黒い玉を出す。

アルカ「これは私のエネルギーをほぼ全部凝縮したものよ…受け取って…くれる…

？」

S アルミ「…分かった」スッ

私は玉を受け取った。

アルカ「頼んだ、わ……よ……。みんな、今……まで、ありが……と……う……。」
そして……お母さんは息を引き取った。

アルカ・パンドラ 2000—2016 2019—2049 ……死亡

グリッチ「ヤットクタバツタカ……マチクタビレタゾ……」

Sアルミ「お母さん……ありがとう」

私は玉を吸収する。

ビリビリッ……

私はバグったオーラを纏い始める。

Sアルミ「……グリッチ」

グリッチ「ナンダ？」

Sアルミ「……お前には今から地獄を味わってもらおう」

グリッチ「ヤツテミロ……」

ギューイイーン……!

私は赤いオーラに包まれた……。

—————

マリオが死んだ後、私は悔しかった。

そして、世界は再び救われる。

♪ GLITCH アルミのテーマ (SHARAX | DARK DARKER YET MONSTER を2分を1倍速)

side アルミ・マリオ

G アルミ「……………」

グリッチ「…コイ！」

…消してやる。

G アルミ「！」 シュツ!

グリッチ「ナ、ハイイ!…チツ！」 シュツ

グリッチは腕を振り下ろす。

グリッチ「シネエ！」

G アルミ「…(ブラックファイア!)」 ボオオオ…!

シュツ…

グリッチ「ナ…!? キエタダト!?!」

黒い炎でガードすると、グリッチの腕は文字通り消滅した。

Gアルミ（能力は『対象を消す能力』みたいね…なら！）
ギユウウウン…！

私は膨大な量のエネルギーの玉を作る。

グリツチ「ムッ、サセルカ！」ドゴッ

シュツ…

グリツチは生え戻った腕をまた振り下ろすが、また消えてしまう。

グリツチ「グッ、クソッ…！」

Gアルミ（25%…）

グリツチ「シカタナイ、マツテヤロウ…！」

Gアルミ（大馬鹿ね。50%…）

ギユウウウン…！

グリツチ「ズイブントオオキイタマダナ」

Gアルミ（75%！そろそろね…）

シュウウウウウウ！

Gアルミ（さすがにこれはきついわね…！）

私は溜まったエネルギーを一気に凝縮する。

グリツチ「ン？チイサクナツタゾ？」

そして…グリッチは完全に消滅した。同時にグリッチのエネルギーも消えたため、は元の状態に戻った。

アルミ「…やつと、終わった」

ありがとう…お母さん。

—————

♪SHARAX—BENEVOLENCE

フツ…

アルカ「ここが、天国…」

スタスタ

マリオ「よう、アルカ」

アルカ「マリオ…！私、死んじやった…」ギユツ

マリオ「そうだな…でも、アルミは大丈夫だと思っぞ？」

アルカ「…ホント？」

マリオ「そうだ。だから…ここでゆっくり見守ろうぜ？」

アルカ「…うん！」

—————

グリッチを消してから数日後…

桜の花びらが舞い散る所で、お母さんの墓はお父さんの墓のとなりに立つ。

そんな墓に私は1人で来ていた。

アルカ・マリオ

2000—2016 2019—2049

英雄“裏番”、ここに眠る

アルミ「お母さん、お父さん…私、世界を守るよ！天国で見守ってね…！」

私はポケットからクッキーを出す。

アルミ「ヨッシーのクッキーをお供えしとくね！」コトツ

…ピリリッ！

アルミ「もしもし？…えつ、あ…仕事行ってくるね！それじゃ！」

私は急いでそこから去る。

タタタツ…

…ヒラツ…

フツ…

クッキーの前を赤い桜の花びらが通り過ぎると、クッキーは跡形もなく消えていた

…。

5747081…?

完

そして…

MULAストーリー 2部 オーバーパワー

計154話 完

3部 コンプリート・ファイア へ続く…

第3部 コンプリート・ファイア 第1章 地下の王国 イビト村の少年

sideアルミ・マリオ

ども、この部の主人公のアルミよ。…誰に言ってるんだろ。

あれから2年経った。

私は24歳、ケーティは18歳、アオイは14歳だ。私達3人で一緒に暮らしている。

アルミ「さて、今日の仕事は…『イビト山の調査』？」

アオイ「そこって何処なの？」

隣に座ってたアオイがきいてくる。

アルミ「ソジック国の山よ。理由は…『イビト山に入った子供が毎年行方不明になっ

てる』しかも依頼主は子供みたいね…なんかわくわくしてきたわね」

アオイ「私もついていい？」

アルミ「うーん…今日は土曜日だし、いいわよ」

アオイ「ありがとう！」

アルミ「さて、カービーさんに電話ね」

―数分後―

カービー「ハロー！今日は何処に行くんだい？」

アルミ「えーっと、ソジック国のイビト村でお願いします」

アオイ（言い方が完全にタクシーだよ、お姉ちゃん）

カービー「よし、行くよー！ワープスター様、今日もイケメン！」

―イビト村―

カービー「ついたよ、バイバーイ！」

ピユウウン…

アルミ「ここがイビト村ね…」

至って普通の街だった。

アオイ「聞き込みするの？」

アルミ「そりゃ、特別捜査官だからね？」

アオイ「私も手伝う！」

アルミ「ありがと。聞き込み開始！」

―数分後―

アルミ「間違いないわね。イビト山で今まで7人行方不明になってる」

アオイ「山になにかヤバいものもあるのかな？」

アルミ「…あそこの図書館に行ってみましょう」

アオイ「了解！」

スタスタ…

アルミ「あの、イビト山についての本は何処ですか？」

受付「2の本棚にありますよ」

アルミ「ありがとうございます」

アオイ「2は、ここだね」

アルミ「えーと、色々あるわね」

その時、青に紫の縞があるセーターを着た少年がこつちに来た。

???? 「あ、あの、すみません」

アオイ「ん？なに？」

???? 「お姉さん達って、もしかしてコレを探してますか？」

『イビト山伝説の書』

アルミ「…絶対コレよ！」

フリスク「なら、どうぞ。僕、フリスクって言います、よろしく」

アオイ「……。じゃあフリスク、何でこの本読んだの？」

フリスク「…。実は、僕とある人にイビト山の調査の依頼を出したんですよ」

アルミ「……え？その依頼は誰に？」

フリスク「キノコ王国の特別捜査官です」

アルミ「……うん、それ私」スツ

私は警察手帳を見せる。

フリスク「アルミ・マリオ……え!?本人!？」

アルミ「偶々会ったようね」

アオイ「……でもなんでお姉ちゃんに？」

フリスク「凄いです！」

アルミ「は、はあ……」

これが私とフリスク・ユメミルの出会いだった。

伝説

side アルミ・マリオ

アオイ「ところで、その本」

『イビト山伝説の書』

アオイ「読んで見ない？」

アルミ「…読むわよ」

♪MULA ストーリー—UNCLE UPON A TIME…?

むかしむかし、ちきゆうにはニンゲンとモンスターのふたつのしゅぞくがくらしていましたが、

ところがあるとき、ふたつのしゅぞくのあいだにせんそうがおきました。

そして、ながいたたかいのすえ、ニンゲンがしょうりしました。

ニンゲンはまほうのちからでモンスターをちかにとじこめました。

それからひやくねんほどときがながれ…

あるひ、ひとりのニンゲンのこどもがちかにおちてきました。

モンスターのおうはこどもをかくまい、かぞくとしてくらししました。こどもはしあわせでした。

しかしあるひ、そのこははやりのやまいにおかされ、しんでしまいました。

しようじよのいちばんのしんゆうだったモンスターのおうじは、しようじよのタマシイをとりこみました。

そして、しようじよのさいごのねがいであるちじょうのきんいろのはなをみることをなしとげるために、バリアをきょうだいなちからをりようしてとりました。

しかし、ちじょうについたおうじは、そこにいたにんげんたちにしようじよをころしたとかんちがいされ…

なぐられたり、けられたり、いろいろひどいことをされました。

しかし、おうじはけっしてはんげきしませんでした。

きずだらけのおうじはしようじよをかかえてちかへにげました。

かえつてきたおうじは、まもなくしんでしまいました。

これにおこったモンスターのおうは、ニンゲンにせんせんふこくをしました。

『ここにおりたニンはみなごろしにする』といい、すでにろくにんころしました。

あとひとりころせば、おうはニンのタマシイをとりこみ、とんでもないことをするでしょう。

ニintai、ユウキ、セイジツ、フクツ、シンセツ、セイギ。
あとはケツイだけ…。

……。

アルミ（これ、矛盾だらけね…）

フリスク「…僕のタマシイはケツイです」

アルミ「!?私のもケツイなのよ…」

ケーティに教えてもらったわ。

アオイ「私のはセイジツね」

アルミ「（そして、この本、伝説の書にしては新品すぎる…地下に行き、王とやらを止める必要があるよね…）フリスク、今すぐ地下に行くわよ！」

フリスク「はい、行きましょう！」

―移動中―

イビト山を登っていると、大きな穴にたどりついた。

フリスク「ココです」

アルミ「よし…飛び降りるわよ！」

アオイ「フア!？」

アルミ「い く わ よ」

フリスク「え、ちよ、待って下さい」

ピョーン！

フリスク「あ”あ”あ”ゝ！」

遺跡

sideアルミ・マリオ

スタツ

アオイ「よし、着地」

アルミ「…あら？」

フリスク「うーん…」

アルミ「フリスク？」

フリスク「…はっ！」

アオイ「気絶してたの？」

フリスク「いやいやいや、いきなり飛び降りるから…」

アルミ「はやく進みましょう」スタスタ

フリスク「ムシしないで」タタッ

ここは…遺跡のようだ。

マゼンタのレンガの道だ。

アオイ「あれは…カエル？」

アルミ「いや、カエルにしてはデカくない？」

フロギー「ケロケロ」

…キーン！

アルミ「!？」

これは、新式戦？

でも、周りは白黒ね…

フロギー「にやあ」

ドゴツ

カエルに見えるモンスターは、何処からともなく箱を出し、私達のタマシイを閉じ込めた。

アオイ「お姉ちゃん、どうする？」

アルミ「…ねえアンタ、私達に何する気？」

フロギー「？」

フリスク「…見逃しましょう」

…シユッ

すると、視界は元に戻り、カエルは逃げていった。

アルミ「どうやら見逃したら勝ちのようね…」

アオイ「進もう」

スタスタ…

しばらく進むと、トゲによって行く手を阻まれてる部屋に出た。

アルミ「…飛び越える！」ピヨン

(原作無視か！)

…誰かの声が聞こえたような？

フリスク「アルミさん、アレ！」

ナキムシ「ブルブル…」

…キーン！

フリスク「…どうします？」

アオイ「怖がつてるし、見逃しましょう」

…シユツ

今の、戦闘って言うのかしら？

???? 「今の人達、誰だろう…ぼくを邪魔しなかった…」
―数分後―

アルミ 「ここは…」

アオイ 「家…?」

遺跡の奥に、古そうな家が建っていた。

アルミ 「…?」クルッ

…誰かにつけられてるわね。

アルミ (…泳がせておきましょう)

私達は家の中に入っていった。

おいニンゲンども

sideアルミ・マリオ

コンコン

アルミ「……あら、開いてるわね」

ギーツ……

アオイ「………?」

家の中はキレイだった。しかし、誰もいる気がしない。

フリスク「誰もいないですね……」

アルミ「……この階段の奥に道があるわ」

アオイ「あ、ホントだ」

フリスク「進みましょう」

スタスタ……

???『………（あれは……）』

アルミ「………（なんか、フリスクに似てるわね……）」

紫色の道を進むと、大きな扉があった。

アルミ「…開けるわよ？」

フリスク「はい…」

ギギギ…！

―数秒後―

ブワア！

アオイ「うわっ、寒っ!？」

扉の先の道を進むと、雪が積もった所に着いた。

…キラン

アルミ「…！」ガサガサ

フリスク「アルミさん？」

アルミ「…ココに監視カメラがあるわ！」

アオイ「ええ!？」

アルミ「ニンゲンが通るか確認するためでしょうね…」

?????

「え、ばばばれちゃった!？」

とある研究所の研究者は焦っていた。

アルミ「壊しておいたわ」

フリスク「進みましよう」

スタスタ…

…なんか、さつきまでの気配ともう一つ気配を感じる…

アルミ「……」クルッ

いないわね…

…バキッ！

後ろで木の棒が折れた音がした。

アオイ「誰かいる!？」クルッ

フリスク「いませんね…」

2人が振り返った瞬間…

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ…

???「お い ニン ゲ ン ど も」

アオイ「!!」

やっぱりいたわね。

??? 「初 対 面 の 相 手 へ の 接 し 方 も 知 ら な い の か
?」

フリスク「……」ゴクリ

??? 「赤 い ニ ン ゲ ン 、 振 り 向 い て お い ら と 握 手
し ろ」

握手?

アルミ「…分かったわ」

クルツ、ガシツ…

相手の手を握った瞬間…

プウ~~~~~

アルミ「……」

ウ~~~~~

アオイ「……」

ウ~~~~~

フリスク「……」

う~~~~~。

??? 「へへへ、見ろよその顔。手にブーブクツションをつけてたんだ。お約束のギャグだよ」

笑っていたのは青いジャンパーと黒い短パン、ピンクのスリッパを着たガイコツだった。

アルミ「…で、アンタは？」

サンズ「おいらはサンズ。見ての通りスケルトンさ。それでお前ら、ニンゲンだろ？」

アオイ「…ええ」

サンズ「ははっ、ウケるな」

いやいや、ウケないわよ。

フリスク「…なにもしないんですか？」

サンズ「あー、おいらはお前らを捕まえたりする気はない。一応監視しろと言われてるかな？」

…なるほどね。

アルミ「アンタの能力だったら簡単にできるわね」

サンズ「…まさか気付くとはな。ま、ネタバレになるから言わないでくれよ？」

アルミ「了解だわ。…で、アンタは捕まえないけど別の誰かがするんでしょ？」

サンズ「その通り。おいらの弟がニンゲンを捕まえると躍起になってるんだ」

ニヤツハツハツ!

side アルミ・マリオ

アルミ「へえ、アンタ弟いるんだ」

サンズ「そうだ、名前はパピルスという。…そろそろ来るな。3人ともあそこの木の後ろに隠れてくれ」

アルミ「?ええ…」

フリスク「何をするんでしょうか?」

私達は木の後ろに隠れた。

その数秒後、身長が高いスケルトンがやってきた。

サンズ「よう、パピルス」

パピルス「よう!…ではぬああいつ!

おお、ナイスノリツツコミね。

パピルス「パズルを調整しておくようにと8日前に言いつけたのに…未だに何もせず!勝手に持ち場を離れてフラフラと…!こんな所で何をしているのツ!」

パピルスはサンズに説教するが、サンズはこつちを指差す。

サンズ「その木を見てる。いい木だろ？お前も見ろよ」

…いい木ってなに？

パピルス「そんな！ヒマは！ぬああいッ！」

あら、怒ったわね。

パピルス「ニンゲンがここを通つたらそうするッ！」

…既に通つてるわよ？3人ほど。

パピルス「ニンゲンの襲来に、備えるのだあッ！」

襲来ね。

パピルス「そして！必ず！このパピルス様が！ニンゲンを捕まえてやるのだあッ！」

中々強い意気込みね。

パピルス「そうすればこの偉大なるパピルス様の…望みは全て叶う！」

どこが『偉大なるパピルス様』よ。(笑)

パピルス「人気者になって尊敬されて…ついに憧れのロイヤル・ガードになって…！」

ロイヤル・ガード…多分王を守る騎士かしら？(ほぼ正解)

パピルス「そしてみんなに『お友達になって！』って言われちゃったりして？」

それはしない。

パピルス「毎日ラブラブ光線を浴びまくるのだッ！」

アルミ「ブツｗｗｗｗ（何よラブラブ光線ってｗｗｗｗ）」

私の小さな笑い声は聞こえることはなかった。

サンズ「そんなら…この木に相談してみるのがいいかもな」

いやいやどうやって？

パピルス「ちよつと！適当な事言わないでよ！この、腐れスケルトンめツ！」

言い方が完全に女子ね。

パピルス「毎日なーんもせず、ホネクソほじってばかりのクセに！」

ホネクソ？なにそれ？鼻くその骨バージョン？

パピルス「そんなだと偉い人に、なれないんだぞツ！」

いや、充分偉い人だと思わよ？アンタが知らないだけで。（事実）

サンズ「いやいや、こっう見えても『トントントン』拍子に出世してるんだぜ？…スケル『ト

ン』だけに」

…ばだmpsr！

サンズのギャグが炸裂した。

アルミ「ブハツｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」ゲラゲラ

アオイ（お姉ちゃん!?!）

やばつ、面白ｗｗｗｗ（いやいやおかしいだろ！）

変な笑い方ね。

パピルスはそこを去るが、戻ってきた。

パピルス「…ハツ！」スタスタ

そしてまた去った。

…それを言いに戻ってきたの？

スノーフル①

side アルミ・マリオ

サンズ 「…よし、もう出てきていいぜ」

アルミ 「…分かったわ」 スツ

サンズ 「早く行かないとパピルスが戻って来るぜ？ そしたら…」

アオイ 「そしたら？」

サンズ 「…おいらのキレツキレのダジャレが再び炸裂するぜ？」

アルミ 「あら、それは悪くないわね。でも、行くとするわ。じゃ」 スタスタ

振り返って道を進もうとする。しかし、サンズに呼び止められた。

サンズ 「なあ…！ つ頼んでもいいか？」

アルミ 「…頼みって？」

サンズ 「ここ最近パピルスはずつと落ち込んでる…アイツの夢はニンゲンに会うことだからアンタら会ってやってくれよ」

…アンタも苦労人なのね。

アルミ 「…分かったわ」

フリスク「え、いいんですかそんな事して!？」

サンズ「大丈夫、パピルスは実はそんなに危険なヤツじゃない。頑張つて強そうなりしてただけだ」

アルミ「アンタの真逆ね」

サンズ「確かにそうだな。：よろしく頼むぜ。おいらはこの先で待つてる」スタスタ

サンズは逆方向に歩いていった。

アルミ「：進むわよ」

進んだ先は辺り一面雪、雪、木、雪だった。

私は火で暖を取つてるので大丈夫だ。

スノードレイク「ん？ニング「時間停止!」」

←ブウウウウン：

時を止めて戦闘回避つと。

アルミ「再生!」

→ブウウウウン：

↓数秒後↓

♪ UNDE R T A L E | N y e h h e h h e h !

フリスク「あ、いました」

アオイ「なんでサンズも……？」

私達の前では、パピルスとサンズが雑談していた。

サンズ「……………」グツ

アルミ「……………」グツ

パピルス「そしたらさ、アンダインがさ……」クルツ

パピルスがこつちに振り向く。私達を見て驚き、サンズの方に振り向く。そしてサンズもこつちに振り向く。それが何度か高速で繰り返され、数秒後2人ともこつちを向く。

パピルス「……兄ちゃん！あ、あ、あ……あれって……ひよつとしてツ！ニンゲン？」

サンズ「ん……いや、あれは岩だ」

サンズは私達の後ろにある岩を指差す。……凄いボケ方ね。

パピルス「なんだ……」

それでいいのね……純粹。

サンズ「見ろよ、岩の前に何か立ってるぜ？」

サンズは私達の方を指差す。

パピルス「……えええええッ！」クルツ

パピルスはサンズに耳打ちする。

パピルス「あ、あれって…ニンゲン？」

サンズ（うん）

パピルス「…信じらんないッ！」

いやいや喋り方。

パピルス「兄ちゃん！俺様はついにやったぞ！」

…何を？

パピルス「アンダーインに褒められる…これで…俺様は…！人気者！人気者！友達いっぱい！」

考え方が小学生ね。

パピルス「…オホン。…おいニンゲン、ここは通さんぞッ！」

アルミ「へえ、どうやって？」

パピルス「偉大なるパピルス様が阻止してやるからなッ！」

アオイ「ふーん」

パピルス「貴様らを捕えて！都に連れて行って！そして…そしてッ！」

フリスク「そして？」

パピルス「…後は知らないけど」

アオイ「知らないんかい！」

パピルス「とにかく貴様ら、覚悟しろッ！ニヤハハハハハハハハハハ！」タタツ：
パピルスはそう言って走り去った。

アルミ「……今の所捕えるのはほぼ不可能ね」

それが私の感想だった。

スノーフル②

side アルミ・マリオ

サンズ「うまくいったな」

フリスク「でも、もしかた会ったら…」

サンズ「…心配すなつて。悪いようにはしないぜ。おいらに任しとけよ」
そしてサンズは去つていった。

1分後

小さな小屋の前を通つたら、小屋の中から気配がしてきた。

アルミ「…やべ」

スーツ…

小屋の中から長いナイフを持った犬が出てきた。

ワンボー「ん、何か動いてるものが見えたぞ？もしかしてニンゲンか？」

アオイ「……………」ゴクリ

アルミ「どうやら動いてなかったら見えないようね」

ワンボー「…姿を現せ！」

…キーン!

フリスク「え!?!」

ワンボー「動くな!」

スーッ

犬はナイフを青くし、斬りかかってくる。しかし…

サッ

アルミ「…え?」

私を通り抜けていった。

ワンボー「青攻撃だ!」ダッ

アオイ「うわっ!?!」

アルミ「アオイ、止まってなさい!その攻撃は止まってたら効かないわ!」

アオイ「あ、うん!」ピタッ

サッ

ワンボー「くそっ、何処だ!?!」

フリスク「……………」そーっ

ナデナデ

フリスクは犬の頭を背後から撫でる。すると…

ワンボー「…ワンワン！」

犬は攻撃しなくなった。

アルミ「…今よ！見逃す！」

シユツ…

犬は小屋に戻っていった。

アルミ「そんな攻撃があるのね…」

青攻撃、ね…。

―数分後―

進んだ先には、またサンズとパピルスがいた。

パピルス「兄ちゃんは、怠け者だッ！一晩中昼寝をしてたし！」

一晩中昼寝ってなによ？

サンズ「それは昼寝じゃなくて…普通に寝てただけ」

サンズが珍しく突っ込んだ。

パピルス「またそうやって言い訳ばっか…あ！」クルツ

パピルスがこっちに気付く。

アルミ「あ、どうもー」

パピルス「ウヒヨウ！ニンゲンがやってきたぞ！」

アオイ「変な反応ね」

パピルス「ここは通さん：わが兄と共に、パズルを仕掛けてやったッ！」

フリスク「パズル：？」

パピルス「このパズルは中々：シヨツキングだ！」

アルミ「いや何が？」

パピルス「その名も：『透明ビリビリ迷路』！」

アオイ「至って普通の名前ね」

パピルス「この迷路の壁に触れると：」サツ

パピルスはガラスっぽい玉を出す。

パピルス「このオーブから、強力な電撃が発生するッ！」

アルミ「へえ：じゃあスキップで」

パピルス「：え？」

アルミ「時間停止！」

←ブウウウウン：

2人を運んで後ろに回り込んで、と。

アルミ「再生！」

→ブウウウウン…

パピルス「…ムツ、ニンゲンは何処へ行った!？」

驚かそつと♪

スノーフル③

sideアルミ・マリオ

アルミ「……………」ニヤリ

アオイ「……………」ニヤリ

フリスク「……………」

せーの。

トントン

パピルス「ニヤッ?…ハッ!？」

アルミ「…よっ」

パピルス「い、いつのまに俺様の背後をとったんだニンゲン!？」

アルミ「さあ、ねえ？」

サンズ「おつ、パピルス、ついでにパズルもクリアされてるぞ」

パピルス「ニヤッ?…ホントだッ！」

そう、時を止めてる間にパズルも解いたのよ。

パピルス「ルールを全て教える前にクリアするとは…まあよい! 次のパズルはそうは

行くまい！何しろ我が兄、サンズの作品だからな！」

まあ、サンズが本気を出したらの話ね、それは。

パピルス「貴様らは間違いなく途方に暮れる！ニヤハハハハ！」

そしてパピルスはまた走り去った。

アルミ「…進むわよ」

―数分後―

変な雪玉を蹴飛ばし、道を進むと、パピルスとサンズが紙を置いて待っていた。

パピルス「おいニンゲン！覚悟はできてるだろうな…ん？兄ちゃん、パズルは何処ツ
？」

サンズ「そこにあるだろ？地面に。…大丈夫。コイツを突破できるヤツはほぼいない
ぜ」

アルミ「ん？これは…」パサッ

アオイ「クロスワード？」

フリスク「一応パズルですね…」

紙には探す言葉と文字が混ざったものがあつた。

アルミ「やってみるわよ…ココとココとココと…はい、終わり」シュバシュバッ

2人「え!!」

サンズ「…速くないか？（おいらでもここまで速くはないぜ？）…やつぱり今日の新聞のクロスワードの方が良かったかな？」

パピルス「なにイツ！クロスワードッ!?聞き捨てならない失言だッ！」

パピルスは何故か怒り出す。ワードサーチ派なのかしら？

パピルス「俺様に言わせれば…『お子様チャレンジ』のパズルより難しいものはないッ！」

………は？（心の中）

アルミ「………は？」（声に出た）

サンズ「え？お前本気で言ってるのか？あんなの赤ん坊用だ」

それに突っ込むサンズ。

パピルス「よくも言ったな…おいニンゲン！貴様らはどう思うッ？」

えー。一択しかないじゃん。…でも、サンズの頼みもあるし。

アルミ「…お子様」

アオイ（あ、なるほど…）

パピルス「…ハ！ハ！やはりな！ニンゲンはかなり、賢いようだッ！」

賢い…まあ、私のIQは163だしね。

パピルス『『お子様チャレンジ』が難しいと答えたそれが、何よりの証拠！ニヤーツ

ハッ！ハハッ！」タタツ：

そしてパピルスは喜びながら去った。

サンズ「ありがとな、ニンゲン。パピルスの機嫌も良くなってる。…名前を聞いてな
かったな」

アルミ「…アルミ。アルミ・マリオよ」

サンズ「そうか。じゃあまたな、アルミ」スタスタ

…その名前、いい意味でアンタの心に刻んでやるわよ。

スノーフル④

side アルミ・マリオ

アルミ「……？」

進んだ先には机とレンジとスパゲッティが乗つてる皿が置いてあつた。

フリスク「これは……食べるんですか？」パクツ

フリスクはスパゲッティを一口食べる。口は次第に歪んでいった。

アオイ「まずいようね」

アルミ「……フリスク、体調とか崩れてない？」

フリスク「大丈夫です。ただ、まずいですね」

アオイ「料理が下手なのかしら……」

スタスタ……

シャキーン

アルミ「またコレね。飛び越えるわよ」

ピヨン

障害物を飛び越えた先には、2匹（2人？）の犬の兵士が待つていた。

「クンクン……この匂いは……」

アオイ「バ、バレる？」

アルミ「そのようね。時間停止！」

←ブウウウウン……

離れて、と。

アルミ「再生！」

→ブウウウウン……

フリスク「……アルミさん、なんかありますよ」

アルミ「バツが2つ……」

アオイ「踏んでみよ」スタツ

……カチツ

アオイが踏んだバツは○になった。

アルミ「……アオイ、もう片方も踏んでみなさい」

アオイ「あ、うん」スタツ

……カチツ

もう片方のバツも○になり……

ガチャツ！

障害物が無くなった。

アルミ（本来ならパズルを解けばいいのね…）

ずっと飛び越えてたから気付かなかったわ。

アオイ「…あら？パピルス？」

障害物の先にはパピルスが待ち伏せていた。

パピルス「…なにイツ！俺様の罠をどうやって回避した…？しかしそれより…俺様のスパゲッティは美味しかったか…？」

アレ、罠だったの？あからさますぎない？（フリスクが一口食べてる）

フリスク「お、美味しかった…」

命がけの演技ね。

パピルス「ホントにツ？うわあ…俺様が作った料理を食べてくれた人、初めてだよ…」

あら、そうだったの？

パピルス「…ようしッ！心配には及ばん！マスターシェフ、パピルス様が…またいくらでもパスタを茹でてくれるわッ！ハハハハハヤニ！」スタスタ

…最後のは何？

―数秒後―

道を進むとまたパズルがあつた。

ヒヨコツ

パピルス「…ニンゲン！」

アオイ「木の裏にいたの!？」

パピルス「えーつとね、実はね…貴様らが中々来ないから…このパズルを改良しておいたぞ…。雪の塊を動かして俺様の顔みたいにしてやった。…しかも！雪は凍って固まってしまったぞ！だから当然、答えも変わったという事だツ！そのうえ、怠け者の兄ちゃんも、ここにはいない…」

話長いわね…。

パピルス「ようするに何がいたいかというのだな…全く心配には及ばん！ということ！偉大なるパピルス様が、この謎を解いてやる！そして一緒に先に進もう！」

頼もしいわね。

パピルス「…でもその前に自力で解いてみてもいいぞ！俺様はここで、お口にチャックして、見てるから！」

…前言撤回するわ。

アルミ「解いてみるしかないようね…」

スノーフル⑤

sideアルミ・マリオ

スタツ

…ガチャツツ!

アルミ「ふう、やっと終わったわ…」

50秒ぐらいかかったわね。(短っ!?)

パピルス「やった! 解けた! しかも俺様の助けを借りずに…すばらしい! 実に見事だ
!」

アルミ「ふふっ、でしょ?」

パピルス「さては貴様ら、俺様みたいに、パズルが大好きだな?…それならきつと、次のパズルも気に入るはずだ!」

アオイ「いや、別にパズルが好きってワケじゃ…」

パピルス「貴様らにはカンタンすぎるかもしれないがな! ニヤ! ハハ! ハハハ!」タ
タツ

アオイ「ムシされた…」ズーン

フリスク「あはは……」

――1分後――

今度は変なタイルの道があり、その先に機械を操作しているパピルスとその隣にサンズがいた。

パピルス「……来た！さっきのニンゲンだッ！貴様らは、絶対にこのパズルを気に入るはずだ！」

サンズ「保証はできるのか？」

パピルス「もちろん！何しろ、かの有名なアルフィー博士が、発明したんだからな！」

アルフィー博士？また新しい人物が出たわね。覚えておこつと。

パピルス「この灰色のタイルは……この機械のスイッチを入れると……色が変わる！タイルは、色によつて、違った効果を發揮するのだッ！」

アルミ「へえ……」

パピルス「赤いタイルは通行禁止！つまり、通れません！黄色いタイルは電撃ショック！踏むと感電するぞ！緑のタイルは警報装置！うっかり踏むと……モンスターと戦闘になるッ！オレンジのタイルはオレンジの香り！踏むと、体が、美味しそうな、匂いになるぞ！青いタイルは、水のタイル！泳いで通つても構わん！ただし……体がオレンジの匂いになっていると……！ピラニアがよつて来て噛みつくから、注意だッ！それと、青い

タイルが：黄色いタイルの隣だと青いタイルを踏んだ時も、感電するぞ！紫のタイルは、ツルツル滑る！踏むと、隣のタイルに強制的に、移動してしまうツ！ただし！ツルツルの素になる石鹸は：レモンの香りなのだ！ピラニアはこのレモンの香りが大ッ嫌いッ！つまり、紫と青の組み合わせは、セーフという事だッ！そして最後に、ピンクのタイル！ピンクは、踏んでも何も起こらない。だから、好きだけ踏むといい！どうだ！分かったか！

長い説明だったわね…

アルミ「ええ、理解したわ」

パピルス「よし、それじゃあ押すぞッ！」ポチッ！

ピコピコピコピコ…！

タイルの色はどんどん変わっていき……………

…ピタッ

アルミ「…ゑ」

ピンクの一直線になった。

…説明の意味あったのかしら？

パピルス「……………」ぐるぐる

サンズ「…失礼するぜ」スタスタ

パピルスは回りながら去っていき、サングズはそれについていった。
アルミ「…一応覚えておこう」
後々必要な知識かもしれないし。

スノーフル⑥

sideアルミ・マリオ

全然。パズルじゃないパズルを通った先では、犬が氷を舐めていた。

犬「ハツハツ…」ペロペロ

その内舌がくつつきそうね。

―数分後―

アルミ「…しんどかった」

アオイ「おつかれ、お姉ちゃん」

説明するわね。

また〇とバツのパズルがあつたから時間停止してスキップしようと思つたけど、床が水でできてたからツルツルで、しかも2人抱えてるから倒れないようにするのに精一杯だった。

しかも時間停止中は体力が10倍減るため、現在かなり疲れている。

…ふさっ

犬「わんわん！」

フリスク「あ、可愛い…」

…ドサツ!

フリスク「え」

鎧を着た大犬が立ち塞がる。

…キーン!

――――
♪ UNDER TALE — DOG SONG

* グレータードッグだ。

犬「わん!」ブンツ!

アオイ「あ、止まる…」

シャツ

フリスク「えつと…えいつ!」ポイツ

フリスクは持ってた棒切れを投げた。

犬「わんわん!」ダダダー

犬は棒を取りに行き…

シュツ…

自動的に見逃された。

アルミ「…今の何？」

―2分後―

アオイ「えー…」

目の前には吊橋があつた。しかも長く、奥が見えない。

アルミ「渡るわよ…」

ギーツ…

ゆっくり、慎重に渡っていく。

それをしばらく続けると、奥が見えてきた。

…そしてやはりパピルスが待ち受けていた。

パピルス「いいか、ニンゲン！見ろ！『恐怖の、死刑執行マシーーン！』」

ゴゴゴ―！

どこからともなく、鉄球と槍、ナイフ、大砲、火炎放射器、犬が出てきた。

…なんで犬？

パピルス「俺様が『やれ！』と、一言合図をすれば、たちまち動き出すのだ！大砲が発射され！槍が突き刺し！ナイフが切り刻む！全ての凶器が、容赦なく、攻撃を始めるぞッ！この仕掛けを、生きて突破することは、まず不可能！覚悟はいいか？」

へえ…

アルミ「つまり、アンタは私達を殺すつもりでこれを準備したワケね？」

パピルス「い、いや、そういうワケでは…」

アルミ「じゃあ、何でこんな物騒な武器を準備する必要があつたの？」

パピルス「そ、それは…」

アルミ「ハア…いい加減にその強がりはやめた方がいいわよ。…痛い目みる前に」

パピルス「クツ…ええい、やめやめい！」

ゴゴツ…

武器は引っ込んだ。

アルミ「やつぱり、ね？」

ふざけて物騒な武器を出すのはやめたほうが身のためよ？

パピルス「ふう…！…何を見ている！またしても偉大なるパピルス様「かつこ笑を付けない」…の大勝利だ「いやどこが？」…ニヤツ、ハツ…ハ…？」スタスタ

パピルスは私の怒りに怯んだのか、あまり威勢のいい雰囲気を出さずに去つていった。

…やりすぎたかしら？

スノーフル⑦

sideアルミ・マリオ

UNDER TALE—SNOW DIN TOWN

『スノーフルの町』

アルミ「見た目は地上と変わらないわね」

町にはショップやイン、グリルピースという飲食店、多分図書館のとしよんかななどがあつた。

フリスク「いろんなモンスターがいますね」

アオイ「楽しそうに暮らしてる…」

アルミ（…だからこそ、ここにいるみんなを開放すべきね）

私達はスノーフルの町の道を進んでいった。

↓数分後↓

町から抜けた場所に、パピルスが待ち受けていた。

パピルス「…ニンゲンよ、それは…自分と同じように、パズルが得意な者への憧れ…イケてて頭もいいヤツに、イケてると思われたいという願い…これこそ…貴様らが今抱

いてる感情だなッ！」

…いや、私が今抱いてる感情は『呆れ』よ。

パピルス「俺様には、そんな気持ちはさっぱり分からんがッ！…何しろ俺様は偉大なるパピルス様だからッ！友達がたくさんいるヤツの気持ちなんて、普通に知ってるし！」

へえ、アンタ友達いないのに？

パピルス「だが、案ずるな！俺様が貴様らを置いて行かない！この偉大なるパピルス様が、貴様の…：…ッ」

パピルスは何かを言いかけるが、途中でやめた。

パピルス「ダメだ…やはり、こんな事は、許されん！俺様が、捕まえなければ、ならんッ！貴様らを捕まえれば、俺様の長年の夢が叶うッ！強くて！人気者で！有名人！それが、このパピルス様！じきに…ロイヤル・ガードの一員になる男だッ！」

…キーン！

♪ UNDER TALE — BONE TROUSLE

パピルスに行く手を塞がれた。

アルミ「…かかつてきなさい」

パピルス「ニヤハツ…くらえ！」
シヤツ！

私は動きを止め、攻撃をかわす。

アルミ「私達を捕まえても、アンタの夢は叶わないわよ」

パピルスを戦意喪失させることにした。

パピルス「フン、ほざけッ！くらえ…青攻撃！」サツ

パピルスは手をかぎす。すると…

…ピイン！

フリスク「これは…!?!」

アルミ「タマシイが、青くなった!?!」

アオイ「私は変わってない…」

うん、元々青だからね。

パピルス「その状態では左右かジャンプしかできなくなる！どうだ！」ドヤア

アルミ「いや、ドヤ顔をしても動きが制限されてるだけで、普通に戦えるわよ？」

パピルス「ほう…ならばくらえッ！」

シヤツ！

パピルスは地面から骨を出し、飛ばしてきた。

弾幕はそれのようね。

アルミ「ジャン！」ピヨン

骨をジャンプでかわしていく。

パピルス「かわしたか。だが、勝負はこれからだ！」

スノーフル⑧

sideアルミ・マリオ

パピルス「ハッ！」シユツ

アルミ「ほいつ」サツ

パピルス「そこだッ！」シユツ

アルミ「おっと」サツ

パピルスが骨を飛ばす、私がそれをよける、を繰り返す。戦意喪失させるのはこれが一番楽である。

パピルス「ぐうつ、避けるなッ！」

アルミ「いやいや、攻撃なんだから避けるに決まってるでしょ？」

パピルス「確かにそうだが…当たれッ！」シユツ

アルミ「……よし」サツ

パピルス「ムキーツ！」

アルミ「いい加減に諦めた方がいいわよ？」

パピルス「俺様は諦めないッ！貴様らを捕えてロイヤル・ガードになるんだッ！」

アルミ「へえ…はつきりというわ。今のアンタじゃ到底無理よ。肉体的に強くても、精神が幼い。それじゃあまともに戦えないわ」

正論を言ってみる。パピルスの反応は…

パピルス「そんなの嘘だッ！俺様は偉大なるパピルス様だからなッ！」シユツ

アルミ「ホントそういうトコよ」サツ

アオイ「……………」

フリスク（僕達、空気になってる…）

アルミ「ほらほら、当たらないわよ」

パピルス「こうなったら…俺様の『スペシャル攻撃』を使う事になるようだなッ！」

アルミ「スペシャル攻撃ね…とつとと使えば？」

パピルス「き、興味とかないのかッ！」

アルミ「ない」

パピルス「なんだとおおッ！」

あつ、やりすぎたかしら？

パピルス「俺様のスペシャル攻撃に興味がないだとツ…ならば、くらうがいい！」

パピルスは手を上げると…

ギユイイイン…！

アオイ「えっ!？」

アルミ「あれはアオイの…」

ガスター「ブラスター…!」

パピルス「…行けッ!」

ドガアアアン!

アルミ「…フッ」ニヤリ

アオイ「…あー」

フリスク「アルミさん、避けないんですか!？」

アルミ「避けなくていいのよ…吸収!」ギョルルル!

パピルス「なッ!？」

パピルスのガスター「ブラスター」の光線を吸収した。

アルミ「…ふう、久々に使ったわね」

パピルス「俺様のスペシャル攻撃が効かないだもつとッ!?!…もつとだッ!」ギョイイイイン

…

アルミ「多いわね。アオイ、頼むわよ」

アオイ「了解!…ガスター「ブラスター!」

ギョイイイイン…

アオイもガスターブラスターを使う。

パピルス「行けッ！」ドガアアアン！

アオイ「相殺！」ドガアアアン！

2人のガスターブラスターの光線がぶつかり合い、互いを相殺した。

パピルス「く、そッ…」

アルミ「アンタの負けよ、パピルス。…見逃すわ」

シュツ…

サンズ「何で…ニンゲンがガスターブラスターを…？」

サンズは物陰で戦闘を見物していたが、かなり驚いていた。

サンズ「アイツのタマシイ…いくつものタマシイが混ざってるようだが、まさか親父のも…？」

スノーフル⑨

sideアルミ・マリオ

私達に負けたパピルスは落ち込んでいた。

パピルス「によほほほほ…貴様らのような弱そうなニンゲンすら、倒すことができないとは…」

アルミ「私、こう見えても世界トップの実力なのよ」

パピルス「なにッ!? ならなおさらだったか…アンダーに呆れられてしまうな…俺様はロイヤル・ガードになんてなれないし…友達の人気だって、増えはしないだろうッ！」

アルミ「…パピルス」

パピルス「なんだ、ニンゲン」

アルミ「友達が欲しいんでしょ？ 私が友達になってやるわよ」

パピルス「…えッ！ ホントにッ？ 俺様と、お友達に、なってくれるのッ？」

アルミ「ええ」

私にとっては最初のモンスター友達の友達になるわね。

パピルス「それなら…特別に…貴様を許してやってもいいだろう！」

いやいや何を？

パピルス「ウヒヨオ！友達が欲しかったら…ダメダメなパズルをやらせて、バトルをすれば良かったんだねッ！」

それはおかしい。

パピルス「ニンゲン、貴様らは色んな事を教えてくれた…よって、ここを通って良いものとするッ！」

アオイ「は、はあ…」

フリスク「僕達ほぼ何もしてないけどな…」

パピルス「俺様はウチに帰って、貴様らの頼れる友達として、待機しておく！いつでも遊びに来ていいぞ！ニヤハハハハハハ！」タタツタタツ…

そしてパピルスはぐるぐると変な走り方をしながら帰って行った。

アルミ「…一旦戻るわよ」

アオイ「え、でも準備した方がいいんじゃない？」

アルミ「それもそうね。…持ってきたお菓子あげるわ」

精神年齢は子供だし、喜ぶでしょ。

side W・D・サンズ

サンズ「…上手くいったみたいだな」

あのニンゲン、アルミといったか？

中々頭のキレルヤツのようだ。

そしてそいつの妹…

いくつものニンゲンのタマシイが混じってるようだ。しかも恐らく親父のタマシイの一部もあるだろう。どうやって混じったかは知らないが。

サンズ「アルミ…」

おいらの能力を一発で見極めたのは、正直かなり驚いた。実はかなり有能なヤツであることも。

アイツ…何度か死線をくぐっててそうだな。

サンズ「敵になったらかなり厄介になるな、アイツは…」

味方であって欲しい。

……。

監視を続けよう。

side???

フリスクの隣にいる赤いニンゲン、私の方を何度か見てる。

気付かれてるのかな？…いや、ありえない。私は幽霊だから。

??? 「クロス…」

????????
を殺したニンゲン共を…私は許さない…!
「……ふふっ」
虐殺が楽しみね…。

スノーフル⑩

sideアルミ・マリオ

パピルスは家の前で待機していた。

パピルス「俺様に会いに、戻ってきたな！どうやら貴様ら、本気らしいな……」
アルミ「友達になる事に？」

パピルス「そうだ。……とっておきの場所へ、連れていかねばならんな……」
アオイ「とっておき？」

パピルス「そうだ。俺様がよく行く場所だ！」タタツ

パピルスは走り出す。私達はそれについていく。

クルツ

……え、戻るのが？

ピタツ

パピルスは家の前で止まった。

パピルス「……俺様の家ッ！」ガチャツ

アルミ「ここなんかい!!」

移動する必要あったの!?

…入ろう。

♪ UNDER TALE — SANS.

ガチャツ

中は至って普通の家だった。

パピルス「ゆっくりしていけッ!」

アルミ「…ん?」

床に靴下が落ちてあり、そこに付箋が何枚か貼ってあった。

『兄ちゃん、この靴下を拾ってよ!』

『分かった』

『片方しか拾ってないよッ! もう片方も拾ってッ!』

サンズは遊んでるようね。

フリスク「アルミさん、コレ見て下さい」スツ

アルミ「どれどれ…」

フリスクが渡してきた本は、ジョークブックだったが、その中に科学的な本が挟んであった。…そしてさらにジョークブックが挟んであった。

アルミ「なるほど…」

「モンスターは死ぬと灰になるのね…そしてタマシイがニンゲンの逆さね…」

「アオイ「うわっ、洗面台高っ!?!」」

パピルス「コレは兄ちゃん用で、高い方は俺様用だッ! 高くしたからしたにもつと骨を保管できるようになったんだッ!」

アオイ「へえ…開けてみていい?」

パピルス「いいぞッ!」

パカッ

中には骨…:

を唾えた白い犬がいた。

パピルス「なにッ!?!」

ダダダダダ

犬は逃げ出した。

パピルス「あの犬めッ…」

ガチャッ

すると2階の右側のドアが開き、サンズがでてきた。…トロン“ボーン”を持って。ヴァッ、ヴァッ、ヴァッ。

ガチャッ

そしてそれを吹いてすぐドアを閉めた。

…今の何？

パピルス「兄ちゃん！何も面白くないよッ！」

しかしそのツツコミがサンズの耳に届くことはなかった…かも。

犬語で DOG SONG

ワン、ワン、ワン、ワン、ワワン、ワワワン、ワン、ワン、ワンワワン♪

ワン、ワン、ワン、ワン、ワワン、ワワワン、ワワワン、ワンワンワン♪

ワン、ワン、ワン、ワン、ワワン、ワワワン、ワン、ワン、ワンワワン♪

ワン、ワン、ワン、ワン、ワワン、ワワワン、ワワワン、ワンワンワン♪

ワン、ワン、ワンワワン、ワワワン、ワン、ワン、ワンワワン♪

ワン、ワン、ワンワワン、ワワワン、ワン、ワン、ワンワワン♪

ワン、ワン、ワンワワン、ワワワン、ワン、ワン、ワンワワン♪

ワン、ワン、ワンワワン、ワワワン、ワン、ワン、ワンワワン♪

ワンワンワンワン、ワン♪

これを何度も繰り返し返す

ウオーターフェル①

sideアルミ・マリオ

しばらくパピルス（とサンズ）の家で過ごした後、出発することにした。

パピルス「いつでも来ていいぞッ！」

アルミ「ええ、ありがと。じゃ」

パピルス「バイバイッ！」

―数分後―

町を抜けてしばらく進むと、湿ったいかにも洞窟のようなエリアに入った。

アルミ「あら、サンズ」

サンズ「よう。先は気を付けろよ、アンダインがいるからな」

アオイ「アンダイン…？」

サンズ「ロイヤル・ガードの隊長だ」

アルミ「そう。…ま、気を付けるわ」

サンズ「おう」

スタスタ…

しばらく歩くと草むらがあつた。

『……………』

アルミ「誰かが話してるようね」

片方は…パピルスね。

パピルス「え…えつと…アンダイン隊長…今日の任務の、報告に来ました…」

もう片方は、アンダインのようね。

暗くてよく見えないけど、鎧を着ているようね。

パピルス「その…さっき電話で伝えたニンゲン3人の事なんです…」

アンダイン「……………」

パピルス「…え？戦つたのか、つて？…もちろん、実に勇敢に！」

アンダイン「……………」

パピルス「…え？捕えたのかつて…？…ええええーつと…」

パピルスは焦っている。

パピルス「その…一生懸命がんばったけど……………」

アンダイン「……………！」

パピルス「…ニンゲンのタマシイを取りに行く…？隊長が…？でででも、別に、殺さなくたって…！だって…だって…」

アンダイン「……………」

パピルス「…はい。分かりました」

そしてパピルスは（よく見えないけど）悲しそうな顔をしながら去っていった。

アルミ「……………」

…一度話してみようかしらね。

ガサツ

アンダイン「!!」ギユン

アンダインはこちらに気付き、槍を出し、構えた。

どうやら槍の魔法を使うようね。

アルミ「…どうも」ガサツ

私は自分から草むらを出た。

アオイ「お姉ちゃん!？」

フリスク「アルミさん!？」

アンダイン「貴様が…」

アルミ「ええ、見ての通りニンゲンよ」

アンダイン「まさか自分から出るとはな。…パピルスに何をした?」

アルミ「何って、友達になっただけよ?彼は本当に純粋な心を持つてるわね」

アンダイン「友達だと？ほざけ。ニンゲンなんかと友達になっていいハズがない！」
アルミ「それを、誰が決めたの？」

アンダイン「王の命令でニンゲンは殺せと言われている」

アルミ「そのようね。…でも、私はこのモンスター達を開放したい。だから殺されるワケには行かないのよ」

アンダイン「私達を開放だと？ほざけた事を言うニンゲンだな。…死ねっ！」
シャツ

アンダインは槍を向けて突進してきた。

アルミ「(少しは力の差というものを見せてやろうかしら?) ……ほい」
ガシツ
それを私が片手で止める。

アルミ「パワーは…大体200かしら？」

アンダイン「なっー!？」

ウオーターフェル②

sideアルミ・マリオ

アンダイン「なっー!?!」

アルミ「あら、その程度なの?」

アンダイン「くっっ…くっくっ!」

ギユン…!!

アンダインは槍を私の手から離し、今度は複数飛ばしてきた。

アルミ「魔法はエネルギーだから…吸収!」ギユルルル!

槍は私の手のひらの渦巻きに吸い込まれ、私のエネルギーとなった。

アンダイン「な、何をした!?!」

アルミ「んな事教えないわよ。…ほら、2人とも、早速行くわよ」

アオイ「う、うん…?」

フリスク「は、はい…?」

アンダイン「に、逃さんぞ!」シュツ

アンダインは再び槍を構えて突進してきた。

アルミ「はあ、懲りないのね。…炎天掌！」ズガアアン！

アンダイン「ガハッ…!？」

やりすぎだろって？こう見えても手加減してるのよ？

アンダインの鎧に穴が開く。

アルミ「アンタの程度じゃニンゲンに勝てないわよ。…こんなことわざがあるわ。『井の中の蛙大海を知らず』地下に閉じこもってるアンタ達は、限られた考えしかしない。だから世界を知らないといけないのよ。…じゃ、行くわね。せいぜい追いかけてちょうだい」

私は特別捜査官。だから世界の色々な知識を得る必要がある。

だから私は世界がある程度しっているのは事実である。

アンダイン「ま、て…」

スタスタ…

アンダイン「あのニンゲン…」

アンダインはアルミ達が去っていくのを見る事しかできなかつた。

アンダイン「…世界を知れ、か…」

しばらく進むと、川があつた。

アルミ「：何でこんな所に花が？」

アオイ「：お姉ちゃん、コレ川の水面に置くんじゃない？」

アルミ「あ、なるほど」

パサツ、ストツ。

4つあつた花を川の水面に並べると、花が咲き道ができた。

フリスク「これで渡れますね！」

アルミ「そうね。アオイ、ありがとう」

アオイ「えへへ」

―数分後―

道を進んでいると：

プルルルツ！

アルミ「あら、電話？」

ピッ

パピルス『もしもし！パピルスですッ！』

アルミ「あら、パピルス？」

パピルス『どうして番号が分かつたかつて…？そんなのカンタンだッ！―から順にボ

タンを押していったら、繋がったッ！ニヤハハハッ！』

アルミ「は、はあ…」

まあ、確かに私の電話番号は123—456—7890という世界一シンプルな電話番号だけど…間違ってたらヤバイわよ？

パピルス『えつと…今どんな格好してるの…？』

アルミ「格好？」

パピルス『いや…友達に頼まれたから、聞いてるんだけど…』

恐らくアンダインね。

パピルス『貴様が赤い帽子を被っていたのを見たって、その友達が言うんだ』

アルミ「ふーん、で？」

パピルス『アルミはホントに赤い帽子を被ってたのかッ…？』

アルミ「いやいやずっと被ってたわよ!？」

パピルス『そうか。後は任せろッ！バイバイッ!』

ッ…

何のために電話したんだろ。

ウオーターフェル③

sideアルミ・マリオ

しばらく進み続けた。

途中でアンダインが追いかけてきたけど、時間停止して逃げた。

今は広場っぽい所でサンズに遭遇した。

サンズ「よう、お前ら。望遠鏡使うか？」

アルミ「：遠慮しとくわ」

サンズ「そうか、それは残念だな。ところで：アンダインには会ったのか？」

アルミ「2回会ったわよ。どちらも逃げ切ったわ」

サンズ「そうか。ま、気を付けろよ」

アルミ「ええ、じゃ」

スタスタ：

プルルルッ！

：ピッ

パピルス『もしもし！パピルスですッ！』

アルミ「ん、どしたの？」

パピルス『何分か前に、貴様が赤い帽子をかぶっているのか聞いたでしょ？』

アルミ「聞いたわね」

パピルス『えーつと…それを知りたがってた友達はね…貴様に…『さつじんがんばう』を抱いてるんだ…』

うん、絶対アンダインね。

パピルス『だけど、貴様はそんな事とつくに知ってたよねッ！だから…友達には、ちやーんと伝えておいたよ！貴様は赤い帽子をかぶってるって！』

おいパピルス、アンタ絶対殺人願望の意味知らないでしょ!?

パピルス『だって…あんな、いかにも怪しい質問されたら…普通は帽子を脱ぐでしよッ！貴様は、とつてもお利口さんだから！』

違う、そういう問題じゃない。

パピルス『これで貴様は襲われなし、俺様は嘘もついていないッ！誰も裏切つてないよッ！みんなに好かれるのって、案外カンタンだねッ！』

既に襲われてるんですケド!?

パピルス『じゃ、切るねッ！』

ッ…

アルミ「……パピルスが純粹すぎる」

アオイ「あはは……」

スタスタ……

―数秒後―

アルミ「川ね」

アオイ「川だね」

フリスク「川です」

……飛び越える。

ピヨン

スタスタ……

―数分後―

アルミ「ココ、暗いわね……」

アオイ「床が見えない……」

フリスク「ん？何このキノコ……」ツンツン

フリスはキノコに触れた。すると……

……ピカア！

フリスク「うわっ!？」

キノコが光を放ち始めた。

アルミ「…どうやらキノコが道を照らすようね」

アオイ「あ、ココにもキノコが」ツンツン

ピカア！

私達はキノコに触れて道を進むのを繰り返した。

しばらくすると普通の道に戻った。ただ…

アルミ「ホントに暗いわね」

ボツ

火を付けて周りを照らす。

道の先には喋る花があった。

花『うしろだ』

アルミ「…知ってるわよ」クルツ

アンダイン「…」

アオイ「また…」

後ろを振り向くとアンダインがいた。

アンダイン「…7つのニンゲンのタマシイ。アズゴア・ドリーマー王は…神となる…」

アルミ「…うん、ありえないわね。神にはならないわ。強くなるけど」

アンダイン「…それさえ手に入れば、アズゴア王はついにバリアを破る事ができる」
アルミ「そんな事しなくても、私一人で破れるわよ」

アンダイン「…いいか、ニンゲン。これは貴様にとつて最初で最後のチャンス。貴様のタマシイをよこせ」

………へえ。

アルミ「アンタ、そんなに殺されたいのね」

ギロツ……！

アンダイン「…ッ!? (なんだこの殺気は!?)」

アルミ「アンタ達がココに閉じ込められたのは150年以上前よ。その時の事に一切関係ない私がそれを償えと? アンタはバカなの?」

アンダイン「…ッ、ほざけ! ニンゲンはみな死ぬべきだ!」

アルミ「そう…なら、覚悟しなさい」

一方的な暴力のスタートよ。

ウォーターフェル④

sideアルミ・マリオ

アルミ「さて…新式”弾幕”戦！」

…キーン!

ダイアログボックスだったっけ?

それを新式戦に組み込んだ。

♪ UNDER TALE | SPEAR OF JUSTICE

アルミ

アオイ vs アンダイン

フリスク

アンダイン「行けっ！」

ビュン!

大量の槍が一斉に飛んてくる。

アルミ「2人とも私の後ろに来なさい!」
「うん!」
「はい!」
…吸収!
ギユルルルル

!

私に命中しそうになったものだけ吸収する。

アンダイン「またその変な技か」

アルミ「そのようね。：私のターンよ」ポツ

私は足に火をつける。そして：

アルミ「：フンツ！」シャツ！

アンダイン「なっー」

アンダインの目の前に現れ：

アルミ「烈焼脚！」ドゴォ！

：鳩尾に強烈な蹴りをいれた。

アンダイン「ガ、ハツ!？」

アンダインは吹っ飛んで壁にぶつかる。さて、

アルミ「ケリ」はついたかしら？なんつって♪」どーん

ばだm p sー！

アオイ「お姉ちゃん、シケる」

アルミ「ガーン（。D。）」

流石にそれは傷つくわよ：

アンダイン「ふざけやがって……」

アルミ「覚悟を決めてない人に言われたくないわよ。ニンゲンを皆殺しにしたいなら……アンタ達モンスターも皆殺しにされるかもしれないのよ？……というか、その方が確率が高いわね」

正論をぶつけてみる。

アンダイン「ニンゲン無勢に、何が分かる！」

アルミ「もちろん、何も分からないわよ」

アンダイン「ならー」でも、私はアンタ達を助けに来た。それは本当の事よ……ッ」
アルミ「私は地上ではアンタと似たような立場よ。みんなを守るヒーローのような人。だから今のアンタの気持ちは分かるわ」

みんなを守るために手段を選ばないのは。

アルミ「アンタ……ホントに人殺しがしたいの？」

アンダイン「……ッ、私は……」

フリスク「……（凄……これがアルミさんの優しさ……）」

アルミ「私は王を止めてバリアを壊し、ニンゲンとモンスターが共存する世界をつくりたい」

アンダイン「共存……？」

アルミ「そう。差別なく仲良く暮らせる、そんな世界」
まるで幻想だけど、実現は充分にできる。

アンダイン「（そんな事ができるのか？…ニンゲンは信用しないが、コイツなら…）
アルミ、だったか？」

アルミ「ええ、そうよ？」

アンダイン「…完敗だ」

シユツ…

アンダイン「私は王からニンゲンの抹殺命令を受けた。そんなニンゲンは悪いヤツばかりだと思っていたが…」

アンダインは口角を上げる。

アンダイン「お前なら信用できそうだ」

アルミ「…ありがとう」

ホットランド①

sideアルミ・マリオ

アンダインと和解した後、私達は先に進み、しばらくすると洞窟を抜けた。

アルミ「ここは……」

アオイ「……火山？」

フリスク「暑いですね……」

そりや崖の下に溶岩があるからね。

アルミ「……あら、サンズ？」

サンズ「…………」くかー

……よくこんな環境で寝れるわね。

アオイ「……あ、水！」タタッ

ゴクゴク……

ー数秒後ー

道を進むと研究所らしき所に来た。

アルミ「ここにパピルスが言っていたアルフィーがいるのかしら？」

研究所に入る。辺りは暗く、大きな画面だけ起動されていた。その画面に写っていたのは…

アオイ「え、私達!?!」

アルミ「どこかにカメラがあるよう…!」

誰か、来る!

アルミ「……………」

…シヤツ!

ドアが開き、黄色いモンスターが出てきた。

そして明かりを付け、こつちを向く。

「え…ウソ…」

アルミ「…どうも」

「も、もう来ちゃったの!?!お風呂入ってないし服も適当だし掃除してないし…」

アルミ「あはは…」

アルフィー「あ…えつと…は、は、は、はじめましてっ!私はアルフィー…アズゴア

様直属の研究員だよ!

へえ…大博士のモンスター版みたいなのを想像してたわ。

アルフィー「でででもね、違うの、私は悪者じゃなくて…!」

焦ってるわね」

アルフィー「…実はあなた達が遺跡を出てからずっと…画面越しにあなた達を”観察してたの”

まさかの事実。カメラはアンタが仕込んだのね。

アルフィー「熱いバトル…熱い友情…全部見てたよ！」

あ、この人オタクね。そのセリフからバレバレよ。

アルフィー「ホントはあなた達を止めるのが仕事だったんだけど…画面の中の人ってついつい応援したくなっちゃうでしょ？だから、その…協力してあげることにしたの！アズゴア様のお城への行き方ももちろん知ってるよ！」

アルミ「あら、それは頼もしいわね」

アルフィー「ありがとう。でも…1つだけ問題があつて…」

アルミ「問題？」

アルフィー「随分前にね、『メタトン』っていうロボットを作ったの。元々はエンタメロボットにするつもりだったんだ…」

アルミ「へえ…」

元々は、ね…

アルフィー「…ロボットアイドル、みたいなの？」

それ、何処かの平行世界で聞いたことが…どうも思い出せないわね。(メタい!)
アルフィー「でも、もっと使いやすくするために最近改造して…実用的な装置を少
しだけ追加したの」

アルミ「その装置って？」

アルフィー「対…対ニンゲンバトル機能とか…」

アルミ「なにしてんの!?!」

バカと天才は紙一重ってヤツ!?!

ホットランド②

sideアルミ・マリオ

アルフィー「も…もちろん、あなた達が来るのを見て私すぐにその機能を解除しようとしたよ!た、ただ、その時ちよーつとだけ失敗しちゃって…メタトンは、その…」

アルミ「どうなったの?」

アルフィー「ニンゲンの血に飢えた殺人マシンになっちゃったんだ、テヘツ☆」

アルミ「このバカー!」

アルフィー「で、でも、ばったり出くわさなければ大丈夫だよね!」

それフラグ…

…ガン

アルミ「…?」

…ガンツ

アルフィー「今の音は…?」

…ガンツ!

…ガンツ!!

…ガンツ

…ガンツ

…ガンツ

アルミ「まさか…！」

…ドゴオン！

壁が何者かに破壊された。

そして何故か辺りが暗くなり…

???? 「OH H H H、YES S S S!!!」

ロボットの声が聞こえてきた。

???? 「ウエルカム、エビバデ！」

カチツ

ロボットにスポットライトがあたる。

こいつがメタトンね。

メタトン「さー始まりました！今夜のクイズショー！」

♪ UNDER TALE — ITS SHOW TIME!

メタトン「オープニングからじゃんじゃん飛ばしていくよー？…それでは早速お迎え

しましょう！今夜の素敵な回答者です！」

カチツ

アルミ「…私ね。どもー」

パチパチパチパチ!

カメラに写るのが慣れててよかったわ。

メタトン「えーつと、君は初登場かなー?」

アルミ「ええ」

メタトン「そうかい、でも大丈夫!とーってもカンタンだからね!覚えておくべきルールはただひとつ!必ず正解を答えること!間違えたら…」

アルミ「間違えたら?」

メタトン「死んでもらいまーす!」

…ふーん。

アルミ「…じゃあ」ガシツ

メタトン「え?」

アルミ「アンタの番組は終了ね」ボツ

メタトン「火!?!」

アルミ「炎天掌!」ズガアン!

掌底はメタトンにクリーンヒットする。

メタトン「あーれーれーれー！」ピユウウ！

メタトンは吹っ飛んでいった。

アルミ「…ふう、追っ払ったわ」

アルフィー「…危険なかったね」

アルミ「うん、アンタが変な機能付けなかったら大丈夫だったのよ？」

アルフィー「あ、機能といえば…ちよつと携帯かしてくれる？」

アルミ「ん、何するの？」

アルフィー「冒険に役立つ機能を入れようと思って」

アルミ「…やめとくわ」

アルフィー「なんで!？」

アルミ「もしもメタトンみたいになったら、ね？」

アルフィー「そ、そうだった…じゃあ、コレを持って行って」スツ

アルフィーは黄色いハート型のボタンを渡してくる。

アルミ「コレは？」

アルフィー「もしもの時のためにタマシイを黄色くするボタンだよ」

アルミ「なるほど、受け取るわ」スツ

アルフィー「ありがとう。じゃあ、後は連絡先だね」

アルミ「ええ…」

その後連絡先も問題なく交換できた。

ホットランド③

sideアルミ・マリオ

アルフィーの研究所を反対側の出口から去り、道を進む。

アルミ「エスカレーターね」

アオイ「そのまま歩こう」

スタスタ：

―数秒後―

アルミ「……………」

目の前には矢印がある。

アルミ「…踏んでみよ」ストツ

シュウツ！

アルミ「うわっ!?!」

煙が吹き出し、私は矢印の方向に飛ばされた。

フリスク「おお、凄いですね！」

アオイ「私達も！」ストツ

シュウツ!

アルミ「この先もあるわね…」
パズルのようね。

―数分後―

さつきツンデレな飛行機に遭遇した。

…意味不明だと思いかもしれないけど、私はマジよ。
ツンデレな飛行機のモンスターがいたのよ。

アルミ「ハア…ん？」

目の前にはオレンジ色のバリアがある。

…プルルルツ!

アルミ「電話ね、もしもし」

アルフィー「き、きき気をつけて!そのオレンジ色のバリアを通る時、止まっちゃダメだよ!」

アルミ「了解」

ピッ

アオイ「なんて言われたの？」

アルミ「青攻撃の逆みたいね。…走り抜けるわよ!」

フリスク「はい！」ダッ
シユッ

何事もなくバリアを通り抜ける事ができた。

―数十分後―

途中で煙ゾーン(?)がまた出たり、障害物を当てないと通れない場所があったりしたが、なんとか進んだ。

そして今は…

アルミ「暗いわね…」

アオイ「怖いよ…」

まるで明かりを消したように真っ暗な部屋にいる。

…プルルルッ!

アルフィー『え、えつと…それじゃ暗くて何も見えないよね?』

アルミ「ええ…」

一応、

メタトン「……………」うずうず

メタトンが私の真横で電気付けるのを待っているのはよく見えるけど。

アルミ「とりあえず」ガシッ

クイズショーもやめたし。

…まあいいわ。

アルミ「進みましょう」

スタスタ…

—————

サンズ「…ハッ！」

アルミ達が通りかかった時寝ていたサンズは、今日を覚ましたのであった。

ホットランド④

sideアルミ・マリオ

♪MULAストーリー―Arumi is here.

アルミ「あら、サンズ。今度は起きてるわね」

サンズ「よう、しばらくぶりだな。ホットドックいるか？」

アルミ「ホットドック?…3つ買うわ」

サンズ「あ、スマン、ホットドックの在庫は1個しかないんだ。後の2つはホット

キヤットでいいか？」

犬じゃなくて、猫？

アルミ「それでいいわ」

サンズ「はいよ、90Gだぜ」

私は90G（地下の通貨）払う。

サンズ「ほい」スツ

ホットドックは普通のホットドックだった。

ホットキヤットは…ホットドックに猫耳をつけてるだけね。

アルミ「あむっ」パクッ

……。

アルミ「この肉、美味しいわね」

サンズ「それは肉じゃなくてウオーターソーセージといって、植物なんだ。肉買う金がないからそれで代用してるぜ」

アルミ「へえ…アンタこれ地上で売ったら繁盛するわよ？」

サンズ「そうか？…そりやいい話だな」

アオイ「美味しい！」

フリスク「ジューシーです！」

サンズ「それは良かった。じゃ、頑張れよ」

アルミ「ええ、ごちそうさま」

スタスタ…

―数分後―

アルミ「また暗い部屋に来たわね…」

プルルルツ！

アルフィー『ゴメンゴメン、おまたせー！また真っ暗だよね…でも、大丈夫！私のハッキングスキルでなんとかできるから！』

アルミ「ええ、頼むわ」

そしてアルフィーはハッキングして電気を付けると…

『MTT NEWS』

アオイ「えっ!？」

私達は二ユース番組の中継画面に写っていた。

アルフィー『ウソでしょ…』

アルフィーも驚いている。

メタトン「テレビの前の素敵なみなさん、こんばんは！今夜にMETAニユースキャスターのメタトンがお届けしますッ！」

…めんどくさいわね。

アルミ「時間停止！」

←ブウウン…

私は時を止め、2人を運んで会場から離れた。

↓数分後↓

アルミ「ここでいいわね。再生！」

→ブウウン…

フリスク「あれ？また移動したんですか？原作崩壊しすぎじゃないですか？」

アルミ「メタい話はやめなさい。進むわよ」
スタスタ：

メタトン「現在ホットランドの東エリアで“何か”が起こってるようもようですッ！
番組の特派員が…あれ、いない!？」

メタトンはアルミ達がいなことにやっと気付くのであった。

side ???
????

フリスク：

今すぐ助けてあげるよ：

一緒にいる女の人を殺して：

??? 「…ふふっ♪

楽しみね♪

ホットランド⑤

sideアルミ・マリオ

エレベーターで上がり、降りると紫色のカーペットの道があった。それを進むと蜘蛛の巣があちらこちらにある場所に来た。

「スパイダードーナツ、いかがですか？」

アルミ「ん、買ってみようかしら。…おいくら？」

「9999Gです」

アルミ「え。…お金が足りないわね。やめておくわ」

「またのお越しを」

スタスタ…

―数秒後―

しばらく進むと床にくもものすが張り付いている空間に来た。

アオイ「足が…」

フリスク「蜘蛛の巣が張り付いて動きにくいです…」

「アフフ♪」

アルミ「？」

クルツ

右を見ると、そこにはさつきスパイダードーナツを売っていたモンスターがいた。

マフェット「蜘蛛のおやつにしてあげる♪」

…キーン！

—————

♪ UNDER TALE — SPIDER DANCE

マフェットに囚われた！

アルミ「グツ、こんな糸、燃やしてやるわ！」ボツ

マフェット「アッフ、そうはさせないわよ♪」タラア…

キーン！

アルミ「紫!？」

タマシイは紫色に変化した。

マフェット「これで糸がある所しか移動できなくなったわよ♪蜘蛛たち、行きなさい」

い

ワサワサ！

四方八方から蜘蛛が襲いかかる。

アルミ「殺しちやダメよ、2人とも。…よけなさい！」サツ
アオイ「う、うん！…うわっ！」

マフエツト「アフフ、そんな事しちや貴女達が食べられるわよ？」

アルミ「それはどうかしら？」フツ！

私はマフエツトの視界から消える。

マフエツト「えっ、消えた!？」

アルミ「……………（時間停止して後ろに回り込んだのよ。さて…上から攻撃するならこの技ね）……………天空掌！」ズガアン！

天空掌…炎天掌の強化版。上下にも攻撃できる。ただ、技は風属性のため火を一切出さない。

マフエツト「がはっ…」

アルミ「糸がある所でしか移動できなくても、アンタに攻撃はできるのよ？」

マフエツト「そう?…あ、そういえば、私のペットを紹介してなかったわね♪ちようどご飯の時間だから呼んでくるわ♪」

アルミ「……………急」

大蜘蛛「グオオ！」

1. 5メートルぐらいあるわね、この蜘蛛。

アルミ「いいタイミングで呼び出したわね。…ヘルフレイム！」ゴオオオ！
私は大きな火球を出す。

大蜘蛛「グオツ!?!」

マフェット「火!? そんな事したら…」

アルミ「焼け死ぬわね?…でも、私達をアンタのペットのご飯にしようとしたのは誰かしら?」

マフェット「うっ…」

アルミ「とつと開放しなさい。しないと、ね?」ニコツ

アオイ「うわあ、お姉ちゃんの写真が黒い…」

フリスク「相手がかわいそうになってきました…」

マフェット「わ、分かったわよ!」

シュツ…

アルミ「……さて、進むわよ」

アオイ「う、うん…」

マフェット「……」

アルミ「あ、アンタ。…はい」スツ

私は50Gほど出す。

マフエツト「え……？」

アルミ「蜘蛛達のエサ代でお金があるんでしょ？これぐらいなら、あげるわよ」

マフエツト「ありがとう……」

アルミ「どういたしまして。……じゃ」

スタスタ……

マフエツト「………なんで分かったんだろう」

ホットランド⑥

sideアルミ・マリオ

また道を進むと、大きな建物に着いた。

『MTTリゾート』

アルミ「…あら、サンズ」

サンズ「よう。今時間はあるか？」

アルミ「…ええ、あるわよ」

サンズ「…ちよつと話がある。お前だけ着いてきてくれ」

アルミ「分かったわ。…2人とも中で待ってて」

アオイ「はい」

サンズ「…行くぞ」

スタスタ…

♪ UNDER TALE — ITS RAINING SOMEWHERE ELSE
 サンズ「…さて、パピルスの件なんだが…ありがとな。お前のおかげで元気そうだ」
 アルミ「お礼はいらないわよ。…で、本題は？」

サンズ「やつぱりバレてたか。∴お前の過去を教えてください」

アルミ「過去？」

サンズ「ああ、主に生まれとか、子供の頃とか、今の仕事とか∴お前がココに来た理由とか、な」

アルミ「なるほど、分かったわ。私は∴」

それから私が教えられるだけの内容をサンズに教えた。

サンズは偶に笑ったり、驚いた顔をしたりと、表情を変えていた。

サンズ「∴教えてくれてありがとうがとな。じゃ、おいらはそろそろ行くぜ」

アルミ「ええ、また会いましょう」

スタスタ∴

ーそのころー

アオイ「このグラマーバーガー、美味しい！」

フリスク「アルミさんの分も買いますよう！」

ー数分後ー

アルミ「戻ってきたわよ」

アオイ「ん、おかえりお姉ちゃん。はい」スツ

アルミ「ハンバーガー？」

アオイ「うん、グラマーバーガーっていうらしいよ。そこのファーストフード店で買ったの」

フリスク「美味しいですよ」

アルミ「じゃあ、食べてみるわ」パクッ

…ん、美味しいわね。

アルミ「地下って美味しいもの多いわね」

アオイ「思った」

アルミ「食べながら進みましょう」

スタスタ…

建物の奥には扉があり、その先にはアルフィーが言っていたコアがあった。

私達はその中に入っていた。

ーコアのシーンは全部カット！ー

アルミ「この先が直通エレベーターね」

スタスタ…

進んだ先には思った通りメタトンが待ち構えていた。

メタトン「やっと来てくれたね、ニンゲンさん達。ついに君達と僕の決戦の時だ」

アルミ「そうね。もう一回ぶっ飛ばしてやるわよ」

ホットランド⑦

♪ UNDER TALE — DEATH BY GLAMOUR

side アルミ・マリオ

メタトンは人型になっていた。

メタトン EX 「さあ、死闘の時間だよ！」

…キーン！

メタトン EX のお披露目だ。

メタトン EX 「アクション！」

ブワッ！

ジグザグ型の弾幕が飛んでくる。

アルミ「……（戦いだけど、今は番組にいる。空気を読む必要があるわね）…ハッ！」

シユバッ！

できるだけきれいな動きで攻撃をかわす。

「おおおー！」パチパチ

客席から拍手が送られる。

視聴率 5000

メタトンEX「僕はみんなのアイドル！」

今度は…十字形の爆弾!?

アルミ「…野球バット！」スツ

エネルギーで咄嗟に野球バットを作り…

アルミ「…フンツ！」

カイイン!

爆弾をかつ飛ばした。

「ハハハハッ！」

観客は笑い出す。

視聴率 5678

メタトンEX「ええええく!？」

アルミ「私の番よ!…炎時！」パチン

…ポッ!

床が燃え始める。

メタトンEX「熱ッ!…くない?」

アルミ「対象しか燃やさないのよ。これで床も派手になったわね？」
視聴率 6666

メタトンEX「フツ、いいよこれは！…もつとアクションを！」
ブワッ！

前より多い量の弾幕が飛んできた。

アルミ「ハッ！フツ！セイツ！」シュツ、シュツ、シュバツ！
かたに弾幕をよける。

視聴率 7342

メタトンEX「カメラに向かってスマイル！」ニコッ

メタトンは表彰物の笑顔をする。

「キヤー、かつこいいー！」

観客はそれに興奮したようだ。

アルミ「…あ」

いい事思いついたわ。

アルミ「一発芸…」スッ

私はバックの中から紫色のパーカーを出し…

アルミ「…超速着替え！」シュツ！

時間停止を利用して着ているパーカーを着替えた。

「すげえ〜！」

…よし、成功ね。

視聴率 8846

メタトンEX「君にタマシイがあるだろ？僕のも見せてあげるよ！」キーン！

白黒輝くタマシイが出てきた。

アルミ「あら、それ自分の弱点をさらけだしてるようなものよ？」

メタトンEX「かまわない、僕はファンのために命をかける！君が王を止めようとしてるようにね！」

アルミ「そう。じゃあ、そろそろ決着をつけるわよ！」ボツ！

メタトンEX「いいだろう！くらえ！」

2人『ハアアアアツ…！』

…ドゴオン！

勝ったのは…

メタトンEX「かはっ…」

アルミ「…勝ったわ」

私だった。

視聴率 1 2 3 4 5

メタトンEX「いや、そうでもないみたいだよ。視聴率は驚異的な数値を叩き出した」
アルミ「そのようね」

メタトンEX「グッ…でも、僕はもうもたないみたいだ…」ギギギ…

アルミ「……………果たしてそうかしら？」スッ

メタトンEX「えっ…？」

…ポワン！

私はメタトンにエネルギーを分けた。

メタトンEX「…!!君は…優しいんだね…」

アルミ「…アンタの夢、叶うといいわね」

メタトンEX「…ああ」

アルミ「じゃ、私は行くわ」

スタスタ…

―数分後―

アオイ「お姉ちゃん、かつこよかったよ！」

フリスク「あの一発芸ってどうやってやるんですか!？」

アルミ「ああ、アレは……」

最後の回廊と衝撃の事実

sideアルミ・マリオ

コアで直通エレベーターに乗り、そこからしばらく道を進むと、夕焼けの日差しが差す廊下についた。

アルミ「……………」スタスタ

アオイ「……………」スタスタ

フリスク「…？」スタスタ

サンズ「…よう、久しぶりだな」

そこにはサンズが待ち受けていた。

サンズ「これからお前らにはここを通って良いかの裁判を行う。おいらがする質問にはいかいいえで正直に答えろ」

3人『……………」ゴクリ

サンズ「1つ目。モンスターを殺したか？」

答えはもちろん…

3人『いいえ』

サンズ「(ウソはついてないな) ……2つ目。王を殺すつもりはあるか？」
私達は止めに来た。殺さない。

3人『いいえ』

サンズ「(ほう、殺さずに止めるのか) ……最後の質問だ。この質問はアルミだけにする」
アルミ「私ね……」

サンズ「お前……時間を操る能力を持っているのか？」

アルミ「…はい、よ。時間停止が使えるわ」

サンズ「なるほどな。(時空の歪みからしてウソはついてないな) ……裁判の判決を下す」

3人『……』

サンズ「…通っていいぞ。お前らなら王を止めてくれるだろう。頼んだぞ」シュツ
そしてサンズは能力を使ってその場を去った。

アルミ「…進むわよ」

スタスタ…

回廊を出て、また進むと、分かれ道があった。

アルミ「この中に王がいるようね」

フリスク「……アルミさん、もう片方の道へ先に行ってみませんか？」

アルミ「…なんかあるの？」

フリスク「はい、なんか変な気配がします…」

フリスクは「まさか、ありえない」と言ってるような顔をしていた。

アルミ「…分かったわ。先にあっちに行きましょ。アオイはここで待ってて（なんかフリスクの態度がおかしいわね）」

スタスタ

道を進んだ先の部屋には…

アルミ「棺桶…？」

それぞれ違う色のハートが掘られてる棺桶が7個あった。

アルミ「まさか…！」

ズズッ

フリスク「…！！お…お…！！」

フリスクは赤いハートの棺桶の蓋を動かし中を覗くと、顔を青くした。

アルミ「フリスク…！！（やっぱり…！！）」

中には黄緑と黄色のセーターを着た少女の死体があった。

フリスク「キャラお姉ちゃん…！」

アルミ「なんでココにアンタの姉が…！！（あの幽霊は…）」

フリスク「お姉ちゃん…なんで、なんで…うわあああああ！」
アルミ「…!!」

他の棺桶の中にも、行方不明になってた少年少女達の死体があった。

アルミ「…フリスク、早く王を止めるわよ。もう被害を出さないように」

フリスク「でも、お姉ちゃんは…：…へ？」ナデナデ

アルミ「安心しなさい。あの世の広場、知ってるでしょ？」

フリスク「…あ!!」

アルミ「大丈夫、ここの子供達全員生き返らせてやるわ」

フリスク「…行きましょう」

アルミ「ふふっ、その意気よ」

そして戻った。

アオイ「…何かあったの？」

アルミ「黙秘しとくわ。…さあ、行きましょう」

王を止めに。

V S …… キャラ!?

side アルミ・マリオ

ーバリアの部屋ー

アズゴア「…来たか、ニンゲン達よ」

フリスク「…。王よ、ニンゲンのタマシイを奪うのはもうやめて下さい」

アズゴア「…。」

王はしばらく考える。

アズゴア「…すまない。だが…それは私を倒してから考えてやろう」

バスッ!

王は赤い三又槍を出し、構える。

フリスク「…アルミさん、ここは僕一人でやらせて下さい」

アルミ「…分かったわ」

…キーン!

♪ UNDER TALE | A S G O R E

アズゴア「さらばだ、ニンゲンよ…」
ボツ

王は火の弾幕を飛ばしてくる。

フリスク「……………」ササツ

それをフリスクは全てかわし…

フリスク「…ケツイナイフ」

…ズバツ!

アズゴア「な…ガハツ…!」

一撃で王を仕留めた。

—————
※アズゴアのパワーは1600ですが、この時のフリスクのパワーは2340です。

フリスク「…今すぐタマシイを開放して下さい」

アズゴア「…分かった。だが、私の罪は重い…。トドメを刺してくれ…」

フリスク「……………」

もちろん、フリスクは…

フリスク「だが断る」

見逃すだろう。

アズゴア「…!!」

王は目を見開いた。

アズゴア「ニンゲンよ…私は生きて罪を償う事にす…!!」ズバツ!

フリスク「!?」

突然王が何者かに攻撃された。

アルミ「な、まさか……」

ズバツ!

私も攻撃された。

アルミ「グッ……」

???「大丈夫、死なないよ。急所を外したからね」

アオイ「お姉ちゃん!大丈夫!」

アルミ「大丈夫よ、回復するから…王は下がって下さい」

アズゴア「分かった……」

フリスク「誰だ!そこにいるのは!!」

フリスクは叫んだ。

???「あら、私に気付かないの?」

シュツ

ずっと私達をつけてた幽霊はついに姿を見せる。

アズゴア「!!」

フリスク「!!」

キャラ「私よ。貴方の姉のキャラよ」

フリスク「ウソだ…！僕はさっきお姉ちゃんの死体をみたハズ…！」

アズゴア（姉弟がいたのか!?)

アルミ「…フリスク、今日の前にいるのも、棺桶の中にいたのも本物よ。アンタ…幽霊でしょ？」

キャラ「よく分かったわね、正解」

アルミ「そして、遺跡から私達をつけていた。しかも、図書館にあった『イビト山伝説の書』は、アンタの能力か何かで転送されたもの…意図的に私達をココにつれてきたのね」

キャラ「大正解。…でも、それを知ってて何故何もしなかったの？」

あら、面白い事言うわね。

アルミ「…フフフ、ハハハ…！」

キャラ「貴女、まさか血迷ったの？狂った？」

狂ってるのはアンタよ。

アルミ「いや、アンタはバカね…」
キャラ「…なっ!？」

Sアルミ「私に奥の手が無いとでも？」

ケ ツ イ 。

♪MULAストーリー—アルミのテーマ

sideアルミ・マリオ

Sアルミ「さて、アンタに私は倒せるのかしら？」

キャラ「ツ…舐めるな！」ズバツ！

キャラは赤い斬撃を飛ばしてくる。

Sアルミ「ま、私には効果無いんだけどね。吸収！ギョルルル！

キャラ「なっ!？」

Sアルミ「天空掌！」ズガアン！

キャラ「かはっ…」

Sアルミ「烈焼脚！」ドゴオ！

キャラ「ガフツ」

Sアルミ「極爆熱スクリュー！」ポオオオオ！

キャラ「ギヤツ…」バタン

Sアルミ「フウ、コンボ決まったわね」

キャラ「グツ…私は…」

Sアルミ「…：アンタは、何がしたいの？」

キャラ「…？」

Sアルミ「恐らくアンタは王の息子を殺したニンゲン達を恨んでる。…でももしも、殺したのがニンゲンじゃなかったら？」

キャラ「何を言つて「王の息子を殺したのはニンゲンじゃないと言ってるのよ」…な!?」

Sアルミ「ちよつとした方法で、王の記憶を読ませてもらったわ」

アズゴア「私の記憶を？」

Sアルミ「ええ。そこから犯人はニンゲンじゃないと判明したわ。…王の息子、アズリエルは、“黒いオーラ”を纏いながら死んだ、でしょ？」

アズゴア「その通りだが…」

Sアルミ「その黒いオーラを発するのは、ニンゲンではなく…グリッチという黒い生命体よ」

キャラ「!？」

フリスク「2年前に地球を襲つた!？」

Sアルミ「…で、キャラとアズリエルが死んだのは？」

アズゴア「…2年前」

S アルミ「これで証明完了よ。アズリエルは黒い生命体が殺した。ニンゲン達は家で避難してたハズよ」

キヤラ「そんな…」

アズゴア「私はなんて勘違いを…」

S アルミ「それでキヤラ、アンタはどうするの？このまま私が言ったことをウソだと思つて反撃するか、それとも…アズリエルや他の子供達と一緒に生き返るか。ケツイしなさい」

キヤラ「私は…」

フリスク「お姉ちゃん…」

キヤラ「生き返りたい！アズリエルと一緒に過ごしたい！うわあああん！」

キヤラは泣き出した。

S アルミ「ふふつ、よく言えたわね。その願い、叶えてやるわ。…バリアを破壊してアズゴア「だが、それをするには7つのニンゲンのタマシイが必要なハズ…」

元に戻る。

アルミ「それはすでにアオイが持つてるわ。アオイは数十個のタマシイが集まって変異し生まれたから。…アオイ、頼んだわよ」

アオイ「オーケー！ハアアツ…！」
ギユイイン…！」

アオイの周りにエネルギーが集まる。そして…

アオイ「ザ・ソウル！」

ドゴオン！

それを一気に開放した。

ピキッ、ピキッ…

アズゴア「!!バリアが…」

…バリン！

キャラ「割れた…！」

ついに、モンスター達を妨げるバリアは、跡形もなく破壊された。

その後。

sideアルミ・マリオ

モンスター達を開放してから数日経った。

最初はニンゲン達もモンスター達も私の行動に驚いていたけど、フリスクの力も借りて落ち着かせた。

ボツ：

キャラ「生き返った：!!」

フリスク「アルミさん：本当にありがとうございます!!!」

アルミ「お礼はいらないわよ。：これで任務完了ね」

そして私はモンスター達の仮住宅地へ向かう。

サンズ「よう、アルミ。お日様がキレイだな」

アルミ「そうね。：ウォーターソーセイジ屋、やってみれば儲かるかもよ?」

サンズ「かもな。だが：おいらはしばらくゆっくりしたいぜ」

アルミ「ふふつ、今はゆっくりしてなさい、平和なんだから」

サンズ「ああ、そうする」

ガチャツ。

パピルス「アルミ!!!遊びに来たのかッ!」

アンダイン「今は無理だ!家具の整理中だからな!」

アルミ「あら、そう?なら後日また来るわね」

パピルス「了解だッ、じゃあな!」

―数分後―

フリスク「お姉ちゃん、覚悟はできた?」

キャラ「ええ、できてるわ」

アルミ「…どしたの?2人揃って」

2人『アルミさん、弟子にして下さい!』

……ん?

アルミ「弟子?私の?」

フリスク「はい、貴女です!」

キャラ「弟子にして下さい!」

そして見事な土・下・座をする。

アルミ「ハア……いいわよ」

フリスク「えっ!」

キャラ「いいんですか!？」

キラーン☆

アルミ「いいって言うてるでしょ?…ただ、私の鍛え方はかなり厳しいわよ。それで
もいいかしら?」

2人『はい、師匠!!』

アルミ「師匠はダメよ。アルミさんと呼びなさい」

2人『はい、アルミさん!』

アルミ「ん、よろしい」

プルルルッ!

電話が来た。

ピッ

ケーティ『お姉ちゃん、2日ぐらい連絡来なかったんだけど大丈夫!？』

アルミ「大丈夫、ピンピンしてるわよ。ちよつと規格外な事をしてただけ」

ケーティ『規格外って、モンスターの一族を救出したって新聞やニュースで話題に
なってるよ!？』

アルミ「そうね、うん」

ケーティ『うんじゃない!!…ハア、これだから規格外なお姉ちゃんは…』

アルミ「その妹のアンタも充分規格外よ」
ケーティ『ちよつと、胃薬飲んでくる…』

ツー…

アルミ「…お疲れ」

地下の王国 完

次章のプロローグ

アルミ「ヒマですな〜」

フリスク「そうですね〜」

キャラ「アイス買ってきますな〜」

ピンポーン。

キャラ「は〜い」

ガチャツ

アルカ「ども。アルミ、いるかしら？」

アルミ「……急？」

アルカ「久しぶりね♪」

アルミ「なんでお盆じゃないのにいるのッ!？」

第2章 パンドラの箱!

え、お母さん!?

今は2053年、アルミは26歳、フリスクは12歳、キヤラは13歳です。

sideアルミ・マリオ

今、私達はかなり：

アルミ「ヒマですな〜」

フリスク「そうですな〜」

キヤラ「アイス買ってきますな〜」

ピンポーン。

キヤラ「は〜い」

キヤラは玄関を開ける。

ガチャツ

そこには衝撃的な人物がいた。

アルカ「ども。アルミ、いるかしら?」

既に死んだはずのお母さん、アルカ・マリオがそこにいた。

アルミ「……え？」

アルカ「久しぶりね♪」

アルミ「なんでお盆じゃないのにいるのッ!？」

アルカ「いや、それには深い事情があつて……」

アルミ「と、とりあえず入つて」

アルカ「ただいま♪」

……なんか、お母さん生前と比べて柔らかくなつてない？

―数秒後―

フリスク「アルカさん、去年のお盆ぶりですね」

アルカ「そうね。フリスクとキヤラはちゃんとアルミに鍛えられてるかしら？」

キヤラ「はい！おかげで毎日強くなつてます！」

アルミ「本人の前で言われると恥ずかしいんだけど……」

アルカ「それはよかつたわ。……で、本題に入るわよ。何故私がお盆以外の時期に地上に来れるかというと、私はそんな特権があるからよ」

アルミ「特権……？」

アルカ「そう。ま、その特権の事を説明するのはめんどくさいから省くけど」

アルミ「は、はあ……」

アルカ「…とここで、ルメは何処かしら?ちよつと会つて驚かしたいんだけど」

アルミ「ルメさんは自宅にいるわよ」

ルメさんの家は元々おじいちゃん(カステン)の家で、おじいちゃんが亡くなつてからルメさんが引き継いだ。

アルカ「へえ、ならカンタンに驚かせるわね♪」

アルミ「じゃ、頑張つてね」

アルカ「何言つてんの?アンタも来るのよ?」

アルミ「…:はあ、やっぱり?」

アルカ「アンタに見せたいものがあるのよ」

アルミ「…分かった。フリスクとキヤラは留守でいいかしら?」

2人『オーケーです!』

アルミ「なら、行つてくるわね」

アルカ「時間停止!」

←ブウウン…

私達は時を止めてルメさんの家に行くのであつた。

フリスク「…:あれ、これは?」

風幽、驚く

side アルミ・マリオ

今、ルメさんの家の前にいる。

アルカ「さて、驚かすわよ♪ほいさっさっ」

スウーツ

アルミ「すり抜けた!?!」

お母さんは壁をすり抜けた。すると…

…バタン!

ルメ「ちよつとアルミ!?!なんで先輩がいるの!?!お盆じゃないよね!?!」

アルミ「それは分かりません」

アルカ「ドツキリ大成功ね♪」

ルメ「ホント、なんんですか?!?!」

アルカ「カンタンな説明をするからとりあえず入りましょ」

スタスタ…

―数分後―

ルメ「…で、そんな特権を持つてる、と」

アルカ「そ」

ルメ「特権を持つてるのは理解しました。…でも、来た目的が分かりません」

アルミ「確かに。なんで来たのお母さん？ケーティとアオイがちょうど出かけてる時に」

アルカ「…アンタ達2人に見せたいものがあるのよ。時期的に考えてもちょうそいいし」

ルメ「それって？」

アルカ「ついてきなさい」

―地下室―

アルカ「ルメ、ここの地下室は何に使ってるのかしら？」

ルメ「倉庫ですね。幽霊仲間の物品を整理してます」

アルカ「…なるほど、通りでアンタも気付かなかったワケね」

アルミ「…何に？」

アルカ「まあ、見てなさい。まず、この壁に手を当てる」スツ

ルメ「……………」

アルカ「そして、ここで戦闘を開始する。新式弾幕戦！」

…キーン!

お母さんは戦闘を開始した。すると…

ゴゴゴゴゴツ…!

アルミ「!？」

壁がひとりでに動き出した。

ルメ「こんな仕掛けがあったとは…」

アルカ「さあ、進むわよ」

スタスタ…

たどり着いたのは、本が大量にある空間だった。

アルカ「ここは『パンドラの図書館』。この世界の色々なことが書かれている重要な文献が所蔵されてるわ」

ルメ「こんな場所が家にあっただんですね…」

アルミ「凄い…!」

アルカ「ただ、私が見せたいものはこれともう一つよ」

ルメ「もう一つ、ですか？」

アルカ「ええ、正確にはこの特定の書物ね」

お母さんは本棚から一冊の本を抜き出す。

アルミ「『パンドラの裁判官』……？」

アルカ「読んでみなさい」

アルミ「うん……」

パンドラの裁判官。

それは、地獄の閻魔すら超える裁判をするニンゲンのことである。

そんなパンドラの裁判官になるには、地獄の女神の了承を得る必要がある……。

その後の文は変ななんか見覚えのあるワケの分からないフォントで書かれていたため、読めなかった。

アルカの狂気

side アルミ・マリオ

アルミ「……………」

よく分からない内容だったわね。

アルカ「ま、最初は皆そんな顔するわよ。私もそうだったし」

ルメ「でも、なんでコレを…?」

アルカ「このフォント、読めるかしら?」

アルミ「ん? ええと、『そして、コレを読める人はパンドラの裁判官の素質がある』…さつき読めなかったのに、なんで!? さつきまで見覚えのあるよく分からないフォントだったの!?!」

アルカ「なるほど、ね…ルメ、アンタは?」

ルメ「読めません…」

アルカ「オーケー。で、アルミはこのフォントを見たことがあるらしいわね。何処で見たの?」

アルミ「サンズの父親の論文とか…」

確か、ガスター博士、だったっけ？

アルカ「サンズの、ね…（面識がある）このフォント、ウインディングといって、生まれつき読めるのはサンズの家系とパンドラ家、つまり私達の家系の一部だけなのよ」

アルミ「…はあ!？」

ルメ「じゃあ私は…」

アルカ「ルメは読むことができる一部のパンドラ家に入っていないってことね」

ルメ「……………」 or z

アルミ「…つまり、私はパンドラの裁判官ってヤツになる素質があるってこと!？」

アルカ「そういうことになるわね」

アルミ「マジか…あ、ところでなんでお母さんはこんなに知ってるの?」

アルカ「やっとその質問をしたわね。それは…」

：私自身がパンドラの裁判官だからよ」

衝撃の事実。

アルミ「：ほわーう」

もう驚く力が無いわね。

アルミ「じ、じゃあ、地獄の女神にも会ったの？」

アルカ「会ったわね。意外とフレンドリーな人だったわよ」

アルミ「改めてお母さんが規格外だと知ったわ：」

ルメ「：先輩ってホントにニンゲン辞めてませんよね!？」

アルカ「私は何処までもニンゲンよ。：アルミ、アンタはパンドラの裁判官になるの？」

アルミ「考えておくわ」

アルカ「ん、それがいいわ。ちなみに、ここに来れたのはパンドラの裁判官の特権ね」

アルミ「うん、もう気付いた」

アルカ「でしようね。後は……!!」

強い気配を感じる。

アルミ「…炎天掌!」

ズガアン!

「へえ…中々やるわね」

ルメ「…なっ!?!」

アルカ「出たわね…私の狂気」

ダークアルカ「出たわよ、私の主人格」

襲ってきたのは黒いパーカーと赤い目をしたお母さんだった。

アルミ「お母さんの狂気…!」

ルメ「いたんですね…」

アルカ「ええ。でも、だいぶ前、というかアドに会う前に分離したわよ」

☆説明しよう!

原作の「呪いの帽子」で、アルカは一度洗脳される。

その時出たのが、実はアルカの狂気であるダークアルカだった、という設定だ!

そしてマリオとルイーダが洗脳を解いた時、ダークアルカはアルカ本体と分離されたの

である!

「ダークアルカ「そうね…でも、今やっと思つたわ…！」
お母さんの狂気は懐からチエーンソーを出す。」

「ダークアルカ「私がアンタの体に乗っ取る…！」 ヴィイイン！」

VS ダークアルカ

♪MULAストーリー―ステルス・ロック

sideアルミ・マリオ

アルカ「倒してやるわ…新式弾幕戦！」

…キーン!

――
ダークアルカ「ふふっ…チエーンソーラン！」ダツ!

アルミ「ツ、紅炎結界！」ボオツ!

ギーン!

アルカ「ナイスよアルミ!ヘルフレイム!」

ゴオオオツ!

ダークアルカ「チツ、吸収!」ギユルルル!

互いに物理攻撃しか通用しない。

ルメ「出てきなさい、ダークルメ、グレイ!」

ギーン!

ダークルメ「キャハハ、遊ぼ！」

グレイ「刀に変身！」ポン！

アルカ「これで実質5対1ね。でも彼女のパワーは未知数、油断は禁物よ」

アルミ「分かっているわ。…烈焼脚！」ドゴッ！

ダークアルカ「グッ、調子にのるなッ！煉獄パンチ！」ドガッ！

アルミ「ガハッ…」

中々強い攻撃ね。

ダークルメ「キャハハッ！」シユッ！

ルメ「風斬・鎌鼬！」シユッ！

ダークアルカ「ハアッ！」サッ！

キーン！

刀（グレイ）とチェーンソーがぶつかり合い、火花が散る。

アルカ「煉獄パンチ！」ドゴオ！

アルミ「炎天掌！」ズガアン！

その隙に私とお母さんが左右から攻撃する。

ダークアルカ「ガッ…クソッ…」

アルカ「そろそろカタを付けるわ！天！」ドガッ！

ダークアルカ「かはっ…」

アルカ「創…」

ギユイイン…！

ダークアルカ「なっ!?!」

アルカ「…滅ッ！」

ドガアアアン！

ダークアルカ「ガアアアアアッ！」

アルカ「……………」

アルミ「今の攻撃でダークアルカは…」

ダークアルカ「ハア、ハア、グツ…」

…相当ダメージを受けたわね。

アルカ「今の攻撃でやられないのは流石に凄いわね。アンタそんなに私の肉体が欲し

いの？既に死んでるのに？」

ダークアルカ「……………私は…」

アルカ「仮に私を体に乗っ取ったとしても、天国に戻るからほぼ無意味よ。それでもいいのかしら？」

ダークアルカ「……………」

アルカ「それとも、アンタはココで自由に暮らすのかしら？」
ダークアルカ「!!」

アルカ「アンタは私の狂気。でも、私ではない。だから…アンタはアンタらしく生きれば？アンタ、私と違って体は死んでないし」

※「アルカ、生き返る！」で、同時にダークアルカも生き返ったが、グリッチに殺されたのはアルカだけなのでダークアルカはまだ生きてる。

ダークアルカ「…ココで暮らす」

アルカ「それでいいわ」

ダークアルカ「ありがとう…」フラツ

バタン

そしてダークアルカは気絶した。

アオイに子供!?

sideアルミ・マリオ

自宅に帰り、気絶したダークアルカをベツトに寝かせた後、私達はリビングで雑談していた。

アルカ「それで、マリオが…」

ルメ「えっ、マジですかwwww」

アルミ「ブハハツwwww」

ピンポーン♪

アルミ「ん、遅かったわね」

ガチャツ

アルミ「おかえり2人とも。何してた…え？」

アオイ「た、ただいまお姉ちゃん…」

??? 「……………」ギユウー

ケーティ「あはは…」

黒髪ロングの少女がアオイに抱きついていた。

アルカ「どうしたのアルミ…え」

ルメ「誰、その子？」

アオイ「え、えつと、どう説明すれば…」

???「おかあさん！」

少女はアオイにそう言う。

3人『Oh…』

ケーティ「あちやー…」

アルミ「…話は中で聞くわ。とりあえず入りなさい」

アオイ「う、うん…」

???「おかあさん、はいるの？」

アオイ「あ、うん、入るよ…」

スタスタ…

―数分後―

アルミ「アンタ、名前は？」

レイン「レイン！なまえはおかあさんからもらった！」

アルカ「へえ…さて、2人とも説明して」

ケーティ「（その前に何で普通にお母さんがいるのか説明して欲しいんだけど!?!）えつ

と、私達はきさらぎ駅で……」

「ただ今説明中」

ケーティ「……ということなの」

アルミ「まさかアオイと同じ生まれとはね……」

周期的にタマシイが集まってニンゲンが生まれるのかしら？

アルカ「つまり……私に孫ができたって事ね」

アルミ「あ、確かに」

レイン「おばあちゃん？」

アルカ「そ、アルカおばあちゃんよろ♪」

4人（うん、違和感しかない……）

※アオイはまだ18歳です。そしてレインは4歳です。どうしろと？

こうして、私は26歳でおばさんになるのであった。

……ケーティはまだ22歳ね。

次章予告

ラグトレイン

アルミ達がパンドラの図書館に行っていた頃、ケーティとアオイはきさらぎ駅に行つ

ていた。

そこで突然タマシイが集まりはじめる。

果たしてどうなるのか!?

お楽しみに!

おまけ

ノーア「私達最近出てないわね」

ルイス「だな。俺達同世代なのに…」

アドレーヌ「あ、でも次の次の章で大活躍するみたいだよ!」メタい!

キノ太郎「……………(俺、アルミと付き合ってる事を言った方がいいのか…?)」

ノーア「あーもう!作者!出てきなさい!」

天の声「どもー」

ルイス「出番をよこせ!」

天の声「現在進行系で出番をやってるぞ?」

ノーア「くっ、確かに…」

第3章 ラグトレイン

故郷へ帰ろう

sideアオイ・マリオ

今日は私の故郷、きさらぎ駅へ行く日だ。

ケーティお姉ちゃんと一緒に行く。

アオイ「楽しみ♪」

ケーティ「そろそろ電車が来るわよ。準備はオーケー？」

アオイ「うん、オーケー！」

ケーティ「乗るわよ」

―数分後―

『次は、きさらぎ、きさらぎです』

うん、計算は合ってたね。

―きさらぎ駅―

アオイ「フウ、ついた♪」

ケーティ「相変わらず歪んでるわね」

アオイ「私の部屋にレッツゴー！」

タタツ

私の部屋は最後来たときと同じような状態だった。

アオイ「うん、何も問題ないね」

後は、タマシイの数の点検かな？

ケーティ「…アオイ」

アオイ「どうしたの、お姉ちゃん？」

ケーティ「なんか変なエネルギーが充満してるわ」

アオイ「確かに…なんでだろ？」

ケーティ「一旦外に出てみましょう」

アオイ「うん…」

スタスタ…

ギョオオオ…

駅のホームではさつきまでなかったとてつもない量のタマシイがさまよっていた。

アオイ「これって…!？」

ケーティ「嫌な予感がするわ…」

アオイ「これはいつの…」

タマシイ観測……!?

アオイ「4年前……!？」

ケーティ「まさか、グリッチによって殺されてしまった人々のタマシイ……？」

アオイ「ありえるね……」

でもなんで今？遅すぎない？

ケーティ「もしかしたら、何かが原因で遅れてしまった、とか？」

アオイ「あー！」

ケーティ「原因を探しましょ！」

アオイ「うん！」

キキーツ……

2人『?』

今、金属音が……

ツーツ……

ケーティ「アレは……!？」

アオイ「電車？」

ブワッ!

2人『うわっ!？』

電車の中から大量のタマシイが吹き出した！

ケーティ「この電車は一体!?!」

アオイ「入ってみよう！」

ケーティ「ええ！」

タタツ…

ーラグトレインー

中は至つて普通の電車だった。

…人の代わりにタマシイが座っている事を除いては。

『次は、ききくらぎ、ききくらぎ…』

ケーティ「…は？」

アオイ「もういるけど…」

電車はそのまま出発した。

ー数時間後ー

ケーティ「……………」

アオイ「まだ着かないね…」

絶対…

2人『何かがおかしい…』

ケーティ「この電車、無人電車なのかしら？」

アオイ「多分そうだよ。きさらぎ駅へ行く時はいつもそうだし」

ケーティ「でも、絶対そうとは限らないわ。運転手室へ行くわよ」

アオイ「うん……」

『グオオオ……！』

2人『!?』

目の前で、黒い生命体が現れた。

黒い生命体「グオオオオ！」

ケーティ「犠牲者って、ニンゲンだけじゃないのね!?」

アオイ「ソウルブラスター！」

ドゴオオオ！

黒い生命体「グオオオ……」フツ……

コレはホントにやばいね……

仮面の少女

sideアオイ・マリオ

黒い生命体「グオオオ…」フツ…

ケーティ「あゝ あゝ めんどくさいわね！」

アオイ「お姉ちゃん、落ち着いて？」

ケーティ「できないわよ！この状況では！」

アオイ「まあ、確かに…」

今、私達は…

黒い生命体「グオオオオ…！」

黒い生命体に囲まれていた。

Yケーティ「もう、こうなったら…ユウキ覚醒！」カッ！

アオイ「えええ！？」

Yケーティ「蹴散らしてやるわよ！フェエエイ！」

ドガッ、ボガッ！

黒い生命体「グオオオオ…」フツ…

アオイ「付喪神って、物にタマシイが宿った？」

こころ「うん……」

ケーティ「……で、こころはなんでココに？」

こころ「最近生まれたから」

アオイ「なるほど……」

こころ「……」スッ

こころは付けている仮面を変えた。

こころ「私もついていていい？」

ケーティ「……」じー

アオイ「お姉ちゃん？」

ケーティ「……オーケーよ。アンタは悪い人には見えないし」

こころ「ありがとう」スッ

また仮面を変えた。今度は喜んでる顔だ。

アオイ「じゃ、行こっ！」

こころ「うん」

……無表情だから代わりに仮面で感情を表してるのかな？

スタスタ……

―数分後―

ケーティ「この扉の先が運転席よ」

アオイ「やつと降りれるね」

こころ「一週間ぶりの外…」

2人『急』

こころ「毎回停まってる時に寝ちやつて…」

ケーティ「そ、そう…」

アオイ（お茶目なのかな？）

ケーティ「ゲフンゲフン、さて、入るわよ！」

ガチャツ！

???「わーい、動いてる動いてる〜！」

ガチャツ

???「ん〜？」

3人『…急？』

運転席に座ってたのは…

??? 「だくれ〜？」

見た目が4歳ぐらいの少女だった。

ツインテールで灰色のパーカーを着ている。

ケーティ「……………」スタスタ

お姉ちゃんは無言で少女に近づき…

ポチッ

近くにあつた停止ボタンを押した。

キキーツ…

ツーツ…！

そして電車はようやく止まった。

そして、帰る。(200話突破！)

sideアオイ・マリオ

ケーティ「…で、アンタは誰？」

??? 「……………」

アオイ「お名前は？」

??? 「ないよ？」

こころ「まさか、生まれたばかり…？」

アオイ「私と同じ…？」

だからもう4歳ぐらいの見た目なんだ…

??? 「名前、ないんだ？」

アオイ「うーん…」

ココは電車…

電車…トレイン…

…あっ!!!

アオイ「あなたの名前は『レイン』！レイン・マリオよ！」

こころ(おお、シンプル…)

レイン「れいん…?」

アオイ「そう。レイン、私はアオイ。よろしくね」

レイン「よろしく…おかあさん!」ギョツ

3人『えっ?』

レイン「名前を付けてくれたから、おかあさん!」

アオイ「ええと、お姉ちゃん…」

ケーティ「…いいんじゃない?」

こころ「いきなり娘ね…」

アオイ「…まあいつか!よろしく、レイン」

レイン「うん!」ニコツ

そして4人で電車を降りた。

レインは背中に抱っこしている。

こころ「じゃ、私はちよつと旅をするわ。何処かで会いましょう」

ケーティ「ええ、また会おうわ」

そしてこころと別れた。

ケーティ「…ということなの」

アルミ「まさかアオイと同じ生まれとはね…」

周期的にタマシイが集まってニンゲンが生まれるのかも…？

アルカ「つまり…私に孫ができたって事ね」

アルミ「あ、確かに」

レイン「おばあちゃん？」

アルカ「そ、アルカおばあちゃんよろ♪」

4人（うん、違和感しかない…）

※アオイはまだ18歳です。そしてレインは4歳です。どうしろと？

アルミ「じゃ、晩飯作ってくるわ」

アルカ「ええ、頼むわ」

レイン「……？」

ケーティ「ああ、確かアオイの時も食べ物を食べたことがなかったわね。お姉ちゃん、

今日はラザニアでどう？」

アルミ「いい考えね、了解！」

スタスタ

そしてお姉ちゃんは台所に行った。

レイン「おかあさん、これから何するの〜?」

アオイ「夕飯を食べるのよ」

レイン「たべる?なにそれ〜?」

アオイ「それはお楽しみね♪」

ラグトレイン 完

次章予告!

月の一部を領地に行っている国、ニャン国。

そんなニャン国が突然キノコ王国などに宣戦布告してきた!?

始まる世界大戦。現れる地獄の女神。目覚める裁判官。

アルミ達は果たしてニャン国を止めることができるのかツ!?

パンドラの箱!

ラグトレイン

←4年後

にゃんこ世界大戦

お楽しみに!!

第4章 にゃんこ世界大戦

宣戦布告

sideアルミ・マリオ

アルミ「……これでよし」

私は毎日書いている「技の書」の今日の分を描き終え、一旦休憩を取る所だった。

アルミ「休憩の時食べるクツキーは美味しいわね……いつも美味しいけど」

レイン「アルミさん、何言ってるの？」

アルミ「なんでもないわよ」

ピンポーン！

アオイ「ん、はーい」

ガチャツ。

ミール「アルミ！大変よ！今すぐ署に来て！」

来たのはミールさんで、かなり焦った表情だった。

アルミ「ミールさん!?!分かりました！」ダッ

ミール「急ぐわよ！」ダッ

―数分後、警察署にて―

ハリー「来たか…」

キノピオ「……………」

ハリー総監もキノピオ所長も、シリアスな空気を出していた。

アルミ「何が、あつたんですか…?」

ハリー「…これを読んでくれ」スツ

アルミ「紙…?」

どれどれ…

『キノコ王国へ

貴様らに宣戦布告する。

3日後に、軍を率いてマイン国草原に來い。

來ないなら敗北とみなし、貴様らの領土を占領する。

精々いい軍を率いてくるんだな。

ニヤン国』

アルミ「ニヤン国からの宣戦布告!?!」

キノピオ「ブルームプラネット国、カメーン国、ソジツク国、マイン国、プププラン

ドにも似たような手紙が來たそうだ」

アルミ「なっ…!？」

ハリー「ニヤン国の住民は喧嘩っ早い戦闘民族のような集団だ。…恐らく本気で来るだろう」

アルミ「でも、私達は…」

平和第一にしているハズ…!

キノピオ「安心しろ。俺たちはあくまでも相手を戦意喪失させる事が目的だ。…心を折るのがお前は得意だろ？」

アルミ「確かに、そうですね…」

それが私の戦法だから…

ハリー「明日、各国の首脳を集めた会議を開く。キノコ王国の代表は…アルミ、お前だ」

アルミ「私!？」

ハリー「ああ、今までの業績から考えて、お前がするべきだろう」

私が、キノコ王国代表…

アルミ「…分かりました!」

キノピオ「ん、その意気だ」

セイダン「……………」

既に釈放され、王座に就いたセイダンは、ニヤン国からの手紙を読み終え考えていた。セイダン「…この国の代表は、????に任せよう。スカーフ、彼を読んできてくれ」スカーフ「はっ」シュツ

そして、次の日…

アルミ「……………」

フリスク「……………」

ノア「……………」

カービィ「……………」

「……………」

ハリー「今から、ニヤン国との世界大戦の作戦会議を始める」
会議が、始まった。

各国の代表

sideアルミ・マリオ

アルミ「フリスク、アンタが代表？」

フリスク「はい、どうやら僕の業績とかなんかで…」

ノーア「久しぶりね、アルミ」

アルミ「ノーア！久しぶりね。まさかココで会うとは」

ノーア「私も驚いたわよ」

カービィ「ども」

アルミ「あ、カービィさん、こんにちは」

カービィ「案の定僕が代表に選ばれたよ」

アルミ「なるほど…あら？」

「?????」
「やあ、こんにちは」

ノーア「アンタがマイン国の代表？」

ステイプ「その通り。僕はステイプ、よろしく」

アルミ「ええ、よろしく」

ガチャッ

ハリー「そろそろ会議が始まる。会議室に集まってくれ」

5人『はい!』

ー会議室ー

アルミ「……………」

フリスク「……………」

ノーア「……………」

カービィ「……………」

ステイプ「……………」

ハリー「今から、ニャン国との世界大戦の作戦会議を始める」

全員『よろしく願います』

カーメン2世「司会は私、カメーン2世がします。まずは、情報の確認です。キノピオさん、願います」

キノピオ「おう。敵軍はニャン国、戦場はマイン国草原と決められている。そして相手の兵力はおよそ5億だと思われる。以上だ」

5、5億!?

えげつない数字ね…

カメーン2世「ありがとうございます。次は意見交換です。戦略に提案がある人はいますか？」

早速発表ね。

アルミ「はい」スツ

カメーン2世「マリオさん、どうぞ」

名字で呼ばれるのは慣れないわね…

アルミ「私が思いついた作戦は、名付けて『捕獲作戦』よ。まず、ニャン国の住民達の好物であるキャットフードに麻酔を塗ったものを大量にばら撒く。バカだからすぐに食らいついて眠るハズよ。その次に私が時間停止をし、その間に捕獲部隊が縄で敵軍を縛り捕獲する。そして最後に、残った戦力は力で潰す。以上が作戦よ」

ステイブ「……え？」

フリスク「流石アルミさん、僕達じゃ考えられない作戦を思いつく！そこにしびれるあこがれるウ！」

1人ジョジョのマネをしてる弟子がいるわね。

ノーア「うん、そんな事を言うと思ってたわ」

ハリー「変な内容だが、いい考えだ。少し改変して採用する」

よし!!

カーメン2世「最後に、作戦の改変です。どういった箇所を改変するんですか？」
ハリー「アルミは時間停止をする必要はない。強いて言うなら炎時を使い、対象を敵にすればいい」

アルミ「あ、確かに…」

時間停止だと体力が10倍速く減るというデメリットがあるし…

カーメン2世「以上で、作戦会議を終わります」

全員『ありがとうございます』

開幕

side アルミ・マリオ

アルミ「…久しぶりね、影のお母さん」

ダークアルカ「そうね。相手の戦意を喪失させるとはいえ、これは戦争。…腕が鳴るわね」

アルミ「頼むわよ」

ダークアルカ「任せなさい」

ゴオオオ…

ハリー「…来たな」

敵軍の軍艦が空からやってきた。

ルイス「アレがニヤン国軍…」

キノ太郎「親父の予想通りの数だな…」

アドレーヌ「空が埋まってる…」

キノピオ「指揮は俺がとる。誰も死ぬなよ？」

アド「人はそれをフラグというのよ？」

キノピオ「だな。…そろそろか」

敵兵「ニヤニヤーン！」

ドガン！

敵兵が一匹空砲を撃った。

ノーア「こつちも空砲よ。…ハッ！」

ドガン！

ハリー「…よし」すうーっ

ハリー総監は息を吸い：

ハリー「開戦！全軍突撃！！」

そう叫んだ。

「うおおおおおおお！」

「ばら撒けえ！！」

ピューン！

開発した『麻酔入りキャットフードマシンガン』を敵軍に向かって撃ちまくる。

「ニヤッ!?!(ご飯!?)ニヤーツ!」パクッ

「ニヤニヤッ!?!ニヤツ!(おい!?!アホかお前!)」

「ニヤ?ニヤ…:(ん?なんか眠く…)」バタン

：うん、ちゃんと効果はあるようね。

アルミ「私達も行くわよ！」

仲間達『了解！』

アルミ「天空掌！」ズガアン！

ルイス「サンダーラッシュ！」ビリビリドゴォ！

アドレーヌ「ザ・ワールド・ドローペイン！」バシユツ！

ノーア「ヘイルストーム！」パキイン！

キノ太郎「くらえええい！麻酔銃！」ドドドドツ！

ケーティ「ブレイブカッター！」ズバツ！

アオイ「ソウルブラスター！」ドガーン！

フリスク「ケツイナイフ！」ヒュン！

キャラ「ケツイソード！」シャキン！

ルメ（グレイ刀装備）「風斬・鎌鼬！」ズバアツ！

ダークルメ「きやははっ！」ドガツ！

それぞれの攻撃で敵軍を攻める。

「ニッヤハッ！（強すぎるッ！）」

「ニヤニヤニヤニヤッ！（なんなんだこいつら!?!）」

アルミ「このまま押し込むわよ！」

全員『おお！』

その光景を遠くから、アルカと：頭に地球みたいなものに乗せ、月と赤い惑星のよう
なものをチェーンで繋いで持っている女性が見ていた。

「：アレがアルミ？」

アルカ「そうよ。どうかしら？」

「中々いい人ね。月のクズどもを蹴散らせるかもよん？」

アルカ「だったらいいわね」

「パンドラの裁判官、彼女がなりたかったら許可するわよん」

アルカ「ま、それはアルミがなりたかったら、の話だけどね？」

「そうねん♪」

????????????????????

Welcome hell

♪MULAストーリー―ステルス・ロック

sideアルミ・マリオ

「こんにちは、と言うべきかしらん？」

目の前に地獄の女神がいます。

…どうしてこうなったの？

―数時間前―

ハリー「よし、進軍だ！」

アルミ「了解！ハアア！」ダッ

「ニヤハー！（くらえー！）」

敵兵は大砲を撃ってきた。

アルミ「(ちようど走ってるし、この技ね) …ゴットハンドX！」ガシイン！

大砲をがっちりキャッチした。

「ニヤニヤッ!? (なんだと!?)」

アルミ「返してやるわよ！神…爆熱スクリュー！」ドゴオ！

「ギャフン！」

ケーティ（なんか敵がかわいそうになつてきた…）

しかし、突然…

パカッ

アルミ「ゑ」

足元に穴が空いた。

アルミ「落ちるゝ!？」

ノーア「アルミ!？」

ダークアルカ「アレは、アルカの…」

———
という感じで、この空間に飛ばされた。

アルミ「ここは…」

アルカ「久しぶりね、アルミ」

アルミ「お母さん!?!ここは何処!?!」

ア?????アルミ「えつと…」

アルミ「…!」

お母さんの隣に、惑星みたいなものを頭と両手にチェーンを繋いでのせ、「Welcome

まさか地獄の女神に直接きかれるとは…

アルミ「“今の所”、ないわ」

ヘカーティア「なるほど…面白いわねん♪」

ヘカーティアはくすくすと笑いだした。

アルミ「……？」

ヘカーティア「分かった、話はこれだけよん。じゃ…頑張りなさいよん♪」

アルミ「え、ええ…」

アルカ「じゃ、健闘を祈るわ！転送！」

パカッ

アルミ「またコレ〜!？」

ヒユウウ…

スタツ

フリスク「アルミさん!?!今空から…」

アルミ「ちよつと変な話があっただけよ。戦況に変化はあったかしら？」

キャラ「特にはないですね。犠牲者も今の所ゼロです」

アルカ「それは良かったわ」

オリジナル・タイム・トリオ

sideアルミ・マリオ

アルミ「パピルス、今よ！」

パピルス「了解だッ！青い骨！」

シャッ！

「ニヤッ!? (動けない!?)」

パピルス「ニヤハハ！どうだッ！」

「逮捕だ〜！」

グルグル

「ニヤ〜！（クソがよおお〜）」

アルミ「その調子で相手の動きを止めなさい」

パピルス「分かったッ！この偉大なるパピルス様に任せろッ！」

アルミ「ええ、任せるわ！」ダッ

私は次の部隊に移動する。

国の代表だから戦況を把握しなきゃいけないのよ。

―数十秒後―

ルメ「ストームゾーン！」ビュウウン！

「ニヤハツ……！（グハツ……！）」

グレイ「オラッ！」ドゴッ

グレイはエネルギーの玉を蹴る。

ダークルメ「うおおおお！」ダダダ

ダークルメはそれを追いかける……

ダークルメ「ブラックドーン！」ドガッ！

蹴りをいれると、闇の玉になって敵に襲いかかる。

ギユオオオ……！

アルミ「クオリティー高いわね〜」

「ニヤッ！（隙あり！）」ドガン！

アルミ「むっ、ゴットハンドX！」ガシイン！

「ニヤッ!?（なにい!?!）」

アルミ「炎時！」ボオッ！

足元が燃え始める。

「ニヤッ……ニヤニヤニヤニヤニヤ……」（さ、このNEKOがあーッ!）「ボオオオ

アルミ「おっと、逮捕よ」

「ニャー（なん、だと…）」

さて、次の部隊ね〜

ルメ「私もついていくわ。ココはダークルメとグレイに任せる」

アルミ「なるほど、分かりました」

―数分後―

???「おーらあー！」ドドドドツ！

黄色い服にオレンジ色のネクタイ、白いズボンを履いている狼のような耳が生えたモンスターが銃撃をしていた。

「ニャ…（ガッ…）」バタン

しかも命中率が高い。

アルミ「アンタは…」

???「おう、アルミさんか、こっちは優勢だぜ」

ルメ「一人で戦ってんの？」

ザクロ「いや、他のヤツらは後ろで銃撃してるぞ。ちなみに俺はザクロだ、よろしくな」

アルミ「ええ、よろしく。ところでザクロ…」

♪MULASTORII—Original time trio

「ニヤニヤーツ! (困んだぞ!)」

「ニヤハハツ! (もう逃げられまい!)」

アルミ「アンタ蹴散らす事って、できるかしら?」

ザクロ「ああ…得意分野だ」

ルメ「ならオーケー」

アルミ「…行くわよ!」

2人『ああ! (ええ!)』

ザツ!

(本来別世界にいるはずの、3人のオリキャラが揃った…)

アルミ「天空掌!」ズガアン!

ルメ「超風神の舞!」ビュウウン!

ザクロ「ブレットストーム!」ドドドドツ!

「ニヤアアア! (ギヤアアア!)」

「ニヤニヤニヤニヤツ!?! (なんだよこいつら強すぎだろ!?!)」

そのまま敵軍の5%ほど倒した。

建物が現れた！

sideアルミ・マリオ

アルミ「炎天掌！」ズガアン！

ルメ「ウインドブラスト！」ビュウウン！

ザクロ「ブレットトラッシュュ！」ドドドドツ！

「ニャー！（ギャアアアア！）」

「ニャニャツ…ニャツ！（こうなったら…これだ！）」

ポイツ

敵兵は何かを投げてきた。すると…

ボワンツ！

アルミ「フア!？」

ルメ「建物!？」

ザクロ「いきなり出てきやがった…」

なんか…龍玉の投容器みたいね。

（漢字を訳してみてネ）

アルミ「てか、五重塔？」

ルメ「とりあえず入りましょ」

ザクロ「だな」

スタスタ：

ー1階層ー

「ニヤニヤッ！（敵だー！）」

「ニヤー！（3人いるぞー！）」

…あれ？

アルミ「ルメさん、なんで見えてるんですか？幽霊なのに…」

ルメ「ん？私生きてるわよ？」

アルミ「…あ？」

ルメ「気付かれないようにステータス保存ドリンクを作って生き返ったのよ。もう3年ぐらい前の話よ？」

アルミ「マジですか…」

ザクロ「喋ってるヒマはないみたいだぜ！…オラア！」ダンツ！

「ニヤ〜…」バタン

アルミ「そのようね…」

―数分後―

敵は大量にいたが、全員弱かったのでカンタンに倒せた。
ルメ「次は2階層ね」

スタスタ：

―2階層―

ドガン！

3人『!?!』

「ニヤハハ―！ニヤニヤツツ！（フハハ―！くらえーツツ！）」

ドガン！

アルミ「どうやら全員バズーカを装備してるようね」

ザクロ「マジかよ…」

アルミ「マジよ。ま、問題ないわ」

「ニヤ―！（おりゃー！）」

ドガン！

アルミ「吸収！」ギュルルル！

バズーカの光線を吸収した。

「ニヤツ!?（ダニイ!?!）」

ザクロ「凄え……」

アルミ「かーらーのー?…光線!」

ドガーン!

「ニャー! (グハッ!)」ボタン

ルメ(私の出番はないようね…)

ザクロ「オラオラオラオラオラオラオラオラア!」ドドドドツ!

(完全にジョジョネタ)

そのままバズーカの光線は吸収しながら、敵兵を倒していった。

ー3階層ー

3人『……………』

ギユルルル!

目の前は、チェーンソーの迷路。

ポオオオ…

床は燃えている。

バチバチツ!

壁には電気が走っている。

アルミ「チェーンソーに当たらなければ大丈夫ね…時間停止!」

←ブウウウン…

ルメさんとザクロを運んで、道を進む。

…行き止まりがある。

『問題！』

アルミ「ん？」

『イナイレのアニメで最初に出てきた技は？』

アルミ「百烈シヨット」

『正解！』

ゴゴゴツ…

道が開いた。

アルミ「……………」

また塞がれている。

『問題！イナイレGOのアニメで無頼ハンドは何回出てきた？』

アルミ「2回。両方失敗してるわね」

『正解！』

ゴゴゴツ…

―数分後―

アルミ「ついた…再生！」

→ブウウウン…

ザクロ「……ん？」

ルメ「もう進んだようね…」

アルミ「進むわよ」

ザクロ「お、おう…」

勝利を手に入れる！

sideアルミ・マリオ

ー4階層ー

アルミ「今度は…」

「ニヤハッ！」シヤキン！

ザクロ「剣士の集団みたいだな」

「ニヤッ！（オラッ！）」シユッ

ルメ「真剣白刃取り！」パシッ

「ニヤニヤ!?!（なんだと!?!）」

ルメ「フンッ！」バキッ

アルミ「えー…」

ルメさんは剣を折った。素手で。

ザクロ「凄い腕力だなおい…」

ルメ「折れば戦えないでしょ？手っ取り早いのよ」

アルミ「まあ、確かにそうですね。…炎時！」ボオッ！

ザクロ「うおっ、床が燃えて…」

アルミ「対象だけ燃やす技よ」

「ニャアアア!ニャニャー!」(ギャアアア!燃えるー!)

ザクロ「なるほどな。…千撃弾!」ドドドドッ!

「ニャフン!」(ギャフン!)「バタン

ルメ「せいっ!」バキッ!

「ニャー!」(あー!)

―数分後―

「ニャニャ…(もう、ムリ…)」バタン

アルミ「ふう、多かったわね」

ザクロ「多分次が最後だろうな」

ルメ「行くわよ」

スタスタ…

―5階層―

??「待ってたよ…」

いたのは銀髪の少年だった。

月斗「僕は月斗。この五重塔の…ボスみたいなヤツさ」

ザクロ「ねこじゃないんだな」

月斗「こつちの事情でね。：話はここまでにしよう」

アルミ「そうね。：新式弾幕戦！」

：キーン！

♪ M U L A ス ト リ ー | S T M P W Y F A (S o n g
 a y W h e n Y o u F i g h t A r u m i)
 T h a t M i g h t P l

アルミ

ザクロ vs 月斗

ルメ

アルミ「先手必勝よ！天空掌！」ズガアン！

月斗「ムーンガード！」パキツ！

ギーン！

アルミ「へえ、防いだとは」

月斗「君も中々強いじゃないか：ムーンフォース！」

ギュルルル！

月斗の周りにエネルギーが集まる。

ザクロ「おい、これって結構ヤバいんじゃないか!？」

ルメ「あの程度なら大丈夫よ、多分」

月斗「ハアッ!」

ギユウウン!

アルミ「おお…吸収!」ギユルルル!

…!?

アルミ「吸収しきれない!？」

月斗「そのようだね!フツ!」ドゴツ

アルミ「グッ…」

まさか、エネルギー攻撃じゃない…?

月斗「僕が使うエネルギーは霊力じゃないのさ」

アルミ「…!?!」

なるほど、そういうことね。

ニンゲンやモンスターが使うエネルギーは霊力、妖怪やアンデット(マイン国のゾンビやスケルトン)が使うのは妖力…

アルミ「アンタは、魔力…?」

月斗「その通り。よく分かったね」

アルミ「フツ、分かればもう問題ないわ！ヘルフレイム！」ゴオオオツ！
月斗「なら僕も…ムーンフォース！」ギョルルルル！

火球とエネルギー弾がぶつかりあう。

ギョオオオオ！

ルメ「互いの強さがよく分かるわね…！」

ザクロ「凄え…！」

月斗の正体

sideアルミ・マリオ

アルミ「ハアアアアッ！」

月斗「うおおおおお！」

…ドガアアアン！

爆発が起きた。

ザクロ「!？」

ルメ「エネルギーが衝突したようね」

アルミ「やるわね…」

月斗「君こそ…！」

ザクロ「俺ら、まさか観客か？」

ルメ「いま気付いたの？」

ザクロ「マジかよ…」

アルミ「神爆熱スクリュー！」ゴオオオツ！

月斗「ムーンガード！」ピキッ！

攻撃は防がれた。

アルミ「……………」

吸収はできない。攻撃してもヘルフレイム以外は防がれる。なら…！

アルミ「物理攻撃で倒すわ！天空掌！」ズガアン！

月斗「クツ…！」

効いてるようね。

アルミ「ハアツ…烈焼脚！」ドゴツ！

月斗「グハツ、このっ…！ムーンフィスト！」シユツ

アルミ「遅い！」サツ

月斗「クソツ、近接戦闘は苦手なんだよ…！」

アルミ「へえ…なら速攻で倒すわ！天！」ドガツ

月斗「ガハツ!？」

アルミ「創…」ギユイイン…

霊力と神力でできた巨大な剣を創る。

…何故神力が使えるのかって？

キノコ王国の住民…どこるか全世界から信仰されてるからよ。神力は信仰が原動力だし。

アルミ「…滅ッ！」ズバアッ！

月斗「ガ、フッ…」バタン

アルミ「…私の勝ちよ」

ルメ「お疲れ様、アルミ」

ザクロ「凄かったぜ！」

アルミ「ハア、久々に結構強い相手と戦ったわね」

月斗「グッ…」

アルミ「あら、まだ意識あつたの？」

月斗「僕の負けだ、もう攻撃しない。こいつを、渡しておくよ…」ジャラ
ルメ「鍵？」

月斗「ニヤン国軍本拠地の鍵だ」

アルミ「なっ!？」

月斗「実はね、僕はスパイなんだよ」

ザクロ「なんだと…!？」

月斗「ほら、これが証拠」スッ

アルミ『『ブルームプラネット警察』…本物ね』

月斗「これを渡しておく…頼むよ」

アルミ「ええ、任せなさい」

月斗「ありがとう…しばらくココで休むよ」

アルミ「分かったわ、じゃ」

そして私達は建物から出ていった。

side ケーティ・マリオ

ケーティ「しんどいわねコレ！」

「こころ「でしようね」

アオイ「多い！多すぎる！」

「ニヤハハ！（くらえ！）」ブンツ！

ケーティ「あゝあゝ面倒くさいわね…！ウイザーインパクト！」

ドガアアアン！

2人『!?!』

「ニヤァー！（ギャー！）」

ケーティ「…あ、やべ」

アオイ「お姉ちゃん…今の技、何!?!」

ケーティ「魔術師の技よ。ネクロンに教えてもらったわ」

「こころ「いつの間に……」
ケーティ「とりあえず、このまま倒すわよ！」
2人『う、うん！（え、ええ）』」

前世代組の活躍

♪Deltarune Chapter 2 | BIG SHOT

side ダークアルカ・マリオ

ダークアルカ「煉獄パンチ！」 ドゴオツ！

「ニャッ (ギャッ)」 バタン

カービィ「容赦ないね…」

ダークアルカ「そりゃそうでしょ、敵なんだから」

カービィ「確かにそうだけどね…」

「ニャー！ (オラァー！)」

カービィ「ソード！」 ズバッ

「ニャフン！」 バタン

ダークアルカ「アンタも容赦ないわよ？」

カービィ「いやいや、煉獄パンチを顔面に直撃させるダークアルカに言われたくないよ!？」

ダークアルカ「ん、今なんて？」 ボオオオ

カービィ「何でもありません」

ダークアルカ「よろしい」

ノリオ「…2人は元気そうで何よりですね」

ルイーダ「僕達はもう老人だよ!？」

ダークアルカ「あ、そうでしたね、おじいちゃんww」

ルイーダ「おい」

ノリオ「まあ、孫がいそうな年齢なのは事実ですし。とりあえず…」

「ニヤハハ…」

ノリオ「こいつらをとつと倒しましょう」

ルイーダ「だね。サンダー！」ピリピリ!

「ニャアアア！」

ノリオ「くらいなさい…麻醉銃！」ドドドドツ!

そこはバズーカじゃないのね。

「ニヤ…」バタン

カービィ「ソード、3連発！」ズバズバズバツ!

「ニヤツ、ニヤツ、ニヤフン！」バタン

ダークアルカ「煉獄パンチ！オラオラオラア！」ドゴドゴドゴツ!

「ニヤハー！」 ヒューン！

よし、この調子ね。

side フリスク・ユメミル

フリスク 「お姉ちゃん」

キャラ 「…なに？」

フリスク 「何で僕達出番が少ないのかなあ!? アルミさんの弟子だよね!」 メタい!

キャラ 「作者の都合らしいわよ?」 お前もメタい!

フリスク 「ハア…このストレスを相手にぶつける! ハアツ!」 ズバツ!

「ニヤツ!」 バタン

キャラ 「いい考えね、採用!」 ドゴツ

「ニヤツ…」 バタン

2人 『ケツイ大剣!』

ズバアツ!!

「ニヤー!?! (なんだこいつらー!?!)」

「ニヤニヤツ!ニヤツ! (強すぎる!一度撤退だ!)」

ダダツ…

敵兵は逃げ出した。

シユツ

「ニヤ? (え?)」

フリスク「おつと、逃さないよ?」

「ニヤ… (^ o ^)」

その後フリスクとキヤラが戦った所ではボコボコにされた敵兵の集団が倒れていたという。

「ほう…」

キヤン国の王で戦争の首謀者、キングニヤンコは戦況を見ていた。

キングニヤンコ「こつちが負けてるニヤンね。でもこちらには巨大兵器という味方がついてるニヤ。…兵器を1つだすニヤツ!」

「ニヤニヤツ! (了解!)」

ガラガラガラ…

キングニヤンコ「ニヤハハ…絶対この戦争に勝ち、乗っ取ってやるニヤツ!」

そしてキングニヤンコは悪役の笑い声を上げた。

巨大兵器①

sideアルミ・マリオ

ゴゴゴツ…

アルミ「…何の音？」

ザクロ「なんか、大きい何かが来るぞ」

ルメ「え、まさか…」

ズシーン！

アルミ「うわあ…」

巨大な武器が現れた。

…大砲ね。

ルメ「これくらったら流石にヤバいわね」

シユウウウ…

ザクロ「ツ、逃げるぞ！」

アルミ「時間停止！」

←ブウウウン…

離れて、大砲を上に向けて、と。

アルミ「再生！」

→ブウウウン…

ザクロ「うおっ!？」

ドガン!

大砲から巨大な玉が飛び出す。

玉は雲を突き抜け、飛んでいく。

ルメ「うん、かわして正解だった「シユウウウ…」…ゑ」

ドガン!

こっちに向かって飛んできた!？」

アルミ「ゴットハンドX…W!」ガシイン!

両手のゴットハンドXで大砲を止める。

アルミ「うおおおおお！」

シユウ…

ザクロ「止めやがった…!」

ルメ「ヤバいと思ったのは杞憂だったようね」

アルミ「…で、これでどうするんですかね？」

ルメ「さあ？ 天空掌で飛ばせばいいんじゃない？」

アルミ「確かに。…天空掌！」ズガアン！

ヒユウン…

玉は飛び…

ドゴオ！

大砲に激突した。

アルミ「…頑丈な大砲ね」

少しヒビが入ったぐらいだった。

シユウウウ…

ザクロ「また飛んでくるぞ！」

アルミ「そのようね。…ハッ！」

ビリビリ…

♪M U L A ストーリー—アルミのテーマ+M E G A L O V A N I A

Sアルミ「スーパー化！」

ドガン！

来たわね…！

Sアルミ「炎天掌・青！」ズガアアン！

ヒュウン!

ドゴオ!

ルメ「直接跳ね返したわね」

ザクロ「あれがスーパー化か…」

―数分後―

しばらく同じ作業を繰り返した。すると…

ガチャガチャツ…

大砲はなんと変身を始めた!?

Sアルミ「フアツ!?!」

ギユイイン!

ルメ「大砲マシンガン?」

Sアルミ「マジですか…?」

ドゴドゴドゴツ!

ザクロ「3連続で来やがった!」

Sアルミ「青炎結界!」ボオツ!

青い炎でガードする。

シユウ…

S アルミ「止めたわね。さて…」ボオオオ…
足に火をつけ、力をためる。

S アルミ「嵐爆熱ハリケーン…！」ドゴオオツ！

大技で大砲を蹴り飛ばす。

ドガン！

3つとも大砲マシンガンに直撃し…

ちゅどーん！

大砲は爆発し破壊された。

アルミ「…ふう」

ルメ「お疲れ」

ザクロ「……………（これがアルミ・マリオの力か、間近で見るとホントに凄え…）」

アルミ「さて、仲間達に加勢するわよ！」

2人『ええ！（おう！）』

—————
キングニャンコ「ニヤ、ニヤンだつてえ〜!？」

キングニャンコは驚いていた。

キングニャンコ「大砲がこうもあつさりと…おのれ…」

ザクロのターン!

side アルミ・マリオ

時間もそろそろ夜になってきた。

アルミ「ニヤン国軍は夜だからといって引き上げるとは限らないわ。どんな手を使っても勝とうとするハズよ。だから、夜行性のモンスターや妖怪達、夜も動ける人達に領域の見張りをお願いするわ」

『了解!』

アルミ「さて、解散!」

『失礼します!』

そろそろ…

フリスク「アルミさん、お疲れさまです」

アルミ「ええ…今日は被害が無くて良かったわ。明日もこの調子で戦意喪失するまでやるわよ、いい?」

キャラ「はい!」

sideザクロ

.....。

ザクロ「今日は満月か」

いいタイミングだぜ。

ザクロ「狼化した状態で戦えるとはな……！」

アルミさんから頼まれた見張りの任務、しつかりこなしてやる！

ルメ「無理はしちゃダメよ？」

ザクロ「分かっている。お前こそ幽霊じゃない事を忘れるなよ？」

ルメ「そうね」

ザッ、ザッ……

ザクロ「……………」

耳で足跡を聞き分ける。

アレは味方だな。

……………！

ザクロ「来たぞ」

ルメ「オーケー」

スチャッ

愛銃を構える。

ザクロ「ガーネット恐弾！」

ズドツ!

「ニヤツ?!ニヤ…(なっ?!意識が…)」バタン

ルメ「風斬・鎌鼬！」ズバツ!

「ニヤハツ…(ガハツ…)」バタン

ザクロ「ルメ、俺は狼化してるし近距離で行くぜ」

ルメ「なら私は援護するわ」

ザクロ「おう…任せた！」ダツ

獲物^{敵兵}は狩^{倒して}つてやる…!!

ザクロ「くらえ!八つ裂き!」

ズシヤツ!

「ニヤニヤニヤ?!(武器が切り刻まれた!?)」

「ニヤ、ニヤツ!!(に、逃げろー!!)」

シユツ

ザクロ「逃さねえよ、バカども」

「ニヤ…(ヒツ…)」

ザクロ「グレート・イン・ウルフツ！」

ザシユツ！

「ニヤハツ…」バタン

ザクロ「グルルル…まだいるようだな…」クンクン
周りから匂いがする。

ザクロ「ルメ、お前から5メートル先にいるぞ」

ルメ「了解。…ハアツ！」ドゴツ！

「ニヤ…（バレた…）」バタン

後は、前方にいるな。

「ニヤハハ、ニヤニヤツ！（フハハ、鎧をつければ問題ない！）」

ザクロ「鎧か…」

なら、俺も必殺技を使つてやる。

ザクロ「ガルルルツ…！！」ギユイイン…！！

爪や右手にエネルギーをためる。

ザクロ「必殺…残虐殺！」シャツ！

…ザシユツ！！

赤い斬撃が鎧を削った。

「ニヤツ!? ニヤハツ…! (なんだと!? ガフツ…!)」バタン
…………。

ザクロ「これで全員だな」

匂いも音もなくなつた。

ルメ(かっこよかった…)

戦時の飯、クッキー

side アルミ・マリオ

ザクロ「任務完了だ」

アルミ「お疲れ」

ザクロ「何時間か寝てくるぜ」

スタスタ

アルミ「ルメさんは大丈夫なんですか？」

ルメ「ええ、ダークルメが寝てるから大丈夫よ」

ああ、睡眠時間はシンクロしてるんだったわね。

アルミ「そろそろ来るわね…」

ルメ「何が？」

アルミ「私の大好物ですよ」

ルメ「ええ…？」

ガタン。

「はい、戦時でも来るヨッシーのクッキーだよ！」

ルメ「ええ…（困惑）」

アルミ「あ、買いますー！」タタッ
行列が並んでた。

でも、最終的に買えたのでよし。

アルミ「美味しい♪」

これで今日はフルパワーで戦えるわね！

―数分後―

アルミ「……………」

ハリー「全軍、突撃イッ！」

「うおおおおおおー！」

ダダダダダダッ！

アルミ「ハアツ…！」ボオオオツ…！

久々にあの技を使うわ。

問題：どの技？

① 煉獄パンチ

② ブーストダッシュ

③ ファイアパンチ

正解は…

アルミ「神…ブーストダツシユ！」ダダダダダダツ！
足に火をつけ走りまくる。

「ニヤ〜！（熱い〜！）」

「ニヤニヤニヤ〜！（速すぎだろ〜！）」

アルミ「かーらーのー？神爆熱スクリユー！」ボオオオツ！

「ニャー！（ギャー！）」バタン

うん、準備運動完了つと。

(今ので準備運動!?)

アルミ「さて……と!炎時!」ボオツ!

「ニヤツ……(またコレか……)」

アルミ「ん?」

燃えてない?

アルミ「……へえ」

ネザライトを付けるとはね。

☆説明しよう!

ネザライトはマイクラで最も丈夫な装備。

溶岩に投げてても燃えないのである!

アルミ「なら、これよ!……ケツイタイム!」ゴオツ!

火の代わりにケツイのエネルギーを使う。すると……

「ニヤニヤツ!?(い、痛いだと!?)」

アルミ「今の内に捕縛よ!」

「逮捕だ〜!」グルグル

「ニヤ〜!(くっそお〜!)」

side ケーティ・マリオ

ケーティ「ウィザースインパクト！」ドガン！

「怒れる忌狼の面！」ガオーツ！

「ニヤニヤツ…（ガハツ…）」バタン

「ニヤーツ…（強すぎる…）」バタン

「こころ「よし」グツ

ケーティ「いやいや無表情でガッツポーズしてもシユールなだけよ？」

「こころ「そうかしら…？」しゅん

ケーティ「あ、その落ち込まないで！」

「こころつて大体無表情だけど、偶に表情が出るのよね…」

「ニヤー！（くらえー！）」シユツ

ケーティ「おっと、ウィザースインパクト！」ドガン！

「ニヤツ…」バタン

ケーティ「危なかったわね。こころ、行くわよ」

「こころ「ええ…！」

そしてまた作業（ひたすら敵兵を気絶させる）を続けた。

ソジック組の活躍

♪ UNDER TALE — BONE TROUSLE

side フリスク・ユメミル

fris フリスク「ハアッ！」ズバツ

kyara キヤラ「ケツイブラスター！」ドガーン！

bonet 僕は敵兵を気絶させる作業(?)を延々と繰り返していた。

fris フリスク「これ、結構ヒマになるね」

kyara キヤラ「そうね。もつと骨のあるヤツ来ないかしら?」

san サンズ「呼んだか?」

bonet 絶対知ってて来たよね?

fris フリスク「うん、サンズじゃないよ」

pap パピルス「じゃあ俺様か?」

bonet パピルスの天然ボケが炸裂。

kyara キヤラ「違う違う」

fris フリスク「…とりあえず続けよう」

ドゴツ、ズバツ。

―数分後―

アンダイン「ぐあああつ、もつと強いヤツ来いやあく!!」

アンダインはむしやくしやしている。

フリスク「そうは言つても…ん？」

ガタガタツ：

数百メートル先から何かが来た。あれは…

キャラ「戦車？」

「ニヤハ、ニヤハハ！（どうだ、凄いだろ！）」ドヤア

乗ってる敵兵がドヤ顔をしている。

殴りたいその顔。

フリスク「フンツ！」ドゴツ

「ニヤツ（ギヤツ）」バタン

殴ったその顔。（過去形かよ！）

アンダイン「どれぐらい固いか試してやらあ！」シユツ！

アンダインの槍が飛んでいく。

キイン！

しかし、戦車はそれを弾き返した。

アンダイン「ほう、なら…これはどうだあ！オラオラオラア！」

ヒュンヒュンヒュン！

サンズ「…………アンダインの“やり”たい放題だな、なんつつて♪」ばだmp sー！

パピルス「兄ちゃん、寒い」

キャラ「ハハッ、中々いいジョークね。…ケツイナイフ！」シュツ！

キーン！

キャラ「ええ…」

お姉ちゃんのケツイナイフも弾き返した。

フリスク「うーん…あ！」

いい事思いついた！

サンズ「何だ？」

フリスク「サンズとパピルス、丁度今戦車がある位置から青い骨を出してみて」

パピルス「分かった。ほうッ！」シュツ！

サンズ「よっ」シュツ！

グサッ！

戦車は中からダメージを受けた。

キャラ「おお…！」

フリスク「よし！その調子で続けて！」

パピルス「任せろッ！ほねこうげきッ！」

サンズ「ボンボン”出してくぜ”ばだ m p s ー！」

キャラ「あはははっ w w w ー！」ゲラゲラ

フリスク（サンズのジョークで笑うのはアルミさんとお姉ちゃんだけだよ…）

ギギギッ…

戦車から変な音がし始めた。

ピッ、ピッ、ピッ、ピッ…

パピルス「この音は、爆弾だッ!？」

キャラ「逃げるわよ！」

フリスク「オーケー！時間停止！（味方以外）」

←ブウウウン…

タタタッ…

ー数秒後ー

フリスク「再生！」

→ブウウウン…

そして、戦車は…
ドガアアアアアン！（デルタルーンの爆発音）
爆発して消え去った。

久々の登場

sideアド

アド「多いわね…」

カービィ「うん。キリがないよ…」

“あの” 2人がまだ来ないし…

バンダナ「おーい！」タタツ

アド「あら、バンダナ。来たの？」

バンダナ「うん！」

カービィ「よかった…！」

シュツ！

「ハアツ！」ズバツ！

「ニヤッ!? (なんだ!?)」

「ニヤー! (速い!)」

メタナイト「メタナイト、見参！」

メタナイトはカッコいいポーズで決め台詞を言った。

(流石世界一かつこいい球体)

「ニヤ…(クソツ…)」

「ニヤニヤツ(厄介なヤツが来たな)」

メタナイト「遅れて済まなかったな」

カービィ「いや、いいタイミングで来たよ」

メタナイト「そうか。ヤツは…上から降ってきたな」

アド「へっ?」

ヒュウウ…

「ニヤツ!?!」

ドゴオツ!

デデデ「俺様も来たぞー!」

アド「これでプププチームが集結したわね」

カービィ「だね」

デデデ「敵兵どもをかつ飛ばしてやるー!」カキーン!

「ニヤ

!

や

(いー

！)「ピユウウ…キラン☆

♪星のカービィ―激突！グルメレース

カービィ「ソード！3連発ッ！」ズバズバズバツ！

「ニヤツ…」バタン

ガチャツ、ガチャツ…！

デデデ「アレは…」

アド「ロボツト？」

『ニヤハハ！ニヤニヤー！（フハハ！くらえー！）ギユイイン…！

レーザー!?

メタナイト「離れるぞ！」サツ

カービィ「……………」

アド「カービィ!？」

『ニヤー！（発射ー！）』

ビビビツ！

カービィ「…吸い込み！」スウウウツ！

アド「ええ…」

カービィは極太光線を吸い込み始めた。

カービィ「ハアツ！スーパービーム！」

(自作です)

敵をコピーしてないのに!?

『ニヤニヤー!?(なんだとー!?)』

カービィ「デデデ、お願いがあるんだ」

デデデ「何だ？」

カービィ「僕をロボットの上にかつ飛ばしてほしいんだ！」

アド「フア!？」

デデデ「了解だ！」

『ニヤニヤー!...(させないぞー!..)』

カービィ「…今だ！」

デデデ「おーりやー！」

カキーン!

カービィ「うおおおお！」ガシッ

カービィはロボットの頭辺りにくつつく。

『ニヤツ!?!ニヤニヤツ!...(何!?!離れる!..)』

カービィ「君を！倒すまで！くつつくのを！止めないッ！」

いやいや今ジョジョネタを出す普通!?

(この小説は普通じゃないので大丈夫)

カービィ「くらえ!…ザ・ジャイアント・レーザー!」

…ドガアアアアアアン!

『ニッ ヤアアアアアア!』

シユウウウ…

ロボットは消し飛び、倒れた。

アド「……………」

メタナイト(私はあまり必要なかったようだな)

巨大兵器②

sideアルミ・マリオ

ステイブ「やあアルミ、調子はどうだい？」

アルミ「普通にいいわね。アンタは？」

ステイブ「僕も絶好調だよ。…あれは…？」

アルミ「ん？」クルツ

ゴゴゴツ…

アルミ「ええ…」

また巨大兵器？

『ニヤハハ〜！』

ステイブ「あれは、アイアンゴーレム!？」

アルミ「固そうね…」

ステイブ「うん、アイアンゴーレムは体力がかなりあつて頑丈なんだ」

アルミ「なるほど」

『ニヤハ！ニヤニヤッ！（その通り！アイアンゴーレム型もロボットだ！）』

アルミ「試しに…炎天掌！」ズガアン！
メキッ

アルミ「少ししかダメージがないわね」

ステイブ「じゃあ僕も。ピッグマンソード！」シャキン！

ステイブは金色の剣をどこからともなく取り出した。

ステイブ「バーニンソウル！」ブヒー！

メキッ

ステイブ「うん、あまりダメージが入らないね」

『ニヤハッ！（固さが売りだからな！）』

アルミ「なら、これはどうかしら？炎時！」ボオツ！

ステイブ「うわっ、床が燃えた!？」

アルミ「大丈夫よステイブ、対象しか燃えないから」

ステイブ「あ、ホントだ」

ジユウウ…

『ニヤ…（熱いな…）』

アルミ「中の温度が上がってるようね」

ステイブ「……あ！」

アルミ「何かひらめいたの？」

ステイブ「うん、アルミはこのまま温度を上げてくれる？」

アルミ「…あ、なるほど、分かったわ」

ステイブ「任せたよ！僕は頭に乗るから！エリトラ！」シユツ

ステイブはアイアンゴーレム型ロボット（長い！）の頭の上に乗った。

ステイブ「バーニンソウル！」ブヒー！

メキッ

頭の上から攻撃するようね。

―数分後―

『ニヤ、ニヤツ…（ああ、意識が…）』

そして敵兵の声は途切れた。

アルミ「熱中症で倒れたようね」

ステイブ「降りて、と」スタツ

ギギギ…ズデーン！

アイアン（ryは倒れて、中からアイテムが出てきた。

ステイブ「…おっ！素材！」

パツ、パツ。

ステイブは落ちたアイテムを拾った。

ステイブ「これで素材も手に入ったね！」

アルミ「それで何するの？」

ステイブ「僕の鉄ミニオン達を強化するんだ！」

アルミ「ミニオン？」

ステイブ「鉄を自動的に生成する機械だよ」

アルミ「へえ…」

メイン国は色々ぶっ壊れてるからありえるわね。

ステイブ「で、僕達はこれからどうする？」

アルミ「合流した方がいいわね」

ステイブ「それがいいね。行こっか」

アルミ「ええ」

スタスタ…

—————
キングニャンコ「ぬう、アイアンゴーレム型ロボットまでも…！」

どうすればいいのか!?

掘る掘る

side ダークアルカ・マリオ

「ダークアルカ………」タタツ

私は森の中で走っていた。

ココは私が圧倒的に有利だからね。

「ニヤ〜? (何処だ〜?)」

「ニヤニヤツ (ココらへんらしいぞ)」

「ダークアルカ (何かを探してるのかしら?)」

「ニヤツ! (あつた!)」

「ニヤハハ! (これで報酬が弾むぞ!)」

敵兵は何か四角い輝いてるものを持っていた。

「ダークアルカ (とりあえず奪った方がよさそうね) 時間停止!」

←ブウウン…

「ダークアルカ (これは、宝石?……ジャスパー?)」

丁度敵兵が持っていた本を読むとそう書いてあった。

ダークアルカ「回収してマイン国の人にきいてみた方がいいわね。……」
足元にはジャスパールの鉱石があった。

ダークアルカ「ツルハシを取って、と。掘り掘り〜」
―数分後―

鉱石は全部掘った。

ツルハシを返さずに離れて、と。

ダークアルカ「再生！」

←ブウウン…

「…ニヤ!? (…えっ!?)」

「ニヤニヤ〜!? (無くなってる〜!?)」

ダークアルカ「ははっ、慌ててるわね。離れよつと」
タタツ…

―基地のマイン国エリア―

スカーフ「ん? ダークアルカじゃないか」

ダークアルカ「ちよつと戦利品を調べてもらいたいのよ」

スカーフにジャスパール鉱石を見せた。

スカーフ「ジャスパールか。これは武器に付けると攻撃力を上げる効果があるんだ」

ダークアルカ「へえ…私は拳で戦うからいらないわね」

スカーフ「誰かにあげるといいよ」

ダークアルカ「…あ、アンタにはあげないわよ?」

スカーフ「うん、知ってる」

ダークアルカ「じゃ、また持ち場に戻るわ」

スカーフ「うん、頑張れ」

ー森ー

ダークアルカ「……ん?」

敵兵が大量にいた。

木の陰に隠れて様子を見る。

「ニヤニヤ〜! (掘るぞ〜!)」

『ニヤ〜! (お〜!)」』

ザクツ、ザクツ。

ダークアルカ (これは多いわね。腕が鳴るわ…!) ゴキゴキ

♪MULAストーリー―ステルス・ロック

ダークアルカ「…アンタ達」

「ニヤツ!?! (敵だ?!?)」

「ニヤツ、ニヤニヤツ！（だが、俺らは大人数だ！）」

ダークアルカ「その鉋石を手放して退却しなさい。しないと…うふふ♪」
「ニヤツ！（しねえぞ！）」

ダークアルカ「そう？残念ね。ヘルフレイム！」ゴオオオツ！

「ニヤ!!?（は!?!）」

「ニッ ヤー！（ギヤーー!）」

ダークアルカ「これだけじゃないわよ！あははははは！」ドゴドゴドゴツ！

「ニヤツ…（俺達死んだな…）」

（死にませんでした）

その後、ボコボコにされた敵兵の集団が発見されたという。

…誰なんでしょうね、そんな事したの？（お前だよ!）」

目覚める裁判官

sideアルミ・マリオ

敵兵を1億ほど倒し、私達はついに敵の本拠地を見つけた。

アルミ「私達は敵軍の南陣を主に倒したようね。だから…本拠地は軍の中心にあるわね」

フリスク「なるほど。それで、いつ攻め込みますか？」

アルミ「明日ね。早めに攻め込んだ方がいいわ。そして編成は……」

―数分後―

アルミ「こんな感じよ」

フリスク「……」

アルミ「ん、どうしたの？」

フリスク「凄いですね、アルミさん」

アルミ「ええと、何が？」

フリスク「まさかこんな考え込まれた編成を作るとは。尊敬します！」

アルミ「別にたいしたものでないわよ。アンタも頑張ればできるわよ？」

フリスク「頑張ります！」

アルミ「よろしい。…ちよつと私は用事があるから行くわね」

フリスク「はい！」

スタスタ…

誰もいない場所に移動する。

アルミ「…お母さん、いるんでしょ？」

シュツ

アルカ「ええ、いるわよ。どうしたの？」

アルミ「ヘカーティアさんの所へ連れて行つてくれる？」

アルカ「オーケー♪転送！」

シュツ

シュツ

ヘカーティア「アルミ、また会つたわねん♪」

アルミ「ええ。…ちよつと話があるの」

ヘカーティア「ん、どうしたのかしらん？」

アルミ「私は決めたわ。」

…パンドラの裁判官になる」

アルカ（へえ…）

ヘカーティア「…ふつつ、分かったわん♪」

アルミ「何か、するべき事とかあるの？」

ヘカーティア「あるわよん。…この本を読んで」スツ

アルミ「…？」

ヘカさんが渡してきた本にはウインディングで「パンドラの裁判官」と書いてあった。

ヘカーティア「読み切る事が出来たらパンドラの裁判官よん♪」
アルカ（さて、果たしてできるかしら？）

アルミ「……!!」

ギユイン！

本を開いた瞬間、とてつもない量のエネルギーが入ってきた！

これに耐えながら読むのね…

アルミ「ハアアアアッ！」

ヘカーティア（これは凄いわねん。アルカに負けてないわん♪）

アルカ（頑張れ、アルミ……!）

私は時々意識を失いそうになりながら、本を読み続けた。

→π時間後→↑え？

アルミ「………」

パタン

アルミ「終わったわ」

ヘカーティア「ふふっ、おめでどう♪」パチパチ

アルカ「よくやったわ、アルミ」

力がみなぎるわ。

それと霊力以外の力も。

ヘカーテイア「それは神力よん。アルミが元々持ってた力ねん」

アルミ「元々持ってたの!？」

アルカ「アンタ、人から尊敬、というか崇拜されてるでしょ?だからよ」

アルミ「は、はあ」

アルミは。パンドラの裁判官になった!

神力の使い方

♪MULAストーリー―アルミのテーマ

sideアルミ・マリオ

シュツ

アルカ「じゃ、頑張りなさい」

アルミ「ええ」

シュツ

………。

アルミ「戻ろう…」

―基地―

フリスク「アルミさん、おかえり…ってなんですかこの力!？」

アルミ「ちよつと、ね」

フリスク「ちよつとじゃないレベルで上がってるんですが!？」

アルミ「秘密よ。とりあえず時間になったら軍を引き上げるわ」

―数時間後―

ザクロ「おう、アルミさん。起きたぜ」

アルミ「ん、じゃあ今夜の警備も頼むわよ」

ザクロ「ああ」

スタスタ：

アルミ「…神力つてどうやって使うのかしら？」

ルメ「どうしたの？」

アルミ「私数時間前にパンドラの裁判官になったんですよ」

ルメ「フア!？」

アルミ「それで、霊力だけじゃなくて神力も持つてると言われたんですよ、ヘカさんから」

ルメ「ヘカさん？」

アルミ「地獄の女神ですよ。話しやすい性格でした」

ルメ「は、はあ。それで、その神力の使い方が分からないの？」

アルミ「はい」

ルメ「ただ単に纏えばいいんじゃない？」

アルミ「…確かに」

何で気付かなかったのかしらね？

アルミ「ハッ！」ゴオツ！

私の拳が白いオーラを纏う。

ルメ「おお、できたわね」

アルミ「ありがとうございます、ルメさん」

ルメ「大した事はしてないわよ。じゃ、おやすみ」スタスタ

アルミ「おやすみです」

私もその後すぐ寝た。

アルミ「ハッ！」

目が覚めると白い空間にいた。

ヘカーティア「どうも、驚いたかしらん？」

アルミ「ヘカさん!？」

ヘカーティア「(ヘカさん？良いあだ名ねん♪)パンドラの裁判官になったからココで

喋れるのよん♪」

アルミ「なるほど」

ヘカーティア「ところで、神力の使い方は分かるかしらん？」

アルミ「霊力みたいに纏う事しか…」

本拠地、突入！

sideアルミ・マリオ

次の日。

アルミ「…よし」

これで準備もオーケーね。

アルミ「さて、と」

私は放送室に移動した。

ピンポンパーンパーン！

アルミ「お知らせするわ。今から言う人は私と本拠地に突入する戦力よ」

ざわざわ…

アルミ「まずは物理攻撃部隊。主に物理攻撃で倒す部隊ね。隊長はルメさんで、キノピオさん、キノ太郎、ステイブ、パピルス、アンダイン、アズゴア、デデデ大王、メタナイトさん、カービイさん、バンダナさんよ」

ルメ（私がリーダーね…）

ステイブ（頑張ろう！）

アルミ「次は魔法攻撃部隊。名前の通り魔法で攻撃する部隊よ。隊長はフリスクで、キヤラ、ケイティ、アオイ、ノリオさん、ノーア、ボンゾー、スカーフ、セイダン、ネクロン、アドさん、アドレーヌよ」

フリスク（任務、しっかりこなしてみせます!）

ネクロン（どうせこの身だ、若いヤツらを守ってやる!）

アルミ「中立部隊。物理と魔法を両方使ったり、遠距離攻撃を使う部隊よ。隊長は私で、サンズ、ルイス、ダークアルカ、こころ、ジーノさん、ミールさんよ」

ダークアルカ（ふふっ、蹴散らしてやるわ!）

ジーノ（久々の出番だ!）

アルミ「最後に、呼ばれなかった人達の2割は本拠地付近、3割は敵軍、4割は基地付近、残った2割は基地の防衛につきなさい、以上よ」

ピーンポンパーンポン!

ふう、これでよしと。

アルミ「進軍開始ね」

「ニヤニヤツ、ニヤツ!（敵軍の最強クラスの人達がこちらに向かっています!）」

キングニヤンコ「それはヤバイニヤ…」

まだ十分に準備もできてないというのに：

キングニャンコ「ええい！ アレ」を出すニヤ！」

「ニヤツ！（了解！）」

キングニャンコ「これで敵軍を少しは潰せるハズニヤ…」

ー本拠地ー

アルミ「……………」

3、2、1。

アルミ「突入開始！」

全員『うおおおおお！』

「ニヤ〜!?（フア〜!?）」

「ニヤニヤツ！（多すぎるッ!）」

ダークアルカ「オラア！」 ドゴツ！

「ニヤツ（ガフツ）」 バタン

アルミ「炎時！」 ボオッ！

「ニヤー！（熱いー!）」

アルミ「天空掌！」 ズガアン！

本拠地潰し①

sideルメ・パンドラ

入口付近に分かれ道があったため、部隊ごとに道を進んだ。

ルメ「それにしても、暑いわね……」

キノピオ「そうだな……」

アンダイン「暑いのは苦手なんだよな……」

……？

ルメ「何かが来るわ」

全員『……………』

「ゲローム！」

ドドドドツ！

オレンジ色のカエルらしき生物が突っ込んできた！

メタナイト「アレは……！」

カービィ「ヴォルゲロム!?!」

ヴォルゲロム「グエエエエ！」

デデデ「まずい、攻撃が来るぞ！」

ドシュツ！

溶岩が飛んできた!?

ステイーブ「ブロックガード！」パッ

ドゴオ！

ルメ「危なかったわ……」

メタナイト「ヴォルゲロムの弱点は攻撃の後隙の長さだ！その時に集中攻撃だ！」

アズゴア「了解だ。三又槍！」ザクツ！

パピルス「骨攻撃！」シュツ！

アンダイン「槍イイ！」ズドツ！

ルメ「グレイ装備！「オーケー！」風斬・鎌鼬！」ズバアツ！

ダークルメ「ブラックドーン！」ギユウウン！

ヴォルゲロム「グエエ……グググ……」スウウウツ……

カービィ「!!!今すぐジャンプして！」

キノピオ「分かった……!?!」

ズドドドツ！

ヴォルゲロムは大量の溶岩を吐き出した！

ルメ「風浮！」フワツ！

味方全員を風で宙に浮かす。

ヴォルゲロム「ゲロオ！」フラフラ

ルメ「解除！」

スタツ

ルメ「集中攻撃よ！」

ステイーブ「了解！バーニンソウル！」ブヒー！

キノ太郎「セイツ！」ズガアン！

メタナイト「斬ツ！」シヤツ！

バンダナ「とうっ！」シュツ！

ヴォルゲロム「グエエエエ！」

サツ

ヴォルゲロムが正気に戻ったので再び距離をとる。

今度はどんな攻撃かしら？

ヴォルゲロム「グエツ！」ピヨン

ジャンプした。

キノピオ「ヒツブドロップか！なら俺達もジャンプするぞ！」ピヨン

すると…

ヴォルゲロム「グエエ！」ドスン！

予想通りヒツプロップした。

パピルス「骨攻撃！」シュツ！

ダークルメ「きやはっ！」ドゴツ！

その後も似たような事が繰り返されたため、省略するわ。

―数分後―

ヴォルゲロム「グエエ…」フラフラ

ルメ「トドメよ！風斬・鎌鼬！」ズバアッ！

ヴォルゲロム「グエツ!?グオオ…」フツ…

カラン

ヴォルゲロムは消え去り、赤い何かが床に落ちた。

キノ太郎「コレは…カケラ…？」

ルメ「恐らくコレを集めて何かにはめるのよ。…入口に戻った方がいいわね、コレ」

メタナイト「だな」

ルメ「ん、じゃあ戻りましょ」

スタスタ…

黄 青 赤

O O O
N N F
F

本拠地潰し②

sideフリスク・ユメミル

僕達は真ん中の道を進む。

フリスク「これは…」

周りの壁は段々クリーム色の石に変わっていった。

ケーティ「エンドストーンに変わってるわね」

キヤラ「つまりここって…」

ボンゾー「エンドエリアだね」

「ヴオツ…」

ザツ、ザツ…

アオイ「エンダーマン？」

「ヴァアアアア！」

スカーフ「敵対してるぞ！」

アオイ「ソウルブラスター」ドガン！

「ヴァアツ…」フツ…

フリスク「何でエンダーマンが襲って…!?」

『ヴァアアア!!』

ドドドドッ!

道の先から大量のエンダーマンが襲いかかってきた!

アド「アドミサイル!」ドゴッ!

アドレーヌ「ザ・ワールド・ドローペイン!」バシユッ!

セイダン「テラコッタ!」ドガッ!

ネクロン「ウィザーインパクト!」ドガーン!

このチームの最強格の連撃。

強さはキャラ)フリスク)セイダン)アド)アドレーヌ)ネクロン)ケーティ

って感じ。

ノーア「ヘイルストーム!」パキイツ!

「ヴァッ…」フッ…

ケーティ「…!!ノーアさん!」

ノーア「何、ケーティ?」

ケーティ「大量に氷を出して下さい!エンダーマンは水が弱点です!」

フリスク「なるほど!」

ノーア「ハアアアツ！」パキパキ

ケーティ「後は私が！ウィザーインパクト！」ドガン！

ケーティさんの魔法が氷に命中し、氷は溶け出した。

バツシャーン！

そして大量の水となって流れだす。

キャラ「ケツイドーム！」ピキツ！

お姉ちゃんは僕達の周りに水防止の結界を張る。

『ヴァツ…』フツ…

フリスク「残ってるエンダーマン達も水で攻撃しましょう！」

全員『おお！』

―数分後―

「ヴァツ…」

最後のエンダーマンが倒された。

カラン

キャラ「青い”カケラ？”

アオイ「呼んだ？」

キャラ「呼んでません！」

フリスク（青いだけに？）

ケーティ「どうせ行き止まりだし、入口に戻りましょ」

フリスク「それがいいですね」

赤 O F F

青 O F F

黄 O N

白 O N

キングニヤンコ「半分倒されたニヤ…」

「ニヤニヤ、ニヤニヤニヤツ（しかし、仮に3つ目が倒されたとしても、4つ目を見つめるのは難しいでしょう）」

キングニヤンコ「そうだといいがニヤ…（敵の主力が集まっているニヤ。カンタンに見つけられてもおかしくはニヤい…）」

本拠地潰し③

sideアルミ・マリオ

右の道を進む。

アルミ「……………」

サンズ「空気が変わったな」

ダークアルカ「……………（まさか、ね）」

ジーノ（ダークアルカの態度がおかしいね…）

←ブウウウン…

!!!

突然時が止まった。

アルミ「止めたのは…?」

ダークアルカ「私達だけ行動可能だから、フリスクじゃないわね」

「ふふっ、その通り」

2人「!?」

目の前にいたのは、お母さんに似た誰かだった。

あるか「私はあるか・まりお、アンタの母親アルカのクローンよ」
アルミ「クローン!？」

あるか「再生つと」

→ブウウウン…

ルイス「!？」

ミール「アルカ!？」

ダークアルカ「アルカのクローンよ」

サンズ「マジかよ」

こちら「ビツクリね(棒)」

うん、アンタは真顔で驚いても説得力ないわよ？

あるか「さあ…かかってきなさい！」

アルミ「言われなくても！炎天掌！」ズガアン！

あるか「煉獄パンチ！」ドゴオ！

お母さんの十八番技は使える、と。

ダークアルカ「ヘルフレイム！」ゴオオオツ！

ダークアルカはヘルフレイムを出す。

あるか「ならこっちも…ヘルフレイム！」ゴオオオツ！

あるかもヘルフレイムを使ってきた！しかし…

あるか「グッ、きやあつ！」ボオオオ

威力はダークアルカが勝ったようね。

アルミ（つまり、8年前より前のお母さんのクローンね）

ヘルフレイムであるの威力だから。なら…！

アルミ「この技は知らないハズよ！天空掌！」ズガアン！

あるか「ガハッ!?」ピュー！

あるみは知らない攻撃を受け、吹き飛んだ。

アルミ「今よ！やっちゃいなさい！」

ルイス「オーケー！サンダールーム！」ビリッ！

あるか「マズい…！」

サンズ「ボーンとな」ボーン！

こころ「面々舞！（自作技）」ドスッ！

ジーノ「加速矢！」グサッ！

ミール「ハアアアッ！」ドドドドッ！

あるか「クッ、クソッ…！」

ダークアルカ「トドメよ、偽物。…ヘルフレイム！」

ゴオオオツ……!

あるか「ギツ、ギヤアアア！」 シュウウウウ……

アルミ「ええ……」

ダークアルカ「しぶといわね」

あるか「ガフツ……」

流石母さんのクローン、とிட்டた所かしら？

ダークアルカ「トドメよ「待って！」 何よ」

あるか「アンタの、力になりたいの……」

アルミ「力？」

そういう事かしら？

ダークアルカ「……まあいいわ、来なさい」

ダークアルカはもう知ってるようね。

あるか「あり、がとう……」 フツ……

あるかはエネルギーと化し、ダークアルカの中に入っていた。

ダークアルカ「……フツ」

カラン

ルイス「あつ、何だコレ？」

アルミ「黄色い…カケラ？」

サンズ「入口に戻ってみようぜ」

アルミ「そうね」

スタスタ：

赤 OF F

青 OF F

黄 OF F

白 O N

本拠地潰し④

sideアルミ・マリオ

ガンツ!

入口に戻ってる途中、変な金属音が聞こえてきた。

ガンツ!

アルミ「何かデジャブね」

ガンツ!

ジーノ「何の?」

ガンツ!

アルミ「初めてメタトンに会った時ですよ」

ガンツ!

ジーノ「ふーん」

ガンツ!

……イラツ。

ダークアルカ「あ”あ”…”」

アルミ「苛つくわね！」

2人『とつとと登場しろコノヤロー！』メタい！

……………。

サンズ「来ない「ガンツ！」…事はないようだな」

ドゴオ！

天井から何か降ってきた。

「ククク、久し振りだな、お前ら！」

ルイス「ええ…」

Hと書いてあるキャップ、灰色のお父さんの服…うん、分かるよね？

アルミ「ハリオさん？」

ハリオ「今回は敵同士として戦おうぜ！もちろん1対1でな！」

☆説明しよう！

脱獄者の逆襲でアルカがハリオを処刑した後、彼は足を洗い、格闘家の道を進んだのだ！

その結果、かなりの戦闘狂になったのである！敵味方関係なく手合わせを挑んでくるぞ！

ミール「誰が行く？」

アルミ「ハア…私が行きますよ。ハリオさん、私が相手です」

別に勝てないワケではないけど…相手するのが面倒くさいのよね…脳筋だから」
ダークアルカ「声に出てるわよ」

アルミ「あ、やべ」

ハリオ「さあ、勝負だアルミイイ！」

幸い聞こえてなかったみたいね。

アルミ「…新式戦！」

格闘系はコレがいいわね。

…キーン！

アルミ vs ハリオ

ハリオ「小手調べといくか。フンツ、正義の鉄拳！」ドゴオ！

うわ出た、ハリオさんの十八番技。

(原作では宇宙ポリスに出たロケットパンチみたいなヤツ)

アルミ「ゴットハンドX！」ガシイン！

ハリオ「ほう、止めたか」

アルミ「そういうのはいいんで、とつとと本気出して下さい」

〔後250文字ぐらいで決着付けなきゃいけないのよ！（メタい！）

ハリオ「ハッ、いいだろう！」パクッ

ハリオさんは何か食べると…

ムキムキッ

筋肉隆々のマツチヨマンになった。

ハリオ「ホウ…ホワタア！」ドガッ！

アルミ「ツ…ハアッ！」ドゴッ！

ハリオ「オラア！」

アルミ「ハアッ！」

ドゴオ！

拳が拳がぶつかり合う。

ハリオさんと手合わせする時はいつもこう。正々堂々と戦う。ただ…

アルミ「今は戦争なので、決着を付けさせていただきます」

ハリオ「むっ…？」

アルミ「秘技…ナットクラッカー！」シユッ

…キイン！

今出せる全力でハリオさんの金的を殴った。

ハリオ「グホア!?…ガフツ」ボタン
ハリオさんはそのまま倒れた。

アルミ「ふう」

スミマセン、ハリオさん。

カラン

アルミ「あ、カケラ」

今回は白ね。

ルイス「……………」

全員『……………』

アルミ「え、何この空気？」

全員『金的は無いでしょ!?!』

アルミ「……………あ」

確かに卑怯ね。反省反省。

アルミ「テヘツ♪」ペロツ

全員（絶対反省してない…）

V	よ	白	黄	青	赤
	つ				
E	て	O	O	O	O
		F	F	F	F
A		F	F	F	F
H					

最終兵器、ウ“イ”エ“

「ニヤニヤツ！（準備ができました！）」

キングニヤンコ「ニヤハハ、そうか……！」

ヴェイエエン……！

side アルミ・マリオ

入口に戻ると、各部隊も全員いた。

ルメ「道が開いてるわ」

アルミ「……進みましょう！」

スタスタ

―大広間―

王座に1人敵が座っていた。あれがキングニヤンコね。

キングニヤンコ「ニヤハハ、ついに来たか」

アルミ「アンタがこの戦争の首謀者ね」

キングニヤンコ「いかにも。それじゃ……精々楽しみ給え！」ポチツ

キングニヤンコはボタンを押した。

ゴゴゴッ!

パピルス「何だッ!?!」

フリスク「ッ、前から何かが来る!」

ガチッ、ガチッ。

「ヴイエ…」

ダークアルカ「マネキン…?」

出てきたのは変な服を着ているマネキン5体だった。

♪バーバパパーウ“イ”エ”

キングニヤンコ「コイツらが最終兵器、ウ“イ”エ”ニヤ」

「ヴイエ…ッ!!」ギユイイン!

アルミ「!みんな離れて!」

ズドーン!

ヴイエの口から極太光線が放たれる。

アルミ「ケーティ!アオイ!行くわよ!」

2人『了解!』

ザッ!

3人『吸収!』ギユルルル!

シュウウウ…

3人で吸収して防いだ。

「ヴィエエエ！」ギユイイン！

アドレーヌ「ミサイル！」ドゴオ！

「ヴィ？」

アドレーヌはミサイルで攻撃するが…

アドレーヌ「効いてない!？」

デデデ「デデーン！」ボガッ！

今度は大王が攻撃した。

「ヴィッ」ガシッ

デデデ「デッ!？」

「ヴィエエ！」ポイツ！

デデデ「あーれー！」ヒユウウ…

ドゴーン！

バンダナ「大王様く!？」タタツ…

デデデ大王…一時離脱

バンダナワドルデイ…一時離脱

カービィ「やばいね…」

ネクロン「フン、これならどうだ？ウイザーインパクト！」ドガン！

セイダン「ジャイアントソード！」ズバアツ！

「ヴィツ!？」

アルミ「少し怯んだわね。なら！」サツ！

ウイエの内1体の後ろに回り込む。

アルミ「天空掌！」ズガアン！

「ヴィツ、ウイエエエツ！」シユツ！

拳で攻撃してきた。

アルミ「ツ！」ガシツ！

コレは、中々強…!?

「ウイエツ！」ドゴオ！

アルミ「かはっ…!？」

もう片手で鳩尾を殴られた。

「ウイイイン！」シユツ

ステイブ「させないよ！バーニンソウル！」ブヒー！

「ウイイ…」

アルミ「グツ、助かったわステイープ」

ステイープ「油断しないでよ！」

アルミ「ええ…」

さて、作戦は…

アルミ「ヴィエー1体ごとに6人で相手しなさい！それほどしないと倒すどころかダメージも与えられないわ！倒し、戦争を止めるわよ！」

全員『おお！』

戦争の最終決戦が今、始まった。

以外な弱点

♪バババパーウ“イ”エ“

sideアルミ・マリオ

「ヴェエ……」ギユイイン……

アルミ「ハア、うざったいわね……」

Gガールじゃないけど。

(元ネタ：テレキャスタービーボーイ)

アオイ「どうする、お姉ちゃん？」

アルミ「えつと、潰す？」

ルメ「だからどうやって？」

「ヴェエエエ……」ギユイイン……

ダークアルカ「アルミ、行くわよ」

アルミ「オーケー。気に食わないヤツは……」

ダークアルカ「とりあえず……」

2人『ぶん殴る！』ドゴォ！

「ヴィ!?」

アルミ「炎天掌!」ズガアン!

ダークアルカ「煉獄パンチ!」ドゴオツ!

アオイ「私も!ソウルブラスター!」ドガーン!

「ヴィツ…」

私達が総攻撃を仕掛けるが、ヴィエはあまりダメージを受けていない。

アルミ「弱点は何なのかしら?」

キングニヤンコ「ニヤハハ、見つけてみる!」

あるのはほぼ確定ね。

ルメ「それにしても、クソ頑丈ね…」

アルミ「ですよね…」

アオイ「弱点じゃなくても、こんなに頑丈かな?」

ダークアルカ「んなもん関係ないわよ。ヘルフレイム!」ゴオオオツ!

ドゴオオ!

「ヴィツ…ヴィエエ」

怯んでるわね。

ルメ「風斬・鎌鼬!」ズバツ!

アルミ「天空掌！」ズガアン！

「ヴィ？」

アルミ「このオ：頑丈野郎がッ！」

アオイ「こうなったら：リーパーサイス！」スツ

アオイは青い鎌を出す。：って

アルミ「何処から出したのその物騒な武器!？」

アオイ「懐から」

アルミ「ええ：」

アオイ「これで攻撃してみるよ。ハアッ！」ザクッ！

「ヴィッ：!？」

ダークアルカ「あら？」

アルミ「効いたわね：」

アオイ「あ、なるほど。お姉ちゃん、霊力を使わなければいいんだよ！」

(ちなみにアオイが使ったのは鎌の妖力)

ルメ「なるほど、って私使えないわよ!？」

アルミ「私が神力で武器作りますよ：：：どうぞ」シユッ

シンプルな形状の刀を渡した。

ルメ「ん、ありがとう」

アルミ「ダークアルカは…グローブね」

ダークアルカ「ふふっ、これで思う存分にボコせるわね」

キングニャンコ（バレた、ニヤ!?!）

あ、そうだ。みんなに伝えるべきね。

アルミ「スウ…ツ、みんなに情報を伝えるわ！ ヴィエの弱点は靈力以外の種類のエネ
ルギーよ！」

これでオーケーね。

アルミ「ハアツ…：神力を纏った炎天掌！」ズガアン！

「ヴィ…：エエエエエ！」 ギユイイン…

アオイ「させない！ リーパーサイス！」ズバツ！

「ヴィツ」

ダークアルカ「オラア！」ドゴオ！

「ヴィエ!?!」

ダークアルカ「ボツコボコにしてやるわ！ オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラア！」

ドゴドゴドゴツ！

「ヴィ…エ…：……」バタン

ヴェイエを1体撃破した。

第2形態

♪バーバパパーヴイエ

sideアルミ・マリオ

私がヴイエの弱点を言った後、以外とカンタンに倒す事ができた。

アルミ「倒したわよ。こんな戦争、さっさとやめなさい！」

キングニヤンコ「ニヤハハツ、よく”第1形態”を倒せたニヤンね」

ダークアルカ「つまり、第2形態があると？」

キングニヤンコ「その通りニヤ！」ポチツ

『ヴィツ…』ギギギ

5体のヴイエは互いにくっつく。

ルメ「合体かしら？」

『ヴイエエエエ！』

ギユイイン！

そして眩しい光を放ち始めた。

キングニヤンコ「ニヤハハ、貴様らには倒せるかニヤ？」

シユウウウ…

「VEA…」

アルミ「……………」

ダークアルカ「パワーが数倍膨れ上がってるわね」
キングニヤンコ「さあ、行けっ！」

「VEAH！」ドツ

まずは試すべきね。

アルミ「炎天掌！」ズガアン！

「VE?」

うん、ノーダメージなのね（白目）

アルミ「総攻撃よ！」

ルメ「風遁螺旋丸！」ギユルルル！

ダークアルカ「ヘルフレイム！」ゴオオオツ！

6人『ウイザーインパクト！』ドガン！

ノーア「アイスキヤノン！」パキイツ！

ノリオ「消えなさい」ドガン！

ミール「ハアアアア！」ドドドドツ！

ジーノ「加速矢！」ドスッ！

メタナイト「フンッ！」ズバッ！

カービィ「ソード！」ズバッ！

キノピオ「シユルームパンチ！」ドゴッ！

キノ太郎「シユルーム掌底！」ズガアン！

2人『ザ・ワールド・ドローパーイン！』バシユッ！

ルイス「サンダールーム！」ビリビリ！

こころ「面々舞！」ドゴォ！

2人『ケツイナイフ！』ザクッ！

2人『骨攻撃！』シヤッ！

アンダイン「槍いいい！」ドスッ！

アズゴア「三又槍！」ザクッ！

それぞれの攻撃でヴィエを攻撃した。

しかし…

「VEA…」ピカッ

ほぼ全員『効いてない!?』

ダークアルカ「(不気味ね…まさか…!) みんな、今すぐ離れるわよ！」

アルミ「(……)そういう事ね) 時間停止！」

←ブウウウン…

ダークアルカ「相手は恐らく私達の攻撃を吸収したのよ」
ルメ「なるほど」

アルミ「だから、距離を取るわよ。フリスク、キヤラ」

2人「はい？」

アルミ「ケツイ結界を頼むわよ」

2人「了解！」ピキッ

これで大丈夫ね。

アルミ「再生！」

→ブウウウン…

「VEAHHHHHHHHH！」カッ！

ドガン！

ヴィエから極太光線が放たれる。恐らく私達の攻撃を吸収した分威力が上乘せされたるわね。

アルミ「三姉妹…」

3人「吸収！」ギュルルル！

私、ケーティ、アオイの3人が結界の外で両手の吸収をする。しかし…
3人「ぐわっ!?!」

ドガン!

吸収しきる事ができなかった。

アオイ「手が痛い…」

ケーティ「なんて威力なの…?」

ビキッ!

しかし、ケツイ結界は壊れることなく他のみんなを守った。

アルミ「……………」

コレ、どうしようかしら?

こちらも第2形態

バーバパーウ“イ”エ”

sideアルミ・マリオ

アルミ「……………」

ルメ「アルミ、私達も第2形態になるわよ」

アルミ「…それがいいですね」

もうちよつと温存しようと思っただけ。

Sアルミ「できる人は全員変身よ！…スーパージョー！」

Sルイス「スーパージョー！」

Sノーア「スーパージョー！」

アドレーヌ（条件が揃ってないから無理ね）

Gダークアルカ「グリッチ化！」

☆説明しよう！

グリッチは既に消滅したが、グリッチのエネルギーはアルカのタマシイと完全に混ざっているの、ダークアルカは現在もグリッチ化できるのである！

W ネクロン 「ワイザーフォルム！」

Y ケーティ 「ユウキ覚醒！」

K フリスク 「ケツイ覚醒！」

K キャラ 「ケツイ覚醒！」

サンズ (…温存しておくか)

S こころ 「シンセツ覚醒！」

(できたのかよ!?)

S ルメ 「シヤドウ化！」

(ダークルメと合体した)

キングニヤンコ (あ、やべ)

「VEAH！」 ギュイイン！

ドガン！

S アルミ 「さつきみたいにはならないわよ！青炎結界！」 ボオツ！

シユウウウ…

極太光線は結界に防がれた。

「VEA!？」

S ルイス 「せいっ！」 バチッ！

「VE、VEAHHHH!」シユッ

Sノア「させないわよ!」パキッ

ノアがヴィエの手を凍らせる。そして…

フリスク「お姉ちゃん、ケーティさん、ここで、行くよ!」

3人『了解!』

フリスク「ハアアアアッ!」ギユイイン…

4人『ケツイ(ユウキ)(シンセツ)波動!』

ドガアアアアアアアアアア!

「VE……AH……!」

Wネクロン「ほう、まだ立てるのか。インプロージョン!」ドガーン!

「VEAH!?!」

キングニヤンコ(これはやばいニヤ。もっと苦戦して欲しかったニヤ…)メタ!

Sルメ「行くわよ、ダークアルカ!」

Gダークアルカ「ええ!」

ゴオオオツ!

2人『闇の炎の風見鶏!』ボオオオツ!

「VE、VEA…」

S
アルミ「キノピオさん!？」
手を伸ばすが、もう遅かった。
ドガアアアアアアアアン

パ
ン
ド
ラ
の
裁
判

sideアルミ・マリオ

ドガアアアアアアア

Sアルミ「キノピオさんっ！」

キノ太郎「父さん！」

私の目の前で、キノピオさんは極太光線に消し飛ばされた。

フリスク「タマシイ保存！」ギユイイン

しかしキノピオさんのタマシイは無事助けられた。

キングニヤンコ「ニヤハハ、愉快愉快！その顔を見たかったのニヤ！」

……………。

ああ、もう怒ったわ。

その思った時、スーパ―化は解けたが、別の力が溢れてきた。

アルミ「おい、お前」

キングニヤンコ「ニヤ？…ガフツ!?」ドゴオ！

アルミ「私がお母さんだったら、お前はもう死んでるわ」ドゴツ

キングニヤンコ「グハツ、ニヤン、だと…」

アルミ「でも私は違う」

キングニヤンコ「い、命だけは…」

アルミ「ええ…死ぬより苦しいモノを思い知らせてやるわ。『パンドラの裁判』！」
カッ！

私の目は紫色になり、視界はモノクロになる。

全員『!?!』

アルミ「お前は自分の好き勝手に平和を放棄し、戦争を仕掛けた。その上に、卑怯な手でキノピオさんを殺した…よって、お前を有罪とするわ」

キングニヤンコ「ヒツ…」

キングニヤンコは怯えている。

アルミ「一ヶ月地獄刑に処す！ハアアアア！」

ギユイーン！

キングニヤンコ「ニヤ、こ、これは!?!」

アルミ「地獄転送」

キングニヤンコ「ニ”ヤアアアアア！」

シユツ

アルミ「……………」

ルメ「……………」

ダークアルカ「…終わった、のね」

アルミ「ええ…」

キノ太郎「ツ、ならさっさとあの世の広場へ向かうぞ！」

アルミ「フツ、そうね！」ダツ

こうして、後に『大草原の戦い』と呼ばれる戦争は、終結した。

―数日後―

あれから数日経った。

ケーティ「お姉ちゃん、ニュース見てみて」

アルミ「ええ」ピッ

『次は、英雄アルミ・マリオ氏についてです！』

思いっきり私の事を報道していた。

アルミ「…私、英雄なのね」

ま、有名人になっても生活を変える事はないけど。

レイン「アルミさん、凄くいい！」

アルミ「ふふっ、そうかしら？」 ナデナデ

そして、平和はしばらく続いた。

―次章予告―

アルミ、暗殺!?

キノ太郎と結婚し、息子も授かったアルミ・マリオ。

しかし、出張先のホテルで何者かに暗殺される!?

幽霊となつてしまったアルミ。

彼女と仲間達は、犯人を見つけ出そうと動き出す。

果たして犯人を見つけ出す事ができるのかッ!?

第5章 アルミ、暗殺!?

誰よ、こんな夜遅くに…

sideアルミ・マリオ

……。

あれから2年経った。

私はキノ太郎と結婚し、アルヤも生まれた。

中々楽しい生活である。

そして私は現在マイン国に出張中で、ホテルに泊まっている。

Sアルミ「……………」スヤスヤ

(アルミはスーパージョー化したまま寝る)

……!

殺気を感じて目を覚ます。

Sアルミ「誰よ、こんな夜遅くに」

「…答えるとでもっ?」

相手の姿が見えた。

全体的に黒い服を着ており、目が赤く光っている。
声からして女性にようね。

S アルミ 「で、何しに来たの？」

「アルミ・マリオ、お前を…殺しに来た」 スッ
女性 は短刀を出してそう言った。

S アルミ 「…へえ」

そんな堂々とそれを言うのね。

S アルミ 「バカなのかしら？」

「……………」

…自分の事か？」

シュツ！

Sアルミ「ツ!?!」サツ

今の攻撃、見えなかつたわ…!!

Sアルミ「(まさか、コイツは…)炎時！」ボツ！
部屋全体を対象範囲にした。

「……………効かないな」

Sアルミ「なっ!?!…ツ」サツ

また攻撃が来た。

さつきから紙一重でかわしている。

Sアルミ「ハッ、天空掌！」ズガアン！

「遅い」サツ

避けられたわね。

Sアルミ「時間停止！」

←ブウウウン…

これで大丈夫…!?

「私にはそれも効かない。…再生」

→ブウウウン…

S アルミ 「ありえない…!」

仮に同じ時間停止能力を持っていたとしても、不可能なハズ…!

「私の能力はお前の能力と若干違う……」と、話はここまでにしよう」 シュツ

S アルミ 「消え…ガフツ!」ズバズバツ!

いつの間にか腹辺りを斬り裂かれていた。

S アルミ 「グツ、う…」

ポタツ

血が滴る。

「さて、殺すか…」 スツ

嫌な予感がするわ。

S アルミ 「させ、ないわよ!幽霊化!」ゴオオオツ!

「!？」

私の周りをエネルギーが渦巻き…

アルミ「が、はっ……。」バタン
私は、死んだ。

「何が、起きたんだ？……心臓が止まっている。死んだな」
…………。

「……アルミさん、本当にすみませんでした……！」シユツ
……………?

Yアルミ「ふう……」

幽霊化、成功ね。

見た目はスーパージョウ化したままのようね。

コンコン

恐らくフリスクね。

Yアルミ「はーい」ガチャツ

フリスク「アルミさん、さっきの音はな……!？」

Yアルミ「殺されちゃった、てへっ♪」

キャラ「はああああああ!？」

????? 「アルミを殺したか？」

「はい…」

「何だその浮かない顔は？」

「何でもないです」

「そうか。…解散だ、報酬は明日やる」

「はっ」

シュツ

マイペースなアルミ

sideアルミ・マリオ

アルミ「まあまあ落ち着いて」

フリスク「死んだ本人が落ち着いているのはおかしくないですか!？」

アルミ「いやー、なんかね、幽霊って案外快適なのね」

キャラ「冷静すぎませんか？」

まあ、確かにそうね。何故かしら？

アルミ「私も分からないわね」

フリスク「…もしかして、幽霊化による性格変化ですかね？」

キャラ「確かに！」

アルミ「なるほど、それが理由ね」

フリスク「生前よりマイペースになってませんか？」

アルミ「そうねん」

へかさんの喋り方の真似をした。

キャラ「…はあ。今夜は一旦寝ましょう。直接幽霊化したから遺体はないですし」

アルミ「ん、そうしましょ♪」

フリスク（面倒くさい事になりそうだ。はあ…）

ー次の日ー

ん、いい朝ね♪

アルミ「おはよう、2人とも♪」

フリスク「おはようございます」

キャラ「寝れました？」

アルミ「ええ、久々の快眠だったわ♪」

フリスク「そうですか。それで、犯人はどのようなヤツでしたか？」

アルミ「全体的に黒い服を着た女性で、短刀を装備してたわ。しかも、火が効かない上に時間停止も無効だったわ」

キャラ「えっ、時間停止が!？」

アルミ「それと、私の幽霊化が完了する直前に、『アルミさん、本当にすみませんでした』と言っていたわね」

フリスク「つまり、殺りたくて殺ったワケではない、と？」

アルミ「恐らくそうよ」

キャラ「……………」

アルミ「どしたの、キャラ？」

キャラ「確か、ソジツク国に時間を操る能力を持つ家系があったような気がします」

フリスク「えっ？」

時間？

………あ。

アルミ「あつたわね」

フリスク「あるんですか!？」

アルミ「ええ、でも知っている人はかなり少ない家系よ。名前は『十六夜家』。生まれつき時間を操る能力を持っており、そのせいか短命で、大体が30代で死ぬ家系よ」

キャラ「時間を操るって、止めるだけじゃないんですか？」

アルミ「ええ。止めたり、加速させたり、遅速させたり。巻き戻す事はできないわね」

フリスク「なるほど。…まさか、アルミさんが生き返らないようにアルミさんの時を加速させ、寿命で死なせる予定だったんじゃないですか？」

アルミ「十中八九そうでしょうね」

キャラ「とりあえずその十六夜家に訪問してみましよう」

アルミ「オーケー♪」

M U L A の物語

作 七隈千早 七隈千代

B G M 数人

作画 貝塚絵奈

十六夜家への訪問

side アルミ・マリオ

移動するため、カービイさんを呼んだ。

カービイ「それじゃ行くよー！」

アルミ「おー！」

☆☆☆

―数分後―

カービイ「ココで良いかな？」

アルミ「はい、ありがとうございます」

カービイ「うん、犯人捜査頑張ってるね」

アルミ「はい！」

ティウルルル…

フリスク「で、何処なんですか？」

アルミ「確かこっちよ」

スタスタ

住宅街を進み、ある一軒家の前で止まる。

キヤラ「ココですか？」

アルミ「そ。意外でしょ？」

フリスク「はい、正直もう少し大きい家だと思いました」

アルミ「でしょ？…ポチツとな♪」ポチツ

ピンポーン

「はい」

ガチャッ

一応私の姿は誰でも見えるから何の問題もないわね。

「どちら様…えっ!？」

アルミ「どうも」

「アルミ・マリオさん!?!何故こちらに?」

アルミ「ちよつと話があるんですが、よろしいですか?」

「は、はい!どうぞこちらへ!」

フリスク「……………」

―居間―

極夜「どうも、十六夜家当主、十六夜極夜と申します。アルミ・マリオさん、本日は

「どういったご要件で？」

銀髪の男性がそう言った。

アルミ「(なんでだろう、この人達全く悪そうに見えないわ) …とある事件が起きまして、その事情聴取でココに来ました」

極夜「事件ですか…内容をお聞かせ下さい」

アルミ「はい…(2人とも、家の外で待機よ)」チラッ

2人『…失礼します』スタスタ

2人が部屋から出ていく。

アルミ「大まかな内容として…私が暗殺されました」

「!？」

周りの人々が驚いている。

極夜「ア、アルミさんが暗殺ですか!？」

アルミ「はい、私は現在幽霊化してます」

極夜「なるほど…詳しくお願いします」

アルミ「私は仕事先のホテルに泊まっており、寝ていました。そこで物音がしたので目を覚ますと、暗殺者が現れました。全身黒い服で、目が赤く光ってました」

極夜「黒い服で、赤い目ですか」

アルミ「はい。それで、はつきりと私を殺すといい、襲いかかってきました」

極夜「…続けて下さい」

アルミ「私は迎え撃ちましたが、火が通用せず、物理攻撃が避けられました」

極夜「……………」

アルミ「…私は時間停止で相手を捕える事にしました。しかし…相手も何故かその空間で動けたのです」

極夜「!?!」

アルミ「そして私は成す術もなく攻撃され、トドメを刺される寸前に私は自ら幽霊化しました。以上が内容です」

極夜「そんな事があったとは…」

アルミ「そこで、時を操る能力を持つこの家系に事情を聞きに来ました。心当たりはありますか?」

極夜「……………」

…
あります
」

犯人の正体

side アルミ・マリオ

極夜「…あります」

アルミ「!!…お聞かせ下さい」

極夜「あくまで私の予想ですが…恐らく私の娘が関わっています」

アルミ「娘、ですか…?」

極夜「はい、名前は十六夜白夜です。彼女は5年ほど前に家を出て、2年前くらいから音沙汰なしで…」

アルミ「その子が私を殺した可能性があると?」

極夜「…そういう事になります。…1つ質問していいですか?」

アルミ「?…はい」

極夜「貴女が幽霊化する直前に、暗殺者は貴女に謝りませんでしたか?」

アルミ「謝る?……ありましたね」

確かに謝ってたわ。

極夜「彼女はそんな性格でして、悪い事をしてしまったらすぐ後に謝るんですよ。後

悔しながら」

なるほど…

アルミ「つまり、本心で私を殺ったワケではないと？」

極夜「はい。また予想になりますが…誰かが白夜を脅してるのでしょ」

アルミ「……………」

人を脅して私を殺した？

アルミ「…許せませんね」

極夜「アルミ・マリオさん…もしも犯人が白夜を操っていたのなら…どうか、白夜を助けてやって下さい…お願いします！」ザッ

『お願いします…!』

アルミ「!？」

極夜さんも周りのみんなも土下座をした。

アルミ「か、顔を上げて下さい！白夜と確定したワケではないですし…」

極夜「それでも、です！」

アルミ「……………（凄い、この人達は…ホントに優しい人達ね…）分かりました、助けてみせます！」

極夜「…!ありがとうございます！」ザッ

再び土下座された。

そして私は家を出た。

ガチャツ

アルミ「2人とも、話は終わったわ」

ーただ今説明中ー

アルミ「という事よん」

フリスク「なるほど、それは納得いきますね」

キャラ「で、その十六夜白夜さんをどうやって探すんですか？」

どうやって探すのかって？

アルミ「フフフ…」ゴゴゴ…

2人『……?』

アルミ「役所に行って住民票を見てくるわ！」ダツ

2人『職権乱用ですか!?!』

失礼な!これは殺人事件、ちゃんとした調査よ!

(被害者が捜査してるけどね)

ー役所ー

アルミ「よし、取ってきたわ」

フリスク「は、はあ…」

アルミ「ええと、ソジツク国の…ふむふむ、ココからそれほど遠くないわね」
キャラ「距離はどれぐらいなんですか？」

アルミ「250kmほど」

フリスク「何処が”それほど遠くない”ですかッ!？」

アルミ「よし、走って行くわよ」

キャラ「了解！」

フリスク「だから何処がそれほd」

アルミ「レッツゴー！」

ダダダダダ

フリスク「あ…ま、待って下さい〜！」ダダダダダ

十六夜白夜の住所まで走って移動するのであった。

速さ？マツハ2ぐらいよ。

白夜の日記

side十六夜極夜

アルミさんが家を出た。

極夜「心配だな…」

「極夜さん、お薬です」スツ

極夜「うん、ありがとう」

ゴクツ…

私の寿命も後数年かもしれないね…

sideアルミ・マリオ

アルミ「ここね」

フリスク「ハア、ハア…」

キャラ「フリスク、どしたの？」

フリスク「2人ともなんで疲れてないんですか!？」

アルミ「慣れ」

キャラ「慣れね」

フリスク「ツツコむのも疲れた…」

そう？じやあ休んでなさい（お前のせいだぞ！）

…さて、と。

ピンポーン

アルミ「……………」

しーん

アルミ「来ないわね」

フリスク「何処かに出かけてるか、逃亡したかですな」

キヤラ「…あ。アルミさん、幽霊なんですからすり抜ければ良くないですか？」

アルミ「忘れてたわ。アンタ達はココで待つてなさい。ほいさつさ」

スウーツ。

ー家の中ー

中は普通だった。

アルミ「散らかってないわね」

部屋はしっかりと整頓されており、掃除もされていた。

アルミ「出てからあまり経ってないようね……………ん？」

机の上に一冊の本があった。

日記みたいね。

アルミ「読んでみよ」パサッ

内容は1ヶ月前からね。

―数分後―

1週間前の日記を読む。

アルミ「…詐欺団体？」

騙されてしまったようね。

「詐欺団体はこう脅してきた。『俺達にとつて最も邪魔な存在であるアルミ・マリオを殺害せよ。成功すれば報酬をやる。失敗すれば貴様の命はない』と。私は一体何をすればいいの…?」

詐欺団体は何処のどいつなのかしらね？

ページをめくる。

「確かに私の能力や技術があればアルミさんを殺れる。でも、私はそんな事をしたくない」

でしようね。脅されたからといって殺したいワケではないわよ。

次の日の日記を読む。

「ヤツらがまた家に来た。『一週間以内に殺害しろ』と言われた」

アルミ「……怪しいわね」

何故ピンポイントに白夜に殺害しろと言ったのか。

まるで十六夜家の能力や性格を知っていたような感じね。

「警察に通報するべきなのかしら？それとも、自殺？私は何をすればいいのか分からない……」

その日の日記はそこで終わったので、次の日、つまり5日前の日記を読む。

「警察に通報する事にした。これでいいのかと思っただけど、人を殺さずにすんだ」

アルミ「……？」

おかしいわね。

「通報したら、すぐこちらに向かうとのこと。内心希望に満ちた」

何かがおかしいわ。

4日前の日記を読む。

「昨日、警察……ではなく詐欺団体が来た。私のスマホは既にハッキングされ、警察を読んでも詐欺団体に繋がるようになっていた」

4日前の日記はそこで終わる。

アルミ「まさか……！」

最後である、3日前の日記を読む。

「私は四六時中監視状態になった。……もう、逃げられないのかな……？」

その行の下には涙が染みている。泣きながら書いたのね。

「もう殺るしかない。神様、私を地獄に落とすのなら……あの詐欺団体も落として下さい
……」

日記はそこで終わった……。

アルミ「……許せないわ」

優しい人をここまで追い込んだ詐欺団体……

アルミ「ぶっ潰してやるわ」

白夜を探せ！

side アルミ・マリオ

日記の内容を2人に話した。

フリスク「その詐欺団体、許せませんね」

キャラ「でも、どうやって探すんですか？」

アルミ「……………」

フリスク「アルミさん？」

アルミ「50メートル先の電柱の裏に誰がいるわね」

キャラ「えっ？」

アルミ「時間停止！」

←ブウウン…

スタスタ

ほらいた。

アルミ「私達を監視してるのね」

フリスク「なんで分かったんですか？」

アルミ「コレよ」スッ

キャラ「双眼鏡?…なるほど、レンズの反射ですか?」

アルミ「そつ。さて、縄を出して縛って〜」グルグル

フリスク「尋問します?」

アルミ「もちろん♪」

フリスク(楽しそう…)

アルミ「よし。再生!」

→ブウウウン…

「…は!?なんで俺縛られて…あ」

アルミ「ごきげんよう」

「ア、アルミ・マリオ!」

アルミ「私達のこと、監視してたよね?」

「そ、そんな事「あるわよね?」…あります…」

アルミ「誰からの命令なの?」

「教えるワケねーだろ…ヒツ!」

キャラ「答えろ。しないと首をはねる(脅し)」

おお、怖い怖い。

「……………ト」

アルミ「ト？」

「トラパゾイド様だ…詐欺団体のボスの…」

トラパゾイド？ 変な名前ね。…って

アルミ「詐欺団体!? 何処にあるの!？」

「あ、あそこの建物だ…」

へえ、あそこね。

フリスク「…今までの内容で嘘を言ったか？」

「い、言ってるねえ！ 流石に死ぬ所でそんな事しねえよ！」

キャラ「…アルミさん、どうします？」

アルミ「コイツはトラパなんちゃらに脅されてる可能性があるから、放置よ。フリス

ク、アンタはコイツを近くの交番に連れて行きなさい」

フリスク「はい。ほら、歩け！」

「は、はい…（助かった、のか?）」

スタスタ…

アルミ「さて…行くわよ、キャラ」

キャラ「はい！」

建物に入る。

アルミ「特別捜査官のアルミ・マリオとキャラ・ユメミルです。この建物を調べに来ました」

キャラ「強制なので直ちに扉をお開け下さい」

………3、2、1。

アルミ「開かないので強行突破します。ハアッ！」

ドゴオ!

「来やがったな!オラオラア!」ドドドドツ!

銃ね。

キャラ「ケツイシールド!」ピキツ!

銃弾は全て跳ね返された。

アルミ「炎時!」ボオツ!

「ギャアアア!」

アルミ「このまま行くわよ!」

キャラ「はい!」

ドゴドゴドゴツ!

―数分後―

キャラ「社長室……」

アルミ「時間停止！」

←ブウウウン……

ガチャツ。

アルミ「ツ！」サツ

ナイフが飛んできたので、すぐ避けた。

棒人間（恐らくコイツがトラパゾイド）の隣の銀髪の女性がこちらを見る。

アルミ「アンタが白夜ね」

白夜「そうですよ……アルミさん」

事件解決

side アルミ・マリオ

白夜「やはり生きてたんですね」

アルミ「いや、幽霊だから死んでるんですけどね」

白夜「何しに来たんですか？」

アルミ「アンタを助けに来た、と言ったら？」

白夜「……自分を殺した人を助けるんですか？」

アルミ「ええ……アンタの隣にいる人の仕業だからね」

白夜「ツ……何故それを？」スツ

白夜はナイフを向けてきた。

アルミ「アンタの家を調べて、日記を読んだのよ」

白夜「……筒抜けなんですね」ドサツ

アルミ「で、アンタは助けられたいの？」

白夜「はい……助けて下さい……！」

アルミ「……フツ、了解よ。キャラ！」

天井を突き破って飛んでいった。

白夜「させません！時よ止まれ！」

←ブウウウン…

アルミ「…ナイスよ白夜！ハアッ！」ドツ

ガシッ

宙に浮いているトラパゾイドを掴む。

アルミ「縄で縛って、と！キヤラ！」ポイツ

キヤラ「うおっと！」ガシッ

縛ったトラパゾイドをキヤラに投げた。

白夜「アルミさん、この空間では衝撃が蓄積します！やっちゃって下さい！」

アルミ「へえ、それは良いわね！フッフ」ポキポキ

骨を鳴らす。

アルミ「オラア！オラア！オ——————り——————ヤア——————！」

ドゴドゴドゴツ！

ラツシュでトラパゾイドをしこたま殴る。

白夜「そして時は動き出す…」

→ブウウウン…

トラパゾイド「ガッハッツ!?」メリイツ!

一気に襲いかかる衝撃でトラパゾイドは吹っ飛び、壁にめり込んだ。

トラパゾイド「ガハッ…」

そして気絶した。

アルミ「逮捕よ」

白夜「終わったんですね…」

アルミ「白夜、これでアンタは自由よ」

白夜「ありがとうございます…!」

―数日後―

アルミ「…と、いうことがあったんですよ」

私はあの後すぐに生き返った。ステータス保存ドリンクなしで。

ルメ「アンタ、やっぱり凄いわね」

ザクロ「流石アルミさんだな」

アルミ「私はそれ程すごくない。努力次第よ」

ザクロ「…そっか」

アルミ「じゃ、ルメさん、帰ってアルヤを世話してきます」

ルメ「ええ、また」

アルミ、暗殺!?! 完

次章予告

真のPルート

ケーティの親戚、ベティ・ノア。

彼女のタマシイは少し特殊で、ケツイと対を成すキョウフのタマシイである。

そんなベティの狂気が謎の暴走を始めた!

フリスク達はベティを止める事ができるのか!?

第6章 真のPルート 相談

♪ UNDER TALE — sans.

side フリスク・ユメミル

fris スク「お姉ちゃん、ヒマだね」

キャラ「そうね」

僕は事務所できつろいでいた。

チャリン。

「し、失礼します」

桃髪ショートの少女が入ってきた。

fris スク「!」

この子は同じクラスだった：

fris スク「ベティ・ノアさんだったかな？」

ベティ「うん、久し振りだね fris スク君」

キャラ「知り合いなの？」

フリスク「うん、高校で同じクラスだったんだ。…それで、ご要件は？」

ベティ「私のタマシイ、特殊なのは知ってる？」

フリスク「ああ、確かピンク色だったね」

キャラ「ピンク色のタマシイ…確かキョウフだったかしら？」

ベティ「はい、そうです」

フリスク「それがどうかしたのかい？」

ベティ「最近不安定になって、何か、力が暴走しそうなんだ」

フリスク「暴走!？」

ベティ「しかも、私の裏人格…狂気が目覚めそうで…」

キャラ「それはヤバいわね…」

ベティ「どうすればいいのかな…？」

フリスク「うーん…」

タマシイと狂気の暴走か…

フリスク「正直よく分からないね。また明日きてくれる？」

ベティ「うん、ありがとう。失礼しました」

ガチャツ。

キャラ「…どうする？」

フリスク「ちよつとアルミさんにきいてみよう」スツ
プルルル…ガチャッ

アルミ『もしもし』

フリスク「アルミさん、フリスクです。ちよつとした相談があるんですけど」
アルミ『相談？言ってみなさい』

―ただ今説明中―

フリスク「それで、暴走を止めるにはどうすればいいと思いますか？」

アルミ『そうね……精神を鍛えるタイプの特訓かしら？』

フリスク「他には？」

アルミ『ないわねッ！』

フリスク「ええ…」

流石アルミさんだ…（白目）

フリスク「ありがとうございます、失礼します」

アルミ『ええ、頑張つて鍛えなさい』

ツ…ツ…

キャラ「特訓ね…」

フリスク「僕教えるの苦手なんだけどな…」

side ベティ・ノア

私はフリスク君とキャラさんの事務所から帰っていた。

ベティ「いい考えがあるといいな……ん？」

路地裏から変な気配がする。

ベティ「なんだろう……」

―路地裏―

「……………」

路地裏には黒いコートを着た……

ベティ「スケルトン……？」

スケルトンみたいなモンスターがいた。

ベティ「あの……大丈夫ですか？」

「……………」 シュツ

ベティ「消えた!？」

モンスターはまるで最初からそこにいなかったように消え去った。

ベティ「……………」 ズキツ

い、いきなり頭が……

『キャハハ、殺す!』

ベティ「ダ、ダメ…」
私はそのまま意識を失った。

襲撃、開始

♪ UNDER TALE | BUT NOBODY CAME
side フリスク・ユメミル

fris 、「お姉ちゃん、そろそろ閉めよう」

キャラ「オーケー」

ガチャツ

ベティさんの件、どうしようかな？

ゴオオオオ…

fris 、「…？」

キャラ「この変な感覚は…」

早めに帰った方がいいね、コレ。

この変な感覚を調べなかったことを後悔するのは別の話。

― 次の日 ―

side W・D・サンズ

サンズ「ふああああ…」

パピルス「兄ちゃん、朝ごはんできたよッ！」

サンズ「おう、そうか」

パピルスの料理旨いんだよな。

サンズ「いただきマウス」パクッ

ん、うまい。

サンズ「今日は土曜日だが、何するんだ？」

パピルス「アンダーン達と遊びに行くよッ！」

サンズ「そうか。じゃあおいらは留守番するぜ」

パピルス「了解だっ！」

―数分後―

パピルス「行つてきますッ！」

サンズ「おう」

ガチャッ

……………。

サンズ「寝るか」

庭のハンモックに行く……………？

サンズ「誰だ？」クルッ

「……………」

桃髪の少女がいた。

…表情がやばいが。

サンズ「…まあいいや。寝るか」

クルッ

「…死ぬ」

シユッ

サンズ「よっ」サツ

なるほどな。

サンズ「おいらの大事なお昼寝タイムを邪魔するのか」

「貴様の力が必要だ」

サンズ「おいおい、必要なら殺すなよ」

「……………もういい、くらえ」ギユン

敵は鎌を出す。

ケーティの鎌みたいだな。

サンズ「…青」

キーン！

「これは!？」

サンズ「少女がそんな物騒な武器持ってんじやねえよ」

「関係…ない!」ドゥ

こいつ、強いな。

サンズ「ガスターブラスター」ドガーン

「ギャッ」

当たったか。

サンズ「さっさと逃げる事をオススメするぜ」

「逃げ、ない!」ギロツ

敵は睨みつけてくる。

あーあ…

サンズ「戦争から一年も経ってないというのにな。骨攻撃」

シュッ!

「はああ!」バキッ

サンズ「折ったか。だが…これはどうだ?ガスターブラスター、集中砲火!」

ドガガガガガッ!

「ギッ、ギャアアア!」

シュツ

サンズ「…逃げたか」

これから厄介なことになりそうだけぞ。

「クソツ、失敗だ…」

逃げた少女はそういった。

「…まあいい、チャンスはまだある」

ゴゴゴ…

「次の狙いは…アオイ・マリオだ。キャハッ」

アルミ「……………?」

この変な感覚は…

アルミ「嫌な予感がするわね」

V S アオイ

side アオイ・マリオ

レイン 「お母さん、アレほしい！」

アオイ 「どれどれ？」

レイン 「これ！」

『イナズマイレブン4 円堂の最後のFF』

ああ、お姉ちゃんがめっちゃくちややり込んでたヤツだ。

アオイ 「いいよ」

レイン 「やったく！」

ゲームを買い物かごに入れる。

アオイ 「あとは夕食の食材と…「ドガーン！」え!？」

店の外から爆発音が聞こえる。

「に、逃げろー！」

「怪物だー！」

レイン 「どうしたのかな？」

アオイ「…レイン、アンタはココで待ってて」

レイン「え、お母さん行くの？」

アオイ「うん、ちよつと行ってくる」

レイン「…分かった、頑張つて」

アオイ「ふふつ、もちろんよ。じゃ！」ダッ

―店の外―

「何処に居るの…？」

店の外には桃髪の少女がいた。

どう見ても暴走している。

アオイ「タマシイ感知…」

珍しいね、タマシイがキョウフって。

そして狂気が暴走してる、と。

「…あ、見いつけた！」クルッ

アオイ「私を探してたの？」

「うん…殺す！」ドッ

アオイ「……………」

なるほど、分からないね。

アオイ「私を殺す？ 冗談言わないでよ。 : ソウルブラスター」
ドガン！

「フッ！」 サッ

避けたね？

アオイ「じゃあこれは？ ガスターブラスター！」

ドガン！！

「ギャッ!？」

今度はかすったか。

アオイ「速いね、動きが」

なんかダークルメみたい。

「今度はこつちの番！」 ギユン

敵は鎌を出す。

アオイ（それなら対策はバッチリだね）

「逝っけー！ー！」 ズバッ！

：フッ。

アオイ「吸収！」 ギュルルル！

「なっ!？」

霊力ならカンタンに吸収できる。

アオイ「かーらーのー？リーパーサイス！」ズバツ！

文字通り死神の鎌を出し、攻撃した。

「ガフツ……！」

アオイ「私は殺しをしたくない、だから……とつとと逃げてくれる？警察に捕まってもその力じゃどうせ脱獄するだろうし」

「何を……！」

アオイ「10秒待つ。そのうちに逃げて」

10……

「ギツ……」

9……

「舐めるな……」

8……

「……ツ！」ズバツ

アオイ「よっ」サツ

7……

「クソツ」

6…

「クソツ、クソツ！」

5…?

「クソツたれがアアアア！」

アオイ「!?」

ギユオオオオ!

アオイ「タマシイがさらに暴走した!？」

これはまずい!

アオイ「リーパーサイス！」ズバズバツ

「アアアアア！」シユツ

アオイ「…逃げたね」

何が目的なの…?

「この、力は…?」

ギユウウン…

「…これが、あれば…!」

ザツ

「殺せる…殺せるよ…キヤハハハハハハハハッ！」

V S アルミ

side アルミ・マリオ

アルミ「3、2、1…」

ドゴオ…

「キャハッ…」

ドンピシャで来たわね。

アルミ「アンタがベテイね」

ベテイ「そう。性格にはベテイの裏人格、だけどね♪」

アルミ「へえ。今まで狂気と何回か戦って来たけど…」

ルメさんとお母さんの狂気ね。

アルミ「アンタは何か違うわね」

ベテイ「キャハハ、そうなの？別にどうでもいいけど」

どうでもいいんかい。

アルミ「で、何故私の所に来たの？殺しに来た？」

ベテイ「御名答。…死ね」ドッ

アルミ「炎天掌」ズガアン!

ベティ「やつ!」ドゴツ!

これは、中々の強さね。

アルミ「天空掌!」ズガアン!

ベティ「ハアツ」ギユン

アルミ「なるほど、ケーティと全く同じ感じの鎌ね」

サンズの言う通りだわ。

(サンズは戦った後アルミに電話した)

ベティ「その首、はねてあげる!」ダッ!

アルミ「ホント物騒ね。∴ハイピリオン!」キイン!

数ヶ月前、ネクロンが寿命で死んだ時、彼はこう言った。

『俺の骨で剣を4本、それぞれの町にちなんだ作ってくれ』

それで、ネクロンの死後作ったヴァルキリー(力)はケーティに、ハイピリオン(知能)は私に、シラ(素早さ)はセイダンに、アストレーア(防御)はステイープに渡された。

だから私はこの剣を持っている。

ベティ「!?」(アルミが剣だど!?そんなデータ何処にも…)

アルミ「ぜあつ！」ズバツ

ベテイ「ガツ」

アルミ「火をつけて…フレイムソード！」ボオッ！

ベテイ「グハツ!?!（まずい、目覚めた力を試せてないのに!）」

アルミ（今すぐパンドラの裁判をした方がいいのかしら?）

ベテイ「（…）は、逃げるしか!…ッ!…ダッ

ベテイは逃げ出す。

アルミ「逃さないわよ? 時間停止」

→ブウウウン…

縄で縛って、と。

アルミ「再生」

←ブウウウン…

ベテイ「…しまった!」

アルミ「烈焼脚!」ドゴオ!

ベテイ「ガフツ…（どうにかして逃げないと…）」

アルミ「…ヘルフレイム」

ゴオオオオオ…

これでおそらく…

ベティ「ツ！（今だ！）」シユツ

逃げたわね。

アルミ「…ふう」

もう少し泳がせておいた方がいいわね。

「やめて…」

私は人を傷付けたくない…

「なんとかしないと…！」

この狂気から、抜け出すために！

『ふーん、抜け出したんだ』

「え、誰？」

『私？その内分かるよ、多分』

「狂気じゃないの？」

『狂気だよ？別の人の』

別の人の？よくわからないけど…

「手伝ってくれるの？」

『もちろん♪(この私…

…ダークルメがね♪)』

狂気と本体の分裂

side ダークルメ・パンドラ

ダークルメ「さて、ベティが助けを求めたし、これでいいんですか？」

ダークアルカ「ええ、今の所はそれでいいけど、万が一ベティの狂気が誰かを殺しそうになった時は力を貸しなさいよ」

ダークルメ「了解です」

ダークアルカ「じゃ、私はベティの狂気…ダークベティを追いかけるわね」

ダークルメ「はい、頑張ってください！」

ダークアルカ「ええ」ダッ

タタタ…

ダークルメ「ルメ…」

私は最近ルメとはあまり会ってない。

ダークルメ「後で会いに行こうかな…？」

side ダークアルカ・マリオ

私は空を飛んでベティを探している。

ダークアルカ「こっちね」ドッ

―数秒後―

ギユウウン!

ダークアルカ「ッ!」サッ

今のは間違いないわね。

ダークアルカ「後コレブーメラン式ね」サッ

「チッ」

ダークアルカ「今回で最初のセリフが舌打ちとはね」メタい!

ベティ「貴様も狂気か」

ダークアルカ「その通り♪ちなみにソレに関してはアンタの大先輩よ」

一応狂気歴40年ね。(長っ!)

ベティ「フン、そんな事関係ない。殺すだけだ!」ギユン

出た、ケーティの鎌。

ダークアルカ「リビットダガー」サッ

ネクロンの元部下、リビットからもらった短刀を出す。

ダークアルカ「フンッ!」ズバッ

ベティ「ッ!」キイン

ダークアルカ「ほら、さっきまでの威勢はどうしたの!？」ズバアッ!
ベティ「ガッ」

ベティに何箇所か切り傷をつけた。

ベティ（……今だ!）ニヤリ

……ザクッ!

油断、してたわ……

なーんてね?

ダークアルカ「私はその程度で殺られるとでも？」
ベティ「!?」

確かにベティの不意打ちは私の体を貫いている。

…ように見える。

ダークアルカ「再現って難しいわね。吸収！」ギュルルル!

背中から吸収を発動し、そのエネルギーを反対側から出す事で体を貫通している状態を再現したのよ。

ベティ「なっ!？」

ダークアルカ「私に不意打ちは通用しないっつーの。ヘルフレイム!」

ゴオオオオ!

至近距離でヘルフレイムを当てた。

ベティ「ガアアアア!」

ダークアルカ「(今よ、ダークルメ!) : ハアア!」ズバツ

sideダークルメ・パンドラ

ダークルメ「(了解ですよ、先輩!) ベティ、今助けるよ! 力を思いっきり開放しなさい!」

ベティ『はい! ハアアアアッ!』

ギユイイン!

ダークルメ「コレなら……!」

sideダークアルカ・マリオ

ベティ「グオツ!」

ベティが突然止まった。

ベティ「グツ、やめろ……出てくるな……(嫌だ、私は負けないツ!ハアアアア!)グオオオ
……!」

ギユウウン!

ベティ「……!やったー!」

ダークベティ「ば、ばかな……」

赤い護衛

♪INKTALÉ—TOKYO VANIA

side ダークアルカ・マリオ

ダークベティ「ク、クソツ…」

ベティ「貴女が私の狂気…」

ダークアルカ「ベティ、下がってなさい」

ベティ「は、はい！」サツ

ダークベティ「貴様、何のマネを…！」

ダークアルカ「これで、やっと本気でアンタを倒せるわね」

ダークベティ「ツ…」

ダークアルカ「ヘルフレイム」ボツ

ゴオオオオ！

ダークベティ「アアアッ！」ズバツ

鎌で抵抗するダークベティ。

ダークアルカ「無駄よ、無駄無駄。燃え尽きろ！」ドゴツ

ボオオオ!

ダークベティ「グオツ……!」

シユツ

ダークアルカ「また逃げたわね」

ベティ「……………」

ダークアルカ「…あ、まだ名前を言っていなかったわね。私はダークアルカよ」

ベティ「え?は、はい、よろしくおねがいます…」

「先輩……!」

ダークアルカ「ん?…遅いわよ」

ダークルメ「距離があつたんですよ!」

ベティ「あ、あの……」

2人『ん?あ』

説明が面倒くさい事になりそうね。

side W・D・パピルス

パピルス「ニヤハハッ!そんな事があつたのかッ!」

アンダイン「それでよ、アルフィーが……」

アルフィー「そ、そんな事言わないで……!」

俺様達はシヨツピングをしながら雑談をしていたッ。

アンダイン「ほら、レッドも楽しめよ。せっかくの休日だし」

アンダインはロイヤル・ガードの時部下だったレッドにそう言う。

レッド「は、はい。がんばります！」

楽しむのをどうやって頑張るんだッ？

アンダイン「おう、頑張れ。それで…ん？」

アンダインの足が止まった。

アルフィー「アンダイン、どうしたの？」

アンダイン「…誰か来るぞ」

パピルス「ホントかッ？」

アンダイン「ああ」

レッド「……………」スッ

…ドゴオ！

ダークベティ「キャハッ、見つけた♪」

ピンク色の髪の毛の女の子が来たッ。

パピルス「コホン。この偉大なるコックのパピルス様に殺気丸出しで何のようだッ

？」

ダークベティ「殺しにきたの」

ニヤツ：

パピルス「そんな堂々と言うんだなッ？ならこちらも…」

アンダイン「容赦しないぞ？」

アルファイ「わ、私は離れて攻撃するよ！」

レッド「斬り刻んでやります」

ダークベティ「キャハハ：行くよ！」ドツ！

レッド「新式弾幕戦！」

…キーン！

レドド「ダイアログボックス斬り！」ズバツ

これで敵の移動範囲が小さくなったねツ！

パピルス「骨攻撃！」シャツ！

ダークベティ「死んじやえく！」

戦いはまだ始まったばかりだツ。

覚醒アランダイン①

sideアランダイン

パピルス「青攻撃ッ！」

ピイン！

ダークベティ「重いね……」ズシッ

アランダイン「でかしたぞパピルス！オラア！」シャツ！

槍を何本も飛ばす。

ダークベティ「ッ、アア！」サッ

重い状態でその速さかよ。

アランダイン「厄介だな。レッド！」

レッド「はい！チャクラム！」シャシャッ

レッドはチャクラムを2個投げる。

ダークベティ「遅い！」サッ

レッド「……………」

バカだな、コイツ。

ダークベティ「…ガッ!？」

そのチャクラムはブーメラン式だぞ？

(ダークベティは少しバカである)

アンダイン「オラッ!」ザクッ

ダークベティ「ギャッ!ギギギッ…」

何だよその声、気味悪いな…

アルフィー「ミニメタトン!」ギユン!

ドスドスッ!

ダークベティ「くうう…」ササッ

パピルス「骨攻撃!ニヤハハ!」シユッ

ダークベティ「…ツ!」ズバッ!

パピルス「何ッ!？」

パピルスの骨を切りやがった!

アンダイン「槍いいい!」シャッ!

ダークベティ「ハアッ!」ズバッ!

アンダイン「なっ!？」

私の槍もかよ!？」

レッド「チャクラム弾幕！」ドドドドツ！

ダークベティ「…結界！」ピキッ

キーン！

レッド「!？」

弾幕も防がれたか…

アンダイン「ほぼ成す術なしだぞおい…」

ダークベティ「そう？じゃあ…死んで♪」ドツ

パピルス「ニヤッ!？」

敵がパピルスに突撃する。まずい！

アンダイン「…野郎ー！」ダッ

ダークベティ「逝っけ〜！」ズバッ

ズバッ！

パピルス「!？」

アンダイン「ガハッ…」

パピルスをかばって攻撃を受ける。

ダークベティ「あーあ、外しちゃった」

アンダイン「……………」ニヤリ

パピルス「アンダイン、俺様をかばって…」

アンダイン「安心しろパピルス、私は死なない」

パピルス「……？」

フリスクからもらった『コレ』が、役に立つ時が来たか…

ダークベティ「なんで、なんで死なないの!？」

アンダイン「何故って？それはな…」

…私には絶対死なないというケツイがあるからだ！」

カッ!

私から光が溢れ出す。

……。

♪ UNDER TALE—BUT SHE REFUSED
パピルス「アンダイン……!」

アルフィー「あの姿は!」

レッド「……!」

ダークベティ「なっ……」

Uアンダイン「覚悟するんだな、貴様」

♪ UNDER TALE—BATTLE AGAINST A TRUE HERO

ダークベティ「ツ、変身したくらいで調子に乗らないでよ!」

Uアンダイン「それはどうだろうな?…ハッ!」スッ

ドッ!

ダークベティ「!? (何このスピード!?)」

ドスッ!

ダークベティ「かはっ……!」

Uアンダイン「この程度では済ませないぞ?」

覚醒アンダイン②

♪ UNDER TALE — BATTLE AGAINST A TRUE HERO
sideアンダイン

Uアンダイン 「この程度では済ませないぞ？」

ダークベティ 「コイツ、ケツイを取り込みやがった…」 ハアアッ！ シュツ

Uアンダイン 「あらよつと」 サツ

動きが鈍くなったな、コイツ。

(イナイレ2のDE半田のマネ)

ダークベティ 「ツ…このっ！」 ギュン…

ドスドスドスッ！

ダークベティ 「ガフツ…」

Uアンダイン 「見た所お前は本体じゃないようだしな…殺しても問題ないだろう」 ギ

ロツ

ダークベティ 「殺されて…たまるか！ (今だ！今の内にエネルギーを地中に…)」 ダッ

Uアンダイン 「逃さねえよ！」 ドッ

アルフィー「!!アーンダイン、それは罨だよ！」

ダークベティ「気付くのが遅い！」パチン

ドスツ！

地中からピンクの針が出てきた。

Uアーンダイン「フツ！」ピヨン

飛んでかわしたがな。

ダークベティ「チツ（次は…あれ？パピルスがいない？）」

Uアーンダイン「オラア！槍イイ！」シヤツ

“槍”を大量に飛ばす。

確実に“殺り”とげるようにな、なんちやつて。（ばだmpsr!）

パピルス（……………今かツ？）グツ

Uアーンダイン（ああ、今だ！）グツ

パピルス（了解だツ！）シヤツ！

ダークベティ「その程度のやり、切れ……………ない!？」ドスツ

Uアーンダイン「馬鹿野郎、槍は硬度も攻撃力も強化されてんだよ！それとな…」

ダークベティ「?……………グフツ!？」グサツ！

Uアーンダイン「敵を見失っちゃダメだろう？」

ダークベティ「ガッ…（まずい、そろそろ体力がなくなってしま…どうすれば…！）
…ガアアアア！」

ギユオオオ！

Uアンダイン「何だ…？」

敵の周りにエネルギーが溢れ出す。

「むに」や…」

3人『!?!』

変なピンク色の生物が現れた！

ダークベティ「行け…クーム」

クーム「に」やゝ！」ダダダ

パピルス「ニヤツ？逃げていったぞ？」

…!!!

Uアンダイン「パピルス、すぐにそいつを追いかける！」

パピルス「!?わ、分かったッ！」ダッ

ダークベティ「させるとでも？ハアッ！」

アルファイ「簡易結界！」ピキッ！

パピルス「ナイスだぞッ、アルファイ博士！行ってくるッ！」ダッ

ダークベティ「ク、クソツ……」

Uアンダイン「……そろそろトドメだ」スツ

ギユイイン……!

規則的に槍を並べる。

Uアンダイン「……スピア・オブ・ザ・ヒーロー!」

ドシヤアアア!

ダークベティ「こんなもの隙間だらけ……何!?!」

Uアンダイン「対象が動く度に方向が修正されるんだ。そのまま死ぬ!」

ダークベティ「ガハッ、グフツ……ク、ソガツ……」ボタン

フツ……

狂気は倒したが…

side ダークアルカ・マリオ

ベティ「…あれ？」

ダークルメ「どうしたの？」

ベティ「なんか…狂気が無くなったような感じがします」

ダークアルカ「まさか、誰かがダークベティを殺したって事？」

ベティ「そうなりますね」

ダークベティ「それはでかし「プルルッ！」…はい」

電話はアルミからだった。

アルミ『連絡するわ。町に目が黒くて体がピンク色の怪物が現れたわ。現在私とパピルス、サンズが交戦中よ。すぐに加勢をお願いするわ、以上』

ツ…

ダークルメ「ピンク色の怪物？」

ベティ「あ…コレですか？」ギユウウン

クーム「むにゃ」

ダークアルカ「え？」

ベティは目が黒いオレンジ色の生物を生み出した。

ベティ「キョウフのタマシイを持つてる人特有の能力ですよ」

ダークアルカ「は、はあ。つまりアルミが言ってるヤツはダークベティが生み出したヤツ？」

ベティ「は、おそらく。本体が死んでもエネルギーがある限り動き続けるので」

ダークルメ「厄介だね……」

ダークアルカ「行きましょ！」

ダッ

side ケーティ・マリオ

ケーティ「さつきのお姉ちゃんからの連絡、どうしよう？」

こころ「このコーヒーを飲み終わった後移動しましょ「ドガン！」……え」

「何だ何だ!？」

喫茶店の外から爆発音が聞こえる。

「か、怪物だ〜！」

ケーティ「……マジか」

こころ「……」ゴクゴク

ケーティ「いや、速飲みしなくても…」

こちら「…ふう、行きましよう」

ケーティ「え、ええ」

ダツ

―店の外―

怪物「む”にやあああ!”

ケーティ「大きい…」

こちら「その言い方は勘違いを生むわよ?」

「…んな事言ってる場合か!」

パシイン!

2人『痛つ!…お姉ちゃん!?(アルミさん!?)』

アルミ「とつとと加勢しなさい!」

2人『は、はい!』

ケーティ「ヴァルキリー!」シャキン

アルミ「ハイピリオン…」

こちら「……………」スツ

ズバツ!ダンツ!

斬撃と弾幕が放たれる。

アルミ「パピルスとサンズは今待機中よ。もうすぐ来るわ。きつとビックリするわよ？」

ケーティ「ビックリ？…ウイザーインパクト！」ドガーン！

アルミ「ええ、私も最初はビックリしたわ。…神爆熱スクリュー！」ドツゴオン！

こころ「アルミさんが驚くほどなんて。…面々舞！」シユバツ！

怪物「ぐうう…」

「くらえー！骨攻撃ツ！」シユツ

ドスツ！

怪物「むッ!？」

アルミ「パピルス、終わったの？」

パピルス「ああ、終わったぞッ！」

…スタツ

「よう、お前ら」

2人『!？』

サンズの見た目は大部変わっていた。

ジャンパーは白くなっており、赤いスカーフを巻いていた。

ジエノ「この姿、ケツイを取り込んだ姿なんだが、おいらはジエノと呼んでいる」

V S 怪物クーム①

sideアルミ・マリオ

ジエノ「で、アルミも戦うのか？」

アルミ「いや、アンタに任せるわ。私じゃ足手まといになるだろうし」

ジエノ「お前がそうなるワケないだろ」

アルミ「…それもそうね。2人で倒しましょ」

ジエノ「おう」

…スタツ

ダークアルカ「ちよつと待ちなさい」

ダークルメ「この子も戦わせて」

ベティ「……………」

アルミ「アンタが本体のベティ？」

ベティ「はい…私が生み出したモノ（狂気）なんです、協力させて下さい！」

ジエノ「…どうする、アルミ？」

アルミ「…ふふっ、許可するわ。くれぐれも死なないようにね！」

ベテイ「はい！」

ザツ

アルミ「行くわよ！」

怪物「グオオオ！」

ジエノ「まずはコイツだ。ケツイブラスター！」ドガンン！

アルミ「ボルケイノカット！」ドシユツ！

ベテイ「(今でできる全力を出すんだ！) キョウフ波動！」ドガンン！

怪物「ムツ…ムニ” ヤアア！」

ギユイイン…！

光線が来るわね。

ドガンン！

ジエノ「へっ、光線には光線だぜ。ケツイブラスター…何本か！」

数字は不特定なのね(笑)

ドゴオオオオオオオ！

怪物「ムウ…ニヤアアア！」

サンズのブラスターと怪物の極太光線がぶつかり合う。

ジエノ「増やすぜ！おらあああ！」

ドガーン！

怪物「むに〃 やつ!?グオオ…」

シユウウウ…

アルミ「!?」

ねちよつ…

怪物1「グオ」

怪物2「グオ」

怪物3「グオ」

ジエノ「分裂しやがった!？」

怪物は何十匹もの小さなヤツらに分裂した!

ベテイ「焼き尽くすしか倒す方法がありません…」

アルミ「マジか。…みんな、手分けして倒すわよ!」

ダークアルカ「ええ!ヘルフレイム!」ゴオオオオ!

「グオオ…」フツ…

タタツ!

フリスク「うわつ、なんですかこの状況!？」

アルミ「やつと来たわね…とりあえず敵を全員焼き尽くしなさい!斬撃は絶対にし

ちやダメよ!」

キャラ「は、はい!…ケツイ波動!」ドガン!

「グオオ…」フツ…

一方、その頃…

side ルメ・パンドラ

ルメ「最近視力が落ちたのよね…」

ザクロ「だからメガネをかけてるのか」

ルメ「ええ…似合う?」

ザクロ「おう、クソ似合ってるぜ」

ルメ「そう…:…ん?」

ダダダー

アオイ「ルメさー!ーん!」

ルメ「アオイ?どうしたの?」

アオイ「連絡もらってないんですか!」

ルメ「連絡?…あ、スマホ電池切れだったわ」

アオイ「ええ…」

レイン「アルミさんが、でっかい怪物と交戦中だそうです!それで援軍が欲しいそう

です！」

ルメ「それはヤバいものを聞きそびれたわね。ザクロ、私達も行くわよ！」

ザクロ「おう、もちろんだ！」

ダッ！

V S 怪物クーム②

side アルミ・マリオ

ダダダッ！

ルメ「アルミ、戦況は!？」

アルミ「ルメとザクロね…ピンク色の怪物どもを一点に集めなさい！」

ザクロ「了解だ！」

…スタツ！

アオイ「お姉ちゃん、私は!？」

アルミ「ソウルブラスターで怪物どもを消し飛ばすのよ！レインはアオイの補助をし

て！」

アオイ「オーケー！」

レイン「分かりました〜！」

アルミ「これで一応役割は与えたから、後は敵を焼き尽くすだけね…スーパー化！」

カッ！

S アルミ「炎天掌・青！」ズガアン！

「グオオ…」フツ…

ケーティ「ウイザーインパクト！」ドガーン！

「こころ」面々舞！」シユツ！

「グオオ…」フツ…

「どんどん倒さなきやいけないわね…」

sideベティ・ノア

ベティ「キョウフ波動！」ドガーン！

「グオオ…」

ハア、ハア…

ベティ「体力が…」

フリスク「ベティ、無理しちゃダメだ！」

キャラ「もう休みなさい！」

ベティ「…でも、これの原因は私なんです…！」ピカッ

フリスク「…？（今のは…）」

ベティ「コイツらを…キョウフを…超えて見せる…！」

「むに」やあああ！」シユツ

ベティ「ハアッ！」ドガーン！

「グオオ…」

キヤラ「…苦しくなったら言いなさいよ」

ベテイ「…はい！」

キヨウフを…ユウキに変えるんだ！

side W・D・サンズ

ジェノ「……？」

怪物どもは突然おいら達への攻撃を止めた。

「ムニヤムニヤ…」

パピルス「何だツ？」

「むにゅ や〜！」

ぐにゅつ。

ジェノ「!!まさかコイツら、合体を!？」

パピルス「それはヤバイぞツ!今すぐみんなに連絡するツ!」ダダダー

ジェノ「ああ、頼んだぞ。…合体する前に消し飛ばす!ケツイプラスター!」ドガー

ン!

「グオオ…」

ぐにゅぐにゅ…

チツ、まだ合体が続くのかよ。

…ザツ

ダークアルカ「これならどう？ヘルフレイム…10連発！」

ドゴドゴドゴオオオオオオオオオオ！

「グオオオ…！」

ジエノ「エグいなおい…」

ダークアルカ「ハア、ハア…やりすぎたわね」

ジエノ「で、結果は…」

ぐにゆう…

ダークアルカ「さっきので8割消し飛んだわね」

…ドツ！

ジエノ「!?」

ベティ「ハアアアア！」

ズバツ！

「グオオオ!?!」

ベティが突然現れて怪物に斬撃お見舞いした！

ジエノ「何やってんだお前!?! 斬撃は相性最悪なんだぞ!?!」

ベテイ「…フツ、見てて下さいよ」

「グツ、グオオ!!」

ダークアルカ「…分裂しない？」

ベテイ「怪物の弱点は…ユウキです！」

ジエノ「ユウキだと？」

ケーテイのタマシイか。…いやちよつと待て。

ジエノ「お前のタマシイはキョウフじやないのか？」

ベテイ「確かにキョウフですよ。でも…私はキョウフを超えました！」

カッ…!

ジエノ「なっ…」

ベテイの髪色はピンクからオレンジに変わっていた。

ベテイ「こんな怪物、とつととやっつけちゃいましょう！」

キョウフの終わり

sideアルミ・マリオ

ベティが龍玉の変身のように、桃髪から橙髪になった。

ベティ「こんな怪物、とつとやっつけちゃいましょう!」

タマシイの様子が変わったように髪色も変わったのかしらね?

Sアルミ「フツ、そうね!」ボツ

ベティ「ハアツ!」ズバツ!

「グオツ!」

Sアルミ「ヘルフレイム!」ゴオオオオ!

「グギギツ…」ギユイイン!

ジエノ「危ないぞ、離れろ!」

ベティ「…いや、こんなもの怖くないです!」

「グオオオオ!」ドガーン!

極太光線が怪物から放たれる。

ベティ「…吸収!」ギルルル!

「ダークアルカ「吸収ですって!？」

もしかして私の技を見てマネしたのかしら？

ベティ「かーらーのー？ 倍返しだあ！」

ドガアアアン！

「グオツ!？」

ジエノ「マジかよ」

ベティ「ト・ド・メよ！ハアアアツ！」ギユイイン！

ベティはエネルギーを溜め、ボールを作る。そしてそれを蹴り上げた。

ベティ「ブレイブ…シヨツトオオオ！」ドゴオ！

Sアルミ（つてイナイレかい！）

ドシユウウウ！

「グツ、グオオオオオオオ…!？」

フツ…

怪物は膨大な量のユウキに耐えられず、消え去った。

ベティ「終わり、ました…」フラツ

シュツ

フリスク「おっと」サツ

アルミ（戻った）「タイミングいいわね…」

ベティ「フリスク君、私勝ったよ、ユウキに」

フリスク「うん、よく頑張ったよ」ニコッ

お、これはフラグが立ったわね。

何のフラグかって？次章で分かるわよ（メタい！）

ダークベティ・ノア 死亡

怪物クーム 全滅、死亡

「…例のものは手に入れたか？」

「はっ、数日前に手に入りました」

「…アルミ・マリオは1度死んだ。我々の計画の邪魔にはならないだろう」

とある秘密結社が、裏で暗躍するのであった。

「完成者」を生み出すために。

グレイ「ねえ主人」

ルメ「何、グレイ？」

グレイ「ダークルメは何処で過ごしてるの？」

ルメ「ダークアルカと暮らしてるわよ、隣で」

グレイ「あ、そうだった…後さあ」

ルメ「ん？」

グレイ「僕の順番は!？」

ルメ「作者に聞きなさい」メタい!

次章予告

日常。

2人目の子、マリンも生まれ、クソ平和な生活をしていたアルミ・マリオ。

そんなアルミは旅に出る事にする。

目的は仲間達にそれぞれ会いに行く事。

果たして全員に会えるのだろうか。

じけーれつは続く…

第7章 日常。

そうだ、旅に出よう

♪MULAストリー—arumi is here.
sideアルミ・マリオ

……。

アルミ「平和ね」

アルヤ「そりやお母さんが平和を守ったからでしょ」

マリン「おかあさんすごい！」

紹介するわ。

この子はマリン・マリオ、私の娘よ。

アルヤの2歳年下ね。

そして私と似たのかペラペラ話せる。

アルミ「平和なのはいいけど…ヒマね」

キノ太郎「良い提案があるぞ、アルミ」

アルミ「なに〜？」

キノ太郎「どっかに出かけようぜ」

アルミ「……コトアール(断る)」

キノ太郎「なんでやねん」

アルミ「なんとなく」

キノ太郎「マジかよ……」

ヒマねく。

……そうだ!

アルミ「旅に出よう」

キノ太郎「……え?」

アルミ「旅の目的は……」

キノ太郎「ちよつと待て。いきなり旅に出るのか!？」

アルミ「ええ。金はあるし」

キノ太郎「無計画でか?」

アルミ「……安心しなさい、私の行動は大体無計画だから」

キノ太郎「そうだった……」

アルミ「目的は……そうね。今までの仲間達全員に会いに行こうかしら?」

キノ太郎「随分大きな目的だな」

アルミ「そうでもしないとヒマ潰しにならないのよ。∴アルヤとマリンは任せるわ」
キノ太郎「ああ、任しとけ！」グツ

アルミ「ふふっ∴じゃ、準備するわね〜」

キノ太郎「おう」

―数分後―

アルミ「じゃ、行ってくるわ」

アルヤ「楽しんでね、お母さん」

マリン「ばいばい！」

キノ太郎「いいヒマつぶしになることを祈る」

いいヒマつぶしってアンタ∴

アルミ「行つてきます」

ガチャツ

――
アルミ「∴まずはアオイとレインね」

ピンポーン

∴ガチャツ

アオイ「あれ？お姉ちゃん？」

アルミ「入っていいかしら？」

アオイ「…うん、入って」

ーリビングー

レイン「アルミさんはなんで来たんですか？」

アルミ「私ね…旅に出る事にしたのよ」

アオイ「旅？なんでいきなり？」

アルミ「ヒマつぶしよ」

アオイ「…はあ。それで何故ココに？」

アルミ「仲間達全員に会いにく旅なのよね」

アオイ「ええ…それめちやくちや時間かかるよね!？」

アルミ「安心しなさい、転送を使うから」

☆説明しよう！

転送とは、エネルギー分解というワケわかんない物理法則を使ってワープする事だ！

アルミ「転送と…徒歩ね」

アオイ「ふーん…まあ、頑張つてねお姉ちゃん」

アルミ「ええ。お土産があつたら帰りにあげるわ」

アオイ「分かつた」

ガチャツ

スタスタ：

アルミ「次は…ルメね」

後ダークアルカとかね

風人と狼男と狂気コンビと…発電所長

♪Rolling Sky—Reggae
sideアルミ・マリオ

アルミ「ん〜ぱっ…ぱっ…ぱっ…ぱばわっ、ぱっ♪」

(ローリングスカイのレゲエを歌ってる)

ゆっくり歩いて移動する。

アルミ「……ん？」

「あー、見えない〜」

メガネを落としたようね。

アルミ「あつたわ、はい」スッ

「ありがとう…アルミ?」

アルミ「よっ、ルメ」

メガネを落としたのはルメだった。

ルメ「その荷物は？」

アルミ「現在旅行中よ」

ルメ「え？」

ーただ今説明中ー

ルメ「なるほど。ザクロやダークルメ、ダークアルカは家にいるわよ」

アルミ「そう、じゃあ行ってくるわ」

ルメ「ええ、それじゃ」

スタスタ

ちなみに余談だが、ルメがメガネをかけるとめちやくちや似合う。

ー数分後ー

アルミ「さて、ドアベルを…いや待って」

面白い事思いついたわ。

まずは…

ピンポーン

…ガチャツ

ダークルメ「はーい…あれ？」

シュツ

アルミ「……………」

出てきたダークルメの後ろに回り込む。

タタツ

来たわね。

ザクロ「誰もいないのか？」

ダークルメ「うん、ピンポンダツシユかな？」

アルミ（後ろにいますか？）

ダークアルカ「（なるほど、面白いわね）：無視しときなさい」

ダークアルカは流石に気付いたようね。

アルミ（さて、と）

肩をちよんちよん。

2人『ん？：フア!?!』

アルミ「ドツキリ大成功」グツ

2人『いた〜!?!』

息びったりね。

アルミ「いや〜、面白い反応ね♪」

ダークルメ「時止めたの!?!」

ザクロ「いや、気配からして転送か？どうなんだ、アルミさん」

アルミ「ザクロが正解ね」

ザクロ「っしや」

アルミ「じや、私はドッキリがしたかっただけだから。バイバイ」

ダークルメ「う、うん。またね…？」

ガチャツ

…はい次つと。

大体1kmだから…

アルミ「速歩き」

—10秒後—↑速歩きだよな!?

アルミ「はい着いた」

『ルイス電力』

ココね。

アルミ「入り口は…え」

『カードキーまたは手を入れろ』

コレ、お父さんが思い出話でよく言ってた、カードキーのかわりに手をぶつ込むヤツだよな？

…てかルイスはそれを知っててやったのね。

アルミ「手を入れて…『読み込みます』…うっ」

ギヤアアア!

…ウイイイン

アルミ「痛い…」

何この痛み!?

…入ろう。

―所長室―

コンコン。

…ガチャツ

ルイス「…お、アルミ」

アルミ「5ヶ月ぶりね、ルイス」

ルイス「だな。マリオさん達が転生して以来だ」

アルミ「アンタ今ヒマ?」

ルイス「ああ、ちょうど昼飯休憩に入った所だ」

アルミ「そう。ちよつと雑談しましよ」

ルイス「おう」

その後昼食を食べながら雑談をしたとき。

氷と付喪神と魔術師と角々

sideアルミ・マリオ

ルイス電力を出した後、私は一旦家…の近くまで来た。

コンコン。

…ガチャツ

ノーア「あら？アルミ、何故ココに？」

アルミ「ノリオさんとミールさんは？」

ノーア「寝てるわ」

アルミ「そう。…ちよつと手合わせしない？」

ノーア「…フツ、いいわよ。入りなさい」

秘密基地（元はジーノさんの）に入る。

―特訓場―

ノーア「さあ、かかってきなさい！」

アルミ「それは私のセリフよ…ボルケイノカットV2！」ドシユツ！

ノーア「アイスグラウンド改！」パキツ！

アルミ「フレイムドロップ！」ドゴツ！

ノーア「エターナルブリザード！」ドガツ！

アルミ「炎天掌！」ズガアン！

ノーア「フローズンパンチ！」パキイン！

アルミ「ヘルフレイム!!」ゴオオオオ！

ノーア「ヘイルストーム!!」ビュウウン！

∴完全な相打ちね。

アルミ「やっぱり強いわね」

ノーア「アンタは本気を出してないのによく言えるわね。∴ま、いい運動になったけど」

アルミ「私こそいいウォーミングアップになったわ。そろそろ行くわね」

ノーア「何処に？」

アルミ「きさらぎ駅」

ノーア「ほーん∴じゃあね」

アルミ「ええ」

スタスタ

ー外ー

アルミ「転送」

シユツ

シユツ

アルミ「さて、と」スタスタ

言い忘れてだけど、今ではきさらぎ駅行きの電車が運行されている。
運転手はナプスタブルークらしい。

アルミ「きつぷを買って…ココね」

『5番のりばに、きさらぎ行き電車が到着します…』

アルミ「来た来た」

シユウウウ…

アルミ「…あら？」

ステイブ「お、アルミじゃないか。奇遇だね」

アルミ「アンタは何できさらぎに？」

ステイブ「素材集めさ」

うん、そうだと思ったわ。

ステイブ「それで、君は？」

アルミ「妹とその友達に会いに行くのよ」

ステイブ「そうか」

―数分後―

『きさらぎ駅、きさらぎ駅』

ステイブ「じゃ、素材集めをしてくるよ」タタツ

アルミ「ええ、また」

♪MULA ストリー―きさらぎ駅

この空間は駅しかないが、その駅の建物自体がかなり広い。

駅の中に住宅もある。

アルミ「ココね」

ケーティ「あ、姉さん」

アルミ「ココの生活は慣れたかしら？」

こころ「はい、ココだと妖力が溜めやすいんですよ」

ケーティ「魔力もね」

アルミ「へえ。：ココ、空間が少し歪んでるけど、それ以外は普通にいいところなの

よね…」

タマシイが合わさって生まれた種族、魂集族の集合住宅があるレベルだし。

☆説明しよう！

魂集族とは、アオイやレインなどの、複数のタマシイが集まって生まれた人々の事である！

アオイは魂集族の筆頭として、集合住宅を作った。人々は結構快適に暮らしているぞ。

後、魂集族の寿命は半人半霊と同じぐらいだ！

その後、私はケーティの新技を見た後空間を出るのであった。

モンスター軍団とソジック最強トリオと入手

side アルミ・マリオ

アルミ「…今夜はもう寝た方がいいわね」

近くのホテルで泊まった。

ー次の日ー

アルミ「さて、今日はソジック国ね」

のんびり散歩感覚で行きましょう。

(200km離れてるぞ?)

スタスタ

ー4時間後ー

…一応言っておくけどちよつと走ったわよ?

私でも歩いたら流石に丸一日かかるからね?

アルミ「着いたつと」

『ユメミル家』

そう言えば、フリスクとベティが結婚秒読みなのよね。

あの事件の数日後くつついて、ホント甘いのよ。

コンコン

…ガチャツ

パピルス「ニヤツ？アルミ」

アルミ「あら、何でパピルスが？」

パピルス「パーティーをやってるんだッ。アルミも参加するのッ？」

へえ…嬉しい誤算ね。

アルミ「ふふっ、喜んで」

ーリビングー

フリスク「あつ、アルミさん！」

キャラ「久し振りです！」

アズリエル「でも、先月会ったよね？」

(なんと初登場)

ベティ「2人にとっては久し振りなのよ」

アルミ「久し振り。元気だった？」

アルフィー「もちろん！」

アンダイン「お前と手合わせしたいぐらいだ！…だが、今はパーティーを楽しもうぜ

！」

レツド「……………」ニコッ

…ん？

アルミ「サンズは？」

アンダイン「トリエルとアズゴアと一緒に買い物中だ「ただいま」…今来たな」
トリエル「トテポチツスプの大袋を買ってきたわ」

(…)いつもなんと初登場)

アズゴア「もちろん、他のお菓子も買ってるけどね！」

サンズ「…おう、アルミじゃないか」

アルミ「失礼してるわ」

パピルス「さあ、3人が戻ってきた所で、パーティーを再開するぞッ！」

全員『イエーイ！』

その後ワイワイはしゃいだとき。

―数時間後―

アルミ「あく、楽しかったわね♪」

……………。

アルミ「いるなら出てきなさい、月斗」

：スツ

月斗「いや、バレちゃったか。流石アルミだね」

イナイレに例えると性格的にフェイ・ルーンなのよね、月斗は。

アルミ「アンタ何でココに？」

普通はブリームプラネット国を巡回してるハズだけど。

月斗「休日だし、ゆっくりしてるだけだよ」

アルミ「なるほどね」

確かにココは国境に近いから、移動しやすいものね。

月斗「その荷物からしてアルミは旅行かい？」

アルミ「ええ」

月斗「そうか。じゃ、楽しんでね」スタスタ

月斗は近くのコンビニに入っていった。

アルミ「……次は十六夜家ね」

現当主は元気にしてるかしら？

ギユイイン……

アルミ「え」

シユツ

シユッ

アルミ「ずっと見てたの？」

「もちろん♪」

地獄の女神さんと時の一家

sideアルミ・マリオ

アルミ「ずっと見てたの？へかさん」

へカーティア「もちろん♪」

でしようね。

アルミ「それで、何か用でもあるの？」

へカーティア「いや、特に何もん？」

アルミ「え？」

へカーティア「だって、アルミの旅の目的、仲間全員に会う事でしょん？」

アルミ「…そういう事ね」

へカーティア「そういう事よん」

つまりアンタも仲間と。

一応そうだけど…

アルミ「アンタとは最後に会うつもりだったのよね」

へカーティア「そうなのん？」

アルミ「ええ」

ヘカーティア「そう…ま、早めに会えたいし良いんじゃない？」

アルミ「まあそうね。じゃ、次に行くわ。またね」

ヘカーティア「さようならん♪」

シユツ

シユツ

アルミ「…ふう」

さて、移動よ移動。

―数分後―

アルミ「ココね」

ピンポーン

…ガチャツ

「…アルミさん！」

アルミ「久し振りね、白夜」

出てきたのは十六夜家現当主、十六夜白夜だった。

白夜「入って下さい！」

アルミ「ええ、失礼するわ」

―居間―

アルミ「それで、体調はどう？」

白夜「お陰様で健康そのものですよ」

私は十六夜家全員を鍛え、寿命を伸ばしたのである。

アルミ「それは良かったわ」

白夜「所で、本日はどういった御用で？」

アルミ「アンタに会いに来たのよ」

白夜「…えっ？」

―ただ今説明中―

白夜「なるほど…じゃあ、もう出るんですか？」

アルミ「いや、出るのはアンタ達鍛えてからよ」

白夜「そうですね。…みんな集まりなさい！アルミさんが鍛えてくれるそうよ！」

『はいっ！』

ザッ！

やっぱり凄いわね、ココの人達。

―数分後―

アルミ「準備はできたかしら？」

『はい！』

アルミ「ん、良い返事ね。じゃあ…かかってきなさい！」
ダツ！

一瞬でエネルギーでできたナイフに囲まれる。

アルミ「吸収！」ギュルルル！

「やあつ！」ドツ

アルミ「遅い！」ドゴツ

「たあつ！」シユツ

「せいっ！」シユツ

アルミ「挟み撃ちはいいけど能力を活用しなさい！」ドゴドゴツ
シユツ

『ハアツ！』

アルミ「ツ！」サツ

今のは危なかったわ。

「……………」シユツ

アルミ「おっと」ガシツ

白夜「掴まれてしまいましたか…」
シュツ

白夜「そこっ！」ドゴツ

アルミ「フンッ！」パシッ

白夜「ハッ！」シヤッ

アルミ「吸収！」ギユルルル

私は毎回こうやって鍛えている。

ー30分後ー

アルミ「鍛錬終了よ。しっかり休みなさい」

「ハア、ハア…」ドサッ

相当いい運動になったようね。

白夜「ありがとうございます、アルミさん」

アルミ「お礼はいらないわよ。友達でしょ？」ニコッ

白夜「…ふふっ、そうですね」

魔術師軍団とポポポと画家と…?

sideアルミ・マリオ

再び近くのホテルで一夜を明かした次の日、私は巨大キノコ山脈にいた。

ザッ

アルミ「あつたあつた。ココね」

私が探していたのは、24年前に登ったメイン国への階段である。

ちゃんと整備されていて安心した。

スタスタ

ーメイン国、スカイブロックエリアー

♪大乱闘スマッシュブラザーズSpecial | Halland / Darlana

アルミ「やっぱりココの景色はきれいな…」

「シューウウ」

アルミ「あら」

クリーパー「シューウウ」

近くにクリーパーが来ていた。

：何故爆発しないのだった？特定の強さの敵は攻撃してこないアイテムを持つてからよ。

アルミ「じゃあねえ」

クリーパー「シユシユツ」

―数分後―

マイン国のハイピクセル城の裏口から入る。

「誰だ……って、お前か」

アルミ「ええ、久し振りねスカーフ」

スカーフ「久し振りだな……それより何しに来た？」

アルミ「セイダンに会いに来たのよ。ちよつとした話があるの」

まあ、話があるのは嘘じゃないんだけどね。

スカーフ「そうか。着いてこい」

スタスタ

―王の部屋―

ボンゾー「……………」

セイダン「アルミじゃないか。何の用だ？」

アルミ「ちよつとした報告があるのよ」

セイダン 「報告？」

アルミ 「ええ…ネザライトの洞窟を巨大キノコ山脈で発見したわ」

ボンゾー 「なんと！」

実は、巨大キノコ山脈に行った理由はその調査である。

少し前から怪しかったからね。

アルミ 「量は…そうね、ネザーエリアに元々あった量と変わらないぐらいね」

セイダン 「…それはいい情報だ。しかし…我々が採掘してもいいのか？キノコ王国に

あるんだぞ？」

アルミ 「大丈夫よ。洞窟の入り口は山脈にあるけど、大部分はマイン国の領土にある

し」

セイダン 「そ、そうか。連絡を感謝する」

アルミ 「どういたしまして。じゃ、私は行くわね」

セイダン 「ああ」

スタスタ

ー外ー

さて、と。

アルミ 「次はポップスターなのよね…」

一応そこまで転送で行けるんだけど…まあいいや、とつとつと行こ。

アルミ「転送！」

シュツ

シュツ

『いれはこ入箱家』

ココね。

ピンポーン

…ガチャッ

アドレーヌ「あら、アルミ？」

アルミ「久し振りね」

ーリビンググー

アルミ「カービィさんは？」

アドレーヌ「屋根の上で寝てるわ」

いや、猫か。

「あゝ」

生後数ヶ月の赤ちゃんがはいはいしてきた。

アルミ「この子が…」

アドレーヌ「ええ、日花よ」

日花「わあ〜♪」

顔が母さんに似てるわね…

アルミ「ふふつ、可愛いわね♪」ナデナデ

日花「うあ〜（おいしい、アルミ〜）」

…なるほどね。

アルミ「あ、そうだ。アドレーヌ」

アドレーヌ「何何〜？」

アルミ「この大会出る？」

『絵画 大会』

アドレーヌ「（絵画!!）…もちろん出るわ!」

アルミ「あら、ホントに？」

アドレーヌ「ええ! 私絵を描くの大好きだし!」

アルミ「分かったわ。ココに名前とサインを書いて〜」

アドレーヌ「オーケー♪」

ー書いたー

アルミ「フフフ…」

アドレーヌ「…どうしたの？」

アルミ「いや、こんなにすんなり騙されるとは」

アドレーヌ「えっ…？」

アルミ「よくく見てみなさい」

『絵画破壊大会』

ちっさく破壊とかいてあるのよ。

アドレーヌ「フア!? は、は、破壊いい!?!」

アルミ「そう。は・か・い！」

アドレーヌ「参加しない! こんなのやだあ！」

日花「あく（やっぱアルミね〜）」

アルミ「もう遅い! サインしたでしょ？」

アドレーヌ「いや〜!」ブンブン

アドレーヌは筆を振り回してきた。

アルミ「にーげるーのよ〜!」ダダダダダ

アドレーヌ「ま、まて〜!」

その後チラシは偽物だと説明した私であった。

合体スーパー化

side アルミ・マリオ

コンコン。

…ガチャツ

キノ太郎「…！」

アルミ「ただいま」

キノ太郎「おかえり、アルミ！」

ーリビングー

アルヤ「お母さん、お土産は？」

アルミ「ふふっ、ちゃんとおあるわよ。はい」スツ

私とはある箱を出した。

アルヤ「開けていい？」

アルミ「いいわよ」

パカッ

中には骨の形をしたお菓子が入っていた。

アルミ「パピルスからもらったクッキーよ」

アルヤ「わあ……！」

アルミ「マリんと分けて食べなさい」

アルヤ「うん！」

キノ太郎「なあアルミ、それ……」

アルミ「……アンタが思ってる通りよ」

既にめっちゃ食べてるから余り物をあげてるのよ（笑）

アルミ「あ、アルヤとマリンには言っちゃダメよ？」

キノ太郎「そりやそうだろ」

うん、だよね。

―その夜―

アルミ「……ハアツ！」　ビリビリ！

シューウウ……

私はスーパー化をした。

しかし、帽子やパーカーの紐、靴は赤のまま、出す火も白い。

何故って？それは数ヶ月前、母さんに最後会った時に遡る。

―回想―

アルカ「アルミ、大事な話があるの」

アルミ「何？」

アルカ「私のタマシイのエネルギー、取り込んでほしいの」スツ
ギユウウン

アルミ「何でそれを？」

アルカ「アンタはその内とあるものを狙うヤツらと戦う事になるわ」

アルミ「とあるもの？」

アルカ「ええ…『完成者』よ」

アルミ「それって…!？」

アルカ「その条件の1つが、身内のタマシイの一部を取り込む事なのよ」

アルミ「なるほど…ちなみに、母さんは条件を何個達成したの？」

アルカ「3個中2個よ。今アンタがしようとしてるのをしていないわ」

アルミ「えっ、何で？」

アルカ「マリオに『無理すぎるな』と言われたのよ」

アルミ「いやいや、私に無理させるの？」

アルカ「私より3倍ぐらい強いアンタが？」

アルミ「うっ…」

アルカ「完成者の件、アンタに任せるわ」
ー回想終了ー

別の人のタマシイと融合するから、コレは「合体スーパー化」と名付けてるわ。

GSアルミ「完成者…」

もつと調べるべきね。

side入箱アドレーヌ

日花「あゝ、わあゝ」

アドレーヌ「あら、どうしたの日花？」

日花「あゝ！」ボツ

日花の手から火が出た。

アドレーヌ「ええっ!？」

日常。 完

次章予告

ファイナレ。

旅から8年が経ち、44歳の中年ババアになったアルミ。(外見は三十代)

その時、ついに秘密結社「コンプリート・シエイプ」が動き出す！

ヤツらを止めるために完成の条件を満たさそうとするアルミ。
果たして、世界の危機は救えるのか!?

最終章　ファイナーレ。

アルミ「で、いきなり始まると?」

普通の人は表を読む。

勘のいい人は裏を読む。

天才や忍者は裏の裏を読む。

つまり、私達は全て読めばいいのよ。

分かるでしょ、アルミ?

sideアルミ・マリオ

朝日を浴びて、目が覚める。

アルミ「ふわあ…うおくはよくございまして」

今日も今日とて1日がスタートする。

「アクアボール!」ポイツ

水の玉が飛んできた。

アルミ「炎天掌!」ズガアン!

シュウウウ

アルミ「奇襲しても私には意味ないわよ、マリリン」

マリリン「むう、やっぱりそうなるよね〜」

アルヤ「これならどうだ!」ヒュン!

アルヤはタマシイ(ユウキ)の魔法で弾幕を飛ばす。

アルミ「吸収!」ギョルルル!

でも、対策はカンタンね。

アルヤ「吸収はするいよ〜」

アルミ「別にずるくないわよ。…って、速く学校の準備をしなさい!」

アルヤ「…ヤベっ!速くしね〜と!」

ちなみにキノ太郎はすでに家を出ている。

マリリン「私はもう準備終わった〜♪」

アルミ「へえ、朝食は?」

マリリン「…あ、まだ食べてない!」

アルミ「まあまあ、一緒に食べましょ」

マリリン「うん!お兄ちゃんも速くしてね!」

アルヤ「お、おう…」ゴソゴソ

アルヤは学ランに着替えながら返事をした。

アルミ「それで、今日の新聞は…」

『大人気カーレーサー◇、死亡!』

アルミ「ブーツ!!!」

あまりにも衝撃的すぎて飲んでた牛乳を吹き出してしまった。

マリン「何か変な内容でもあったの?」

アルミ「コレ見てよ…」

マリン「…ええ!?◇さんが!」

アルミ「全身バラバラで見つかったらしいわ…」

マリン「うわっ、グロいね…あ、生き返らせることは?」

アルミ「できないわ。既に1回病死してる」

マリン「一体誰だろう、◇を殺すなんて…」

アルミ「…これは嫌な予感がするわね」

1半時間後1

アルミ「それで、何が原因だと思う?」

ケーティ「占ってみるわ…」

2929083129290831…

ケーティ「…とんでもない結果が出たわ!」

アルミ「何何!?!」

ケーティ「例の組織が殺ったって…」

アルミ「なっ…!?!」

今になって動き出したの!?

ケーティ「どうする、姉さん? 私とこころは手伝うわよ?」

こころ「勝手に言わないでよ…手伝うけど」

アルミ「あの世の広場で過去の自分と戦うわ。アンタ達はアオイも呼んで見張ってなさい」

ケーティ「分かったわ」

アルミ「…じゃ、行動開始よ!」

ーあの世の広場ー

アルミ「確か…」スタスタ

あ、ココね。

『自分の間』

ガチャツ

部屋の中は白い空間…

シュツ

…だった。

「へえ、私を倒しに来たのね」

アルミ「ええ…！」

V S 過去一パワーが高いアルミ

♪ S H A R A X | D A R K D A R K E R Y E T M O N S T E R (2分の1倍速)

sideアルミ・マリオ

「へえ、私を倒しに来たのね」

アルミ「ええ……！」

私の目の前にいるのは過去一パワーが高かった私、つまり……グリッチ化した私である。

☆説明しよう！

忘れた人達のために説明すると、グリッチアルミはグリッチの力を取り込み、馴染んだ状態のアルミである！

外見がかなりバグってる状態になってるぞ！ちなみにパワーは2750万だ！

コイツ、私の全力の5倍パワーがあるのよね……

G S アルミ「合体スーパージカッ！」

G アルミ「かかってきなさい……！」

G S アルミ「炎天掌・白！」ズガアン！

G アルミ「フン」ガシッ

あつさり止められたわね。

G アルミ「少し痛いな」

まあ、差は5倍でもダメメージは、ね：

G アルミ「炎天掌・黒！」ズガアン！

G S アルミ「ッ！」サッ

G アルミ「まだまだ！」ドゴドゴッ！

G S アルミ「異次元パンチ！おーーーーりやーーーーあ！」

バガアン！

G S アルミ「グッ……」

相手のパワーが半端ないわ……

こうなったら！

G S アルミ「ハッ！」

G アルミの後ろにエネルギーの玉を創り、発射した。

G アルミ「消滅！」カッ

フッ……

G S アルミ「忘れてたわ…」

G アルミ「私の能力は『手で触れた対象を消滅させる』事よ…ま、生物は消せないけど」

そりやそうよ、生物まで消せたら私は既に消滅してるわ。

G アルミ「話はココまでにしましょう。ブラックドーン！」ギユウウン！
漆黒の玉が飛んできた。

G S アルミ「フツ、吸収！」ギユルルル！

G アルミ「…なるほど、互いにエネルギー攻撃は効かない、と」

G S アルミ「そうなるわね…」

ま、相手の年齢は22だからまだ神力の事は知らないハズだけど。

…神力を使えば勝てるわね。

G S アルミ「白炎時！（+神力！）」ボオオオ！

G アルミ「こんなモノ、消滅…ええ!？」

G S アルミ「炎天掌・白！」ズガアン！

G アルミ「かはっ…!」

それと、コイツは私と比べて経験が圧倒的に少ない！

G S アルミ「ケツイナイフ…白！」ザシユツ！

G アルミ「グツ、何で消滅できないのよ…!？」

G S アルミ「それは秘密よん。…トドメよ！」

ボツ…!

巨大な白炎の玉を神力を使い一瞬で出す。

G アルミ「なっ…!？」

G S アルミ「焼き尽くしてやるわ！へブンフレイム！」シユツ

ゴオオオオオオオオオ!

G アルミ「ガツ、グオオオオオ…!？」

フツ…

G アルミは跡形もなく消え去った…。

アルミ「……ふう」

(戻った)

条件②、達成ね。

ガチャツ

ケーティ「姉さん、どうだった？」

アルミ「相手が相手だったから少し疲れたわ」

少し休んでから移動ね。

集まった仲間達

side アルミ・マリオ

アルミ「それで、来れる人達は？」

アオイ「フリスク達、ルイス、アドさん親子、カービイさん、
ダークアルカ達だよ」
つまり、私達を含めたら15人ね。

アルミ「戦力としては充分ね……」

ヒュウウン！

カービイ「やつほく♪」

アドレーヌ「できるだけサポーターするわ！」

アド（最期の一仕事になりそうね……）

ルイス「今日は日曜日だしな、手伝うぜ！」

……ザッ！

ダークアルカ「1番じゃなかったわね」

ザクロ「時間停止できるのでよく言うぜ……」

ダークルメ（……頑張ろう）

ルメ「……………? (ダークルメの様子がおかしいわね…)」
シユツ…

キャラ「秘密結社への殴り込み、全力でサポートします!」

フリスク「フランはサンズに預けました!」

(フランは、フリスクとベティの息子で、7歳)

ベティ「組織をぶっ潰しちゃいましょう!」

全員集まったようね…

アルミ「じゃ…行くわよ!」

全員『おお!』

―秘密結社本部―

現在秘密結社コンプリート・シエイプの建物の前にいる。

どうやって見つけたのかって? 職権乱用よ。(認めるのかよ!)

アルミ「カウントダウンするわよ。3、2、1…」

アオイ「ガスターブラスター」ギユイイン…

アルミ「…GO!」

アオイ「発射!」

ドガアアアアアアア!

建物に風穴を開けた。

アルミ「突入！ハアア！」

「◇神様！」

◇神「…何だ？」

「アルミ・マリオ及び、その仲間達が侵入したようです！」

◇神「ほう…ついに来たか」

「どうなさいますか？」

◇神「…どうにかしてアルミだけがこちらへ来るようにしろ。他のヤツらは幹部が潰せ」

「はっ！」

タタツ…

◇神「俺の3つ目の条件は…世界の英雄のタマシイを取り込む事だからな…！」

ケイティ「ウイザーインパクト！」 ドガン！

「こころ「面々舞！」 シュッ！」

ルメ（グレイ装備）「風斬・鎌鼬！」ズバツ！」

「ダークルメ「キャハツ……！」ドゴツ！」

「ダークアルカ「ヘルフレイム！」ゴオオオオ！」

「ザクロ「ガーネット恐弾！」バンッ！」

「アルミ「……………」？」

「順調すぎるわね。敵はいてもすぐに倒せるし……」

「……ボコオ！」

「全員『!?』」

「突然床が動き出した！」

「ルイス「何だよコレ!?!」」

「アドレーヌ「知らないわよ!」」

「カービィ「うわあああ!」」

「ガツコン！」

「そして床は6つに分かれた。」

『あ、あ、テス、テス、ホワーウ』

「……最後の言葉は何なの？」

『アルミ・マリオ及び、その仲間達に伝える。その6つの床の内5つに、これから幹部が1人ずつ現れ、潰しにかかる。アルミがいる方は……この俺が直々に潰してやろう……!』

ジッ

アルミ「つまり、意図的に私を1人にしたのね…」

「その通りだ」

◇の棒人間が現れる。

でも…その弱そうな外見から信じられない量のパワーを感じるわね。

◇神「俺は◇神。俺の3つ目の条件達成のために…アルミ・マリオ、お前のタマシイをいただく！」

アルミ「…へえ。やれるものなら…やってみなさい！」

私はココで、全てを読む！

平行四辺形と五角形

side ケーティ・マリオ

ザッ

シヘンケー「俺の名はシヘンケー。新人幹部だ！」

こころ「ふうん」

アオイ「へえ〜」

ケーティ「そう」

クソどうでもいいわね。

シヘンケー「軽っ！お前ら反応薄すぎだろ！」

こころ「そんな事言われても……」

アオイ「興味ないし……」

ケーティ「とつととアンタを倒したいんだけど？」

シヘンケー「ムキーツ！野郎ぶっ殺してやる！」、（ム）ノ

あ、キレた。

ケーティ「どうやって？」

シヘンケー「こうやって、だコノヤロー！」ドツ
来たわね。

アオイ「ほい」ズバツ！

シヘンケー「ガハツ!？」

あつさり当たったわね。新人なのはホントね。

シヘンケー「グッ、くそう…次は避けてやるぞ！」

こころ「ふーん。面々舞！」シユツ！

シヘンケー「グハツ!?!何だよその攻げk「からのウイザーインパクト!」…ぎゃふん
！」

流石にこんなに弱いとは思わなかったわ。

ケーティ「もう寝てなさい」カツ

シヘンケー「ガツ…」バタン

シヘンケー 気絶、戦闘不能

弱すぎたわね。

sideルメ・パンドラ

ルメ「……………」

ペンタゴン「ハーツハツハ！俺は幹部のペンダゴンだ！」
何この五角形棒人間？

ダークアルカ「で、アンタは何しにきたの？」

ペンタゴン「お前らを倒しに来たのさ！」

ザクロ「そうか？」ジャキン

ダークルメ「倒されるのは君だよ！」ドツ！

ズバツ！

ペンタゴン「ほう、中々やるな」

ルメ「!?」

ダークルメ「ガハツ……」

斬られたのは、ダークルメだった。

ダークアルカ「……ヘルフレイム！」ゴオオオオオ！

ペンタゴン「……!?」ボツ

ダークアルカ「グツ……」ボオオ

何故か今度は攻撃が当たっていた。

ルメ「ダークルメの攻撃は跳ね返って、ダークアルカの攻撃は少し当たる……まさか」

試す価値はあるわね。

ルメ「風遁・螺旋丸！」ビュウウン！

ペンタゴン「フンツ！」

…今よ！

ルメ「吸収！」ギユルルルル！

自分の体に吸収を当てた。

…そしてダメージはくらわなかった。

ペンタゴン「…なに!?!」

ルメ「アンタの能力は『制限付きのダメージ反射』でしょ？」

ペンタゴン「な、何故分かった!?!」

ルメ「ダークルメが攻撃したのに、アンタはダメージゼロ…その次にダークアルカが攻撃したけど、反射しきれなかった。それで、アンタの能力が判明したのよ」

ペンタゴン「ツ…だが、俺の能力を知った所で対策はないだろう！ハーツハツハ！」
その笑い声、苛つくわね。

ザクロ「どうすりゃいいんだよ、ルメ？」

ルメ「ふふっ、いい事思いついたわ」

風人の狂気

sideルメ・パンドラ

ルメ「ふふつ、いい事思いついたわ」

ダークルメ「いい事って？」

ルメ「……………よ」

ダークルメ「なるほど、いいねソレ！」

ダークアルカ「じゃ、いくわよ！ハアアッ！」ゴオオオオオ！

ペンタゴン「そんなモノ、反射するまで！」

ダークアルカ「ヘルフレイム…3連発！」

ペンタゴン「なっ!?!」

ドゴオン！

ダークアルカ「吸収！」ギユルルルル！

ヘルフレイム一発で既に反射しきれない…それなら何発もぶっこめばいい、という作戦だった。

ペンタゴン「ぐうう、痛いな…！」

ダークルメ「ブラックドーンV3！」ギユウウン！

ペンタゴン「グハッ…コノヤロー…！」

ルメ「トドメよ！風遁・螺旋丸！」ギユイイン！

ペンタゴン「……」ニヤリ

ザクロ「…？」

ペンタゴン「フンッ！」

ダークルメ「ガッ!?」ズバツ

3人『!?』

攻撃は何故かダークルメに当たり、ダークルメがダメージを受けた。

ペンタゴン「攻撃は誰にでも反射できるんだよ！ハーツハツハ！」

ダークアルカ「…時間停止」

シュッ

次の瞬間、ペンタゴンは宙に浮いていた。

ペンタゴン「ほう……」

ダークルメ「ギャッ」

ダークアルカ「なっ!？」

ペンタゴン「何らかの方法で俺を落とし、それでダメージを与えようとしたんだろう

が、それも効かないんだよ！」

ダークルメ「グツ…ヤバイよ…」

ルメ「ツ、戻ってきなさい！」

それだと回復できるから！

ダークルメ「いや、それはやめとくよ。もう戻らないって決めたから」

ルメ「えっ…?」

ダークルメ「反射しきれないダメージを与えて、それで倒せばいいんでしょ？」

ダークアルカ「…まさか！アンタ、それはダメよ！」

ダークルメ「いや、もうどうしようもないし、やるよ…」

ペンタゴン「この俺を倒す？無理な話だな！」

ダークルメ「…:…:それはどうかな？」ガシツ

ダークルメはいつの間にかペンタゴンの後ろに回り込んでおり、腕を掴んでいた。

ペンタゴン「何をする気だ？」

ダークルメ「流石にコレには耐えられないでしょ？狂気奥義…」

ダークルメ「もう、無理だよ……」

ルメ「なんでよ！何故あんな事を……！」

ダークルメ「私、所詮別人格じゃん？本体じゃないよ」

ルメ「でも、それでもアンタは……！」

ダークルメ「ゴメン、コレしか考えられなかったんだ……」

ルメ「バカ……生きなさいよ！」

ダークルメ「それは無理だね……」ポロツ

ダークルメは消えだした。

ルメ「ツ……！」

ダークルメ「また、何処かで会おうよ……ルメ」

フツ……

ダークルメ・パンドラ 死亡、転生。

じーさんかっけー

side フリスク・ユメミル

G△「僕はじーさんかっけーじゃ」

フリスク「え？」

G△「G△じゃ」

キャラ「それが本名？」

G△「そうじゃ」

ベティ「は、はあ…」

つまり、子供の頃もじーさんかっけーって呼ばれてたのかな？

G△「僕は幹部の1人：お主らを倒す！」ゴオオ

フリスク「そうか。なら容赦しないよ」

G△「フンッ！」

ズドズドッ！

地面から△の岩が飛び出す。

キャラ「ハッ！」ズバッ！

それを姉さんが斬った。

ベティ「行くよ！ブレイブカッター！」ズバズバツ！

G△「ふむ…ホワタア！」ドツ！

ベティ「衝撃波!？」

ボスツ！

…シヤツ！

G△「うぬつ、威力が足らんかったか」

フリスク「ケツイナイフ！」シヤツ！

G△「よつ、ほつ、はっ！」ササツ

すばしっこい爺さんだね…

キャラ「ロイヤルハートショット！」ドシユツ！

(元ネタ：イナイレGO3)

姉さんが赤い光線を放った。

G△「ぬっ!?!ぐおおお！」ドゴオ！

キャラ「…ふう」

G△「お主ら、やりおるのう…」

ベティ「そっちこそ…ブレイブショット！」ドギユウン！

G△「本気を出すわい！かーめーはーめー波ー！」ドガーン！
ベティ「フア!？」

龍玉の十八番技を使った：

フリスク「まさかG△のモチーフは亀○人？」メタい！

(違います)

キャラ「フレイドロップ！」ドゴオ！

G△「フンツ！」ガシツ！

キャラ「うわっ!？」ポイツ

フリスク「姉さん！…タマシイ・ザ・ハンド！」ガシイン！

キャラ「危なかつたわ…」

Kフリスク「そろそろカタをつけた方がいいね…ケツイ覚醒！」

Yベティ「ユウキ覚醒！」

Kフリスク「行くよベティ！」

Yベティ「オーケー！」

ダツ！

Kフリスク「シユートコマンド20…」シユバツ！

ピョン

2人『双飛遊星弾!』ドゴツ!

ヒユウウン!

G△「むっ!うおおおおおっ!」ガシッ

G△は攻撃を止めようとする。

G△「ぐおおおお…!」ドゴオン!

フリスク「…よし!」

G△「くう、もう動けないわい。降参じゃ!」

キャラ「…ホントに?」

G△「ああ、ホントじゃ。組織に入ったのも強いヤツと戦いたかったからだしのう」

フリスク「…分かった。でも、一応逮捕するよ」

G△「了解じゃ」

G△ 降参、一応逮捕

sideルイス・マリオ

クソツ、コイツ強え…!

ルイス「……ツ」フラッ

カービー「強すぎるよ…!」

アド「くっ…」

アドレーヌ「死角…!!」

死角「その程度か？」

ルイス「サンダールーム！」バチツ

死角「フン！」バリッ

俺の攻撃があっさり破られるなんてな…

アルミ、こっちは苦戦しそうだ…!

死の四角

side入箱アドレーヌ

アド「ザ・ワールド・ドローパーイン！」バシユツ！

死角「ほう」ガシツ

お母さんの筆が死角に掴まれた。

死角「フンツッ！」バキツ

アド「筆が……！」

アドレーヌ「お母さん、離れて！」

アド「!?…ええ！」サツ

アドレーヌ「オーバーサイクロン！」ドゴドゴドゴッ！

死角「むっ、初めて見る技だ」

絵に描いた動物達を大量に出して攻撃する。

ルイス「さらにサンダーキャノン！」バチイッ！

死角「スクエアガード」ピキツ

キイン！

ルイスの攻撃は防がれたが…

死角「マズい…！」

グシヤア！

私の攻撃からは逃れられなかったようね。

死角「グツ、少し効いたぞ…」 シュツ

カービィ「消えた！」

アドレーヌ「……!?!」

シュツ

死角「……」 スツ

アドレーヌ「お母さん、後ろ！」

アド「ツ!?!」

死角「遅い」

…グサツ

アド「ガフツ…！」

アドレーヌ「お母さん！」 ダツ

死角「……」

アド「ガツ、血が…」

アドレーヌ「今すぐ回復す」「いや、しなくて、いいわ…：…え？」
何で…？

アド「天国で、ピーチさんが待ってるわ…」

アドレーヌ「お母さん!?!…死なないですよ!」

アド「…じゃあね、レーヌ」

そして、お母さんは息を引き取った。

ルイス「アドさん…!」

カービィ「アド…!」

死角「…話は済んだか?」

アドレーヌ「…ッ!」

死角「安心しろ、お前らもすぐあの世に送ってやる」

今、なんて…?

アドレーヌ「…さない」

死角、「お前」を…

アドレーヌ「許さない!」

カッ!

カービィ「!?!」

ルイス「アレは…スーパー化だ?!」

スーパーアドレーヌ

パワー 4500↓4500万 3部まででパワーは2位。

スーパー化の条件は…身内の死への恨み。

このタイミングで初めて達成される条件である…。

Sアドレーヌ「…覚悟しろ、死角」

死角「変身したか」

Sアドレーヌ「……………」シュツ

ドツ

死角「速い!」

Sアドレーヌ「オラア!」ドゴオ!

死角「グフツ…!?!(何だこのパワーは!?!)」

Sアドレーヌ「お母さんの敵いいツ!」ズシヤツ!

筆を使って“斬り裂く”。

死角「ガツ…(筆で斬り傷ができるだ?!?)」

S アドレーヌ「…死ぬ」ギユン
ルイス（アドレーヌ…!）

死角「グッ…（う、動けん…）」

S アドレーヌ「ザ・ワールド・ドローD E A T H!」ドゴオオオ!

死角「が、はっ…」バタン

S アドレーヌ「……………」ボツ

シュウウウ…

S アドレーヌ「Go to hell, S H I T.」

（英訳：地獄に落ちろ、クソ野郎）

死角 死亡、地獄に落ちる

ファイナルバトル!

♪MULLAストーリー——ファイナーレ。

sideアルミ・マリオ

アルミ「……………」

◇神「かかつてきな」

私は『全て読む』。

そのために…

アルミ「白炎時！」ゴオツ!

◇神「そう来たか…フンツ！」フワツ

舞空術ね。

アルミ「…ハッ！」

ドスッ!

白い炎から拳が突き出る。

◇神「ムツ…」サッ

アルミ「炎天掌！」ズガアン!

◇神「◇ガード」ピキッ

アルミ「異次元ラッシュ！」ドゴドゴドゴッ！
ピキッ…

◇神が張った結界にヒビが入る。

…把握。

アルミ（なるほど、次は…）

バリイン！

◇神「破片飛ばし！」

アルミ「時間停止！」

←ブウウウン…

破片の方向を反対にし…

アルミ「再生！」

→ブウウウン…

ドシュッ！

◇神「そうきたか…◇ビーム！」ビビビッ！

アルミ「吸収！」ギュルルル！

…把握。

次は…

アルミ「こうね…」シヤカシヤカ…

指に火をつけ、辺りの空気の温度を上げる。

◇神「ほう…空間を歪めてるのか…」

アルミ「陽炎！」モワア…!

◇神「ならこちらも…大旋風！」ビュウウン!

アルミ「それじゃ効果はないわよん」

この火、対象だけを燃やすから。

◇神「!消えないな…」

アルミ「天空掌！」ズガアン!

◇神「ッ！」ガッ

アルミ「へえ…?」

何か、調子がおかしいわね。…まあいいわ。

把握。

◇神「…ハッ！」

ドスッ

アルミ「ケツイカッター」ズバッ!

シユウウウ…

秘密結社コンプリート・シエイプの建物は崩壊した。

フリスク「なんて戦いだ…！」

キャラ「流石アルミさん…」

ケーティ「干渉は許されないようね」

アオイ「頑張つて、お姉ちゃん…！」

ルメ「ダークルメとアドの思いをついで…！」

アルミ「ハアッ！」

◇神「フンッ！」

ドゴオ!

アルミ「ハア、ハア…やるわね…」

◇神「そつちこそ、な…！」

私と◇神はお互いかなり疲れていた。

…しかしその時。

アルミ「…ッ!?!」ドクン

何、この感覚…!?

突然心臓が…!

アルミ「まさか…」

自分だけ読めてなかった…?

アルミ「…自分を把握」

……。

アルミ「心臓発作ね…」

◇神「心臓発作があってもまともに喋れるとはな」

アルミ「…ツ、それでも、ない、みたいね…」ボタン

私は意識を失った。

死んだ…かもね…

目覚めると、私は白い空間にいた。

天国…ではないようね。

アルミ「ココは…?」

「フオフオフオ…よく来たのう」

アルミ「あ、貴方は？」

神「僕は神じゃ。完成者の、な」

完成…!!!

アルミ「つまり、私は…!」

神「そう、完成したのじゃよ」

アルミ「…母さん」

ようやく、実現したわ…

ヒラッ

アルミ「？」クルッ

ふと横を見ると、そこには赤い花びらが舞うきれいな桜の木があった。

アルミ「神様、アレはなんですか？」

神「アレか？あれは火桜じゃ。ここを含む天界で咲く桜じゃ」

アルミ「火桜…綺麗ですね」

神「そうじゃろう…」

火桜。

…いい土産になったわ。

神「ところでお前さん、そろそろ行かんのか？」

アルミ「もちろん、行きますよ…」パサッ

私はお父さんからもらった帽子を脱ぐ。

アルミ「世界を救いに」

B L O O M ……!

◇神「さて、タマシイを…!?!」

B L O O M ……!

突然私の周りを赤い桜が舞い…

アルミ「…ごきげんよう」

全員『アルミ!?! (アルミさん!?!) (お姉ちゃん!?!)』

◇神「な、さつき死んだはずじゃ…」

アルミ「ふふつ…改めて自己紹介するわ。私はアルミ・マリオ……………完成者よ」

フツ、決まったわね。

◇神「なん、だと…!?!」

私の目は赤くなっており、帽子は脱いでいた。

ダークアルカ (アレが、アルカの求めていた完成ね…)

アルミ「さて…◇神、覚悟はできたかしら?」

アンタが欲しがっていたこの力、見せてあげるわ!

アルミ「火桜！」 B L O O M !

赤い花びらが弾幕となつて飛んでいく。

◇神「なんだコレは!?!:ガッ」

烈焼脚の強化版……!

アルミ「滅焼脚！」 ドガアン!

◇神「グフツ……(一撃一撃が即死級だ……強すぎる!)」 バタン

アルミ「アンタはこの力を使って世界を乗っ取ろうとした……」 スツ

◇神「グツ、この……」

アルミ「この私が直々に裁いてやるわ……ハッ！」

ギユウウン!

私は紫色の鎌を持つ。

アルミ「奥義……地獄転送！」 ドツ!

◇神「なっ……」

……ズバツ!

◇神「グツ、ガアアアアア……!」 フツ……

◇神は断末魔の声を上げて跡形もなく消え去った……。

アルミ「……やっつと、終わったのね」

ありがとう、母さん。

時間が来たら、また会いましょう…

コンプリート・ファイア エピローグ

♪ M U L A ス ト ー リ ー | a r u m i i s h e r e .
s i d e ア ル ミ ・ マ リ オ

アルミ「コレでいいかしら？」

「中々いいんじゃないか？」

私は戦闘に関する本『火の書』を書いていた。

アルミ「後は出版社に原稿を提出して…」

「その後は何するんだ？」

アルミ「さあ？また新技開発をするかもしれないし、ヒマになったら異世界に行くかもだし」

「異世界って、天界・魔界・幻想郷のどれだ？」

アルミ「全部よ」

「だろうな」

…ん？私はずっと誰に話してるのかって？

アルミ「ねえ…有太」

有太「何だ」

コイツは私の裏人格：ダークアルミ、別名火野有太よ。裏人格なのに完全に男なのよね：

アルミ「もう一回ヘカさんに手合わせを申し込まない？」

有太「やめとけ、またフルボッコにされるぞ」

私達のパワーは2・75億、ヘカさんは33億なのよね：神ってマジで強いわね。

：まあ、ヘカさんは最強クラスの神らしいけど。

(実際そう)

アルミ「でも、ヒマでしょ？」

有太「幻想郷にでも行つてろ」

アルミ「：今はやめておくわ」

有太「じゃあ天界で鬼神と酒飲んどけ」

アルミ「却下」

有太「：何がしたいんだ？」

アルミ「：……………」じー

有太をじっと見つめる。

見た目は完全に男版私ね。

有太「…何だよ」

アルミ「寝よ」

有太「……………」ドゴオ

おお、ナイス反応。

有太「ハア…もういい、俺はクツキー買いに行く」

アルミ「ふーん、私の分も買ってね」

ガチャツ

あ、無視したわね。

アルミ「…まあいいや。寝よ」

ベッドへ行こ。

ピンポーン

…ハア。

アルミ「はーい」

ガチャツ

「……………どうも」

アルミ「あら…」

時が来たのね。

日花「久し振りです、アルミさん」

3部 コンプリート・ファイア 完

「やつと僕の順番が来るね」

「そんなに楽しみにしてたの？」

「もちろんさ！2部に僕の伏線が出てからずっと待ってたんだよ!？」

メタ発言をする逆さの悪魔。

「メタいよ。後、そろそろ戻るよ」

「…あ、そうだね。行こっか」

ハサツ

「戻って来ましたか」

「はっ」

「さて、仕事に戻りますよ…」

ドスツ…

次部 4部 転生幻影

アルカの転生者、入箱日花。

彼女は次々と転生者に会い、巻き起こる事件を解決していく…
そして、時は巻き戻る。

果たして、日花と仲間達は世界を守ることができるのか…！

第4部 転生幻影 第1章 アルカ、転生！
知らない空間ね

side 入箱日花

日花「……あれ？」

ココは……何処？

「おーい、生きてる〜？」

目の前には見た目が私に似てる人がいた。

日花「えつと、貴女は？」

アルカ「私はアルカ・マリオ。…分かるでしょ？」

日花「確かアルミさんのお母さん…ですよね？」

アルカ「その通り。それで、何故私がアンタに…いや、アンタが私に似てるか分かるかしら？」

日花「えつと…分かりません」

アルカ「…じゃあ、分からせてあげる♪」パチン

日花「…!?!」フラッ

その瞬間、私の脳内に大量の記憶が流れ込んできた。
まさか……!

日花「私：貴女の転生かなんかですか？」

アルカ「正解♪」

日花「マジすか……」

急展開に追いつけないわね……

アルカ「そこで、ちよつとしたお願いがあるのよ」

日花「お願い？」

アルカ「私に鍛えられなさい」

……え？

日花「ど、どゆことですか？」

アルカ「私がこの空間でアンタを鍛えるのよ」

日花「何ですか？」

アルカ「アンタ、アルミの弟子になりたい？」

アルミさんの弟子？

日花「なりたいです！」

アルカ「でしょうね。でも、アンタはまだその資格がないのよ。だから数年、私がア

ンタをこの空間で毎日鍛えるわ」

日花「なるほど…」

…毎日?…ちよつと待って!?

日花「ココ何処ですか!?’

アルカ「夢の中」

日花「夢の中で特訓してどうやって鍛えられるんですか?’

アルカ「アンタの肉体はもう出来上がってるのよ。だから精神よ、鍛えるのは」

日花「は、はぁ…」

アルカ「じゃ、明日から鍛えるわよ、じゃね〜♪」

そして私の視界は暗転した。

日花「…ハッ!’

目が覚める。

辺りを見回すと、いつもの私の部屋だった。

日花「ホントに夢だったようね…」

『ま、夢じゃなくても会話はできるけどね?』

日花「フア!?’

アルカ『心の中で喋りなさい、しないと独り言をしてる作者のような変人だと思われるわよ』メタイ！

(作者はめちやくちや独り言を言います。場合によっては2時間ずっと)

日花 (こうですか?)

アルカ 「そ」

それから、私の日常的な非日常が始まった。

ー6年後ー

アレから6年。私は14歳だ。

日花 「お母さん、遊びに行ってくるね」

アドレーヌ 「ええ、行つてらっしゃい」

ガチャツ

アルカ 『道は分かるでしょ?』

日花 (はい)

スタスタ

しめじ駅で電車に乗り、キノコ駅で降りた。

日花 「後は徒歩5分ぐらい…」

ー5分ぐらい後ー

『ハッピーアパート』

アルカ『リフォームされてるわね…』

日花（築100年ぐらいですからね）

301だったわね…

アルミ「……寝よ」

ピンポン

アルミ「（…ハア）はい」

ガチャツ

日花「……どうも」

アルミ「あら（時は来たのね、母さん）」

日花「久し振りで、アルミさん」

火桜

side 入箱日花

アルミ「それで、私の弟子になりに来たんでしょ？」

日花「…バレてましたか」

アルミ「いや、今気付いたわ」

ノーヒントで？

アルミ「アンタにちよつとした試練を与えるわ。…弾幕に当たるな」

「桜舞」

BLOOM!

何処からともなく赤い花びらの弾幕が飛んできた！

日花「……………」

落ち着くのよ…当たっちゃダメ、避けるとは言われてないわ…

日花「吸収！」ギュルルル！

アルミ「……………へえ」

「まさか習得してたとはな」

玄関から男版アルミさんが出てきた。

アルミ「こんにちは、有太さん」

この人は火野有太さん、別名ダークアルミだったわね。

アルカ『性別以外はまんまアルミね』

日花（ですね）

有太「クツキー買ってきたぞ、アルミ」

アルミ「あら、無視したと思ったわ」

有太「返事をしなかったただけだ。：日花も食べていいぞ」

日花「あ、ありがとうございます」スツ

パクツ

：美味しい♪

アルミ「日花、アンタは合格よ。弟子に任命するわ」

日花「：よし！」

アルミ「クツキー食べ終わった後に少し特訓よ」

日花「はい！」

―数分後―

クツキー美味しかった♪

アルカ『昔のアルミみたいな暴走はしないのね』

日花（…アレですか）

確かクツキーを食べてからスーパ―化してとんでもない事になったんだっけ？

♪Rolling Sky—Sunset Glow

アルミ「さて、火桜について教えるわ」

日花「よろしくおねがいます」

アルミ「火桜には主に5種類あり、それらを応用するわ。…出てきなさい」

『ハッ！』シユバッ

やっとするのね。

スタツ

フラン「登場！フラン・ユメミル！」

マリン「えっと、マリン・マリオ…！」

バアン！

…何その決めポーズ。

アルカ『wwwwww』

アルカさんが笑ってるわね。

アルミ「……とりあえず手本を見せてやりなさい」

2人『了解!』スツ

まずフランがオレンジ色の花びらを出す。

フラン「攻撃火桜!」B L O O M!

オレンジ↓攻撃

飛んでくる花びらに対してマリンは青い花びらを出す。

マリン「防御火桜!」B L O O M!

ピキッ!

青↓防御

ドスツ

マリン「わっ!?!」

フラン「おっと、回復火桜!」B L O O M!

今度は緑色の花びらね。

ポワン

緑↓回復

マリン「ふふっ…転送火桜!」シユツ

紫色の花びらを出したマリンはいつの間にかフランの後ろに回り込んでいた。

紫↓転送

フラン「…監視火桜！」 B L O O M !

そして黄色い花びら。

アレで視界を広げるのね。

黄色↓監視

日花「…あれ？」

マリ「どうしたの？」

日花「赤は？」

フラン「赤は…俺達ではできない」

アルミ「赤は、一定以上の威力でそれぞれの火桜が赤くなるのよ。こんな風に」シユツ

アルミさんの周りを赤い花びらが旋回する。

日花「なるほど…」

アルミ「…さて、明日からはコレを習得してもらおうよ」

日花「はい！」

頑張るわ！

例の帽子

side 入箱日花

次の日、私は再びアルミさんの家に行った。

ピンポーン

…ガチャッ

アルミ「あら、結構早く来たのね」

日花「ども」

アルミ「あいさつしてるヒマないわよ☆」

ヒュンヒュン！

左右から弾幕が飛んできた。

日花「吸収！」ギュルルル！

冷静に吸収する。

日花「私には物理攻撃しか効かないわ！」バァン！

…決まったー！

「うん、流石アルカさんの転生だね」

「というか、いつ吸収を覚えたのかしら？」

「手合わせ願いたいわね」

物陰から3人出てきた。

フリスクさん、キヤラさん、ベティさんのトリオである。

日花「お久しぶりです」

アルミ「…よく『ソジック最強トリオ』の攻撃を吸収だけで防げたわね」

アルミさんは素直に驚いている。

フリスク「アルミさん、最強じゃないですよ」

キヤラ「私達を鍛えた貴女が最強です」

アルミ「そ、そうかしら？照れるわね」

……………。

ベティ「どうしたの、日花？」

日花「…そこで隠れてるアルヤ、マリン、フラン…出てきて」

「…バレたか」

スツ

アルヤ「いつ気付いたんだ？」

日花「気配バレバレよ？」

アルヤ「ええ？」

マリリン「私達は？」

日花「同じね」

フラン「マジか…」

アルミ（感知能力半端ないわね。鍛えられた人でもあまり気付かないレベルなのよ？）

日花「私から隠れるなんて61年早いのよ！」

3人『何その的確な数字？』

秘密よ♪

アルミ「そういえば…日花、渡したいものがあるの」
渡したい？

日花「ダメージですか？」

アルミ「違うわよ？」

日花「じゃあ死？」

アルミ「フア!?誰があげるのよそんな物騒な！」

日花「ただのブラックジョークですよ」

アルミ「真顔でそんな事言われても…」

フリスク（完全に日花のペースだね）

キヤラ（あんなアルミさんあまり見ないわよね〜）

アルミ「ハア：コレよ」スツ

アルミさんが出したのは、Nの文字が刺繍されている赤いキャップだった。

日花「え：コレまだ破れてないんですか？」

もう60歳以上だよねそれ？

アルミ「そつち!?もつとこう：『いいんですか?』みたいな反応しなさいよ!」

ベテイ（アルミさんがツツコミになつてて草w w w w）

日花「：それで、なんで私に？」

アルミ「本来はマリんに渡す予定だったけど：」

マリン「ちえ〜」

アルミ「色がアンタに一番合うからよ」スツ

日花「なるほど：」パサツ

赤いキャップをかぶる。

日花「似合いますか？」

フラン「似合ってるよ〜」

アルヤ「なんか昔の母さんみたいだな：」

昔のアルミさん？そりや…

日花「そりやアンタのお母さんのお母さん、つまりアンタおばあちゃんが私の前世だからね♪」

マリリン「セリフ長っ！そして早口！」メタい！

特訓しよう

side 入箱日花

アルミ「さて、渡したいものは渡したし、特訓場へ移動するわよ」

日花「特訓場？」

アルミ「ええ。…転送火桜！」

シュツ

―特訓場―

シュツ

日花「…ココが特訓場ですか？」

キャラ「その通り！」

フラン「毎週ココで特訓するよ」

アルミ「…日花、質問よ。アンタは魔法の種類を知ってるかしら？」

日花「はい」

アルミ「じゃあ言ってみなさい」

よくし。

日花「タマシイの魔法と5属性と能力。タマシイの魔法は8種類あり、ニンタイ、ユウキ、セイジツ、フクツ、シンセツ、セイギ、ケツイ、キョウフ。5属性は火、水、風、土、雷。能力は時間停止などの特殊なもの。以上です！」

ベティ「凄い…途中までしか分からなかった…」

マリリン「流石IQ169！」

IQ関係ないと思うけど？

アルミ「満点ね。フリスク、日花に転送火桜を教えなさい。他はいつもの特訓よ！」
フリスク「了解です…日花！しっかり覚えろよ！」

(ちよつとキョウフ崩壊)

日花「はい！よろしくおねがいます！」

フリスク「まずはスーパー化してくれない？」

日花「分かりました！スーパー化！」ビリビリ

シューウウ…

S日花「できました！」

フリスク「…あれ？」

私のスーパー化は紫色である。

フリスク「白じゃない？」

S 日花 「はい…何故か私のスーパー化は紫色になるんですよ」
ホント、なんでだろ？」

フリスク 「でも、パワーは確かに上がってる…まあいいや。次はフクツ魔法とファイアを混ぜてくれ」

混ぜる？

S 日花 「えつと…」ボツ

ギユウウン

紫色の火になった。

S 日花 「こうですか？」

フリスク 「そうそう！そのまま花びらの形にしてみて」

花びらの形に…

スッ

S 日花 「…できました！」

フリスク 「すぐにできたのは凄いね…転生特典かな？」メタい！

(一応あつてる)

S 日花 「後は持続力ですかね？」

フリスク 「うん、頑張つて！」

私は1時間ほど転送火桜の持続力を上げる特訓をするのであった。

―特訓後―

日花「ふう、疲れた〜」

アルミ「お疲れ〜カツカレ〜キーマカレ〜♪（？）」

日花「……………」

何今の？

アルカ『私が昔言ってたフレーズね』

原因は貴女ですか…まあいいや。

日花「アルミさん」

アルミ「どうしたの？…なるほど」

えっ？

日花「何が分かったんですか？」

アルミ「アンタの心を読ませてもらったわ」

……WHAT!?

日花「心読めるんですか!？」

アルミ「まあ、見ちゃいけないような内容は見てないけどね」

わお…

日花「そすか」

アルミ「説明は私がするわ」

日花「ありがとうございます。アルミさんが来たら驚きそうですけどね」

アルミ「まあ、そうね」

弄りもほどほどに

side 入箱日花

ガチャツ

日花「ただいま〜」

アドレーヌ「おかえり…その帽子は!？」

日花「アルミさんからもらった」

アドレーヌ「なるほど、だからアルミから連絡があつたのね」

日花「あ、ついでに言うとお母さん」

アドレーヌ「何？」

日花「アルミさんが後ろにいるよ☆」

アドレーヌ「え…フア!？」

アルミ「…よっ」

実はアルミさんがお母さんの後ろに回り込んでいたのである!

アドレーヌ「久しぶりね、アルミ」

アルミ「ええ。それで、なんで私がココに来たのか分かるかしら?」

アドレーヌ「日花に帽子を渡したから？」

アルミ「いや…実はね、日花は私の母さんの転生なのよ」

アドレーヌ「……………え？」

アルミ「日花は母さんの転生なのよ」

アドレーヌ「あー…知ってた」

……………フツ。

アルミ「え？」

アドレーヌ「結構前に日花に言われたわよ」

アルミ「……………日花？」ニコツ

あ、怒っちゃった？

日花「1つだけ言っただけいいですか？」

アルミ「言ってみなさい」

…よし。

日花「すう……………反応薄くて草」

アルミ「炎天掌」

ドゴオ…ツ！

私の意識はそこで途絶えた。

教訓：アルミを怒らせるな。

―数時間後―

…ハッ。

日花「…あれ？」

アドレーヌ「あら、起きた？」

日花「アルミさんは？」

アドレーヌ「とつくに帰ってるわよ。…それにしても、アルミをイジるとは中々やるわね。」

日花「ふふつ、でしょ？」

心読まれてると気付いた時焦ったのよね。

―次の日―

今日は月曜日なので、面倒くさいけど学校へ行く準備をする。

日花「……………」

帽子はかぶれないわね。

日花「行つてきまゝす」

アドレーヌ「行つてらっしやゝい」

ガチャツ。

フラン「おはよ、日花」

日花「おはようフラン」

言い忘れてたけど、私とフランは同じ中学に通っている。

フラン「さっさと行こうぜ」

日花「オーケー。転送火桜！」 B L O O M !

シュッ

ー高校ー

シュッ

日花「ところでフラン、アンタ成績よかったっけ？」

フラン「オール4以上だけど…日花はオール5だろ？」

日花「その通り！」 ドヤア

この下りがやりたかっただけよ。

フラン「ハア…ところで…」

ざわざわ…

フラン「なんで俺達囲まれてるんだ？」

そうね…

日花「…ふふっ、その人は次に『お前ら2人、今ワープしてきたよな!?!』と言う」

「お前ら2人、今ワープしてきたよな!?…何故分かった!？」

日花「なんとなくよ」

「と、とにかく、どうやってワープしてきたんだ!？」

フラン「秘密だ」

日花「らしいよ。…フラン、準備はいい?」

フラン「いつでもオーケーだよ」

日花「じゃ…全速力Bダツシユ!」

フラン「俺はXダツシユ派だ!逃げろ〜!」

ダダダダダ

私達は人混みから逃げるのであった。

ツッコミと絵描きと黒風幽と姫とヒメ

sideアルミ・マリオ

日花達は今学校ね…

キノ太郎「…ん、有太は何処だ？」

アルミ「魔界に行ったわよ？」

キノ太郎「アイツ…昼飯当番から逃げやがったな…」

アルミ「ま、後でしばいておくわ」

キノ太郎「おう、頼む」

ピンポーン

…誰かしら？

アルミ「はーい」

ガチャツ

「ごんにちは！」

「わあ……」

少年が1人、少女が4人いた。全員6歳ぐらいのようね。

「あ、あつてた〜！」

「ほら言ったでしょ？ダークルメさんに言われたって」

「俺もルイーダさんに言われたんだよ！」

…ダークルメ？…ルイーダ!?

アルミ「アンタ達、誰なの？」

桃「姪浜桃です！」

メイ「室見メイです…！」

絵奈「貝塚絵奈です〜！」

留美「赤坂留美です！」

平次「坂田平次です」

へえ…

アルミ「さつきダークルメとかルイーダとか言ってたけど、何なの？」

メイ「えつと…前世って信じますか？」

…!?

アルミ「信じるわ」

平次「数週間前、俺達の夢の中でそれぞれの前世が出てきたんです」

6歳の割には説明が上手いわね…事実の確率が高くなったわ。

絵奈「それで、ココに行けって言われたんです〜！」

アルミ「なるほど…」

見た目的に…

アルミ「桃、アンタはピーチさんの転生でしょ？」

桃「はい、そうです！」

まあ、金髪で目の色もそのままだしね。

アルミ「平次は…ルイーダさんでしょ？」

平次「はい」

それで…

アルミ「留美…アンタはダークルメの転生？」

留美「はい！そのまま転生しました！」

アルミ「絵奈はアドでしょ？」

絵奈「はい〜！」

語尾が伸びてるわね。

アルミ「でも…アンタは？」

メイ「……………」

全員転生者でしょうけど…

アルミ「アンタは、誰の転生？」

メイ「鳴花ヒメです」

アルミ「鳴花？」

何処かでその名字を……!!!

アルミ「アンタ、犯罪者大量脱獄事件の被害者の!？」

メイ「犯罪者脱獄？」

アルミ「ちよつと待ってて」

ガサゴソ…

母さんが言ってる、それで事件簿を調べたら出てきたわ。

確か…コレね。

タタツ

アルミ「ええ…アンタの前世の顔…コレでしょ？」

鳴花ヒメの写真を見せる。

メイ「…はい！」

アルミ「驚いたわ…まさか事件の被害者が転生するとは…日花が聞いたら驚くわよコレ」

メイ「？」

アルミ「…あ、それと留美」

留美「なんですか？」

アルミ「ルメに会いたいかしら？」

留美「…もちろんです！」

アルミ「了解。…全員入りなさい」

5人『失礼します』

ーリビングー

キノ太郎「マジかよ…：日花の他にもいたのか…」

アルミ「私の予想が正しければアンタと私の父さんの転生もいるわよ」

キノ太郎「そうか…：それは会うのが楽しみだな」

私達は知らなかった。

コレは普通にフラグだったという事を。

風人の再会

sideアルミ・マリオ

アルミ「そろそろ来るわよ、留美」

留美「はい……」

ピンポーン

アルミ「開いてるわよ」

ガチャツ

ルメ「アルミ、ダークルメが転生したってホント!？」

アルミ「ええ。ココにいるわよ」

留美「えつと……久し振り」

ルメ「……!!!」

ギユツ

ルメは留美に抱きつく。

ルメ「会いたかった……!」

留美「ふふっ、私もだよ」

ルメ「バカ…バカ…！」
泣いてるわね。

留美「ゴメンね、ルメ。6年前死んじやつて…」

ルメ「許さないわよ…もう…！」

アルミ「……………フツ」ニコツ

まあ、感動の再会つてところね。

桃「留美…」

絵奈「私はアドレーヌさんに会いたいです〜！」

平次「俺はデイジーさんに」

メイ「……………」

アルミ「メイ、アンタは？」

メイ「お兄ちゃんです」

アルミ「お兄ちゃんつて…鳴花ミコトくん？」

メイ「はい…なんとなくお兄ちゃんも転生してると思っんですよね」

アルミ「そう…会えるといいわね」

メイ「はい！」

アルミ「平次、隣に行くわよ」

(デイジーの家は302号室)

その後、デイジーさんが驚きすぎて心臓発作になりかけた時は焦ったわ。

side 入箱日花

日花「ふう…」

フランのヤツ、走るスピードが速すぎるわよ…

「忙しかったようだね」

メガネをかけてる少年が話しかけてくる。

日花「ホントよ…平尾」

コイツは坂田平尾、私の親友だ。

そして…マリオさんの転生だ。

性格が結構違うのよね。

「まあ、ワープするのは珍しいしな」

日花「そのせいで私達は逃げる必要があつただけど、きのえ」

甲「なんか発音が違つたよな？」

このマッシュルームは志免甲。“こう”とは読まず“きのえ”よ。

日花「気のせいよ」

そして先代マッシュルームヘッドことキノピオさんの転生でもある。

日花「…そういえば、私一昨日アルミさんに弟子入りしたのよ」

平尾「え!? ホント!」

日花「ホントよ。そこで私がアルカさんの転生だという事も教えたわ」

甲「マジか…俺らも行くか?」

平尾「それが良さそうだね。恐らく今平次達がアルミさんに訪問してるところだよ」

日花「へえ…」

転生者のバーゲンセールね。

キーンコーンカーンコーン

平尾「あ、そろそろ授業だよ」

甲「席につくか」

そして学校が始まる。

—————
デイジー「うーん…」

アルミ「デイジーさん!」

平次「驚きすぎてません…?」

アルミ「コレやばいでしょ!?! 9948呼んで〜!」

平次「は、はい!」

こんな事があつたのである。

アルミ「多すぎイ…」

side 入箱日花

アルミ「……………」

平尾「ど、どうも…」

甲「えつと…」

アルミ「…ハア」

まさかホントにいたとは、なんて思ってたそうね。

アルミ「父さんとキノピオさんの転生か…」

平尾「そうです…」

甲「……………」

アルミ「今更思うけど、転生者多すぎない？」

日花「偶々ですよ」

アルミ「…ホントに？」

日花「…多分」

アルミ「…母さん、タイミングを考えたでしょ絶対に」

アルカ『その通り（笑）』

日花「その通りだそうです」

アルミ「やつぱり…はあ」

アルミさんはこめかみに手を当てる。

アルミ「…まあいいわ。特訓よ特訓」

日花「適当ですね」

アルミ「ホントはクッキーをやけ食いたいんだけど？」

メイ「あはは…」

絵奈「…コレって私達のせいなの〜？」

桃「違うと思うよ」

アルミ（ホント…何するつもりなの、母さん？）

その後、何故か私の特訓量だけが倍になってたのは別の話。

sideアルカ・マリオ

アルミ、なんか大変そうね〜

（お前のせいだろ〜）

………。

一応、意図的にこの時期に転生したのは事実なのよ。

理由？

転生したら歳の差が半端ない状態になってた、とかは嫌でしょ？
そんな単純な理由よ。

とりあえず、私はこれから傍観者になるわ。

日花、頑張りなさいよ。

アルカ、転生！ 完

次章予告

幻影の書

普通：なワケがない学校生活を送っていた日花達。

そんなある日、色々な図書館から幻影にまつわる本が盗まれる！

犯人の目的は一体何なのか？

そして、日花達はどうやって事件を解決するのかッ!?

ケーティ「：ねえアオイ、レイン」

2人『なに？（なんですか？）』

ケーティ「私達、出番なかったわね」メタい！

アオイ「そうだね…」

レイン「私は魂集族の事で忙しいのでしようがないですね」

ケーティ「こころは幻想郷に行つたし…」

アオイ「私は冥界に行つてたね」

ケーティ「…そうだ」

2人『？』

ケーティ「そろそろウイザーになろうかしら？」

アオイ「えっ…ニンゲン辞めるの？」

ケーティ「まあ、種族ではね。でも、性格は変わらないわ。ちよつとした理由があつ

てウイザーになるのよ」

アオイ「ふーん…厄介事に巻き込まれないようにね、お姉ちゃん」

ケーティ「ええ…」

ガチャツ

有太「ただいま…ん？」

アルミ「ゆるうくた々？昼飯当番さぼつたわよね？」

有太「は？…あ」

アルミ「お仕置きだゴラァ！」 ドゴォ！
有太「ギヤァァァ！」

第2章 幻影の書

盗まれた本

side 入箱日花

：昨日投稿された回からじけーれつで2年経ったわね。(メタい！)
そんな事は置いといて。

昨日、私はアルミさんに

アルミ『転送火桜の強化版を生み出してほしいのよ』
と言われた。

ちなみに

攻撃火桜↓燃焼火桜(燃やす)

防御火桜↓反射火桜(反射する)

回復火桜↓猛毒火桜(過回復による毒)

監視火桜↓心相火桜(心を読む)

になっている。

今は放課後、私達は学校から帰っていた。

日花「……………」

平尾「日花く、どうしたんだい？」

甲「まさか、変な事考えてないよな？」

日花「2代目マツシユルムヘッドのアンタに、変な事考えてるなんて言われたくないわよ」

甲「否定できない、だと…!？」

日花「大した事じゃないわよ。ただアルミさんに転送火桜の強化版を生み出せと言われただけよ…(汗)」

平尾「…大事じゃん!？」

甲「何処が『大した事じゃない』だよ!？」

日花「…ま、昨日頼まれたばっかだし、ゆっくり考えればいいわ」

平尾「…………あ、いい考えがあるよ」

日花「何？」

平尾「幻を見せるものとかどうかかな？映像とかエネルギーを転送して、相手に幻を見せる火桜とか」

日花「…それだあ！流石魔法マニアね！」

平尾「どういたしまして」

「3人とも〜!」

3人『?』

マリリンが走ってきた。

マリリン「大変大変たいへんへ〜ん!」(原作ネタ)

甲「どした?そんなに焦って」

マリリン「ハア、ハア:図書室にある幻系の本が全部盗まれたのよ!」

日花「:え、ちようどよすぎない!」

平尾「誰に盗まれたんだい?」

マリリン「今日の朝、私が図書委員の仕事で本の整理をしてたら、いきなり、本棚から

紫色のチビが出てきたのよ!」

紫色のチビ?聞き覚えが:

マリリン「そいつは窓から飛び降りて:」

甲「飛び降りて?」

マリリン「そいつが現れた所を見てみると、幻系の本が全て盗まれてたのよ:この紙が

おいてあったけど」

『死ぬまで借りて行くぜツ☆ 3世』どーん

平尾「3世?.....あ」

甲「絶対アイツだ……」

日花「そうね……」

マリリン「……あれ？知ってるの？」

日花「ええ……紫色のチビ、そいつは恐らくオードロボートツテンよ！」

マリリン「トツテン？56年前におじいちゃん達が捕まえたアイツ？なんで分かるの？」

甲「実はな、キノピオさんが『30年ぐらい前にアルミがトツテン2世を逮捕したぞ』とか言ってたんだ」

マリリン「なるほど、だからトツテンってヤツなのね……」

平尾「アルミさんにこの事を話そう」

日花「そうね」

タタツ……

「よくし、この大量の本で……」パラパラ

紫色のチビは、盗んだ本を読んでいた。

次女はウイザー

side 入箱日花

ピンポーン

…ガチャツ

「誰かしら?」

日花 「アルミさくん!」

「姉さんじゃないけど?」

日花 「…あ、ケーティさんでしたか」

目の前には最近ニンゲンを辞めたケーティさんがいた。

日花 「アルミさんに話があるんですが…」

ケーティ 「そう。…姉さん、日花達に呼ばれてるわよ!」

「今行くわ」 スタスタ

マリリン 「あ、お母さん」

アルミ 「どしたの?」

日花 「実は…」

「ただ今説明中」

平尾「…という事なんですよ」

アルミ「そういえばそんな報告があったわね…よし」

甲「どうするんです?」

アルミ「パークーズ、出動よ!」

☆説明しよう!

パークーズとは、日花達のチームである!

日花、平尾、甲、フラン、アルヤ、マリンの6人で構成されており、アルミの指示で

出動する!

日花「分かりました、まずは情報収集に行きます!」

タタツ

アルミ「…:ホント、タイミングいいわよね」

ケーティ「姉さんは何もしないの?」

アルミ「そりゃ、私がやったらストーリー的に面白くないでしょ?」メタい!

ケーティ「メタいわよ」

アルミ「…:ところで、アンタはニンゲンじゃなくなつたワケだし、パワーはどうなつ

てるの？」

ケーティ「2・5億よ。姉さんに近いわね」

アルミ「それほど近くないわよ？」

ケーティ「えっ？でも2・75億じゃ……」

アルミ「それは物理的パワーよ。精神的には実質4・5億ぐらいよ」

ケーティ「わお、流石姉さんね……」

アルヤ、フランと合流した後、作戦会議を始めた。

アルヤ「まずは図書館とかに行かないか？他の場所でも盗まれてるらしいし」

日花「そうね……でもまずはとある場所を見てみたいのよ」

平尾「その場所って？」

日花「オードロボーが拠点にしてた場所、今は亡きワリオさんの家よ」

甲「あー、いい考えだな」

フラン「そこって？」

日花「行ったら分かるわよ」

マリリン「じゃあすぐ行きましょ」

日花「オーケー。転送火桜！」 B L O O M !

シュツ

ーワリオの元家ー

目の前には古びたボロ家がある。

日花「みんな」

全員『？』

日花「息を止めるか、鼻をつまみなさい」

平尾「…なるほど」

フラン「でもなんで？」

日花「…すぐに分かるわよ」

アルヤ「…とりあえずやっておくか」

日花「じゃ、開けるわよ…」

ギギツ…

もわくん

アルヤ「うおっ、何だコレ!？」

日花「やつぱり…」

ニンニクの匂いが充満してるわね。

ヒントは…

side 入箱日花

マリリン「で、ココで何するの？」

日花「最初のオードロボーが拠点にした所だから、何らかのヒントがあるかもしれないわ。辺りを調べましょ」

フラン「…今思ったけど不法侵入じゃね？」

平尾「そこは問題ないよ、前世の時もそれを無視したから」

アルヤ（問題あるだろ、それ！）

中に入ると、ものは散らばったままだった。

甲「ホコリまみれだな…」

日花「そうね…」

大分前にワリオさんが引越したからね…ん？

日花「ちよつと待って」

アルヤ「どうした？」

日花「なんか、不自然じゃない？」

甲「不自然？何がだ？」

日花「この散らかり方よ。意図的に散らかしたみたいじゃない」

平尾「そういえばそうかもね…」

日花「……………」ボツ

ボオオオツ！

火を使つてホコリだけを燃やしてみた。

フラン「…!？」

ホコリの下には隠し扉があつた。

日花「開けるわよ…」

ガチャツ

中に入っていたのは…

『ヒントがあるとも思ってたか、バカども！ 2世』

マリオン「……は？」

日花「もしかして……」

コレ、アルミさんが2世の捜査をしてる時見つけたものかしら？

平尾「この紙、30年放置されてたんだね」

アルヤ「……とつとと出るか」

フラン「だな」

甲「手がかりなしか……」

―外―

日花「ココは手がかりなしだったし……作戦通り図書館を見てみましょう」

シュツ……

近くの図書館に転送火桜で移動した。

ざわざわ……

予想通り警察が数人調査していた。

「こちら、逮捕だ！」

「ちくしょー！」

日花 「ん？」

ちょうど今紫色のチビが逮捕されていた。

平尾 「あれ、もう逮捕されてる…」

まさか…

日花 「…すみません」

「ん、何でしょうか？」

日花 「そいつ、ただの幻影です」

「そんなワケないですよ、この通り実体がありますし」

日花 「実体…つまり…」 スッ

ズバッ！

「グハッ…グオオ…フツ…」

犯人と思われるいた人は私に斬られると霧散した。

日花 「影分身のような幻影ですよ」

「なんと…！」

甲「日花、何故分かったんだ？」

日花「あまりにもあつさりとおぼつかって捕まっていたから怪しいと思っただけよ。それが偶々あつてただけ」

後、オードロボー達は全員捕まえるのに手こずったからね。

フラン「は、はあ…」

日花「既に幻影の技を習得してしまつてるようね。コレは急がないと…」

「おつ、心配がなくなつたな」

紫色のチビは言う。

「くくつ、まんまと騙されやがって。やつぱり国家権力どもはバカの集まりだよな」

ザツ

「誰がバカどもだつて？」

「…げっ!？」

三女は魂集族のリーダー

「おっ、気配がなくなったな」

紫色のチビは言う。

「くくっ、まんまと騙されやがって。やっぱり国家権力どもはバカの集まりだよな」

ザツ

「誰がバカどもだって？」

「…げっ!？」

「見つけたよ…」

魂集族のリーダー…アオイ・マリオはそう言った。

sideアオイ・マリオ

アオイ「見つけたよ、オードロボー…トツテン3世」

3世「な、何故見つけた!？」

アオイ「秘密だよ…さて、逮捕するよ」

3世「…へっ、させるワケないだろ！」スツ

3世は手を私にかざす。

3世「幻影！」カツ！

アオイ「…解除」サツ
パリン！

3世「なっ!?!」

アオイ「私にそれが効くとても？」

3世「クツ…」

アオイ「大人しく捕まって」

3世「こうなったら…ハツ！」

フツ…

3世は跡形もなく消え去った。

アオイ「透明人間ね…」

なら心配を…？

3世「バカめ、心配も一緒に消えるんだよ！」
何処からともなくそんな声が聞こえた。

アオイ「なっ…」

3世「あばよ、かっつあーん！」

ダダダダダ

アオイ「…ハア」

泳がせておくわ。

アオイ「姉さんに電話しよう」

side 入箱日花

アルミ『という事だから、よろしく』

ツーツ…

日花「3世はしめじ駅の近くにいたらしいわよ」

平尾「以外と近いね」

甲「でも、そこから離れてるんだろ？」

日花「アオイさんがGPS用に監視火桜を仕込んだらしいわ」

フラン「おお、仕事してる〜」

マリン「うん、アンタよりはね」

グサリ

フラン「ガハッ…」バタン

アルヤ「うおっ、死んだふりすんなよ…」

日花「…まあフランは立ち直るまでおいておきなさい」「ひどくね!?!」そろそろアオイ

さんの監視火桜が転送されるハズだから」

「数秒後」

ヒラッ：

あ、来た来た。

甲「あつちだな」

しめじ駅の西の方向ね。

平尾「行こう」

ダッ：

3世「……………」ササッ

3世は建物の間を通っていた。

3世（このまま家に帰れば、成功だ！後は本の内容を習得するだけ！）

ヒラッ：

監視火桜が彼の背中にくっついているとも気付かずに。

アオイ「姉さん」

ケーティ「何、アオイ？」

アオイ「手合わせしようよ」

ケーティ「へえ…いいわよ」

アオイ「よし、じゃあ…」

アオイは構える。

アオイ「行くよっ！」ドッ！

ケーティ「…ハッ！」ザッ

ドゴオオオ！

2人の手合わせの結果は、その内分かるだろう。

追え、追え、オエーツ！

side 入箱日花

日花「……………」

甲「なあ日花」

平尾「コレは流石に、ね…？」

日花「ええ…」

目の前にあつたのは…

「俺が本体だ！」

「いいや俺だ！」

「俺に決まってるだろ！」

大量の3世。はつきりと言つてうるさい。

日花「全員偽物でしょ？ヘルフレイム！」ゴオオオオオ！

ドゴオー！

『ぐわあああ！』フツ…

ほら、言つたでしょ？

フラン「本体は止まってるみたいだな」

アルヤ「恐らく何処かで盗んだ本を読んでるんだろ」
タタッ…

―数秒後―

日花「…:…:また?」

『俺が本体だッ!』

全員偽物なのは確定だし…

日花「時間停止」

←ブウウン…

マリリン「コレだと邪魔されないわね」

日花「この状態で本体の所に行くわよ」

スタスタ

―数分後(時は止まってるがな)―

日花「ココね…:」

アルヤ「ボロ家か」

平尾「こじ開けるよ。…:ファイアボム!」ポイツ

…:ドガン!

甲「中は…おお」

中には本が大量に積まれていた。
恐らく全部盗んだのだろう。

フラン「肝心の本体は…いた！」

3世「……………」

3世は本を読んでる状態で止まっていた。

日花「……………！いい事思いついたわ」

マリン「何何？」

日花「アルヤ、ちよつと来なさい」

アルヤ「おう…？」

日花「……………」ゴニヨゴニヨ

アルヤ「…うおつ、なるほどなく…よし、やるぜ！」

甲「何する気だ？」

日花「その内分かるわよ。…再生！」

→ブウウウン…

3世「……………!?何だお前らは!?!」

平尾「君を捕まえに来たよ」

3世「ッ、逃げるぜ！」バツ

アルヤ「ほい、時間停止く(日花以外)」

←ブウウウン…

アルヤが時間停止をした。

日花「さて…」スッ

私は幻影の書を手取る。

日花「読んでいくく♪」

―数分後―

日花「……………」パタン

アルヤ「終わったのか？」

日花「ええ…フフフ…」ニヤリ

アルヤ「面白い事になりそうだな」

みんな(3世含む)を動かした。

アルヤ「再生！」

→ブウウウン…

3世「…は!?!」

平尾「動いてる…」

甲「日花、なんでこんな状態にしたんだ？」

日花「まあ見てなさい：幻影火桜！」 B L O O M !

しーん

マリン「何も起きないわよ？」

3世「ハッ、習得できなかつたようだな！」

日花「そうかしら：分身！」

ポワン！

3体に分身したようね。

フラン「…!?ど、どうなってるんだ!？」

日花「さて、逃げれるかしら?…まあ、アンタは既に負けてるけど」

3世「へっ、そんなワケあるか!逃げろく!」

甲「ッ、待て！」 ダッ

アルヤ「……………」

3世「おせーな！」

アルヤ「…何言ってるんだ、お前？」

日花「……………」 ニヤリ

アルヤ「さっきから1歩も動いてないぞ？」

3世 「は? そんなワケないだろ! 俺はずっと走ってるぞ!」

マリン 「そうよ兄さん、追いかけないと!」

日花 「フフフ…ハハハッ!」

3世 「な、何がおかしい!?」

日花 「アンタは催眠状態なのよ! ハッ!」 カッ!

3世が実際にいる位置を攻撃する。

3世 「うつ…な…ぜ…」 バタン

4人 『!?』

こうして私は、幻影火桜を習得したのである。

幻影の書 完

次章予告

ザ・ネロイズム

至つて普通の逸般人、日花の周りが突然“逆さ”にひっくり返る。

それは異変なのか、はたまた誰かの救難信号なのか。

魔界へ行つたら分かるようだ!

アルミ 「アンタは…!」

第3章 ザ・ネロイズム

逆さ…？

side入箱日花

日花「こ、これは!？」

グオオ…

私の周りは今、全て逆さになっていた。

日花「何コレ…？」

そして背後から建物が…

日花「ハッ!？」

夢か…

マリリン「おはよ!どうしたの日花？」

日花「なんか…全て逆さになる夢を見たのよ。しかもやけにリアルで…」

マリリン「でも、夢だったんだし…とりあえず朝の準備よ!」

日花「ええ…(何だったの、あの夢…?)」

「…びんゆじびんゆじく早、らほ」ンリマ

…!?

日花 「マ、マリリン、アンタ逆さに…!？」

マリリン 「え？何言ってるんのアンタ？幻影火桜使いすぎて幻覚でも見てんの？」

日花 「あれ？戻ってるわね…」

アルカ 『日花、気を付けて。どうやら幻じやないみたいよ』

日花 (分かりました…)

―後間時―

平尾 「おはよう、日花」

日花 「おはよ…」ポー

私は少しぼーっとしていた。

甲 「どうした？具合でも悪いのか？」

「いーお？夫丈大、花日」尾平

えっ!?

日花 「また逆さに!？」

甲 「おい、平尾、お前…!？」

甲も見えてるようね。

平尾「ん？何のことだい？」

はあ…？

日花「甲…アンタも見えたわよね？」

甲「ああ、さつき平尾が逆さに…」

日花「実は、今日の朝、マリンが一瞬逆さになったのよ…」

「……………」パチン

「…かるき起たまつい、くかにと」甲

日花「今度はアンタが逆さになってるわよ!？」

平尾「甲!？」

甲「そうなのか？なんともないんだがな…？」

ええ…

甲「もしかしたら、逆さになってる時、本人は自覚がないんじゃないか？」

…なるほど。

日花「ありえるわね。放課後アルミさんの所に行きましょ」

平尾「そうだね…」

今回は嫌な予感がするわ…

♪かいきりきべアーネロイズム

ああ、規制、罵声、余生

全部全部ぜんぶ、うざいうざいな

ああ、未来、嫌い、嫌い

いつそ失踪失踪屍だ

はい悲しんで、はい悲しんで、はい顔死んで、NO青春

はい苦しんで、はい苦しんで、這いつくばつてもさえない人生

ヘラヘラすんな

痛い痛い現象真っクラクラ現象

至たたたる表情は真っ赤っ赤な炎症

痛い痛い現象真っ逆さま現象

悲たた嘆だ感情は落下かな一生

否テテテテ定で否テテテ定で定で

もう内面から存在まで否定で

否テテテテ定で否テテテ定で定で

もうどうなつたつていいや

聞きたくもない
聞きたくもない

魔界ってほんまかい？

side 入箱日花

放課後になったので、アルミさんの家に向かう。

ピンポン

…ガチャツ

アルミ「お、来たわね」

日花「実は「内容はもう分かるわ。逆さになる現象が起きてるんでしょ？」…はい」

アルミ「私も何度か目撃したのよ。主に有太が逆さになってたわね」

有太「自覚できないのが厄介だよな…」

日花「それで、何が原因なんですか？」

アルミ「原因は…とあるヤツの救難信号よ」

全員『救難信号？』

異変とかじゃないの？

アルミ「正確には、魔界の“善魔”と呼ばれてる悪魔の、ね」

日花「はあ…」

アルミ「という事で、魔界へ行くわよ」

日花「いきなりですか!?急展開すぎませんか!?」メタい!

アルミ「今更よ」

平尾「でも、どうやって魔界に?」

アルヤ「魔界はこの次元、地界とは別次元に存在する。つまり、転送で行けるんだ」

アルミ「説明ありがと、アルヤ。…と言つても、ただの転送火桜じゃ行けないわよ」

甲「ならどういう転送なんですか?」

アルミ「こうよ。まずは時間停止!」

←ブウウウン…

アルミ「そして転送火桜のパワーを…!」

ギユイイン!

アルミ「赤くなるまで溜め続ける!」カツ!

フラン「!!(凄いパワーだ…!)」

アルミ「最後にこの赤い花びらを…」スツ

マリン「…?」

アルミ「…とりあえず思いっきり殴る!」ドゴオ!

全員『結局ソレですか!?!』

予想はしてたけどね…

バリン！

アルミさんが殴った場所は空間が割れ、穴が空いた。

有太「俺も行くぜ」

アルミ「いや、アンタは天界で鬼神に会ってきなさい」

有太「ん？なんでだ？」

アルミ「カンよ」

有太「…分かった」

…それじゃ。

日花「突入！ハアア！」

シュツ

――魔界――

甲「…ここが魔界か」

マリリン「そのようね」

アルミ「再生！」

→ブウウウン…

日花「それで、どう動きますか？」

アルミ「4手に分かれるわよ。その方が調査しやすいし」

平尾「でも、初見ですよ？」

ゲームじゃないわよ…

アルミ「大丈夫。監視と転送火桜をつけておくから、何かあったらすぐに駆けつけるわ」

アルヤ「…了解だ」

分け方はこう。

私とフラン

マリんとアルヤ

平尾と甲

アルミさん

sideアルヤ・マリオ

スタスタ…

マリ「兄さん」

アルヤ「何だ？」

マリ「私たちだけで2人だけで行動した事あったっけ？」

アルヤ「…あまりないな」
それより…

「おい、そこの野郎ども」

「金を出せ」

アルヤ「治安悪いなここ…」

嫌がる少女

side アルヤ・マリオ

「おい、その野郎ども」

「金を出せ」

アルヤ 「治安悪いなここ…」

マリリン 「だね…」

「金出せって言ってるんだろうが」

「じゃねえと殺すぞ！」

アルヤ 「うおつ、殺すとか物騒だな」

マリリン 「金あげても殺しそうだけどね」

「ッ、うおらあ！」 ダッ

アルヤ 「ふんっ！」 ドゴォ！

「ギャフン！」

「なっ!?!」

アルヤ 「お前ら…かかってこい！」

『言われなくても、やるわあー!』

うおっ、多いな…ま、いいけど。

アルヤ「ウインドブラスト!」ビュウウン!

マリン「はあ…私も加勢するわ。ハイドロポンプ!」バツシャーン!

『ぐわあああ!』

さて、掃除の時間だぞ! (黒い笑み)

―数分後―

「ガハッ…」バタン

アルヤ「よし、これで全員倒したな」

マリン「掃除完了ね」

…ザッ

「ねえ、アンタ達」

アルヤ「ん?」

白いパーカーを着た少女がいた。

「地界から来たんでしょ?」

マリン「そうだけど?」

「…分かった」スッ

少女が出したのは…のこぎりだった。

アルヤ「んな物騒な…うおっ!」サッ

「アンタ達がここにいるのは嫌。よって排除する」

♪かいいりきベア—イヤガール

「イヤッ!」ズバッ!

飛斬撃か…

アルヤ「風斬!」シャッ!

相手の攻撃を相殺した。

マリリン「くらえ…!」

マリリンは空気中の水を集める。

マリリン「水針!」シユッ!

「やややややややっ!」

ズバババッ!

マリリン「全部相殺した!?!」

「やあっ!」ブンッ

アルヤ「ッ!」サッ

のこぎり振り回すなよ!

アルヤ「危ないやつだな！」

「アンヘル様からアンタ達の方が危ないって言われた！」

…アンヘル？

マリリン「誰よ、アンヘルって」

「…言わない」

まあ、そうだろうな。

十中八九親玉なんだろうが。

アルヤ「攻撃火桜！」 B L O O M !

「きゃあっ！」 ドスッ

マリリン「ハイドロポンプ！」 バツシャーン！

「うわっ!?!」

敵は俺達の蓮撃をくらい、怯んだ。

アルヤ「とどめだ！行くぞマリリン！」

マリリン「オーケー！ハアアアッ！」

ギュイイーン！

「何…!?!」

2人『タイフーン！』

ギユルルルル!

「嫌あああああ!」

ピューン…キラン??

敵は空の彼方へと飛んでいった。

マリン「兄さん! YEAH!」

アルヤ「おう!」

ビシ、バシ、グツ、グツ!

(ジヨジヨ3部のハンドシグナル)

一件落着だな!

平尾「なんか魔界って、空が赤い意外地界と変わらないね」

甲「あとは、見かける人がガラの悪そうな格好をしてるだけか?」

「……………」

毒の悪魔と善魔

side 坂田平尾

平尾 「なんか魔界って、空が赤い意外地界と変わらないね」

甲 「あとは、見かける人がガラスの悪そうな格好をしてるだけか？」

「……………」

…で？

平尾 「そこの君は何のようだい？」

「バレてたのね」 スッ

紫髪の少女が出てきた。

…紫というより、マゼンタかな？

甲 「誰だ、お前は？」

ベノム 「私はベノム、毒の悪魔よ」

悪魔か…

平尾 「それで、敵なのかい？それとも味方なのかい？」

甲 「答え方次第では味方でも敵とみなすぞ」

ベノム「…味方よ」

平尾「真相火桜！」 BLOOM!

少し読ませてもらうよ。

『後はネロ君のところに連れて行って、同盟を組むだけ…』

ネロ君つて誰かは知らないけど、問題ないか。

甲「どうだった？」

平尾「信用できるよ」

ベノム「それはよかったわ。…ついてきて欲しいんだけど、いいかしら？」

平尾「うん」

ベノム「じゃあついてきなさい」

スタスタ…

―数分後―

僕達が着いたところでは…

アルミ「ふふつ、やるわね！」

「君こそ！」

『ハアッ！』

アルミさんと誰かが手合わせをしていた。

甲「何だこの状況？」

side 入箱日花

「うおおおおおおお！」

なんか、目の前からチェーンソーを持った少女が走ってきてるんだけど？

…冷静に対応しよう。

日花「反射火桜！」 B L O O M !

ドゴォ！

「ギャフン！」 バタン

日花「よし」グッ

フラン「…おいおいちよつと待て！」

日花「何よ」

フラン「あっさり終わってないか!？」

日花「別にいいんじゃない？物騒なものを持って突進してきたのが悪いんだし」

(出番はこれだけ!?)

※これだけです。

…バサッ

日花「？」

クルッ

「やあ」

挨拶してきたのは、逆さにひっくり返ってる悪魔だった。

…ちよつと待って!?

フラン「お前が善魔か!？」

ネロイズム「その通り。僕の名前はネロイズム。よろしくね、アルカの転生の日花」

…何ですって!?

日花「何故それを!？」

ネロイズム「アルカとは知り合いなんだ」

アルカ『その通りよ』

事実みたいね。

フラン「で、あの逆さになってたヤツは何が目的なんだ？」

ネロイズム「そうするとココに来るかな、と思っただ」

「フッ、そう思ってたわ」

日花「アルミさん！」

アルミ「アンタの目的はよく分かったわ。そこで…

ネロイズム「……ちよつと手合わせしない？」

マジか…

流石戦闘狂。

アルミ「いい提案でしょ？」

ネロイズム「だね…早速あつちでやろう」

ネロイズムは空を指差す。

アルミ「ふふっ、いいわよ…」

スウ…

2人は空へ飛び上がり…

アルミ「ハアッ！」

ネロイズム「フンッ！」

ドゴオ！

手合わせを始めた。

兄妹の再会

side 入箱日花

アルミ「炎天桜舞！」BLOOM!

ネロイズム「悲帝バツテン！」ギユン!

ドガアアアン!

日花「凄い…!」

甲「規格外な戦いだな…」

アルヤ「うおつ、ネロイズムも凄いな」

マリ「あの母さんといい勝負するなんて、ね…」

…ズドツ!

ネロイズム「ハア、ハア…いい勝負だった」

アルミ「ええ。できればまたやりたいわ」

メイ「…!!!」ハッ

絵奈「どうしたの、メイ？」

メイ「お兄ちゃんの気配がする…！」

絵奈「…え？」

メイ「次元斬り！」ズバツ

ゴオツ！

絵奈「メイ!?何処行くの〜!?」

メイ「お兄ちゃんに会いに行く!また後で！」

絵奈「え〜!?」

シュツ

ネロイズム「…?」

アルミ「どうしたの？」

ネロイズム「なんか、懐かしい気配が…まさか！」

ネロイズムは驚いている。

「あれ?日花さん!」

日花「…メイ!?!」

メイ「…!!!」

ネロイズム「…ヒメ?」

メイ「…お兄ちゃん？」

全員『!?!』

ネロイズム「ヒメ！」ダッ

メイ「お兄ちゃん！」ダッ

ギョッ

ネロイズム「お前も、転生してたのか…！」

メイ「うん…お兄ちゃん、会いたかった…！」

アルミ「アンタ…鳴花ミコトの転生なの!？」

ネロイズム「ああ…」

メイ「61年ぶりだね、お兄ちゃん」

ネロイズム「ヒメ…いや、メイ」ナデナデ

メイ「？」

ネロイズム「みんなに、僕達の過去を話していいかい？」

メイ「…もちろんだよ」

ネロイズム「ありがとう」

アルミ「……聞かせてもらおうわ」

ネロイズム「61年前の話だ」

side 鳴花ミコト（回想）

僕は鳴花ミコト。中学2年生。

元々コミュ障で、インキャ扱いされていた。

しかし成績はよかった。

それが気に食わなかったのか、僕はいじめられていた。

でも、僕にとってはそんなことはどうでもよかった。なぜなら…

ヒメ「お兄ちゃん、おかえり！」

ミコト「ただいま、ヒメ」ナデナデ

ヒメ「えへへ〜」

優しい家族がいたから。

僕はそんな家族と生活していた。

…あの日までは。

僕はその時、土曜授業でまだ帰ってきてなかった。

ピンポン

母「あら、まだ10時だけど…」

父「はい！」

ガチャッ

…ドスッ

父「ガフツ!?!」バタン

「ククク、死んでろ」

犯罪者が入ってきたんだ。

母「あなた!?!」

「オラアー!」バンツ

母「ガツ…!」バタン

ヒメ「えっ…?」

「反抗しないなら、生かしてやる」

ヒメ「……さない」

「あ?」

ヒメ「許さない!」ビリビリ

「!?!」

Sヒメ「この、人殺し!」ドゴツ!

「ガハツ!?!…野郎!」ドスッ

Sヒメ「ツ…!」バタン

「くたばったか。さて、金目の物を…」

グ
キ
ツ

仲間

side 入箱日花

ネロイズム「そして、気付いたら悪魔に転生してたのさ」

ベノム「その少し後に私に会った感じね」

日花「……………」

かなり残酷な過去ね…少しアルカさんの過去に似てるわね。

ネロイズム「…元々は同盟とする予定だった」

アルミ「同盟？」

ネロイズム「だが、君達の仲間であるメイと再会できた…よって君達の仲間になりた
い」

アルミ「…ふふつ、歓迎するわ」

ネロイズム「ああ、よろしく」

ネロイズム が仲間になった！

イナイレの仲間になった時の効果音が脳内で流れる。

甲「それで、元々なるつもりだった『同盟』は何の同盟なんだ？」

ネロイズム「…天界のとある天使がとんでもない事をしでかそうとしているんだ」
平尾「天使…?」

ネロイズム「その天使の名は、アンヘル」

アルヤ「アンヘル…あの少女が言ってたヤツか」

ネロイズム「君が言ってる少女は恐らくアンヘルの手下だ」

マリ「でも、そのとんでもない事って何なのよ?」

ネロイズム「地界、すなわち地球を圧倒的力で乗っ取ろうとしてるんだ」

フラン「なっ…!?!」

ネロイズム「だからそれを止めるために地界最強のアルミと同盟を組もうとしてたんだ」

アルミ「へえ…メイ」

メイ「何ですか?」

アルミ「今から天界へ行くわよ。有太の件もそろそろ終わってると思うし」

メイ「分かりました!次元斬り!」サツ

ズバツ!

日花「フア!?!」

アルミ「メイはほぼ何でも斬る能力があるのよ。多分転生特典ってヤツね」

それってかなりチートじゃ？

ネロイズム「空間を割る必要がなくなったね」

アルミ「ええ…じゃあ行くわよ！」

日花「突入！ハアア！」

シュツ

「それで、アルミはいつ来るんだ？」

有太「そろそろ来ると思うぞ」

「そうかい」

シュツ

有太「ほらな？」

シュツ

日花「ここが天界…」

「ほらな？」

アルミ「あら、終わったのね有太」

有太「ああ、協力してくれるぜ」

「善魔もいるのかい」

有太さんの隣には…鬼がいた。

ネロイズム「君は…鬼神」

優香「正解。私は鬼神、本名は基山優香さ」

アルミ「今回はよろしくね、優香」

優香「ああ。…後で一飲み付き合ってもらおうよ?」

アルミ「もちろん」

ガシツ!

2人は握手を交わした。

ベノム「じゃ、これからアンヘルの住居に向かうわよ」

一体どんな建物でしょうね…?

ザ・ネロイズム 完

時系列の説明

♪MULAストーリー——a r u m i i s h e r e.

1部 日常は非日常

主人公 マリオ・マリオ

2016 洗脳メガネ 洗脳メガネをかけた大家が銀行強盗をする事から始まる。

2017 パンドラの箱? 開けたら消えてしまう箱の正体は!?

2019 マリオの脱獄 盗撮して捕まったマリオは果たして脱獄できるのだろうか。

2019 ただ今逃亡中 年数を0にしろ!

2019 マリオが死ぬ!? 一週間で就職するか、黒幕を倒すか。

2019 呪いの帽子 マリオの帽子に呪いがかかる!?

2019 タイム恋愛 2年前にタイムスリップしたマリオ。

2019 ケイサツの逆襲 頭がおかしくなった警察。

2019 宝探しデスゲーム 金が欲しいマリオが参加した宝探しゲームはとんでもないものだった!

2019 犯罪ワールド脱出 マリオの家に逃げ込んできたノリオが持っていたのは!?

ここまで原作

2019 アルカ、生き返る！ アルカ、生き返るってよ。

2部 オーバーパワー

主人公 マリオ・マリオ

2020 アルカの学校生活 編入生、アルカ。

2022 脱獄者の逆襲!?! 大量脱獄!?

2023 洗脳メガネ、再び 誰かが洗脳メガネを保管庫から盗んだ。

2029 世界がバグった！ 黒い生命体が現れた。

主人公交代 アルミ・マリオ

2035 アルミの特訓！ 時間停止ドリンクを飲んだアルミが特訓をする。

2039 ただ今命がけで逃走中 妹が2人できた!?

2043 パンドラの箱。 闇の風幽。

2049 5747081...? この世の終わりなのか...?

3部 コンプリート・ファイア

主人公 アルミ・マリオ

- 2051 地下の王国 UNDER TALE。
- 2053 パンドラの箱！ 闇のアルカ、再び！
- 2053 ラグトレイン きさらぎ駅、再び！
- 2057 にゃんこ世界大戦 ニャン国と全面戦争!?
- 2060 アルミ、暗殺!?! 犯人は一体誰なのか!?
- 2061 真のPルート 実は8つめのタマシイが存在した…
- 2064 日常。 仲間達に会おうと思うアルミ。
- 2072 フィナーレ。 アルミは果たして完成できるのか!?
- 4部 転生幻影
- 主人公交代 入箱日花
- 2078 アルカ、転生！ アルカの他に転生していたのは…
- 2080 幻影の書 紫色のチビ、だとお？
- 2084 ザ・ネロイズム 逆さの悪魔
- 2084 ラ・アンヘル 仮面の天使
- 2084 ??? 完成の欠片
- こんな感じですね。
- 年数を計算すると……なんと68年！

定年退職した人の年齢よりも長いですね。

じけーれつはこれからも続きますよん。

ヘカーティア「私の話し方を真似してるのかしらん？」

アルミ「さあ？」

それでは、また明日です。

第4章 ラ・アンヘル 嫌な偶然

side 入箱日花

アルミ「アンヘルの住居ってどんな場所なの？」

優香「…神社のような場所だと聞いたことがある」

アルミ「へえ…」

日花「アンヘルのパワーってどれぐらいなの？」

ネロイズム「8億ぐらいだ。でも、戦術が圧倒的に卑怯だから、自分より数倍強い相手でも倒せる」

日花「へえ…」

アルミさんの悪いバージョンね。

平尾「…それにしても、建物は地界と変わらないね」

甲「だな。違いは空の色や住民の種族ぐらいか？」

私達は他愛のない話をしていた。

…周りに人がいなくなる場所に着くまでは。

優香「…アルミ、ネロイズム」

アルミ「何？」

ネロイズム「なんだい？」

優香「分かるよな？」

ネロイズム「…もちろんだ」

アルミ「ええ。誰かが私達をつけてるわね」

「…バレましたか」

ベノム「アンタは…!？」

ネロイズム「何故ココにいるんだ…？」

…普段は神社に立てこもってるはずだ、アンヘル」

…何ですって!?

アンヘル「数年前に私を裏切った貴方に言われたくないですわね、ネロイズムとベノム」

ベノム「ツ…!」

アンヘルは巫女服のようなものを着ており、赤い角と天使の輪っかがあって、翼が片方だけ生えていた。

…セフ○ロスのマネかしら?

(違いよ!)

アルカ『アイツは…!』

日花（どうしました、アルカさん？）

アルカ『いや、何でも「あらあら…」!?!』

アンヘル「これは予想外ですネ…」

日花「…?」

アンヘル「私の“失敗作”の転生がいるとは思いませんでした…」

アルヤ「失敗作…?」

日花「!?!」

ありえない…!

アルカ『いや、ありえるわ。実際に目の前にいるんだから…!』

日花「アンタが…クソ野郎、クティ・パンドラの転生なんて…!」

マリオ家『!?!』

マリリン「クティって、日花の前世の母親!?!」

ネロイズム「いやな偶然だ…!」

アンヘル「これは流石の私でも予想外でしたねえ…」バサツ

アンヘルは空に飛び上がる。

アンヘル「本来待つべきであつた場所で待つとしますわ」

ビュウウン!

ネロイズム「ツ、待て「ネロ君落ち着いて！」くっ…」

優香「アイツ…高確率で嘘をついてる」

アルミ「そうね…それと部下をここに送り込んでるわね…」

…ドドドドドッ！

「お前らにはアンヘル様と戦う資格なんてねえんだよ！」

「俺達に殺されるべきだ！」

ま、前から大軍が！

優香「止まれ！」ブンッ

優香さんが金棒を振り回す。

「ぐわあああ！」

ここは戦闘になるわね…！！

日花「ヘルフレイム！」ゴオオオオオ！

アルミ「炎天桜舞！」B L O O M！

ネロイズム「バツテンスロウ！」ヒュン！

戦いは、始まった。

蹴散らしていこー

side 入箱日花

日花 「ヘルフレイム！」ゴオオオオオ！

アルミ 「炎天桜舞！」BLOOM！

ネロイズム 「バツテンスロウ！」ヒュン！

戦いは始まった。

「ぐわああー！」

平尾 「ファイアボム！」ポイツ！

「んなもん効かねえよ！」

平尾 「なっ!？」

甲 「オラア！」ドゴオ！

「グフツ！」

甲 「今のは効いたようだな」

フラン 「ケツイサンダー！」ビリビリ！

マリン 「波乗り！」ザパーン！

2人『合わせて、電撃床!!』
ビリビリッ!

「じびびっ!?!」

「何だこれ!?!」

アルヤ「からの、大嵐!」ビュウウン!

「うわあああ…」キラッ

ネロイズム「否テテテテテテテテ定!」

メイ「肯テテテテテテテテ定!」

ドゴドゴズバツ!

「こいつら、強え…!」

優香「どきなあ!」カキイン!

「鬼神だとお!?!グオツ」

アルミ「一気に蹴散らすわよ…有太!」

有太「ああ!」

ギユウウン!

2人『天崩地裂!』

ギユオオオ!

『ギャアアア!』

…アルミさんがほとんど倒したわね。

アルミ「さて、進み…ん？」

日花「どうしました？」

アルミ「ここ…異空間ね」

…え？

日花「…え？」

心の中で思った事がそのまま口に出た。

アルミ「恐らく私達が大军と戦ってる間に仕掛けたのね、アンヘルが」

日花「いつの間に…」

アルミ「とりあえず壊すわ。…消滅！」

シュツ…!

周りの異様な空気は消え去った。

有太「お前、グリッチの力を取り込んだ時の能力が復活したのか？」

アルミ「ええ。まあ、あまり使う気はないけどね」

確か、対象を消す能力だったかしら？

エグい能力ね…

アルミ「じゃ、進みましょう」

ネロイズム「ああ…」

スタスタ

―数分後―

コオオオオ…

大きな鳥居がある神社に着いた。

ベノム「この中は異空間になってるわ、気を付けて」

メイ「……………」ゴクリ

シュツ…

―アンヘル神社―

シュツ

アンヘル「あら、早かったですわね」

ネロイズム「この程度で手こずる僕達じゃない」

アンヘル「そうですね。なら次はこの方に相手してもらいましょう♪」パチン

…シュツ

アルミ「!?」

「……………」

日花「貴方は……！」

ネクロン……!?

アンヘル「ネクロンと言っても、クローンのようなものです」

ベノム「じゃあ、ネクローン？」

……今のは寒いわね。

ベノム「……スミマセン」

アンヘル「……コホン。それでは、ネクロン……行きなさい」

ネクロン「グオオオオオ！」

ヘカーティア「あら？」

何かがおかしい。

ヘカーティア「ネクロンが、いないわねん……？」

焦る地獄の女神さん

sideへカーティア・ラピスラズリ

おかしいわね…

へカーティア「ネクロンが、いない…?」

いつもならここ、ウィザー洞窟にいるはずだけど…?

「どうしました、女神様?」

へカーティア「ネクロンがないのよん。ちよつと辺りを見回してくれない?」

「了解です!」

タタッ

困ったわねん…

「へカーティア様〜!」

へカーティア「どうしたのん?」

「天界の大使、アンヘルがココにいたとの報告がありました!」

アンヘル?

ああ、少し前に現れた天使ねん。

へカーティア「それを細かく調べて」

「かしこまりました！」 シュツ

へカーティア「ネクロン…」

今どうなってるのかしらん？

side 入箱日花

ネクロン「グオオオオオ！お前らぶつ殺す！」

ネクロン（クローンだからネクロンがいいのかしら？）が襲いかかる。

アルミ「今更ネクロンなんて怖くないわよ！ヘルフレイム！」ゴオオオツ！

ネクロン「ウイザーインパクトオオオ！」ドガン！

シュウウウ…

アルミさんのヘルフレイムが相殺された…？

アルミ「…なるほど、強化されてるのね」

アンヘル「当たり前じゃないですか」

優香「これはどうだい？…雷鳴八卦！」ドゴオ！

ワン〇ースのカイ〇ウの真似？

ネクロン「ウイザーシールド」ピキッ！

ガキーン！

優香「へえ、固いね」

ネクロン「ウイザーインパクト：エクスプロージョン！」ジユツ：

アルミ「白炎結界！」ボツ！

ドガアアン！

黒い大爆発が起きる。

アルミ「全体的に強化されてるようね」

有太「だが、倒せない相手じゃないだろ」

アルミ「ええ：有太、使っていいかしら？」

有太「何をだ？」

アルミ「時間停止の上位互換」

有太「：いいんじゃないか？」

時間停止の上位互換？

アルミ「じゃあ使うわよ：」

sideアルミ・マリオ

戦闘では初めて使うわね。

アルミ「全て止まれ：時空停止」

：ギユワンツ！

文字通り、時間軸全てが止まった。
もちろん自分以外は。

アルミ「この技、エネルギー消費量が半端ないから早めにカタをつけないとね」
シユツ

まず、ネクロンにはこれね。

アルミ「封印…パンドラ！」

ギユウン！

封印を施す。

今はこれで充分だわ。

次は…

「やめろ」

アルミ「…!？」

後ろから声があった。振り返ると、そこには白髪の老人がいた。

時空神「わしは時空神じゃ。お主…アルミ・マリオに言いたい事がある」

この空間で動けるなら、説得力があるわね。

アルミ「…何かしら？」

時空神「お主、時空停止を習得したようじゃが、くれぐれも悪用せぬようにしてほし

い」

悪用…なるほど。

アルミ「分かったわ」

時空神「…うむ、それじゃあの」シユツ

…今のは覚えておかないとね。

アルミ「そして時間軸は動き出す」

…ギユワンッ！

必死になって生、生、生、生

♪かいきりきベアーアンヘル

side 入箱日花

アンヘル「…!？」

気付いたら、ネクロンは封印されていた。

有太「成功したか」

アルミ「ええ…」

アンヘル「時を止めたら私も気付くはず。…まあいいでしょう」スツ

シャキン！

アンヘルが赤い鎌を出した。

アンヘル「この功德の刃で、貴方達の命を刈り取って差し上げましょう」

ネロイズム「できるものならな…バツテンスロウ！」ギユン！

私も攻撃した方がいいわね。

日花「ヘルフレイム！」ゴオオオオオ！

アンヘル「結界シニカル」ピキッ

キーン!

私とネロイズムの攻撃は防がれてしまった。

アルヤ「時間停止!」

シュツ

アルヤ「!?!」

アルヤが移動した方向に弾幕が飛んでいた。

アンヘル「言いましたよね? 時を止めたら私は気付くと」

アルヤ「ツ、飛斬舞!」 シャツ!

アンヘル「無駄です!」

ズバツ!

アルヤ「ガハツ…」 バタン

マリリン「兄さん!…このっ!」 ドツ

アルヤ・マリオ 戦闘不能

アルミ(…ん?)

アンヘル「怒りに任せても私には勝てませんよ?」

ズバツ!

マリリン「ぐあっ…」 バタン

マリン・マリオ 戦闘不能

有太「一瞬で2人倒しただと…」

アルミ「…ちよつと待つて」

アルミさんは何かに気付く。

アルミ「その鎌…偽物ね？」

全員『偽物!?!』

アンヘル「…ふふつ、よく気が付きましたね。その通りです」

甲「つまり、今のは純粹な力でやったと言うのか…?」

アンヘル「そうなりますね」

表情からして本気を出さずに気絶させたようね…

メイ「斬ッ！」ズバッ!

ネロイズム「フンッ！」ドゴッ!

アンヘル「結界シニカル…!?!」ピキッ

…パリイン!

メイ「物理的に斬れないものは…ない!」

ネロイズム「…リバーズ!」

アンヘル「…くっ」

アンヘルは目をかなり動かしている。

どうやらネロイズムはアンヘルの視界を逆さにしたようね。

アンヘル「小癩な…刃！」シャキン！

大量の刃が2人に向かって飛んでいく。

メイ「ッ！」サッ

ネロイズム「方向反転「させるんでも？」…グアッ!?」ドスッ！

アンヘル「予め投げておいたのですよ」

卑怯ね…！

優香「大地割り！」ドゴォ！

バキッ！

地面に亀裂が走る。

アンヘル「…鬼神は厄介ですね」バサッ

アンヘルは飛び上がる。

アンヘル「でも、空中に入れば「問題ない、とでも？」…なっ!?!」

アルミ「そうでもないようね…私がいるから。滅焼脚！」ドゴドゴドゴッ！

アンヘル「グハッ…孫の攻撃は痛いものですね…」

アルミ「“お前”に孫と呼ばれる資格なんてないわ！天空落とし！」ギユウウン！

アンヘル「重結界シニカル」ピキピキツ
シユウウウ…

何重にも張られた結界はアルミさんの攻撃を防いだ。
アルミ「この程度じゃ済ませないわよ…くそババア」

つらいでしょ

♪かいいりきベアーアンヘル

アルミ「覚悟しなさい…クソババア」

(セリフを少し変えました)

アンヘル「私をクソババア呼ばわりですか…貴女も年齢的にそうでしょう?」

アルミ「んなもん関係ないわよ…炎天桜舞!」 B L O O M !

アルミさんが火桜の奥義で攻撃する。

ネロイズム「空中にいるのは厄介だ…悲帝バツテン!」ギョーン!

アンヘル「重結界シニカル」ピキピキッ!

キーン!

アルミ「あゝあゝ 結界がウザいわね…!」

アルカ『日花、提案があるわ』

日花(なんですか?)

アルカ『例の変身、やってみない?』

…ああ、アレですか。

日花（分かりました…）ピリッ

メイ「風斬！」ズバッ！

平尾「フアイアボム！」ポイツ

フラン「雷落とし！」ドゴオ！

アンヘル「全方向重結界シニカル」ピキピキピキッ！

アルミ「技名長いっつーの！天空掌！」ズガアン！

ピキッ

ネロイズム「（もしかしたら…）リバーズ！」ギューン！

…パリーン！

アンヘル「なっ!?（一瞬で割れた!?）」

ネロイズム「上手く行っただみただね」

アンヘル「何を…」

ネロイズム「言う分けないだろう?」

優香「…鬼神弾！」ドッ！

優香さんも弾幕を放つ。

ネロイズム（エネルギーの流れを反転した…これは使える）

…よし。

日花「…アルミさん」

アルミ「どうした…!？」

フラン「日花!?!何だその姿は!?!」

日花「ふふっ…」

…グリツチ化したのよ」

ビリイツ！

アルミ「なるほど…母さんのタマシイにあつたグリツチのエネルギーを取り込んだの
ね」

G 日花「その通りです」

アンヘル「…ふん、紫色になつただけじゃないですか」

…へえ？

G 日花「これを見たらそう思うかしら？」 スツ

ギユイイン…

G 日花「アビリテイ・エレイサー」

シュツ…

アンヘル「何も起きてないじゃないですか」

最初はそう思うわね。

アルミ「（へえ、そう言う事ね）…ヘルフレイム！」 ゴオオオオオ！

アンヘル「結か…なっ!?（発動できない!?!）」

バゴオン！

アンヘル「ガハッ……！」

アルミ「天空掌！滅焼脚！」ドゴドゴドゴッ！

アンヘル「グフッ……（何故だ、何故発動できない……！）」ヨロツ

G 日花「（相当焦ってるわね）ヘルフレイム・黒！」ゴオオオオオ！

アンヘル「ッ、ぐわあああ！」

アルミ「よくやったわ、日花。これで相当倒しやすくなつたわよ」

G 日花「アンヘルの能力を消しただけですがね……」

アンヘル「なん、ですって……」

G 日花「これでお前は結界も刃も使えない。どうする？」

アンヘル「ッ……（幸い能力ではないアレは使えるようね……）」

アルミ「……？」

アンヘル「まだ戦えますわ……フフフ……」

決☆壊☆だ

♪かいきりきべア—アンヘル（2分の1倍速）

side 入箱日花

アンヘル「まだ戦えますわ…フフフ…」

…怪しいわね。

G日花「煉獄パンチ・黒」シュツ

アンヘル「フフフ…」ガシツ

G日花「!？」

アンヘル「フンツ！」ドゴオ!

G日花「ガハッ…!」

何、このパワーの差…!」

アンヘル「貴女の能力は厄介ですが、貴女本人は身体能力で普通に殺せますね」

ネロイズム「やめろ！」シヤツ

アンヘル「…」スチャツ

アンヘルはどこからともなく重火器を出してきた。

ネロイズム「なっー」

アンヘル「死ねえ！」ドドドドッ！

銃弾は恐らくアンヘルのエネルギーを纏っているのだろう、赤黒く染まっていた。

ネロイズム「グウツ…」

優香「私にそれは効かないよ！粉砕撃！」ドゴオ！

アンヘル「果たしてそうでしょうか？」ドドドドッ

優香「…!?炒り豆だと!？」ジユツ

アンヘル「鬼の弱点を把握しないハズはいじやないですか♪」

優香「ツ、卑怯な！」

アンヘル「それは私にとっては誉め言葉ですよ？」

アルミ「天空掌！」ズガアン！

アンヘル「おっと」サツ

アルミ「……………」ニヤリ

アンヘル「まさか…！」クルツ

有太「気付くのが遅えよ！顔面崩壊弾！」バゴオン！

アンヘル「ギヤッ!？」

ネーミングセンス皆無ね。

シユウウウ…

アンヘル「グウ…痛いですわ…」

有太「ん？顔面崩壊すりやよかったのに」

アンヘル「顔は女の命なのですよ？」

有太「クズにとつてはいつでもいいだろ」

ド正論ね。

アルミ「ヘルフレイム！」ゴオオオオオ！

アンヘル「ツ、ミサイル！」スチャツ

ドガン！

アルミ「わお…相殺しやがったわ…」

アンヘル「舐めてもらっちゃ困りますわ」

アルミ「キャラ崩壊のような事をするお前には言われたくないわ」

アンヘル「それもそうですね。…出現」カチツ

…シヤツ！

アンヘルの背後から大量の銃火器が現れた。

優香「そりゃないだろ…」

ネロイズム「能力なしの銃弾なら避けれるが…）みんな、周りにも設置されている可

能性が高い」

G 日花「了解よ」

アンヘル「…発射！」ポチッ

ズドドッ！

目の前から…だけでなく、背後などからも銃弾が飛んでくる。

全て赤黒いエネルギーを纏っている。

…新技を使う時が来たわ。

G 日花「みんな、下がってて！」

アルミ「何するの!?!」

G 日花「新技ですよ…ハアッ！」ギユン

カッ！

私は青い炎を纏う。

G 日花「モーニング…ドーン！」ザッ

そして上に向かって大量のエネルギーを放射する。

…ギユオオオ！

大量の銃弾は跳ね返されていく。

アンヘル「ほう…」

G
日花「ふふっ、っ、どようよー」

クズの最期

side 入箱日花

G日花「ふふっ、どうよ！」

アンヘル「中々うざい技ですわね」

そう言うと思つたわ。

アルミ「サンキュ、日花。天空掌！」ズガアン！

アンヘル「擬似結界」ピキッ

エネルギーで代用してるのね。

パリン！

すぐ割れたけど。

アンヘル「ガッ…（まずい、もう体力が…）」

ネロイズム「ヘラヘラすんな！」ドゴオ！

アンヘル「ガハッ…！」

有太「もう1発行くぜ…顔面崩壊弾！」

グシュッ！

アンヘル「ギャッ」

うわ、マジで顔面が崩壊したわ…

アンヘル「ハア、ハア…（こうなったら、呪いを…）」

アルミ「…!!みんな、下がりなさい」

アンヘル「遅い！」ガシッ

アルミ「なっ、離し…!?!」

アンヘル「もう脱出不可能ですわ！くらえ！」

ギョオオオ！

日花「アルミさん!?!」

アルミ「近付いちゃダメよ！」

アンヘル「D E A T H」

ドスッ

アンヘルの目は真っ黒に染まり、それに似たような色のエネルギーがアルミさんを包む。

アルミ「フ、ガッ…」バタン

アルミ・マリオ 謎の気絶

日花「アルミさん！」ダッ

アンヘル「は、ははっ、これでいいです、わ…」バタン
アンヘル 死亡

優香「…アンヘルは死んだか」

日花「アルミさん、目を覚まして下さい！」

アルミ「……………」

有太「…死んではないようだな…ん？」

ポワン

アルミさんの、タマシイ？

…パリン

日花「えっ…」

ビリリリリ！

アルミさんのタマシイの破片は、辺りに飛び散った。

ネロイズム「…なるほど、そう言うことか」

日花「？」

ネロイズム「さつきアンヘルがやった事は、本来アルミを殺すためにやった事なんだ」

甲「なんだと!？」

平尾「でも死なずに気絶してるよ？」

ネロイズム「それは完成者の性質、『寿命以外で死ぬ事はほぼない』からだろう
なるほど、だから死なずにタマシイが割れただけなのね。

優香「じゃあ、タマシイの破片を探すのかい？」

ネロイズム「そうなるね……」

優香「……いいだろう、引き続き手伝ってやるよ」

ネロイズム「感謝する」

日花「……アルミさん」

絶対に助けてやりますからね！

ラ・アンヘル 完

次章予告

リゲイン・コンプリーション

タマシイが割れ、実質植物状態になってしまったアルミ。

日花達は3手に分かれ、タマシイの欠片を探し始める。

果たして探し出せるのか……！

ヘカーティア「……あら？」

ネクロン「やつと戻れた…」

ヘカーテイア「何処にいたのん？」

ネクロン「アンヘルに洗脳されて、アルミ達と戦っていた…」

ヘカーテイア「ええ？」

第5章 リゲイン・コンプリーション

欠片探し、スタート!

side 入箱日花

日花「……アルミさん」

絶対に助けてやりますからね!

有太「……さて、3手に分かれるんだが、まずはコイツらとアルミを見張るヤツを決めようぜ」

アルヤ「………」ちーん

マリン「………」ちーん

まだ気絶してたのね。

ネロイズム「僕が引き受けるよ」

見張り ネロイズム

有太「分かった。次はこの7人でチーム分けをするぞ」

結果はこうだった。

天界 平尾、甲、優香さん

魔界 フラン、有太さん

地界 私、メイ

…パワーが偏ってる気がするけど、まあいいわ。

有太「健闘を祈る。転送火桜！」 B L O O M !

シユツ

side 坂田平尾

日花達が地界と魔界へ行くのを見送った後、僕達はアルミさんのタマシイの欠片を探し始めた。

優香「有太によるとアルミの気配がしたらそこに行けばいいと言ってたが…」

甲「実際に見つけるまでは分からないな」

一応、欠片が飛んでいった方向を見たから、そこに向かって走っている。

平尾「…この門は？」

優香「それは天国の門だ。生者は入れないぞ」

なるほど、僕がマリオさんだった時に潜った門がコレか。通りで見覚えがあると思つたよ。

甲「…?なあ」

平尾「どうしたんだい？」

甲「あつちにアルミさんの気配を感じないか？」

甲が指差した方向の力を探る。

：確かにアルミさんの気配だ。

優香「だね、じゃあ行くか」

ダツ：

―数分後―

ギユン：

床に赤い欠片が落ちてあつた。

優香「コレだな」スツ

甲「欠片は異界ごとくに2つあるらしいから、これで片方見つけたってワケか…」

……！

平尾「敵が来るよ」

優香「そのようだな」

ドドドドドツ！

「よくもアンヘル様を殺したなああ！」

「野郎ぶつ殺してやる！」

「アンヘル様の仇いい！」

平尾「攻撃火桜！」 B L O O M !
ドスツ！

「グオツ!?!なんだこりゃ?!」

甲「アースフィスト！」 ボコツ
ドゴオオオオ！

「ギャフン！」

優香「炎天掌！」 ズガアン！

(なんでお前が!?)

「グハッ！」

僕はしばらく敵達を倒すのに忙しくなった。

シユツ

アンヘル「ここは…地獄ですか」

アンヘルは罪人達の列に並ぶ。

「次の方…」

アンヘル「はい…」

「……………」

閻魔はしばらく浄瑠璃の鏡を見つめる。
「……………有罪。よって……………」

最低な人生を歩む刑に処します」
アンヘル「…？」
そしてアンヘルは意識を失った。

とんでもない所

side 入箱日花

シュツ

日花「あら、日が暮れてないわね？」

メイ「異界だったので時間の進み方が違うんじゃないですか？」

日花「そうかもね。…まずはアオイさんの所に行くわよ」

メイ「何ですか？」

日花「アオイさんは魂週族。タマシイの事は詳しいからよ」

メイ「なるほど…！」

日花「じゃ、行くわよ！」

メイ「はい！」

ダダダダダ

―数分後―

日花「……………」

メイ「ええ…」

ゴゴゴゴゴゴ……

目の前には溶岩の海。

日花「転送火桜を使いたい所だけど、視界が悪いから上手く飛ばせないのよね……」

メイ「……私に任せてください！」

日花「メイ？……分かったわ」

メイ「こんな煙幕……斬ります！ 斬ッ！」ズバツ！

パアア……

溶岩の煙は晴れ、視界が開けた。

日花「……ん？」

目と鼻の先に赤い欠片がある。

……つて

日花「アルミさんのタマシイの欠片じゃない！」サツ

急いで拾った。

メイ「偶々見つけましたね……」

日花「もう片方はアオイさんに聞いてみるわ。転送火桜！」BLOOM！

シユッ

――溶岩の海の向こう――

シュツ

日花「さて、後少しよ」

メイ「……………」

『地下鉄』

メイ「溶岩の海を渡る必要、ありましたか？」

日花「……………(汗)」

地下鉄があつたの、忘れてたわ…

メイ「…忘れて」「はいはいゴメンって！」「…はあ」

日花「と、とにかくアオイさんの家に行くわよ！」「ダッ

メイ「え、ちよつと!? 待つてくださーい！」ダッ

11. 28561分後

日花「よし、着いたわよん」

メイ「ココですか…」

ピンポーン

…ガチャッ

「…あら？」

日花「こんにちは、レインさん」

レイン「日花と…メイ？何でココに？」

メイ「アオイさんっていますか？」

レイン「お母さんは普通にリビングでゲームしてるけど「してないよ?!」…お母さん」

アオイ「なんかサボってそうな雰囲気を出さないでよ、レイン！」

レイン「スンマソン」

アオイ「はあ…じゃ、2人とも入って」

2人『失礼します』

スタスタ

ーリビングー

アオイ「…:(汗)」

マジでゲームしてるじゃないですか…

アオイ「し、仕事はもう終わってるからね！証拠を見せてもいいんだよ!」

日花「いいですよそんなもん。それより大事な話があるんです」

アオイ「…何かな？」

メイ「実は…」

ーただ今説明中ー

アオイ「まさか姉さんがそうなるとは、私も予想外だよ」

日花「えっと、みように落ち着いてませんか？」

アオイ「まあ、あの姉さんに倒す方法があるって事が証明されたんだからね」

メイ「あはは…」苦笑

アオイ「知りたいのはタマシイの欠片の探し方だよね？」

日花「はい」

アオイ「じゃあ教えてあげるよ。姉さんのタマシイは…」

アオイさんは分かりやすい手順で教えてくれた。

後は探すだけね。

時空の狭間

sideアルミ・マリオ

……?

アルミ「あれ……？」

私は確か、アンヘルにタマシイを割られて……

アルミ「なのに、生きてる……？」

いや、正確には意識があるだけなのかもしれないわね。

アルミ「それにしても、ココ……」

ギユウン……

色々とバグってるわね。

まるでグリッチみたい。

アルミ「……？」

「……」

誰かがいるわね。

「???'

?

?

???????

???????

???

???????

?

???

?????????

「

頼み

sideアルミ・マリホ

ガスター「

???????

（これは私が作

アルミ「タイムマシン

ガスター「

???。

事は覚えている）

黒い…!?

アルミ「ソイツ、全身が真っ黒だったかしら？」

ガスター「

（そっだが？）

????????????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

?????

?????

?????

?????

?????

?????

?????

?????

?????

?????

?????

?????

?????

?????

?????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

????????

??????

??????

??????

??????

??????

??????

??????

??????

??????

??????

??????

??????

??????

??????

??????

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

??

シユツ

機械を異空間に送る。

アルミ「あとは私のタマシイが正常になるまで待つだけね……」

ガスター「……………」

アルミ「どうしての、ガスター？」

ガスター「??」

(お前がパンドラの裁判官だとは思わなかった)

へえ、知ってるのね。

アルミ「じゃないとアスタと話せなかったわね、そういえば」

ガスター「

(これも何かの運命なのだろう……)

運命……かもね。

ミツケ!

side 入箱日花

メイ「アオイさんに説明された方法、ホントに上手くいくんですか?」

日花「上手くいくと思うわよ?アオイさんが嘘つくとは思えないし」

メイ「そうですか…やってみましょう」

日花「ええ…頼むわ」

メイ「はい!次元斬り!」ズバツ

ギョオオオ…

空間が開く。

日花「突入!ハアア!」

シュツ

――きさらぎ駅――

シュツ

メイ「ココがきさらぎ駅ですか…」

日花「ええ、まずは…時間停止！」
←ブウウウン…

まず、時を止める。

日花「次は…ハアッ！」ギユン
火桜を出す。

日花「そして…」スツ
シャツ

星形に並べる。

メイ「そうしたら来るんですよね？」

日花「ええ…」

果たして…!!

ギユウウン!

メイ「ええっ!?!」

前方から赤い光が近付いてくる。

日花「欠片よ…!」

ガシツ

メイ「まさか本当に来るとは…」

日花「アオイさんいわく、アルミさんはこうなる事を予想して召喚魔術を覚えたらしいのよ」

それがコレだったワケね。

メイ「…魔術? 魔法とどう違うんですか?」

日花「魔法は5属性とタマシイのエネルギーを使ったもの。魔術はそれ以外よ」

メイ「なるほど…」

日花「欠片は2つとも集めたし、天界に戻りましょ」

メイ「はい!」

平尾、甲、優香は大軍を倒した後休憩していた。

side 基山優香

『ちよつと前にさ、新技を思いついたんだよ』

『こっ、火を掌に溜めて放つんだ』

『名付けて“炎天掌”だ!』

優香 (天助…)

平尾「優香さん…?」

優香「…ハッ。どうした?」

甲「さつきからブーツとしてたので…」

優香「そ、そうか。すまない」

“天助”の事は後でだ。今はアルミのタマシイの欠片だな。

優香「気配を探るぞ…」

平尾「はい……」

『優香、お前は鬼でも、絶対鬼らしくしなきゃならないというワケではない』

『お前はお前らしく生きろ』

優香「ッ……」

いかん、アルミと天助が似てるからついつい天助の事を…

(てんすけって誰だよ！)

…ギョーン！

優香「！……お前ら」

2人『はい？』

優香「アルミの気配を感知した。行くぞ」

甲「どの方向ですか？」

優香「北だ」

ダッ……！

―数分後―

♪すりいーノルア・ドルア・エー

私達の前には、奇妙な形をした大きな木があつた。

平尾「この木は…?」

優香「脳の木だ。葉の形が脳に似ているだろう?」

甲「確かに…ん?」

ギョーン…

優香「欠片が葉に引つかかっているな。…ハッ!」ドツ

サツ

優香「つと」スタツ

平尾「これで両方ゲットですわね」

優香「だな。集合場所に戻るか」

『100年後、俺の修行は終わる。その時にまた会おうぜ!』

あの時から99年の11ヶ月か…

似たもの同士、気が合う

side 火野有太

魔界に来るってほんまかい？

…開幕でダジャレを言った、どうも火野有太だ。

有太「じゃあフラン、欠片を探しに行くぞ！」

フラン「…ちよつと待っててくださいよ、有太さん」

有太「ん、どうした？」

フラン「魔界といえは悪魔…悪魔といえは？」

有太「…なるほどな。サキュパスの乙πを見たいという事だな？」

フラン「はい！」

有太「うーん…」

確かにそれも大事な事だな…

(どっ)がだよー)

有太「…そいつは後回しにしようぜ。まずはアルミの欠片探した」

フラン「はい…」

有太「…安心しろ、俺そいつらがいる場所を知ってるから、事が終わったらすぐ行けるぞ」

フラン「…マジすか！俺頑張ります！」

よおし、その意気だ。

ま、知ってるってのは本当だしな。

(絶対に行くな！)

有太「じゃあ始めるぞ。気を探れ…」

……………！

有太「フラン、一つ目を見つけたぞ」

フラン「速いですね、流石です」

有太「行くぞ！」

フラン「はい！」

ドドドドド

乙πを見るためにも、とつとと終わらせるぜ！

(いい加減にしろお！)

―数分後―

有太「なあ…フラン」

フラン「なんですか……？」

有太「奇跡って起きるんだな？」

フラン「です……」

2人「フフフフ……」ニタア

（おまわりさん、コイツらです）

『女性更衣室』

この中に欠片があるんだよな……

有太「じゃあ行くぞ……時間停止！」

←ブウウウン……

スッ

更衣室の中に入る。

フラン「誰もいませんね……」

有太「残念ながら、な」

まあ、荷物が置かれてるから戻っては来るのだろう。

フラン「……あ、ありました！」

有太「でかした！」

欠片を回収し、更衣室を出る。

次…ん!？」

フラン「これは…!！」

ベンチで昼寝中の女性の谷間の間に欠片があるのだ!!!

(なんでだよ!?)

有太「正直に言っていていいか？」

フラン「…どうぞ？」

有太「アルミつてもしかして意図的にこんな所に飛んできたのか？」

フラン「さあ…？」

アルミの野郎、絶対意図的に飛んできて俺を試してるだろ！

(してないです)

有太「くっ…揉みたい…!！」

…いかん、100%アルミにバレてしばかれる…くそっ！

サツ

断腸の思いで揉まずに欠片を取った。

フラン「……………」ブシャー

鼻血出てるな…

有太「よっ」ピトツ

鼻栓をフランの鼻につける。

フラン「…ありがとです」

有太「おうよ。再生！」

→ブウウウン…

有太「じゃあ帰るか」

フラン「はい！」

有太「転送火桜！」 B L O O M !

シュツ

――天界――

フラン「え…」

有太「俺達が最後だとお…」

そりやないだろ…

ふっかーつ!

side 入箱日花

日花「みんな集まったようね…」

甲「ああ…」

有太「後は欠片をひとかたまりにしてアルミの中にぶち込むだけだ」
ぶち込むって…なんか響きが…それは置いといて。

…キーン!

欠片は集まり、一つのケツイのタマシイとなる。

有太「後は俺に任せろ…ハアツ!」ドゴツ!

有太さんアルミさんの体の中にタマシイをぶち込み、衝撃を与える。

…ギユン

アルミ「ツ…んん?」

全員『アルミ(さん)!』

アルミ「…ちよつくら時空の間に行ってきたわ♪」

アルミ・マリオ 復活

日花「アルミさん」

アルミ「どうしたの日花？」

日花「…アオイさんに狙われると思いますよ？」

アルミ「…ええ？」ポカーン

その後、アルミさん、有太さん、優香さんの3人は飲みに行ったらしい。

何故かフランが血涙を流していたが。

リゲイン・コンプリーション 完

次章予告！

入箱日花、桜木咲子に会う。

アルミの意向により、『桜咲く。』の世界に行く日花達。

そこで待ち受けていたのは、桜木咲子率いるさとかに隊だった！

2人はどのような邂逅を果たすのか!?

…この章まだ少し続くよ。

sideアルミ・マリオ

優香「んぐつ、やっぱり美味しいなあ！」

アルミ「そうね〜!」プシュー

(頭から湯気が出ている)

有太「:ちよつと待て、いつもより湯気が出てないか!」

(いつも出てるの!?)

そう? いつもより飲んでるからかしら?

:何故そもそも湯気が出るのかって?

私は酒に強いけど、アルコール以外でその内腹一杯になるから、その対策よ。

優香「それにしても、アルミがまさかあんな事になるとはな」

アルミ「私でもアンヘルの心を読んでやつと理解できたレベルよ:」

確か、アレから1ヶ月ほど経ったわね:

ガタン

黒髪の男性が店に入ってきて優香の隣の椅子に座った。

「おっちゃん、俺にも酒を」

「あ、よ」

コトン

優香「ん? 誰だ:!?」

優香は珍しくかなり驚いていた。

「久しぶりだな」

有太「知り合いか？」

優香「…ああ。ちょうど100年ぶりじゃないか…天助」

天助「…」

アルミ「平行世界で特訓していた…」

天助「その通り。ちょうど数分前に特訓を終えてこの世界に戻ってきた所だ」

有太「…ん？」

天助「どうした？」

有太「…お前、完成者だな？」

天助「…ほう、分かったか。そうだ、俺も完成者なんだよ」

優香「天助」

ギョッ

優香「お疲れ様…だな」

天助「ああ…」

アルミ「…ちよつと気になるわね」

2人『？』

アルミ「アンタ2人の出合いが」

優香 「出会いか…」

天助と優香①

side 基山優香

アルミ「…ちよつと気になるわね」

2人『?』

アルミ「アンタ2人の出会いが」

優香「出会いか…」

懐かしいな…

アルミ「酒の肴として話してくれるかしら？」

優香「ああ。あれは確か1010年前だったか？」

ー回想（途方もない時間前）ー

私は当時、鬼の四天王として君臨していた。

優香「でやあ！」

「お、鬼だあああー！」

優香「人間か…死ねえ！」

グシュッ

」

人間の里を襲っては、人を殺して食う。

普通の鬼らしい生活をしていた。

「優香の姉貴、いい酒がありましたぜ」

優香「ほう、見せてみる」

「これですぜ」

優香「……こりゃいいな。よこせ」

「で、でも、これは俺が……「あ？」ヒイツ」

優香「この私に楯突くと言うのか？」

「い、いえ……どうぞー！」

……って感じで私は部下の鬼には恐れられていた。

そんなある夜の事、私は拠点の近くの森の中を歩いていた。

「……おっ？」

優香「……人間？」

なんと人間と遭遇したんだ。

そいつは赤い服を着ていて、背中に風呂敷を背負っていた。

「……鬼か」

優香 「ちようどいい餌がいたもんだ」

この時の私はちようど腹が減っていたんだ。
だから…

優香 「ちよつくら私に餌になつてもらうぞ！」 ドツ

問答無用で人間に襲いかかった。

「…つと」 ドサツ

(風呂敷を下ろす)

優香 「オラァ！」 ブンツ

金棒で人間の頭を粉碎しようとする。

「…よっ」 ガシッ

優香 「なっ!？」

しかし人間はそれをあつさり止めたのだ。

「鬼に金棒…だが、俺は怯まないぞ?」

優香 「ツ、舐めるな！」 サツ

距離を取り、人間を狙う。

優香 「粉碎撃！」 ゴオツ!

この技は、当たったものを確実に粉碎させる大技だ。

”アイツ”の三步必殺に似たようなものだな。

「うおっ!」ドゴッ

当たったか…!?

「痛えなこの野郎…」

優香 「なんで、死んでねえんだ…!？」

「俺は寿命以外では死なないんでな」

優香 「そんなのあり得ないだろ」

人間がそんな体質なワケがない。

「残念ながらホントだ。…くらえ!」バツ

人間は拳を振りかぶる。

「硬化鉄拳!」ピキッ!

優香 「フン、人間の攻撃など…!？」

「どおおらああ!」ドゴオ!

優香 「ぐう…!？」

なんだ、この力は!?

「どうだ?」

優香 「…ッ」

こんなに強い人間は初めてだ…！

優香 「クハハ…！」

「…どうした？」

優香 「もつとだ…もつと殴り合うぞ人間！」

「…いいだろう」 ザッ

そして私と人間はしばらく殴り合いをした。

…戦いは私が負けていた。

優香 「ハア、ハア…！」

「…大丈夫か？」

優香 「まだまだ…ッ」 フラッ

私は久々の本気で疲れ、倒れたのだった。

天助と優香②

side熊野優香（旧姓）

優香「…っ」

目が覚めると、そこには知らない天井があった。

私は確か、人間と戦って……

優香「人間は!？」ガパッ

私が眠っていた布団から起き上がる。

「ん、起きたか」

そこには昨日戦った人間がいた。

優香「ここは…お前の家か？」

「そうだが？…あ、お前は何で俺がお前をここに連れてきたか知りたいんだな？」

私が言おうとしたことをそのまま言われた。

「…俺は人間だろうと鬼だろうとどうでもいいんだよ。ただ、お前が傷だらけになっちゃったから治療してやっただけだ」

だから私は全身に包帯を巻かれているんだな…

優香「…鬼を恐れないのか？」

「恐れねえよ。てか、俺は鬼とむしろ仲良くしたいヤツだからな」

鬼と、仲良くだと？

優香「ハハッ、面白い事を言うな人間」

「そうか？俺は正直に言っただけなんだがな…」

…コイツ、嘘をついていないな。なんとなく分かる。

優香「…人間」

「ん？」

優香「名前を言え」

天助「名前か？…基山天助だ」

優香「天助、か。私は熊野優香だ。…さらばだ人間」

私は起き上がり、扉を開けた。

天助「傷は大丈夫なのか？」

優香「ああ…また、会おう」

ガチャッ

扉を閉めた。

天助「…行ったか」

ガタツ

天助「…熊野のおかげで、鬼用の薬も出来そうだ」

「優香の姉貴、おかえりっす！」

優香「ああ、ただいま。ちよつと崖から落ちてしまつてな」

「大丈夫すか!？」

優香「この通り、包帯でも巻いて治したから大丈夫だ」

「それはよかつた…」

部下の鬼は安心していた。

「優香く、ちよつとこいよ」

優香「どこへだ、萃香」

このチビは伊吹萃香、私と同じ鬼の四天王だ。

萃香「勇儀のところへだよ」

星熊勇儀も鬼の四天王だ。

もう一人？茨木華扇ってヤツだ。

―勇儀の家―

勇儀「…来たか、優香」

優香「来たぞ。何の用件だ？」

勇儀「ここから少し遠い人里から、中々美味しい酒を手に入れてな」

萃香「優香にも飲ませてやるってことさ」

優香「ほう…」

勇儀「ほらよ、これが例の酒だ」ゴトツ

勇儀から酒の瓶を受け取り、杯に注ぐ。

優香「んぐっ…美味しいな」

勇儀「だろ？もう一度あの人里を襲つてもっと取つてくる予定だ。お前も来るか？」

人間を、殺すのか。

何故だろう…

優香「…いや、今回は別件だからやめておく」

私はそれを自然と断っていた。

勇儀「そうか、じゃあ明日の夜、私と萃香が行くからな」

萃香「羨ましがっても知らないぞ」

優香「ああ…」

何だ、この気持ちは…

天助と優香③（300話突破!）

side 熊野優香

何だ、この気持ちは…

優香「…もう一度あの人間に会う必要があるな」

山から降りるとき、部下の1人が話しかけてきた。

「ん、姉貴はどこかへお出かけですかい？」

優香「そうだ」

「俺は近くの人里を襲ってみようと思つてましてね、ご用件が終わつたら姉貴も来ます？」

優香「…やめておく」

「そすか…」

優香「じゃあな」

「お気をつけて」

スタスタ

―数分後―

途中で人里の近くを通ったため、人間に遭遇した。

「ひっ…鬼だ！」

優香「ほう、人間か」スッ

金棒を振りかぶる。

「あ、ああ…」

人間は腰が抜けていた。

優香「…死ね」

ドゴツ！

……つ。

「…えっ？」

優香「とつとと離れろ、人間」

「は、はいいい！」ダダダー

人間は逃げ出した。

優香「…何故だろう」

天助が言ったあの言葉…

『俺は鬼とむしろ仲良くしたいヤツだ』

アレを聞いてから人間を殺すのに躊躇いが生じた。

優香「…さっさと行くか」

スタスタ…

―数十分後―

途中で何度か人間に会ったが、一度も殺せなかった。
やはり私の中で躊躇いがあるのだろう。

優香「…ついたな」

コンコン。

扉を叩く。

…ガチャッ

扉が開いた。

天助「…熊野?」

優香「…よう」

天助「何のようだ? 傷はちゃんと治療したはずだぞ」

優香「少し話があつてな」

天助「そうか…入れ」

優香「失礼する」

―居間―

天助「…それで、何の話だ？」

優香「そうだな…」

私は今日起きた事を話した。

天助「……………」

優香「何か思い当りはあるか？」

天助「あるな」

優香「それは？」

天助「…単純だ。お前は人間を殺すのに躊躇ってる、それだけだ。それが何故かはお前が一番知っているだろう？」

優香「私がか…」

一昨日、いや天助に会う前までは人間を殺すのがむしろ楽しかったんだがな…

優香「…お前は私に勝っただろう？」

天助「戦いにか？そうだな」

優香「それでお前に情が湧いたのかもしれない」

天助「…そうか」

優香「私は、どうすればいいんだ？」

天助「……………」

優香「…天助？」

天助「…俺は人間だ。普通は人間を殺すのをやめちまえ、
う。と言うんだろうが…俺は違

お前はお前らしく生きろ、それだけだ」

……！

優香「それで、いいのか？」

天助「そうだ、それでいい」

優香「……ありがとう」

天助「大したことはしてねえよ」

優香「……さらばだ、天助」

天助「ああ、またな熊野「優香」……あ？」

優香「優香と呼べ。しないと気が済まない」

天助「……分かった。じゃあな優香」

優香「……ふっ、またな」

ガチャツ

何だか……

優香「スッキリとした気分だ」

天助「優香……」

アイツ、俺に負けただけで俺に情が湧いたのか？

天助「…まあいいか」

鬼と仲良くするための第一歩だ。

天助と優香④

side 熊野優香

アレから数日後、私は何回か天助の家へ行き、酒を分けたりした。

「おはようつす、姉貴！」

優香 「ああ、おはよう」

「なんか最近機嫌がいいつすね」

優香 「まあな」

「今日はお出かけないんですか？」

優香 「気分的にな」

朝はゆっくりしていた。

―数時間後―

萃香 「優香」

優香 「どうした？」

萃香 「中々大きな町があつてなく、それを襲撃しようと思うんだが、優香も来るか？」

優香 「…やめておく」

萃香「そうかい。…最近人を殺さなくなったようじゃないか」

優香「それがどうかしたのか？」

萃香「何かあったのかい？」

優香「…お前には関係ない」

萃香「なんで、言わないんだい？…鬼はそんなヤツらが嫌いなんだぞ？」

優香「そうだな…ま、その内分かるさ」

萃香「ふーん…じゃ、行ってくるよ」

優香「じゃあな」

スタスタ

………。

優香「…止めるべきか？」

萃香や勇儀はかつて、嫌今も仲間だ。

人間と仲良くするのはあいつらを裏切る事になるのかもしれない。

優香「自分らしく、か…」

それもよくわからないな。

…傍観するか。

スツ

優香 「萃香達についていく事にした」

「お、お気をつけて！」

スタスタ

ー町ー

優香 「……………」

木の影に隠れる。

「お、鬼が来たぞ〜！」

「駆逐してやる〜！」

萃香 「私らを人間程度が倒せるとでも思ってるのかい？」

いるんだよな、それが。

「ガフツ……」

「ヒ、ヒイツ！」

勇儀 「怯えてるその顔…嫌いなんだよ！」

バキッ！

「」

萃香と勇儀や部下の鬼達は次々と人間を殺していく。

優香 「ツ……………」

止めなければ……!

しかし、影から出ようとした瞬間……

「おいおい、やめてくれよ」ザッ

萃香「……あ?」

優香「!!」

天助「お前らは臆病な人間が嫌いなんだろう……ここに全く恐れないうやつがいるぞ」

優香（天助……!）

「お前、逃げろ! 殺されるぞ!」

天助「安心しろ、俺は死なない」

萃香「はっ、バカ言うな……よ!」ドツ

萃香は天助に突っ込む。

天助「結界!」ピキッ

キーン!

萃香「なっ……」

勇儀「ほう?」

天助「硬化鉄拳!」ドゴオ!

萃香「フン」ガシッ

ミシミシ…

萃香は天助の拳を止め、握りつぶす。

天助「そんなに手を握ってていいのか？」

萃香「？」

天助「…足って知ってるか？」ギユン！

萃香「ッ…」

天助「回し蹴りい！」バゴォ！

蹴りは萃香の腹に直撃した。

萃香「グフツ…」

勇儀「中々強そうじゃないか、人間。私とも相手しろ！」

天助「いいだろう。…怪我するなよ？」

勇儀「自分の心配をしたらどうだ？」

モワツ…

天助「これは…霧？」

優香（あれは…！）

天助と優香⑤

side 熊野優香

天助「これは…霧？」

優香（あれは…！）

萃香の能力だ…！

（萃香の能力は密と疎を操る程度の能力。それを利用して霧になっている）

天助「…ん、小さい方の鬼がいないな」

勇儀「さあ、どこだろうな？」

スツ…

天助「…ツ!?ゴホッ！」

天助はせき込んだ。

優香（やつぱりか…！）

天助は霧になった萃香の一部を吸い込んだんだ…

天助「この霧のせいかな…なら！」スツ

勇儀「…」ニヤリ

…グシュツ!

天助「…ガツ!？」

優香「天助!」

萃香「ふう、まさかバレるとはね…」

天助の背中から萃香が出てきた。

(原作では萃香はこんな事しない)

天助「グツ…ハア、ハア…」

萃香「ん、生きてるのかい。しぶといねえ」

勇儀「だがもう虫の息だな」

天助「ツ…(回復薬を持ってきてねえ、どうすりやいいんだ…!)」

勇儀「トドメだ、人間。『三步必殺』」

ザツ!

勇儀は技の構えをとる。

天助「結、界!」ピキツ!

勇儀「一步!」ドンツ!

…ピキツ

天助の結界にヒビが入る。

勇儀「…二歩！」ダンッ！

パリン！

天助「!?」

結界は割れてしまった。

優香「まずい、これじゃあ天助は肉塊になってしまふ…ッ！」ダッ

後の事はどうでもいい…助けてやる！

勇儀「…三歩オ！」

ドギユウン！

勇儀は強く踏み込んだ。手ごたえはあったから天助を潰したと思ったのだろう。

天助「っ！…あれ？」

2人『!?』

優香「ハア、ハア…！」ガシッ！

勇儀の拳を止めたのは、私だった。

天助「優香…！」

勇儀「何でお前がここにいる!？」

萃香「来ないって言ったハズじゃ…」

優香「スマンな、気が変わった。…私の友達をこれ以上はやらせなねえよ」

勇儀 「はっ、人間を味方するのか。最近様子がおかしいのはそいつのせいか？」

優香 「おかしくなったんじやない、私らしくなっただけだ。…天助」

天助 「…何だ？」

優香 「その傷、治るまでどれぐらいかかる？」

天助 「…10分だ」

優香 「…了解だ。お前ら二人の相手は私だ！」

勇儀 「力はお前が一番だが…二人なら怖くない。…死ねえ！」

ドツ！

優香 「結界」ピキツ！

キイン！

勇儀 「結界だど!？」

優香 「覚えたんだよ」

萃香 「フン、私には効果がないけどね！」

モワツ…

萃香は霧状になった。

優香 「お前の対策なんざとつくの前にできてるんだよ…フンツ！」

…ボツ！

手から火を出した。

萃香（火!? まずい……!）

優香「もう遅い! ……炎舞!」ギョオオオ!

萃香「グハツ……」ジジッ

勇儀「……お前、そんな能力があつたのか?」

優香「そうだ……隠して悪かつたな……続けるぞ」

ドッ

勇儀「鬼失格だな……!」ドッ!

天助と優香⑥

side 熊野優香

勇儀 「鬼失格だな……！」 ドツ！

優香 「んな事どうでもいいのさ……」

スツ

優香 「フンツッ！」 ボツ

拳に火を纏う。

優香 「火炎撃！」 ドゴオ！

勇儀 「グツ……そらあ！」 シャツ

左から拳が飛んでくる。

優香 「はっ、でえい！」 ドガツ！

勇儀 「うおっ!？」 グラツ

しかし、勇儀の体勢を崩すことで攻撃を避けた。

……追撃だ。

ボツ

足に火をつけ、宙返りをする。

優香「炎突！」ドゴォ!

勇儀「ガフツ……！」

そして反転してかかと落としを決めた。

優香「ふう……」

萃香「くそっ……」

傷が治った萃香が私の前に立つ。

優香「さあ、どうする？また2人がかりで私と天助を殺すか、諦めて逃げるか」

萃香「……1つ、きいていいか？」

優香「何だ？」

萃香「お前は、人間をどうしたいんだ？」

優香「……仲良くしたいんだ」

萃香「……そうかい。ならもういい。……勇儀」

勇儀「なん、だ？」

萃香「部下たちに伝えろ、退却だと」

勇儀「!?!」

萃香「分かったかい？」

勇儀「…分かった」

立場は萃香が若干上なのである。

ザツ

「優香の姉貴…」

優香「じゃあな、お前ら。私は人間を味方することにした」クルツ

天助「……………」

優香「帰るぞ、天助」

天助「あ、ああ…」

スタスタ

『姉貴……………』

後ろからそんな声があった。

当分は会わないだろうな…

カチツ

天助「よし、これで完成だ！」

優香「何がだ？」

天助「鬼に対応した傷薬だ。かなり時間をかけたぜ」
鬼用の、薬だと？

優香「ソレで何するつもりだ？」

天助「さあな。人間を味方する鬼が優香だけとは限らないだろ？」

優香「なるほどな…」

天助「…：優香」

優香「何だ…」

天助の方を向くと…

ドンッ

優香「っ…！」

私の隣に腕を壁にドンとされた。

(壁ドンである)

天助「俺と…付き合ってくれないか？」

なんと告白をされた。

優香「…私は、鬼だぞ？」

天助「そうだな」

優香「お前より長く生きるんだぞ？」

天助「どうかして寿命を延ばすさ」

優香「私なんかで、いいのか…?」

天助「…お前がいいんだ、優香」

優香「天助…!」

ギュッ

天助を抱きしめた。

優香「私と、付き合ってくれ…!」

天助「…喜んで」

こうして、私と天助は付き合う事になった。

そして結婚したのはなんとその1か月後である。

side 基山優香

天助と結婚して数年が経った。

天助「優香、大事な話がある」

優香「どうした…?」

天助「優香…」

俺はこれから、1000年間特訓をしようと思ってる」
…は？

優香「…は？」

天助「100年ごとに帰ってくるつもりだ」

優香「ど、どういう事だよ!？」

天助「言った事は言ったぞ？」

優香「そうじゃなくて…何でいきなり1000年特訓するとかバカげた事を言ってるんだ!？寿命は100年だろ!？」

天助「それを伸ばすのも特訓の1つだ。ちなみに、特訓するのは平行世界で…」

優香「天助」

天助「ん、何か質問でも「それじゃない」…？」

優香「何で、特訓する事にしたんだ？」

天助「…お前を守るためだ」

優香「私を…？」

天助「ああ。俺はもつと強くなって、お前を守りたいんだよ」

優香「そ、そうか…」

天助「100年後、帰ってくるからさ」

優香「…ダメだ。ちよつとそこで待ってる」

スタスタ

天助「…?」

コレだな。

優香「天助、コレを持っててくれ」スツ

天助「コレは…?」

優香「精神で会う事ができるようになるものだ。寂しくなるからな」

天助「…ありがとな」

優香「どうってことないよ」

そして、準備は進んでいき…

優香「…天助」

天助「…優香」

2人『また、会おう』

…考えてる事は同じか。

天助「じゃ、行ってくる」

ギュイン!

空間に穴が開く。

天助は手を振りながら、穴の中に入っていった。

優香「…フツ」

私も強くないとな。

優香「そしてその数年後、天界へ行ってココで暮らし始めたのさ」

天助「帰ってきた時少しの間お前を探すのに忙しかったんだよね！」

優香「ああ、懐かしいな」

アルミ「…なんか、壮大な話ね」

有太「てか、お前ら夫婦なのか」

4人はその後も酒を飲み続けたのだった。

第6章 入箱日花、桜木咲子に会う。 異世界へ行こう

side 入箱日花

チュンチュン…

日花「ふああああ…」

目が覚めてすぐに起床する。

日花「…今日は土曜日ね」

仕事は休みだけど…パークーズの招集があるわね。

帽子をかぶって部屋を出た。

ガチャツ

日花「おはよう、みんな」

平尾「あ、おはよう日花」

甲「今日の朝飯はクツキーサンドイッチだぜ」

お、マジか。

日花「それは嬉しいわね。…ところで、アルヤは？」

マリン「まだ寝てるけど？」

時間を見ると、すでに9時だった。

フラン「ちよつとb起こしてくるぜ☆」スタスタ

(b起こす↓ボコす)

―数分g「ギヤアアア!」―

アルヤ「お:は、よう:」バタン

日花「やりすぎよ、フラン」

フラン「全然起きなくてさ」

日花「:ま、いっか。私は朝飯を食べ終わったし、とつとと行きましょ」

アルヤ「ちよつと待て!俺まだ食ってないんだが!」

マリン「じゃあ兄さん、3分で準備して!」

(ムスカ大佐か!)

アルヤ「おうよ」

―3分後―

アルヤ「できたZE☆」

日花「じゃ、行くわよ。転送火桜!」BLOOM!

シュツ:

アルミ「言葉の通りよ。とある平行世界へ行くわ。日帰り旅行みたいなものね」
ネロイズム「その世界って、どこなんだい？」

アルミ「作者の2つ目の小説の世界よ」メタい！

あ、なるほど…

(知ってるのかよ!?)

アルミ「向こう側に迎えもいるわ。早速行くわよ」
迎えて…?

ケーティ「断空！」ズバツ！

ギユオオオ！

空間に穴が開く。

日花「突入！ハアア！」

シュツ

―桜咲く。の世界―

私達は至って普通の公園にいた。

ネロイズム「…誰か来るぞ！」

「ハアッー」ドッ

メイ「斬ッ！」ドッ！

ガキーン！

甲「なっ…コイツは…」

目の前にいたのは、見た目がメイにかなり近い少女だった。

「貴方達が先生が言ってた敵ですね？」

日花「…敵？」

「…あれ？何で先生がココに？」

「メイ、そいつは平行世界の私よ。それと敵なのは冗談よ」

名前もメイなのね…って

Sメイ「そうでしたか…」

M日花「私!？」

S日花「ごきげんよう、平行世界の私達」

とんでもない予感がするわ…

自己紹介

side 入箱日花

S 日花 「ごきげんよう、平行世界の私達」

そこには私があった。

M 日花 「ええ…？」

アルミ 「この世界の日花よ」

S 日花 「その通り。アンタ達で言うアルミのような立場よ」

じゃあ師匠ポジ？

弟子は誰なのかしら？

S メイ 「えつと、さつきから話に追いつけてないんですが…（お兄さんみたいな人もいますし）」

（ネロイズムの事）

M メイ 「私も…」

M 留美 「…あ、じゃあ私も」

ルメ 「アンタはノリで言ってるだけでしょ…」

アルミ「ま、事情は後で説明するわ」

S日花「それがいいわね。…ついてきなさい」クルツ
ケーティ「…？」

スタスタ

―数分後―

M全員『……………』

目の前にはでっかい倉庫があつた。

アルミ「コレは？」

S日花「私の弟子とメイを含むとある集団の基地よ」

へえ…

Sメイ「ちよつと待つてて下さい」

コンコン

…ガチャッ

「あら、帰つてきたのメイ…え」

…アルミさん？

ちよつと髪型が違うけど…

S日花「…よつ。客を連れてきたわよ」

「…What?」

「さとかに隊基地」

「……………」(。∩。)ポカーン

(ルメさんと留美に似てる)

「おお…」

(見た目的にインテリ派)

「ええ…?」

(橙髪の少年)

「どゆこと…?」

(髪色以外完全に絵奈)

「…とりあえず自己紹介を頼むわ」

(アルミさんに似てる)

M日花「…入箱日花よ」

平尾「坂田平尾だよ」

甲「志免甲だ」

アルヤ「アルヤ・マリオだ」

マリリン「マリリン・マリオよ」

フラン「フラン・ユメミルだぜ！」

Mメイ「私は室見メイ」

M絵奈「貝塚絵奈だよ」

ルメ「ルメ・パンドラよ」

M留美「赤坂留美です…」

ネロイズム「僕はネロイズム」

ケーティ「ケーティ・マリオよ」

アルミ「そして最後に、アルミ・マリオよ」

「人数半端ないわね…」

アルミ「次にアンタ達が自己紹介しなさい」

S日花「じゃあ私からね。坂田日花よ」

…坂田？

この世界にも平尾がいるの？

咲子「日花先生の弟子の桜木咲子よ」

Sメイ「室見メイです。同姓同名ですね」

S絵奈「貝塚絵奈だよ。同姓同名だね」

S留美「赤坂留美です。私も同姓同名です」

つまり合計3組同姓同名の人がいると。

(前の苗字含めたら日花も入って4人)

レイト「室見レイトだよ、よろしく」

千早「七隈千早だ」

咲子「…以上ね」

アルミ「同姓同名が多いわね…」

M日花「紛らわしいわ…」

S日花「まあ、見た目は違いがあるから見分けはつくけどね」

Sメイ「…メイさん」

Mメイ「何ですか？」

Sメイ「貴女も剣士何ですか？」

Mメイ「そうですが…貴女も？」

Sメイ「はい♪」

もう仲良くしてるわね。

M絵奈「見た目ちよつと違うね」

S絵奈「私は髪色が青みがかつてるね」

M留美「えっと、留美の属性は？」

S 留美「火と風と雷だよ」

ルメ「多くない!？」

こっちの留美は風だけね。

S 日花「あ、日花」

M 日花「何ですか？」

S 日花「違和感しかないからため口でいいわよ。…咲子と勝負してみない？」

咲子「私と…?」

アルミ「…面白そうね」

M 日花「えつと…」

咲子「…日花」

S 日花（ため口だから私じゃないわね）

M 日花「何？」

咲子「私と勝負よ！」

M 日花「…ふふつ、いいわよ」

異世界バトル！日花 vs 咲子①

side 入箱日花

倉庫の外に出て戦闘の準備をする。

アルミ「場外、降参または気絶で勝敗が決まる。いいわね？」

2人『はい！』

S 日花「じゃ……」

咲子「……」ザツ

M 日花「……」スツ

S 日花「戦闘……開始！」
よし。

M 日花「開幕1秒炎天桜舞！」BLOOM！

咲子「(炎天桜舞!?) 結界流しV2！」ガオン！

咲子は曲線状の結界を張る。

ギュルルル！

私が放った弾幕はそれに受け流されてしまった。

咲子「今度は私の番よ…ハアツ！」ドツ
シユルル…

…あの動きは!?

咲子「天空落とし…V2！」ギユウウン!

M日花「マジか…」

しかもV2に強化されてるのね…

M日花「なら…モーニングドーン！」ギユイイン!

ドゴオ!

M日花「…ふう」

咲子（まさか日和さんの技も覚えてるとはね…いや、アレは先生が教えたからだつた
わね）

見た所力は互角のようね。

咲子「さて…と！」ボツ

M日花「…?」

咲子は足に火をつける。

…ええ?

咲子「烈焼脚改！」ドゴドゴツ!

まるで竜巻旋風脚のような連続蹴りを放った。

M 日花「ぐうっ…」ガンッ

腕で防御するけど、これは痛いわね…

咲子「からの、炎天掌改！」ズガアン！

炎天掌!? しかも改!?

M 日花「なら私も炎天掌！」ズガアン！

バゴオン！

小さな爆発が起こる。

咲子「…ふう」スタッ

M 日花「まさかアンタも炎天掌を使えるとはね…」

咲子「アンタこそ、炎天桜舞を使えるとは思わなかったわよ…」

つまり、咲子も炎天桜舞を使えるのかしら？

…まあいいわ。

M 日花「くらえ…ヘルフレイム！」ゴオオオオオ！

咲子「フア!?! (ソレも使えるの!?!)」

コレは当たるわね…

咲子「…ハアッ！」ギユオオオオ！

…え、ちよつと待って!?

咲子「魔王・ザ・ハンドG3!」ガシィツ!

シユウウウ…

止められたんだけど!?

咲子「ふふっ…(今のうちに左腕を地面に、と)」

M日花「エグイ技使うわね…」

咲子「エグイ技つてアンタ…(そしたら空中分解は何なのよ…)」
…ま、いいか。

M日花「そろそろ本気モードといくわ。スーパー化!」カツ!

S全員『!?!』

ビリビリ…

MS日花「ふう…」

(MULAスーパー日花)

咲子「紫色になった!?!」

MS日花「恐らくアンタも変身できるでしょ?」

咲子「…その通りよ」

MS日花「じゃあアンタもやりなさい。お互い変身した状態でぶつかり合いましょ」

咲子「ふつ、いい考えね。天使化！」カッ！
天使化？

シュウウウ：

咲子「結界の天使、アンヘル！」

アンヘルですって!?

アルミ「安心しなさい日花、咲子のアレはただの変身、アンヘル本人じゃないわ」
うん、ですよー。

天使化とスーパー化! 日花 v s 咲子②

side 入箱日花

♪かいきりきべア—アンヘル

咲子「…ハッ!」ドツ!

咲子は突撃してきた。

MS 日花「白炎結界!」ボツ!

咲子「(アレはレインの…なら!)…せいっ!」ドゴツ!

咲子は地面を殴った。

ギョーン…

MS 日花「!?!」

咲子「グラウンドクエイク!」

ドゴオオオ!

私の真下にある地面から土砂が噴出した。

まさか他の属性の技が使えるとはね…

MS 日花「グッ…」

咲子「かーらーのー？ジ・インフェルノ！」ゴオオオオ！
今度は火球が飛んでくる。

MS 日花「反射火桜！」BLOOM！

キーン！

咲子「!?（反射された!?）千手観音改！」ゴオツ！

ガシガシッ！

MS 日花「ええ…」

咲子「……そろそろね」ニヤッ

…?

MS 日花「何を…「炎天掌改！」…かはっ!?」ズガァン！

突然後ろから攻撃された。

フツ…

MS 日花「腕…?」

ヒュウウン…カチッ

咲子「作戦成功っ」と

…バラバラの実際の能力者かしら？

（んなワケないだろ）

咲子「私の能力は能力の解除&使用不能、それと自分の体を分解する事よ」
何そのチート。

(時間停止もチートだろうが)

てか、さつきからやられっぱなしね…そろそろ私が攻めようかしら。

M S 日花「…フツ」ニヤツ

咲子「…? (私の真似かしら?)」

M S 日花「時間停止!」

←ブウウン…

時を止める。

S 日花「まさかアンタも時を止めれるとはね…」

アルミ「まあ、あの能力は手に入れ方が若干特殊だからね」

(ドリンクを飲むと低確率で能力ゲット)

2人はそう話してるけど…

アルヤ「……………」もぐもぐ

ポップコーン食べるのはおかしいを思うわよ、アルヤ。

(アルヤも時間停止持ち)

…まあいつか。

MS 日花「攻撃火桜とケツイナイフと…ヘルフレイムで囲って、と」ボツ
少しエネルギーを使ったけど、別にいいでしょ。

MS 日花「再生！」

→ブウウウン…

時は動き出す。

咲子「…!? (彘!?)」(。 ㇿ)

相当驚いてるわね。

でも…一応逃げられるスキマはわずかに入れている。

咲子「こうなったら…空中分解G3！」パラッ…

シューウウウ…

…粉になっただけだぞ？

咲子「…ふう」

MS 日花「バラバラってレベルじゃないわよね、今の？」

咲子「まあね。てか、アンタも時間停止を使ったのね」

MS 日花「一応言っておくと、ココでは合計4人いるわよ」

咲子「彘…時間停止のバーゲンセールかしら？」

(元ネタ：ドラゴンボールの『超サイヤ人のバーゲンセールだ』)

まあ、そうなるわね。

MS日花「話はココまでにしましよ…炎天桜舞!」 B L O O M !
咲子「極炎天桜舞!」 B L O O O O M !
ドゴオオオ!

赤い台風と夕焼けの輝き！ 日花 VS 咲子③

side 入箱日花

ドゴオオオ！

互いの火桜がぶつかり合い、爆発が起きる。

…ドスッ！

MS日花「ガハッ!？」

何故か体に火桜の花びらが刺さっていた。しかも数枚。

咲子「ふふっ…前だから撃つとも思った？」

MS日花「後ろからも撃つたのね…」

私もできるのに、忘れてたわ…

(エネルギーを後ろに集中させ、そこから発射できる)

咲子「マキシマムファイア改！」ギユウウン！

来たわね…！

MS日花「天空掌！」ズガアン！

咲子(風属性ですって!?)

驚いてるわね。

シユウウウ…

M S 日花 「自分の属性以外の技が使えるのはアンタだけじゃないのよ」

アルミさんは5属性全部使えるし。

咲子 「そうよね… (ちよっとと作戦が思いつかないわね。こうなったら…) フンツ！」
ポツ

M S 日花 「？」

咲子は火球を地面に投げ、その周りを走りだした。

咲子 「コレの方が手っ取り早いのよ！ハアアアア！」

何が？

ギユルルル…！

M S 日花 「あ」

そこには赤い台風があった。

S メイ 「もう使うんですね…」

M メイ 「……………」 (。D。)

M S 日花 「ツ…」

恐らく咲子の必殺技ね、コレ。

(実は2番目。1番目は…ドラゴ(ry))

咲子「ぶっ飛ばせ…クリムゾンハリケーンG2！」

ゴオオオオオオオオオ!

MS日花「想像以上にやばい風ね…！」

もう使うしかないわ…!

MS日花「ハアッ！」ギユン!

手が黄色のオーラを纏う。

ドッ!

咲子(飛んだ…?)

MS日花「止める…サンセットグロウ！」

ドギユウウウウウウ!

咲子「ッ、負けないわよ!ハアアアア!」ギユイイン!

MS日花「絶対止める!うおおおおお!」ギユイイン!

…ドガアアア!

大きな爆発が起きた。

MS日花「ぐうっ!」

咲子「うわっ!?!」

ドサツ

背中が思いつきり地面にぶつかる。

痛いわね…

MS日花（てか、今のでかなりエネルギーを使ったわね…）

咲子（憑依以外でもはや勝つ術がないわ…）スツ

先に立ち上がったのは咲子だった。

咲子「フルパワーで行くわ…憑依…竜美！」カツ！

シューウウ…

MS日花「!?」

咲子の髪色は赤みがかっており、竜の角のようなものが頭から生えていた。

咲子「カンタンに言えばミキシマックスよ」

あ、なるほど…って

MS日花「誰としたのよ!？」

咲子「それは企業秘密よ」

MS日花「は、はあ…」

咲子も第3形態なるものがあつたのね。じゃあ私も…

MS日花「グリッチ化！」ズツ！

ギョオオオ!

咲子(黒い…?)

ビリッ:

M G 日花「…ふう」

咲子「ええ…?」

M G 日花「コレが私の第3形態、グリッチ化よ」

竜とグリッチ…! 日花 v s 咲子④

side 入箱日花

M G 日花 「覚悟はいいかしら…?」

咲子 「…それは私のセリフよ!」

ドツ!

互いが突撃する。

M G 日花 「炎天掌・黒!」ズガアン!

咲子 「炎天掌改・竜!」ズガアン!

ドゴオオオ!

黒と青白の炎天掌がぶつかり合う。

M G 日花 「(威力は互角のようね…) グリッチナイフ!」 ヴアッ!

シュルルッ!

咲子 「!? (一瞬で現れた!?)」

M G 日花 「行けっ!」

ヒュン!

咲子「ツ、結界流しV2…連発！」ババツ！
ギョルルルル！

MG日花「チツ」

咲子「（舌打ち怖いんだけど!?）…打ち砕け！
ドゴツ！

咲子の背後にドラゴンが現れる。

…エネルギーがそう見えるだけね。

咲子「ドラゴン…スレイヤアアア！」ギョウウン！

（咲子の実質最強技）

青い光線が飛んでくる。

MG日花（サンセットグロウを使っても止められる気がしないわ…なら！）スツ

咲子「…？」

MG日花「…消滅！」

フツ…

咲子「なっ…!？」

光線は私に触れた瞬間、跡形もなく消え去った。

咲子「ど、どういう事…!？」

MG 日花 「この状態特有の能力…触れた対象を消滅させる能力よ。ちなみに生命体にはできないわ」

咲子 「は、はあ…（生命体にはできないのね、よかった…）」

（いやいや、できても消すワケないでしょ?）

MG 日花 「説明は以上よ…グリッチブラスター!」 シャツ
ギューイン…!」

咲子（レインのソウルブラスターに似てるわね…黒いけど）

MG 日花 「発射!」

ドガアアン!

咲子 「結界流しV2!…魔王・ザ・ハンドG3!」 ガシツ!
シユウウウ…

咲子は2連続で技を出し、私の光線を止めた。

MG 日花 「対応力半端ないわね…」

咲子 「極炎天桜舞・竜!」 B L O O O O M !

ええ…技名長っ!

（そっかよ!?!）

MG 日花 「いちいち消滅してるヒマないわね…じゃあコレよ!」 パチン

ゴオオオオ!

咲子(く、黒いヘルフレイム…!?)

M G 日花「ウイザーインパクト!」ヒュン

ドガアアン!

何故私がこの技を使えるのかって?

…安心しなさい、本物じゃなくて似せたものよ。

M G 日花「…ふう」

咲子「(技は全部出した…もう後がないわね…)…日花、素晴らしい提案があるわ」

M G 日花「どこかの上弦の参加しら?」

咲子「(ああ、このネタ知ってるのね)次、最後の攻撃にしない?残ってる全てを出し

切りましょうよ」

M G 日花「……………」

いい考えね…

M G 日花「採用」スツ

ギユイイン…!

咲子「おつ、やる気ね…!」スツ

ギユルルル…!

お互いがエネルギーを溜める。

M G 日花 「準備オーケーよ…」

咲子 「私もよ…!」

ドツ!

コレが最後の攻撃よ…!

M G 日花 「マリオファイナル・G!」 ギュオオオ!

咲子 「クリムゾンハリケーン・竜!」 ゴオオオオ!

ドゴツ:

バガアアアン!

アルミ 「あ、コレはヤバいわね」 スッ

S 日花 「確かに」 スッ

ピキッ!

2人は周りに結界を張った。

…そうしないと被害がヤヴァイのである。

シユウウウ…

M日花「ケホツ…」

咲子「ハア、ハア…」

観客『……………』

日花↓場外

咲子↓場外

設置してたカメラを見ると…

同時に場外。よって…

アルミ「結果、引き分け！」

2人「そ、そんなぁ…」

オメガ・タイムラインでまた会おう

side入箱日花

M日花「疲れたわ…」

咲子「アンタホントに強いわね…」

アルミ「2人とも、お疲れ様」

S日花「ゆっくり休みなさい」

その後、私達は色々話しながら休んだとき。

Sメイ「分身！」ポワン！

4人『登場！』

Mメイ「ええええ!!？」

ネロイズム「なるほど、多重人格なんだね…」

アルミ「火野有美ね…」

S 日花 「アルミの読み方を変えたら有美になるわよね」

アルミ 「そうね。一応私の元狂気が火野有太なのよ」

S 日花 「へえ…」

平尾 「おお…」

千早 「どうだ、ちゃんとできるか？」

(MULAの物語を見せている)

ルメ 「ええ、かなりよくできてるわね」

甲 「コレを半年ぐらいで作ったのか？」

千早 「ああ、俺と千代の2人でな」

アルヤ 「うおっ、すげーな…」

フラン 「速すぎだろ…」

S 絵奈 「……どう!?!」 サッ

(描いた絵を見せる)

M 絵奈 「……いい!!」

マリン 「絵奈が褒めるレベルって、アンタ凄いわね…」

S 絵奈「そうなの〜？」

マリ「ええ、絵奈はプロの画家だったし…」

フラン「なあなあ、それでマリを描いて「フンツ！」ブフオツ！」ドゴオ！」

マリ「アンタの場合は水着姿とかでしょ？」イライラ

M 留美「私の方が強い！」

S 留美「いや、私が！」

2人『むむむむむ…』

レイ「あはは…」

こんな感じで時間は過ぎていったとき。

―数時間後―

夕方になった。

アルミ「じゃ、またどこかで会いましょ」

S 日花「ええ…日花」

M 日花「何、日花」

S 日花「…世界、しっかり守りなさいよ」

M 日花「…フツ、もちろんよ」

アルミ「…話が終わったようね。ハアッ！」

ギユオオオ…

空間が開く。

M 全員『また会おう！』

S 全員『もちろん！』

突入！ハアア！

シュツ

こうして、私の別世界日帰り旅行は、終わった。

ケーティ「ふう…」

かなり疲れたわね…

ピンポーン

ケーティ「あ、はい」タタッ

ガチャッ

「…久しぶり、ケーティ」

…!!

ケーティ「久しぶりね…こころ」

こころ「うむ、幻想郷から一旦帰ってきたのだ！しばらくココで過ごす！」

ケーティ「そう。入りなさい」

今夜の料理、頑張らないと♪

入箱日花、桜木咲子に会う。 完

次章予告

パンドラの箱…

アルミの親友で、ライバル。

ソイツはシジマ台地での特訓を終え、帰ってくる！

同時に、魂集族に関する事件が発生する。

日花達は果たして事件を解決できるのか!?

第7章 パンドラの箱： 手紙と発生

side アルミ・マリオ

アルミ「ヒマね…」

有太「……………」ペラッ

有太はエロ本を読んでいる。

アルミ「私の目の前で堂々とエロ本を読むのはおかしいと思うわよ？」

有太「別に隠しても意味ないだろ？」

アルミ「それもそうだけど…」

私の相手はキノ太郎だけよ。

ピンポーン

アルミ「はーい」

ガチャッ

「お手紙です」

アルミ「あ、ありがとうございます」

「失礼しましたー」スタスタ

誰からかしら？

住所を見てみると…

『シジマ台地』

…ああ、なるほど。

ビリッ

封筒を破く。

キノ太郎「アイツ、ようやく特訓が終わったのか？」

アルミ「どうでしょうね？」

手紙を読んでもみる。

『アルミへ

久しぶりね。

私の特訓がようやく終わったわよ。

そこで、アンタに挑戦状をたたきつけるわ。

この手紙がきてすぐにシジマ台地に来なさい。

久々の勝負をしましょ。

ノーア・ピースより』

ノアからの手紙だった。

キノ太郎「すぐ行くのか？」

アルミ「そりゃ、そう書いてあるからね。行ってくるわ」

キノ太郎「おう、行ってらっしゃい」

ガチャッ

有太「……………」ペラッ

キノ太郎「…おい有太、そろそろソレをしまえ」

有太「だが断る」

キノ太郎「そのセリフを使うタイミング、おかしくないか…？」

一方、その頃。

「…んま〜い♪」パクッ

「確かに♪」

「…同感」

ウイザークイーンと魂集族と面霊気（ケーティとアオイとこころ）は喫茶店でゆっくりしていた。

ケーティ「最近平和ね…」

アオイ「うん、いいことだよ」

「こころ「確かに、最近大きな事件が起きてないな」

最後大きな事件がおきたのは、アルミのタマシイが砕かれた時である。

(リゲイン・コンプリーション。5年前)

しかし、フラグというものはすぐに回収されるものである。

…ドガアアン!

ケーティ「…え」

アオイ「言つたそばから…」

「こころ「言わない方がよかったかもしれない」

3人は爆発音が聞こえた方向をみる。

ケーティ「アレは…赤い森の近くかしら?」

アオイ「うん、マイン国とソジック国の国境付近の森だね」

言い忘れていたが、ココはマイン国である。

ケーティ「また事件ね。はあ…」

アオイ「でも、私達はあまり動かなくてもいいんじゃない?」

「こころ「それもそうだな」

アオイ「ちょっとレインを電話するよ…」プルルル

「…事件ね」

「え、どうしたんだい母さん？」

ココは十六夜家。

当主十六夜白夜は、事件に気付く。

白夜「アルミさんに鍛えられた勘よ、星夜」

星夜「へえ…」

白夜の息子、十六夜星夜は納得する。

白夜「アルミさんは恐らくパーカーズに任せる…星夜」

星夜「？」

白夜「パーカーズの力になってきなさい」

星夜「…分かった。行ってくるよ」

白夜「任せたわよ」

ガチャッ

ロリコンからの連絡

side 坂田日花

日花「…ヒマね」

ども、数か月前に平尾と結婚した坂田日花よ。

…急展開？んなもんいつもあるじゃない。

ちなみにマリんとフランもくつついたわよ。

平次と絵奈が交際中だったかしら？

アルヤは…言わないでおくわ。

甲「ヒマヒマお化け黙ってろ」

日花「ソレは私の前世が幽霊だった時の話でしょ？」

甲「ヒマならコレをやれ」ドサツ

書類ね…

ブウウウン

日花「終わったわよ」

甲「早くね!？」

平尾「時間停止って便利だね」

日花「でしよ〜?」ドヤア

プルルル!

…ガチャッ

日花「もしもし、パーカーズ事務所の坂田日花です」

『おう、俺だ』

その声は…

日花「ああ、12歳年下の子と交際してるロリコン総監でしたか」

(本人は30、相手は18。ロリコンなのか?)

『違えよ!?!』

日花「はいはい、何なのアルヤ?」

アルヤは警察総監となった。

(ハリー↓キノ太郎↓アルヤ)

アルヤ『はあ…事件だ。場所は赤い森だ』

…へえ?

日花「で? 私達はどしどしと?」

アルヤ『解け「解決ね、オーケー」最後まで言わせてくれよ…』

日花「はーいはーい」

アルヤ『はいはー1回、そして伸ばすな』

日花「アンタもするでしょ？」

アルヤ『そうだが…とにかく、頼んだぞ』

日花「…ええ、任せて」

アルヤ『じゃあな』

ツーツ：

甲「事件か!? 事件だよな!」キラキラ

日花「ど、どうしたの？」

甲「久々に事件だぜ! フェエエイ!」

なるほど、ソレでハイテンションなのね。

コンコン

平尾「は〜い」

ガチャツ

日花「あら、星夜じゃない」

星夜「はあ、はあ…日花さん達、事件解決の協力をしました!」

甲「おう、それは心強いな」

星夜「あ、後他にも数人来てますよ」

平尾「えっ？」

スタスタ

平次「手伝いに来たよ兄さん」

絵奈「ども」

メイ「犯罪者は斬る！」

うん、斬るのはダメよ。

日花「じゃあ、このメンツで行きましょう」

ソレの方が円滑に解決できるし。

…シュッ

「遅れちゃった♪」

日花「貴女が来るのは予想外でしたね…レインさん」

レイン「うん、お母さんに頼まれちゃって。それと魂集族のリーダーとしてしつかりしたいとね！」

なるほど…

そして私達は転送火桜で現場へ向かうのだった。

♪ポケモンクエストーシジマ台地

sideアルミ・マリオ

シジマ台地の特定の場所まで来た。

アルミ「…おっ」

ザッ

「久しぶりね、アルミ」

2代目ブルーのNが現れた。

アルミ「ええ、久しぶりねノーア」

ノーア「感傷に浸るまえに…まずは手合わせしましよ？」

アルミ「…もちろん。そのために来たわ」

スツ…

2人『さあ、狂ったように踊りましょう？』

炎と氷の対決…？

♪MULASTORRY―炎天桜舞

sideアルミ・マリオ

ノーア「先手必勝！」ドツ！

早速始めるのね。

アルミ「防御火桜！」ピキツ！

…ドゴオ！

ノーア「ツ…ヘイルストーム！」

出たわね、十八番。

アルミ「桜舞！」BLOOM！

炎天桜舞の低位互換を出す。

ズドドドツ！

ノーア「…さつき思ってたんだけど、アンタの火桜の種類増えてない？」

アルミ「そう？」

最後見せたのはミールさんの葬式のすぐ後だから…

(ノリオはその前に死亡(泣))

アルミ「確かにそうね」

当時は火桜しかなかったし。

ノーマ「…まあいいわ。ハアッ！」ギユン！

その雰囲気…！

ノーマ「氷河陣！」パキイツ！

アルミ「フレイムドロップ！」ドゴオ！

氷を炎で相殺した。

…マジか。

アルミ「アンタ、完成者なのね…」

ノーマ「あ、バレた？」

アルミ「いつの間になってたのよ…」

ノーマ「お父さんのタマシイの一部を取り込んだでしょ？」

アルミ「ええ…」

ノーマ「だいぶ前に過去の自分と戦って勝ったのよ」

アルミ「ええ…？」

いつなのよソレ…？

ノーア「それで、私の3つめの条件が…」スッ
←ブウウン…！」

アルミ「!？」

時が…止まった!?

ノーア「能力を進化させること…だったのよ」

アルミ「つまり、時を凍らせた…？」

ノーア「そ。私の今の能力は、『物や概念を凍らせる能力』なのよ」

アルミ「うわぁ…」

私の能力（時空を操る）もチートだけど…

アルミ「アンタもチートね…」

ノーア「そうね。…コレを見せたかったただだし、手合わせは終わりね」

…は？

アルミ「は？」（。 ㇿ）

ノーア「手合わせの目的はコレを見せる事だったのよ」

アルミ「そ、そう…」

ノーア「…あ」

アルミ「どうしたの？」

ノーア「私の組、どうなってるの？」

(ノリオが組長だったヤクザ。特訓前は一応ノーアが組長を継いだ)

アルミ「えっと…」

確か…

アルミ「今でも裏社会を仕切ってるわ。偶に会う程度よ」

ノーア「そう。じゃあ後で会おうかしらね」

アルミ「それがいい」「ドガアアン！」…？」

遠くから爆発音が聞こえた。

アルミ「…ノーア」

ノーア「ええ…」

2人『事件ね』

アルミ「どうする？」

ノーア「正直に行ってアンタの弟子たちに任せてもいいと思うわよ？」

アルミ「…そうね。じゃ、帰りましょっか」

ノーア「ええ」

スタスタ

side W・D・サンズ

サンズ「…どうだ？」

「改造したのか…興味深い」

サンズ「そうさ…親父」

俺は今亜空間で親父と話している。

（文字数がヤバいのでウインディング表記はやめます）

ガスター「他に研究成果はないか？」

サンズ「…成果というか、見せたいものがある」

ガスター「…？」

サンズ「出てきな」

「この人だれ？」

「お父さんの知り合い？」

スケルトンと犬耳のニンゲンが出てきた。

ガスター「なんと…！」

サンズ「紹介するぜ…」

∴俺の息子のサンズJ r. と娘のルマだ」

赤い森へ行く

side 坂田日花

―赤い森―

…シユツ

日花「ついたわよ」

星夜「事件つてどのあたりですか？」

平尾「確か…中心付近だね」

…ドガアアン！

甲「あつちだな！」ダッ

爆発の方向へ向かう。

―数分後―

「グッ…」

「ハア、ハア…」

日花「!？」

そこには魂集族の人が倒れていた。

レイン 「えっ!? 大丈夫!?!」

「レイン、さん…」

レイン 「誰にやられたの!?!」

「爆発する…機械に…」

メイ 「機械…?」

「ああ…俺達は十数人で旅行に来てたが、突然機械が現れて襲い掛かってきたんだ」

平次 「それで?」

「俺達はある程度戦ったが…体が急に光ったと思ったら爆発して…」

絵奈 「他の人は…」

「あちこちに散らばってるぜ…」

日花 「…回復火桜!」 B L O O M !

…ギョーン!

傷だらけだった体はあっという間に回復した。

「…ありがとう」

レイン 「魂集族とリーダーとして指令をするよ?」

「は、はい」

レイン 「他にケガしてる人を見つけたら、すぐにコレを一枚与えて」 シュツ

レインさんは私が生成した回復火桜を数枚渡す。

レイン「それと…すぐに避難して。分かった？」

「…了解、リーダー！」

レイン「じゃ、解散！」

「失礼します！」ダッ

…レインさん、かなりしつかりしたリーダーね。

星夜（リーダーとしての態度…俺も習うべきだな）

レイン「…じゃあ、進もうか」

日花「は、はい…」

スタスタ…

ーさらに数分後ー

…ドガアアン！

「何なんだいコイツら！」

「僕も同じ質問をしたいよ！」

この2人は…！

日花「ステイブさんと、月斗さん!？」

ステイブ「…ん、日花達パーカーズかい？」

月斗「ちようど人手不足でさ…手伝ってくれない、かなっ！」 シャツ！ズバツ！

「ジビビッ！」

襲い掛かってきた機械が斬られる。

平尾「コイツらが機械ですか？」

月斗「その通り。なんか見覚えのある形状なんだ」

甲「見覚え？」

月斗「ああ、何処だったっけ…」

「ジビィー！」 ガシャン！

ピカッ！

…ッ！

日花「天空掌！」 ズガアン！

「ジッ!？」 ヒュウウン！

…ドガアアン！

日花「危なかつたわ…」

ステイブ「こんなヤツらが何百体もいるんだ、何が目的だろう…？」

な、何百体!？」

絵奈「機械が1つ、機械が2つ…」（。 ㇿ。）
メイ「絵奈、現実逃避はやめて！」

「ジビィー！」ガシャン！

また現れたわね！

白夜「殺人ドール！」ズシャツ！

（あれ、何処かで聞き覚えが…）

「ジユウ…」ボタン

コイツら、どうやって倒そうかしら？

「ククク…そうだ、素材は集まっている…！」
『テンプス株式会社』

タイムマシンの会社

side アルミ・マリオ

ノーア「久しぶりですね〜」

ルメ「えっ、ノーア!?!」

私とノーアはルメの家に来た。

ザクロ「久しぶりだなおい!」

(何だかんだで4部では初登場)

ダークアルカ「アンタ、強くなったらしいわね」

(こいつも)

ノーア「ええ、今はよ・ゆ・うでアンタを倒せるわよ♪」

ダークアルカ「へえ…?」

アルミ「まあまあ、落ち着きなさい」

てか、ダークアルカは80超えてるのに戦う気満々じゃない…

(アルミ、ノーアと違って完成者ではないが、外見50代)

…コトン

ルメ「はい、お茶とクツキー」

アルミ「待ってました〜」パクツ

ん〜、やっぱりクツキーは最高ね♪

ザクロ「真っ先に食うなよ…」

アルミ「安心しなさい、全部食べるワケじゃないし」

ルメ「…で、来た理由は？」

……はあ。

アルミ「やっぱり分かるのね」

ルメ「そりゃ、一応アンタの叔母だからね」

それって関係あるのかしら？

…まあいいわ。

アルミ「テンプス株式会社、って知ってる？」

ザクロ「おう、最近タイムマシンの開発を始めた会社だっけな？」

アルミ「そうよ…：ダークアルカは社長の名前を知ってるでしょ？」

ダークアルカ「ええ…：テンプス・タイムね」

ノーア「新聞にも名前は出てないのに、何故分かったの？」

(一応麓のコンビニで新聞を買って読んでいた)

ダークアルカ「アルカの記憶で…」

ー回想ー

「ウールの父親が悪いんだ」

アルカ「父親？」

「ああ、名前はテンプス・タイム、タイムマシンを使う会社の社長だ」

ー回想終了（短っ!?!）ー

ノーア「なるほどね…」

ザクロ「で、そのテンプスってヤツがどうしたんだ？」

アルミ「お母さんの話だと後々会社が倒産するらしいんだけど、裏がありそうなのよ」

ルメ「まあ、タイムマシンを扱う会社だしありえるわね…」

こんな感じで話は進んだ。

ー?ー

銀髪の赤ちゃんを抱えて、アルミは絶望の表情を浮かべる。

アルミ「嘘、でしょ…?」

…この時、テンプス・タイムを逮捕すればよかったと取り返しをつかない後悔をした

のは、たった5年後の話。

side 坂田日花

機械を発見しては破壊し、人を見つけては逃がしてを繰り返して数時間後。

ガシヤン…

絵奈「……………」(。Д。)

ガシヤン…

日花「でっかいわね…」

ガシヤン…!

「マギイイツ!」

全員『鳴き声ジヨジヨ三部のラバースかよ!?!』

巨大な機械がそこにいた。

何かでっかい機械

♪MULASTORRY―森の戦い

side 坂田日花

やれやれ…

日花「さっさと倒してやるわ！」

「マギイイツー！」

メイ「斬ッ！」ズバッ！

レイン「ソウルブラスター！」ドガアアン！

メイとレインさんの先制攻撃。

シューウウ…

「…マギ？」

メイの攻撃は能力付きだから効果はあったものの、レインさんの攻撃は無効化されていた。

レイン「ええ…」

日花「炎天掌！」ズガアアン！

ドゴオ!

「マギツ…」

ダメージは入るみたいね。

甲「通常攻撃じゃ効果なしかよ…」

「マギギギギ…」ギユイイン…

…!

日花「攻撃がくるわよ!」

平尾、平次「防御火桜!」ピキツ!

「マギイイイ!」ドガアアン!

極 太 光 線 が 飛 ん で き た 。

平尾「ツ、防御力が足りない!」

星夜「俺も手伝います!ハアツ!」ギユン

ステイブ「アイアンブロック!」

シューウウ…

光線は何とか防ぎきった。

…というか

日花「私達が苦戦するような機械があるとはね…」

平尾「相当な技術力が必要だよね」

「マギギギイー！」スチャッ

ヒユウウン！

絵奈「ミサイルウウ!?」

甲「アースガード！」ドゴッ！

…ピキッ

土の壁にヒビが入る。

甲「ッ!?!」

月斗「甲、そこでじっとしてて！ムーンフォース！」ギユウウン

ピキイン！

土の壁が月のエネルギー(?)によって強化され、ミサイルは防がれた。

日花「……………」

グリツチ化またはスーパー化をしたらすぐに倒せるけど…

―数日前―

アルミ「日花、しばらくは変身禁止ね」

日花「あゝ!?」

という謎の縛りをくらったから無理なのよね…

平尾「日花、いい考えはないかい？」

…そうだ!

日花「レインさん」

レイン「何？」

日花「レインさんって、ガスターブラスターを放てますか？」

レイン「できないよ。お母さんはガスターさんの灰の一部が融合時に混ざったからできなんだ」

日花「そ、そうなんですネ…」

星夜「殺人ドール！」ズシヤッ!

星夜はナイフの弾幕を飛ばす。

グサッ!

「マギッ」

ナイフは機械に突き刺さった。

ステイブ 「バーニンソウル！」ブヒー！

ステイブさんの剣は豚の鳴き声と共に炎の斬撃を繰り出す。

ズバツ！

「マギイ…」ヨロツ

ひるんだわね…まさか。

日花 「ステイブさん、その剣って魔力で動いてますか？」

ステイブ 「そうだけど？」

日花 「この中で霊力以外のエネルギーを使える人はいるかしら？私以外で」

私は多少だけ魔力が使えるわ。

メイ 「私は神力を使えます」

レイン 「私は妖力だね」

日花 「なら…それであの機械を倒すわよ！」

2人 『うん！（はい！）』

破壊だツ！

side 坂田日花

日花「じゃ…私から行くわ！」ギユン！

ゴオツ！

体内から魔力があふれ出す。

日花「ヘルフレイム！」ゴオオオオオ！

「マギツ……マギイ!？」

ドガアアーン！

うん、圧倒的に威力が上がってるわね。

日花「次はレインさん、お願いします！」

レイン「オーケー…ハアツ！」ギユン！

ギユイイン…

日花「その間に…メイとステイプさんが攻撃を！」

2人『了解!』ダツ！

ズバズバツ！

「マギツ……」ジジッ

かなり効いてるわね。

レイン「……トドメだよ!タマシイ・ザ・ブラスター!」ドッ

ドガアアアアア!

極 太 光 線 キタ——(。▽。)

!!

「マギツ!?!……マギイイイ……!」ドゴオ!

シユウウウ……

ロボットは光線をモロにくらい、破壊された。

絵奈「……………」(。Д。)

甲「あつさりすぎだろおい……」

月斗「まあ、コレでオーケーだからいいよ。……さて、こんなロボットを作ったのは誰だろうね?」ゴソゴソ

月斗さんはロボットの残骸をあさる。

……スッ

月斗「コレは……なっ!?!」

日花「何ですか、ソレ」

月斗「コレは最近有名になってる会社、テンプス株式会社のロゴだよ!……でも、ニヤ

ン国のロゴもあるね……」

平尾「つまり、作ったのはテンプスだけど、買って使ったのはニャン国って事ですかね？」

月斗「おそらくそうだね。ニャン国め……」

平次「事件はコレで一旦解決ですか？」

月斗「ん？ そうだよ。ニャン国のヤツらをしばくのは僕とステイブに任せて」

ステイブ「あつちはまだ懲りないからね……」

こうして、赤い森の襲撃事件は解決したのだった……？

パンドラの箱…… 完

次章予告

最終章 時は巻き戻る……

娘と息子ができ、平和に暮らしていた日花。

しかし、気付いたら仲間達と共に過去に飛ばされていた！

一方、その頃アルミは………初めて本当の殺意を浮かべていた。

果たして、巻き戻る時を戻す事ができるのか……!?

ルマ「お父さくん！」

サンズ「ん、どうした？」

ルマ「ボク、お父さんみたいに強くなりたい！」

サンズ Jr.「お、おいらも！」

サンズ「そうか…じゃあまずは大きくならないとな」

2人『うん！』

サンズ（クローンだが…可愛い娘と息子だ。しっかり育てないとな）

ネロイズム「…アルヤ」

アルヤ「何だ…？」ボロツ

2人はちょうど、アルヤとメイの結婚を賭けた決闘を終えた所だった。

ネロイズム「君は、何があってもメイを守る事を誓うかい？」

アルヤ「もち、ろんだ…！」

ネロイズム「…フツ、そうかい。合格だよ」

アルヤ「……………!!! ありがと、な……」ボタン

ネロイズム「……………やれやれ」

僕もまだ甘いな……と、ネロイズムは空を見上げて言った。

最終章 時は巻き戻る…

時の一族の壊滅

side 坂田日花

「おかあさん〜ん!」

日花「どうしたの、日和?」

私の娘、坂田日和（3歳）が話しかけてきた。

日和「未例が歩いてる!」

日花「えっ!?!」

未例は、私の息子で1歳である。

日花「ホント!?!」ガチャツ

「あ〜」テクテク

…マジか。

平尾「……………」カシヤツ

平尾は無言で写真を撮っていた。

日花「よくできたわね、未例」ナデナデ

「わあ〜♪」

―数時間後―

平尾「日花、そろそろ集合時間だよ」

日花「あ、そうだったわね。日和と未例は…桃の所ね」

2人を桃に預けたあと、私達はパーカーズ事務所に向かった。

―パーカーズ事務所―

ガチャッ

日花「ヤッホ〜」

甲「お、来たか」

絵奈「どうも〜」

留美「ほぼ全員そろってますよ」

そこには平次、絵奈、甲、留美、メイ、フラン、マリンがいた。

某ロリコン総監は仕事でない。

???（ん？誰かが俺の事をロリコンと呼んだような…）

（的確すぎだろ〜！）

フラン「…何か俺久々に登場したような気が」（メタい！）

マリン「何の事？」

後は…

シユツ

ネロイズム「やあ、コレでそろったかい？」

日花「ええ。それで今日は「カチツ」…ん？」

今、何か聞こえたわね。

メイ「今のは？」

日花「何かがカチツと」「ギユイイン！」…!？」

突然私達の周りに結界が現れた！

ネロイズム「コレは!?!…ハッ！」

キイン！

ネロイズム「丈夫な結界だ…！」

日花「一体…!?!」

シユツ

私達は、そこから何処かへ転送された…

sideアルミ・マリオ

アルミ「酒、美味しかったわ」

天助「それはよかった。またなアルミ！」

アルミ「ええ…転送火桜！」 B L O O M !

シユツ

―地界―

シユツ

……?

アルミ「この気配は、白夜？」

何でこんな所「シユツ」…え？

「うわあああん！」

アルミ「え、ちよっ!」 ガシツ

突然私の目の前に銀髪の赤ちゃんが現れた。

この子は…

アルミ「咲夜…でもなんで？」

いやな予感がするわ。

タタツ…

―数分後―

着いたわ。

ピンポーン

アルミ「白夜、私よ〜」

…心配を感じないわね。

アルミ「ん？」

ギイ…

ドアには鍵が掛かって…

アルミ「え…?」

目の前には、銀髪の老人が倒れていた。

…この顔は!?

アルミ「星夜!」

十六夜星夜 死亡

何でこんな…!?

アルミ「巻き戻し!」ギョルルル!

…あれ?

アルミ「巻き戻しが効かない?」

まさか…!

アルミ「ツ！」ダッ

家の中に駆け込む。

アルミ「なっ…」

シユウウウ…

至る所に老人の死体があつた。

自害したと思われる人も数人いた。

一体誰が…

「うっ…うっ…」

…!!!

アルミ「白、夜…?」

白夜「ア、ルミさん…」

白夜は、しわくちなやな老人になっていた。

アルミ「こんな事、一体誰がやったの!？」

白夜「テ…プスタ…ムです」

アルミ「テンプス・タイム？」

白夜「はい…状態を加速され…みんな寿命で死にました…」

…生き返る条件が適用されないようにしたのね。

白夜「自害してる人、達は生き返らせて下さい…」

アルミ「アンタはどうなのよ!？」

白夜「今私を殺して生き返らせたとしても…もう寿命が、ケホツ…」

アルミ「ツ…!」

白夜「アルミ、さん。どうか…」

咲夜を、お願いします…」ボタン

アルミ「白、夜…」

十六夜白夜 死亡

…はははっ。

こんなに私が怒ったのは、初めてよ？

ガチャツ

私は咲夜を背負って十六夜家の屋敷を出る。

アルミ「まずは自害した人達を生き返らせる事ね…」

それと。

ゴオオオツ…

アルミ「テンプス・タイム…」

お前は絶対に許さない。

56年前!?

side 坂田日花

…シユツ

日花「ココは…」

留美「どこ…?」

平尾「…!!!」

平尾はスマホの時間を見て驚いていた。

平尾「コレを見て！」 スツ

『2039年』

日花「はあ!?!」

それつて…アルミさんが12歳の時じゃない!

つまり…

日花「私達…タイムスリップした?」

ネロイズム「そのスマホは壊れてないようだし、ほぼ確定だね…」

甲「いや待て。確定させる前に決定的な証拠がある。町に出ようぜ」

フラン「それがいいな」

スタスタ：

ーキノコ町ー

うわあ：

日花「くっつ懐かしいわね：

前世（アルカ）が見た光景ね：

：バァン！

「逃亡者、発見ー！」

振り向くと、そこにはハンターがいた。

マリリン「は？」

甲「コイツらがいるって事は：

留美「今、逃走中ですね」

日花「まあ、逃げないけどね！炎天掌！」ズガァン！

「グハッ：：」バタン

うん、カスね。

絵奈「あのく、提案があります！」

平尾「ん、何だい？」

絵奈「私達がココに来た原因を、手分けして探しましよ〜!」

甲「いい考えだ、不「採用ね」…何でだよ!?!」

日花「よほどの事がない限り私達は1人でもココの敵を倒せるわ」
強くてもネクロンだし。

日花「つー事で、ココから個人で原因を探りましょ。分かったら転送火桜ね」
全員『了解!』

sideアルミ・マリオ

サンズ「つし、コレでオーケーだな」

ガシイン!

タイムマシンが起動する。

アルミ「日花達がいる所…56年前へ行くわ」

サンズ「何でそんなすぐに分かったんだ?」

アルミ「56年前、ルメさんが赤坂留美という人に遭遇したらしいのよ」

留美と完全に一致してるし。

アルミ「それと、アオイを拾った場所に日花のメモがあった」

サンズ「ほう…なるほどな。じゃあそう設定しておくぜ」カチツ
ギユン…

アルミ「ありがと。咲夜はちゃんと見てなさいよ?」

サンズ「もちろんだ」

アルミ「じゃ…行つてくるわ」

サンズ「おう!」ポチツ

ギユイイン…!

タイムマシンの周りにエネルギーが集まる。

シュツ…

そして、私も日花達がいる時代へ飛ぶのだった。

side 坂田日花

ルメ「…分かりました。アルカ先輩がそこまで言うなら何も言いません。…でも…勝手に自分を殺さないでくださいよ、先輩。…失礼します」

ガチャツ

アルカ「…それもそうね。でも…この世界はそうなってるから、どうしても起きてし

まうのよ、ルメ」

日花（私、この時にこんな意味深発言したのね）
（物陰に隠れてる）

遭遇

side 赤坂留美

留美「…グレイ」

「何だい、留美?」

私のポケットの中にあつた瓶からグレイが出てくる。

(ポケモンかよ!?)

留美「アンタも連れてきてよかつたわ」

グレイ「そうだね…まさか僕が主人に会う時に飛ぶとは」

留美「どうか、時間軸を彷徨っていたガスターさんに会うのもこの時だよね?」

グレイ「うん、それであつてるよ」

スタスタ…

『あ』『い』『う…?』という建物がある所まで来る。

(原作ネタ)

グレイ「…!留美、隠れて!この時代の仲間が来る!」

留美「了解」シユッ

建物の屋上に飛ぶ。

スタスタ

この時代のルイージさん、ノアさん、キノ太郎さん、ミールさんがいる。

…この中で生きてるのはノアさんとキノ太郎さんだけね。

ルイージ「さて、ここで三手に分かれよう。僕は右で」

ノア「じゃあ私とキノ太郎は左で」

ミール「私は？」

ルイージ「真ん中をお願い」

ミール「オツケー♪」

ドゴツ

ミール「つて、真ん中なんて無いじゃない！」

キノ太郎「…あれ、今気付いたのか…？」

ノア「…私たちは何も見なかった、オツケー？」

キノ太郎「オ、オツケー…」

…ルイージさん、超自然にミールさんを騙しましたね、流石です。

side 坂田日花

…シュツ

ココがこの時代のきさらぎ駅ね…

日花「さつきウインディングで書いたこのメモ…」

『ここにアオイが生まれたら、アルカが来るまでここにすませて下さい。日花より』

…ちようど異空間に家具をいれてよかったわ。

日花「アオイが生まれる前に急いだ方がいいわね」タタツ

ーアオイの部屋になる部屋ー

日花「転送火桜！」BLOOM!

シュツ

ベッドはココ、おもちゃはココ…よし。

日花「後はコレね」ペタツ

机にメモを貼る。

日花「コレでよしっ」と

トングラトングラ

side 赤坂留美

留美「…ヤバイ」

グレイ「はあ…」

山の中で道に迷ったあああ!?

留美「何処?! 何処?!」キヨロキヨロ

「それよりも、スイッチは…:…ん?」

:…ん!?

ルメ「何か探してるのかしら?」

留美「…ん? あ。やべ」じー

ルメ「…私が見えてるの?」

:…もう開き直ろう。

留美「ええ、見えてるわよ。”貴女は私だからね”」

ルメ「…:…は?」

留美「私は未来から来た赤坂留美。とある事情で過去に来たのよ」

ルメ「(留美? 私の名前と一文字だけ違うわね) 未来って、何年後?」

留美「ええつと、2095年だから…」

ルメ「…今なんて!?!」

留美「56年後ね。それがどうしたの？」

ルメ「あ、いや…えつと…なんか変な数字ね」

留美「私もそう思ってるわよ。日花さんを探してるのに、まさか前世に会うなんて…」
ボソッ

ルメ「今なんて？」

留美「…なんでもないわ。それじゃあね、ルメ」ピユウウウ…
風を纏ってルメから離れる。

ルメ「…今のは忘れよう。さて、調査つと」スタスタ

探索

sideネロイズム

ネロイズム「メイ、手がかりはあつたかい？」

メイ「今の所見てないよ」

この時代に来たことがないからね…

一体…ん？

ケーティ「お姉ちゃん、怖かったよ…」

アルミ「大丈夫よ、もうルメさんが倒したから」

この時代のアルミ達がいいた。

アルカ「体力には自信があるとか言つてたくせに…」

ルメ「あ、私イラついたので本気でやってみました」

アルカ「…なら納得がいくわね」

ネロイズム「……………」じー

アルミ「…ん？」チラッ

気付かれたようだ。

ネロイズム「……………」サツ

あれはこの時代のアルミたちか。今はまだ子供のようだな。現代（コイツの元の時代）のアルミは善魔の僕にも勝てるぐらい強くなっただ、これから強くなっていくだろう。……ま、今はとりあえずテンプス・タイムを探さないとな。

ネロイズム「メイ、行こう」バサツ

メイ「うん」タタツ

アルミ「……………!?!（今明らかに角と翼が生えた人が飛んでつたよね!?!）」

ケーティ「お姉ちゃん、どうしたの?」

アルミ「え?…あ、いや、なんでもないわ」

2人（セエエエーフ!）

急いでその場から離れた。

side 坂田絵奈

絵奈「えつと…」

まずはしめじ駅へ行こつと。

切符を買って電車に乗る。

ガタンゴトン…

数分後、次の駅についた。

「さて、乗り込もうぜ」

…急。

絵奈（あ、コレヤバいかも〜）白目

そこにはアドレーヌさん、ルイスさん、ノーアさん、キノ太郎さんがいた。

絵奈（やばいよ〜、につちゃんのお母さんが近くにいるよ〜、どうしよう…）

（絵奈は心の中で「日花の事を」につちゃんと呼んでいる）

ノーア「…？あのー、どうしたんですか？」

話しかけられた!?

絵奈「へ？あ〜、なんでもないよ〜？」

ノーア「そうですか、話しかけてすみません」

絵奈「いや〜別にいいよ〜」

な、なんとか返答できたよ〜…

平次、助けて〜！

sideフラン・ユメミル

マリ「…で？何で私達はコンビニにいるのよ」

フラン「別にマリンはついてこなくてもよかつたんだぜ？」

マリ「？」

フラン「なんせ俺は今からコンビニのエロ本コーナーを「フンッ！」ブフォッ！」ド
ゴオ！」

マリ「アンタ、妻もいるのにエロ本読むの!？」

(コイツら夫婦です)

フラン「で、でも車の免許あってもレーシングゲームするだろ!？」

マリ「ソレはソレ、コレはコレよ!もう…」ガシッ

ズルズル(引きずる音)

フラン「あ、ちよ、マリ…やめてくれえええ…」

手がかり

side 坂田平次

平次「…ふう」

「グハッ」ボタン

さつき大量にハンターが襲ってきたが、一斉に倒した。

平次「……？」

俺達がココに送り込まれたのは、何故だろうか？

平次「分からんな…」

探すしかないか。

タタツ…

side 坂田日花

日花「タイムスリップ、つまり…」

私達をココに送り込んだのは、おそらくアイツね。

日花「テンプス・タイム……」

何らかの理由で私達をココに送り込んだんでしょね。

「……………」スチャッ

ズドッ！

誰かが後ろから銃撃してきた。

日花「…フッ」サッ

まあ、避けたけど。

「…チッ」ダッ

日花「あら、逃がさないわよ？ 攻撃火桜！」 B L O O M !

ヒュン！

「…ッ」ドスッ

当たったようね。

日花「さて、アンタは……」クルッ

……!?

日花「まさか犯人がわざわざこっちに来るとはね……」

「フン、私は君を安らかに眠らせようと思ったただけだ」

日花「で、アンタの目的は何なの？ テンプス・タイム」

私を銃撃したのは、テンプス・タイム本人だった。

テンプス「知りたいのかね？なら教えてやろう…」ニヤニヤ

テンプスは気持ち悪い笑みを浮かべる。

テンプス「私の目的はカンタン…この時代のネクロンを暗殺する事で、この逃走中の犠牲者を減らす事なのだ！その後は第三次世界大戦の直前の時間へ飛び、キングニャンコを暗殺するつもりだ」

へえ…

日花「今すぐやめなさい」

テンプス「ほう、何故だね？」

日花「時間軸を弄るのはご法度よ。歴史が変わってしまう」

テンプス「ククク…それは承知さ。仮に歴史が変わっても私が消えても構わない」

日花「ッ…」

コイツ、狂ってるわね…

テンプス「さて…まずはコレを知ってしまった君を消す作業をしなければね」スツ

日花「…やってみなさい」

…魔力に転換。

テンプス「私は戦いでは強くない…だから化学で戦うのさ。時間停止！」

←ブウウウン…

…予想通りね。

日花「時間を操る能力は所得済みなのね」

テンプス「もちろんさ…」スチャッ

テンプスは銃を構える。

…撃たせないわよ。

日花「炎天桜舞・魔！」BLOOM!

テンプス「邪魔な弾幕だ…！」イラッ

ピキッ!

テンプスは結界を張って弾幕を防いだ。

テンプス「…発射」ヒュン!

一発、光線が放たれ

ギョルルル!

日花「なっ…!?!」

テンプス「いつ、結界が防御用だけど錯覚していた? 弾幕量が何百倍にもなるのさ」

日花「ッ、吸収!」ギョルルル

…ドスッ!

テンプス「できると思ってるのかね？それも対策済みさ」
吸収が使えないのは、マズい……！

逃亡

side 坂田日花

日花「……………」

テンプス「どうした？攻めてこないのかね？」スチャツ

…ギョルルルル！

吸収がダメなら…！

日花「反射火桜！」BLOOM！

…ギョーン！

テンプス「ほう…」

光線を跳ね返す事はできた。

テンプス「…反射結界」ピキッ

…ギョーン！

日花「!？」

ギョルルルル！

日花「反射火桜！」BLOOM！

…ギョーン!

やばい、このままだと何百…いや何千倍にも威力が倍增した光線にやられるわ…

日花「どうすれば…」ギョーン

テンプス「存分に悩むがいい」ギョーン

…そうだ!

ギョルルルル

光線がこつちに向かつて飛んでくる。

日花「…今よ! 反射火桜!」BLOOM!

シュツ!

火桜を斜め45度に構え、直角に光線を反射する。

ギョーン!

その上に135度に傾けた火桜を構え、正面に跳ね返す。

ギョーン!

そしてテンプスの頭上に45度の火桜を構えると…!

テンプス「…ガフツ!?!」ドスツ

シュウウウ…

数百倍に威力が膨れ上がった光線はテンプスの体に命中した。

テンプス「ぐうう……」

日花「ハア、ハア……」

今ので魔力を結構使ったわね……

霊力を使うとあまり威力が出ないからコレはやバいわ……

ジジツ……

日花「!?」

テンプスから”機械音”が聞こえる。

テンプス「ククク……私は人造人間に自身を改造したのさ……つまり、こんな事もできる」

パチン

……ガシヤン!

日花「なっ……」

さっきの光線のダメージがまるでなかったように修復されていた。

テンプス「さあ、君を消す作業の再開だ」スチャツ

日花「ツ……ヘルフレイム!」

ゴオオオオ!

テンプス「フン」ピキツ

シューウウ……

ヘルフレイムを防ぐ結界ですって…!?

日花（もうモーニングドーンとサンセットグロウしか技がない…しかも近距離技だから近づかないといけないわね…）

一体どうすれば…「天空掌！」

テンプス「ガアッ!?!」ズガアン!

「見つけたわよ、お前…」

…!

日花「アルミさん！」

アルミ「日花、アンタは下がって魔力の回復をしなさい…」クルツ

アルミさんは前世含め今まで見たことない程キレていた。

何で…!?

日花「な…」

真相火桜でアルミさんの心を読むと…

アルミ『コイツは十六夜家はほぼ皆殺しにした。しかも寿命を加速させて』

日花「ツ…」

十六夜家はアルミさんにとってかけがえのない存在…

キレてもおかしくないわ…

アルミ「テンプス・タイム」

アルミさんは殺気まみれの表情で言う。

テンプス「何だね、アルミ・マリオ？」

アルミ「お前は、絶対にしてはいけない事を2つ実行した」

テンプス「……………」スッ

アルミ「1つ、時間軸を弄る事…」シユツ

テンプス「多重結界」ピキツ

アルミ「…2つ、罪のない家庭を壊滅状態に追い込む事」シユツ

ドゴオオオ！

アルミはテンプスの顔面を狙って殴る。

…フツ

結界は消滅する。

テンプス「なー」

アルミ「オラア！」バゴオ！

(消滅の能力を纏いながら殴った為、結界を突き破りテンプスを殴った)

テンプス「グフツ…」

アルミ「……………」ガシツ

テンプス「…ククク」

アルミ「何がおかしい？」

テンプス「私をココで殺せると思ったか？愚か者が」カチツ

ブウウウン！

アルミ「なっ…」

テンプスの周りを大量のエネルギーが渦巻く。

テンプス「作戦は失敗したがまあいい！現代で勝負をつけるとしよう…！！」

シュツ

アルミ「…クソツ」

日花「アルミさん…」

テンプス・タイム 現代に逃亡

バック・トゥー・ザ・フューチャー

side 坂田日花

アルミさんはしばらく悔しがっていたが、少しして落ち着いた。

日花「…アルミさんは、どうやってココに？」

アルミ「サンズのタイムマシンを借りたの」

日花「なるほど…」

アルミ「…一刻も早く現代に戻らなきゃヤバいわ。日花、みんなを呼んで来なさい」

日花「…了解」

↓数分後↓

みんなを集め、事情を説明した。

メイ「そんな事が…」

ネロイズム「……………」

甲「星夜…」

アルミ「みんな、気持ちは分かるわ。でも今はまず現代に戻るのが大事よ。タイムマ

シンに乗り込んで」シュツ

ウイーン…

タイムマシンの中は意外と広かった。

ちやんと全員入って少し余裕があるレベル。

マリリン「まあ、空間を広げてるからね」

日花「そりやそうなるわね」

カタカタツ…

アルミ「よし、準備完了よ。みんなじつとしてて」

ギョルルルル！

3、2、1。

シュツ…

— 2095年 —

…シュツ

サンズ「おう、戻ってきたか」

咲夜「……………」スヤスヤ

アルミ「ただいま。借してくれてありがとう、サンズ」

サンズ「お安い御用だ。咲夜は渡しておくぜ」

アルミ「ええ…」

白花「咲夜はアルミさんが引き取るんですか？」

アルミ「そりゃね。十六夜家で生存した大人は2、3人しかいなかったし、白夜に頼まれたからね」

ネロイズム「…で、これからどうするんだい？速攻でテンプス・タイムの研究所へ行くべきだろう？」

アルミ「…いや、ちょっと待って。咲夜を置いてくるわ」

シュツ

そしてアルミさんは転そ「…シュツ」…早っ!?

アルミ「ただいま。じゃ、行きましょ」

メイ「は、はい…」

フワッ

サンズの研究所を出て空を飛ぶ。

転送火桜を使わないのはむやみに使うとテンプスにつかまるかもしれないからだ。

アルミ「…あつちよ」ドッ

―数分後―

…スタツ

大きな倉庫らしき建物だった。

アルミ「……………」スツ

バゴオン!

味方『…何やってるんですかあ!?!』(。D。) (。D。)

反射でついツツコんでしまった。

いやだつて、敵がいる所の扉を思いっきり吹っ飛ばしたのよ!?

アルミ「数分ぶりね、テンプス・タイム」

テンプス「もう来たのかい…」

ギユイイン!

平次「…!」

テンプス「まあ、遅かったがね!」ポチツ!

…ドオオオオオオオオオ!

突然、テンプスの周りに謎のエネルギーが渦巻きはじめた!

テンプス「入らないほうがいいぞ…」時の渦に!」

留美「時の渦…?」

フラン「…んなもん知るか!」ダッ

マリン「フラン!? 止まりなさい」
ピタッ

フランは時の渦に触れた瞬間、一寸も動かず静止した。

テンプス「ククク、バカめ…時の渦に触れたら自身の時が止まるのだよ? 時間停止が使える者は例外だがね。私を倒さない限り、ソイツは助からないさ」

マリン「ッ…!」

つまり、私とアルミさんと…

ネロイズム「……………」ニヤリ

ネロイズム意外は戦えないわね。

バトル・オブ・タイム①

side 坂田日花

アルミ「…アンタ達に指示を出すわ」

・私、アルミさん、ネロイズム以外は外から技を放つ。

・私達3人は時の渦に入る。

アルミ「以上よ。…くれぐれも時の渦に触れないように」

平尾「ファイアボム！」ボカン！

平次「サンダーキャノン！」ドゴオ！

絵奈「ザ・ワールド・ドローパーイン！」バシユツ！

甲「ストーンパンチ！」バゴツ！

マリリン「ハイドロポンプ！」ザパアン！

留美「風斬・鎌鼬！」スパツ！

テンプス「ククク、そんな作戦で私に勝てるとても？」

アルミ「やってみなきゃ、分からないでしょ？」

テンプス「……………」スチャツ

ピキッ

テンプス「倍増銃」ピユン

…ギユオオオ!

小さな光線は結界によって極太光線に倍増した。

日花「…ハッ!」ボッ

飛び込み炎天掌!

シュッ

日花「…!?!」ズシッ

テンプス「時間停止能力持ちの人物は時の渦に入っても自身の時は止まらない…ただし効果はないとは言っていないはずだ」

つまり、動作の時間を遅くされてるのね…!

日花「クッ…」

…ドスドスッ!

テンプス「…邪魔な弾幕だ。反射結界」ピキッ!

アルミ「あら、跳ね返す気?…フンッ!」ギユン!

ドッ!

アルミ「イジゲン・ザ・ハンド!」ギユルルル!

アルミさんはドーム状の結界で跳ね返ってきた弾幕を受け流して返した。

テンプス「チツ…！」ピュン！

…ギユオオオ！

再び極太光線。

アルミ「…！メイ！」

メイ「はい！…斬一闪！」シャツ

ズバツ！

メイは空間を斬ってその中に光線が入るようにした。

テンプス（空間を斬っただと…想定外だ…）

…スタツ

アルミ「ぼーっとしてるヒマはあるのかしら？」スツ

テンプス「なー（いつの間に私の後ろに!?!）」

アルミさんは時空停止でテンプスの後ろに回り込んでいた。

アルミ「炎天掌・神！」ズガアン！

テンプス「ガツ…」バキッ！

機械人間であるテンプスの一部が欠損した。

アルミ「さらにもう一発！」ズガアン！

(元ネタ：ナルト)

テンプス「グフツ…ククク…」

アルミ「…何がおかしい？」

テンプス「至近距离だ…！」 ガシッ

アルミ「!？」

ギユイイン!

アルミ「まさか…！」

テンプス「寿命加速！」

アルミ(時空停止!)

…シユッ

テンプス「…??何故だ…瞬間移動はしていないはず。何故離れている」

アルミ「アンタに教えるヒマはないっつーの…ハア、ハア…」

日花「アルミさん…」

時空停止を連続で使用した反動が…

日花「…ネロイズム、私達でやるわよ」

ネロイズム「ああ…！」

ドッ

バトル・オブ・タイム②

side 坂田日花

日花「…やったわ！」

アルミ「いや…」

ネロイズム「クツ…」 ヨロツ

メイ「お兄ちゃん!？」

ネロイズム「僕は現在進行形でテンプスの時間加速を受けているんだ…!能力で逆さにしても、逆に生まれる前まで戻ってしまう…!」

日花「な…」

テンプス「ハア…ハハツ…どうやら私の勝ちのようだな…」

ジャキツ…

日花「!？」

テンプスは床の金属を吸収し、修復した…!

テンプス「さあ…まずは白パーカーに死んでもらおう…」

ギョルルル!

ネロイズム「……………」

テンプス「…？何故死さない？」

ネロイズム「さあね…僕はそもそもニンゲンじゃないからね」

テンプス「何だと…？」

ネロイズム「僕は悪魔さ…フンツ！」ドゴオ！

テンプス「グウツ!？」

ネロイズム「日花！」

日花「ええ…サンセットグロウ！」ピカツ！

ズガアアン！

テンプス「……………」

日花「ハアツ！」シユツ

テンプス「…ククク」ガシツ

日花「ツ!？」

腕を掴まれ、離れられない。

テンプス「死ね、坂田日花」ギユルルル！

平尾「日花…！」

アルミ「……………」

…はあ、バカなの？」
テンプス「…何？」

アルミ「私がいる所で私以外の誰かを死なせるとでも？」

♪MULAストーリー―炎天桜舞（二分の一倍速）

日花「…!？」

加速、しない…？

テンプス「何故加速しない!? 貴様何をした!？」

アルミ「ワールドハッカー」ジリッ

アルミさんの手の上に赤いパソコンが現れた。

ネロイズム「それは…!？」

アルミ「コレは世界線の改変ができる代物…ただし代償はタマシイ」カタカタ

日花「まさか…!？」

アルミさんは、ソレで…!？」

日花「…ッ!？」ヨロツ

もう魔力と霊力切れね…クソツ…

テンプス「…私を脅したつもりか？」

アルミ「脅した？アンタはノーリスクで時間軸を弄ってるのよ？今更アンタを脅せな

いでしょ。…事実しか言っていないわ」

…カタツ。

アルミ「コレで準備はできた…」カチツ
 …ギョオオオオオツ!

アルミさんの周りを禍々しいエネルギーが囲む。

アルミ「H A C K I N G T H E T I M E L I
 N E」

テンプス「…ゴフツ!？」

突然テンプスが苦しみだした。

アルミ「実行」

…シュウウウ!

テンプス「この…この私がああああ………!」

フツ…

テンプス・タイム 消滅

シュツ

テンプスの消滅と同時に、時の渦は消えた…

アルミ「フツ、やった、わ…」バタン

全員『アルミさん!!!』タタツ

一斉にアルミさんに駆け寄る。

アルミ「ッ、少々やりすぎた、わね…」ギョ
ン
…パキッ

留美「アルミさんの、タマシイが…！」

…スパッ！

真つ二つに、割れた…？

…ジビビビッ！

アルミ「グッ…コレで私は半分死んだのね…」

アルミ・マリオ コレで1・5回死亡

日花「タマシイが半分になって…大丈夫なんですか!？」

アルミ「大丈夫よ…霊力が半減するだけ」

全員『全然大丈夫じゃないですよ…』

「…あ？」

誰かがワールドハッカーを使ったな…

「どうかしたかい？」

「…何でもねえ」

時は巻き戻る… 完

4部の少し細かい解説

どうも、エルマルです。

一応コレが4部の最終話的なヤツです。

まずは、火野有太についてです。

有太「俺？」

作者「ああ、お前だ」

有太は元々アルミの狂気でした。

性別は最初から男ですが。

実はアルミが完成する前から出てきてきましたが、完成してから完全な個体として出てきたってワケです。

アルミ「私が姉、有太が弟の双子ね」

有太「だな。ま、姉さんとは偶にしか呼ばんが」

意外な事に、呼ぶんですよね。

次に、マリオ世代キャラの生存状況です。

カービィ「ども〜♪」

カービィは不老なのでもちろん死んでません。
ププ勢はアド以外全員生きてます。

2人目は。

ハリオ「ほれほれ、ワシと格闘で戦わんか？」

ハリオですな。

ドラゴンボールで言う亀仙人みたいな状態です。

3人目は。

リボン「……………」カキカキ

リボン先生です。そりゃ妖精だからな。

今でも漫画を描いています。

「拳銃達人ハリィ」は完結しています。

4人目。

クツパ「吾輩は死なんぞおお！」

何と、クツパも生きてます。

亀は万年、といますよね？

あ、寿命が長いだけです、一万年とか生きませんよ流石に。

アルミ「わりと生きてるのね」

作者「わりとって何だ、わりとって」

次はノーアの完成についてです。

ノーア「…フツ」

アルミ「ヘツ…」

バアン…！（2人とも決めポーズ）

2人『…で、どつちがよかった!?!』

ルメ「知らないわよ…」

ノーアは3部終盤辺りからシジマ台地で修行しており、そこで能力を進化させ完成者となるました。

ノーア「コレでアルミと互角ね！」

アルミ「そうね…あ、そうだ」

ノーア「？」

アルミ「私、ある所に引越そうと思ってるんだけど…アンタも来ない？」

ノーア「その話k w s k」

アルミが引越す場所はその内分かります。

最後に…

ルマ「わーい！」

サンズJr. 「わーい！」
キヤツキヤツ

ガスター 「…楽しそうだ」

サンズ 「だろう？」

ガスターとサンズの再会についてです。

コレ、尺が足りなくて小説として出せなかつたんですよね…

経緯は…

まず、アルミがアンヘルにタマシイを砕かれた時、亜空間に意識が飛ばされます。

そこでガスター初登場。色々話した末、アルミはそこにあつたタイムマシンのがれきをサンズに持ち帰ることに。

復活したアルミは早速それをしました。

サンズはそれを見てキヤラ崩壊レベルの驚き方をしました←

アルミ 「コレを渡しに来たわ」 スツ

サンズ 「!!そ、それわああ!!？」

(目が飛び出てる)

アルミ 「…アンタ、驚きすぎでしょ？」

こんな感じ。

そしてアルミは経緯を話し、サンズを亜空間に連れてつたのです。それで再会。作者「コレでいいか？」

アルミ「大体そんな感じじゃない？」

有太「じゃ、俺が主人公の小説もよろしく「宣伝するんじゃないわよ！」へブツ」ドゴツ

作者「…と、とりあえず、コレで4部完結です。だいぶ短くなってしまいましたが、5部がクソ長くなるのでいいとしましょう！（苦笑）それでは、サイナーラ！」ノシ

4部 転生幻影 完

第5部 ブルーミング・ワールド 第1章 アルミの幻想入り
引っ越し

これは、後に八百万一番の神となるアルミの幻想入りの、物語である。

sideアルミ・マリオ

どうも、1. 5回死んだアルミ・マリオよ。

突然の事だけど：

アルミ「私、引っ越すわ」

キノ太郎「おう、知ってる」

有太「俺も」

ノーア「私も」

こころ「私はまだ戻らない」

咲夜「あゝ」

理由は単純。

咲夜を別の場所で育てたいからね。

もう一つ理由があるけど……それは次の章で分かるわ。(メタい!)
ちなみに……

アルミ「幻想郷の情報は充分ね。こころ、ありがと」
こころ「どういたしまして」

行き先は幻想郷。妖怪や神が住む場所で、『博麗大結界』に隔てられた空間だ。
アルミ「キノ太郎、ネロイズム」

キノ太郎「……何だ？」

ネロイズム「……」

アルミ「絶対、日花達に言っちゃダメよ？」

ネロイズム「分かってるよ。秘密にするさ」

キノ太郎「……アルミ」

アルミ「どうしたの？」

キノ太郎「偶には……戻ってきてくれよ？」

……フツ。

アルミ「もちろんよ」

ギユイイン……

ノーア「よっ」

有太「つと」

スタツ

2人は転移結界の中に入る。

アルミ「じゃ、行つてくるわ」スタツ

咲夜「あいあゝい♪」

ネロイズム「ああ…」

シュツ

スルツ…（博麗大結界を通り抜ける音）

―幻想郷―

シュツ

アルミ「ふう…」

着いたわ。

ノーア「あつちに神社があるわよ」

有太「おっ、確かに」

神社？

アルミ「つまりアレが博麗神社ね」

有太「参拝するか？」

アルミ「神社でしょ？もちろんよ」

階段を上る。…あら。

…シユツ

「…何者だ？」

アルミ「参拝客」

「貴様らから感じる気配からしてソレだけではないハズだ」

…はあ。

アルミ「アンタの主人に話をしに来ただけよ、八雲藍」

藍「…何故私の名前を!？」

アルミ「紫にきいたのよ」

藍「紫様に対してため口だと？」

「藍、落ち着きなさい。客人よ？」

藍「ツ、紫様…」

ノーア「へえ、アンタが…」

紫「ごきげんよう、アルミ、有太。初めまして、ノーア・ピース」

アルミ「ええ、数か月ぶりね紫」

私と紫はすでに会っており、面識がある。

てか、私は幻想郷に誘われているのよね。

紫「ココで突っ立ってるのもアレだし、上がりなさい」

アルミ「失礼するわ」

藍「……………（このニンゲンども、紫様に全く動じていない…一体何者なんだ？）」

藍にお茶を出された後、紫は口を開いた。

紫「改めて…幻想郷へようこそ、3人とも」

ノーア「ええ、しばらく失礼するわ」

紫「藍の事はごめんなさいね」

アルミ「別に気にしないわよ。私達に警戒するのは当たり前だし」

紫「そう…ところで」

有太「？」

紫「アンタ達、どこに住む気？」

アルミ「…あ」

忘れてたアア！

家

side アルミ・マリオ

アルミ「着いた着いた」スタツ

ココが人里ね。

ノーア「…まるで270年前にいるみたいね」

有太「そりや博麗大結界ができたのが約270年前だからな。文明はあまり発達してないんだろ」

何故私達が人里に来たのかって？

紫から家はココで探すといいつて勧められたからよ。

「着いてくるのだー」

隣にいる金髪の少女が言う。

アルミ「オーケー、ルーミア」

彼女とは移動中に会った。

ー回想ー

スタスタ

アルミ「…ん？」

ルーミア「うう…」ヨロツ

有太「！大丈夫か!？」

ルーミア「お腹すいたのだー…」

ノーア「飯？ちよつと待って…：はい」スツ

ノーアはおにぎりを出した。

ルーミア「いただきますなのだー！」パクパク

そしてお礼として人里で顔が広い人を紹介してもらおう事になった。

ー回想終了ー

ノーア「ココは？」

ルーミア「寺子屋なのだー」

有太「へえ…」

学校も270年前のもののようなね。

ガラガラ

ルーミア「けーねせんせー！」タタツ

「ん？ルーミアじゃないか。どうしたんだ？」

中から青髪の女性が出てきた。

ルーミア「この人達に家を紹介してほしいのだー！」

ノーア「いやそうだけでも…」

有太「言い方ア」

慧音「そうか。私は寺子屋の先生をやっている上白沢慧音だ。君達は？」

アルミ「私はアルミ・マリオ。私達は幻想郷に引越してきたんだけど、家がないのよね…」

慧音「家…あるにはあるが…」

有太「何か曰くつきなのか？」

慧音「いや、妖怪の山に近くてな…」

妖怪の山。

天狗や河童達が住んでいる山と聞いてるわ。

アルミ「別に大丈夫よ。私達強いし」

慧音「い、いいのか？」

アルミ「ええ」

慧音「…分かった。着いてきたまえ」

スタスタ

ルーミア「(アルミ達は強い…) そうなのか」

ノーア「……?」

―数分後―

しばらく歩くと木製の家に着いた。

ルーミアとは途中で別れた。

慧音「ココだ」

ガチャッ

慧音が鍵を開ける。

アルミ「……あら」

結構広いわね。

掃除されてるみたいだし。

慧音「気に入ったのか?」

有太「ああ、気に入った。家賃いくらだ?」

慧音「……それが、ココに住もうとする人がいなかったから家賃は設定されなくてな」

ノーア「え、つまりタダ?」

慧音「そうなるな」

アルミ「……いや、払うわ」

ノーア「アルミ!?!」

スッ

異空間から金を出す。

アルミ「はい、1万円」

慧音「そ、そんな大金は…」

※幻想郷の1万円は外でいう100万円です。

アルミ「私にはそれほどの価値があるのよ」

しかも妖怪の山に近いっていうじゃない。

むしろ都合なのよね。

慧音「そ、そうか。それなら受け取る（人里の進展の為に使うとしよう）」

…うん、それがいいわ。（心読んだ）

バ鳥

sideアルミ・マリオ

金を払って慧音と別れた後、私達は早速家具を異空間から出し、整理した。

有太「姉さん、電気はどうすんだ？」

アルミ「強化型太陽電池もあったはずよ」

有太「ん、あった。付けてくるぜ」タタッ

…そういえば。

アルミ「慧音に『パラッチに気を付けろ』って言われたんだけど」

ノーア「何の事なのかしらね？」

アルミ「さあ？」

ま、気にしないけど。

ガチャッ

有太「つす、付けてきたぜ。…ただ」

アルミ「ただ？」

有太「何かあっちの方から誰かがこっち見てるんだが」

…フラグ回収速すぎない？

アルミ「ちよつと待つて」ガチャツ

あつち…あ、確かにいるわね。

アルミ「フレイムバレット」バアン

「あやつ!？」

黒い翼にその服は…：鳥天狗ね。

アルミ「アンタが慧音の言つてたパパラツチね？」

文「と、ととんでもない！私は『文々。新聞』を発行している射命丸文です！パパラツチなんかではありません！」

アルミ「ふーん。つまり新参の私達をインタビューしたいと」

文「はい！」

アルミ「んー…明日でいいかしら？」

文「明日、ですか？」

アルミ「ええ、ちよつと家具の整理とかしなきゃいけないし、インタビューだからすこし回答を考えなきゃだし」

文「なるほど…分かりました。それでは失礼します「後」…？」

アルミ「アンタ、『タマシイの波長』を合わせるのが上手いようだけど、上手すぎて気

持ち悪く思われるでしょ？」

文「…え、何故分かったんです!？」

アルミ「勘」

文「ええ…?」

アルミ「とりあえず、相手の波長に合わせるのはいいけど、少しズラした方が話しやすいわ。じゃ」ガチャツ

文「は、はい? 失礼します…?」

バサツ

ノア「アルミの勘、ヤバいわよね」

有太「ほぼ確定であってるしな」

アルミ「そう?…それは置いといて、家具整理を続けるわよ」

2人「はい」

↓数十分後↓

アルミ「ふう、終わった」

咲夜「あーうー」

アルミ「あら、どうしたの咲夜?」

咲夜「うあんえーい」

←ブウウウン…

…ん？

アルミ「…フア!？」

有太「さ、咲夜が…時間停止だど!？」

ノーア「流石に早すぎない!？」

有太「まだ半年だよな!？」

アルミ「え、ええ…」

咲夜「うー…」

アルミ「さ、再生は？」

咲夜「あいえい」

→ブウウウン…

…ええ？（困惑）

アルミ「やだこの子凄いわ〜」

ノーア「何その言い方」

咲夜「あ…ぐー」スヤスヤ

寝たわね。

アルミ「……てか、『あうあー』って感じとはいえ喋るのも早くない？」

有太「そうか？」

：いや、流石に気のせいだったわね。

半分の行方

side 八雲紫

シュツ

どうも、永遠の18歳のゆかりんよ♪

私は今、博麗大結界を維持する存在、博麗の巫女の素質がある子を外の世界で探しているわ。

紫「アルミのおかげで外の世界はだいぶ強くなってる…けど」

博麗の巫女の素質がある者は、生まれつき膨大な量の霊力を持っている事が前提。

紫「少し骨がおれそうね…」

「あゝ」

紫「…あら？」

路地裏で赤ちゃんが箱の中に入っていた。

黒髪…アルミに似てるわね。

『拾って下さい』

…捨て子のようね。

紫「助けてあげたい所だけど……!!」

この子から強い霊力を感じるわ……!

紫「…ふふっ」スツ

みつけ、ね♪

side????

父「今日は楽しかったな!」

「うん!」

母「春樹、今日の夕飯は何がいい?」

春樹「えつと…」

ハンバーグでもいいし、カレーも…

「うあ〜」

春樹「…?」

母「どうしたの?」

春樹「なんか、あつちから赤ちゃんの声が「わあ〜」…見てみるよ」スタスタ
ビルとビルの間を見てみたら、そこには箱に入った黒髪の赤ちゃんがいた。

春樹「お父さん、お母さん、コレ見て！」

父「どうした…!？」

母「もしかして…捨て子？」

「ああく…」

春樹「かわいそう…」

父「…春樹、お前は赤ちゃんを助けたいか？」

春樹「うん！」

父「なら、この子はお前の妹になる。兄として守る覚悟はあるか？」

春樹「…あるよ！」

父「よし！この子を拾うぞ！」

「わぁ♪」

母「でも、名前は？」

春樹「うーん…」

「きやは♪」

まるで花が咲いたような笑顔だった。

春樹「…思いついた！この子は…咲子！」

父「咲子？いい名前だな」

春樹「うん、君はコレから桜木咲子だよ！」

咲子「きやはっ♪わあ〜♪」

こうして僕、桜木春樹に妹、咲子ができた。

sideアルミ・マリオ

……ふふっ。

アルミ「どうやらどっちも拾われたようね」

それにしても、咲子と春樹って…

アルミ「この世界のあの子達という事ね」

ノーア「アルミく晩飯できた…何してるの？」

アルミ「いや、何でもないわ。私の半分が何処行ったか調べてただけよ」

ノーア「ふーん…まあいいわ。晩飯できたわよ」

アルミ「そう？じゃあ行くわ」スタスタ

文のインタビュアでの回答、考えておくべきね。

sideルメ・パンドラ

ルメ「アルミは今何してるのかしら？」

ザクロ「さあ？引越しはもう終わってんじやねーの？」

アルカ「てか、この部の主人公が登場する前に私達が登場するとはね」メタい！

(ダークアルカから改名した。日花の許可はもらってる)

月斗「そういえば、僕の姉が幻想郷にいるんだけど、元気にしてるかな…？」

ルメ「アンタの姉は………何でしょ？多分問題ないわよ」

月斗「まあ、だろうね」

バ鳥のインタビュ―

side アルミ・マリオ

いつも通り朝3時に起きる。

アルミ「ふい〜」

外の世界にいた時はココから音速ランニングをするんだけど、ココは幻想郷だから…
アルミ「本の執筆ね」ガタン

現在書き進めているのは『火の書Ⅲ』だ。火の魔法シリーズ3巻目で、コレを書いたら次は『水の書Ⅰ』かしらね？

アルミ「えつと、次の技はヘルフレイムね」スラスラ

―数時間後―

チュンチュン…

コレが朝チュンってヤツかしら？（違う）

ガチャツ

ノーア「おはよう、アルミ。やっぱり早起きなのね」

アルミ「おはよう、ノーア。早起きってレベルじゃないよ思うけどね」

ノーア「アンタ11時寝て3時起きてるんでしょ？睡眠不足にならないの？」

アルミ「自分の時間を2倍速してるから実質8時間睡眠よ」

ノーア「へえ…まあいいわ。朝飯の準備をしましょ」

アルミ「ええ…」

咲夜は…

咲夜「……………」スヤスヤ

まだ寝てるようね。

side 射命丸文

文「コレでよし！」カチッ

カメラの準備もできたし、アルミさんの取材に「待て射命丸」

「お前、こんな早くに何処行くつもりだ？」

文「とある人に取材を」

「はっ、どうせデタラメを記事に書くんだろ？やめとけやめとけ」

その言い方はイラつくわね…無視。

文「…行かせてもらいます、では」ガチャッ

バサツ：

アルミ「つし、準備完了」

後は松田家…来たわね。

(松田家↓待つだけ)

スタツ

文「こんにちは、文々。新聞の射命丸文です！」

アルミ「来たわね、入りなさい」

文「失礼します」

ガチャツ

文「結構広いですね…」

アルミ「空間を拡張してるからね」

文「なるほど…それでは、取材を始めます。まずは名前や種族などを」

アルミ「名前はアルミ・マリオ、ニンゲンの完成者よ。神力を持つてるから現人神かしら？…後年齢は68よ」

文「えっと、完成者とは？」

アルミ「特定の条件を満たし、ニンゲンとして最大限の力を引き出した状態よ。この状態だと寿命以外で死なず、外見も老けなくなるわ」

文「ふむふむ……スラスラ

メモをしつかり取る文。

文「次の質問です。幻想郷に来た目的は？」

アルミ「世代交代の為ね。私の弟子達で外の世界が守れるからよ」

文「なるほど……紫さんの話だと外の世界では英雄のそうですが」

アルミ「事実ね。何度も世界救ってるし。ニンゲンの中ではとあるヤツ（基山天助）以外だと最強じゃないかしら？」

文（力を過信しているのかしら？ どう見てもそうは見え「試してみる？」……？）

アルミ「その顔からして私はそれほど強くないと思ってるでしょ？ だから試してみる？」

文「……遠慮しま「その割には心の中でケンカ売ってるようね？」……は？」

アルミ「能力じゃないけど、私には人の心がある程度読めるのよ」

文「な……」

アルミ「私の力だったら多分全力のアンタにも勝てる。……こんな風にね？」

ドツ！

文「ツ……！（この威圧は……大天狗様以上……！）」

アルミ「へえ、大天狗でコレぐらいなの？じゃあ……コレは？」ギユン
ゴオオオオオ！

まるで霸王色の覇気のような威圧を出す。

文「」

アルミ「ふう……で、どう？」

文「ヒツ……」ガクガク

アルミ「はあ」

ポンツ

文の頭に手を置く。

アルミ「すまないわね、アンタの心読んで少しイラツときたのよ。……特にアンタの同僚にね」

文「……？」

提案と団子屋

side アルミ・マリオ

少し相手にイラついたら心を読む謎のクセ、治らないわね…それよりも。

アルミ「アンタ、新聞記者として頑張ってるようじゃない」

文「そ、そうですか…？」

アルミ「ええ、昨日ついでにアンタの新聞を読んでみたけど、ちゃんとアンタの努力は感じたわ…でも」

文「でも？」

アルミ「アンタの新聞の欠点は、自分主観で書いてること。三人称視点で書かないと、アンタの意見も混ざって新聞どころじゃなくなるわよ？」

文「そうですよね…」 しゅん

アルミ「まあ、落ち込まなくてもいいわよ。アンタは頑張ってるんだし、同僚にバカにされてもめげない根性はある。だから、素晴らしい提案があるわ」

(何処の上弦の参だ)

文「…聞かせてください」

アルミ「えっと…あった。コレ、読んでみて」スツ
外の世界の新聞を出す。

文「コレは？」

アルミ「私が初めて活躍した時の新聞よ」

『英雄の娘現る！アルミ・マリオが事件解決！』

文「…自慢ですか？」じつ

アルミ「違う違う。新聞の書き方を見なさい」

まあ、この新聞を取っておいたのは自慢の為なのは否定しないけど。

…45年以上前の新聞ね。

文「なるほど…自分の意見を混ぜずに書いてます」

アルミ「そゆこと。だから、アンタがこんな感じで書ければ…だいぶ売れる新聞がで
きると思うわよ？後、波長のヤツもね」

文「…アルミさん」

アルミ「ん？」

文「ご提案ありがとうございます。しっかり改善させていただきます！」

アルミ「ええ、それがいいわ。…つと、取材の続きをしましょ」

文「はい！次の質問は…」

その後数十分取材は続いた。(長すぎないか!?)

文「今日は本当にありがとうございます、それでは！」

アルミ「ええ、いい記事を期待してるわ」

ガチャツ

∴そろそろ昼頃ね。

アルミ「人里の店で食べるのも悪くなさそうね」

ノーマと有太は「畜生界」に行ってるみたいだし。

(え、もう鬼形獣!?)

アルミ「咲夜、食べに行くわよ」

咲夜「あゝ」

だっこ、つと。

ガチャツ

ー人里ー

アルミ「結構賑わってるようね」

咲夜「うあゝ」

アルミ「とりあえず…あつちの団子屋で食べましょつか」
スタスタ

「ご注文は？」

アルミ「えっと、きなこ餡蜜10本で」

「かしこまりました…(10本!?)」

何か驚かれてるみたいだけど、まあいいわ。

アルミ「で、アンタは何の用？」

店に入ってから見てきてるようだけど。

「貴方が、外の世界の警察かしら？」

アルミ「ん、アンタは？」

小兎姫「私は小兎姫(ことひめ)、幻想郷の警察よ」

警察…？

アルミ「その着物で？」

小兎姫「ええ」

アルミ「ハア…？」(。D。)ハア

博麗の巫女（赤ちゃん）

side アルミ・マリオ

アルミ「…といつても、私はこの服で特別捜査官やってたし人のこと言えないわね」

小兎姫「特別捜査官？」

アルミ「外の世界の警察で3番目に偉い役職よ。といつても、私自身が実質トップだったんだけどね」

下つ端警察官を鍛えたのも私だし、事件の情報を集めたのも私。
今思うとやりすぎね。

「きなこ餡蜜10本です」コトン

アルミ「どうも」

「ごゆつくり」

小兎姫「貴女、おやつでそんなに食べるの？」

アルミ「コレ昼飯だけど？」

小兎姫「…昼食に団子？」

アルミ「ええ」

咲夜「あゝ」

アルミ「咲夜は…はい」スツ

哺乳瓶を渡す。

咲夜「んぐ、んぐつ」ぐくぐく

小兎姫「その子何歳？」

アルミ「6か月」

小兎姫「…成長速くない？」

アルミ「私もそう思ってるわ。多分能力の影響なのよね…」パクツ

…この団子、美味いわね。

アルミ「後でもう10本頼もうかしら？」

小兎姫「流石にそれはダメでしょ」

そりやそうね。

団子を食べ終わった後小兎姫と別れ、一旦家に戻ってきた。

有太「ん、おかえり」

アルミ「もう帰ってきてたのね。ノーアは？」

有太「まだあっちにいるぞ」

アルミ「そう…咲夜はアンタに預けるわ。博麗神社へ行ってくる」

有太「なんでだ？」

アルミ「ヒマつぶしで紫に凸してくる」

有太「えつと、ほどほどにな？」

アルミ「ええ、行ってきます」ガチャツ

有太「まだココに2日目だからな、事件を起こさなきゃいいが…」

※アルミはむしろ解決する側なのでそれは多分ない。

―博麗神社―

シュツ

アルミ「おーい、ゆかりくん」

紫「はいはい、なにかしら？」

アルミ「遊びに来たわ☆」

紫「ゴメン、今無理」

あら、キツパリ断られたわね。

アルミ「なんで？」

紫「それが「うわあああん！」ちよ、待っててね霊夢〜！」

アルミ「霊夢？」

走っていく紫を追いかけて部屋に入る。

紫「よしよしよし」 ナデナデ

「あ〜う」

…へえ、なるほど。昨日の夜みた片方がこの子ってワケね。

アルミ「その子が霊夢？」

紫「ええ、博麗の巫女に育ててるつもりよ。だから名前は博麗霊夢ね」

アルミ「ふーん…」

いつ気付いてくれるかしら？ 楽しみね。

紫「…この子、アルミに似てるわよね」

アルミ「そうね」

紫「貴女の親戚、なんてオチはない？」

アルミ「ない。私の孫はちゃんと息子（アルヤ）が育ててるし」
娘（マリリン）の方もね。

霊夢「……………」じー

アルミ「ど、どうしたの？」

霊夢にじよっと見られてるんだけど。

紫「…頭を撫でてほしいみたいよ？」

アルミ「そう？」 ナデナデ

霊夢「わあく♪」

…足し蟹。

（確かに）

アルミ「…アンタは忙しいようだし、私は別の所に行くわ」

紫「ええ…」

アルミ「じゃあね」 スタスタ

幻想郷を飛び回るのもよさそうね。

太陽の畑とゆうかりん

sideアルミ・マリオ

スウーツ

幻想郷の空を飛ぶ。

アルミ「…そういえば」

幽霊系の技も作らなきやいけなかつたわね。

まあ、書くのは

火の書↓水の書↓風の書↓雷の書↓土の書↓タマシイの書↓幽霊の書
つていう順番だけど。

アルミ「元になる技は…」

ポケモンのシャドーボールかアストラルビットね。

アルミ「アストラルビットで行こう」スッ

ギョーン…

霊力の玉を複数出す。

アルミ「…ハアッ！」ドッ

シユバババツ…ドゴオ!

アルミ「おつ、一発で出来たわね」

よっしや(笑)

アルミはアストラルビットを覚えた!

アルミ「さて、技もできたし進もうかしら」

ビューン

―数分後―

アルミ「綺麗ね…」

そこには大量のひまわりが咲いた畑があった。

スタツ

アルミ「おお…」

私より背が高いわね。

(アルミの身長は169センチ。結構背が高い方)

それにしても、ひまわりがこつちを見ているようね…

「ニンゲンがこんな所に何の用かしら?」

アルミ「ん?」クルツ

緑髪の女性が日傘を差してそこに立っていた。

この畑の主かしら？

アルミ「勝手に入って悪かったわ、綺麗に咲いてて見とれてたの」

「そう。…見ない服ね、外来人かしら？」

アルミ「そうよ。最近引っ越してきたの。アルミ・マリオよ、よろしく」

幽香「アルミ、ね。私は風見幽香。…ところで、貴女は強いのかしら？」ギユン

…へえ？

アルミ「ええ。手合わせするのかしら？」ギユン

威圧を威圧で返す。

幽香「ふふっ…かかってきなさい」フワッ

…よし。

アルミ「久々に使うわね…新式弾幕戦！」

…キイン！

アルミ vs 幽香

アルミ「先手必勝！フレイムバレット！」シユバッ！

幽香「フン」スッ

キーン!

火の弾幕は傘で防がれた。

幽香「私の番ね：マスタースパーク」

アルミ「神ゴツドハンドX!」ガシッ!

シユウウウ:

幽香「へえ、防ぐとはね」

アルミ「炎天：桜舞!」B L O O M!

幽香「花：?」

シユバツ!

幽香「グツ：今の何の花かしら?」

アルミ「火桜っていう花よ。今度枝を持ってきてあげるわ」

幽香「ふふっ、それは楽しみね：」ギユン

シユルル：!!

幽香「狂花雪月!」

(オリジナル技)

シャッ!

アルミ「ッ、アストラルビット!」ギユン

シユバババツ!

幽香「相殺するとはね」

アルミ「危なかつたわ…」

幽香「…アルミ」

アルミ「何?…ツ」サツ

幽香「そろそろ…拳でやりあわない?」

アルミ「…ふふっ、いいわよ」スツ

構えをとる。

幽香「フンツ!」

アルミ「炎天掌!」ズガアン!

私と幽香の手合わせは、その後もしばらく続くのだった。

ノーアとぢごく

sideノーア・ピース

ノーア「おお…」

ココが三途の川ね…

「おや、こんな所に生きてるニンゲンかい？」

ノーア「あら、死神？」

小町「そうさ。私は小野塚小町、死者を向こうまで送る死神をやってる。アンタは誰だい？そして何故ココに？」

ノーア「ちよつと畜生界に用があつてね」

小町「そうかい…つてええ!?!畜生界!?!」

ノーア「ええ」

小町「死神としてソレは許容できないねえ」スツ

…へえ？

ノーア「『鎌』を『構』えてきたわね（笑）」

ヒユウウウ…

小町「」パキーン
よし。

ノーア「渡つていく」スタスタ
パキパキ

小町（ダジャレで凍らされたんだけど!?物理的に!四季様助けて〜!）
―彼岸―

ノーア「畜生界は確か：「誰ですか、貴女は？」…ん？」
緑髪の少女がそこにいた。

服からして閻魔様かしら?

ノーア「ノーア・ピース。畜生界に用があるニンゲンよ」

「ニンゲンがココに立ち寄つてはいけません。帰つて下さい」

ノーア「それはできない話ね」

「そうですか。ならば力づくで「はいストップ!待つて映姫!」アオイ?」

ノーア「アオイ!」

アルミの妹、アオイがそこにいた。

アオイ「久しぶりです、ノーアさん。姉さんに勧められて閻魔になりました」

ノーア「ええ…?」

最後会ったのが半年以上前だから……その間に？

アオイ「それで、畜生界へ行きたいようですね？」

ノーア「ええ」

映姫「ちよつと待ちなさいアオイ。貴女は彼女を許可するつもりですか？」

アオイ「そうよ。なんせダメな理由がないもの。……それで、何故畜生界に？」

ノーア「畜生界の3大勢力の偵察よ」

アオイ「頸牙組、鬼傑組、強欲同盟の偵察ですか……」

☆説明しよう！

畜生界では、3つのヤクザの組が3大勢力となっており、畜生界を牛耳っているので

ある！

3つとも動物霊の組で、畜生界ではニンゲン霊は弱いとされている！

アオイ「……いいですよ、許可します」

ノーア「ありがと「ただし！」……ん？」

アオイ「この人、いや神に勝つてからです！」

「コケー！」バサッ

スタッ

親方、空から女の子が！というセリフが脳内を横切る。

(んなもんでもいいわ!)

金髪で前髪が赤、頭にはヒヨコが乗ってるわね。

つまり…

ノーア「ニワトリ神？」

「ニワタリ神です！」

アオイ「彼女、庭渡久侘歌に勝ったら許可します！」

ノーア「ふーん…」

久侘歌「私はこう見えて強いですよ！」

ノーア「そう…軽くひねってやるわ！」ザツ

—————

アルミ「はあ、はあ…」

幽香「グツ、私の負けね…」

アルミ「いやー、久々に強いヤツと戦ったわ」

幽香「次は勝つ」

アルミ「…ふっ、受けて立つわ」

にわとり食ったか？

sideノア・ピース

ノア「軽くひねってやるわ！」ザッ

アオイ「じゃあ…始め！」

久侘歌「水配りの試験」バツ

水の弾幕ね…

ノア「エターナルブリザード！」パキッ！

ほぼ同時に氷の弾幕を放つ。

ピシヤア！

こつちに飛んでくる弾幕はその影響で瞬時に凍りつく。

久侘歌「えっ!?!」

ノア「氷華乱舞！」FREEZE！

久侘歌「ッ、負けませんよ！鬼渡の上級試煉」ドッ！

シユウウウ…

ノア「へえ…」

相殺するとは。

ノーマ「準備運動はココまでね」

久侘歌「じゅ、準備運動!？」

ノーマ「何よ、コレ本気だと思っただの？」

久侘歌（本気じゃなかったんですか!?!）

ノーマ「まあいいわ。時間凍結！」パキッ

←ブウウウン…

時間は私以外凍結した。

ノーマ「さて…」スッ

ビュウウン!

ノーマ「準備完了。再生！」

→ブウウウン…

久侘歌「…きやつ!？」

映姫「突風…?」

アオイ「ああ、なるほど…」

映姫「アオイ、どういう事ですか？」

アオイ「ノーマさんは恐らく時を凍らせたんだよ」

映姫「能力によるものですか…それでその間に突風を起こしたと」

アオイ「多分そゆこと」

久侘歌「相手がこんなに強いなんて、聞いてませんよっ！」

ノーア「ぶっ飛びなさい！ヘイルストーム！」パキツ

ビュウウン！

久侘歌「うわああああああああああアアアア…」キラッ

ノーア「おお、だいぶ飛んだわね」

アオイ「勝者、ノーア・ピース！」

映姫（久侘歌があれほどあっさりと…）（。D。）

ノーア「っし、じゃあ行けるわよね？」

アオイ「オーケーです！」

映姫「あの…」

ノーア「ん？」

映姫「貴女は見た所『白』のようですが、くれぐれも『黒』にならないようにしてくださいね」

ノーア「白？黒？」

アオイ「映姫の能力『白黒はつきりさせる程度の能力』で、有罪か無罪か判断できる

んですよ」

ノーア「ああ、そゆことね」

映姫「畜生界の入り口はあちらです」

ノーア「分かったわ、じゃあね」

2人『お気を付けて』

そして私は畜生界に入っていた。

side アルミ・マリオ

「シャンハゥイ」

「ホウラゥイ」

アルミ「可愛いわね」

「ありがとう」

私は偶々遭遇した人形使い、アリス・マーガトロイドと話していた。

―回想―

幽香と別れた後、私は近くの森に入っていた。

アルミ「キノコ臭いわね、ココ…」ザッ

宙に舞ってるこの胞子、普通のニンゲンじゃ吸ったら体調崩すわね。

「シヤンハ〜イ」

人形？宙に浮いてるわね…

「…あら？」

ー回想終了ー

アルミ「それにしても、私と別ベクトルで凄い精密動作性ね」

アリス「そうでないとこの子達を動かせないの」

アルミ「まあ確かに」

人形使いと妖精

sideアルミ・マリオ

アルミ「ところで、アンタは完全自立人形を作りたいてね？」

アルス「ええ」

アルミ「それって、タマシイ入ってないと100%無理ね」

アルス「そうなのよね…人工的にタマシイを作るのは不可能だし、器は出来てもタマシイがね…」

アルミ「タマシイは大丈夫よ」

アルス「えっ!?!」

アルミ「だから、アンタの夢である完全自立人形は可能よ。ただ…タマシイが収まることができるちゃんとした器を作らなきゃね」

アルス「ホ、ホントなの？」

アルミ「ええ。私の妹はタマシイを何十個も持つてる所屬だから、1個ぶち込んでもらえばいいわ」

アルス「…魂集族？」

アルミ「あら、知ってるの？」

アリス「聞いたことがあるの」

魂集族つて言葉は幻想入りしてないハズだから…恐らく外の世界で聞いたのね。

アルミ「ふーん。じゃ、私はそろそろ帰るわ。人形ができたら言っつてね」

アリス「分かったわ。またね」

フワツ…

―数分後―

ガチャッ

アルミ「ただいま」

有太「おう、お帰り」

アルミ「何か疲れたわ…」

ココでの生活、とつとと慣れないとね…

咲夜「わあ〜」

アルミの幻想入り 完

次章予告

”パンドラの箱”

700年に一度の大厄災、『ウヨキイワイカ』。

その発生と同時に、空には大量の巨大クラゲが！

日花「この厄災を終わらせた選ばれし者は、特別な力を得られるというわ」

メイ「……！」

そして、月斗の秘密が……！

月斗「僕、実はニンゲンじゃないんだ……」

日花「いや、メイ達は果たして厄災を終わらせられるのか!？」

何故三途の川に着く前にノーアは有太と別れたかということ。

三途の川に向かう途中……

有太「……ん？何だアレ？」

「んぎぎ、取れない〜！」

ノーア「……妖精？」

青い妖精がもがいていた。

有太「木の枝に羽が絡まってるな。助けるぞ」バツ

妖精に駆け寄る。

有太「おい、その妖精」

「え？」

有太「助けるから、動くなよ」

「…うん」

有太「フレイムバレット！」ドッ

パキッ！

枝を火の銃弾で折る。

「あ、出れた！」

ノーア「良かったわね」

チルノ「あたいはチルノ！お前は？」

有太「火野有太だ」

チルノ「じゃあ有太、あたいを助けたお礼として部下にしてやる！」

有太「はあ？」

チルノ「ついてこい！」

ノーア「（巻き込まれたら面倒くさそうね）…あー、畜生界は1人で行ってくるわ」

有太「おい!？」

ビュウウン!

チルノ「鬼ごっこするよ!」

有太「お、おう…」

「チルノちゃん、何してるの?」

チルノ「あ、大ちゃん!」

緑の妖精が出てきた。

有太「俺は火野有太。お前は?」

大妖精「チルノちゃんの友達の大妖精です」

チルノ「有太はあたいの部下になったの!」

大妖精「えっ、そうなんですか!?!」

有太「んなワケねえだろ!?!」

そして有太はすばらく2人と遊ぶことになったのである。

第2章 ” パンドラの箱 ” 大厄災、ウヨキイワイカ

side 坂田日花

私はパンドラの図書館にいる。

日花「コレ…もうすぐ起きるようね…」

『ウヨキイワイカ』

700年に一度の大厄災。

日花「確か、4月27日よね？」

(427↓死にな)

…うん、あつてるわ。

日花「今日は4月20日だから…後一週間か」

この図書館の書物は事実しかないから、信憑性はある。

日花「みんなに相談ね」

そして私は図書館を去った。

ーパークーズ基地ー

日花「ただいま」

甲「家じゃないけどな」

平尾「ソレ、突つ込まなくてもいいんじゃない：？」

ツツコミをさらにツツコむ平尾。

ココまでがお約束ね。

アルヤ「それで、図書館で”例のヤツ”についての新情報はあったか？」

例のヤツとは、ウヨキイワイカの事である。

日花「あつたわ：過去のウヨキイワイカについての出来事が」

フラン「マジか!？」

日花「年歴0年：最初のウヨキイワイカが終わった後、最初の完成者『完成創太』が完成した」

メイ「完成？元からの苗字ですか？」

日花「いや、完成してからその苗字にしたそうよ。：700年に起きた2度目のウヨキイワイカが終わると、魔界ができた」

平次「魔界が、できた？どういう事です？」

日花「終わった直後に、力を得た者が魔界を創ったのよ」

平次「なるほど…」

日花「1400年に起きた3度目のウヨキイワイカの後、初めてパンドラの裁判官が任命された」

アルヤ「つまり、ウヨキイワイカが終わる度に、歴史に残るような出来事が発生してると」

日花「そうなるわね。…でも、ウヨキイワイカは毎度甚大な被害を出してるわ」

マリリン「そうなのね…」

絵奈「準備は着々と進んでるよ」

日花「それは良かったわ」

コンコン

…客？

日花「はい」

ガチャツ

月斗「やあ」

日花「月斗さん？」

月斗「君達の話に参加したいんだけど…いいかな？」

日花「？」

月斗「それについて意見があるんだ」

日花「はい…」

そして月斗さんは席に座った。

月斗「突然の話で悪いんだけど…」

実は僕、ニンゲンじゃないんだ
全員『!?!』

衝撃の事実には、私達は驚愕した。

月斗「アルミヤルメ達にはもう言ってるんだけどね。敢えて君達にはまだ言わなかったのさ」

平尾「：確かに、アルミさんと同じぐらい生きてるハズなのに老けてない」

月斗「それで、僕の本来の種族は：月人だよ」

甲「月人：月の人？つまりニャン国出身ですか？」

月斗「いや、違うよ。僕は月の裏側にある『月の都』って所から来たんだ」

甲「は、はあ：」

月斗「そして、僕のフルネームは八意月斗。八つの意と書いてやごころと読む」

フラン「へえ：」

月斗「最後に、僕がココに来た本来の理由は：僕が実際にウヨキイワイカを経験したことがあるからなんだ」

：ええ？

全員『ええええええええ!!』

絵奈「つ、つまり700年は生きてるってことですか?!!」

月斗「実際には億越えかな?」

アルヤ「フア!!?」

絶対神かなんかでしょ：」

月斗「そうだよ、よく分かったね？」
日花「デスヨネー」

ウヨキイワイカの内容と予感

side 坂田日花

月斗さんが年齢億越えの神である事に驚いた私達。

日花「…ゴホン。で、ウヨキイワイカではどんな事が起きるんですか？」

月斗「うーん、カンタンに言えば…“クラゲ”、“イワシ”、“マグロ”、“ヤツメ”、“ウミガメ”かな？」

甲「…は？」

月斗「僕が今言った動物達の究極形態が襲撃してくるんだよ」

平尾「ど、どんな感じで究極形態なんですか？」

月斗「例えば…クラゲはニンゲンサイズで、触手に捕まされると頭蓋骨を溶かして脳みそを食べつくし増殖する」

マリン「うわ…」

月斗「しかも、その間は天界や魔界、きさらぎ駅などの別次元に逃げ込む事はできないんだ」

フラン「なっ!？」

日花「…住民の避難は速攻でしなきゃね」

アルヤ「だな…」

月斗「ん、住民は天界や魔界に避難させるつもりなのかい？」

日花「はい…その間に私達で厄災を終わらせるつもりでした」

月斗「それはいい考えだね、何故当時の僕は思いつかなかったんだろ…まあいいや。

最後に言っておくと…このメンバーにネロイズム君を入れても、厄災を終わらせられる確率は約6割だね」

全員『6割!?!』

月斗「…まあ、それは君がいなかったらの話だけど」スツ

月斗さんが指したのは…

メイ「…私、ですか？」

メイだった。

平次「何故メイですか？」

月斗「いやね…彼女、神力が使えるでしょ？しかも前世の兄の転生はネロイズム。そ

してその見た目だ」

……！

日花「まさか…」

月斗「おつ、パンドラの図書館で本を読み漁ってた日花なら分かったようだね」

日花「…オキセイギ、ですか？」

月斗「その通り♪」ニコッ

平尾「日花、オキセイギってなんだい？」

日花「確か文献によると…」

ネロイズム・オキセイギ

悪魔と天使。2人は兄妹であり、共に世界を守りし者である。

青と桃。紫と橙。髪と服の対比である。

4度目の大厄災が発生した時、2人が解決の鍵を握るだろう。

フラン「4度目の大厄災って、完全に今回のじゃねーか！」

絵奈「忘れてたの〜!？」

日花「ネロイズムに文献を見せた上で、頭の片隅に置いていたんだけど…流石に忘れないわよ」

メイ「桃、橙…私の髪色と服の色ですね」

月斗「そしてネロイズムはもういる。つまりオキセイギは、君である確率が高いんだ。…ただ、文献に開放条件は記されていない。その部分は完全に運任せなんだ…」

日花「それはヤバいですね…」

月斗「とりあえず僕は手を貸すつもりだよ。…アルミめ、コレを知つてて世界を去るとは」

…急？

日花「アルミさんがいたら、終わらせられるんですか？」

月斗「そうだよ、しかもカンタンに」

日花「はあ!？」

月斗「ホント、会ってからずっとアルミに振り回されてるよ…神扱いが荒いものだ」

平尾「あはは…」苦笑

準備、そして厄災

side 坂田日花

ネロイズム「なるほどね…」

ネロイズムを呼び出し、内容を教えた。

ネロイズム「僕が他の悪魔達と比べて少し特殊だとは知っていたけど…流石に大厄災を終わらせる鍵になるとは思わなかったよ」

日花「そりゃあね…」

平尾「日花、未例達は誰に預けるんだい？」

日花「桃…って言いたい所だけど、戦闘員として残るらしいから多分カービィさんね」
リストに載ってなくて、仲がいい人はカービィさんぐらいしかいないからね。

『戦闘員リスト』

地球に残り、戦闘を行う代表者達のリストである。

・パーカーズ

坂田日花

坂田平尾

志免甲

アルヤ・マリオ

マリン・ユメミル

フラン・ユメミル

・パーカーズ第2部隊

メイ・マリオ

坂田絵奈

坂田平次

姪浜桃

ネロイズム

八意月斗

・ソジック国戦闘員

フリスク・ユメミル

キャラ・ドリーマー

ベティ・ユメミル

W・D・サンズ

W・D・サンズJr.

W・D・ルマ

・キノコ国戦闘員

ルメ・パンドラ

アルカ・マリオ

ザクロ・ビースト

赤坂留美

グレイ

・マイン国戦闘員

ケーティ・マリオ

ステイプ

セイダン

スカーフ

ボンゾー

秦こころ

レイン・マリオ

総員 30名

甲「結構いるんだな」

日花「戦力が足りるかは厄災の時まで分からないけどね…」

そして、1週間が過ぎていく。

ー1週間後ー

ゴオオオオ…

アルヤ「うおつ、もう来たか…」

ピキッ

空が割れ、そこから…

「チヨロロ…」

ニンゲンサイズのクラゲが大量に現れた。

カチッ

トランシーバーの電源をつける。

日花「厄災始動！総員、戦闘を開始せよ！」ジジッ

…よし。

日花「行くわよ、みんな……！」

全員『おお！』

ドツ……！

その頃、幻想郷では。

アルミ「始まったようね……」

有太「そうだな……」

幻想郷は博麗大結界で外の世界と隔てられているため、厄災の被害はない。

咲夜「お母さん！」

アルミ「どうしたの、咲夜？」

咲夜「才能があるって、師匠に褒められた！」

アルミ「リビットから？それはよかったわね♪」 ナゲナゲ

咲夜「えへへく」

十六夜咲夜は祖母白夜のように、リビットに弟子入りし力をつけている。

アルミ「貴女なら……厄災を解決できるでしょ？日花」

アルミは空を見上げながらそう言った。

日花「……？」

アルミさんの、声……？

クラゲ

♪????
| (クラゲ)

side 坂田日花

「チョロロ……」

日花 「距離を取って攻撃しなさい！近接戦闘は命取りよ！」

甲 「了解……ストーンスパイク！」ドスツ

「チュツ!?!」

「チョロロ……!」ピュツ

平尾 「酸だ！避ける！」

甲 「つ、危ねっ!?!」サツ

ピチャツ

酸は甲に当たらず地面に命中した。

ジュウウウ……

日花 「……!」

地面は一瞬でドロツドロに溶けていた。

相当強力な酸ね…

アルヤ「飛斬舞！」 シュバツ！

シャツ！

「チャツ…」

「チヨロロ…い」 ニュツ

マリ「ッ、フラン後ろ！」

フラン「いつの間に!？」 サツ

クラゲは触手を伸ばし、フランを掴もうとする。

フラン「させねえよ！ケツイサンダー！」 バチツ！

シュウウウ…

「チヨロロ…い」

フラン「効いてねえ!？」

マリ「どうみても水属性なのに…!？」

日花「つまり土属性なのね…「なら!」…お?」

マリ「ハイドロポンプ！」 ザパン!

「チヨツ!？」

「こうかはバツグンだ！」

…という文字が、脳内に浮かぶ。

日花「炎天桜舞！」 B L O O M !

ズドツ！

「チヨロ…」フツ

アルヤ「フランはタマシイの魔法で攻撃しろ！」

フラン「あ、ああ…！」

sideメイ・マリオ

メイ「斬ツ！」ズバツ

「チヨロ!?!」フツ

メイ「斬撃に弱いようですね…！」

月斗「見た目に惑わされなくて、油断するのと同じだよ」

平次「さつきコイツらは恐らく土属性だと日花さんから連絡がありました」

桃「え、じゃあ私は属性攻撃できないじゃん！」

ネロイズム「タマシイの魔法があるじゃないのかい？」

桃「あ、そうだった」

絵奈「ザ・ワールド・ドローペイン！（遠距離バージョン）バシユツ！

「チヨロロ：オ！」ヌルン

絵奈「うわっ!?!」ピキッ

絵奈は結界を張る。しかし…

スルッ

絵奈「通り抜けた!?!ッ…！」

ネロイズム「ハッ！」ドスッ！

「チヨロオ!?!」フッ

カチッ

ネロイズム「報告だ！クラゲは斬撃に弱く、コイツらに結界は通用しない！防御はせず距離をとるんだ！」ジジッ

お兄ちゃんは速攻でクラゲを倒し、連絡した。

ネロイズム「危なかったね」

絵奈「うん、ありがとう…」

side
フリスク・ユメミル

もう僕の世代は終わったけど……

フリスク「世界を守るために頑張らなきゃね！」 スツ
ギユン！

フリスク「ケツイナイフ！」 シャツ！

ドスツ

「チョッ……」 フツ

サンズ「へへっ、おいら達も協力するぜ」

サンズJr.「うーん……ハッ！」

ルマ「ハアッ！」

ギユイイン！

ベティ「もう習得したのね……」

3人『ガスターブラスター！』

ドガアアン！

複数『チョロロ……』 フツ

サンズ達が一気に何体か蹴散らしたけど、まだまだいっぱいいる。

サンズ「やれやれ、久々に骨が折れそうだな」

フリスク「だね……！」

余裕、なのか？

♪????
| (クラゲ)

sideルメ・パンドラ

ルメ「留美、ザクロ！時間稼ぎをお願い！」ギョルルル！

2人『了解！』ドツ

「チヨロロ……！」ニユル

留美「風斬・鎌鼬！」スパアン！

ザクロ「バレットストーム！」ドドドツ！

「チ

「チヨロオ！」

『チヨオ……！』

ニユルニユル！

ザクロ「一斉攻撃か！」

アルカ「私に任せなさい！」ギユン

ゴオオオオオ！

アルカ「ビックバン・ヘルフレイム！」バゴオン！
ドゴオ！

「チヨロツ!？」

「チヨロオ……」フツ

…一気に蹴散らしたわ、流石ね。

ルメ「チャージ完了！」ギユン！

ギユオオオオ！

ルメ「必殺…陽風陰風！」ビュウウン！

ギユルルル…ツ！

『チユロス……』

(鳴き声おかしいだろ！)

私も一気に蹴散らした。

ルメ「ふう……」

グレイ「主、休憩はできないようだよ」

「チヨロロオ……!」

ルメ「そのようね……!」

ドツ！

side ケーティ・マリオ

ケーティ「超強力な酸、ねえ…」

セイダン「俺達魔族にも多少は効くだろうな」

ケーティ「そうね、でも…魔術の媒体としては良さそうじゃない？」

セイダン「…そうだな」

ケーティ「そのために瓶も大量に持ってきたのよ」

レイン「あの一！」ギユン

2人『?』

レイン「喋るヒマがあるなら戦ってくれませんかあゝ!?」ドガアアン!

「チヨツ…」フツ

ケーティ「いやいや、してるわよ？」ズバツ

(ヴァルキリー装備)

セイダン「サボるのは命取りになるのでな」ピユン

(光線で撃ち抜いた)

レイン「あ、ホントだ」

「……」スパンツ

…？

ケーティ「どうしたの、こころ？」

こころ「大した事ではない。ケーティが私ではなくセイダンと雑談している事に嫉妬しているだけだ…」スパツ

2人『はあ？』

何言っちゃってんのこの子？

ケーティ「ちよつと魔法関連の話をしただけよ」

こころ「分かった」ズバツ

…まだイライラしてるようね。

ケーティ「…はあ、分かったわ。コレ終わったら一緒に出掛けるから」

こころ「…フツ」ニコツ

よし。

ステイブ（相変わらねえ…）ブヒー

「チヨロロ…!?!（何故だ!?!コイツら平然と雑談しながら我々を討伐している!）」

※最初の厄災、クラゲは弱い。

ザパン：

空を見ていると

宙に浮く何かを見つけた。

よく見てみるとそれは：

巨大なクラゲだった。

サイズは人の大きさほど

電柱よりも高く飛んでいる。

ー中略ー

頭を掴んでくっついて、

頭蓋骨を溶かしていくんだ。

脳みそを食べつくして、

増殖していくんだ。

獲物を探し近づいて、

足で掴んで持ち上げる：

高いところから落とし、

生きたまま食べてくの。

巨大クラゲ

♪MULAストーリー—ウヨキイワイカ

side 八意月斗

今の所、700年前のウヨキイワイカと同じような事が起きている。

月斗「相違点はないね…」パチン

ギョーン!

月斗「ムーンフォース!」ドゴォ!

僕は神力を纏ってるから、コイツらに接触攻撃ができる。

「チヨロロ…」フツ

ネロイズム「月斗!このクラゲ達は何体ほどいるんだ!?!」

月斗「決まった数はいない…でも、そろそろ”親分”が現れるハズだよ」

メイ「親分?」

桃「そんなのがいるの!?!」

月斗「まあ、ねッ!」バゴッ

「チュオ…」フツ

絵奈「ザ・ワールド・ドローペイン！」バシユツ

「チャア…」フツ

………！

月斗「強い気配を感じる！」

ネロイズム「僕もだ…」

メイ「私もです…！」

平次「一体何が…!？」

ゴオオオオ…！

「グオオオオオ…！」

空から、超巨大なクラゲが現れた。

月斗「今すぐ連絡を…」

カチツ

月斗「全員に応援要請をする！頭上に巨大なクラゲ、親分が現れた！コイツを倒せば第1形態は突破できる！余裕のある者はすぐに来てくれ！」ジジツ

よし…！

♪MULAストーリー―万年桜花炎

月斗「もう1回、勝負だ…クラゲ」スツ

能力、発動。

ズシッ！

メイ「コレは……！」

月斗「僕の能力……『引力を操る程度の能力』さ。まずは……」ザッ
ダッ！

「ヂョロロ……！」

月斗「コイツを地面に突き落とす！」サッ

シユルル……

月斗「ハアッ！ムーンドロップ！」ゴッ

バゴォ！

「ヂッ……!?!」

神力と能力を纏った強力なかかと落としを食らわせる。

そして……

ズンッ！

「ロオ……！」ヒユルル

巨大クラゲは浮遊能力を失い……

ズドッ！

地面に突き落とされた。

ネロイズム「地面に落とされた理由をきいていいかい？」

月斗「酸の雨をくらいたくないだろう？そういう事だよ」

ネロイズム「…なるほどね」

タタツ

日花「加勢に来ました…って、何ですかコイツ!？」

「ヂッ、ロオ…!」ギユン

…!

月斗「話は後だ!」ダッ

日花「…ッ!」ダッ

「ロオオオ!」ドッ

ザパン!

巨大クラグは酸のハイドロポンプを放ってきた。

アレをくらったら即死だね…

アルヤ「うおっ…地面に深い穴ができてやがる…」

フラン「怖え…」

月斗「コイツは予備動作が必要なかわりに尋常じゃない攻撃範囲があるんだ、気を付

けてくれ……！」

日花「…了解。ビックバン・ヘルフレイム！」ギョーン！

ゴオオオオオ！

「ヂュロ！」ブンツッ！

ギギギ……！

日花「触手で防御!?…させないわ！」ダッ

シュッ！

月斗「ツッ！接触攻撃はダメだ！」

日花「魔力を纏えば問題ないですよ！炎天掌・魔！」ズガアン！

「ゴツ!?!」

月斗「…へえ、心配はいらなかったみたいだ」

このまま、倒せば第1形態クリアだ。

クラゲの終了と花

♪MULAストーリー——万年桜花炎

side 坂田日花

日花「サンセット・グロウ！」キラアン！

「ゴオオ……い！」ギユイイン

またチャージがくる……！

「ロオオ！」ザパアン！

ネロイズム「任せて……リバース！」ギユン

……ドパア！

酸が飛んで行く方向は逆になり、巨大クラゲにかかった。

ジュウウウ……

「ギャアアアアアアア!?」

味方『ツツ!?!』キイイン

何、この音量!?

フラン「み、耳がア……!」

甲「うるせええ……！」

メイ「くう……斬ッ！」ズバッ！

……シイン！

メイ「ハア、ハア……」

日花「何、したの……？」

メイ「音を斬ったんですよ」

平尾「ええ……？」

月斗「コレでクラゲの発狂を聞かずに倒せるね……ハッ！」ギユン

日花（私も行くわ！）ドッ

ギョルルルル……！

月斗「トドメだ……行くよ！」

日花「はい！」

「ギ、ギギイ……！」

月斗「ムーンドロップ！」

日花「ビツクバン・ヘルフレイム！」

……バゴオオオ！

「チョ……チユオ……チユアアアアア！」

フツ…

月斗「ふう…コレで第1形態クリアだね」

日花「こんなモノが後4個も…」

月斗「うん、しかも後のヤツらはコイツの何十倍も強い。しっかり休もう」

日花「…はい！」

段々独りが染みついて

寂しさの感度も忘れていく

最低な夜は切り裂いて

この夢が 覚める前に

この歌が 終わるジジッ

sideアルミ・マリオ

幻想郷に引越してから5年が経ち、住民達にかなり馴染んだ。

そんな時、私は平行世界へちよつとした旅に出ていた。

シユツ

私は花がたくさん咲いている…古い建物の中にいた。

アルミ「……………」

おかしいわね…

人の気配がないわ…

アルミ「空間把握…」スツ

…!?

アルミ「そんな…」

この世界は、既に崩壊してる…!?

アルミ「……………」

花々が少し盛り上がってる部分から、人の気配がした。

…まさか。

アルミ「ツ…」ガサゴソ

花の中を慎重にかき分ける。

すると…

アルミ「……………!」

「……………」

そこには銀髪の少年がいた。

5歳児のような見た目で、学ランのような服を着ていた。

しかし、私が一番驚いたのは…

アルミ「生きてる…？」

「…うん」

この子がこんな状況で生きている事だった。

「お花さんたちが助けてくれたんだ」

アルミ「花が…？」

ヒラツ…

アルミ「！」

少年は花を見つめると、その花は動いた。

…なるほどね。

パメラ「…僕はパメラ。あなたは？」

アルミ「私はアルミ・マリオよ」

パメラ「アルミさん…僕、ずっと1人だったんだ」

アルミ「ずっと…？」

パメラ「うん。2年前ぐらいに…大きな爆発と一緒にみんないなくなっちゃったん

だ。お母さんの顔も、お父さんの顔も覚えてないんだ」

アルミ「……………」

この子、物心ついてから孤独だったのね…

アルミ「…パメラ」

パメラ「？」

アルミ「もうアンタは孤独じゃないわ」

パメラ「えっ…？」

アルミ「アンタはこれから…

パメラ・マリオよ
」

イワシが つちからは えてくる んだ

side 坂田日花

日花「メイ、ネロイズム」

2人『?』

日花「何か、変化はあったの？」

ネロイズム「僕は特にないね」

メイ「…そういえば、少し体が身軽になった気がします」

日花「そうなの？変化はあるようね…」

そこに月斗さんが来た。

月斗「日花、次の厄災は”土から生えてくるイワシ”だよ」

日花「…?」

月斗「文字通りだよ。イワシが土から生えてくるんだ」

日花「は、はい、なるほど…?」

よく分からないわ…「後…」…?」

月斗「クラゲで死者が出なかったのは奇跡に近い。イワシの時に死者が出るのは…ヤツ
ツの能力によってほぼ確定だから、僕達にできることはそれを減らすことだ」

日花「…はい！」

side フリスク・ユメミル

ゴオオオオ…

ピキッ

フリスク「地面が…！」

キャラ「気を付けて、フリスク！」

フリスク「ああ…！」

「シヤアアア！」

巨大なイワシが地面から這い出てきた。

フリスク「ケツイナイフ！」ズバッ

「キシヤアア！」ブシヤア

フリスク「!?」

爆発した!?

サンズ「…!? フリスク、すぐそこから離れろ！」

フリスク「ツ…！」 ダッ

ブシュウウ…

サンズ「アレは…ウイルスだ！」

ベテイ「ウイルス!?!」

サンズ「恐らく、自爆して殺人ウイルスをばら撒き、それで殺す算段だろうな…」
フリスク「すぐに連絡しないと…！」 カチッ

♪????
「????」イワシがつちからはえてくるんだ

side ルメ・パンドラ

ルメ「ツ、コイツらも遠距離でしか倒せないのね！」

アルカ「酸の次はウイルス…次は毒かしら？」

ザクロ「物騒な事言うな、よっ！」 ダンッ

ドスッ

「シャッ…」 フッ

グレイ「……………」

ルメ「…どうしたの、グレイ？」

グレイ「コイツら、一体何処から来てるんだろう？」

留美「考えてるヒマなんてないよ。今は戦わないと！」シャツ

グレイ「それもそうだね…ハッ！」ドスツ

「ブシャア！」

ルメ「ツ、離れて！」

ブシユウウ…

グレイ「危なかった…」

アルカ「相手が爆発するタイミングはまだ確定してないわ。冷静に対処しましよ」

ボツ

ルメ（いやいや容赦なく燃やしてるアルカに言われても、ね？）

何年前かのことでした

誰かがハサミでタイムラインを

ちよんぎった

そして明日と昨日が繋がった

(中略)

昨日の記憶は消えたけど
消えたつてこともよく分からないんだ
空の上からビルが建つ
目が見えなくなってきた

イワ死

♪???
???
——イワシがつちからはえてくるんだ

side ケーティ・マリオ

ケーティ「ウイルス…採取したい所だけど…」

セイダン「酸や毒ではなくウイルスだからな…流石に危険だ」

「シャアアア！」

ブシャア！

ボンゾー「ぬうつ、危ないねえ」

スカーフ「視認可能なのが救いか…」ズバツ

「シャツ…」フツ

ステイープ「ケホツ…」

…?

ケーティ「大丈夫、ステイープ？」

ステイープ「大丈夫さ…少し喉が痛いだけだ」

「シャア…い…」ブシャア！

「こころ「冷静な結界」ピキッ

シユウウウ…

頼もしいわね。

レイン「ソウルブラスター！」

ドガアアン！

「シヤア…」フッ

(なんか聞き覚えが…)

ケーティ「……………」

イワシは土から生えてきてる…つまり

ケーティ「地中を攻撃すればいいのよ！」スツ

ギユン！

ケーティ「ウイザーインパクト！」ドガアアン！

『シヤア!?!』フッ

おかげで一気に倒すことができた。

ステイブ「ケホッ、ゴホッ…」

さつきよりも酷く咳き込むステイブ。

ケーティ「アンタ、休んで「ゴフツ!?!」…なっ!?!」

ステイブは血反吐を吐いた。

セイダン「ステイブ!?…コレを飲め!」スツ

セイダンは咄嗟に回復薬を出す。

ステイブ「ありがとう…!」くいつ

ゴクゴク…

セイダン「一旦休んで「ガハツ…!」…さらに酷くなっているだ…!」

ケーティ「まさか…!」

「シャハハ…」

コイツらのウイルスが…!」

ステイブ「ハア、ハア…肺が…」グタツ

セイダン「ツ…!」

ステイブ「…ガツ!」ググツ

ケーティ「ステイブ!」

ステイブは突然もがき始めた。

ステイブ「僕から、離れてくれ…!」

セイダン「…まさか、イワシのように!」

ステイブ「ああ…ガアツ…!」

ケーティ「ッ……！」ダッ

ステイブから距離をとる……

ステイブ「後は、任せたよ……！」ピシッ
ブシヤア！

味方『……………ッッ』

ステイブ 爆散し死亡

ケーティ「……………くっ」

大事な仲間を死なせてしまった……！

ケーティ「…セイダン」スッ

ゴオオオオ……

セイダン「……………」

私は黒いオーラを纏う。

ケーティ「フルパワーで潰しにかかるわよ」

セイダン「…了解」

ギユオオオ…！

この姿になったのは…3回目かしら？

Wケーティ「厄災なんて全部ぶっ潰してやる」スツ

バゴオオオ！

地面に絶大な衝撃を与える。

シユウウウ…

…大量に即死したようだ。

Wケーティ「行くわよ…！」

side 八意月斗

月斗「ステイプ…」

大丈夫、あの世の広場で生き返る…それでも…

月斗「君の分も戦うよ…！」ギユン

ドツ！

抹殺の憎悪

♪????
?side? —イワシがつちからはえてくるんだ

side ケーティ・マリオ

W ケーティ「ワイザーインパクト」 スツ

シユウウウ…

「シャツ!? ガア…」 フツ

ボンゾー（爆発が、ない…?）

セイダン「ワイザー状態のケーティが放つワイザーインパクトは、爆発ではなく敵を内側から破壊するんだ…」

スカーフ「鬼畜だ…」

まあ、私はキレてるから別にどうでもいいんだけどね。

W ケーティ「ブレイブカッター」 シャツ

スパアン!

「シャ」スパッ

イワシが断末魔を上げる前に殺す。

Wケーティ「黒斬り」シヤキン

黒い剣を数本出す。

Wケーティ「殺れ」

…シユバツ！

イワシ「シヤアッ！」ブシヤア！

Wケーティ「チツ…地中のヤツらを殺れ」

シユツ！

剣は地中へと入っていった。

ザシユツ

…成功ね。

レイン（ケーティさんから、少し狂気を感じる…）

こころ「…ケーティ、やりすぎないで」シユツ

Wケーティ「こころ…やりすぎてなんかないわ。コイツらを抹殺しなきゃ、厄災は終

わらない」

こころ「…それもそうか」スツ

スパッ！

こころ「ちょうど友が殺されて憤っていた所だ、遠慮なく抹殺してやろう」

レイン（「こころも…!?!」）

（逆になんでお前は落ち着いてるんだよ…）

Wケーティ「こころ、息を合わせなさい」

こころ「了解」バツ

シユルル…!」

セイダン「（アレは…!）お前ら、離れるぞ！あの攻撃をくらったらひとたまりもない！」ダッ

スカーフ「ツ、はっ！」ダッ

ボンゾー「何なんだアレは!?!」ダッ

レイン（お母さんだったら、どう声をかけていたんだろう…?）ダッ

…みんなは離れたようね。

Wケーティ「行くわよ、こころ…」

こころ「ああ…」

ギユオオオ…

2人『抹殺の憎悪』

ゴオオオオオオオオオオ……!

セイダン「グツ!? (コレぐらい離れていてもエネルギーが……!)」

……スタツ

W ケーティ「少々殺りすぎたようね……」

「……そのようだ……」

私達の目の前では……

シユウウウ……

「ガアア……ッ」フツ

巨大イワシが消滅していた。

ケーティ「ハア、ハア……」シユツ

やっぱりコレ、消耗激しいわね……

「……アレは何だ?」

巨大イワシがいた場所に何か刻まれていた。

ケーティ「何か書いてあるわね……」

タタツ

レイン「ケーティさん!……これは!?!」

ケーティ「『クロマグロが飛んでくる

明日の昼すぎ

僕らをめがけて降ってくるマ

グロ 「僕らは殺されるんだ』…次の厄災のヒントかしら？」

日花 「巨大イワシを倒した!？」

アルヤ 「ああ、どうやらケーティさん達がやったらしい」

ネロイズム 「僕達に…」

メイ 「ちゃんとした出番はあるんですか…？」

2人『…………』ズーン

甲 「メタいから黙ってろ」

休息と風神

side 坂田日花

日花「はあ……ドサツ

クラゲに、イワシ。

両方中々しんどかったわ……

平尾「コレは……疲れるね……」

フラン「休みを挟まないと体力がごっそり持っていかれるぜ……」

甲「そういえば、マグロは明日の昼過ぎなんだから？」

アルヤ「ああ、ケーティさんがそう言ってたな」

甲「なあメイ、ネロイズム」

甲が2人に話しかける。

2人『？』

甲「その様子からして何も変わってないだろ？」

ネロイズム「……そうだね」

メイ「何も変わってません」

甲「そこで俺の予想だが…力を会得するのは厄災と戦っている時だけでなく、こんな時間も含まれていると思う」

2人『…!』

マリリン「確かに…!」

日花「でも、主に何をすればいいか分からないわよ?」

月斗「僕が2人相手に手合わせするのはどうかな?」

月斗さんが手合わせ? うーん…

日花「いい考えですね、不採用」

(久々の原作名言)

月斗「え、なんで?」

日花「月斗さんだと強すぎるんですよ」

厄災が始まってからの事だが、月斗さんは力を完全に開放している。

もちろん本気は出してないようだけど、気配からして絶対パワーは3億超えね。

月斗「じゃあ、代わりに誰を?」

日花「もう1人、”神”がいるじゃないですか」

味方大半『…は?』

ザクロ「ほう…?」

アルカ「……………」

月斗「ああ、なるほど」

日花「そうですよね？」風人
：

「いや、”風神”さん？」

「完全に神じゃないわよ…現人神よ」

味方大半『!』

グレイ「…言ってなかったのかい？主人」

ルメ「まあね…」

そう、ルメさんは現人神である。

私はそれを月斗さんの正体を知る前に知った。

ザツ

ルメ「それで？ネロイズムとメイの2人と手合わせしろと？」

アルカ「私がしたかったわ…」

留美「貴女はむしろ弱すg「コレでも私はこの中で”6番目”に強いんだけど？」
やネロイズムより強いのです？」…そ、そうでした」

そういえばそうだったわね…

ルメ「…いいわよ、受けて立つわ」

日花「ありがとうございます」

ルメ「少ししたらすぐなるわよ、いい？」

メイ「分かりました！」

ネロイズム「了解」

ガサゴソ：

フリスク「（神力を持ったルメさんか…あの時（にゃんこ世界大戦）もかなり強かったし、今では神力無しでもカンスト付近のハズ。そこに神力含めたら…）僕達、置いていかれてるね…」

ベティ「現役は終わったんだし、私達は見守るだけ…そうでしょ？」

フリスク「うーん…それでも、僕はもつと強くなりたいなあ…」

キャラ「…フツ、それもいいわね」

曰花「……………」

フリスクさん、キャラさん、ベティさん。

ソジツク最強トリオは、今でも最強ですよ。

立ち向かう

sideルメ・パンドラ

コオオオオ…

ネロイズム「……………」ザッ

メイ「……………」キッ

ルメ「…ふふっ」

いいわね、この緊張感。

…私も戦闘狂が感染ったのかしら？

日花「…始めッ！」

…ドッ！

ネロイズム「バツテンスロウ！」シヤッ

メイ「鳴鳴斬り！」ズバッ

Xマークと緑色の飛斬撃が飛んでくる。

ルメ「フッ…ハアッ！」

ビュウウン！

自分の周りに突風を起こす。

ルメ「ストームゾーン！」ドッ！

…ガキイ！

ネロイズム「…ッ」

飛び道具をカンタンに吹っ飛ばした。

ルメ「今度はこっちの番ね…」ギユン

キイイイン…！

甲高い音が響く。

日花（…ナルトのアレを再現した!?!）

メイ「何を…」

ネロイズム「…！メイ、ルメが攻撃したらすぐに次元を斬るんだ！」

メイ「う、うん！」

ルメ「果たしてできるかしら？」

ギユルルル！

ルメ「風遁・螺旋手裏剣！」ビュン！

めちやくちや高速回転している風の手裏剣を飛ばす。

もちろん神力も混ぜてある。

メイ「次元斬り！」ズバツ

コオオオオ：

メイは次元を斬って亜空間を開いた。

：それをやってガスターは大丈夫なの？

（大丈夫です）

ネロイズム「そこにさらに：リバーズ！」ギョーン！

ルメ「：？」

亜空間を逆さにしたの？それとも：

ギョルルルル！

ネロイズム「なっ：（失敗した：）」

ルメ「どうやら私の技の回転を逆にしたかったようね。でも意味はないわ：：なんせ」

全方向に”回転してるからね”

メイの回転があつて、その中に小さな回転が全方向に飛んで行ってる感じ。

だから逆にしても意味がないの。

キイイーン！

ルメ「さて、どう避ける？」

メイ「ツ：：：斬ッ！」ドッ

ネロイズム「メイ!? よせ！」

…ギイン!

メイ「こうやって立ち向かわないと、開花しないんじゃないの!？」

ネロイズム「……!」

ギギギ…

メイ「ハアアアア…!」

刀と手裏剣がぶつかり合う。

ググツ…

若干手裏剣の威力が勝ってるようね、でも…

ルメ（ネロイズム、アンタは？）

…ザツ

ネロイズム「ははっ、妹に守られるとはね…僕も立ち向かうよ！」

キーン!

Xマークの何かで応戦するネロイズム。

2人『ハアアアッ!』

ピカッ

ルメ「…お？」

ネロイズムとメイが、少し光った気がした。
ギューイン！

手裏剣は少しずつ勢いを落としていき…

シユウウウ…

ルメ「止められちゃったわね…降参よ」

メイ「…へっ？」

ルメ「アンタ達はどうかやらしいヒントを見つけたようね」

ネロイズム「…ああ」

ルメ「そのヒントを元に、厄災に挑めば目覚めるかもね」

メイ「…はい！」

日花（ルメさん、流石ですね…）

MAGRO

side 坂田日花

次の日。

アルカ「みんな、準備はできた？」

月斗さんを除くと最年長のアルカさんが言う。

全員『おお!』

アルカ「位置につくわよ!」

バツ!

今日はチーム関係なく、ペアを組んでバラバラで戦う。

一応、配置はこんな感じ。

・キノコ国

坂田日花

坂田平尾

志免甲

姪浜桃

ネロイズム

メイ・マリオ

ルメ・パンドラ

ザクロ・ビースト

・ブルームプラネット国

八意月斗（単独）

赤坂留美

グレイ

フラン・ユメミル

マリン・ユメミル

アルヤ・マリオ

レイン・マリオ

・ソジツク国

フリスク・ユメミル

ベテイ・ユメミル

キャラ・ドリーマー

W・D・サンズ

W・D・サンズ Jr.

W・D・ルマ

坂田絵奈

坂田平次

・マイン国

ケーティ・マリオ

秦こころ

セイダン

スカーフ

ボンゾー

アルカ・マリオ

日花「そろそろ時間ね…」

平尾「そうだね…」

ヒユウウン：

日花「！」

空から何かが降ってくる。

「ヴァアアアア！」

：厄災の第3形態、マグロだ。

月斗さんの話によると、コイツらの針には毒があり、刺さると溺死するらしい。
：毒で溺死するのはワケが分からないけどね。

日花「ビッグバン・ヘルフレイム！」ゴオオオオオ

「ヴァアア！」キッ

ヒュン！

日花「！」サッ

マグロはキハダを飛ばしてきた。

平尾「ファイアボム！」バゴオ

「ヴァアッ：」フッ

ヒユウウン

「ヴァアアアッ！」

すぐに次のマグロが飛んでくる。

平尾「攻撃、防御火桜」シャツ
ドスッ!

「ヴ、ヴァアッ!?!」

マグロは防御火桜の影響で動けない。

日花「針のない位置を狙って…フレイムドロップ!」

ドゴオ!

「ヴァア…」フッ

平尾「一撃じややられないようだね…」

日花「ええ…体力を回復して正解だったわ」

side 志免甲

甲「そこだ、桃!」

桃「うん!」スッ

バチイ!

「ヴァア…」フッ

桃が的確に雷をマグロに当て、消滅させる。

甲「コイツら、何が何でも絶対一撃耐えるぞ…」

桃「厄介ね…」

ヒユウウン

「ヴァアアアア！」

ヒユン！

キハダが飛んでくる。

甲「ロツクウオール！」ゴツ

キイン！

桃「サンダーボール！」ビリッ

バチッ、ビリッ！（2発当てた）

「ヴァツカ…」

（…は？）

甲「……なっ!？」

桃「えっ…」

ヒユル…

ヒユウウン…

ゴオオオオ…

『ヴァアアアア!』

甲 「群れだと…」

桃 「どうするのコレ!?’

神、仙人、妖怪

♪????
?side志免甲

side志免甲

甲「チツ……！」ダツ

ドツ！

助走をつけ、地面を滑る。

甲「ストーンスライダー！」ザザツ

ドゴオ！

足に纏ってる岩がマグロ達にぶつかる。

「ヴァア……」フツ

桃「サンダーボール……連打！」ダダダツ！

ソレ、連射じゃね？

バチイ！

「ヴォエ……」フツ

（ゲロ？）

甲「…そうだ！」ダンッ

一気に蹴散らすには…

甲「こうすれば良かったぜ！」ゴッ

…ドスッ！

甲「ストーンスパイクの円！」

『ヴァッ!?!』

コレで一旦包囲は逃れたな…

甲「気を抜くな、桃！」

桃「うん！」

sideルメ・パンドラ

ザクロ「なあルメ」シヤッ

ルメ「何？」ズバッ

ザクロ「俺、妖怪になろうと思ってる」スパアン

ルメ「…はあ？」

何故突然そんな事を？

ザクロ「だってよ、アルカもルメも実質不老だろ？俺一人だけ寿命があつて寂しいじゃねえか」ドゴオ

ルメ「ふーん…」

私が神で、アルカが仙人で、ザクロが妖怪。

ルメ「バランスがいいし、いいんじゃない？」シユツ

ザクロ「バランス？…ああ、そういえばそうだな。方法といいタイミングが見つからば妖怪になるか…」ギユン

ドゴオ！

「ヴァア…」

(ツ、コイツら強すぎる…！)

side 八意月斗

ギユン！

月斗「ムーンフォース！」ドゴツ

からの…！

月斗「ムーンドロップ！」

ドゴオ!

「ヴァア……」フツ

余程の技じゃない限り、コイツらは一撃耐える……

月斗「そろそろ本気で……いや」

今は単独だから仲間達に被害を与えないとはいえ、まだ使う時じゃないだろう。

月斗「ココは踏ん張りどころってことか！」

ダッ

その頃、幻想郷（畜生界）では……

side ノーア・ピース

コオオオオ……

畜生界のヤクザ達との、抗争が始まろうとしていた。

ノーア「敵の数は？」

「12万程です」

ノーア「そう……」

自分の部下達の方を向いて、私は叫ぶ。

ノーア「行くわよ、アンタ達！」

『おお！』

ドツ！

踏み切りで加熱した室外機

ああ ラジオの隣に そなえるプリン

機嫌は 昨日まで で

クロマグロがとんでくる 明日の昼過ぎ

ああ 僕らを目掛けて降ってくる マグロ

殺される

ああ キハダが飛んできて 瓦を突き破る

ああ マグロの針には 毒がある

刺さると 溺死する

戦闘中の雑談

♪MULAストーリー——日常。V2

side 赤坂留美

留美「風斬・鎌鼬！」

ズバツ！

グレイ「おりやあ！」

ドゴツ！

「ヴァア…」フツ

留美「…ねえグレイ」

グレイ「どうしたんだい？」

留美「連続攻撃すれば一気に片付くと思うんだけど…」

そうする方法ってあったっけ？

グレイ「連続攻撃？ 僕が武器に変身すればできると思うよ？」

留美「そうだけど、肝心の武器がね…」ズバツ

グレイ「うーん…」ドガツ

「ヴァイブ…」フツ

(大人のおもちやか！)

留美「…そうだ！」

グレイ「思いついたのかい？」

留美「グレイ、鎖鎌になって！」

グレイ「…はあ!？」(。D。)

「ヴァアア…」ヒュン

留美「おっと」サツ

マグロの攻撃はカンタンに避けれるね。

グレイ「鎖鎌って、物騒な…」

留美「とにかくなって！」

グレイ「わ、分かったよ…」シユルル

…ポンツ!

グレイ「あまり乱暴に扱わないですよ？」

鎖鎌になったグレイが注意した。

留美「分かってるって。さてと…」

ジャキツ

留美「まず先っぽに風を纏って、と」ギユン

…ドツ!

留美「ハアアアア!」ブンツ

…ザクツ!

『ヴァ!?!』

留美「ふんっ!」シヤツ

…スパアン!

『ヴァ…』フツ

複数の敵を一斉に蹴散らした。

留美「コレ、振り回せば倒せるから便利だねえ〜!」ブンブン

グレイ(あ———れ———!)

sideマリン・ユメミル

マリン「ハイドロポンプ!」ザパアン!

フラン「ケツイサンダー!」バチイッ!

「ヴァイオリン…」フツ

(弦楽器か！)

フラン「なあマリン」

夫に話しかけられる。

マリン「何？」スパア

フラン「クリスが大人になったら、俺みたいになるのか？」ピリッ

クリスは私とフランの息子であり、未例と同じ年齢である。

マリン「…は？」

フラン「いやな、クリスはどう見ても俺というより父さん似だからさ、気になるんだよ」

マリン「…煩惱まみれなアンタみたいな子にはなつてほしくないわね」シュバツ

フラン「おうふ…俺の妻は辛辣だな…」ズバツ

「ヴァ…(何言つてんだコイツら！リア充爆発しろ…)」フツ

side アルヤ・マリオ

…そういえば。

アルヤ「レインさん」

レイン「？」

アルヤ「俺達って、あまり年齢差ないですよね？」

レイン「……11年差って結構あると思うけど？」

アルヤ「でも魂集族って生まれた時が4歳だから、実質7年ですよ？」

レイン「まあそうだけど……うん。まずは戦闘に集中しよう？」

『ヴァアアア！』

アルヤ「……了解っす」

All your fault

sideフリスク・ユメミル

フリスク「ケツイナイフ！」ズバツ

ベティ「ブレイブカッター！」シャツ

…ドスツ！

「ヴァ…」フツ

フリスク「…？」

何か、違和感を感じる。

ベティ「…どうしたの、フリスク？」

フリスク「なんか、変な雰囲気を感じるんだ」ギユン

ベティ「雰囲気？」スツ

フリスク「ああ、それがマグロの親分が来るような雰囲気でもないんだ…また別の敵

が現れたような…」シャツ

ベティ「なるほどね…」ドスツ

「ヴァ…」フツ

すると、突然…

♪M U L A ストリーリーーウヨキイワイカ（2分の1倍速）

…モワツ

フリスク「コレは…霧？」

敵の気配がした。

フリスク「ベティ！…あれ？」

振り向いても、そこにベティはいなかった。

フリスク「霧を吹っ飛ばせば！」スツ

ビュウン！

エネルギーの爆弾で霧を吹っ飛ばす。

フリスク「……!？」

そこは、僕がさつきまで戦った空間じゃなかった。

フリスク「なっ……」

「アアアア……」

かすかに声が聞こえる。

フリスク「……」ザツ

少しずつ、声がる方へ近づく。

フリスク「えっ……」

そこにいたのは、衝撃的な人物だった。

フリスク「僕……?」

フリスク? 「アアアア……!」

容姿は若い頃の僕そっくりだ。

しかし目は白目だ。

フリスク? 「……ギイ?」

こつちに気付いたようだ。

フリスク? 「…ギヤアアア!」 ドツ!

フリスク 「ツ!」 ギユン

僕に見えるヤツは襲いかかってきた。

フリスク? 「ギヤアアア!」 シャツ

フリスク 「ナイフ!」 サツ

もしかして、当時の僕の技まで使える…?

それが正しいのなら、時間停止はできない。

フリスク 「お前は、一体何者なんだ…?」

フリスク? 「グオオ…」

side ベティ・ユメミル

フリスク 「なんか、変な雰囲気を感じるんだ」 ギユン

ベティ 「雰囲気?」 スツ

フリスク 「ああ、それがマグロの親分が来るような雰囲気でもないんだ…また別の敵が現れたような…」 シャツ

ベティ 「なるほどね…」 ドスツ

「ヴァ…」フツ

…ボタン

ベティ「…フリスク!？」

フリスクは、突然意識を失って倒れた。

ベティ「いや違う、コレは…寝てる？」

フリスク「すう、すう…」

ベティ「…ツ？」

私も少し、眠気が…

こうなったら…

ギユン

ベティ「…ツ！」ドスツ

自分の腕を斬りつける。

結構痛い。

ベティ「でも、コレで眠気スツキリよ」

一体、何が眠らせてきたのかしら？

…ん？

「ヴァ…」スヤア

マグロ共も寝ている。

ベテイ「…一気に蹴散らすわ」ギユン

…ドゴオオオ!

『ヴァッ!?!』フッ

アンテ組の活躍①

s i d e フリスク・ユメミル

フリスク「…ハッ！」ズバツ

フリスク? 「ガッ!?グオオ…」フツ

数分僕の偽物と戦い、やつと倒した。

フリスク「ココは一体、何処なんだ…?」

まずはソレを解決しないと。

スタスタ

s i d e ベティ・ユメミル

ベティ「…あら?」

ザツ

サンズ「おう、ベティは起きてたのか」

ベティ「…キャラ達は?」

サンズ「そこに寝かせてるぜ」

3人『すう…』

サンズ「さつき連絡をとったが、睡眠ガスが発生してるのはソジック国だけみたいだ。…まあ、オイラは”スケスケ”だから効果はなかったけどな」テテツチー

(サンズJr. がスケルトンなのに寝ているのは一部にニンゲンの遺伝子があるからである)

ベティ「……………」

サンズ「…ジョークはおいといて、この状況は正直結構ヤバいな。平次と絵奈を探すか?」

…足し蟹。

ベティ「ええ、探すべきね」

サンズ「コイツらには骨と…」シユツ

ベティ「…エネルギーで結界ね」ギユン

ピキッ!

コレで余程のヤツじゃない限り大丈夫だろう。

サンズ「行くぞ」

ベティ「ええ」

スタスタ…

sideキャラ・ユメミル

私がこの空間で目覚めてすぐに、私の偽物と戦うことになったが倒した。

そして少し移動した所で、サンズJr. とルマに遭遇した。

サンズJr. ? 「グオオ…！」

ルマ? 「ガルルル…！」

ルマ「うわあっ!？」

…ザッ!

キャラ「アンタ達！」

2人『キャラさん!』

キャラ「下がってて！」

♪ Story shift—Zenith

シヤキン!

赤いナイフを作り出す。

サンズJr. ? 「アアアア！」 スッ

シュツ

キャラ「…フンツ！」ズバツ！

ルマ「グルルルル！」ギユイイン

いきなりガスターブラスターね…

ルマ「…ガア！」

ドガン！

キャラ「ケツイガード！」ピキツ

エネルギーのドームでガスターブラスターを防ぐ。

シュウウウ…

キャラ「ケツイナイフ…フィールド！」シュバツ！

広範囲にナイフをばら撒く。

…ドスツ！

サンズJr.？「ガア…」フツ

ルマ？「グルウ…」フツ

…終わったようね。

キャラ「ふう…」

ルマ「大丈夫ですか!？」

キャラ「大丈夫よ。…ん？」

…あら。

サンズJr.「どうしたんですか？」

キャラ「フリスクの気配を感じるわ。行きましょ」

2人『はい！』

スタスタ

クラゲ 削除

イワシ 削除

マグロ 再生中

ヤツメ 未再生

ウミガメ 未再生

: All your fault. 再生中

部下の実力

♪すべてあなたのせいです。――

side フリスク・ユメミル

数分後、僕はキャラ達と合流した。

キャラ「∴フリスク、多分ココが何処か分かったわ」

フリスク「えっ？」

キャラ「この空間、恐らく厄災よ」

フリスク「∴なるほどね」

キャラ「だから、恐らくココの敵を全員倒せば、厄災の一部を終わらせることができるわ」

フリスク「オーケー。じゃあまずは気配探知だね∴」

♪????
| クロマグロがとんでくる
side ケーティ・マリオ

「……ケータイ」スパッ

ケータイ「何、こころ？」ドゴッ

「ヴァ……」フッ

「……この戦いが終わったら、結婚しよう」

……は？

ケータイ「えっと、何言ってるの？」

「……言ってみただけ」

ケータイ「そ、そう……」

いきなりそのフレーズを言うとか、よく分からないわね。

「……じゃあ」

ケータイ「？」

「……後でキスして」

ケータイ「えっと……なんで？」

「……褒美が欲しい」

ケータイ「ソレなら他でもいいんじゃない？」

「……それもそうか。じゃあ後でハグして」

「……あまり変わってないような。」

side アルカ・マリオ

アルカ「フンツッ！」ドゴオ

ボンゾー「ウィザーインパクト！」ドガーン

『ヴァアアア……フツ

一気に蹴散らす。

アルカ「……アンタ、割と強いじゃない」

ボンゾー「負けた時（ただ今全力で逃走中）から努力したのさ」

アルカ「へえ……」バゴオ

ボンゾー「まあ、それでも僕は幹部最弱さ」

（強さ順↓ケーティ、ステイブ、セイダン、スカーフ、ボンゾー）

アルカ「最弱のアンタでも充分強いと思うわよ？ケーティがウィザークイーンになつてからマイン国はクソ強いし」

ボンゾー「それはケーティのトップとしての実力だ。僕はあまり関与してないさ」
シュツ

アルカ「ふーん」ドスツ

…後で、ケーティと手合わせしてみようかしら？
(何故そうなる)

side ネロイズム

ネロイズム「バツテンスロウ！」バツ

メイ「鳴鳴斬り！」ズバツ

「ヴァ…」

ゴオオオオ…

ネロイズム「この雰囲気…そろそろ親分が来るだろうね」

メイ「頑張ろう、お兄ちゃん！」

ネロイズム「ああ…！」

仲間達に報告をした後、僕達はじっと親分を待つ。

ルメ「来たわよ」

ザクロ「近くてよかったな」

ネロイズム「そうだね。…来たようだ」

ゴゴゴゴゴ…ッ

空に黒いモノが見える。
それはどんどん大きくなっていった。

巨大マグロ

♪MULAストーリー—Monody V2 (一昨日投稿した曲)
sideネロイズム

「ヴアアアアアッ！」

空に見える黒いモノは、大きなマグロとなった。

ルメ「でっかいわね…」

ザクロ「捌いて刺身にすると美味しそうだが…毒があるしな…」

ネロイズム「捌く前提で話を進めないでくれないかい!？」

ザクロ「いいじゃねえか、美味そうだし」

ネロイズム「厄災を食べるといふその思考回路が意味不明だよ…」

「ヴアツツツ！」スッ

…シユバツ!

大量の毒針が飛んでくる。

ネロイズム「この量なら…リバーズ！」ギユン

…シヤツ!

毒針は方向を変え、マグロに向かって飛んで行く。

メイ「さらに：飛斬舞！」ズバツ！

ルメ「（いつその技を？） 天空掌：波動バージョン！」ズガアン！
（お前、そいつその技を!?!）

…ドスッ！

毒針、斬撃、波動は巨大マグロに命中する。

「ヴイイイアアアア！」

メイ「せえいつ！」ズバツ

メイはさらに攻撃し、マグロにダメージを与える。

ザクロ「…こりやマズいな」

ネロイズム「何がだい？」

ザクロ「マグロが地面に激突したら：分かるだろ？」

ネロイズム「なるほどね。でも：敢えて近くにいた方が、倒しやすいんじゃないのかい？」

ルメ「…どういうこと？」

ネロイズム「カンタンだよ：僕が地面に与えられる衝撃の方向を逆にすればいいの

さ」

ザクロ「そんな事もできるのか？」

ネロイズム「立ち向かう事がするべき事なら、やるべきだろう？」

ザクロ「…へっ、ソレもそうか。じゃあ頼むぜ！」バツ

ルメ「マグロが激突するまでは攻撃を続けるべきね…ハッ！」ギユン

ギユイイン！

ルメ「風遁…螺旋手裏剣！」

ギユルルル！

ザクロ「くらいな！残虐殺！」シャキン

スパアン！

「ヴオオオオ…ッ！」スツ

シュバツ！

巨大は負けじと毒針を放つ。

…だがソレは愚策だ。

ネロイズム「無駄だよ…リバーズ！」ギユン

…シヤツ！

「ヴイイイイ…」ドスツ

ヒユウウン…

ザクロ「そろそろだぜ、ネロイズム！」

ネロイズム「ああ…！」スツ

ルメ「…私達は距離を取るわよ！」

メイ「はい！」

タタツ

ネロイズム「タイミングを見極めて…！」

「ヴアアアアッ！」ヒュルル

…今だッ！

ネロイズム「リバース：衝撃！」ダンッ

手を地面に当て、能力を発動する。

すると…

「…ギイヤアアアッ!？」

ネロイズム「ツツ!？」

すぐ耳を閉じる。

この声は大きすぎる…！

…ダッ！

ルメ「よくやったわ、ネロイズム！トドメよ！」バツ

…ギユルルル!

ルメ「ハツ……陽風陰風!」ドツ

ゴオオオオオオオツ!

「ヴアアアアア……ッ!」

巨大マグロは、聞いてて非常に不快な断末魔をあげ、消え去った…。

クラゲ 削除

イワシ 削除

マグロ 削除

All your fault. 再生中

ヤツメ 未再生

ウミガメ 未再生

幻想郷での幕間

side アルミ・マリオ

パメラ「わーい！」

咲夜「待ってー！」

キヤツキヤツ

アルミ「…ふふっ」

私が拾って1ヶ月、パメラは幻想郷での生活にかなり馴染んだようだ。

有太「…楽しそうだな」

アルミ「そうね」

有太「…なあ姉さん」

アルミ「？」

有太「平行世界への旅、長期間するようになるのはいつ頃だ？」

アルミ「そうね…2人が10歳になった頃かしら？」

つまり4年後ね。

有太「何年ぐらいするつもりだ？」

アルミ「7年程ね。定期的に帰ってくるつもりよ」

(なので紅魔郷と妖々夢の時はいない)

有太「…俺も同時期に引越すか」

アルミ「ソレがいいわ」

…シュッ

「…平和だな」

アルミ「そうね、リビット」

咲夜の師匠、リビットが隣に座った。

リビット「できれば当分はこうなっていてほしいものだな…」

アルミ「…厄災も終わったし、10年は安定だと思おうわよ？」

リビット「…フッ、お前が言うのならそうかもしれないな」

タタッ

咲夜「お母さん！」

パメラ「見て見て！」

2人はシロツメクサの花飾りを見せた。

アルミ「あら、よくできてるわね♪」

咲夜「でしょ！」ニコッ

パメラ「幽香さんに教えてもらったんだ！」

パメラは幽香に会ったことがある。

お互い花が大好きだから気が合ってるようね。

アルミ「もつと作れるように頑張りなさい」ポンプン

パメラ「うん！」ニコツ

そして2人は花畑に戻っていった。

リビット「…そういえば」

2人「？」

リビット「フランドールが自身の武器を強化したそうじゃないか」

私が3年前フランドールに会った事がきっかけで、彼女は魔法について色々研究するようになった。

分野はパチュリーと違って、魔術とタマシイの魔法を組み合わせたものである。

アルミ「レミアアの武器も一緒に強化してたわね」

有太「武器名は…グングニルV2とレーヴァテイン改だな」

何故V2と改で別々なのかは…分かる人には分かるわね。

リビット「…私は最近教えるのに集中しすぎて己を鍛えてない。レミアアに手合わせを願いたいものだな」

アルミ「いいんじゃない？ パワーも同じぐらいだし」

有太「むしろ喜んで戦いそうだな、アイツの性格的に」

リビット「そうか」

…そろそろ時間ね。

アルミ「おーい、2人とも。そろそろ帰る時間よ」

2人『はーい！』タタッ

2人はこちらに駆け寄る。

アルミ「楽しかった？」

咲夜「楽しかった！」

パメラ「花達も喜んでた！」

アルミ「ふふっ、それはよかったわね。それじゃ帰りましょ」クルツ

スタスタ

有太「……フツ（いい母さんしてるよな）」

黒い生命体……に似たヤツ

side 坂田平次

平次「せいっ！」バチッ

絵奈「やあっ！」ズドッ

『アアアア……』フッ

この謎空間に来てすぐ、俺達は自分の偽物に襲撃された。

……すぐ倒したけどな。

ただ……倒した後少し移動すると、突然黒い生命体に襲撃されたんだ！

平次「マジでコイツらは何なんだ？」

絵奈「グリッチのヤツらとはちよつと違うよね……」

平次「怨念で構成されているという点は変わらないがな」スッ

バチバチ

平次「サンダーキャノン！」ギユン

ビリイッ！

『イウエオ……』フッ

(!?)

…!

平次「この気配は…フリスクさんだ！」

タタツ

フリスク「2人とも！大丈夫かい!？」

フリスクさん、キアラさん、サンズJ r、ルマの4人が来た。

絵奈「大丈夫ですよ」

キアラ「…この黒い生命体は？」

平次「怨念の塊です、グリッチとは別の」

キアラ「へえ…(アズリエルつてコイツらに似たようなヤツに殺されたのね…)」スツ

キアラさんは赤いナイフを出し…

ズバツ!

黒い生命体を真つ二つに斬り裂いた。

「グオオ…」フツ

絵奈「…ハツ！」ギユン

ドツ!

絵奈「ザ・ワールド・ドローパーン！」バシユツ!

2人『ガスターブラスター!』

ドガアアン!

『グオオオオ…』フツ

フリスク「この空間でもザコ狩りか…」

キャラ「しようがないでしょ、尺稼ぎなんだから（メタい!）」

平次「…いや、そうでもないようですよ」

…ドゴオ!

「グオオオオオ!」

黒い巨人が現れた。

…前世の時と同じようだ。

日花「フリスクさん達が起きないんですか!？」

サンズ「ああ、今ソジック国内に変な睡眠ガスが充満していな」

月斗「…!」

はつとしたように、月斗さんは何かを思い出した。

月斗「コレは『All your fault』だ!」

日花「…全て貴方のせい？」

月斗「訳すとそうなるよ…あのガスを吸って寝ると意識が異空間に転送され、そこで偽物の自分や怨念の塊に襲われるんだ…」

平尾「つまり、今フリスクスさん達はソイツらと交戦中なんですか？」

月斗「そうなるね…まあ、この厄災はメインじゃないからあの2人がいれば解決するよ。運が良かったね」

サンズ「とりあえずオイラ達にできることは、次の厄災の対策を講じることだ。次は『ヤツメ』だろ？」

月斗「そうだよ。ヤツらの攻撃は…ズバリ、落とし穴だ」

…は？

日花「落とし穴…ですか？」

月斗「それもただの落とし穴じゃない。落ちたら最後、跡形もなく溶けてしまうのさ」

平尾「ツ…」

サンズ「クラゲと似たようなヤツか？」

月斗「そうだよ。ただ…穴がどこにあるのかはかなり分かりづらい。だから死者はヤツメが一番多いんだ」

日花「……………」

死者が1番多い厄災：
さらに注意をしないとイケないわね。

アンテ組の活躍②

♪MULAストーリー―MEGALOVANIA+炎天桜舞

sideフリスク・ユメミル

フリスク「ケツイナイフ！」ズバツ

平次「サンダーキャノン！」バチツ

絵奈「ザ・ワールド・ドローパーイン！」バシユツ

…ドゴオ！

小手調べで攻撃したが、巨人は無傷だった。

結構ガードは硬いようだね…

「ゴオオオオ…ッ！」カッ

ギユイイン！

キャラ「…来るわよ！」

フリスク「ああ…ケツイシールド！」ギユン

赤いドームでみんなを覆う。

「ガアアアア！」ギユン

ドガアアン!

フリスク「…フツ」

シュウウウ…

光線は赤いドームに防がれた。

フリスク「攻撃力は低いようだね…ハッ！」 スッ

シャキン!

フリスク「ケツイ大剣！」 ドツ

((((0)))

今だッ!

((((—)))

…ズバッ!

「ガアッ!?」 ヨロツ

クリティカルヒットを食らわせた。

キャラ「ナイス!今よサンズ Jr.、ルマ!」

2人『はい!ハアッ!』 ダッ

…シャッ!

2人『ガスターブラスター!』 ギュン

ドゴオオオ!

「グオオオオオ……」フツ

……ありや?

フリスク「体力も低かったのかな？」

平次「多分フリスクさんの攻撃力が高すぎるんですよ……」

フリスク「そ、そうかい………ん？」

……ドスン!

絵奈「えっ、まだいるの!？」

「グオオオオオ！」

……フツ。

フリスク「敵は全員僕達が倒してやる！」

All your fault

フリスク・ユメミル

キャラ・ユメミル

坂田平次

坂田絵奈

W・D・サンズJr.

W・D・ルマ

ヤツメ

坂田日花

坂田平尾

志免甲

姪浜桃

ネロイズム

メイ・マリオ

アルヤ・マリオ

レイン・マリオ

W・D・サンズ

ベティ・ユメミル

ケーティ・マリオ

秦こころ

セイダン

スカーフ

ボンゾー

ルメ・パンドラ

ザクロ・ビースト

八意月斗

赤坂留美

グレイ

フラン・ユメミル

マリン・ユメミル

アルカ・マリオ

side 坂田日花

ボンゾーさんとルメさんの名前の間に空白があつた。

日花「…この8人は何を？」

私はリストを見ながら、月斗さんに尋ねる。

月斗「別動隊さ。ヤツメはただ落とす穴を避けるだけじゃ倒せない。しかも親分は2

体いるんだ」

日花「なるほど……」

月斗「ヤツメの倒し方なんだけど……前提として落とし穴に落ちずに場所を把握しなきゃいけない。だから……ぶつ放すんだ」

日花「……えっ？」

ぶつ放す？何を？

月斗「エネルギーでも何でもいい。落とし穴があると思われる場所に何かを思いつきりぶつ放すんだ。そしたら倒せる」

日花「……理解しました」

月斗「ソレはよかった。気を付けてよ」スタスタ

日花「はい……」

パンドラ家について

side アルミ・マリオ

シユツ

アルミ「よし、着いた」

私は久々に天界に来ていた。

…とある事実確認をしに来た。

「おつ、アルミ！」

アルミ「ちよつとぶりね、天助」

友達の完成者、基山天助が来た。

近くの公園のベンチに座る。

アルミ「…早速質問したいんだけどいいかしら？」

天助「？」

アルミ「アンタ…弟がいたでしょ？」

天助「…えつ、何で知ってんだ？」

アルミ「アンタと私あまりにも似すぎているからよ。技とか、髪色とか」

天助「なるほど。よく分かったな……」

アルミ「それで、名前は：基山有助。そうでしょ？」

天助「名前も調べたのかよ!?!方法は!?!」

アルミ「パンドラの図書館の書物に”何故か”名前が載ってたのよ。ちなみにアンタの名前も載ってたわよ？」

天助「み、見せてくれ」

シユツ

異空間から本を出す。

パラパラ……

……あつたわ。

アルミ「はい」

天助「……マジかよ」

『鬼に勝る力を持つ完成者 基山天助』

天助「俺の名前が載ってるなんて、どんな本なんだコレ………なっ!?!」

アルミ「ね?点と点が繋がったでしょ?」

『パンドラ家 徹底解剖』

この本はパンドラ家の家系を300年程前の人物まで書き記した書物だ。

パンドラ家が始まったのは700年前だが、その数百年前の人物である天助も記されているのは、単純に強かったからである。

天助「…そういえば、パンドラ家は『有』の読みが名前に入っている人が多いんだっ
たな」

(例：「アル」カ、「アル」ミ、「アル」ヤ、「有」太)

アルミ「そうよ。まあ、私のクソ祖母であるクテイとかは例外だけど」

そう、パンドラ家は母さんの母側の血統なのだ。

…あのクソ祖母もその血を引いていると考えると、嫌な感じだけどね。

天助「…ん？待てよ。俺の弟の話をしたのつて、遠回しに俺とお前がクソ遠い先祖と子孫だつて言いたかっただけだよな？」

アルミ「フフツ、バレちゃったようね。その通りよ」

天助「だよな。…そう思うと、互いが炎天掌を生み出したのは必然かもしれないな」

アルミ「かもね…」

…あ、そうだ。

アルミ「天助、最初らへんのページを見てみなさい。面白い名前が載ってるわよ」

天助「俺の名前が載ってるのは1000ページ中20ページ目なんだが？元々最初らへんだぞ？」

アルミ「目次の次だから…6ページ辺りを見て」

天助「おう…」ペラペラ

そこに載っていた名前は…

天助「…ぶーっ!?!」

『完成者の始祖 完成創太』

そう、私達の血筋は最初の完成者にも繋がるのだ。

天助「なんて異常な家系だよ…」

アルミ「さあ？私にも分からないわ♪」

ホントに、コレは”運命”かもしれないわね…

超危険…には見えない

♪????
?—ヤツメ穴

side 坂田日花

日花「……ッ」

ゴゴゴゴゴゴ…

地中から音がする。

厄災は始まったようだ。

ネロイズム「飛べる人は飛んだ方が良さそうだね」バサッ

ケーティ「そうね」フワッ

アルヤ「だな」ビュン

こころさんやサズズさん、セイダンさん達も宙に浮いた。

一応、この中だと甲と桃以外全員飛べるんだけどね。

メイ「……！日花さん」

日花「？」

メイ「あそこに一体います」

メイが指さした方向の気配を探る。

…いるわね。

日花「炎天桜舞！」 B L O O M !

…ズドッ！

「ゴボッ!?!」フツ

攻撃は地中にある何かに命中し、その何かは消滅した。

平尾「なるほど、そうやってやるんだね」ザッ

…バッ！

平尾の足元に穴が開く。

平尾「うわっ!?!」

甲「平尾!?!」…なんていうと思ったかい?」…飛べるのかよ」

平尾「習得したのさ」フワッ

甲は知らなかったようね。

…私にしか教えてないのかしら?

レイン「…でも、足元にいるヤツメはどうするの?」

サンズ「月斗曰く、普通に倒すには穴を開けてない状態でやらなきゃいけないらしい

が…」ギユン

ギユイーン!

桃「ブラスタ―?」

サンズ「コイツら、光線系に弱いらしいぜ?」スツ

ドガアアン!

「ゴオオ…」フツ

ケーティ「へえ…いいことを知ったわ」

「…」ニヤリ

セイダン「…何をするつもりだ?」

ケーティ「カンタンよ…こころ!」

「…ああ」スツ

…ゴオツ!

曰花「…!」

まさか、わざと穴をあけるつもり!?

「行くぞ…暴発的感情爆弾!」シユバババツ!

ヒュルル…

妖力で出来た爆弾は辺りに降り注ぐ。

「あと、冷静な結界」ピキッ

レイン「あ、防御はちゃんとするんだ」

…ドガアアン！

甲「…威力半端ねえ」

アルヤ「付喪神ってこんなに強いのか…？」

(※違います。この世界のこころが異常に強化されてるだけです)

こころ「…どうだ」ドヤア

ベテイ「ドヤア、じゃないわよ…」

ケーテイ「まあ、よくやったわ。後は私よ！」ギユン

…ドツ！

ケーテイ「ダークパルス！」ズドドツ！

(訳：悪の波動)

ドゴオ！

『ゴボウ…』

(野菜か！)

…この章のメインはネロイズムとメイなのに、あまり活躍できてないと感じてるのは私だけかしら？ (おい、メタいぞ)

sideルメ・パンドラ

ルメ「……………」じー

月斗「えつと、どうしたんだい？」

読者の諸君。

この表を見れば、私の言いたい事が分かると思うわ。

ヤツメ↓落とし穴

ルメ↓飛べる

他のヤツら↓なんと全員飛べる

んじや言うわよ。

はい、せーの

ルメ「飛べばよくね？」

月斗「……………ハッ!」（。 ㇿ。 ）

ザクロ「いや気付けよ」

穴だけではない

sideルメ・パンドラ

月斗がまさか『宙に浮く』という対策を思いつかないとはね。

IQ250はあるってきいたんだけど？

(月斗の姉のIQは300。まあ、月の頭脳だしね)

ルメ「で？穴を開けずに攻撃すればいいんでしょ？」

月斗「そうだよ」

ルメ「オーケー。波動弾！」ボツ

…ドゴツ！

「ゴボツ!?!」フツ

ルメ「よし」

ザクロ「…おいちよつと待て。なんでお前波動弾を撃てるんだ？」

え、何故って？

それは…

ルメ「作者が『やっぱ風だけじゃ火力が足りないから、波動系の技も使えるって事で

♪『だつて』

アルカ「…メタいわよ」

ルメ「ま、いいじゃない。次行くわよ次」スーツ

留美「はーい」スーツ

グレイ「了解」スーツ

フラン（…俺達、空気じゃね？）

マリリン（そうね…）

side 坂田日花

日花「えつと…」

コイツは…

「ガアアアアア！」

日花「何なの？」

甲「どうみても怪物だろうが!？」

日花「そういう事じゃないわ。コイツはヤツメなの？」

サンズ「…そうらしいぜ？」

日花「なるほど…」

ヤツメにはこんなヤツもいるのね。

じやないとただ宙に浮いてるだけで無双できるものね。

最も危険な厄災と言われている理由が少し理解できたわ。

日花「まあ、関係ないけどね！ヘルフレイム！」ボツ

ゴオオオオ！

「…ガアッ…」ブンツ

するとヤツメは触手的なモノを振り回し…

カキーン！

…ヘルフレイムをはじき返した。

日花「フア!？」

アルヤ「…炎系は効かないようだな？」

日花「そうね…吸収」ギュルルル

レイン「光線は任せてよ。ソウルブラスタ―！」

ドガアアン！

光線はヤツメに直撃したが…

「ガア!?!グウウ…」

攻撃に耐えた。

レイン「…へえ？」

サンズ「耐久も割とある、か。ガスターブラスター」ギユン

ドゴオオオ！

「グオオ…」フツ

流石に2発目は耐えられなかったようだ。

平尾「こんなヤツらがわんさかいるんだね…」

ネロイズム「別動隊は…」

ケーティ「ソレは心配ないわ。ルメやザクロ、アルカなどの精鋭がいるんだから」

(ルメ、ザクロ、アルカ、グレイ、留美でグループが作られてる。偶に月斗も混ざる)

ネロイズム「そうかい」

…ゴゴゴツ

セイダン「来たぞ！」

「ギイアアア！」

…個性の為に鳴き声をそれぞれ分けてるのかしら？

(本日2度目のメタ)

スカーフ「対策が分かっているなら、倒すのみ！」ギユン

…ズドツ!

スカーフ「ウイザーバレット!」

「ギイ…ツ」

ボンゾー「僕もやるさ!ウイザーバレット!」

…ダンツ!

「アアア…ツ」フツ

ケーティ「…あら、あつさり倒したわね」

セイダン（コイツらも成長したな…）

囲まれても問題ない

sideネロイズム

平尾「フアイアボム！」ポイツ

ドオン！

「ゴボツ…」フツ

…！

地面に、違和感を感じる。

メイ「…兄さん」

ネロイズム「…ああ」

2人『何かが大量に来る！』

日花「あら、気付いてたのね」

ネロイズム「しかも囲まれてるよ」

日花「…流石にソレは気付かなかったわ」

…ドゴオ！

『ガアアアア！』

大量のヤツメが地中から現れ、僕達を囲んだ。

サンズ「みんな分かつてるかも知れねえが…一瞬も隙を見せるなよ?」

…ドツ!

アルヤ「風斬・鎌鼬!」スパアン!

レイン「ソウルブラスター!」ドガアアン!

ベティ「ブレイブカッター!」ズバツ!

ドゴオ!

「ゴオツ…」フツ

「シヤアア!」シユツ

一体倒したが、別の一体が襲ってきた。

「こころ「冷静な結界」ピキツ

…ゴンツ!

「グオオ!?!」

「どうやら結界にぶつかったようだ。」

メイ「隙あり!斬ツ!」ダッ

…スパアン!

「グオオ…」フツ

アルヤ「いいぞメイ」ナデナデ

メイ「…ふふっ♪」

ネロイズム「……………」

…今はもう夫婦だから仕方あるまい。

それはさておき…

「ギエエエエ！」

うるさいコイツをどうにかするべきだ。

ネロイズム「バツテンスロウ！」シユツ

「ギエツ！」キイン！

ネロイズム「チツ」

はじき返された。

甲「俺の出番だ！ストーンパンチ！」ゴオツ！

…ドゴオ！

「ウゴオ!?」ヨロツ

なるほど、巨大な物体だと流石にはじき返すことはできないようだ。

…重いし当たり前か。

ネロイズム「コレで隙ができた。バツテンスロウ！」シヤツ

…ストツ!

「グオオ…」フツ

甲「ナイスだ」

ネロイズム「君こそ」

…立ち向かうことが大事だ。

もつと活躍してみせる。

side 八意月斗

まさか僕が宙に浮くという対策を思いつかなかったとは…

まさに灯台下暗しだね。

月斗「ムーンフォース！」ギユン!

「ゴボオ…」フツ

…地面に違和感を感じる。

月斗「来r「来るわよ」……」

僕に言わせてくれよお…(・ω・)(

ゴゴゴ…オ!

『グオオオオオ！』

留美 「何、コイツら!？」

月斗 「コイツらもヤツメだよ。穴から出てきてるだけ」

マリン 「穴から出ることがあるんですね…」

月斗 「もつとも危険な厄災なのは伊達じゃないってことさ」

フラン 「ケツイソード！」 ドツ

…ズバツ！

「ガアア…」 フツ

「ギイイ…」 ドツ

フランが倒したヤツメの隣にいた一体が攻撃してくる。

フラン 「うおっ!？」 サツ

マリン 「危ない！アクアカッター！」 ザバツ！

…スパアン！

「グウウ…」 フツ

フランが近距離で、マリンが遠距離。

いい連携だね。

アンテナ組の活躍③

side フリスク・ユメミル

frisck 「とりやつ！」ズバツ

「グオオ…」フツ

キャラ 「……………」

―数分後―

frisck 「せやつ！」ドゴツ

「グアア…」フツ

キャラ 「……………」

―さらに数分後―

frisck 「オラア！」バゴオ

「ガアア…」フツ

キャラ 「……………」

あのー…

frisck 「いい加減何か言ってくれないかなあ!？」

キャラ「いやあ、作業速いわね〜」

フリスク「敵を倒すのを作業って言うのはゲームだけじゃなかったっけ？」

キャラ「さあ？」

平次「…俺達、やっぱり空気だよな？」

絵奈「だね〜」

…ドオン！

「グオオオオ！」

フリスク「おっ、また来た！」

キャラ「……………はあ」スツ

フリスク「？」

何故か姉さんに止められた。

キャラ「いい加減他のみんなに順番あげたら？アンタの無双ゲーになってるわよ？」

…えっと、今のセリフがクソメタイことに気付いてるのかな？

フリスク「分かった、頼むよ」サツ

サンズJr.「へっへっへ…」ククク

ルマ「ど、どうしたの？」

♪MULASTORIE—Elcric

o r

♪ Under tale A U | Bone B e a t e r
サンズJ r. 「やつとオイラ達の出番だぜ！」ギユン
ドッ！

威勢がいいね。

ルマ「ボ、ボクも！」ギユン

ダッ！

フリスク「へえ…」

ルマってボクっ娘だったんだ。

(んな事どうでもいい)

「グオッ！」ブンッ

巨人は腕をサンズJ r. に向かって振り下ろす。

サンズJ r. 「そんな遅いモン、当たらないぜ！」サッ

サンズJ r. は自分の父親のように腕を素早く避ける。

「グウウ…オオ！」ブンッ

今度はルマを狙ったようだ。

ルマ「ボクを舐めないでよね！」スッ

ボオオ！

キャラ「火、出せるのね…」

ルマ「バーニングボーン！」 シャツ

ドゴオ！

ルマの燃える骨と巨人の黒い拳がぶつかる。

「グググウ…！」

ルマ「今だよ、サンズ！」

サンズJ r. 「おうよ！ハッ！」 ギュン

カッ！

サンズJ r. の骨が真っ赤に染まった。

アレは…

フリスク「ケツイ…！」

2人のタマシイはケツイなんだね。でもルマはともかくサンズJ r. はモンスターだ。

つまり…ココでサンズの研究成果が出てるんだね。

…流石サンズ、モンスターに負荷なくケツイを注入できるようになったんだ。

サンズJ r. 「オイラのスペシャルアタックをくらいな！」 ダッ！

シユルル…

サンズJ r. は何度か宙返りをし…

ドゴオ!

「グウ…!?」

2本の赤い骨を巨人に思いっきり叩きつけた。

サンズJ r. 「ボーン・ビーター!」

「グツ、グオオ…」フツ

…スタツ

サンズJ r. 「よっしやああ!」

ルマ「やったね!」

平次（次、俺達の出番になりそうだな…）

フリスク「よくやったよ、2人とも」

意外と強くてビックリしたよ。

アンテ組の活躍④

side 坂田平次

サンズJr. とルマの2人が巨人を倒した。

思ったよりだいたい強いようだ。

サンズJr. 「ハア、ハア…」 ドサツ

ルマ 「疲れた…」 ドサツ

2人はその場に座り込んだ。

フリスク 「ゆっくり休んでよ。さて、次の巨人を待とう」

平次 (次は俺と絵奈が倒す番だな)

…しーん。

キヤラ 「…? 巨人が現れないわね」

フリスク 「全員倒したのかな?」

平次 「…ちよっと待って下さい、あそこに何かがあります」

2人『…ホントだ』

そこには黒い人型の生物がいた。

「……………」

コイツ…

平次「グリッチに似ているな…」

絵奈「だね…」

黒い生命体といい、黒い巨人といい、この異空間はグリッチ系の敵が多すぎる。
グリッチ自体が怨念の塊だからなのか？

「……………」ドッ

平次「(来る!) サンダールーム!」バチッ!

「ツッ!」ドゴッ

…ビリッ!

絵奈「破った!?!」

平次「破られるのはいつもの事だ。問題は…」

コイツがソレをいともたやすくやった事だ。

キャラ「ケツイナイフ!」シャッ!

「……………」?

…ドスッ!

「!?ッ…」ヨロッ

キャラ「…あれ?」

キャラさんのナイフがあっさり命中する。

ただ…

「ッ…」ドッ

ダメージを受けているようには見えない。

絵奈「こつちに!?ザ・ワールド・ドローパーン!」クルッ

…バシユッ!

「…」ググッ

グリツチ(仮)はソレを止めようとしている。

平次「させねえよ。サンダーパンチ!」ピリッ

…ドゴオ!

「ッ…」!?」

俺の攻撃も命中した。

しかしキャラさんの攻撃同様ダメージが入ってるように見えない。

フリスク「…もしかして」

平次「？」

フリスク「コイツがこの厄災の親分かもね。だったらこの耐久も説明できる」

平次「なるほd「ソノトオリダ」：!？」

グリッチに似たヤツはなんと喋り出した。

「オレサマハコノヤクサイ『オール・ヨア・フォルト』ノオヤブンダ」

喋り方までグリッチ似かよ。

関係性を疑ってしまう。

「ジンルイニタイスルヤクサイトシテ、キサマヲハイジヨスル……」 スツ

……ゴオオオオ!

親分の手に黒い球体が現れる。

キャラ「……気を付けて！」

「シネー」 シュツ

……ドゴオオオ!

球体は地面にぶつかり、そこで爆発した。

サンズJr.「うわっ!？」

フリスク「結界！」ピキッ!

シュウウウ……

「…ホウ、フセガレルトハナ」

フリスク「とんでもないパワーだ…1000万はある」
「ワカルカ？オレサマノパワーハ…」

11111マン11111ダ

絵奈「!!」

平次「…何だと!？」

全部1、かつ8桁…アンデッド・グリッチ（2部のラスボスとして出たグリッチ）と同じパワーだ…

もう間違いない。

平次「コイツはグリッチと関係性がある…!」

アンテ組の活躍⑤

side 坂田平次

「…サツキカラグリッチトイッテルガ、ダレノコトダ？」

平次 「…過去にお前に似たヤツと戦ったことがあつてな」

過去というか、前世だが。

(お忘れかもしれないがコイツの前世はルイージ)

「ホウ…。ソレデオレサマノパワーヲシツテカンケイセイヲウタガツテイタノカ…。シ

リタイコトハシツタ、ツヅケルゾ」スツ

話を通じるヤツのようだ。

…グリッチはコイツの劣化版か？

フリスク 「ハッ！」ギユン

ドッ！

フリスク 「ケツイソード！」シヤツ

「フンッ！」バツ

キイン！

フリスクさんの赤い剣とAYFの黒い触手がぶつかる。
キャラ「ナイフアレイ！」 シャッ

「チッ、コイツハオトリカ…！」 ドロツ
ベチャッ

AYFは別の黒い触手を出してナイフを止めた。

フリスク「そう思ったかい？…大間違えだよ！」 ギユン
「ヌツ!？」

フリスク「せいっっっ！」 バッ

…ドゴォ!

「グウ…」

絵奈「ダメージを受けた！」

「ユダンシテイタ…ツギハナイゾ」

フリスク「…ははっ、そのようだ」 スッ

…俺達も動くべきだ。

平次「絵奈」

絵奈「…うん」 カキカキ

絵奈はとある絵を描き始めた。

グリッチに対する特效薬みたいなものである。

恐らく同類のコイツにも通用するだろう。

ただ…絵を描き上げるのにかなりの時間を要する。

平次「時間稼ぎだ！」ビリッ

ダッ

「…コンドハオマエカ」

平次「ボルトスラッシュ！」バチッ

スパアン！

雷の斬撃を繰り出す。

しかし一発だと避けられるだろう。

平次「オリヤアア！」ビリビリ

バババッ！

大量に発射する。

「ゼツタイアタルヨウニシカケタカ…ダガザンネンダツタナ！」ドロッ

シュッ

A Y Fは体を変形して攻撃を避けやがった。

平次「…気持ち悪いな」

「アタラナケレバイイ…コンドハオレサマノターンダ！」 シュルル
ギユイーン！

…光線か!?

グリツチが発射したのは見たことないが、前世でミールさんが見たことあると言つてたな…

キャラ「コレはまずいわよ！」

フリスク「結界！」 ピキツ

平次「補助します！」 ギユン

「ブラックレーザー！」

ギユオオオ！

フリスク「ツツ!?(なんだこの威力は!?)」

ピキピキツ…

結界にヒビが入る。

まずい…!

キャラ「させないわよ!ハアツ！」 ギユン

3人でエネルギーを合わせ、結界を維持する。

「…ホウ？」

シユウウウ…

平次「何とか、止めることができましたね…」

フリスク「ああ…でもさっきのがもう一発きたら避けざるを得ないよ」

キャラ「そうね…」

平次「絵奈、進捗状況は？」

絵奈「3割できたよ」

平次「…よし」

調子はいよいよだ…

時間稼ぎは続く。

アンテ組の活躍⑥

side 坂田平次

フリスク「サンズJr.、ルマ。体力はどうだい？」

サンズJr.「もう充分休みましたよ」

ルマ「戦いに参加します！」

フリスク「オーケー……」

ザッ

「マサカサツキノレーザーガトメラレルトハオモワナカッタゾ…モウイツパツダ」

ギユイイン……！

キャラ「また!？」

「コンドコソヤキツクシテヤル！」ドッ

ギユオオオ！

絵奈「平次、危ない！」

再び黒い極太光線が俺に向かって飛んできた。

こんなヤツがレーザーなワケないだろ……！

平次「(タイミングをミスしたら確実に当たるな) …ココだ!」ダツ
シュツ…

なんとかブラックレーザーを避ける。

掠りでもしたら大ダメージだっただろうな…

「…チツ」

キャラ「ナイフアレイ!」ギユン

シュバツ!

「マタカ。コンナモノヨケルノハゾウサモナイ」ドロツ

キャラ「…ただのナイフだと思った?」ニヤリ

そう言つてキャラさんが指を弾くと…

「…ナツ!」シユルル

ナイフは縄へと変化し、AYFを縛った。

キャラ「今よ、WD双子!」

ギユン!

2人『ガスターブラスター!』

ドガアアン!

「グワアアア…!」

この攻撃もダメージを与えたようだ。

絵奈「半分できた！」

平次「その調子だ」

ヨロツ

「グウ、ソロソロホンキヲダシタホウガヨサソウダナ…」ゴゴゴ

フリスク「本気…?」

ギユオオオ…!!

「…イクゾ?」

ゴオオオオ!

平次「ツ…!?!」

「イマノオレサマノパワーハ一オク一マン一ダ」

A Y Fからとてつもない量のエネルギーがあふれ出している。

パワー一億越えかよ…!!

(実はというと、フリスクとキャラのパワーはそれぞれ2430万と2340万である。

しかしA Y Fの耐久は異常)

フリスク(さっきのはホントに本気じゃなかったのか…!)

流石にコレじゃ絵奈が今用意している特効薬の効果も下がるな…マズい。

「ドウシタ？オレサマノパワーヲシツテオジケツイタカ？」

キヤラ「怖気づく？そんな事する程私達はヒマじゃないのよ！」ギユン
ドツ！

キヤラ「ケツイソード！」ズバツ！

「…フン」ガシッ

赤い剣は黒い触手に掴まれてしまった。

「カマセイヌガ」

キヤラ「フフツ…後ろ、気をつけなさいよ？」

「ウシロダト「せいっ！」ヌウ…！」ズバツ

キヤラさんに気を取られていたA Y Fにフリスクさんが後ろから攻撃したが、ダメー
ジが入ったようには見えない。

フリスク「…耐久は健在か」

「ナマハンカナコウゲキハツウジナイゾ？」

絵奈「7割…！」ササツ

平次「……ッ」

特効薬以外で正直A Y Fに対する対抗策が思いつかない…

考えろ、俺…！

アンテ組の活躍⑦

side 坂田平次

平次「…今しかないか」

厄災は持久戦だから、消耗が結構激しいコイツはあまり使いたくはなかったが…

平次「スーパー化！」ピリツ！

シュウウウ…

S平次「本気モードだ」

「…ヘンシンシタカ」

フリスク「スーパー化…」

キャラ「私達はできないのよね…」

S平次「ソウル覚醒があるんじゃないですか？」

フリスク「すでに常時発動状態だ、察してくれ」

S平次「あ…なるほど」

じゃあパワーアップできるのは俺だけか…

「キサマノチカラヲミセテミロ」グッ

ゴオッ!

黒い触手が襲い掛かる。

S 平次 「…ハアッ!」 ギユン

ビリビリ…!

S 平次 「サンダーキャノン!」

ドガアアン!

この技は通常時でも使えるが、この状態だと連発できる。

(現在の平次のパワー:4500万)

「…ホウ」

S 平次 「ドリヤア!」 ドツ

ドゴオ!

拳に雷を纏い、ストレートをかました。

「ヌウ…コンドハコツチノバンダ!」 シュルル

シャッ!

A Y F もパンチを繰り出す。

S 平次 「結界!」 ピキッ!

…ガンッ!

パンチは結界で防御した。

…流石に素手じや止めれないからな。

「チツ…フンツ…」ブンツ

今度は触手攻撃か。

フリスク「ソイツは僕達に任せてよ！ケツイソード！」ズバツ！

ルマ「バーニングボーン！」ドゴツ！

ドサツ

黒い触手はちぎれ、地面に落ちて消滅した。

S平次「感謝します」

フリスク「どういたしまして」

「ジャマナヤツラダナ…」

S平次「そもそも一対一の戦いじゃないだろう？」ピリッ

前提が違うんだ。

S平次「サンダーキャノン！」ドガアアン！

「ヌウツ」ドロツ

A Y Fは液状になることで攻撃を回避しようと試みる。

S平次「んなモンもう分かってるんだよ！」パチン

…ビリイッ!

光線がはじけた。

「グオオッ!?!」

キャラ「ダメージが入った!」

S平次「絵奈、進捗は?」

絵奈「9割…!」

よし、もう少しだ。

変身時間は10分も残ってないだろう。

「オノレ…!」グッ

ギユイイン…!

フリスク「ブラックレーザーか?」

キャラ「…いや、違う!」

ギユオオオオオオオ!

AYFが溜めているエネルギーは禍々しい雰囲気を放っている。

それはまるで憎しみのような…

S平次「ッ、逃げますよ!」ダッ

グイッ

2人『うわっ!?!』

近くにいたWD双子を片手ずつに抱えた。

タタッ

フリスク「アレはかなりまずそうだね…」

キャラ「結界なんかじゃ防ぎっこないわ…」

絵奈「…平次!」

S平次「終わったのか!?!」

絵奈「うん!はいっ!」ポイツ

絵奈は描き上げた例のブツを投げてきたので、ソレをキヤツチする。

絵を描き終わった絵奈も一応光線から逃げている。

フリスク「ソレは!?!」

S平次「グリツチに対しての特効薬ですよ…」

その名も…

『グリッチエネルギー』

平次「コイツがあれば、恐らくアイツを倒せます」

アンテナ組の活躍⑧

side 坂田平次

S 平次 「一応、リスクがありますが…馴染むのに時間がかかる、ソレだけです」

フリスク 「なるほど」

キャラ 「…でも、ソレを使うのは？」

S 平次 「通常時この中で一番強いフリスクさんが適任かと」

フリスク 「僕？」

S 平次 「はい、お願いします」

フリスク 「…いい考えだね」

…まさか、この流れは。

フリスク 「僕が何を言うか察したようだね？」

不採用だよ」

絵奈「でも、なんで…」

キャラ「そうよフリスク、アンタが適任なのよ!？」

フリスク「いや…適任は平次、君さ」

平次「!？」

俺…だと…!？」

いや、どう考えてもパワーが一番高いフリスクさんが適任のハズだ。
…何か理由があるのか？

フリスク「理由はその内分かるよ。馴染むまでも時間稼ぎなら僕に任せて」
S平次「ツ…分かりました」

「…ハナシハオワリカ？」

光線を放ち終わったAYFが話しかけてきた。

フリスク「ああ……………終わりさ」

S平次「…？」

何故かフリスクさんは間を置いて言い放った。

…まさか、な。

フリスク「…行くぞ！」ドツ！

「……………フン」

S平次「…よし」スツ

…ギユウウン！

グリッチエネルギーは俺の中に入っていく。

ドクン

S平次「グツ…」

絵奈「平次、頑張つて！」

S平次「グオオ……！」

side フリスク・ユメミル

ドゴツ！

フリスク「ぐあつ！」

平次は絵奈の補助を受けながら今グリッチ化している。

僕とキャラはそのための時間稼ぎをしようとしている所だが…AYFはやはりかなり強い。

「フン、ヤハリキサマノパワージャタリナイナ。フタリデヤットサツキノヤツ（S平次）

二ナルテイドカ……？」

キャラ「舐めないで……ッ！」ギユン

シャツ！

姉さんはナイフを飛ばす。

「ジャマダ」キイン

しかしAYFはソレを容易く弾く。

ヤツにとっては赤ちゃんパンチなのだろう。

フリスク「何とかしないと……！」ヨロツ

リーダーとして……アルミさんの一番弟子として……！

アルミさんなら、こんな状況で何をする……？

ギユイイン！

「ブラツクレーザー」

フリスク「……チイツ！」ダツ

……ドガアアン！

光線は避けた。

……しかし思考が上手く働かない。

キャラ「レインオブナイフ！」シユバツ！

「コシヤクナ……！」ブンツ

ガキイン！

キャラ（少しの邪魔でもいい……1秒でも時間を稼ぐのよ！）

フリスク「……そうか！」

忘れてたよ……この技を！

フリスク「時間停止！」

←ブウウウン…

A Y Fは流石にこの空間では動けないようだ。

フリスク「気配を消して…後ろに回り込む」

…スタツ

フリスク「再生！」

→ブウウウン…

キャラ「オラア！」 シャツ

「コノオ！」 キイン

A Y Fは姉さんに気を取られている………………。今だ！

フリスク（……………！）

僕はケツイソードでA Y Fを斬りつけた…

…ザクツ

1 番弟子の死とグリツチ化

side フリスク・ユメミル

僕はケツイソードでAYFを斬りつけた……しかし。

…ザクッ

フリスク「グフッ……!!」

僕の胸は黒い触手に貫かれていた。

こうなる事は、予想して、いたんだけどね…

「…スキフツイタノハホメテヤロウ。ダガ…ツメガアマカツタナ」
ズッ

AYFは触手を抜く。

フリスク「ガアッ…」ヨロッ

キャラ「フリスク！」ダッ

WD双子『フリスクさん!?!』

僕らはや放置してもすぐ死んでしまうだろう。

……やるしかないか。

フリスク「…姉さん、そこを動かないでくれ」

キャラ「でも…！」

フリスク「平次は後少して馴染むハズだ…だからもう戦わないでくれ…」スツ

ギユン…

僕が出したのは…自分のタマシイだった。

キャラ「…!?!」

フリスク「オール・ヨア・フォルト…知ってるかい？タマシイというモノにはエネル

ギーが大量に詰め込まれているんだ…」ギユイイン

「…マサカ！」

フリスク「おお、もう気付いたのかい？」

僕がこの命を懸けてみんなを守るのさ…！

ピキッ

フリスク「ツ…」

僕は自らそのタマシイを割ろうとする。

「ヤメロ…！」 シャツ

A Y Fは僕の行動を阻止しようと触手を出す。

しかし…

フリスク「そんなモノ無効さ」スツ
僕は自身のタマシイで防御した。

すると…

ピキッ

さらにヒビが入る。

キャラ「やめて、そんな事したら…！」

フリスク「大丈夫、生き返るさ」

キャラ「それでもよ！そんな自殺行為をしなくても…「姉さん」…？」

フリスク「…離れていてくれ」

キャラ「ツ…！」

もう僕は止まらないよ…

こうしないとみんなは助からない。

カッ…！

僕のタマシイが突然光りだす。

「チッ、クソッ…！」

フリスク「じゃ、またね…みんな。

ソウル・エクスプロージョン…。
パリィン…
僕のタマシイは割れた。

そして…

ギユオオオオオツ…!!

膨大な量のエネルギーを伴った爆発と共に、僕は1度目の死を遂げたとき。

side 坂田平次

キャラ「フリ、スク…」ドサツ

キャラさんはその場で跪いた。

当たり前だ、自分の弟が目の前で自爆して絶望しないワケがない……ツ。

シユウウウ…

「グホツ、アノクソニンゲンガ…!」

煙は晴れ、その中から現れたのは大ダメージを受けたと思われるAYFだった。

絵奈「…平次?」

G平次「……フリスクさん、俺は貴方の思いを無駄にはしません」

遂にグリッチエネルギーが馴染み切った。

「…ア?」

フリスクさん、貴方は生き返ったら真っ先にキャラさんにしばかれるでしょうね…

ただそんな未来になるのも、俺の行動次第。
ケリをつけてやる……!

G 平次「…覚悟はいいか？ オール・ヨア・フォルト」

A Y F、討伐完了

side 坂田平次

G平次「…覚悟はいいか？オール・ヨア・フォルト」

「カクゴダト？」

G平次「……！」ギユン

ドツツ……！

俺はとてつもないスピードでA Y Fとの距離を縮めた。

「ムツ……」

G平次「てやあッ！」バチツ

…ドゴオ！

攻撃はA Y Fに命中する。

ダメージはどうだ？

「ガハッ…!？」

かなり入ったようだ。

フリスクさんの身を挺した攻撃により弱体化したのだろう。

G 平次 「サンダー……！」 バチバチ

「コノツ……！」 シャツ

触手攻撃か。

まとめて吹っ飛ばしてやる……！

G 平次 「……キャノン！」 ギユン

ドガアアン！

雷を纏った極太光線がA Y Fに向かって飛んでいく。

「コウナツタラ……ブラックレーザー……」 ギユオオオオ！

それに対抗すべくA Y Fも光線を放つ。だが……

……ギユオン！

俺の光線はソレを吸収し、威力を増幅した。

「ナニツ……グワアアア……！」

シユウウウ……

キャラ 「凄……」

絵奈（やっぱりグリッチエネルギーは強いね……）

ザツ

G 平次 「……どうだ？ オール・ヨア・フォルト」

「グウウ…コノツ…！」

…シヤツ！

後ろから音がする。

G 平次 「油断はしないぞ？」 スツ

ズバツ！

手刀で斬ったそれは黒い触手だった。

「スキモツケナイトハ…」

G 平次 「続けるぞ…！」 ドツ！

「ツ…！」

ギューン！

G 平次 「ボルテツカー！」 ビリッ

…バゴオ！

「グフツ…グオオ…！」 ヨロツ

体勢を崩したな…？

G 平次 「オラア！」 ドガッ

「ガア…キサマ…！」 シュツ

G 平次 「フンツ」ズバツ

隙は突かれないぞ。

「クソツ……オレサマノ、マケノヨウダ……」

G 平次 「何だ、降参したフリをして俺達を騙すつもりか？」

「オレサマヲヒキヨウナヤツラトオナジニスルンジャネエ！」

G 平次 「自分がそうじゃないなら証明しろよ」

「……イイダロウ。マズハナレロ」

G 平次 「………」 パツ

A Y F を離す。

……油断はしないようにしながら。

「キサマヲハコノオレサマ、オール・ヨア・フォルトニショウリシタ……サラバダ」

G 平次 「……！」

シユウウウ……フツ……

A Y F は少しずつ消えていく。

「ケントウヲ……イノル……！」

パアア……

そしてA Y F は完全に消え去った。

G 平次 「……ああ、絶対終わらせてやるさ」

ヤツとは…何故かまた会える気がする。

♪全てあなたの所為です。――

携帯ゲームの裏、フタを開けてみて、

空っぽだったハズなのに、淡い光が漏れていたの、
いたづらに覗いたら、電池が腐っていた。

――中略――

心地よい音　頭蓋の中、

ひとりでに骨が折れ、

たわむれに書いた傘の中、

全てあなたの所為です。

…たくさんの目が光り、見つめていたのか。

All your fault. 削除

閑話：火桜神モード

sideアルミ・マリオ

火桜、という木を覚えているかしら？

私が完成した時、あの空間で見たとても綺麗な桜の木。

あの木について詳しく調べてみた。すると…

『火桜は死を司る妖怪桜、西行妖と対を成す存在である』

と、書物に書いてあった。

白玉楼に行ったことのある西行妖は実際に見たことがある。

(白玉楼に行ったのは番外編短編集参照)

アルミ「生命、ねえ…」

だからあんなに…生き生きとした咲き方をするのかしら？

私はそんな事も意識しながら炎天桜舞を放ったりする。

アルミ「私、神力が一応あるから神と言っても間違つてはいないのよね…」

ニンゲンがベースなので種族：神ではないが。

神名、どうしようかしら？

アルミ「まず、私の能力は…」

『時空を操る程度の能力』

『世界線を弄る程度の能力』

『生命を司る程度の能力』

……ん？

アルミ「『生命を司る程度の能力』？」

いつの間にこんなモンを…

どれどれ？

*あの世の広場での復活を無条件にその場で発動できる。しかし1人1度のみなのは変わらない。

なるほど…って

アルミ「生命を司るって、火桜の異名そのままじゃない!？」

「その通り♪」

後ろから声があったので、振り返ってみると…

いかにも和風な女神がそこにいた。

しかも最高神が。

アルミ「アンタは……天照大御神？こんな天界の公園にこの世界の最高神がどうして

ココに……？」

天照「貴女に用があつて来たの。ちやうど火桜についてよ」

アルミ「……！」

心を読まずとも、その言葉でなんとなく察しがついた。

天照「貴女、火桜にちなんだ技をよく使うでしょ？」

アルミ「ええ……」

5種火桜、炎天桜舞、終炎の火桜ね。

天照「恐らくソレが原因で、貴女は火桜の神になったようなの。以前はそんな神いなかったし、貴女が神力を持っているからちやうどよかつたのかもね」

アルミ「私が、火桜の神に……？」

天照「そう、貴女が火桜の神……火桜神よ」

ひざくらしん

この6文字が私の脳内に刻まれた。

アルミ「……ッ！」ギョルル

その時、私の中で大量の神力が渦巻いた。

カッ！

そして私は輝き……

天照「…ソレが貴女の神としての姿ね。はい、鏡」スツ
HMアルミ「…！」

(HM↓火桜神モード)

私の黒髪は赤みがかかっており、目は黒目になっていた。

そして…髪に大きな火桜の花びらがついていた。

HMアルミ「コレは？」

天照「飾りね」

あ、飾りなのね。

HMアルミ「ちなみにこの時の私のパワーは……フアツ!？」(。D。)

『137. 5億』

爆上がりしていた。

天照「あら…貴女強いわね？ニンゲンの状態から強かったからかしら？」

HMアルミ「は、はあ…」

こうして私は火桜神モードを会得した。

分散して効率化？

♪MULAストーリー—Umilovania
sideマリン・マリオ

マリン「危ない！アクアカッター！」ザバツ！

…スパアン！

「グウウ…」フツ

フラン「危なかった…」

マリン「少しは注意しなさいよ！」

フラン「ふあい」

これだから私の夫は…！

…ゴオツ！

『グオオオオオ！』

ルメ「もつと来るわよ！」

アルカ「んなモン分かってるわ！」ポツ

ドゴオ！

留美「てやあ！」バゴツ

「ガア…」フツ

フラン「(今度は注意しないとな)ケツイソード！」ギユン
バツ！

…ちゃんと注意してるようね。

(思考を読んだ)

マリン「ハイドロポンプ！」ザパアン！

月斗「…！(いい事思いついた！)…よっ」スツ

…パキツ！

マリン「!？」

ハイドロポンプの起動が90度曲がった!?

月斗「僕が能力を利用して曲げたのさ」

マリン「なるほど…」

…ドゴツ！

「ゴオ!？」

そうすることで、複数の敵に攻撃を当てれるわね。

フラン「オラア！」ズバツ

「ゴォ…」フッ

ザクロ「でりやあ！」ザシユツ

ルメ「風遁螺旋丸！」ギユルル

バゴォ!

「ギィ…」

…一体、いつ親分が出るのかしら？

結構戦ってる気がするんだけど。

side 坂田日花

日花「…とあることを思いついたんだけど」

平尾「？」

日花「このチーム…人が多すぎるから分けられない？」

全員『…激しく同意』

見事にみんなの意見が一致したわね。

日花「じゃあココには15人いるから、3人1組で敵を殲滅しましょう。分け方は…」

結果、こんな感じになったわ。

日花、平尾、甲

アルヤ、メイ、ネロイズム

レイン、サンズ、ベティ

ケーティ、こころ、桃

セイダン、スカーフ、ボンゾー

日花「お互い離れすぎないようにね……」

そしてチーム同士で少し距離を取る。

甲「おい日花」

日花「？」

甲「絶対バランスを考えてこの3人にしたよな？」

日花「……ええ、まあ」

私が近距離、甲が中距離、そして平尾が遠距離ね。

『ゴボオオオ……！』

なんか大量にヤツメが襲い掛かってきた。

日花「ゴボウ、ゴボウって……」ボツ

……バツ！

日花「うるさいのよ！ 炎天掌！」ズガアン！

「ボオ!？」

甲 「黙ってやがれい！」 ボコッ

…ドゴオ!

「ボオ…」 フッ

コイツら、ストレス発散に最適ね。

平尾 「僕も少し煩わしく感じてたんだ。ファイアボム…ラツシユ！」

ポイポイポイツ!

日花 (平尾も多少イラついてたのね…)

甲 「投げすぎだろ…よつと」 サッ

「…ゴツ?」

平尾 「(2人とも離れたね)…起爆!」 カチッ

…ドガアアン!

『ゴオオオオオ!?オオ…』 フッ

1 番倒したのは平尾ね…

大きくなるタイプの敵

sideネロイズム

メイ「斬ッ！」ズバッ

アルヤ「どうっ！」シヤッ

「ゴオ……」フッ

ネロイズム「バツテンスロウ！」バゴッ

「ガア……」フッ

敵が来ては、倒す。

そろそろ親分が来ると思うが……遅くないかい？

『ギイイイッ！』シヤッ

複数のヤツメが僕を狙って触手を振り回す。

ネロイズム「その程度で僕を攻撃できるとも？てやあ！」ギユン

ズドドドッ！

『ゴボオ……!?!』

魔力を纏った拳のラツシュをお見舞いした。

メイ「風斬！」ズバツ

『オオ……』フツ

アルヤ「いい連携だな」

メイ「それは……」

ネロイズム「そりや……」

2人『兄妹だからね』

……フツ、同じことを考えていたようだ。

「シヤアアア！」

アルヤ「うおつ、ほっこりしてるヒマはないぜ。天空掌！」ズガアン！

ネロイズム「ほっこりしていたつもりはないけどね。魔人拳！とうりやあ！」バゴオ

！

（ゼル伝のガノンかよ！）

「シエエ……」フツ

某ゲームの技を真似してみたが、割と威力が出るようだ。

アルヤ「……お？」

ネロイズム「どうしたんだい？」

アルヤ「アレ見ろよ」

「グオオオオオ！」 ザッ

見てみるとさつきまでのヤツメと比べて一回り大きいのがいた。
こころなしか鳴き声の「オ」が1文字多い気がする。

(メタい)

シュツ (触手攻撃)

アルヤ「よっ…攻撃手段は変わらないようだな」サッ

メイ「だね。…双風斬！」ズバッ

なるほど、2段攻撃か。

「グオオオ…」 フッ

ネロイズム「サイズが大きくなっただけのようだね」

アルヤ「…いや、それでもないようだぞ？」

ネロイズム「えっ? ……は?」

「ゴオオオオオ！」 ダンッ

さらに一回り大きいヤツメが現れた。

ネロイズム「コレは…しばらくかかりそうだね」

アルヤ「…!？」

突然とんでもない事を言うメイ。

…ただ、理解はできる。

月斗「…なるほど、分かった」スツ

アルヤ「ど、どういうことですか？」

メイ「アルヤ、考えれば分かると思うよ…?」

アルヤ「……………あ、そういうことか！」

アルヤも少し考えて理解したようだ。

さて…

ネロイズム「討伐、開始だよ」

アルヤ「風斬・鎌鼬！」ズバツ

飛斬撃で触手を斬り落とす。

メイ「ありがとう、アルヤ！鳴鳴斬り！」ギユン
斬ッ！

「グオ……！」

メイは技を使い触手を一気に5本斬り落とした。

しかしまだ大量にある、油断はできない。

ネロイズム「バツテンスロウ！」ギユン

恐らく巨大ヤツメはこの弾幕を防ごうとするはずだ。

シュバツ！

「ゴオオオ！」サツ

…予想通り！

アルヤ「(またかよ)：風斬・鎌鼬！」ズバツ

再びアルヤが触手を斬り落とすことでソレを阻止する。

ズドドドツ！

「グオオオツ……！」

触手を数本斬り落とし、本体に少しダメージを与えた。

アルヤ「おいネロイズム、俺はいつから触手防御の阻止要員になったんだ？」

ネロイズム「君が勝手に阻止しているだけじゃないかい？」

アルヤ「ぬっ…（コイツ知っててやってるな、絶対）」

メイ「はいはい、ケンカはやめて。ヤツメに集中してよ」

2人『…はい』

月斗（2人ともメイにはかなわないようだね）

「グオオオオ！」ギユン

アルヤ「うおっ、何か来るぞ！」

…恐らく光線だ。

ネロイズム「下がるんだ！」スツ

「…ゴオツ！」

ギユオオオ！

巨大ヤツメが口（のような部位）から出したのは案の定光線だった。

ネロイズム「跳ね返してやるさ…リバーズ！」カツ！

…ギユイイン！

よし、方向を逆さにするのは成功した。

「グオオオオツ!?!」サツ

ドシユウ!

「ガアア……!」

巨大ヤツメは咄嗟に触手で防御し、おかげで触手は消し飛んだ。

月斗（触手はほとんど斬り落とされたから、後は本体に集中するだけだ。…でも、本当の戦いはこれからだよ）

ネロイズム「…?」

アルヤ「どうした?」

ネロイズム「様子がおかしくないかい?」

「グウウ……ッ!」ドロツ

巨大ヤツメは突然溶けだした。

そして…

「ガルルルル……ッ!」

どう見てもヤツメの原型すらとどめていない、獣のような形状になった。

アルヤ「ファ!?!」(。D。)

メイ「第二形態……!」

ネロイズム「恐らく身体能力も上がってるだろうね…」

油断は禁物だ。

ヤツメを、ぶつ倒す!②

sideネロイズム

「ガルルルル……!」

ギューン!

獣はエネルギーを纏った。

ネロイズム「来る……!」

「グルアウー!」ドッ!

こちらに向かって突進してきた。

メイ「次元斬り!」ズバッ!

メイは空間を斬った。

恐らく軌道を変えるつもりだろう。

「グルッ……パウッ!」ギューイン

しかし獣は止まり、すぐエネルギーを溜めはじめた。

メイ「!?」

ネロイズム「(対応するように光線だ?!)…ッ!」ダッ

「グワア！」

ドガアアン！

ネロイズム「メイ、下がれ！…リバース！」ギユン

ギギツ：

ネロイズム「…ツ」

なんとか逆さにできたが…光線はさつきと比べて威力が数倍上がっていた。

メイ「大丈夫…？」

ネロイズム「ああ…ただ何発も跳ね返すことはできなさそうだ」

「ガルルルル！」ダッ

今度はアルヤに向かって突進した。

アルヤ「うおつ、俺か…受けて立つぜ！」ギユン

…!?

ネロイズム「よせ、大ダメージを受けるぞ！」

アルヤ「出番が少ないからって、あまり舐められちゃあ困るぜ？ハツ！」ゴオツ

アルヤの手に大量のエネルギーが集中する。

アルヤ「本来ならコイツは最後にやるべき技なんだが…まあいい。くらえ！」

「バウツ！」ギユイイン

受けて立つとばかりに獣は光線を溜める。

アルヤ「んな光線弾いてやるぜ! マリオファイナル!」バツ
ゴオオオツ!

風の双竜が獣に襲い掛かる。

アレは、マリオ家の奥義か…

「…グルオ?!」

ズドオオツ!

獣の光線は容易くかき消され、双竜は獣に命中した。

アルヤ「へへっ、どうだ!」

ネロイズム「…意外に強いようだね」

アルヤ「まあな。…おっと、もう動くようだぜ?」

「ガルルツ…」

傷は少しついているが、ピンピンしているようだ。

メイ「…どうする?」

ネロイズム「近接攻撃でやってみよう」ギユン

ドツ!

「グルアー!」ジャキツ

僕が獣に向かって突撃しているのに気付いたのか、獣は口を開けている。食べるつもりなのか？

「シャアアアア！」 ニュル

ネロイズム「……！」

口の中から触手が出てきた。

ハッキリと言って気持ち悪い。

ネロイズム「ツッ！」ズバツ

すぐに斬り落とす。

「グオ!?!」

バツ!

獣の背中を狙う。

ネロイズム「魔人拳！でりやあ！」ギユン

バゴオ!

「グルオオオ……！」ヨロツ

……やっぱり!

ネロイズム「物理攻撃の方が効くようだね」

メイ「なら……！」ギユン

ドツ!

「…グルツ!?!」

メイ「ぶった斬る!冥冥斬り!」ギユン

ズ

バ

ツ

!

「グオオオオオ…ツ!」

メイの技をくらった獣は大ダメージを受けた。

…しかし。

アルヤ「まだ倒れないな…」

ネロイズム「……………」

見た所第3形態はないようだが、相当しぶといね…

ギョーン!

「ガルアアア!」

獣は今度こそ確実に当てようと、さらにエネルギーを与えてきた。

ネロイズム「ツッ!」ザッ

…負けないぞ!

ネロイズム「ハアアアッ!」ゴオッ!

本気で逆さにしようとする。

そうでもないかと能力が発動できないぐらいに、極太光線の威力は高かった。

…その時だった。

カッ!

メイ「…! (お兄ちゃんから、神力を…!)」

ネロイズム「でやあああつ!」

ドギユウウン!

…何故だろうか、さつきと比べて体が軽い気がした。

「グオ!?」ドゴオ!

光線は獣に命中し、獣は怯んでいる。

しかし反射するだけじゃ、物理攻撃じゃないからダメージは入らない…なら!

ネロイズム「一気に決着をつける！…メイ！」

メイ「…うん！」

カッ！

アルヤ（メイから魔力、ネロイズムから神力だと…？）

ギユイイン！

僕は拳、メイは刀にエネルギーを纏う。

そして圧縮し威力を底上げる。

「グ、グオオオー」ダッ

獣はこちらに突進してきた。

…好都合だ！

ネロイズム「必殺…！」ドッ

メイ「奥義…！」

僕はジャンプし、メイはそのまま突撃した。

「ガ!？」

ネロイズム「デビルショック！」

メイ「天使の聖斬!」

ズドオオオオオオオツツ!

アルヤ「…ツ!(なんだ、このパワー!まさか例のヤツが覚醒したのか!?)

月斗(コレが…!)

「ガッ…グオオオ…ツ!」

フツ…

そしてヤツメの親分は消え去った…。

♪????
——ヤツメ穴

いつも行く公園に、通ったことのない道があった

草だらけで、整備もされず、山奥に続いてた

暇だったので通ってみました、数分ほど歩いてみると

見たことのないトンネルがあった、仕方ないので入りました

壁を見ると穴が開いてたので、指をつっこんだら

ちよん切れた

怖くなったので帰りました 嫌な気分になりました

蛙が鳴いたので急ぎました 走ったら転びました

ヤツメ 削除

ウミガメ 再生までもうしばらくお待ちください。

ベティ「そんな…フリスク…」

キヤラ「…ごめんね、ベティ。止められなかったわ」

ベティ「キヤラは何も悪いことをしてないから、謝らなくていいよ…」

…フリスク。

ベティ「…復活したら、しばらく口を聞かないようにするわ」

突然の異空間

side 坂田日花

ヤツメは無事に倒された。

：しかし、AYF戦でフリスクさんが死んでしまった。

日花「流石に無茶ですよ…」

キヤラ「でしょ？目の前で自爆したから思考停止したわよ…」

どうやらフリスクさんはダメージと時間稼ぎの為に自身のタマシイをAYFの至近距离で割り、大爆発を起こしたらしい。

それのおかげで平次は完全にグリッチ化できたようだけど…うん、何度聞いても無茶ね。

キヤラ「弟子は師匠に似るってのはホントのようね…はあ…」

日花「あ…」

確かにアルミさんはテンプス・タイムに圧勝できる程の実力はあったのに、敢えてワールドハッカーを使った。

：50歳を過ぎてからアルミさんは少々ミステリアスな人になってるから、思考が読

めないわね。

(実はアルミ、普通に体力切れだったから手段が他になかっただけである)

キャラ「…そろそろ寝ましょう、ウミガメは明日よ」

日花「はい…」

私はそのまま布団にくるまり、眠りについた。

……?

日花「ツう…」むくっ

目を覚ますと、そこは真つ暗な空間だった。

それなのに、自分の手はハッキリと見える。

夢の中かしら…?

「違うぞ」

日花「！」クルッ

振り向くと、そこには獄炎と月のような模様の入った服を着た男性がいた。

「ココは夢の中ではない、俺が作り出した空間にお前の意識を飛ばしたただけだ」

日花「意識を…?」

「それと今…恐らくお前の体は脳が止まっているだろう」

…ッ!?

日花 「なんですすって!？」

「待て待て、死んでるワケじゃない。言わば植物状態だ」

日花 「対して変わらないじゃない」

「…うん、そうだな。そろそろ本題に入ろう」

日花 「？」

「坂田日花、お前がこの空間に行きついたのは、俺が原因じゃない。お前が引つ張られただけだ。…それと、今地球で発生している厄災、ウヨキイワイカとも関係ない…時期が偶々一緒だったんだ」

時期…？

日花 「何の話よ」

「獄炎の天使、と聞いたら理解できるか？」

獄炎の天使？……………!!!

日花 「パンドラの図書館でそんな書物があつたわね」

「読んだのか？」

日花 「ええ…「ソレを読めてる時点でおかしい事には気付いたか？」…？」

「まず、文字はウインディングだったはずだ。まあコレはお前の前世がパンドラの裁判官だったから大丈夫だろう」

この男、どうやら私の前世まで知ってるようね。

「問題はそこからだ。例の本を読めるのは……天使、または悪魔の素質があるか、神かの二択しかない」

日花「!？」

炎月

side 坂田平尾

朝。今日がウミガメとの決戦の日だ。

平尾「…あれ？」

横を見ると、普段早起きしているハズの日花が寝ていた。

平尾「日花、もう朝だよ」ゆさっ

日花「……………」

平尾「…!？」

よく見ると、日花は息をしていなかった。

平尾「平次！」

ガサッ

平次「どうした兄さん」「日花が息をしてないんだ！」「日花さんが!？」

平尾「心臓は動いてるようだけど…」

平次「今すぐ医務室に運ぼう！」

平尾「ああ…（日花、原因は分からないけど無事でいてくれ!）」ダッ

僕は日花を背負って医務室へと急ぐのだった。

side 坂田日花

「例の本を読めるのは……天使、または悪魔の素質があるか、神かの二択しかない」

日花「!？」

なんですって!？」

「まず、神は除外だ。お前は神力を持っていない」

信仰されていないから、当たり前ね。

「次に、お前は何故か魔力を持っている。おかしいと思わなかったのか？」

日花「母さんが持っていたから……」

(豆知識：アドレーヌは少しだけ魔力を持っている)

「なるほどな……そして最後だ。スーパー化をしたとき、お前は白以外の色になっている」

日花「……!？」

確かに、私はスーパー化をした時白ではなく紫色になる。

偶々色が違うだけと思っていたけど……まさか原因があったとはね。

「凶星のようだな」

日花 「…1つ、質問があるわ」

「何だ？」

日花 「仮に私が例の本を読めたとして…ココにいるのは何故？」

「何故、か。理由は明白だろう？」

日花 「……そうね」

私がこの空間に引つ張られた理由は、1つしかないだろう。

日花 「私に、獄炎の天使になる資格がある。そういう事？」

「そういう事だ。聞くまでもなかっただろう？」

日花 「……」

「…：そういうえば、自己紹介をしてなかったな」

日花 「…いや、今アンタの事を思い出したわ。アンタは炎月、例の本に記載されていた獄炎の天使ね」

炎月 「バレだか…まああの本には俺についてもある程度書かれていたからな」

日花 「それで？ 獄炎の天使になる資格がある私はどうすればいいの？」

炎月 「気が乗っているようだな…興味が湧いたのか？」

日花 「ええ」

炎月 「ソイツはありがたい、やる気がないと条件はかなり達成しにくいからな。獄炎

の天使になる条件はズバリ…

日花「ズバリ？」

炎月「この俺に勝つことだ。かかって来な」スツ

炎月はそう言つて構えをとる。

炎月「この空間は1時間しかいる事ができない。しかし出ていく頃には厄災は終わっているだろう」

日花「…そうなの？」

炎月「だから仲間達を信じ、戦いに集中するといい」

日花「…分かったわ」ギユン

頼むわよ…ネロイズム、メイ。

10倍という大差

side 坂田平尾

ピッ、ピッ…

ケーティさんが日花の胸に手を当て、タマシイが何処にあるか確認している。

ケーティ「タマシイは動いてないけど、どうやら意識が異空間に飛ばされているようね…それもかなり特殊な」

平尾「…！」

ケーティ「だから恐らく日花はウミガメ戦に参加できないわ。日花の見張りは「僕がやります」…分かったわ。そろそろ時間だから私は行くわね」

平尾「はい」

パサッ

…日花。

平尾「はやく、起きてくれよ…！」

side 坂田日花

少し、話をしよう…獄炎の天使について。

獄炎の天使は、例の本によると”獄炎”、つまり地獄の炎を天国の魔族である天使が司るというイレギュラーな存在らしい。

そして0年に発生したウヨキワイカの少し前、地獄の主が天界の主と協力してこの存在を生み出したらしい。525年周期で代が継がれる形式で、炎月が4代目だ。

役割は天界と地獄…今の魔界のバランスの維持。そのためかなり強い。

…私はヘカさんに会ったことがあるが、恐らくアルミさんは天界の主にも会っているだろう。なんとなくそんな気がする。

(実際に会ってます)

炎月「説明は終わったか？」

日花「非常にメタい発言をするわね」

炎月「…まあいい、始めよう。かかってきな」

日花「言われなくても…」ギユン

…ドツ！

日花「分かっているわ！炎天掌！」ズガアン！

炎月「…よっ」スッ

ピトツ

炎月は私の炎天掌を…人差し指で止めた。

日花「!？」

炎月「今のお前の状態だとパワー5000万は出してるんだろうが…俺はその10倍は出してるぞ？」

10倍…つまり5億ね。しかも全く本気を出してるようには見えない。

炎月「ま、今回は別にガチで勝ちにいかなくてもいいぞ？挑戦は今後いくらでもできるんだからな」

日花「…フツ、そうね。でも私は精々あがきたいのよ！」ポツ

ゴオツ！

日花「ビッグバン・ヘルフレイム！」ゴオオオオオ！

炎月「(火球か…威力は高いんだろうが…)当たらなきゃ意味ないぞ？」サツ

日花「ていつ！」スツ

火球を操り、炎月に当てようとする。

炎月「(リモコン式か、なら)…フンツ！」バツ

ドシユウ…

日花「(。 ㇿ)」

炎月は軽いジャブで火球を消し飛ばした。

日花「パワー10倍ってこんなに差があるのね…」

炎月「そうか？」

日花「少しでも差を埋めないといけないわね！スーパー化！」ピリッ
シュウウウ…

S 日花「…よし」

炎月「スーパー化…クソ懐かしいな」

ウミガメ

ウミガメ戦 出撃メンバー

ネロイズム

メイ・マリオ

アルヤ・マリオ

マリン・ユメミル

フラン・ユメミル

志免甲

姪浜桃

坂田平次

坂田絵奈

レイン・マリオ

W・D・サンズ

W・D・サンズ Jr.

W・D・ルマ

ベティ・ユメミル
キアラ・ユメミル
ルメ・パンドラ
ザクロ・ビースト
八意月斗
赤坂留美
グレイ
アルカ・マリオ
ケーティ・マリオ
秦こころ
セイダン
スカーフ
ボンゾー
総勢 26名

sideネロイズム

戦闘の準備が整い、僕達はかなり広い場所に出た。

月斗「最後の厄災、ウミガメは以前とは違って最初から巨大なウミガメが現れる。甲羅は途轍もない防御力を誇り、ウミガメのクセにそれに引つ込むことがある。だから僕達ができるべきなのは攻撃を避けながら甲羅を破壊することだ」

メイ「：1つ、質問があります」

月斗「なんだい？」

メイ「途轍もない防御力って、どれぐらい」途轍もない」んですか？」

月斗「そうだね：パワーが10億あったら1人でギリギリ破壊できる程度かな？」

甲「10億でギリギリ1人：あれ？それだとあまり硬くなさそう「ちなみに破壊するのに3時間ぐらいかかるよ？」：え」

月斗「だからギリギリって言ったのさ。それに攻撃は範囲も威力も高いから長期戦は致命的なんだよ」

甲「そ、そうですか：」

月斗「：おっと、そろそろ来るようだね」

コオオオオ：

空から黒い何かが見える。

その何かは次第に大きくなり：

「オオオオオオオオオオオオオッ！」

巨大なウミガメが現れた。

ネロイズム「……………」

…何故この巨大生物たちは一々大声で叫ぶ必要があるんだろうね？

♪???

——ウミガメのなみだはしおらしい

「オオオッ！」ギユン

ザクロ「…！来るぞ！」

ズドオオッ！

ウミガメの口から光線が放たれる。

平次「ツ…AYFの光線と比べて遥かに大きい…！」

アルヤ「こりやヤベえ、時間停…ん？」

何故かアルヤは時間停止の発動をやめる。

視線を追うと、ルメ達が前方で何かしていた。

アルカ「あら、デカいわね」

ルメ「呑気に言ってる場合!?!」

ザクロ「でもよルメ、別に焦る必要もないよな？」

ルメ「…はあ」

アルカ「行くわよ、月斗！」

月斗「あ、僕なんだ」

ギョーン！

アルカと月斗はそれぞれ神力を纏い、突撃する。

(アルカは仙人なので神力が使える)

アルカ「てやあ！」

月斗「せいっ！」

…ドゴォ！

2人は拳で光線をはじき返した。

…甲羅に向かって。

「…オォー」ズドツ

光線は甲羅に命中する。しかし、ヒビすら入っていない。

月斗「さっきの光線は見掛け倒しだったね。ただ大きいだけだった」

ネロイズム「…月斗」

月斗「何だい？」

ネロイズム「一旦分散しよう。一点集中で攻撃しても非効率的だ」

月斗「…そうだね」

分散した戦い①

sideネロイズム

分散した結果、5、6人のチームを5つ作り、ウミガメの右前足、右後足、左前足、左後足、そして甲羅への攻撃を担当する役割を与えた。

右前足

甲、桃、フラン、マリン、レイン

右後足

サンズ、サンズJr、ルマ、ベティ、キャラ

左前足

ルメ、ザクロ、月斗、留美、グレイ、アルカ

左後足

ケーティ、こころ、セイダン、スカーフ、ボンゾー

甲羅

ネロイズム、メイ、アルヤ、平次、絵奈

ちなみにスーパードンなどの覚醒ができる人は全員している。

ネロイズム「ウミガメの体が引つ込んだら、全員甲羅に集中攻撃を仕掛ける。それでいいかい？」

月斗「いい作戦だと思うよ。じゃ！」ダッ

―右前足―

side 志免甲

甲「ウミガメは飛んでるんだが、俺はどうやって攻撃を…岩を投げればいいんじゃないですか？」…それしかなさそうだ」ドゴッ

マリン「アンタの技は地上で発動したら強い技だからね…ハイドロポンプ！」

ザパン！

マリンは某ポケモンの技をウミガメの右前足に向かって撃つ。

フラン「…ダメージを食らってるのか？」

桃「多分食らってませんね…怯んでる素振りすらないです」

マリン「そ、そんな…」ずーん

レイン「ウミガメなんだから、水耐性でもあるんじゃないかな？」

マリン「…たしかに!!!」(。D。)

：落ち込んだりハツとしたり、忙しいなおい。
水耐性があるという情報は伝達しておくか。

―甲羅―

sideネロイズム

ネロイズム「：なるほど、どうやらウミガメには水耐性があるらしいね」

絵奈「じゃあ私は通常攻撃ができないんだ…」

G平次「別にいいだろ、俺は今グリッチ化してるから」

グリッチ化した平次はスーパー化した時の日花同様『カnst状態』になっているだろう。

☆説明しよう！

カnst状態というのは、完成者になっていないニンゲンやモンスターに起きる現象で、最大でもパワー9999万9999までしか上がらないのだ！日花と平次、それにウィザーになる前のケーティなどがこの現象を起こしたことがあるぞ！

Sメイ「それは頼りがいがあるそうだね」

ネロイズム「だね。戦力が増えるのはいい事だ」

ちなみにメイはスーパー化した状態でのパワーが9500万だ。カンスト状態になり近い。

Sアルヤ「おいおい、俺の事を忘れんなよ」

ネロイズム「スーパー化しても2番目に弱いのに？（煽り）」

スーパー化したアルヤのパワーは9000万。高いといえは高い。

Sアルヤ「おい！ソレは言うなよ！」

G平次「…そろそろ攻撃を始めましょう」

Sアルヤ「…はあ、分かった」

緊張感はいい感じにほぐせたようだ。

（元々緊張してなくね？）

分散した戦い②

side ネロイズム

ネロイズム「それじゃあ行くよ。アルヤは風を溜めるんだ」

S アルヤ「おう…」 スッ

ギョーン!

G 平次「何を…?」

ネロイズム「まあ見ててよ。メイ、アルヤの前に出てくれ」

S メイ「うん」 ザッ

絵奈（…ああ、なるほど）

「オオ…」 ギョーン

ウミガメが他のチームに顔を向けた。

ネロイズム「…今だ!」

S アルヤ「ウインドブラスト!」

ビュウウン!

S メイ「うわあっ!」 ヒュン

メイはアルヤの風により上空に飛ばされる。

ソレを理解したメイはその勢いで刀を抜き…

Sメイ「鳴鳴斬り！」ズバツ！

甲羅に斬撃を繰り出した。

…ギツ

甲羅には少しヒビが入った。

ネロイズム「メイはそのまま空中にいてくれ」

Sメイ「分かった！」

Sアルヤ「…ネロイズム、なんでわざわざ俺の技でメイを飛ばす必要があつたんだ？」

ネロイズム「風の勢いによって攻撃の威力が増すからだよ」

Sアルヤ「ほーん…」

ー右後足ー

「オオ…」ブンツ

サンズ「おつ、ウミガメが”足”を”フット”るぜ？」ツクテーン

(足は英語で foot ↓ フット)

キャラ「…サンズ？」じっ

サンズ「スマン、そんなタイミングじゃなかったな。でも肩の力を抜かないところの勝負はあつちに」かた”むくぜ？”ツクテーン

キャラ「……………」ゴゴゴ

サンズ「おつと、イライラはウミガメにぶつけてくれよ？」

ルマ（うわ、何してるのお父さん…）

サンズJr.（キャラさんの背後から『ゴゴゴ』って文字が見えるぜ…）
ベティ「さっさと攻撃しなさい？」

キャラ「…はあ」ギユン

ドツ！

キャラは地面を蹴り、跳ぶ。

その間に手にナイフを生成する。

キャラ「ケツイナイフ……Xスラツシユ！」

ズバツ！

「オオ……ッ!？」

ルマ「ダメージを受けた！」

キャラ「フンツ」スタツ

ウミガメの残りHP：99%

―左前足―

side 八意月斗

ルメ「ねえ、月斗」

月斗「？」

ルメ「アンタのパワー、本気を出せば10億なんて軽く超えるでしょ？なんで本気出さないの？」

月斗「あー…みんながまだ追いついてないからだね。アルミやノーア、アオイもいたら出してたかもしれないけど」

ザクロ「それだとアルミさん達がもう倒してるじゃねーか」

月斗「それもそうだね…左前足は一斉に攻撃するよ！」

留美「了解！」

ギユン！

月斗「ムーンフォース！」ドゴオ！

ルメ「飛斬舞！」シャツ！

ザクロ「ガーネット恐弾！」ダンッ！

留美「風斬・鎌鼬！」ズバッ！

グレイ「うおおお！」ヒュン

ドゴオ！

残りHP：95%

「オッ…オオオ！」ギユイイン

痛みを感じたであろうウミガメはエネルギーを溜め始めた。

分散した戦い③

♪ Under tale Last Breath | Phase 6 : Los
Desperados

sideネロイズム

「オツ…オオオ…」ギユイイン

Sアルヤ「溜め始めたな…狙ってる方向は…？」

G平次「左前の方ですね」

ネロイズム「なら問題ないだろうね。恐らく発射方向に集中しているからこっちの攻撃は通りハズ…いや、発射後の後隙に攻撃しよう」

メイは今空中でタイミングを伺っている。

その時になったら合図をしよう。

絵奈「左前の人達は…多分大丈夫だね」

そりゃ神とか仙人とかいるから、大丈夫でないとおかしい。

side 八意月斗

ルメ「げっ、発射方向がこっち側じゃない！」

ザクロ「ま、俺達で何とかなるだろ」

アルカ「そうよルメ、別に焦るようなことじゃないわ」

ルメ「はあ…（よく言うわ）」

月斗「……………」

僕達以外が集中攻撃してそっちに発射方向が向いたら、結構マズいことになる。

だから…

月斗「もう一回集中攻撃するよ」

ルメ「また!?!:あ、ちゃんとこっちに向かって撃つてくれるようになるのね」

ルメはすぐに理解してくれたようだ。

冷静なのかそうでないのか、よく分からないね…:つと、その必要はないようだ。

「オオオオオッ！」カッ

ウミガメの口から何かが発射される。

光線…ではなく、超高圧の水だった。

月斗「離れるよ！」ダッ

ザクロ「おう！」ダッ

できるだけ高圧水から離れる。

当たったら普通に体が飛ぶレベルだ。

ズバァン！

水が地面に到達し、地面に大きな穴があく。

留美「（。 ㇏。）」

アルカ「威力半端ないわね…体の中に高圧洗浄機でもあるのかしら？」

シユウウウ…

どうやら攻撃は止んだようだ。

「オオオオ…」ゼエ

ルメ「…隙だらけね」

月斗「そのようだね…集中攻撃だ！」

アルカ「オーケー！」ゴオツ

シユバババツ！

残りHP：92%

s i d e
ネロイズム

ウミガメは光線のような高圧水を発射し、息切れしたような状態になっている。

ネロイズム「メイ、今だ！」バツ

メイに合図を送る。

Sメイ「……！（合図！）冥冥斬り！」ギユン

ズバアッ！

メイは僕の合図を受け取り、技を撃つ。甲羅には……

……ギイ

さらにヒビが入っていた。

ネロイズム「よし、あのヒビを狙って僕達も攻撃しよう」

Sアルヤ「おう！」

ギユン！

2人『せいっ！』ドツ

メイ（……攻撃が来た！少し離れて、と）スツ

……ドゴッ！

攻撃はヒビに当たる。

ネロイズム「よし、ヒビが大きくなってるね」

思いのほか時間をかけなくて良さそうだ。

分散した戦い④

side ネロイズム

ネロイズム「よし、ヒビが大きくなってるね」

思いのほか時間をかけなくて良さそうだ。

S アルヤ「…ん？なあ」

ネロイズム「？」

S アルヤ「ウミガメの体…少しずつ引っ込んでないか？」

side ケーティ・マリオ

「左後足」

セイダン「…ケーティ、見えるか？」

ケーティ「ええ…」

少しずつ体が引っ込んでるわね。

人によっては全く気付かないほど、ゆっくりと。

スカーフ「引っ込んでいるとして、どうすればいいんだ？」

こちら「…対策のしようはあるだろう」スツ

ケーティ「お面？…ああ、なるほど」

こちらが出したのは、『眠い』のお面。

眠くなり、あくびをすると自然と体を伸ばすという状態を出したいのだろう。

…ただ。

ケーティ「でも相手は亀よ？逆に引っ込むんじゃないかしら？」

こちら「…確かに」

ボンゾー「じゃあ、何もできない…？」

ケーティ「……………」

私の必殺技を使えば、ダメージを与えつつ止める事はできそうだけど…被害がえげつない事になる。

あんなモンを出してしまったらココ一帯が更地と化すわね。なら…残る手段は攻撃。ケーティ「一旦攻撃を続けましょう。それで甲羅に足が引っ込んだら、甲羅を狙う。

これでいいんじゃない？」

セイダン「…分かった」

ギユン！

4人『ウイザーインパクト!』ギユン

こころ「憤怒の拳!」ゴオツ

バゴオ!

ウミガメの残りHP : 89%

sideネロイズム

他のチームが攻撃を続けているが、足は引つ込み続けている。

Sアルヤ「:ダメだ、こりや引つ込むぜ」

G平次「ならば、落ち着いて甲羅を狙いましょう」

ネロイズム「ソレが正解だろうね」

見た所それぞれの足は半分ぐらい甲羅に引つ込んでいる。

:頭は既に全体が甲羅の中だ。恐らく攻撃されなかったから邪魔がなかったのだらう。

Sメイ「斬斬斬斬斬……!」ブンブンツ

ズバズバツ!

メイは甲羅をずっと斬り続けている。

そのおかげかヒビはかなり大きくなっていた。∴しかし。

Sメイ「はあ、はあ∴」

流石に刀を振り回していると疲れが出てくる。

それを察した僕はメイの方に飛ぶ。

ネロイズム「メイ、そろそろ交代しよう。体力切れは命取りになる」

Sメイ「∴分かった、降りて攻撃するね」

僕がそれに頷くと、メイは地上に降りていった。

ネロイズム「さて、と」グツ

ラツシユをお見舞いしてやろう。

ネロイズム「否テテテテテテテテテテテテテテテテ定∴否定ッ！」

ドドドドドドドドッ！

Sアルヤ「うおっ∴凄え速度でヒビが大きくなってやがる∴」

分散した戦い⑤

side ネロイズム

ネロイズム「…ふう」

スタツ

さっきのラツシユのおかげで、甲羅のヒビをかなり大きくできたようだ。

…しかし。

ネロイズム「大きさはいいけど、奥まで届いてないね」

S アルヤ「奥？ウミガメの体まで届いてないってことか？」

ネロイズム「その通りさ」

S アルヤ「…ちよつと待ってくれ」ガサツ

アルヤが取り出したのは…

S アルヤ「コイツの出番だな」シャキン

…ドリルだった。

しかもただのドリルではなく、『デイバンのドリル』という最強のドリルだ。

G 平次「でもそれを空中で使うとなると、相当力を込めて使わないと掘れませんよね

「？」

S アルヤ「確かに。でもココには適任がいるだろ？」

適任?…はあ。

ネロイズム「結局僕がやるんだね」

S アルヤ「立ち向かうのが大事なんだろ？」 スツ

ネロイズム「…ふっ、違くない」 パシツ

アルヤからドリルを受け取り、甲羅に向かう。

足は後少しで完全に引っ込んでしまうようだ、急ごう。

ネロイズム「スイツチ、オン」 カチツ

ギユイーン!

ドリルが高速回転しだす。

ネロイズム「そして…せいつつ！」 ドツ

ズドドドドツ…!

ドリルで甲羅のヒビを深く掘っていく。

しかし流石厄災の甲羅、かなり硬い。

「オオツ…い」 ズシツ

ネロイズム「ツ！」 グラツ

ウミガメは甲羅のヒビに気付き、僕を振り落とそうと動きはじめた。

…でもね、それで振り落とされる程僕は弱くないんだよ！

ネロイズム「ハアアアツッ！」ググッ

力一杯ドリルを押し込む。腕が衝撃で痛むが、それは無視する。

ドリルはかなり頑丈だから、そんな力が加わっても耐えてくれるようだ。

そして…

…ズドツッ！

「ツオオ!？」

ドリルは甲羅を貫通し、ウミガメの体の中から現れた。

ネロイズム「…よし！」バツ

スタツ

これ以上居座ると集中攻撃されるのが目に見えてるので、一旦着地する。

Sアルヤ「よくやっただぜ、ネロイズム！」

Sメイ「大活躍だね！」

ネロイズム「まあね…後はそこに集中攻撃しながら穴を広げていけばいいさ」

Sアルヤ「だな。…反動を食らってるだろ？少し休め」

ネロイズム「ツ…分かった」

ウミガメの動きに耐えられるように力一杯押し込んだが、流石に僕の腕はその衝撃に耐えられるぐらい強くはなかったようだ。関節が少し外れている。

(パワー3. 2億の関節が外れるレベルの衝撃!?)

月斗「…完全に引っ込んでしまったね」

ルメ「今度は甲羅を狙えばいいんでしょう？」

月斗「そうだね」

ダッ

分散した戦い⑥

side 八意月斗

月斗「…完全に引つ込んでしまったね」

ルメ「今度は甲羅を狙えばいいんでしょ？」

月斗「そうだね」

ダッ

ー甲羅ー

ザクロ「…お？」

ザクロが何かに反応する。

アルカ「どうしたの？」

ザクロ「アレ、見ろよ。穴が開いてるぞ」

見上げると…あ、確かに穴が開いてるね。

ルメ「恐らく甲羅担当がやったんでしょね」

そこにその甲羅担当が駆け寄ってきた。

月斗「体が完全に引つ込んだから、来たよ」

アルヤ「他は…「そろそろ来るんじゃない？」ですな」

月斗「あの穴に攻撃を当てればいいんだね？」

僕の質問に対し、アルヤは頷いた。

なるほどね…でも。

月斗「もうすこし大きくできそうだね」フワツ

甲羅の穴に向かう。

ルメ「何をするつもりなの？」

月斗「なあに、やっと能力を活用できると思っただけさ」

スツ

甲羅の穴…その外側に手をかざす。

そして能力を発動する。

ギョーン！

月斗「まずはココに圧力をかけて…」ぎゅっ

…一旦能力を解除し、穴を挟んで反対側の部分に能力を使う。

月斗「今度はこつちに…」ぎゅっ

僕がしようとしていることは、こんな感じ。

外側の部分でランダムに能力を発動し、そこに重圧がかかることで、少しずつ脆くな

る。

それを繰り返すことで段々甲羅が脆くなり…

…バキッ!

味方『…!』

甲羅の穴が一回り大きくなった。

この行動を起こす条件は…穴を開けておくこと。じゃないとそもそも穴を大きくできないのだ。

スタツ

穴を大きくすることに成功した僕は、地面に戻った。

アルカ「…凄い応用の仕方ね」

どうやらアルカは僕がやったことをある程度理解したようだ。

月斗「なに、この程度一週間前の朝飯前だよ」

ザクロ（一週間前なのかよ…）

月斗「じゃ、後は君達に任せるよ」

アルカ「了解です!」ギユン

side 坂田日花

日花「ハア、ハア……！」ドサツ

炎月と戦い始めて10分程が経つ。…未だに一撃も当たっていない。

全て避けられるか、弾かれるか、止められるかだ。

今の私は体力を温存すべく、スーパード化を解除したけど…それでも強すぎる。

炎月「どうした、その程度か？ カンスト状態でそれだけとは言わせないぞ、お前の師匠の方がやれたはずだ」

…!?

日花「アルミさんを、知ってるの…?」

炎月「俺が一方的に、な。完成する前のアルミ・マリオでもっといい動きをしていたはずだ…そうだ、質問をしよう」

日花「?」

炎月「お前は力と技術、どちらに重点を置く?」

決着

♪MULAストーリー — アルメリオン

sideネロイズム

月斗「じゃ、後は君達に任せるよ」

Sアルヤ「了解です！」ギユン

…よし、腕は回復した。

ネロイズム「アルヤ、少し待ってくれ」

Sアルヤ「あ？どうしたんだ？」

ネロイズム「長期戦にするのは都合が悪いと思うんだ」

Sアルヤ「…理由は？」

ネロイズム「恐らくだけど…ウミガメは討伐に時間をかけるほど攻撃力が増す。…

あつてるかい、月斗？」

月斗「…ああ、そうさ。よく気付いたね」

ネロイズム「耐久が高いだけじゃ最も強い厄災とは言えないからね…だから、みんな

全力で相手を潰しにかかった方がいいと思う」

S アルヤ「なるほど…な。よし、乗った！お前ら、全力の攻撃を準備しろ！」
味方『了解！』ギユン

ズドツ、ズドツ！

ネロイズム「メイ」

Sメイ「？」

ネロイズム「限界を超えるよ」

Sメイ「…うん！ハアツ！」カッ

僕はそれぞれフルパワーで大技の準備をする。

月斗「波動系の技を使うんだ！」

G平次「了解…サンダーキャノン・黒！」ギユン

ズドドドドツ！

平次の黒い光線は甲羅の穴に向かって突き進み…

「オオツ…!?!」

ウミガメの残りHP：75%

ウミガメに大ダメージを与えた。

G平次「グツ…」

シュツ

平次「俺はもう体力切れだ……」

Sメイ「ありがたいとう、平次。後は私達に任せて！」

平次「ああ……」

平次は頷き、下がった。

ネロイズム「力を合わせるぞ、メイ！」

Sメイ「うん！」

月斗「(おっと、コレは……とてつもないパワーが出そうだね)みんな、下がって。後は2人に任せよう」

ザツ……

2人『ツツ……ハアツ！』

僕とメイの2人で魔力と神力をそれぞれ出し、凝縮していく。

かなり体力が持っていかれるが、構わない。

そうしなれば厄災を終わらせることはできないからね！

ギョルル……！

アルヤ「うおっ……凄え量のエネルギーだ……」

(→スーパー化したヤツらはメイ以外戻った)

ルメ「あの状態だと普通に私はやられそうね……」

クラゲ 削除

イワシ 削除

マグロ 削除

ヤツメ 削除

オール・ヨア・フォルト 復旧中

ネロイズム 解放

オキセイギ 解放

ウミガメ 再生中

カツ!

味方『!!!』

僕達2人を神々しい光が包み込む。そして…

ネロイズム「この力は…!」

メイ「これなら…!」

ウミガメ「オオ…オオオツ！」ギユン
ザパアアン！

ウミガメはこちらに攻撃を放ってきた。

…弾き返してやる！

2人『必殺…！』

ジ・アマテラス！

…ハアツ！』

ピカッ…！

「オオオオオオオオオツ…！」

僕達の攻撃はウミガメの攻撃を消し飛ばし…

辺りは、光に包まれた。

ウミガメのなみだは しおらしいと聞いた

泣きながら あなたは しおらしく笑った…

ウミガメ 削除

ネロイズム セーブが完了しました。

オキセイギ セーブが完了しました。

おわりっりっり。

side 坂田日花

炎月 「フンッ！」 ドガッ

日花 「ガハッ……」 バタン

軽いジャブ。私はそれだけで体力が削りきられた。もう立てない。

炎月 「流星に初めてじゃあ俺には勝てなかつたようだな。ま、頭の中で念じながら寝たらこの空間に来れるから、ある程度鍛えたらまた来るといい」

日花 「ツ……分かつたわ……」

炎月 「……そろそろ1時間だ。またな」

炎月の言葉を聞いた私の視界はだんだん薄れていった……

|

|

|

|

|

日花「…！」ハッ

平尾「日花！目を覚ましたんだね！」

目を覚ますと医務室におり、平尾が心配そうにこちらを覗いていた。

日花「ええ…ちよつと聞くけど、私の脳は止まってたかしら？」

平尾「…うん。でもなぜか心臓は動いてたんだ」

…どうやら脳といつても、止まっていたのは大脳だけのようだ。

平尾「それにしても、どうしてそんな事を？」

日花「実は…」

私は炎月についての事などを説明した。

平尾「…なるほど。525年周期がちょうど今来たんだ、とんだ偶然だね」

日花「そうね…」

―数分後―

ガチャッ

ネロイズム「日花、目を覚ましたんだね」

メイ「大丈夫ですか？」

ネロイズム達が部屋に入ってきた。

…!!!

日花「アンタ達、この気配は…!!」

ネロイズム「…もう気付いたのか。流石だね」

メイ「私達は無事覚醒したんですよ。なので魔力と神力の両方を持っています」

日花「なるほど、ね…」じっ

…うん、この2人のパワーは感じ取れるだけで5億は軽く超えてるわ。

日花「アンタ達、一気に強くなったようね。特訓相手になつてくれないかしら？」

2人『?』

”パンドラの箱” 完

次章予告

坂田日花、月に行く。

大厄災から2年後、ウヨキイワイカについて疑問を持った日花。

『何故そもそもウヨキイワイカがあるのか?』

答えは月にあると月斗に言われた日花は、仲間達と共に月の国、ニャン国へと突入するのだった。

しかし、月の裏側にも国があると判明して…!?

日花「…アンタ、こんな所に住んでたのね」
炎月「まあな」

果たして大厄災は何故現れたのか!?

年歴 2100↓2102

sideアルミ・マリオ

アルミ「…ハッ！」ドツ

天助「フンッ！」

ガキイン！

最近天助と優香が幻想郷に移住してきて、今天助と手合わせしている。

天助「…なあ、お前また強くなつてないか？俺のパワーは10億1010万1010
だが…」

アルミ「えっ、私もそれぐらいよ？エネルギーのコントロールがさらに上手くなった
だけよ」

天助「マジか…まあいつか。オラア！」ダッ

アルミ「…せいっ！」

バゴオ!

咲夜「わあ、動きが速い……」

パメラ「お母さん、頑張れ〜!」

リビット「…今日も平和だな」

有太「そうだな」

アルミが旅に出て、有太が平行世界の幻想郷に行くまで、残り4年。それまでは多分平和が続くだろう。

第3章 坂田日花、月に行く。

何故か増えていく。パンドラの図書館の書物

2102年、パンドラの図書館にて。

side 坂田日花

日花「…えっ?」

何かがおかしい。何がおかしいのかというと…図書館の書物が増えてい

日花「なんで増えているの…ん?」パサツ

本をどかすと本棚にメモが貼ってあった。

日花へ

厄災は終わったし、ソレ関連の本を置いておくわね。

いつ来たかかって? そりゃルメとかアルカしかない日に来たわよ。

これからの活躍、楽しみにしてるわ。それじゃ

アルミより

日花「…アルミさん!?!」

いつの間に来たの!?! というか旅に出たって聞いてたけど!?!

(日花達はアルミが幻想郷に行ったことを知らない)

急いでルメさんの部屋に行き、聞いたです。

日花「ルメさん、アルミさんはいつ来てたんですか!？」

ルメ「アルミ? あー…ちよくちよく来てるわよ? 来ては図書館に本を置いてってるらしいわ」

日花「……………」(。 旦。)

まさか一回だけじゃなかったとは…

日花「アルミさんって旅に出てるんですよね?」

ルメ「そうよ? それがどうかしたの? (もしかして気付いたのかしら?)」

日花「そういえば何処に行ったんですか?」

ルメ「平行世界よ。来た時に毎回ソレについて話してくるの(コレは嘘じゃないからセーフね)」

平行世界か…探そうと言っても絶対見つからないわね。

(※いや、オメガタイムラインにいたらいつか会えます)

ルメ「それと、アルミが置いていく本は元々そこにあつて、アンタがパンドラの図書館に行き始める前に隠したらしいわよ?」

日花「えっ? どうしてそんな事を…?」

ルメ「厄災などの特徴を知りすぎてイージーゲームにならないようにしたいとか言つてたわね」

日花「は、はあ…」

うん、アルミさんが考えてる事はよく分からないわね…

sideアルミ・マリオ

アルミ「へっくし！」

誰かが私のことを話してるのかしら…？

天助「大丈夫か？いきなりくしゃみして」

アルミ「大丈夫よ、誰かが私のことを話してるだけだと思うわ」

天助「そ、そうか（ソレって本当なのか？迷信だと思ったが）…で、咲夜が紅魔館で働くって？」

アルミ「ええ、咲夜が『紅魔館で働きたい！』なんて言い出したのよ」

天助「理由は？」

アルミ「…聞いて驚くわよ？」

私も聞いた時ビックリしたし。

アルミ「子供っぽいお嬢様の元でメイドをしたい、とか言ってたわ」

天助「……………はぁ？」（。D。）

アルミ「嘘じゃないわよ？」

天助「咲夜がレミリアになつてるのは知ってたが…マジで？」

アルミ「マジで」

天助「…凄いな」

アルミ「うん」

語彙力なんてなくなっちゃったわ。

やっぱり不思議な人

side 坂田日花

月斗「ん、日花じゃないか。君のルメの家には？」

次の日。私がルメさんの家に行く途中、月斗さんに会った。

日花「はい」

月斗「そうかい。じゃあ一緒に行こう」

スタスタ

ールメの家ー

ピンポーン…ガチャッ

ルメ「はい。日花と…あら、月斗。アンタも来たのね」

月斗「ヒマだからね」

ルメ「姉に会いに行けばいいのに「去年会ったよ。元気そうだった」…そう」

月斗さんに姉がいるのね…え、つまり。

日花「月斗さんのお姉さんも年齢が億単位なんですか？」

月斗「そうだよ。まあ言っても5年ぐらいしか年齢差がないから誤差だけど」

日花「月の都のトップは……確か月夜見さんでしたっけ？」

書物で読んことがある。月の都のトップは月夜見という神で、常時スーツを着ていると……うん、なんでスーツ？

月斗「そ。月夜見様は三人姉弟なんだけど、長女が天界トップの天照、次女が月の都トップの月夜見様、末っ子が天界で天照の補佐をしている素戔鳴なんだ。ちなみにアルミは3人に会ったことがある」

神が姉弟なのはよくある事なのは知ってたけど……かなりのエリート姉弟のようだ。その3人に会ったことがあるアルミさんはやっぱりおかしいと思う。

月斗「……さて、ここで問題だ。」この世界の「トップ」は、誰でしょう？」

日花「この、世界の……？」

私は考え込む。この世界のトップってことはつまり、天照さんや月夜見さんを超える神……と考えると一人しかない。

日花「最高神、イザナミ？」

書物で滅多に出てこないが、世界の始まりに関するモノに出てくる。

月斗「その通り。世界の実質的トップは、イザナミなんだ。厄災は彼女に関係している」

日花「そ、その関係って……？」

月斗「それは……………月で分かる！」

日花「……………え、教えないんですか？」

月斗「うん。コレは君が実際に確かめに行った方がいいと思う」

日花「は、はあ……」

なんか釈然としないわね……

強者の眼、神眼

side アルミ・マリオ

ある日、私は天界…のトップ、天照がいる神殿に来ていた。

天照「あら、アルミ。どうしたの？」

「まさか前みたいにヒマつぶしってワケじゃねえだろうな？」

天照の隣の男…素戔嗚が鋭い目つきでそう言った。

アルミ「流石に連続でヒマつぶしには来ないわよ…とある質問があつてね」スツドサツ

私は懐からとある書物を出し、ソレを開く。

内容は…一定以上の強さを持つ者だけが開眼する…『神眼』だ。

天照や素戔嗚、月夜見…最近私も開眼した。

←こんな感じの様子が、眼球に浮かび上がる。

—

—

—

素戔嗚 「質問？神眼についてか？」

アルミ 「ええ」

天照 「そう…なら時間があるし答えてあげるわ。素戔嗚、出てもいいわよ」

素戔嗚 「おう」 ガチャツ

…さて。

アルミ 「実は私、最近神眼に開眼したのよ」

天照 「…ええ!?ホント!？」

アルミ 「ええ。ちよつと火桜神モードにならないと出ないけど…ハッ！」

ギョーン！

HMアルミ 「…後は、開眼！」

カッ…!

私の眼球に十字の模様が現れ、赤く光る。

天照の神眼の色は桃色、素戔嗚は紫だ。

天照 「ソレが貴女の神眼…綺麗な赤色ね。それで、質問は？」

HMアルミ 「私が質問したいのは…神眼を開眼する条件よ」

この書物には、神眼を持った者の戦闘描写ぐらいしか載ってなかったわ。

天照「条件ね…一応私は知ってるけど、貴女はどこまで予想したのかしら？」

H Mアルミ「そうね…私が開眼したのは、ちょうどヘカさんと手合わせしてた時ね」
ー回想ー

ヘカさんこと地獄の女神ヘカーティアは、3体で一斉に私に攻撃していた。

アルミ「ハア、ハア…」ドサツ

私はしばらく戦って息が上がっていた。やっぱパワー30億ぐらいじゃしんどいわね…240億相手には。

(普通ならしんどいどころかボッコボコだが?)

赤ヘカ「あらあら、どうしたのアルミ！」

青ヘカ「その程度じゃ私達に勝てないわよん！」

黄ヘカ「さっさと変身しなさい！」

アルミ「ツ、そうね…本気で行くわ。ハアツ！」

ギョーン！

H Mアルミ「炎天桜舞！」 B L O O M !

ズドオ…ツ！

青ヘカ「グッ…」

技は青ヘカさんに命中した。

黄へカ「……ん？」

赤へカ「どうしたの、黄？」

黄へカ「アルミ……」

H Mアルミ「？」

黄へカ「神眼を開眼してる……！」

H Mアルミ「へ？」

ー回想終了ー

H Mアルミ「つて感じね。だから……恐らく火桜神モードによって強くなったのが原因かしら？」

天照「ふーん……具体的には？」

H Mアルミ「推定パワー100億越え……つて所かしら「正解!!!!」……え？」

そんなカンタンな条件なの？

天照「片目の神眼を開眼する条件は、パワーが100億を越えた状態を維持することなの」

H Mアルミ「なるほど……ん、片目？両目はなんなの？」

天照「お母さんしか両目開眼したことがないから、分からないわ。それに……分かるでしよ？」

この世界の創造神で天照の母親、イザナミは……既に死んでいる。

H M アルミ「……そっか。ならしやうがないわね」

便利すぎるタクシー

side 坂田日花

月斗さんの話を聞いた私は、仲間を数人集めた。
集まったヤツら←

甲、フラン、メイ、平次、ネロイズム

平尾は未例と日和、マリンはクリス（フランとマリンの息子）、アルヤはアローと梅（アルヤとメイの息子と娘）、絵奈は平三（平次と絵奈の息子）と一緒にいる。…他の人達もそれぞれ用事があつて来れなかった。

甲「月、か…」

フラン「結構スケールがデカそうな話だな」

ネロイズム「700年周期の厄災がある時点で、スケールはデカかつただろう？」

フラン「そりゃ、そうだが…」

平次「…ところで、どうやって月に行くんですか？」

日花「便利なタクシーがいるじゃない」

平次「…あ、なるほど（察し）」

メイ「…タクシー？宇宙にタクシーなんてあるんですか？」
日花「ええ、いるわよ？」

カービイさんっていう、タクシーが」

―数分後―

カービイ「いやあ、久しぶりだね。元気にしてた？」

日花「もちろんですよ」

フラン「……なるほど、カービイさんか」

フランは会ったことがあるので察してくれたようだ。

メイ「えっ、でも確かワープスターって5人用ですよ？カービイさん含めて7人いますよ？」

日花「ソレについては問題ないわ…でしょ？カービイさん」

カービイ「うん。コレがあるからね」スツ

カービイさんが出したのは…カゴ。

日花「……すつごく懐かしいですね」

前世の記憶を思い出す。

カービイ「でしょ？」

ネロイズム「何の話だい？」

日花「このカゴ、83年前に使った代物なのよ」

フラン「ファ!」(。D。)

平次「でも全然ボロくないですね」

カービィ「魔法のカゴだからね。ココに入ってからポケットに入れると、カゴが小さくなるんだ」

甲「…つまり、そこに2人入れればいいんだな?」

カービィ「そうだよ」

そして、フランとメイがカゴに入ることになった。

カービィ「じゃ、呼ぶね。ワープスター様、八方美人!」

ヒュルル…

ネロイズム(特殊な呼び方だね…)

—————

—————

—————

—————

—————

♪MULAストーリーー | 宇宙く月へ行こう

ビュウウン!

カービイさんのワープスターは、超高速で宇宙空間を飛んでいる。

甲「は、速え……！」

日花「わーたーしーはー前世でー慣れてるよー」

甲「そりや俺も同じだ！……でも慣れねえ！」

平次「俺も慣れてますよー？」

甲「……慣れてないの俺だけかよ！」

ネロイズム「……ん？みんな、前を見て」

全員『？』クルツ

前を見ると、先には月の表側……ニヤン国があつた。

……しかも、こちらに気付いてるのか、戦艦がこちらに向かっている。

カービイ「うわっ、僕達やられちゃうよ？」

全然焦ってるように感じないんですか？……はあ。

日花「みんな、片手開いてるでしょ？迎撃するわよ」

全員『了解！』

戦艦は真つ二つ

side 坂田日花

『ピーンポーン。パーンポーン♪』

どこからともなく放送が聞こえてくる。

…宇宙空間だから音は聞こえないって？ココ辺りは空気があるから聞こえるのよ。

『ニヤニヤニヤツニヤ、ニヤニヤン！』

フラン「…は？」

ネロイズム「ニヤン語で話されても…」

日花「……………」

フラン「…日花？」

日花『『今すぐこの場を去れ、さもなければぶつ殺す！』って言ってるわね』

メイ「え!?分かるんですか!？」

日花「パンドラの図書館に訳が載ってた」

フラン（あの図書館、便利すぎね…?）

『ニヤニヤ、ニヤニヤー！』

日花「『まだ進むか、ならぶつ殺す』って
キュイン！」

月の方から宇宙戦艦が飛んでくる。

大きさは…結構デカイ。

甲「…おい、アレを俺達の片手で倒せと？」

日花「ええ」

甲「…しやあない、やるか」

ヒュンヒュン！

戦艦から光線やミサイルが飛んできた。

日花「光線は私が吸収するわ」ギユン

ネロイズム「分かった、なら僕がミサイルを反転する」スツ

光線が私達に近付くと…

日花「吸収！」バツ

ギユルルル！

私はソレを吸収し、ミサイルが近付くと…

ネロイズム「リバーズ！」バツ

シュッ！

ミサイルは戦艦の方を向き…

…ドゴオ!

戦艦はソレに当たってダメージを受けた。

『ニヤツ!?!』

(ダニイ!?!)

日花「アンタ達、攻撃よ!」

フラン「おっしや! ケツイサンダー!」バチツ

甲「アースフオース!」ゴオツ

メイ「飛斬舞!」ズバツ

…ズドオン!

『ニヤア、ニヤニヤ…!』

(クツ、この野郎…!)

戦艦に載ってるニヤンコが悪態をつく。

メイ「…日花さん、別に速攻倒してもいいんですよね?」

日花「ええまあ…ってアンタまさか」

メイ「そのままですよ。天使化!」カッ

メイは2年前に目覚めた天使化に覚醒する。

メイ「…ハッ！」ドッ

メイは戦艦の前に飛び込み…

メイ「天使の聖斬！」シヤツ

ズバ

アーン

『ニヤ〜!?!』

戦艦は真っ二つに斬られた。

フラン「うわっ、メイやりすぎだろ…」

ネロイズム「流石僕の妹だ」

甲「こんなタイミングでシスコン出すなよ」

日花「まあいいじゃない。襲撃は戦艦1台だけかしら……そのようね」

カービー「よし、このまま月まで向かうよう！」

ヒュウウン!

—————

—————

—————

—————

1
襲撃はあの後來なかつたが、流石にニヤン国ど真ん中に着陸すると囲まれるのは目に
見えてるので……私達はニヤン国外れに着陸した。

ネロイズム「……ん？」

メイ「……変な感じがしますね」

日花「……確かに」

平次「何かあるんですか？」

日花「ええ……」

私は変な感じがする方向を向いて……

日花「ココに、結界があるわ」

そうつぶやいた。

閑話：紅魔館

side 三人称

「こうして、こうして…と」

カンツ、キイン！

金属が叩きつけられる音が辺りに聞こえる。

「よしー」

ギユウウン…

叩かれた金属…赤い剣からエネルギーが溢れだす。

ガチャツ

その時、部屋の扉が開かれた。

「…あら、できたの？フランドール」

フランドール「うん、完成したよアルミ！」

side アルミ・マリオ

紅魔館。

吸血鬼のレミリア・スカーレット、その妹のフランドール、親友のパチュリー、その

使い魔の小悪魔、そして門番の美鈴が住む館である。

私が拾った子供である咲夜がメイドとして働いている館でもある。

まだ7歳なのに何故メイドなのかって？それは…彼女が自分から

咲夜『紅魔館で働きたい！』

なんて言い出したからよ。

一度ダメって言ったけど、駄々をこねだして…

咲夜『レミリアさんが可愛いので！可愛い子を世話したいので！』

と、7歳らしからぬ発言をずっとするので、仕方なく了承した。レミリアからは…

レミリア『…貴女、大変そうね』

と何故か言われる始末。いやいや咲夜から駄々をこねられるの、始めてなんですけど!?

とツツコんでやったわ。

…閑話休題。

そんな紅魔館の地下室…フランドールの部屋に私は訪問した。

部屋の前まで来て、

フランドール「よし！」

って声が出たので、恐らく”例の武器”ができたのだろう。

ガチャッ

部屋の中で赤い剣からエネルギーが溢れでていた。

アルミ「…あら、できたの？ フランドール」

フランドール「うん、完成したよアルミ！」

達成感に浸っているフランドールを横目に見ながら、私はフランドールが作った武器…レーヴアテイン改を確認した。

アルミ「へえ…凄いわねコレ。アンタのレーヴアテインと比べて数倍のエネルギーを感じる…」

フランドール「アルミが質のいい材料を持ってきてくれたおかげだよ。たしか…ジャスパー鉱石だったっけ？」

アルミ「ええ、ソレで合ってるわ。アレは武器に付与すると攻撃力を上げる代物よ。でも…まさかアレを剣の素材として使うとはね」

(元ネタ：ハイピクセルスカイブロック)

フランドール「へへっ、凄いでしょ！」

アルミ「凄い凄い。アンタに”魔法科学”を教えて良かったわ」

魔法科学とは、アルフィーやガスターが研究する、魔法と科学を上手く組み合わせた分野だ。既にパチュリーという魔法使いがいるから、ジャンルのコレをフランドールに教えた方がいいと思ひ、彼女に教えた。

「フランドール「早速試していい？流石に武器は試さないと強さが分からないでしょ？」

アルミ「ええ、いいわよ」

そして私達は外に出て（今は夜なので大丈夫）、新たな武器を試すのだった。

月の都

side 坂田日花

日花「ココに、結界があるわ」スッ

変な感じのする方向を向いて、そこを指さす。

フラン「結界？なんでこんな所に……」

日花「恐らく月の裏側……月の都をニヤン国などから防御する結界よ」

フラン「あ、なるほど」

平次「ニヤン国からあまり離れてないのに、もう結界があるんですね」

ネロイズム「それ程ニヤン国の科学力が脅威なんだよ、多分」

『いや、そうではない』

全員『!?!』

突然、結界がある方向から声が聞こえてきた。

甲「だ、誰だ！」

スウツ

結界の向こう側から一人の女性が現れた。

薄紫色の髪で、黄色いリボンを付け、刀を一本差している。

そして、感じるエネルギーからして…

日花「アンタは…神…?」

「正確には違うぞ、坂田日花」

…!?

日花「私の名前を…」

依姫「私は綿月依姫、月の都の防衛をしている者だ。ニャン国の脅威は科学力ではない、なんせ私達の方が技術は上だからな…問題は狂暴性だ」

メイ「狂暴性…?」

依姫「ヤツらは至って狂暴で、所構わず襲ってまわる。数十年前、お前達の国に戦争を仕掛けただろう?それを私達もしょっちゅう受けている」

日花「ふーん…で?アンタは何をしに来たの?」

依姫「その態度…私を舐めているのではなく、警戒しているな…お前が知っている人物に頼まれてな、お前達を月の都に案内することになった」

日花「私知っている人物、ね…」

ほぼ確定で月斗さんね。

依姫「これから結界を開ける、ちょっと下がっていてくれ」

サツ

巻き込まれたくないので依姫の言う通りにした。

依姫「……開！」ギユン

カツ！

結界に人一人が入れる大きさの穴が開いた。

依姫「入れ。あまり長く持たないから急いでくれると助かる」

タタツ

私は穴の中に『突入！ハアア！』と脳内再生しながら駆け込む。

（お約束は忘れない）

—————

—————

—————

—————

—————

コオオオオオ……

結界の先には、大きな空間があつた。

シュツ（結界を閉める音）

依姫「ココが月の都だ」

近未来的で、和風な感じの建物が並んでいる。

メイ「おお……」

フラン「凄え……」

日花「………」

私も正直その光景に驚いていた。

図書館で呼んだ書物によると、月の都にはこの世界でも最上位の強者が数人いるらしいのだが……この光景なら納得もできる。技術も凄いなら力も凄いだろう。

依姫「案内する。こっちだ」

スタスタ

月の都の街中を歩く。

日花「そういうえば、アンタは神じゃないようだけど……それなら何なの？」

依姫「……神降ろし、って知ってるか？」

日花「あ、なるほど。力を纏ってる」と

依姫「そんな感じだ。私自身神ではなく、ただの結構強い月の民だ」

……感じる力からして『結構強い』じゃ収まらないと思うんだけど？月斗さんに近い気

配がするわよ？

月の都在住の炎月

side 坂田日花

日花「……………」(。Д。)

「どうした?」

今、私の前に依姫が言ってた『とある人物』がいる。
いるんだけど…

日花「アンタなの!」

炎月「そうだが?」

ー回想ー

街中を進み、とある一軒家の前で止まる。

依姫「ココだ」スツ

ピンポーン

フラン(ドアベルかよ!?)

カチッ

『お、依姫か?』

依姫「ああ、頼んだように連れてきたぞ」

『あざっす。開けるから待つてろ』カチツ

…ガチャツ

ドアが開き、中から出てきたのは…紫髪橙眼の男だった。

日花「……………フアツ!？」

4代目獄炎の天使、炎月だ。

炎月「よう、日花」

―回想終了―

甲「…誰なんだ、この人？」

日花「アンタ達がウミガメと戦ってた時、私が気絶中に異空間で会った人よ」

炎月「そんな所だ。まあ入れ」

依姫「私は用が終わったから帰る」まあ待て。桃タルトでもどうだ?」…分かった、なら入ろう」

ネロイズム（扱いやすいね…）

炎月は私達を家に招き入れた。

—————

—————

――

――

――

リビングに案内され、椅子に座る。

依姫「……………まだなのか？」

炎月「まあ待て、後少しで終わるから」スツ

スパツ、スタスタ…コトン

炎月「ほい、桃タルト」

依姫「感謝する」スツ

パクツ

依姫「……………」にこっ

わお、すげえ喜んでるわね。

炎月「お前らも食べるか？」スツ

ちやんと人数分用意されていた。

…どうやって人数を知ったのかしら？

日花「ええ」

炎月「ほい」コトン

パクツ

日花「…美味しいわね」

店に出せるレベルよ。

炎月「誉め言葉に感謝する。…んで、お前らが来たのはウヨキイワイカの正体を探る為だよな？」

平次「ああ…」

炎月「なら、俺が大まかな内容を説明してやる」

メイ「…知ってるの？」

炎月「実際、俺は700年前のウヨキイワイカを月斗達と協力して討伐したからな」

6人『!?!』

衝撃の事実。

日花「…ん？でもアンタが獄炎の天使になったのって527年前でしょ？その時って普通のニンゲンだったの？」

(525 + 2 || 527)

炎月「いや、俺は元々魔界出身だったぞ？当時の俺のパワーは…確か6億ぐらいだったか

？」

ネロイズム「6億……つまり魔界でも上位の強さだったのかい？」

炎月「そうだな。お前も魔界のヤツか？」

ネロイズム「まあね」

炎月「……んで、俺は地界に住んでる月斗達と知り合い、協力して当時の大厄災を討伐した。その後俺は月斗と友達になり、その縁でこの月の都に引っ越した」

日花「そこでウヨキイワイカの実を知ったの？」

炎月「ああ。大厄災、ウヨキイワイカの正体は……」

今は亡きこの世界の創造神、イザナミが遺した『試練』だ」

イザナミが遺したものと謎の暗号

side 坂田日花

炎月「大厄災、ウヨキイワイカの正体は…今は亡きこの世界の創造神、イザナミが遺した『試練』だ」

6人『……!?!』

依姫「………」

なん、ですつて…!?!

フラン「おい、待てよ！創造神が死んでるってどういう事だ!?!」

炎月「そのままの意味だ。イザナミは2102年前に死んだ…この世界の維持は天照、月夜見、素戔嗚達を筆頭に上位の神々がしている…(つつても、俺もその1人なんだがな)」

メイ「でも、なんで『試練』なんてものを…」

炎月「イザナミは襲撃してきた」とあるヤツら”からこの世界を守ったんだが、その影響で致命傷を負ってしまったんだ。そして死に際に遺したものは、『3つ』ある」

平次「3つ…」

炎月「1つ目が、大厄災ウヨキイワイカ。人類が自分たちで世界を守る力をつけるように、試練として700年周期で発生するようにした。…もちろん、その試練を乗り越えたら褒美が与えられるシステムだ」

日花「だから毎回歴史に残るような出来事が…」

炎月「そういうことだ。俺が経験した厄災の後に、初代パンドラの裁判官が現れたな。…んで、2つ目。それは525年周期で、天界と地獄…現在の魔界のバランスを維持する役割を持つ獄炎の天使だ」

ネロイズム「へえ、ソレもイザナミからなんだ」

炎月「最初の大厄災と初代獄炎の天使の時期が同じな時点で察してくれ…」
…確かに。

炎月「最後に、3つ目。…コレについてはかなり不可解だ」

6人『?』

炎月「イザナミは死に際に数字の羅列を書き、天照に渡した。その数字は

『202763163275 2 19—46—14—2』

…だ。コレについては誰も意味を理解してない」

…ん?ちよつと待って。

日花「…:もう一回言ってくれない?紙に書くから」

炎月 「202763163275 2 19—46—14—2…どうしたんだ？」

サラサラ…

言われた数字をハイフン含めて紙に書きこむ。

甲 「…コレは!？」

甲は数字を見て驚く。

日花 「あら、アンタも気付いた？」

甲 「ああ、多分…」

炎月 「どういう事だ？この数字に見覚えがあるのか？」

日花 「ええ…まず、この数字の羅列にスラッシュを入れるわよ？」

『2027／6／3／163／275』

平次 「…あつ！」

平次も何かに気付いたようだ。

炎月 「2027、6、3…誰かの誕生日か？」

日花 「ええ…アルミさんの誕生日よ。しかもアルミという文字は数字に当てはめると163、それでアルミさんのパワーはいつも275の倍数…」

炎月 「何、だど…!？」

依姫 「ソレは本当か!？」

日花「ええ……でも後半は読み取れないわ」

炎月「……つまり、アルミ・マリオに何等か関係があるのか。道理で外見が似ているワケだ。まさか2102年も経っていきなり半分も解読されるとはな」

日花「……え、アルミさんとイザナミって見た目が似てるの？」

炎月「どつちにも会ったことがある天照曰く、『外見や性格がお母さんに似てる』とのことだ」

日花「……………」

アルミさん、一体どこにいるんだろ……見つけ出して話さないといけないわね。

上限解放（400話突破アツ!）

sideアルミ・マリオ

アルミ「……………」カタカタ

私はワールドハッカーを出し、とあるコードを入力していた「ちよつと待ちなさい！」
アルミ「ん？」

紫「『ん?』じゃないわよ!?ソレ、貴女のタマシイを半分削った代物じゃない!」

アルミ「あー…:そういうええばそうだったわね。ただ、あの時はエネルギー切れで起きた
事態よ。今はエネルギー量が万全だから、何とかなるハズよ…:しかも、コレは『かなり
凄いもの』だと思おうわ」

紫「かなり凄いもの…:？」

アルミ「ええ…:

「靈力を使う種族、つまりニンゲンやモンスターのパワー上限を1億—1から10億—1に引き上げるわ」

紫「……………！ソレは確かに凄いものね…でも、完成者の条件を下げるとかでもできたんじゃないかしら？」

アルミ「いや…流石に無理だったわ。アレは初代完成者である完成創太が最初の厄災を止めたことで開拓できた状態…条件を下げることは今の私じゃ無理よ」

なんせアレ、完成者になるための『最低限』の条件だったりするのよね…

アルミ「んじや、コードを入力し終わったから、いくわよ…!」

…カチツ

ワールドハツカーのエンターキーを押す…すると。

ギユオオオ…ツ!

私の周りを禍々しいエネルギーが囲む。

アルミ「ぐっ…」ヨロツ

エネルギーが吸い取られるわね…実行するわ。

アルミ「H A C K I N G T H E T I M E L I N E

E …… 実行」

…シユウウウツ!

私を中心に白い光が衝撃波のように広がったり…やがて見えなくなったり。

アルミ「…ツ、終わったわね」ドサツ

私はその場に座り込む。

紫「大丈夫なの…?」

アルミ「ええ……言ったでしょ？今回は万全だったって。今は、そうね……私の元のエネルギー量を5とすると、今は0.8かしら？」

紫「分かりにくいわね!? えつと……つまり大体16%残つてると？」

アルミ「……………」

紫「……どうしたの、突然黙つて」「計算遅いわね？藍に任せすぎじゃない？」……は!? 半分私ができるんだけど!？」

アルミ「うん、知つてた」

紫「何よ、もう！はあ、はあ……」

紫は思いつきり叫んだからか息を切らす。誰のせいかしらね？

(どう見てもお前)

……そういえば、理由を言つてなかつたわね？

理由は……種族関係なく強い人は強い、という状況を作りたいからよ。

—————

—————

—————

—————

—————

side 坂田日花

炎月の話が終わり、私達は雑談をしていた。
…すると突然。

日花「……………」はっ

平次「……………」はっ

ネロイズム「……………?何か違和感を感じるね」

日花「そうね…」

甲「何だ?どうしたんだ?」

炎月「……………多分だが、今さっきアルミ・マリオがワールドハッカーで何かしたな」

日花「アルミさんがアレを?……………ん!」

『POWER…3.9億』

私のパワーが…

日花「億を越えてる…!」

依姫「何?…つまり変えた内容はパワーの上限か。だが何故そんな事を…」

ネロイズム「アルミの事だ、強い人が出やすくなるようにしたとかその辺りだよ、多

分」

（ほぼ正解）

…
うん、
でしようね。

ゆったりな勝負①

side 坂田日花

どうやらパワーが1億を越えたのは私と平次のようだ。

平次「なんで俺もでしょうね？」

日花「多分アンタがグリツチ化できる影響ね」

平次「なるほど……」

—————

—————

—————

—————

—————

アルミさんが何故かやった制限解放を試すために、私は炎月と手合わせをすることに
なった。

月の都外れ……静かの海付近まで移動する。

コオオオオ……

どうやらこの海、生物が一切いないそうだ。

…殺風景ね。

炎月「…よし、この辺りがいいだろう。依姫、審判を頼む」

依姫「分かった。2人は位置につけ」

ザツ…

♪MULAストーリー — ゆつたりな勝負

*海の波音が聞こえる。

*黒い風が吹いている。

*君はエネルギーを溜めていて…

*炎月も同じことをしている。

依姫「…始め！」

…!

曰花「炎天桜舞！」 BLOOM!

速攻で技を繰り出す。

パワーがかなり上がっている影響か威力もスピードも上がっている。

炎月「とうっ！」 バツ

…ガキイ!

しかし炎月は何食わぬ顔でそれを弾いた。

炎月「俺のターンだ…豪火球！」パチン

ゴオオオッ！

ヘルフレイム、炎月バージョンと言った所かしら。

それにしても…

日花「でつかいわねエ!？」スッ

…ボオッ！

ま、デカくても跳ね返してやるけど！

日花「へブンフレイム！」カッ

ギユオオオ！

白炎の火球を飛ばす。大きさは炎月の火球と同程度だ。

…やっぱり、かなり強くなってるわね。慣れることに徹しないと。

…ドシユウウウ！

火球と火球がぶつかり合い…

シユウウウ…

お互いをかき消した。

炎月「ほう…まさか相殺するまでになるとはな」

日花「私でも驚きよ……ハッ！」ダッ

私は地面を思いつきり蹴って加速し、炎月との距離を詰め……そして手に火を纏う。

日花「炎天掌！」バツ

ズガン！

…チツ、防御されたようね。

炎月「むっ……！（コイツ、スピードが段違いになってるな）」

日花「……」シユツ

スタツ

炎月から一旦離れ、思考を巡らせる。

日花（こりやまだ炎月に勝てそうにないわね……一体どうすれば……）

炎月（コイツ、俺に勝てないと思ってるな……全くもってその通りだが、俺にも弱点は

あるんだぞ……？）

ゴゴゴ……

日花（ま、いつか。そのうち策が思いつきそうね）……とうっ！」バツ

身体能力がどれ程か試してみるわ！

日花「ふっ！」シユツ

炎月（今度は身体能力か）……来い！」バツ

スツ、ドツ、ドゴツ。

日花「とうっ！」

炎月「せいっ！」

バゴオ！

衝撃波が出る。しかしそんな事はつゆ知らず、私は拳を振りかぶる。

シャツ、ズドツ、ドガツ！

炎月（身体能力に関しては元々のセンスは日花が上だろうな…この時点で俺は押され
気味になってる）

手合せは続く。

ゆつたりな勝負②

side 坂田日花

日花（……？）シヤツ

今の所私は炎月との相手に競り勝っている。…おかしいわね？もしかして炎月って近距離戦が苦手なのかしら？

炎月「ツ……（ヤベツ、そろそろ追いつかなくなる）」

日花（…多分慣れてないだけね。さて）スツ

…ギユン

左手にエネルギーを溜め、炎月の隙を突く。

ゴオツ！

日花「煉獄パンチ……！」バツ

炎月「いいっ!?!…グオツ」ドゴツ

ヒユン…ドゴオ！

炎月は私の攻撃をモロに受け、少し吹っ飛んだ後地面に激突した。

日花「…あれ？」

私が驚いていると、依姫が説明した。

依姫「はあ、だから練習しろと言ったのに……炎月は組手が苦手なんだ、お前が察したようにな。慣れない組手に集中してて隙を突かれた……って所か？」

日花「は、はあ……」

やっぱり苦手だったんだ。

炎月「人の弱点を説明するなよ……」ズイッ

その場から炎月は立ち上がった。

炎月「しかも完璧な回答だったな……俺が言い訳できなくなつたじゃねーか」
……こころなしか喋り方が碎けてる気がする。

炎月「……ま、いいか。手合わせを続けるぞ」

日花「ええ……」スッ

♪MULAストーリーー | 炎月

さて、どうするか……まずは弾幕かしらね？

日花「フレイムバレット！」ボッ

ダダダダンッ！

両手十本の指から火の弾丸を放つ。

炎月「(弾幕か、なら俺も……)……炎弾！」ボッ

シュバツ!

しかし炎月は自身の周りに火の玉を出し、ソレをこちらに向けて放った。
シュウウウ……

日花「ツ……!」スツ

ダンッ、ダンッ!

弾幕がかき消され、さらに弾幕が飛んでくるので、私はソレを相殺すべくフレイムバレットを追加で撃つ。

……ドシュツ!

日花「ふう……「息をつくヒマはあるのか?」……え」

炎月「うおおっ!」バツ

ゴオオオオ……ツ!

炎月の頭上に巨大な火球……ではなく、燃える月が現れた。

炎月「本気じゃないが、コイツでケリをつけてやる!」バツ

日花（え、何アレ!?! 小さな燃える月が……!）

*月が燃えている。

炎月「くらえ……ルナブレイズ!」ドツ

ゴオオオオオオ……ツ!

日花「ッ……！」

こりや、あの技をつかうしかないようね……！

日花「ハッ！」ダッ

私の両手に夕暮れの残光のような光を出し、それを拳に纏う。

日花「必殺……サンセット・グロウ！」バツ

ズドオオン！

滅多に出すことのない技で炎月の技を止めにかかる。

ギギギッ……

日花「クッ、ハアアアア！」

パキッ

日花「え」

炎月「！」

……パライイン！

月が割れた!?

日花「うわっ」ドサッ

ズサーッ……

私はその衝撃で地面を後ずさる。

炎月「まさか同格の威力とはな…」

日花「？」

炎月を見てみると、結構驚いた顔をしていた。

炎月「お前のさっきの技…いい技だったぞ。依姫…勝負は終わりだ」

依姫「…分かった。引き分けとする！」

手合せはこうして、技の打ち消し合いで終わった。

オール・ヨア・フォルトは月の地下に住む

side 坂田日花

炎月「いい運動になっただろ？」

日花「今のを運動と認識できるアンタはだいぶおかしいと思うわ」

スタスタ

するとこつちに甲達が来た。

甲「凄えな日花、相当パワーが上がってやがる」

ネロイズム「僕とも手合わせしないかい？いい勝負になると思うよ」

日花「…断っておくわ」

神力を手に入れたネロイズムに勝てる確率はこの状態でも低いし。

依姫「…そういえば」

全員『？』

依姫「お前達に会いたいヤツが、炎月以外にもう1人いる。…特に坂田平次、お前に会いたいと言っていたな」

平次「俺に？…まさか」

平次はそう言われて誰なのか検討がついたようだ。

依姫「お前の予想が合っているか、確かめようじゃないか。ついてこい」クルツ
スタスタ

———

———

———

———

———

依姫についていくと、私達はある地下室に入った。

コンツ、コンツ…

無機質な足音が辺りに響く。

フラン「何だ、ココ…」

炎月「ココでとあるヤツが住んでるんだが、地下なのはヤツの体質故だ」

メイ「体質…?」

…ザツ

依姫「さて、着いたぞ」

ピンポーン

…あ、ちゃんと家なのね。

カチッ

『…ダレダ?』

平次「…! (やつぱり…!)」

依姫「依姫だ、お前が会いたいと言ったヤツらを連れてきたぞ」

『オオ、マジカ!? イマイク』カチッ

…ガチャッ

ドアが開き、そこにいたのは…

A Y F 「ヨウ、チキユウジンドモ」

グリッチのような外見をした人物で、大厄災で敵として現れた…

ほぼ全員『…オール・ヨア・フォルト!?』

A Y F だった。

A Y F 「イカニモ……はあ、この喋り方はやめておくか」

日花「え…?」

A Y F 「入れ」

↓

↓

AYFに案内され、家に入る。構造は至って普通だった：私達とはこころなしに距離を取っているが。

AYF「：まず、俺様が何故ココにいるか。ソレが気になるだろうか？」

平次「だな」

AYF「分かった、なら説明してやる。俺様、AYFの正体は：”恨み”の化身、所謂怨念の神だ」

曰花「怨念：」

それも神だったとはね。

AYF「俺様はその影響で、恨みを取り込みエネルギーとする能力を持っている：だが」

ネロイズム「だが？」

AYF「その副作用で俺の中に溜まっている怨念が、外に溢れ出ることがある。今お前らと距離を取っているのも、俺様と近すぎると怨念を取り込んでしまうからだ」

平次（戦っていた時の二人称は『キサマ』だったはずだ：普段は『お前』なのか）

A Y F 「そして、そもそも俺様が厄災で現れた理由だが…単純に俺様も厄災に含まれているからだな」

メイ「なるほど…」

A Y F 「平次、お前に倒された後…グリッチとかいうヤツについて調べたが…お前達に謝りたい事がある」

ほぼ全員『？』

A Y F 「グリッチは…」

ニヤン国のヤツらがコツソリ回収した俺様のエネルギーによってできた別個体だ」

そして、グリッチは現れた

side 坂田日花

A Y F 「グリッチは……ニャン国のヤツらがコッソリ回収した俺様のエネルギーによつてできた別個体だ」

全員『…!?!』

なん、ですつて……でも、それならグリッチとA Y Fの外見が酷似しているのも納得できさるわ……

A Y F 「本当にすまない、俺様の気付かぬ間に地球は二度も危機に直面していた……!」
日花 「……謝らなくていいわよ、やったのはアンタに似た別物なんだから」

それに覆水盆に返らず……起きた事は大抵取り返しのつかないものよ。

ネロイズム 「でも、どうやってグリッチは地球で暴れまわったんだい?」

A Y F 「それは……73年前に遡る」

—————

—————

—————

—

|

73年前。

ニヤン国の研究員が俺様が住む地下室付近に現れた。

「ニヤニヤツ、ニヤニヤニヤツ！（辺りだ、この辺りに特殊なエネルギーが流れてるぞ！）」

「ニヤニヤア！（回収するぞ！）」

カチツ、シユウウ…ポンツ！

研究員は何らかのカプセルにエネルギーを吸入した。

「ニヤハハ…ツ！（ククツ…！）」

ガサツ

そのまま研究員はその場を去った。

……少し後。

ゴゴゴゴツ…！

「ニヤニヤニヤ…！（コレは凄い…！）」

回収したエネルギーはとてつもないパワーを秘めており、増幅する事が分かった。

しかし、一部のエネルギーは爆散し、地球に飛来した…コレがグリツチとなり、地球

を襲ったのだ。…ところが、マリオ・マリオは自身の命と引き換えにグリッチの討伐に成功し、グリッチは死んだ。

……その10年後のある日。

「ニヤニヤ！（イビト山を調査するぞ！）」

地球のソジック国内にあるイビト山…土地名で言うとスノーフル付近にニヤン国の調査隊が着陸した。

「ニヤア、ニヤッ！（まずは、こつちだ！）」

タタツ…

宇宙船には誰も残っておらず、何の理由か持ち込まれたエネルギーはそこに放置されていた……フタが空いた状態で。

ズズツ

エネルギーが容器から少し溢れる。

モゾモゾ…スポンツ

そして偶然あつた小さな穴に入った。

そこは地下で雪が降る町…スノーフルだった。

スノーフルにある研究室にて、2人のスケルトン…ガスターとサンズがとある実験を行おうとしていた。

ガスター「よし、サンズ、起動してくれ」

サンズ「分かった」カチャツ

ウイイイイン……!

周りに機械の音が鳴り響く。

シユツ……

機械は消えた。

それを確認したサンズは、時空対応トランシーバーを使う。

サンズ「もしもし、親父、聞こえるか?」

ガスター『ああ、聞こえてる。ここは……何年後だろうか?』

サンズ「分からないのか?」

ガスター『そうだ。どうやらここは地上のどこかのようだ』

サンズ「そうか。危ないなら早く戻って『ムツ?!なんだお前は?!』……どうした親父!?!」

ガスター『いつこの機械に入ってきた!?!ぐっ……!』

サンズ「親父、どうしたんだ!?!早く戻ってこい!!」

サンズはガスターが襲われていることに気付き、早く戻ってくるよう伝えるが……

ガスター『…………』ブチツ

サンズ「……途切れただど?」

シュツ…

サンズ「!?」

突然、サンズの目の前にタイムマシンが戻ってきた。

サンズ「っ、親父！」バツ

タイムマシンの中を見る。しかし、そこには…

サンズ「なんだ、この…」バグったようなオーラ」は…」

…変な、バグったようなオーラしか残っていなかった。

何が起きたのか… 偶々研究室に迷い込んだグリッチのタマシイが… エネルギーと融合して復活したのである。

」

」

」

」

」

AYF「コレが…グリッチが誕生した経緯だ」

日花「……………」

…」つだけ、言える事があるわね。

ニヤン国……アイツらはクズよ。

閑話：博麗神

sideアルミ・マリオ

…?

アルミ「うーん…」ムクツ

人里にある家で目が覚める。

アルミ「なんか、変な夢見たわね」

紫髪の巫女が『こっち来い』とか言ってたけど。多分先代の博麗の巫女ね。

アルミ「んじや、行つてみよー」

ん？ノアと有太がどこにいるのかって？

ノアは畜生界、有太は魔界にいるわよ。

ー博麗神社ー

ザッ

アルミ「おーい」

…しーん

誰もいないのかしら？…いや、多分寝てるわね。

アルミ「なら」スツ

私はサイフから500円玉を出し…

チャリーン

賽銭箱に投げ入れた。すると…

「おさ、いせー…んーん！」ダッ

奥から巫女服を着た少女がすつ飛んできた。

アルミ「よつ、霊夢」

霊夢「おお、500円…！あ、おはようアルミさん」

この子は博麗霊夢、7歳で12代目博麗の巫女よ。

アルミ「おはよ。紫は？」

霊夢「お母さ…紫はまだ寝てるわ」

…今、しれつと紫を『お母さん』って呼ぼうとしたわね。

アルミ「そう…ところで、この神社とあるものを調べるんだけど、アンタも見る？」

霊夢「?…うん」

アルミ「じゃ、付いてきて」

スタスタ

私は特殊な気配がする方向…神社の裏に移動した。

霊夢「こんな所に何かあるの？」

アルミ「ええ、多分…ハアツ！」ドゴツ

私は足元を踏みつけた。しかしそれによつて穴は開かず…

…ガシャン！

アルミ「フア!？」（。 ㇿ。）

地面に穴が開き、そこから階段が現れた。

アルミ「RPGみたいね…」

霊夢「うわつ、こんな物が神社の裏にあつたの…？」

私と霊夢は階段を降り、そこにあつた道を進んだ。

しばらく進むと…

パアア…

奥には不思議な部屋…いや、空間があつた。

アルミ「ここは…」

私と似たような気配を感じる…？

霊夢「…？」

霊夢も何か気付いたようだ。

「いっきげんよう」

シュツ

紫髪の巫女：いや神が突然現れた。

靈夢「私は博麗靈夢。初代博麗の巫女で、博麗神社で祀られている博麗神よ。よろしくね、12代目と：私の来世」

アルミ「：えっ？」

今何て!?

靈夢「私はアンタの前世なの。アンタも来世がいるんだし、分かるでしょ？」

アルミ「え、ええ：」

いきなり私の前世、ね：クソビツクリするわ。

靈夢「えつと、靈夢さん」

靈夢「ん、どうしたの靈夢？」

靈夢「どうしてこんな所にいたの？」

靈夢「：：：：」ゴゴゴ

：え、コレヤバい感じかしら？

靈夢「実は：」

100年程寝てたの♪」

霊夢「ズデーン

アルミ「いや寝すぎ!」

神って100年ぐらいうっかり寝るモンなのかしら…?

(そんな事ない)

霊夢「んじや、紫に会ってこようかしら?」

アルミ「あー、いまはまだ寝てるわよ?」

霊夢「じゃあ起こすわね」

アルミ「それがいいわね」

その後、紫は初代を見るや否や眠気を吹っ飛ばして泣きながら抱き着いたという。

再戦!平次 v s A Y F ①

side 坂田日花

A Y F の話が終わり、私達は雑談をしていた。

A Y F 「…そうだ、平次」

平次 「何だ？」

A Y F 「俺様と再戦しないか？丁度お前はパワーが億越えの強さになったはずだ、いい勝負になるだろう」

平次 「…確かに。いいだろう」

ネロイズム (僕も誰かと勝負したいなあ…)

そして私達は移動した。

—————

—————

—————

—————

—————

side 坂田平次

俺とAYFは少し距離を取って向き合う。

AYF「厄災の時の俺様の最大パワーは1億1111万1111だったが…今の俺様ならその100倍ぐらいまで出せる」

平次「100倍…!」

桁が全て1だと考えると、つまりAYFの最大パワーは『111億1111万1111』になる…とんでもない数字だな。

AYF「ただ、今は精々の10分の1しか出せないから安心しろ」

平次「そ、そうか…」

ザツ

♪SharaX | Dark Darker Yet Monster

依姫「…始め!」

早速変身してやる!

平次「グリッチ化!」 カツ

ギョオオオ…!

G平次「いくぞ!」

AYF「…来い!」

ドッ!

G 平次 「ブラックサンダー!」

→ お菓子かよ!

A Y F 「フンッ!」 バッ

シュー

俺の先制攻撃は A Y F の黒い触手に防がれた。

∴ 小手調べのつもりだったし、問題はない。

A Y F 「ブラックレーザー」 ギュン

ズドオオン!

出たな、例の光線!

G 平次 「暗黒結界!」 ピキッ

オオオ……!

A Y F 「…ほう」

黒い光線は結界にかき消された。

A Y F 「なら、近接攻撃に持ち込もうか……!」 バッ

A Y F は俺の方に突撃してくる。∴ コイツの近接攻撃はかなり危険だ、距離を取らな

いと!

G平次「ボルトラツシユ・黒！」バチツ
シユバババツ！

A Y F「むう…邪魔だ！」シャツ

俺の弾幕を触手で弾くA Y F…だが、俺は『二段構え』をしてるんだぜ？

ピチツ

静電気で俺の弾幕が触手に張り付くようにしてるんだ。

G平次「…放電！」カチツ

バチバチバチツ！

A Y F「なっ…グオオオオオ！」ビリビリ

A Y Fは触手を通して数億ボルトの電圧を受ける。カンタンに言えば雷が何発も連続で直撃してる感覚だな…そりゃあ痛い。

ブチツ！

しかしA Y Fは触手を切り離すことで大ダメージを受けずに済んだ。

G平次「…トカゲかよ」

A Y F「ソレを元にしたんだ、しようがないだろ」

え、マジか。

A Y F「中々いい技を使いやがったな…今度は俺様の番だ」ジジツ

…ボンツ!

A Y F 『分裂!』

G 平次 「分裂だと…?」

A Y F 1 「分身と違って、俺達はどちらも本体だ」

A Y F 2 「分身と同じようにエネルギー量は分割されるがな」

G 平次 「……………」

困まれたらかなりヤバそうだな…スピードでどうにかするか。

凸撃！平次 VS A Y F ②

♪ SharaX | Dark Darker Yet Monster
side 坂田平次

A Y F 『さあ、どうする？』

G 平次 「……」

まず、片方倒せばどうなるかが気になるな。残ったエネルギーがもう片方に行くかとか……後で考えるか。

G 平次 「ハッ！」 バチッ

俺は全身に電気を纏い、ソレを放出する。

G 平次 「フィールドスパーク！」

ビリビリビリッ！

A Y F 1 「ほう、全体攻撃か」

A Y F 2 「考えたな、だが……！」

ドッ

G 平次 「……ッ！」 サッ

A Y F 『攻撃範囲から逃れれば問題ないだろう!』

俺が攻撃を終えた後隙を狙って、左右からA Y Fが飛びかかってきた。心なしか俊敏になつている気がする。

G 平次 (狙い撃ちするか) スツ

ビリッ

G 平次 「エレキバレット!」 ダンッ

…ズドッ!

A Y F 1 「グオ…! (今の弾丸、見えなかつたぞ…!)」

A Y F 2 「何ッ!?!」

G 平次 「一発で命中したな…」

次で当たるとは限らないが…ん?

A Y F 2 「ブラックレーザー!」 カッ

ギユオオオ!

G 平次 「暗黒結か「ブラックレーザー!」な…グワッ!」ズドッ

片方から撃たれた光線を防ごうとしたが、もう片方のレーザーが当たってしまった。

A Y F 1 「やり返した」ニヤッ

G 平次 「そうか…」

やられる前にやり返す、ソレが戦闘のハズだが…？

(先にやられたお前が言うな)

G 平次「今度はこつちの番だな」スツ

ギユン、バチバチ…

足にエネルギーを纏い、さらに電気を纏う。

A Y F 1「技を溜めているようだが…隙だらけだ！」ドツ

A Y F 2「くらえ！」バツ

シユルルツ！

触手が飛んでくる…だが、俺はソレも吹っ飛ばすつもりだぜ？

G 平次「電凸撃！」カツ

ヒユン——ズシヤツ！

触手はカンタンに貫通した。

A Y F 『な…！』

——ドゴオ！

そしてA Y F 2体を同時に攻撃した。団子に串を差すかのように。

A Y F 『ガハッ…！』

ドサツ

G 平次「……ん？」

A Y F 「うーん……」ちーん

……1体に戻って気絶してる。

依姫「……勝者、坂田平次！」

シュツ

平次「……なんかあつさり勝つたな」

A Y F が油断してたからだろうが。

| | | | |

| | | | |

| | | | |

| | | | |

|

side 坂田日花

A Y F 「チクショーツ、油断したー！」うがー

炎月「ただのバカじゃねーか」

A Y F 「ソレを言わないでくれ……」

日花「……それにしても、平次。アンタかなりバトルセンスが良くなってるわね」

あの電凸撃って技、カッコよかったし。

ネロイズム「僕とも手合わせしないかい？」

平次「遠慮しておく」

…うん、今でもネロイズムには勝てないわね。多分。

さて、帰ろうか

side 坂田日花

日花「…さて」スツ

私は座っていた椅子から立つ。

日花「そろそろ帰りましょ」

メイ「そうですね、時間的にもう日が暮れますし」

炎月「帰るのか？なら送っていくぞ」

AYF「俺様も行く」

依姫「…案内役だからな、私も行く」

—————

—————

—————

—————

—————

都を出て、やがて結界の前まで来た。

依姫「結界を開けるぞ」スツ
ギユン

結界を通り抜けると、そこはニヤン国の外れだった。

炎月「またな、日花」

日花「ええ…いつかアンタに勝つ」

ネロイズム「僕も偶に1人で来ようかな…?」

依姫「アポなしで来なければ歓迎してやろう」

AYF「…平次」

平次「？」

AYF「次会った時も手合わせしよう。油断はもうしない」

平次「フツ…いいだろう」

フラン「…おっ、来たぞ」

カービイさんが来て、私達はソレに乗る。

日花「んじや、また会いましょ」

カービイ「それじゃあ行くよ！」スツ

ヒュウウン…!

1

――

――

――

――

そして、私達は家に帰った。

ガチャツ

日花「ただいま」

「うわ、また負けた！」

「ふふん、私に勝つなんて100年早いよ未例！」

私の8歳の息子……未例が、幼馴染で緑髪の女の子……東風谷早苗とゲームしていた。

彼女は近くにある守矢神社の巫女で、8歳にしてノリオさんの転生である未例と同格の強さだ。

日花「また負けたの、未例？」

未例「あ、母さん。早苗が強すぎるから代わりに倒して！」

早苗「ソレはずるいよ、未例……別にいいわよ？」ええっ!？」

日花「冗談よ……未例、アンタ宿題は？」

未例「……あ。今すぐやってくる！」タタツ

早苗「えーっ、宿題やってなかったのー？」
…ふふっ、平和ね。

坂田日花、月に行く。 完

次章予告

ジ・インフェルナ

魔界にいる悪魔の王…魔王デストロイヤー。

ダサイ名前だが、パワーはとてつもなく…ネロイズムがフルボッコにされるレベル。
「そろそろ天界の占領を視野にいれるか…」

魔界だけでなく、天界も占領することを企む魔王。果たして日花達は魔王の野望を止められることができるのか…!?

日花「…へえ、コレが獄炎の天使ね」

お楽しみに！

年歴 2102↓2105

2105年。

アルミ「有太、準備は終わった？」

有太「…ん、後はコイツだな」スツ

有太は何故か黒いパンツを入れる。

アルミ「…ちよつと待つて？それ私のじゃないわよね？」

有太「アンタに対して欲情すると思うか？」

アルミ「うん、ない」きつぱり

有太「だろ？…コレはヘカさんのだ」ドーン

なんと、有太はヘカーティアのパンツを持っていくつもりなのだ。とんだ変態である。

アルミ「…アンタ、死ぬわよ？」

有太「フラグ立てんなよ。じゃ、行つてk「あら、何故それを持つてるのかしらん？」

…回収早すぐねえか!？」

どこからともなくヘカーティアが現れた。もちろんキレる寸前である。

ヘカーティア「まずどうやって盗んだのかしらん？」

有太「盗んでねえよ！クラウンピースと正当な取引をしただけだ！」

ヘカーティア「(ピース…後でおやつ抜きね)…とりあえず返して」

有太「だが断る！じゃあな変なTシャツ野郎！」

シユツ…

ヘカーティア「…今なんつった？」
ブチッ

原作開始前の時系列

side 作者

どうも、エルマルです。

今回は原作、つまりMulaのものおきばが始まる前に起きた出来事を書いていこうと思います。

……どこから始めるかって？そりゃ世界線の始まりからですよ。

クソ前：創造神のイザナミがえげつない量のエネルギーでビッグバンを起こす。

46億年前：地球誕生。同時にイザナミが太陽神の天照、月神の月夜見、海神の素戔嗚を生み出す。

1億年前：地球に住んでいた月夜見率いる者達が月に移住する。

年歴—3000年頃：妖怪の神、八雲透誕生。外見は紫にかなり似ている。

年歴0年：平行世界から来た『とある極悪集団』からこの世界を守り、イザナミが死ぬ。その際に700年周期の『大厄災ウヨキイワイカ』や525年周期の『獄炎の天使』、謎のメッセージを遺す。

『202763163275 2 19—46—14—2』

現在前半が解説されており、『2027/6/3 アルミに転生』となっている。同年・最初の大厄災が発生する。ソレを鎮めた男……創太は、人類初の完成者となる。その後、この年を基準に『年歴』たるモノが数えられるようになる。

年歴700年：2度目の大厄災が発生。鎮めるのに最も貢献した少女……神綺は、その後強大な力を手にして魔界を創り出した。現在は隠居のような生活をしている。

年歴896年：八雲透の娘、八雲紫誕生。どうやらほぼ同時期に摩多羅隱岐奈も生まれたようだ。

年歴1074年：天助と優香が会う。その少し前に天助は強めの妖怪を倒し、完成している。

年歴1129年：第一次月面戦争。

八雲透率いる妖怪集団、月の都vs魔王デストロイヤー。

勝ったのは都側で、魔王は力を1割に封印される……しかし、その時無茶をした八雲透が死亡する。

年歴1400年：3度目の大厄災が発生。月斗や炎月……そして後の初代『パンドラの裁判官』となるアリナ・パンドラが厄災を鎮める。

年歴1575年：炎月が獄炎の天使になる。この時神眼を開眼したようだ。

年歴1600年頃：ネクロン誕生。かなり長生きしたね。

年歴1714年：第一次世界大戦。

キノ国、ホウキ国、カメーン国、ソジック国 v s マイン国、ニャン国。

勝ったのはマイン国側でソジック国に住んでいたモンスタール達は地下に封印されてしまう。

年歴1792年：第二次世界大戦。

キノ国、ブルームプラネット国、マイン国 v s ニャン国。

ニャン国の軍事力にかなり押されるもキノ国側なんとか勝利する。しかしこの時カメーン国の王、カーメンがニャン国の兵士に暗殺される。

ちなみに3部で登場したカーメン2世は、初代カーメンの子孫である。

年歴1856年：第三次世界大戦。

キノコ王国、ブルームプラネット国、ソジック国、マイン国 v s ニャン国、ポップスター。

宇宙人に対抗できずかなりの死者が出るが、ネクロン率いる魔術師集団が奮闘して勝利する。戦争中に妖怪や一部のニンゲン達は結界を隔てた空間：幻想郷に避難し、そのままそこで生活する。

：以上です。

第三次世界大戦以降の数百年（原作開始前まで）は平和に続いてました。

時系列には語呂合わせ的な物もあります。

第4章 ジ・インフェルナ アルミ、旅に出る。

side アルミ・マリオ

有太がへかさんのパンツを盗んで平行世界の幻想郷に逃げた。

アルミ「…アイツ、生きてるといいわね」

というか、私が火桜神モードになってやつと倒せるへかさんのパンツを盗むなんてね
…相当命知らずよ? ……まあいつか(よくない)

アルミ「紫」

紫「はーい」スウツ

アルミ「私はこれから旅に出るわ」

紫「あら、ようやく? リアルで1年以上言ってるやつと今行くの? (メタい)」

アルミ「メタいわよ。んじや、咲夜とパメラに一言言ってから行くわ」スツ

転送火桜。

パツ

アルミ「咲夜、パメラ」

タタツ

咲夜「お母さん？」

パメラ「どうしたの？」

アルミ「前から私が旅に出るって言ってたでしょ？今から出掛けるの」

咲夜「…いつ帰ってくるの？」

アルミ「うーん、分からないわ。旅自体は6年ぐらいかかるし……でも旅の合間に帰ってくるつもりよ」ポンツ

私は2人の頭を撫でる。

パメラ「うん…気を付けてね？」

アルミ「…ええ。じゃあ行くわね？」スツ

ギユウウン…!

アルミ「転送！」バツ

シュツ…

…シュツ

アルミ「…つと」

私が来たのは、時間軸や世界線を破壊されてしまった難民や、色々な平行世界からき

た人々が平和に暮らす場所…オメガタイムラインである。

「あつ、アルミ。来たんだ」

アルミ「よつ、コアフリスク」

この世界線の主であるコアフリスクが話しかけてきた。

Cフリスク「前言ってた旅に出るの？」

アルミ「ええ、まずは…あの世界線に行くつもりよ」スツ

私は設置してある転送機…ワープ鳥居を指さす。

『イナズマイレブンGO』

という看板が置いてある。

Cフリスク「ええ…？アルミは78歳だよね？どうやって…」

アルミ「んなモン中学生になればどうとでもなるわよ」

Cフリスク「えっ？」

初めてやるけど、試してみるわ。

ギョーン！

アルミ「子供化！」パッ

ヒュルル…ポーンッ

私の目線が下がった…大体中学生ぐらいだ。

アルミ「あ、あ…声も中学生になってるわね。力は」スツ
ギユルルル

…元のままね。

C フリスク「どうやってソレを？」

アルミ「私の神としての能力は『生命を司る程度の能力』なんだけど…ソレの応用で子供になったり年齢に合った外見になったりできるわ」

ちよつと前に老人になってみたけど、精々髪色が白髪になったぐらいで全然変わってなかつたわね。

C フリスク「へえ、そうなんだ」

アルミ「んじや行ってくるわね」クルツ

C フリスク「いってらっしゃーい」

タタツ………シュツ

そして私は音速でワープ鳥居をくぐるのだった。

封印を解かれし魔王

オオオオオ……！

「ククク……」

ガシヤン

鎖の音が聞こえる。

「ついに、封印が解けたぞ……！八雲透の力は所詮こんなものだったか！」

「どうやら封印されていたようだ。八雲透とは、八雲紫の母親で妖怪の神であった人物である。」

「約1000年越しに……」

この俺、魔王デストロイヤーはこの世界線の侵略を始められる！」
フハハハハと、魔王は笑い声を上げた。

…名前、ダサくね？

—————

—————

—————

—————

—————

side ネロイズム

フラワー「ネロ君、巡回してきたけど今日も平和だったよ」

ネロイズム「ソレは良かったありがとうフラワー」

僕の…つ、妻のフラワー・ベノムが魔界の巡回から帰ってきた。

(4部での表記はベノム)

フラワー「どうしたの、そんなに赤面して？」

ネロイズム「いやその、君と結婚したのがまだ新鮮でね……」

式を挙げたのが先月で、その時は魔界の創造神である神綺様や地獄の女神のヘカーティア、幻想郷に住んでいるアルミなどが来て大盛り上がりだった。ちなみに日花たちには驚かせたいという目的で招待してなくて、後日報告した時に祝福してくれた。

フラワー「ふーん……キスしたら自覚してくれる？」ずいっ

チユツ

ネロイズム「あ、あ……／＼／＼」カアア

フラワー「どう？」ニコツ

ネロイズム「う、うん……」

タタツ

……？

「大変です！街が突然何者かに襲撃されました！」

2人『えっ!?!』

「襲撃したのは1人で……」

ツ……！

ネロイズム「フラワー、行くよ！」

フラワー「うん！」

ダツ！

さつきまでのほのぼのな雰囲気はぶっ壊れた。

誰なんだ、襲撃してるのは…！

！

！

！

！

！

ボオオオオ…！

「どうやら魔界は平和ボケしてしまったようだな…！」

…いた！

「む？少しパワーが高そうなヤツがいるじゃないか」

コイツ、間違いなく強いな。

ネロイズム「お前、何者だ！」

「俺は魔王…魔界を侵略する者だ！」

フラワー「魔王…!？」

魔王って…

ネロイズム「大昔に封印されていたあの魔王か!？」

まさか封印が解けてしまつてたとはね…!

魔王「俺を止めたいのなら精々足掻くことだな！」

ゴオツ!

ネロイズム「ツ…!」

勝負は突然始まつた。

—————

—————

—————

—————

—————

side 坂田日花

私達はパーカーズの事務所で書類仕事をしていた。

ブルルルル

アルヤ「もしもし?メイ?」

偶々警察署から出張して仕事していたアルヤに電話がくる。

アルヤ「スピーカーに？分かった」トン

アルヤがスマホのスピーカーモードをオンにした瞬間：

メイ『大変です！』

メイの焦ってる声が聞こえてきた。

メイ『兄が……誰かと交戦中なんです！』

手遅れ

side 坂田日花

——

メイ『感じる力が段々弱くなつてて…ッ、見つけた！日花さんたちも早く加勢お願いします！』ガチャッ

——

メイの話の聞いて、私達はすぐ魔界にすつ飛んだ。

(メンバーは日花、アルヤ、甲)

…しかし。

「…フン、所詮はこの程度か」

日花「ネロイズム！メイ！」ザッ

ネロイズム「日花、か…」

変身している状態の2人ともかなりのダメージを受けており、与えたであろう本人はピンピンしていた…こんな短時間でこの2人に!?

メイ「相手が、強すぎます…ッ」

アルヤ「俺のメイを……!」 誰だお前は!?

「俺は魔王……いずれ世界線を支配する者だ」

魔王……? 何処かでその名を見たことが……

魔王「それで? 貴様らはニンゲンか。俺を止めに来たようだが……さつき戦ったコイツらよりも弱いようだな」

甲「ツ……」

まるでこちらを見透かすかのように魔王は言う。

魔王「……まあいい。小手調べだ」 スツ

日花「?……」 日花、避ける! 「えー」 サツ

バゴオン!

体を横に逸らした次の瞬間、背後にあった建物が爆散した。

日花「な……!?!」

魔王「今が見えなかったか。つまらないな」 ドツ

アルヤ「んだとテメ……ガフツ!?!」 ヒュン

ドゴオ!

突然アルヤの体かくの字に曲がり、吹っ飛んだ。

メイ「アルヤ!……貴様!」 ズサツ

ドツ!

魔王「ほう、まだ動けたか」

メイ「断魂破斬!」シヤツ

キレたメイの大技を:

魔王「ん」パシツ

魔王は小指一本で止めた:少しだけ小指が押されている。

日花(何よ、この化け物:!)

下手しなくても月のヤツらと同等以上の力よ!?

魔王「10億にも満たないパワーで俺に楯突くとはな:むんっ!」パツ

メイ「ぐうっ!」ドサツ

魔王「今はここまですておこう:ではな」スツ

シユツ

消えた:

甲「何なんだよ:今のヤツは:!!」

ネロイズム「アイツは、魔王:約1000年前に、激しい戦争の末に封印された存在

だ」

日花「戦争、封印:ツ!思い出したわ!名前は魔王デストロイヤー、月面戦争で人

妖魔神が協力して封印した…と書物に書かれていたわ」

ネロイズム「恐らくソレで合っているよ…今フラワーには神綺様に封印が解けたことを伝えてもらってる。それまでは…僕は動けないや」ドサツ

神綺…魔界の創造神ね。

日花「…アンタは、何でやられたの？」

ネロイズム「2、3発だよ。神綺様を相手してる気分だった…いや、神綺様でもアイツは止められないかもね」

メイ「そうなの…？」

ネロイズム「ああ…なんせアイツが封印された理由は…」

当時の者達が総力を挙げても倒せなかった相手、だからさ」

一方、現時点の最強は

これは、現在MULAストーリーの世界線にいるキャラの中で最強…つまり、天照の視点である。

アルミとノーアは天照より強いが（いつの間にも!?）…アルミは言わずもがな、ノーアも”それに対抗して”旅に出ている。いつ帰ってくるのだろうか。

side天照

「天照様〜!」ダダッ

天照「あら?」

部下の天使がかなり焦った表情で部屋に入ってきた。

天照「どうしたの、そんなに焦って」「魔王が…」…え?」

魔、王…!?

「魔王が復活し、魔界を襲撃中です!」

天照「ツ、アイツが、ね…」

透が命を投げ打ってまで封印したアイツを…再度封印することは恐らくできない、ならば…!

天照「素戔嗚を呼び出しなさい！そして月の都と連絡を取り、魔界の者達に加勢するわよ！」

できれば幻想郷にも連絡を取りたいけど、”あの子”がトラウマを思い出してしまから…一応別の人に連絡を取っておくわ。

—————

—————

—————

—————

|

side

????

『魔王復活、増援を求む』

????

「魔王、師匠を殺したあの忌々しい魔王が…！」

私が直々に敵討ちをした所だが、動けないのが本当に残念だ…

「…そうだ、あの子を送り込むか」

アルミにも許可を取っておこう、必ず力になるハズだ。
…幻想郷については確か、アルミの弟子達に口外しないようにしないといけないな。

|

| |

| | |

| | | |

| | | | |

side 坂田日花

日花「当時の戦力は確か：天界や魔界、月の都の強者達が集結して戦ったのよね？」

ネロイズム「そうさ。その状態で勝てなかったからこそ、ヤツは封印された：」

甲「まさか、再度封印する必要があるのか!？」

ネロイズム「：いや、ソレは多分無理だろうね。対策は確実にされている」

甲「じゃあ、どうやって：『ゴオツ!』：この気配は!？」

頭上を見ると、そこには白髪で赤い衣を身に纏い、紫色の羽をもつ女性がいた。彼女からはとてつもないレベルの魔力を感じる：月斗さんより上だろう。

「貴女が：5代目獄炎の天使ね？」

日花「はい、まだ仮ですが：貴女が魔界神の：？」

神綺「いかにも。私は神綺、魔界を創造した者よ」

ネロイズム「神綺様は1000年前に魔王と戦っている。ある程度攻撃の対策を伝授

してもらえるハズだ」

メイ「……………！」ゴクリ

神綺「1000年前の戦いは月の都と妖怪集団に、私達魔界の者や天界の者が参入した感じだったわね…つと、説明は後にしましょうか」スツ
『?』

突然神綺さんが変な方向を向き…

ダンッ!

弾幕を放った。